THE CENTRAL REVIEW

中央公論

大正十二年九月三十日印刷納本
大正十二年十月一日發行（毎月一回一日發行）

十月號

第三十八年第十一號　第四百二十七號

Digitized by Google

秋を賞で讃ふるに

前古未曾有の大震・大火慘害記錄



大正十二年

中央公論

十月一日發行

十月號

第卅八年第十一號

第四百二十七號

前古未曾有の大災厄を弔す

人間は時として、到底現實に有り得べからざる事件や情景を、空想したり夢みたりする。そして一種の甘きロマンチックな感情に浸ることを好みさへもする。

脩道院に人となり、其得度の日に於て、妖艶類ひなきクラリモンドの一瞥に魂を奪はれ、三年餘りの間、夢か現か全く見堺のつかぬ恍惚裏に活きてゐた、若き牧師ロモールドの心持も、著者ゴオチエと共に味ふことは出來る。ダンテの「神曲」や、ミルトンの「失樂園」に歌はれた地獄や極樂の情景、神や惡魔の精神も想像するに難くはない。

人間の想像は現實を超越し得るの魔力を有つ。而して人間は其魔力に一種の快感を覺ゆる。「死せる情人」や「神曲」や「失樂園」を愛讀するのは、其快感に浸らんが爲めに外ならない。併しいくら想像を逞うした作品でも、それが讀者に諒解され、嘆美されるのは、其想像が、人間の想像力内、いはゞ人間圏内に屬するからである。言ひ換ふれば、其想像と現實との距離が餘り遠くなく、想像の中に現實の姿が、ありありと映し出されてゐるからである。

處が、現實は時として、人間の想像力以上の力を以てあらはれることがある。其時には、人間はそれを正當に理解するの能力を失ふのである。今次の大震・大火によつて、關東一帶の被つた前古未曾有の大災害の如きは、如何なる強き想像力を有する者と雖も、到底考へ得ざる大悲慘事であつて、事件後二十日を經たる今日に於ても、記者の如きは、方數里、滿目唯焦土。燒け砕かれたる瓦石と、雲丹の如き脂を吹いて立ちながら燒け死してゐる街路樹と、骨ばかりの殘骸を剩す土藏と洋館の外、何等眼に入るものなき、帝都の現狀を前にしながらも、未だ

之を正しく理解するの能力を回復し得ざるものである。地球の破滅を夢に見しこと五六回、夢覺めて其悲壯悽絕なるに、寧ろロマンチックな快感を味つた記者も、今次目のあたりに際會した大災害に對しては、只々茫然として魂の慄ひ戰くを覺ゆるのみである。

大正十二年九月一日、正午に先立つこと僅かに二分弱、大地俄かに激動して、地盤悪しき土地の、弱き建物はバタ〳〵と倒れ、地盤善き土地の、強き建物も、グラ〳〵と揺れ動いて、壁崩れ、柱鳴り、瓦飛び、戸障子外れ、器具顚げ落ち、物の壞はれ碎くる音と、人の泣き叫ぶ聲と、天日暗憺たる空に滿つるよと思ふ間に、黒煙先づ立ち、紅焔次に揚り、震後十分間に七十幾ヶ所より發せる火災は、火は風を呼び、風は火を煽つて、遂に八十幾ヶ所より燃え上る大火柱となり、天低き所は紅焔と黒煙渦巻き、天高き所は、入道雲の如き白煙むく〳〵と凝り固まれるが午後の烈日に照らされて銀色に輝き。時の經過と共に横に擴がり縱に延びて、火は火と連り、炎は炎と合し、夜に入つては東南の一帶滿天只紅、地上のあらゆるものを燒き盡すこと前後三日。淺草、神田、京橋、日本橋、本所、深川、下谷を全燒し、麴町、赤坂、芝、本郷を半燒し、四谷、麻布、小石川、牛込に於ても多少の燒失家屋を出し、一回の激震と三日の火災とで、帝都十五區戸數四十二萬、人口二百卅萬の中、燒失家屋三十萬餘、死者七萬、傷者三萬餘、行衞不明者四萬弱、罹災者百五十萬を算するに至つた。類例を世界に求むるも、ヴィスヴィアスの噴火とメッシナの大震は、其慘禍の痛激しきも其被害範圍遙かに狹く、桑港の大震・大火は其被害及び死傷者は遙かに少い。近世の我國に於ける明暦の大火、元祿十六年の大震、何れも今次の大火と大震に其趣を同じうするも、文化の度低く、人口の數少き時代の事とて、其被害の程度は到底比べ物にならない。安政の大震は、江戸（東京）丈けについて云へば、震動は今次の大震よりも強かつたかも知れないが、震災地の範圍非常に狹少で、死傷者及び燒失家屋も甚だ少い。今次の災害は、明暦の大火と、元祿の大震と、安政の大震と、三つ合せてそれを二倍にした程の大慘事である。而かも之は只東京丈けの話である。震災の最も激しかつた鎌倉・小田原、火災の最も甚しかつた横濱・横須賀、其他の湘南地方一帶、房總海岸等の被害を加ふれば、死傷者及び崩

壞燒失家屋の數も、帝都の災害を約二倍にする。帝都丈けの損害も、若し之を金額に見積れば約百億といはれ、死傷者でも金額でも、我國の運命を賭して戰はれた、二年間に亙る日露戰爭のそれに幾倍すると聞いては、全く呆然たるの外はない。橋梁に引つかゝつて居る死骸、三々五々路傍にトタン板に掩はれてゐる、燒けた或は溺れた、或は燒けて且つ溺れた、或は溺れて且つ燒けた死骸の無殘な有様、或は全家族の燒死・溺死、或は親援つて子死し、子援つて親死し、夫を喪つた妻、妻を失つた夫等の無數の慘話哀話は、かゝる天災には免れ得ざる歷史上の悲慘事の一としても、本所被服廠內に於ける四萬三千の屍の山、一千の死者を以て埋められた吉原の死の池地獄などの話を聞いては、未だ曾て歷史上にも類例を絕せる大悲慘事であつて、眼に見ざるものは殆んど之を信ずるの力なく、眼に見たるものも、只茫乎として宛然惡夢を見たやうな心持だと言つて居る。有史以來の大激戰といはれた佛國ヴエルダンの戰場に於ける屍も、之を時間と廣袤とに比例すれば、今次の大災害の幾分の一に過ぎないと云ふ。

相模洋の南西部の海底が陷落し、其反動として湘南地方、三浦、房總地方の土地の隆起したのが、今次の大震の原因だといはれる。長い間積み重なつた地底の不安定が、今次の大震によつて安定したのだから、今後再び大震は來まいといはれる。「東京地方には破壞的の地震なし」と斷言した地震學者もあつたことを思へば、全然不安の念を掃蕩して了ふことは六つかしいが、先づ氣休めとしても學者の說を信ずるより外はあるまい。

大災後直ちに當局の採つた食料配給及び其他の罹災者救助の方策と、一般人民の示した、比較的沈着の態度と、自棄自棄に陷らぬ自助的精神とは、日本國及び日本國民の、國家として又國民としての美點を示したものとして、人意を强うするものがある。只當局の施設中、事件後廿日にして今尙、罹災地に發する郵便を地方に於て差止め居る遞信當局の無能と沒常識と、戒嚴に當れる憲兵の大杉氏外二名虐殺と、民間に於ける××騷ぎ、暴利商の輩出等は頗る遺憾であるけれども、大體に於て、此大災厄に處した日本國民の態度は、吾々の賴もしく感ずる所である。

此災厄を以て日本國民の輕浮驕慢を懲らす神の怒り若くは天の配劑と說く者がある。頻々たる鎌倉地方の災厄

を以て日本國中の謗法の罪に歸した日蓮の說と共に、吾等の承服せぬ所である。併し溺れたるものは一本の藁をも掴む。人間は生きんが爲めにはいろ〳〵の方便にも縋〻必要を感ずる。實際物質病に取憑かれて、純眞なる人間性を失ひかけてゐた現代大多數の人間をして、其本然の人間性を取り返さする方便としては、神を持つて來ても、佛を持つて來ても、別に異議はない。只其れが爲めに迷信を旺んにしたり、眞理眞相に眼を掩ふやうになつては堪らない。我等は今次の災厄の根本は、人間が未だ全く自然の理法に通ぜず、自然の法則と人間の生活との相對關係に徹せざるに原因すと思惟する。登山者や、航海者は氣象臺の天氣豫報に依賴する。而かも氣象臺が未だ全く天候の變化に徹底せざる爲めに、時として山中に於て遭難し、海上に於て難破する。天變地異の學理は一通り研究された。今日に於て風神雷神を信じたり、地下の大鯰を信じたりするものはない。併し、天變地異を未然に察知することも、其災害を避くる實際的施設も、未だ十分に發達しない。現に「破壞的の地震は無い」と云つた其破壞的の地震はあつたし、耐火耐震建築といはれた多くの建造物も、崩れたり燒けたりしたではないか。併し我等は、地震學を疑つたり、耐震耐火家屋を哂つたりしてはいけない。今日までのものを疑つたり哂つたりすることは許され得る。けれども疑ふことの出來ぬ地震學と、哂ふことの出來ぬ耐震耐火の建造物を目指して進むことは、之からの吾等の努力でなければならない。空に棲むものは空に、水に棲むものは水に、地に棲むものは地に、共生を托するは、共生物に與へられたる運命である。地球破滅の日に、地上のあらゆる生物が絕滅することとあるべきは固より奈何ともし難い。併し夫れまでの間は、如何にもして、共生命を維持し、共生存を繼續すべく努力することは、之れまた共生物に與へられたる特權であり使命である。今設計されつゝある耐震耐火の市街も、五十年後或は百年後に、或は復た來ることあるべき大震災に際して、果して無比有效なるべきや否やは疑ふの餘地はある。併し吾等の現在爲し得ることは、現代の最高學理と最高經驗とに照らして、我等の財力と能力との許す限りの事を爲すより外に途はない。五十年後、百年後の吾等の子孫は、吾等よりも賢くあるべき筈である。彼等は又彼等の災厄に處するの途を講じ、そして共生を續けるであらう。

大災後廿日、罹災者は或は郷里に歸り、或は知邊の家に寓居し、或は共同バラックに起臥し、或は荒削の丸太と薄板と、トタン板で以て、自己の燒跡に自己の家を建て初めて、略ぼ一時の落ち附き場所を得た。災後數日間野天の廣場に或は路傍に、疲勞と失意と絶望とに昏倒して居た如き有樣は全く消え去つた。米及び其他の食料品も略ぼ普く配給せられて饑餓の爲めに死するやうなものは帝都には見當らない。且つ淺草觀音の如き人の盛り場は勿論、通行人の多き街々には、十五錢の特製ライスカレー。十錢の牛めし、牛丼、肉うどん。大福、ゆで小豆、野菜天どん。コツプ一杯十錢の上酒、燒酎。可笑しきはジヤパンライス、社會奉仕一杯五錢のすゐとんなど云ふのもあつて、ライスカレ、牛めし程度の御馳走なら平常よりも却つて輕便な位である。又一時薄暗き蠟燭によつて代られた電燈も、殘存區域の山の手町を明るく照らし、衞生上如何はしき濁つた井戸水に渴を癒した人民も、不十分ながら水道の出るのを喜ぶに至つた。鐵道も多少の徒歩區域を殘して開通し、市内電車も半數の燒殘の車輛の、そのまた半數の車輛を、各運轉系統の一部づゝに動かし初めた。電信、電話、殊に郵便機關の恢復思つたより捗々しからぬは甚だ腑に落ちぬけれど、瓦斯も山の手邊は一兩日の中に配給せられると云ふから、潰裂混亂の狀態は、先づ辛やく終りを告げて、建設創造の活動を開始すべき時期が、始まりかゝつたと大觀すべきである。

何をか建設創造すべき。之を外にしては帝都、横濱其他の都市の再建である。之を内にしては、罹災人民の生活の安定である。前者は多く永久と理想を目的とし、後者は多く應急と現實とを目標としなければならない。而して永久と應急、理想と現實との釣合はなかくに六つかしく、各人各樣の意見と趣味とあるから、之を調和し統一して、實際的施設を遂行するに方つては、誠に容易ならぬ困難に遭遇するを免れない。帝都復興院諸公が其智嚢を絞る丈けではいけない。我國民一般に投ぜられた大試錬として、あらゆる國民が其の全能力を傾注すべきである。吾等も亦微力を盡して、之が研究と發表とを懈らず、生を此一大變災時に享けたるの涯分を全うしたいと思ふ。

江戸三百年、明治四十四年、大正十二年にして築き上げた文化も、財物も、一回の激震と三日間の火災とによつて蕩然として煙消し灰滅した。いくら痛惜しても痛惜し切れない。併し志ある者は只痛惜して已むべきではな

い。此等の文化や財物を目撃し、受用し、享樂し、研究した人間は、今現にこゝに活きてゐる。人間の頭腦と力で出來た文化や財物を、人間の頭腦と力で再び造れぬと云ふ譯はない。借すに五年乃至十年の歲月を以てせよ。外觀內容更に勝れたる帝都が出現するであらう。吾等は深く人間の再現力と創造力とを信ずる者である。

今次の災害によつて受くる人心の動搖、人生觀の變化なども可なり深いものがあらう。よき方面をいへば、社會奉仕、共働共榮、相互扶助、發奮努力、寡慾恬淡等の精神も旺んにならうが、惡しき方面をいへば、自暴自棄、其日暮らし、虛無主義、安價な享樂、退嬰隱遁等の傾向も必ず生ずるだらう。併しそれは一時の現象で、永い間には生活其物が、思想の整理を行ふであらうから、やがて災害前の常態に復るものと見るべきである。只吾等はよき方面の思想は成るべく長く繼續し、惡しき方面の思想は成るべく早く其影を潜めんことを希望すると同時に、人間が今次の災害を機緣として、ますく正しく天地自然の理法に通徹し、ますく明かに人間生活の現實に覺醒し、自然と人間との背反的方面を避けて、其調和的機能を利用するに腐心し、以て生の充實と幸福とを全うせんことを切に祈るものである。

假令着のみ着のまゝ無一物にして逃れたる人でさへも、之を災厄に遭つて其生命を失へる人に比ぶれば、幸福であることは勿論である。生命は人間にとつて一番尊貴なものであるからである。神を信ずる者は神に、佛を信ずる者は佛に、運命を信ずる者は運命に、其生き殘つたことを感謝するがいゝ。感謝して活き且つ働き、將來の生活の充實と幸福を計るがいゝ。

今次の大災害に對して世界の各國から寄せられた同情、分けても米、英、支等から寄せられた絕大なる同情に對しては、吾等日本國民の深く感激する所たると同時に、人類の生活が益々國際化しつゝある顯著なる一事例として、人類の前途に一大光明を感ずるを禁じ得ない。(大正十二年九月廿日、T・T生)

中央公論



第卅八年第十一號
十　月　號
第四百二十七號

復活への途

法學博士　渡邊鐵藏

（一）大災害の損失

大正十二年九月一日は日本國民にとつて未曾有の不幸な日であつたのみならず、古今を通じ廣く世界に例を求めても、突差の間に今回の如き大災害を蒙つた事は未だ全くないと云つてよい。九月一日正午に東京灣及び相模灘附近に起つた大地震は、此破壞的大地震の災害に伴ふて各地方に於て大火災を起し、帝都東京を初めとし、横濱、横須賀、小田原、鎌倉其他東京灣内の小都市、湘南、三浦半島、伊豆東岸の町村に殆ど致命的の大損害を與へた。横濱市の如きは殆

んど都市として再興の困難な程な全滅的破壞を受けたのであるが、帝都東京は比例的には橫濱程ではないが其人口財產の大きい丈け分量的には其損害は絕大である。況んや政治の中心として、敎育文化の淵叢地として、事實上日本の腦髓となつて居た土地丈けに今回の災害は單に東京市民の財產上の損失、產業の或程度の破壞に止まらず、我國の文化が大打擊を受けたものであると云はねばならぬ。只東京市丈けでも住宅、營業所、工場、官公衙、學校、娛樂場等の建物のみの燒失建坪延數約五百萬坪、之を一坪百五十圓と見ても約七億五千萬圓の損害である。殊に巨費を投じた官公衙其他の公共的建物や、重要な大商店が殆んど全部被害したのであるから實際の損害額は右以上に莫大なものである。其他機械、家具、什器、被服類の損害、殊に重要な商業區域が全滅したゝめに商品の損害は驚くべき莫大な金額に上る。加之交通機關、通信機關、水道、瓦斯、電氣事業、橋梁、護岸、港灣其他の土木工事等の損害も又頗る巨額に上るのであらうから、東京市のみの損害に倂せて數十億に上り、全震災地域の總損害は驚くべき數字に達し、恐らく過去十數年間若くはそれ以上の國民の努力が全く瞬時にして消滅したことになる。先般の歐洲大戰爭に依つて侵入を受けた白耳義や佛蘭西の財產上の直接損害に次ぐものであらう。

右のやうな財產上の損害に止まらず、東京帝國大學の圖書館、研究室を初め各種の專門學校及び官廳の燒失したことは、最も貴重な學問上の材料、調査研究の寶庫を一時に消滅したのであるから、我國の文化の受けた損害は殆んど恢復し難いものがある。我々自身も研究の資料を奪はれて茫然たる實狀である。今回の大災害に對して各方面に於て復興の策が講ぜらるゝに當つて一般市民の生活、住居の安定を計ることを第一にすべきは勿論であるが、物質的損害の恢復と共に文化の復興を忘れぬやうにせねばならぬ。

今回の大災害に依る損害は人命に關して古來の地震に全然例のない悲慘な記錄を作つた。親を失ひ、子を失ひ、夫婦

相別れた悲惨な實話は此際幾つかを例に擧げても到底無慘な天災より起つた不幸の一部すら語るに足らない。彼の本所の被服廠に起つた、一擧にして三萬數千の生靈を奪つた戰慄すべき事件の如きは如何なる天災、如何なる疫病、如何なる戰爭の慘害も未だ曾て之れに類するものあるを知らぬ。エルザレムの聖地に埋められた信者の魂は永く信徒の涙を誘ふであらうが、本所の一角に一瞬にして焦土と化した人の不幸に對して注がれる涙は永遠に盡きぬことであらう。

（二）地震に伴ふ災害に對する警戒

今回の大地震に類した破壞的な大地震は我國にも外國にも其例がないではない。元祿十六年の江戸大地震、安政二年十月の江戸大地震の如きは今回と殆ど其震災地域を同じくした大地震である。殊に安政の大地震は最も人口に膾炙して居るが、安政年間は大地震續きで、安政元年から六年に亘つて日本全國各地方に大地震が頻發し、就中安政元年夏は伊賀、伊勢、奈良、秋には東海道及び南海道に大地震があつたが、安政二年十月二日が所謂江戸の地震であるが其當時の潰れ家は一萬四千三百軒、死者約七千人に過ぎない。當時震災の最も甚しかつた處は柔軟な地區及び埋立地であつて、深川、本所、下谷、淺草等が被害最も甚しかつた。地震後市内三十餘箇所から火災が起つたが、風がなかつたゝめに炎燒區域は割合に少く、一哩平方位であつた。明治二十四年十月の濃尾大地震の際も、岐阜、大垣、名古屋の被害は可なり大きかつたが、名古屋市の全潰家屋は百分の三に過ぎず、又此大地震の死者總數は七千三百人に充たなかつた。之等を今回の大地震の慘害に比ぶれば到底問題にならぬ被害である。外國にも大地震の慘害は屢々あるが、彼の千九百六年四月十八日の桑港大地震の如きは其最も有名な一例である。當時桑港の人口は四十五萬人に過ぎず、最近の我が横濱市

と殆んど同じ大きさの都會であつたが、大地震のために水道が破壊されたゝめ諸方に起つた火災を消し止めることが出來ず、猛火は三日間桑港市内を荒れ狂つたが、漸く「ヴァン、ネッス」街路を猛火の襲ひ來る二十四時間前に幅五百呎、長さ約一哩に亘つてダイナマイトを以て破壊して火を食ひ止めることが出來た。水のない際の消火は天然の障碍に依るか又は此種の非常手段に依るの外はなかつたのである。此大災害に依つて家を失ふ者三十萬人、即ち人口の四分の三に上り、其財産上の損害は二億五千萬弗に及んだが人命の損害は千人に充たなかつた。明治四十一年十二月二十八日の伊太利メッシナの大地震は桑港よりは其損害更に甚しく、死者十二萬に上り、メッシナ市は人口の半數を失つて居る。これは家屋構造が不完全であつたゝめに斯かる大多數の人々を落したのである。

過去に起つた右のやうな大地震が將來東京附近に起るか否かといふことに就いては地震學者の間に甚だ熱心な研究があり、種々な議論があつたが、如何なる程度の大きさの地震が東京を見舞ふか、又何時それが生ずるやに就いては種々異なる意見もあつたやうである。明治三十九年は丙午の歳に當るので天災地變に關して種々の流說が行はれ、今後五十年の中に東京に大地震があつて二十萬人の死傷を生ずべしとの說も行はれたが、偶然それが今回の死傷に當つて居るやうであるが、固より根據ある學者の說であつたか否かは疑問である。將來大地震があつた場合に生ずべき損害に就いては現在の各種の文明的設備、生活の方法等を考慮して地震學者が詳細な研究を遂げて、二十數年來其結果の恐るべきことを世人に警告して居たのであるが、世人が殆んど之れに耳を傾けない間に遂に今回の如き大地震に際會して、地震學者の指摘した大災害を一々眼の當りに體驗する悲運に逢つたのである。

濃尾大地震の慘害に眼醒めて震災豫防調査會が設立せられ、地震學の泰斗大森房吉博士が中心となつて多年貴重なる研究の結果を發表せられて居たが、就中地震及び之れに伴ふ火災より生ずべき損害に關して大森博士の述べられた所を

摘記すれば「將來東京に於て破壞的地震のある場合の災害の大要を推想すれば、土地堅硬なる場所にては震動比較的に弱く、煖爐用煙突は破壞落下し、煉瓦塀の倒るゝも有り、惡き二階造り煉瓦家屋は二階壁切妻等の裂罅降落あり、迫持は龜裂し、塔狀の高き煉瓦構造は甚く裂罅を生ず。古き土藏は壁土を搖落さるもの多く、屋根端の瓦は落下すべし、崖は少しく龜裂するも水道鐵管は格別の災害を受けず、土地柔軟なる場所に於ては粗造煉瓦屋は大破若くは全潰し、木造住家の全潰するものを生ずるも百分の十以下なるべし、石堤及び崖の崩壞あり、河岸及び卑濕の地には幅一二尺の地割を生じ鐵道線路、橋梁、電線等も震害を被り、水道鐵管は殆んど全般に亘りて破壞せらるべし」といふのであるか、今回の大地震の結果を之れと比較してどれ丈け適合して居るかは素人には正確には判斷しかねるが、大體に於て之れに似たる結果があつたやうに思はれる、早くより學者の唱へた警戒の聲に耳を傾けて之れに適應する適宜の方法設備を講じて居たら今日の如き大災害は生ずるに至らなかつたかも知れない。猶之れに止まらず大森博士の意見に基いて文部省震災豫防調査會は早くから次のやうな地震に關する注意をして居た。

地震避難に關する注意

一、狼狽せず戸外に避難するを最も肝要とす。一、地割れの危險は皆無なれば心配するに及ばず、成るべく廣き場所に出づれば可なり、一、戸外に出づるも塀、塗壁等に身を寄するは危險なり、壁土は振り落され易し、屋瓦も揺り落さるれば之れが爲めに怪我せざるやうに注意するを要す、狹き道路若くは煉瓦煙突の附近を通行するは注意すべし、屋内にても暖爐用煉瓦煙突の下は煙突破壞墜落の恐れありて甚だ危險なり。一、普通日本家屋の倒潰するまでには相應に時の猶豫あるも萬一戸外に出づる能はされば丈夫なる机、寢臺等の下に身を寄するも可なり。一、避難の際は火の用心

を忘るべからず、洋燈、火鉢、竈等より發火せしめざる注意を要す、電線に異狀あれば直ちに電流を遮斷するを可とす。一、震後の火災に伴ひ瓦斯管破裂することあり、當局の注意を要す。一、大震の際は水道鐵管は容易に損害を蒙り、貯水地も破壞することあり、給水に不足を來すは必然なるのみならず、市內各所より發火すべければ倒潰せざる家屋に於ても兎に角直ちに水道より（可能の場合に）水を汲み置くを可とす。一、海濱の地殊に太平洋沿岸にて大地震ある時若くは大地震ならざるも强き地震が長く繼續する時（即ち稍や遠き大地震ある時）は約一時間前後を經て津浪來襲し港灣內に高潮を押上ぐる恐れあり、先づ海水が減退するを例とす、斯かる場合には直ちに高所に避難するを要す。

震後及び平常の注意

一、地震の混雜により失火する場合あり、注意を要す。一、震後暖爐用煙突を吟味すべし、損害あれば十分に修理するを要す、然らざれば天井裏より發火することあるべし。一、學校、工場、病院及び集會所等に於ては出入口の、構造便利なるを要す、出入口が狹きに過ぎ、階段多き爲め逃出の際死傷者を生ずること少からず。一、逃出の際出入口の屋根端より瓦の落下のなきやうになし置くべし。一、大地震にて家屋が甚しく振搖傾斜すれば雨戶は易く開き得べきに非れば地震戶を設くは便利なり、地震戶とは雨戶に設けたる小開戶なり。一、小學校に於ては平常より生徒に敎へ開かし地震に際して恐慌を起さゞらしむることに注意し置くべし。

右のやうな注意が一般に周知され能く守られて居たならば、今回の如き地震に遭つても其災害は著るしく減少することが出來たやうに思はれる。

殊に地震後の火災の恐るべきことは多年唱へられ來つたことであつて、今回の大地震の如きも之に伴ふ火災さへなか

つたならば、其損害は今回の幾分の一にも達せず、殊に人命の損害の如きは遙かに少かつたに相違ない。彼の桑港の大地震の如きも、大地震の被害よりは三日間に亘る大火災の方が遙かに大なる被害を與へたのである。殊に我國の大部分の家屋は木造であるから延燒も速かであり、盛に飛火に依つて新な火災を起すのであるから罹災者は火災の包圍攻撃を受ける恐れがあり、本所方面に於ける大慘害の如きを生むのである。地震後の火災は通常の失火原因の外藥品の自然發火、爆發、瓦斯管の破裂等の文明生活に伴ふ原因が多く、彼の桑港の大火災が屢々之等の原因に基いた如く、我國の都市に於ても地震後瓦斯管の破裂、學校其他の理科研究室、藥品店等より出火する恐れの大なることは我々の地震學者の常に警告した所である。帝國大學圖書館、研究室が瞬時に燒失したのは隣接建物の醫化學室の藥品から出火したゝめであつて甚だ遺憾な次第である。地震後の火災が水道鐵管の破裂のために大火となる恐れのあることは桑港の實例に照らして最も明かであるから、我國の地震學者が二十年來水道以外の消防用水を準備すべきことを絶叫して居たのに世人が之れに餘りに注意を拂はなかつたことは今から思へば遺憾千萬なことである。

(三) 地盤の選擇

私は今回の大地震に相州葉山で遭遇したのであるが、其附近及び横須市の實狀を目撃して東京に歸つたが、十數日間の見聞の結果として、地震に對して素人觀ではあるが深く感じたことが多い。其感じたことの總ては既に各方面の專門家が多年唱へて居ることではあるが、自ら實例に遭遇すればいかにも其感覺が深い。

同じ葉山であつても私共の住んで居た處と共二三町南の方は地盤が多く岩石であつたゝめに被害頗る少く、小さな家は瓦一枚動いて居ない。況んや藁葺、亞鉛葺の家には殆んど全く損害がない。然るに數町先きの最も重な町筋に當る處

は地盤の悪い爲めに數丁の間に一箇の洋式建築を除き全部倒潰して居る。逗子町に於ても同じやうな事實がある。東京に於ても下町殊に本所、深川方面、其他地盤の悪い所は震害頗る激烈であつたに反し、山の手方面は被害少く、殆んど全く被害のない家も多い。此事實は固より古來からの學說と合して居るのであるが、斯程適切に、又斯程甚しき相違を實驗した以上は將來震災地の復活のみならず、一般に都市建設に當つて斷じて忘るべからざることである。學者が主張し、重要な經驗を得ながら實地に當つて之れに適合することを忘るゝことがあつては何時までも今回の如き震害を繰り返すことになる。地盤のみならず海面から高い處は低い所より一般に被害が少い觀がある。之れは恐らく矢張地盤の問題に歸着するのであらうが、素人眼には地盤のよい處、海面から數十尺以上も高い處は被害が少いやうに感ぜられる。勿論之等の事は從來の研究と今回の經驗に依りて、專門家に依りて立所に釋明されることではあるが、此釋明された原則を一般人が周知して之を遵守することが更に重要である。如何なる明白な理論も尊い經驗も之れが實際に應用されなければ何んの効果もない。封建時代に於ては都市を建設するには單に要害の地を選び、又商工業都市は交通の便宜な土地に自然に發達したのであるが、將來に於ては殊に地震の苦い經驗を繰り返し嘗めて居る國又は地方に於ては都市の建設に當つて地震の有無强弱の程度を調査すると同時に成るべく地盤のよき土地を選ぶことは忘るべからざることである。一の都市の全區域に地盤のよい處のみを選ぶことは出來なくとも、少くとも都市の最も重要な建造物及び活動は必ず我國の如き地震國に於ては地盤のよい處に於て行はれる必要があらう。彼の桑港の大地震の際に最も大なる震害を被つたのは桑港の商業の中心地區である。マーケツト、ストリート及び其附近である。之れは河川其他の埋立地で地盤の惡い所であつたゝめである。此故に桑港再建の際には重要な商業中心地區は將來の大災害を避けるために地盤のよい、當時の細民窟に當つた地方を選ぶべしとの議論が最も盛であつた。此點は東京市の復興に當つて大に考慮すべき最も大

切な問題であると考へる。

地盤は悪くとも建築さへ堅固でありさへすれば勿論今回の如き大地震に耐へ得る、乍併斯くの如き建築をするためには基礎工事、耐震構造に非常な巨費を投ぜねばならぬのであるから、兎に角、第一次に先づ地盤の好き處を求めて都市の建設をせねばならぬ。勿論交通其他の關係上、河川の附近其他地盤の良否を顧ることの出來ない場合には止むを得ないことではあるが、兎に角在來の如く商工業地としては單に交通の便宜のみ考へて、全く地盤の如何を顧慮しない如きは甚だ短見であつて、都市の建設擴張をなすに當つては常に先づ兩者の相伴ひ得る地區を發見することに努力すべきである

(四) 建築改革

譬え地盤がよくとも相應の耐震的建築をする必要は勿論である。況んや地盤の悪い地方に於ては完全な耐震構造を行はねばならぬ。乍併建物に對する脅威は單に地震ばかりでなく火災も甚大なものである。殊に從來及び今次の實例に依つても火災の方が遙に猛烈なる征服者であることは頭に入り過ぎる程強く感ぜしめられた事であるから、耐火建築の研究は一層必要である。建築專門家は實に此耐震と耐火建築の矛盾を調和するに最も苦心して居るやうである。

耐震構造に就いては既に學者の定説があり、更に今回の最も貴重な經驗に依つて非常な大進歩をなすに相違なからうが、鐵筋コンクリートの建物と木造家屋が最も地震に耐えたことは素人眼にも著るしいことであり、煉瓦造、石造等が甚しい危險物であつたこと、土藏造りの家の脆かつたことは至る所に見受ける例であるが、特に著るしく感じたことは同一場所に於ける亞鉛、藥罐屋根の家には被害がないのに反し、瓦葺の家が倒潰して居ることである。且つ屋

根瓦が落下するのを恐れて戸外に出でることを躊躇し、其ために壓死した人、或は戸外に飛び出して屋根瓦のために負傷した者は無數であらうと思ふ。斯かる危險物を家屋の頭上に乘せて、家屋倒潰の危險を増し、人命を脅威することを幾百年の間此地震國で改めずに來たことは殆んど理解の出來ぬことであつて、我國の建築學者が屋根瓦に對して早くから改良の手段を講じなかつたことを遺憾とする。將來は防火のためには他の材料を考へて現在の如き屋根瓦を用ひることは嚴禁する必要があらうと思ふ。私の實見した例でも屋根に瓦さへなければ倒潰しなかつたと思ふ例は甚だ多い。將來はスレート、亞鉛板、銅板等に適宜加工したやうな屋根が專門家に依つて推奨されることになるのであらう。瓦屋根、煉瓦塀、石塀、土藏造り、孰れも耐火のために考案されたのに相違ないが、普通の火事丈けならそれでも用をするが地震のために崩れるやうでは震災に基く火災には何んの役にも立たない。それでは眞の耐火構造とは云へまい。只人を殺傷する機會を多くするに過ぎない。

建物の地震に依つて崩壞することは從來の例から見てもそれほど大きくなく、殊に我國にあては其割合が少い。之れは木造家屋の耐震力が強いためである。大森博士の説に依つても堅固な柱を用ひ、若くは筋違材、金具類を使用して柱を挫折せしめなければ木造家屋は如何なる激震に遭遇するも潰倒することなく、譬へ礎石から一尺乃至二尺も移動することがあつても猶直立し居るべしといふことであるから、基礎工事を完全にし、屋根を輕くすれば木造家屋は耐震には十分のやうである。乍併前述の如く家屋の災害は寧ろ火災の方が大きいのであるから耐火建築を行はんとすれば、忽ちにして木造家屋を排斥せねばならぬことになる。之れが頗る困難な點であつて、將來或は我國の建物は住宅と雖もなるべく鐵筋コンクリートの様式に依らねばならぬことになるかも知れぬ。いづれ之れは建築專門家の意見に依つて定ることであらうが、耐火、耐震のために我國の建築に大改革を行ふことが頗る重要な問題であることは國民一般殊に政府者が勘考すべ

き點である。猶建築改革を斷行するためには特に建物檢査局の如きを設けて、多數の建築專門家をして十分に設計の審査、古建物、不衛生建築、危險な建築物の取締りを勵行する必要があらう。私は嘗て大正八年四月の横濱市の大火を見て「横濱市の大火を見るの記」と題して所感を本誌同年六月號に寄せたことがあるが、其結末に於て我國の建築改革の問題は目下の實際的政治問題として總理大臣が注目せねばならぬ問題であることを論じ、當時の軍備問題、或は區々たる山東問題よりは更に重要なる問題であることを切言した。今回の大震災大火災の結果として二三十萬人の人命を失ひ、數十億の富を滅却したことを顧れば私の言が過ぎたるものでないといふことを多くの人が認めることであらう。

（五）震災復舊の方針

大災害の善後策としては勿論第一次には罹災者の食糧供給、衣住の道を講ずること、傷病の手當及び衛生に注意し、且つ一般の秩序を維持すること等であつて、第二段には臨機に罹災者の生活營業復活の道を講ずる事、第三段として、破壞された都市を建設復興することであるが、今回の大震災に際して政府が救護、交通の恢復等に關して非常に果斷な處置を執つたゝめに、災害發生後旬日ならずして大體に於て食糧の供給も出來、秩序も十分に維持されたが、桑港大地震の際にも直ちに戒嚴令が布かれ、時の桑港市長シュミッツ氏の大活動に依つて食糧、飲料水の供給が第一日に多少困難であつたに止まり、第二日には既に其不足を感ぜしめず、三十萬の家を失つた罹災者は一部水路オークランド其他に逃れ、火災が沿岸を襲つて逃げ遲れた者は大部分金門公園其他に逃げ込んで避難したが、總て食糧、飲料、テント等に就いて迅速な供給を受けた。且つ政府及び諸都市の救援が迅速であり、忽ちにして二千五百萬弗の寄附金が集つたゝめに、救護が一週間の中に完全に行はれ、戒嚴令に依つて盜賊は之れを逮捕せず、即座に之れを射殺すべしといふことに

なつて居たゝめに、屢々兵士に射殺された盜賊があり、死人の指環を盜まんとして罹災者の激昂に逢ひ、街路で絞殺された例もあるが、大體に於て速かに秩序が維持された。且つ塵埃、糞尿等衞生上の處置に關しては市長の卽座の布告に依りて大過なきを得た。桑港は米國の一の腕か或は一本の親指位の重要さに過ぎない。之れに反して我東京市は日本國の腦髓である。今回の大震災は日本國の腦髓に非常な重傷を加へたものであるにも拘ばらず急速に一應の手當を終つて安全にしたことは非常の成功と云はねばならぬ。配給の小運送機關の不足のために分配が或點に於て行渡らなかつたことは桑港震災の最初の一兩日にもあつたことで止むを得ないと見ねばならぬ。外國人間に此未曾有の大困危に際して我國民が左程狼狽せず、悲觀せず、又秩序を亂さず孜々として復活のために努力して居る強い意氣と沈着な態度を賞讃する者が多く、一般に世人も亦自ら今回の災厄に處して同胞の態度の立派であつたことを喜んで居るが、まゝ昂奮の際に常規を逸した行爲も傳へられるので十二分の讃辭を呈することは出來まいが少くとも人意を強うするものがある。今や生命の安全を得た罹災者は自ら生活の爲めに成るべく速かに活動せんとする第二段の時期に達して居る。罹災者が食を求め、營業を開始するに非れば如何に巨額の寄附金、救濟費を支出するも到底市民の生活を安定し得ることは出來ない。政府としても市民を再び平素の活動に復活せしむるためには成るべく速かに彼等の自立活動を促し且つ出來得る限り之れを援助せねばならぬのであるが、さればと云つて各種の營業者が總て各自の舊來の營業所に於て建物を急造して營業を開始するに於ては、忽ちにして東京市の如きは舊來より更に缺點の多い不完全な、危險な都會となり終るであらう。此故に一方或程度の臨機の復活策、營業の開始、建設を認めても、それは必ず或る部分に限り、或は制限的のものとして將來理想的帝都を完成するのに障碍とならざる方針を執らねばならぬ。單に理想的の建設計畫の完成のみに賴つて、臨機の復活手段を忘れることは固より罹災者にとつて目前の苦痛であり、又憂慮すべき狀態を惹起する恐れもある

が、さればとて全市に亘つて從來の土地に其儘舊來の營業を永續的に、自由に行はしめることは甚だ姑息な手段である。茲に於て更に直ちに第三段の方面に着目せねばならぬ。之れ即ち東京市、横濱市、其他罹災都市再興に關する積極的計畫をなす主として都市計畫に關する大事業である。

災害地復興に關して最も重要なるものは勿論帝都の復興である。數十億の財產と幾百年の文化を數日にして葬つた大災害の餘燼の未だ收まらざるに當つて、廣莫たる廢墟の上に再び東方の大國の帝都を建設することは、恐らく今迄各國の大政治家の遭遇した難事業に比較して更に困難な大事業と云ひ得る。而も帝都の復興は數十億の物質の建設に止まらず文化の復興を意味するのであるから、單に數年の日時を以て成就し得べきことではなく、固より十數年の長日月を待たねばなるまい。此難事業を成就するには到底平素の行政機關を以てして能くし得べきでない。各方面に於ける最も權威のある、豐富な知識と經驗とを組織することが必要である。此點に就いては既に政府に於て特殊の機關を設ける意向のあるやうに聞くが、廣く地震學者、地質學者、建築學者、交通機關・瓦斯、公園其他の土木工事、上下水道、水運、築港、電氣、通信等に關する專門家、都市計畫、土地政策の權威者、私法及び公法學者、金融及び財政の經驗家と學者、其他より第一流の人物を網羅し、それに不動產所有者、借地權者、商工業者等の利益代表者を加へ、更に政府及び市の當局が參加して有力な一大立案機關を作るなどが必要であらうと思ふ。

如何なるよい組織を具へて有力な實行機關を設けたにしても、最も難問題とすべきは即ち復興の財源である。既に第一段の罹災救護事務のために、寄附金の外に巨額の國費を費消したことであらうし、殊に第三段の復興事業は數十億の經費を要することであるから、譬え主として之れを企業の力に委ね、經濟の力を以て解決せんとしても、若し如何なる災害にも對抗し、總ゆる文明設備を完全に備へる理想的都市を建設せんとするならば　政府が國費を以て大規模の援助

をなすにあらざれば到底實現し難いことである。然るに經濟界殊に金融界は近來最も窮迫な狀態に在り、大正九年春夏の恐慌時代にも比すべき、或は實際の內容に於ては更にそれよりも險惡な狀態に在つたことであり、且つ經濟界の不況と共に政府の財政も頗る困難な境遇に在り、昨年一大緊縮を行つて猶足らず、民間に減稅、豫算削減の聲の最も高潮して居た時期であり、次の議會には此問題が一の重要な政論として爭はれることを豫期されたやうな狀態に在つたのであるから、帝都の大部分が今回の大災害を被つて生產力の減少、資本の滅失、擔稅力の激減の事情が復合せるに拘はらず、更に積極的に經濟、財政を通じて數十億の出費を要すべき事業を遂行することは頗る容易でないことは何人と雖も直ちに想得するであらう。都市の改良を計劃し研究する者にとつては絕好の機會であるが、財政金融に關係する人の眼から見れば絕惡の機會である。從つて理想的復興事業の完成には恐らく多年の時日を要するであらうと同時に、金融、財政に關しては特殊の臨機の手段を講ずるに非れば、尋常の手段を以てしては到底目的を實現することは出來まい。不健全な兌換券の增發、異常の公債募集手段を執ることは又止むを得ないことであらうが、特に不動產金融の便法を講じ、大膽なる土地政策を執り、特殊の建築企業組織を採用する如き必要が感ぜられるに至るであらう。

（六）遷都論

帝都である東京市が今回の如き大災害を受けた際には、公の事を考へる人の中の一部には斯かる危險な土地の上に帝都を置くことが種々の意味から危險であり、非常な損失であると考へる者が生じたであらう。今回の如く災害の程度が甚しければ一度でも懲りるが、更に過去の地震を顧み、殊に元祿十六年、安政二年の大地震を想起すれば更に東京に帝都を置くことを危惧する念の高まることは無理ではない。更に我國の地震帶を研究して東京附近が最も激震の多い地方

であることを發見した者は更に不安の念を増すに相違ない。玆に於て一部に遷都論の起ることは必しも無稽の論として一擧の下に之れを斥けることも出來まい。或は夢想視せられ、机上の空論とせられ、或は凡人から危險視されても、一應は心ある者は遷都の可否を考究するも決して害あることではあるまい。遷都論は人に依つて其理由を異にするであらうが、私が假りに其理由を考察して見れば、過去の遷都論の根據は別として今回の大震災の經驗に慄然として起つた遷都論の理由は、勿論第一に今日の如き大震災が將來東京に於て繰り返して生じないといふことの保障が出來ぬ限り、突如として帝都に生ずる大災害のために場合に依つては國家全體の秩序が破壞される恐れあること、生命財産の危險が重大であるのみならず、一國文化の原泉が凋死する恐れあること等が主な理由であつて、更に之れに附隨して國防上の點からも新たな地方を都と定める理由も加はり得るであらう。然し遷都に反對する理由は又種々の方面から考へ得る。第一には妄りに帝都を移轉せしむることは人心の動亂を來し、殊に大災厄に逢つて困惑失望せる東京市民を更に絕望の淵に沈める者であり且つ突然の災害に際會して狼狽の態度を示すものであると云ふことであらう。第二には殘存公共建築物も幾分存在し、營業所の中心地も一部分殘存し、殊に住宅地域は大部分現在し、且つ道路、橋梁、交通機關及び其附屬設備、各種の地下埋設物等、多數の年月と巨額の經費を投じた建設物が今回多大の損害を受けたりと雖も猶十分に修復し使用するに足る程度に於て存在して居るのであるから、之れを棄て去ることは多大の損失であるといふことである。第三には不動産所有者及び物權者の損失が多大であり、又營業者が得意の減少を恐るゝこと等のために熱烈な反對運動を起すこと、第四には震災は將來あるとしても其損害は火災の損害程大きくはない。且つ震災及び火災の損害は完全な建築改革に依つて十分に之れに對抗し得るといふことであらう。

惟ふに今回の如き大震災に際して人心動亂し、市民が失望の極に在る時輕々しく遷都論を流布することは益々混亂を

生ぜしめる恐れもあらうが永遠に東京を帝都と定めることに就いては、各方面の知識が集合して一應の研究をすることは適當であつたやうに思はれる。勿論第三の反對理由に擧げた利害關係者の反對の蜂起すべきことは覺悟せねばならず、又第二の反對理由である從來の投資の損失の程度等も考慮せねばならぬが、一切政治的の考慮を去り、他方財政上の損失を考慮することを忘れず、純然たる國家永遠の長計を樹てる立場から考へて見れば幾分研究の餘地はあるのではなからうか。假令第四の反對理由に依つて、完全な建築改革に依り、將來東京に於ける地震の災害を十分に避け得べしとしても、東京市の有する天然の弱點を補ふために建物、水道、瓦斯管、其他特に耐震の强度を與へるために頗る巨額の經費を要することであれば、若し孰れかの地方に於て震災の恐れのない適當な帝都建設の候補地を見出すことが出來れば此處に新都を興しても、結局打算的にも必しも不利益であるとは云ひ得ないかも知れない。强ひて自然と戰ふよりは有利な自然を利用した方が安全であり、又永遠の眼から見て利益であるといふことが證明されるかも知れない。政治文化の中心は必しも經濟的の理由に依つて自然に發達する商工業の都市と同居する必要はない。歐洲の首府は總て政治文教の中心であると同時に或程度まで商工業の中心地である。乍併米國の首府華盛頓の如く特に政治の中心地として別に建設された都市がないでもない。之れを一般的に見て政治の運行の上に於て便宜であるか適當であるかを確言することは出來ぬが、帝都を、繰り返して襲ひ來る大地震の災害から安全にするといふ意味に於て、之れを殊更に新な地方に建設することは全然理由のないことゝも考へられまい。此新な帝都に自ら商工業が發達して新東京が成立するも、又一向新都が商工業地として發達せずともそれは別の問題である。右の意味に於て一應地震の少い、又國内の中樞都市及び海外との交通、國防等の諸點から考へて適當な土地を求むれば播州とか其他適當な處があるかも知れぬ。乍併各方面の專門家其他練達の士が會合して好く研究談合すれば遷都論の如きは全く一顧の價がないといふことが立所に定るかも知れ

ぬ。斯くの如き重大問題は一部の者の知識、又は私議に依つて到底是非を決定し得べきものではない。最高の方面に於て適宜の講究をなして決定さるべきことであるが、萬一何等の研究をなさずして單に人心の動亂、東京市民の失望反感等の理由丈けで遷都論に一顧も與へないといふことでは少しく物足らないやうに思はれる。

印度のデーリー市が首府と決定された時に、新市街建設のために都市計畫委員會を組織し、全く新な土地を選定しやうといふ案と、舊來の街と連接して新市街を建設する案とがあつたが、結局後説が採用されることになり、立派な新首府建設計畫が決定した。又ランフアン氏の設計に基いて出來上つた華盛頓市の雄大な都市計畫は人の知る所であるが、特に興味があり、且つ模範的な新首府建設計畫案は濠洲の首府として豫定せられたカンベラ市の建設計畫である。此案は未開の原野にして水面のある適當な土地を全く新に選定して、競爭設計の結果市加古のグリツフイン氏の案が當選して採用され、首府建設豫定地の自然的條件を巧みに利用して、道路系統、交通機關系統を定め、中央政府區域、大學區域、市場區域、工場地域、住宅地域、郊外住居及び半農地域、公園、公園道路、裝飾水面等の計畫を定めて居る。此都市の建設が完成した時は世界第一の理想的の都市となるに相違ない。

乍併既に東京は國都たる地位を失はずといふ御詔勅が炳乎として下つたのであるから今や全く此問題は解決されたのである。此御詔勅に依つて人心の安定を得て絶望の極に在つた東京市民が當然のやうではあるが消えるかと危まれた燈明を明かに望むことを得た喜びは察するに餘りあることであり、且つ此大詔の煥發は單に人心を安定せしむるといふ大御心に止まらず、側近に於て遷都の理由なき事を確信して居る事情を御察知の上の事と拜せらるゝから、遷都論の理由は矢張一顧に價しないものであつたに相違あるまい。これに依つて東京市は今回の大災厄の重傷を受けたに拘はらず、明治天皇の奠め給ひし帝都として再び永久に我國政治、文化、經濟の中樞地として殷盛を極めるに至るであらう。

（七）新都市計畫

新東京市の復興の新都市計畫は間もなく設立さるべき政府の機關に於て十分に考察されることであらう。これ又到底一私人の急速に考案し得べきものでもなく、又種々の案が成立し得べきものであるから、今猶震災救護の第一、第二段の問題の解決の急なる時に當つて、特定の新都市計畫案が發表されないことは當然の事である。罹災者が如何に焦り、又政府が努力しても新都市計畫の成立には猶少くも數ケ月の日月を要することであらうが、出來る限り取り急いで計畫を完成する必要はある。新都市計畫案に就いて考慮すべき問題は固より自ら大體定つて居ることであるが、先づ第一に決定すべきことは東京市の新區域である。從來の區域を其儘として之れを復舊するといふのも一案であらうが、既に決定して居る東京都市計畫區域、將に審議されんとする都制案に基く區域等が新たな復興さるべき帝都たる東京市の區域として考慮され、或ひは又罹災區域と、擴張區域との狀況を考慮して種々の理想的案が考案されるかも知れない。又港灣を殘して殆んど全滅に歸した横濱市も必ず復興に着手するに相違ないから、東京市と横濱市とを聯絡して復興案を考慮することも一案として考へられるであらう。横濱港は高速度の交通機關が發達すれば東京驛から三十分以內で到達し得るのであるから、東京と横濱を一括して一の都市計畫の中に包含することは此際寧ろ適當な事ではあるまいか。テームス河口のアルバートドックはロンドンの港であるがロンドン市から之れに達するには汽車で三十分を費やさねばならぬ。私は從來既に横濱港といふ立派な國の貿易港がある以上之れと競爭的に東京市に大築港をすることは反對の意見を持つて居たが、此際幸にして損害の少かつた横濱港を利用して之れを帝都の港灣と見做し、現在の東京市の商業地區若くは新都市計畫に依つて建設さるべき商業地區との間は運河、鐵道等の設備に依つて適宜に連絡することが出來やう。

東京橫濱間は交通の便宜から大部分は工場地として適當であり、將來に於ては結局東京、橫濱は一個の都市を構成する運命に在るものであるから、人爲的に之れを促進する計畫を立てることも適當であらう。從つて最近に問題となつた東京都制案に基いて東京、橫濱を合した一新行政區域を作つて特別の都制を布くも適當かも知れぬ。次に帝都の計畫區域が定つた場合には既に東京都市計畫地方委員會で決定されたやうに思ふが、東京市の住宅、工場、商業等の地域制度も自ら新に之れを定めねばならぬ。又既に決定された防火區域、並びに市街地建築物法の適用される區域も亦當然改めねばなるまい。又今回の震災の經驗に基いて當然市街地建築物法其物に種々の改革が加へられるのではないかと想像される。又都市計畫法も多少の改正は免れまい。次に路線、路幅、電車、高速度交通機關系統、運河、公園、各種の公共的建物の地位等は自ら從來と異つた計畫を立てられることは察するに難くない。勿論努めて舊道路を利用し、一部の擴張に止まるか、或は根本的に新な理想的道路系統、交通網を計畫されるか、其間非常の相違のある種々の行き方を考へられるが、固より輕々に具體案が定るものでもない。但し根本論として在來の利害關係をなるべく顧慮する心持を忘れないが、理想的の新都計畫案を樹てる方針を執る方が此際東京市永遠のために望ましい事である。固よりそれには財政、從來の設備の利用利害關係者の得失等の點をなるべく顧慮することは勿論である。然し從來の街路筋或は自ら低地に發達する傾きのある商業地區を一部分山の手方面に轉換せしむる位の英斷が主張されるかも知れぬ。少くとも神田に集中された無數の大學、其他の專門學校等は此際宜しく全部擧つて山の手より中野、又は多摩川の方面、其他適宜の地方に移すことが好いやうに思はれる。就中不幸にして災厄に逢つた東京帝國大學の如きは財政の手段さへつけば郊外遙かに數哩若くは以上の閑靜な田園に移すことが出來れば寔に適當である。歐洲の大國の首府と雖も、大抵は一又二の大學を有するに過ぎないが、我東京市には恐らく十數個の大學が存在し、而も其中多數が彼の熱鬧の神田區に無數の私立中學、

女學校と共に集中して居ることは教育に體育に、甚だ好ましくないことゝ考へられる。但し學生の宿所、其他附屬の設備も要ることであるから、直ちに理想通りに行きかねるかも知れぬが可能な場合に此方針を執ることは望ましいことである。

（八）新都市計畫實行の鍵

都市計畫を行ふには平素でも適當な土地政策を樹立すること、建築制限を行ふことが最も肝要であるが、今回の如く大規模に災害地の再興建設を行ふに當つては、猶更此二が最も樞要となるのであつて、此二者に對して徹底的の方法を講ずるに非れば建設計畫の實行が困難であり、又舊來以上の改造された帝都を建設することは出來ぬ。元の江戸に逆轉する外はあるまい。

獨逸の都市は理想的に建設せられ、新に建設された方面程完全であつて、或處では殆ど樂園的の施設が出來て居るが、之等は獨逸の政府、自治體が都市の建設に關して公共の幸福增進のために種々の法律制度を早くから設けて居たゝめである。其著るしいものは所謂千八百七十五年の建築線法と、所謂アヂケス法と稱せられる千九百二年のフランクフルト、アム、マイン市に對する土地區畫整理の法律である。之等は其後種々の發達を遂げて結局千九百十八年三月のプロシヤ住宅法に包括されて居る。此住宅法は住宅政策、土地政策、都市計畫に關する從來の法制を一括したものであつて、右の建築線法、土地區劃整理法（アヂケス法）建築規則の原則を包容し、住宅敷地の收用、住宅敷地として市町村區域の編入、變更の事、住宅檢査、其他の事々網羅して居る。我國にも既に都市計畫法、市街地建築物法が成立して居るのであるから、今回の帝都再興計畫の實行にも甚だ好都合であるが、今回の如く帝都の大部分が焦土と化した場合には之等の規定の應用にも自ら新工夫を要し、更に廣く徹底的に活用し得る方法を講ずる必要もあらう、少くとも今回の大建設に

は徹底的に土地區劃整理を行ふことが最も肝要であらうと考へる。又必要なる土地の收用も單に公用徵收に止まらず、超過收用（エキセスコンデムネーション）を行ふ必要があらう。之れに依つて理想的な道路系統、建築敷地が定められ、土地が最も合理的に使用せらるゝこととなると思ふ。路幅、道路の設備等は商業地域、住宅地域等に依つて自ら異るであらうが、地域制度、道路の規模、敷地區畫を定めると同時に、之れに適合する建築樣式を定めねばならぬ。道路と敷地區畫と建築樣式の三者は常に三位一體として離るべからざる關係に於て合理的に定められ、且つ建物の使用目的に適合せしめねばならぬ。

建築線といふのは之れに沿つて建物を建てる境界線であつて、多くは大體道路境界線と一致する。建築線法の主旨は結局公に定められた建築線即ち道路に面してゞなければ家屋の建築を禁じ、且つ公の規定に合しない道路又は建設未了の道路に家屋を建築することを禁じ、更に市街建設に關する種々の規則を定めるのであるから粗造家屋の濫設から生ずる弊害を防止し、之れが徹底的に行はれて居る獨逸では、最近に住宅建物の總ての外面の建築設計圖の提案まですることが出來るやうになつて居る。之れに依つて實際上建築の計畫と敷地決定の權限を自治體の手に掌握するやうになつたのである。如何なる土地の所有者も譬え自己の土地たりとも、自己の好む所、好む時に任意の建築を爲すことを許さず、必ず其土地の利用、建物の建設は公共の利益と調和せしめねばならぬといふのが、之等の法制の精神である。土地區劃整理法は、市が必要を認めたる場合、又は關係土地の所有者の半數以上及び土地面積の半數以上が整理の申出でをなした場合に此多數所有者に屬する土地を合併し、改めて之れを區劃して關係所有者になるべく元の場所に近く、元の價格に近い割當てをなすのである。之れに依つて損害を受けた者には關係者全部が其賠償を負擔する。而て此區劃整理をなす場合には市は道路敷地として、市の要求に依つて整理する場合には35%、土地所有者の要求で整理する場合には40%までを無償で獲得することが出來る。此區劃整理に依つて、地價が騰貴する故、無償で道路敷地を提供しても實際

地主には損がない。此方法と右の建築線法とに依つてベルリン市の新市街、其他獨逸の新都市は理想的に建設されたのであるが、我國の都市計畫法にも幸にして之れに類似した制度が認められて居る。來るべき帝都復興には此土地區劃整理の方法は到る處に於て大規模に適用せられねばならぬことゝ思ふ。

都市再興に關して土地區劃整理の方法を大規模に適用することは最大緊要のことであるが、更に或場合には土地の收用が必要となる場合が多いであらう。土地收用に關する規定は古くから公共的の事業に關して土地收用法に認められて居るが、其他國に依つては不使用地、沼澤等の開墾のために收用を認めて居る者もあり、最近には又住宅問題解決のために小住宅建設の爲め土地を收用することが諸國で認められるやうになつた。獨逸の千九百十九年八月の新憲法百五十五條に依れば更に廣く住宅の需要を滿足せしめ、又移住、及び農業の奬勵に必要なる土地を收用する規定を定めることを得るやうになつて居る。之等は戰後過渡時代の住宅緩和、兵士の歸農等のために特に必要を感じたのであらうが、今回の如き都市の大破壞に際しては單に小住宅の建設といふ範圍よりは更に帝都復興全體の目的のために幾分收用の範圍を廣くする必要も生ずることゝ思ふ。併し之れは大體は現在の我國の都市計畫法に基いて行ひ得るのであるが、更に其方法に多少の改正を必要とする點も生ずるであらう。

（九）　特殊の建築企業組織と金融

既に都市計畫の設計が定まり、地域、路線、敷地區劃、建築樣式等が定まつた場合には速に建築に着手せねばならぬが將來の建築は必ず現在より更に嚴重にされた市街地建築物法が適用され、耐火、耐震の構造が嚴重に强制されることと思ふから、同單位面積の建築には必ず從來よりも多額の經費を要することになるので、此點に於て復興計畫の實現に

最も困難を感ずるであらう。特に區劃整理を行ひたる場合と否とを問はず、個人が任意に其上に建築をなす場合と雖も、今後は必ず多少の建築制限を被るから、從來よりは經費を多く要する場合が多い。況んや重要な路線系統に面して建築をなす場合には、從來の敷地上に建築する時も同じであるが、殊に新な敷地區劃をして統一的大建築をなさんとする場合には、從來よりは巨額の經費を要するのみならず、場合に依つては譬え資金を有しても個々に建築することは不經濟な場合が多々生ずる。從つて將來の市街建築は必ず特殊の建築企業組織を作つて經濟的に大規模の建築を行ふことが必要であらう。譬えば銀座、日本橋通りを元の如く復興するや否やは別問題として、假りに之れを從來通りに再建するとしても各人が任意に或は五階建、或は二階建、或は大建築、小建築を作ることは甚だ不利益であるから、統一的計畫の下に街筋全體に亘つて敷地區劃をすると共に統一的建築をするのが利益であらう。各人が獨立に建築資金を得る事に困難を感ずる場合にも、或特殊の建築大企業組織が存在すれば之れが代つて建築を行ふことが出來、又斯かる大建築會社があれば建築に關する資金を蒐集することも比較的容易である。私は嘗て本誌大正八年一月號に寄せた都市改善論（拙著社會問題批判に收錄）中に都市計畫事業を容易ならしめるために特種の公共的建築會社の設立が必要なことを認め、其私案を掲げたが、今回の復興事業に關しても之れに類する制度組織が必要であると思ふ。帝都復活事業のために特殊の金融機關を設けざる場合には、此會社に個人其他の團體にして再建資金に窮する者に金融を與へる組織を附加することも宜からう。此種の特權公共的建築會社の組織を助長せずして、單に個人又は小さき住宅組合の活動に放任する時は改造された市街を迅速に實現せしむることは頗る困難であらう。

帝都復興のために要する資金は結局數十億に上るであらうが、之等の費用は國費、市費、民間の資金に依つて充當されるのであるが、稅源の殆んど大部分を失つた東京市には固より復興の資金を提供する力は殆どない。從つて國家が東

京市に代つて事業を行ふか、或は之れに多大の援助を與へねばならぬが、帝都再興のために國庫より十數億又は數十億の巨費を支出することは頗る困難であらう。全國に特に増税することも目下の狀態として勿論困難であり、且つ事業の性質上公債に依るべきものであるから政府は何等かの方法を以て募債せねばならぬが、金融逼迫の際巨額の公債を募集することは困難であり、或は臨機の處置として、特に割増付の方法を利用して震災地復興割増付公債の如きものを發行する事も一策であらうが、之れも數年の後には漸次餘程有効となるかも知れぬが目下は一時に巨額の資金を集め得るとも思はれぬ。要するに大規模の資金調達法としては外債に依るの外はあるまい。それとて政府の財政の將來を考へれば容易に此巨額の公債を償還し得る豫定も立つまいから、募債に就いても自ら限度があらう。帝都復興に關して最も巨額の資金を要するものは建築資金であるが、之れに對しては固より政府が原則として直接建築を行はず、前記の如き特殊の建築企業會社其他をして建築の衝に當らしめ、政府が或程度の補助金を之れに給し、或は割合低利の資金を之れに融通する等の方法を執ることがよからう。前記の割増付公債の如きも彼の日本勸業銀行に與へた特權の如く、政府自ら行ふ代りに特に右の公共建築會社に此割増付小額債券發行の權限を與へることも宜からう。之れに依つて一般の投資に加ふるに、將來數年又は十數年繼續すべき震災地復舊工事に參加する數萬の勞働者が、勿論小額ではあらうが、勞銀の一部を割いて之れに投資することもあらう

要するに今や罹災民各人は目前の生計維持、營業の復活にすら資金に窮する者が多いのであるから、其間能く帝都再建の資金を得ることは頗る困難であり、寧ろ先づ彼等に對して別に營業復興のために信用資金を供給する道を講ぜねばならぬ程であり、且つ市も亦自ら再建築資金の供給をなし得ずとすれば、結局政府が財政的に援助するか、又は特殊の建築企業組織及び金融機關を通じて廣く全國より帝都復興のための資金を吸收するの外はあるまい。商業銀行は最近貸出超

過、金融梗塞の絶頂に達して居るのであるから既に述べた如く震災復舊公債或は特殊の建築會社に對して資金を供給する餘裕も少いことであらうが、我々は此際特に帝都復興のために一般金融業者及び資本家が特別の助力を爲すことを希望すると共に帝都復興の局に當る者に對して、其資金の調達に關して特別の考慮を望まねばならぬ。獨逸の諸都市の建設に當つて、或は通常の不動產抵當銀行、或は國營、市營の不動產銀行、或は地主組合、或は保險會社、國營保險機關、國營貯蓄金庫等が巨額の貸出をなした事、國家が建築組合に對する貸付を保證した如き方法を參考して不動產に對する金融の制度を考案して帝都再建を助長することが肝要であらう。

火災後の復舊には保險金の支拂が最も必要である。然るに今回の震災後の火災保險金の支拂ひについて困難な問題が起つてをるようであるが保險約款の明記する所に照して法律上からは會社に支拂ひ義務の無いことは毫も疑ふの餘地は無い。問題は會社が罹災者に同情して德義的に幾分かの寄附をするか否かと言ふ點にある。寄附は望ましいことであるがあまり甚しく强制するのはよくない。況んや會社が支拂をなさゞれば重役の身邊が危險であると威嚇する如きは甚しく常規を逸したことである。被保險者の騷ぐのは情に於いて誠に無理も無い次第であるが、被保險者の階級に阿附することを利益とする者が殊更激しく運動することもあるようであるが、道理の通らぬことはいゝ加減にするがよい、桑港大地震の際にも火災保險金の支拂ひについて大問題が生じたが、其前年一九〇五年に於ける桑港に於ける火災保險料金約二百九十八萬弗、保險契約金額約四億二千六百萬弗であつたが、當時の震災被害額二億五千萬弗に對して會社の損失は一億七千五百弗に及んだ。勿論保險會社中全額を支拂つたもの、七割五分を支拂つたもの全く支拂は無いものもあるが、結局此の保險會社の支拂金を受取つたことは桑港の復活に最大なる力を與へたのである。大森博士は明治三十五年の「グアテマラ」の大地震、明治三十九年の右の桑港大地震の際に生じた火災保險金問題を例示して、其當時我國の保險會社

は『原因の直接と間接とを問はず、地震又は噴火の爲めに生じたる火災及び其の延燒其他の損害には全然保險金を支拂はざる方針』なることを指摘して豫め世人の注意を喚起しておられる。農商務省の認可を經て印刷までされてある劃一的條件の約款に幾萬人の人が同意しながら不慮の際にあまり强烈に我利を主張することは好ましく無い、被保險者の熱するは已を得ずとしても第三者は冷靜に批判し、被保險者を援助するとしても合理的な方法によるべきである。

（十）國民の緊張を望む

要するに帝都の復興は物質的にも最も困難な事業であり、殊に財政金融の點に於て種々の束縛を受ける事であらうから、多大の年限を要することゝ思はれるが、吾人は更に罹災市民の生活の維持、營業の復活がどれほど圓滑に行はれるかといふことを懸念せざるを得ない。目下帝都の秩序は短時日の間に巧に維持されたが、戒嚴令撤廢後に市民の緊張程度は減ずると共に、或は帝都の秩序が再び脅威されるやうな事になりはせぬかと危まれる。東京の殘存區域に居住する者は多く此不安を感じて居るのであるから、罹災者の救護、其生活の復活に努力すると共に、一般の秩序の維持に關しては政府が十分愼重なる用意をなさんことを希望せざるを得ない。

今回の大震災、大火災は横濱、其他東京灣、相模灘の地方に限られたのであるが、此種の災害は我國の他の地方に又起らないとも限られない。從つて此災害に依つて嘗めた苦い經驗と尊い教訓はなるべく速に廣く我全國民に對して之れを傳へて置く必要がある。且つ又今回の災害は國の一部に限られたとは云へ、其損害の程度は國全體の富に對して甚だ大きな割合に當るのであるから、單に罹災地方のみならず、日本國民全體が目前の消費に對して特に出來得る限りの制限を加へ、生産に關する活動を更に熱心に行はねばならぬ。之等の意味を國民に徹底せしむるためには勿論言論機關の力を借らねばならぬが、更に地震、建築、都市建設等に關する學者や、社會指導家が各地に講演を開いて國民を緊張せしめることも必要であらう。此國家重大の時機に際して利己的な、政治的な鬪爭は速かに其影を潜めしめねばならぬが、國民全般は帝都其他の震災を國家の受けた震災として眞面目に考慮することを要する。

東京市の災害と經濟的復興策

法學博士　堀江歸一

遷都論を排す

東京市に意想外の變災が起つて市の大部分殊に商工業に密接の關係を有する方面を灰燼に化したことは前古未曾有の珍事であつて、事件後旬日を經た今日に於て、尙ほ私の驚愕を禁する能はざる所である。今後の東京市は如何なる狀態に爲るであらうか、如何にしたならば、昔日の面目を恢復し、且つ帝都として誇るに足る外觀を保ち、又內容を備ふるを得るに至るであらうか、共に吾人の研究を要する所である。

二三十年以前一部の人士に依つて、大阪遷都論なるものゝ主張されたことがある。大阪が日本有數の商業地として殷富を極め規模の大なる港灣を備へ、四方に多數の人口を收容するに足る郊外地を擁し、將來益々商工業の發達を許す素地を有する諸點から云へば、我國の首都を此所に移して、何等差支なきものと認めるを得るかも知れないが、單に移して差支ないと云ふだけの理由の下に、直に遷都を斷行するが如き、餘りに歷史を無視したものと云はざるを得ないばかりでなく、今日文明國の大都會に必要なる條件として數へられる所は、單に上記の諸項殊に外形的條件のみに止まるものではない。是等の外に全國に冠たる文化的設備を有するの一事は文明國の大都會殊に首府に缺く可からざる要件であつて、先年倫敦が諸外國の首府に盡く一の綜合大學の存するに拘はらず、其倫敦に缺けて居ることを理由として、倫敦大學を改造し、一個の綜合大學とした一事を以つてしても、此般の事情を推すことが出來る。大學、圖書館、博物館、美術館又は是等の施設を應用して收め得られた成果である學術技藝、學者、思想家、藝術家の居住は首府に缺く可からざるものであるが、是等の事たる、決して一朝夕の間に速成されることを許すものではない、歷史や、環境や、人の氣風や性質が相集まつて、首府に必要なる施設を企圖するを得ることを考へたならば、單に現在經濟上の繁榮地であるとか、將來其中

心地と爲るとか云ふ理由の下に、一方から他方に首府を遷す主張を爲すが如き、輕卒なる斷定としなければならない。

東京市復興の意義

東京の大部分が灰燼焦土に化したとしても、其帝國の首府たる地位は之を動かす可きものでないとすれば、次に起る問題は如何にして崩壞した東京市を復活せしめるかと云ふ事である。崩壞した都市の復活を謀ると云ふ意味は要するに、第一燒失し崩壞した家屋店舗工場等の新築を期すること、第二新築された店舗に商品を充實し、商業取引の圓滑を謀り、之を謀らせるに足るだけ、金融の便を付けること、第三震災火難に伴ふ社會的動搖に依つて生じた失業者の爲めに、就職の道を講じ、生活の安定を求めること、第四斯の如くして彼等の地方に散逸するを防ぎ、大都會として相當の人口を擁するに務めることの諸點であり、更に今回の災害を機會とし、之を善用して、都市生活の完成を謀る以上は、第一東京市を住居區域と工業區域との二ツに區劃し、第二市內の要所に大小市場を設置し、市民に向つて廉價豊富に日用品の供給を謀り、第三市場の設置と關聯して、東京灣築港を實行し、港內に入渠する船舶をして自由に物資を供給させ、第四、耐火耐震家屋の設立を奬勵し、第五公園の增設、道路の擴張、貯水池の設置等に依つて、都市生活を安全にすると共に、防火の効用を擧げしめ、第六上水道瓦斯電氣の設備を改善し、其供給をして斷絕せしめざるの工風を必要とするのである。

火災保險の問題

都市生活を完成する諸種の工風に就ては、議論を他日に讓り先づ目前崩壞した東京市再建の方策に就て考へる。普通の火災であれば、如何に大廈高樓が燒失したとした所で、是等に對する保險金は保險會社に依つて支拂はれ、火災保險の普及した今日に於ては、罹災者の多數は此保險金に依つて、後圖を爲し、斯くて罹災地の復興に資する所少なからざる次第である。然るに今回の如く火災が地震に起因するものである以上は、保險會社は保險約款の一項に「原因の直接と間接とを問はず、地震又は噴火の爲めに生じたる火災及び其延燒其他の損害に對しては責任を負はず」とある規定に據り、保險金の支拂に應じないであらう。斯くて罹災者は建物家屋の再興に就て依賴する唯一の資源を奪はれた趣きであつて、此儘であつては、家屋復興の資金は遂に調達されざるに至るのである。玆に於てか國家に於て保險金の一部を負擔する說を生ずるのであつて、現に前途に於

ては國家に於て保險金の八割を、社會に於て、其二割を分擔して以つて被保險者を保護す可しと云ふことすら、唱へらるるに至つた。然しながら實際問題として、火災保險會社をして保險金の二割を負擔せしめることが果して可能であるかどうか。今回焼失した區域の内には、日本橋京橋神田諸區の如く東京市内に於ける有數の商業地があり、是等の方面には保險會社の目的物とす可き家屋建物等も多きに居り、其價格も亦甚だ大なるものであつて、諸會社は互に爭つて保險契約を締結することに懸命の努力を致したのである。其方面に於て殆ど一物の餘すものなく、焼き拂はれたとすれば、諸會社の保險した目的物の價格は莫大なるものであり、其二割に相當する金額にした所で、到底會社の支拂能力に超過するであらう。更に考へ可きことは火災保險會社が從來如何に資金を運用したか、又其資金は今日の如き事局に際して、容易に且つ確實に回收されるものであるかと云ふ問題であるが、是等に對して、私は保險會社に不利な事情の存することを認める。蓋し從來東京に在る保險會社の本支店が其資産を運用し、利殖するに就て、最良の目的物としたものゝ内に、今回罹災した商業區域の建物や、宅地の多きを占めたことは、爭う可からざる事實である。然るに今回罹災に加ふるに災難と云ふ殆ど思料す可からざる意外の變事が突發した爲めに、是等の建物は多く烏有に歸し、其地宅亦盡く一塊の焦土と爲つて、今後如何なる點まで價格の墜落を見るか、測り知るを得ない。少なくとも當分賣買不能のものであるとすれば、保險會社に取つては、其財産殊に會社の爲めに流動的資産たるものゝ多くを回收不可能の狀態に陷らしめた次第であつて、是等の點から考へたならば、保險會社をして被保險財産の二割に相當する保險金を支拂はしめることが可能であるかどうか、其支拂を會社に强要することが却つて會社をして危險なる地位に臨ましめ、社會全體殊に一般保險契約者に不測の災害を加へしめるに至りはしないであらうか、保險會社は決して今回罹災した家屋所有者の利益の爲めにのみ殉ず可きものではない、一般保險契約者の爲めに、其財産を保全する責任もあれば、株主の利害もある以上は保險約款に違背した責任まで、自ら進んで負ふの道理を存しないものと考へられる。

國家と保險金負擔問題

玆に於てか私は考へる、國家と保險會社との間に、八對二と云ふが如き割合を以つて、保險金を分擔せず、非常の際に處する非常手段として、國家に於て保險金の全額を負擔し、今後數十年を期して保險會社をして國家に對する債務を決濟せしめる、

其れを決濟するを得ざる會社があれば、國家に於て其事業を繼承して保險國有の制度を實行する端緒とすることは、一個の策として考慮の價値があると云ひ得られる。今後數十年に亘つて保險會社が國家に債務を支拂ふ負擔を荷ふ以上は、其期間に於ける保險料が或る程度まで引上げられることは、已むを得ざる所に屬する、換言すれば大正十二年の災厄を蒙つた保險契約者に保險金の支拂を完了し、以つて彼等の利益を保護する爲めに、十二年以後の保險契約者が保險料引上げの形態に於て、一部の負擔を荷ふ道理であつて、斯の如くして一時に東京市に殺到した震災火難の損害に伴ふ負擔が永き期間を通じて、分散されることゝ爲る。一方に國家が一時保險會社に代つて、保險金支拂の實に當る、其之に當るだけ、國家の經費が支辨され、之に對する負擔は自ら國民一般の負擔に歸する譯であつて、自然今回の震災火難に屬する一切の損失を或る程度まで國民全體に移すことゝ爲るのである。東京其ものを根本的に破壞し了する震災火難であれば、之を一の國難と認めて、之に伴ふ負擔を國民に分配することも道理ある處置であつて、此見地から火災保險金問題の如きも、適當なる解決を得るのである。

　即ち今回の如き非常事變に於て、被保險家屋に保險金を交付することが都市復活の最捷徑であるとすれば、此政策上の見地から、保險金支拂の負擔を全部國家に荷はしめ、保險會社をして永久に之を免かれしめようと云ふ說もあり、此說たる、國家の支拂つた保險金を保險會社に對する貸付金とすると云ふ說よりも、更に一歩を進めたものである。保險會社が保險約款に於て地震の爲めに生じた火災及び其延燒に對して、何等の責任を負はないと規定し、而して火災保險は何處までも火災保險であつて、震災保險ではなく、隨つて震災の如く偶然に突發する大變事に應ずるに足るだけの高い保險料を徵收して居らないと云ふことが、今回の問題に處して、會社に取つて、大なる强味と爲るのであつて、右の規定あり、又事情ある以上は、保險契約者は如何に會社に迫つた所で、會社をして今回の火災に對して、保險金を支拂はしめるを得ないし、又國家と雖も、會社を强要して、其支拂を行はしめるを得ない。若しも斯る事が行はれたならば、我國に於ては契約の安全に對する保障は此の事情に依つて、常に動搖するものであると云ふ事例を生ずる次第であつて、此位經濟上の秩序を傷けることはないであらう。

　唯保險會社に取つて、考慮す可きことは、今回の火災が地震に伴ふものであつて、如何に保險の目的から除外されて居るとしても、之を理由として、全然保險契約の責任を免かれ、保險料の只取りと同樣の所業をすると云ふ非難を蒙つては、將來保

險事業を擴張する點に於て、大なる障害と爲るかも知れないから、此邊の配慮に基き各自の支拂能力に應じて、保險金の或る割合を負担し、以て東京市の復活に努力しようと云ふ態度に出る一事である。而して此事たる、保險會社の東京市に對する好意と自己の營業に對する政略とに依つて、自發的に出るものであつて、總ての會社が盡く斯る態度を取つたとした所で、保險會社の資產狀態と今回の震災火難の大なる事實とから云へば、保險會社の支拂ひ得る保險金の割合は損害額に對して、極めて薄弱なるものに止まり、決して保險契約者をして滿足せしめるに足るものではなからう。隨つて火災保險問題を解決し、保險金の支拂に依つて都會復興、都市再生の機運を開かうとする以上は、何としても國家が政策上の見地から、保險金支拂の負担に當る、假令之を會社に對する貸付金とするも、其期限の長かる可き爲めに、自ら負担に當る覺悟を以つてしなければならないことゝ爲るのである。唯此場合に一個の問題として何處までも殘る事がある。保險會社が一個の營利事業として、經營される以上は、震災の如き不可抗力に基く家屋の燒失は保險の目的から、之を除外しなければならないであらう。然し國家が自ら保險事業を經營するとしたならば、如何であらうか、如何に不可抗力に基く損害であらうが、又平均數を算出するに困難なる大規模の災厄であらうが、之を保險の目的から除外することは、國家事業の本質に反する、國家の廣大なる力を以つて、斯る損害をも賠償しなければならず、又實際に賠償することを難しとしない、然らば保險事業の如きは、之を世間に普及し、又其利益を確實ならしめる點から考へれば、民有の營利事業たらしめるよりも、國有國營の事業たらしめることを至當とすると云ふ議論を生ずるのである。私は將來の問題として、此一事を留保したいと思ふ。

保險契約なき建物は如何

火災保險の問題が右の如くに解決されるとすれば、燒失した被保險建物の所有者は國家保護の下に會社を通じて、大なる利益を收める譯であつて、彼等が平生保險契約を締結し、若干の保險料を負担したればこそ斯る利益を獲得するに至つたものと解される。然しながら之を東京市の全體に就て見れば、被保險家屋は燒失した家屋の一部分に過ぎない、隨つて保險問題が如何に保險契約者に取つて、有利に解決されたとした所で、保險金を受領して、之を家屋再築の資金に充てるを得る者は一部の市民に止まり他は家屋を燒かれながら、保險契約を締結して置かなかつた爲めに、保險金を得られず、隨つて新築に要する資金

に窮せざるを得ないであらう。既に國家が保險會社を介して、被保險家屋の所有者に保險金を領收せしめるだけの保護を加へた以上は、保險契約の結ばれなかつた家屋の所有者に對して、若しも同等程度の保護を施さなかつたならば、國家の施設をして公正を保たしめるを得ない結果と爲るのみならず、家屋再築を促進し、市民をして出來る限り早く住家に居らしめようと云ふ根本の目的にも反することゝ爲る。即ち此目的を達する點から云つて、國家は家屋の建築に從う者に對して、或る期間一定の助成金を與へるとか、國有林を伐採し、國有製材所に於て製造した建築用材を廉價で市民に供給し、低廉なる負擔の下に、家屋建築の業を成就せしめるとか、住宅組合に對して、從來よりも更に利子の低廉なる資金を豐富に供給するとか、公共團體自ら住宅の建築に着手するとか、種々の手段を取り、一方に被保險家屋の所有者に向つて、家屋の再築を促すと共に、保險の利益に浴するを得ない人々にも略ぼ同樣の便宜を與へることを謀らなければならないのである。

宅地の國有公有は如何

火災保險の問題が如何に解決されるかは姑く措き　私が罹災地の復興策として、考へるのは、國家又は東京市が罹災の土地を購入し、土地公有の方針を進める一事である。今回焦土と爲つた方面の內には、京橋、日本橋、神田の如き商業區域として、市內樞要の地位を占めるものがある。而して是等の方面たる從來地價の高きこと、殆ど全國に冠たるものであり、人をして所謂土一升、金一升の諺を想像するに足らしめたのであるが、震災後に於ては其地價は果して如何に動くものであらうか。固より最近に於て標準とす可き賣買の行はれたものはないであらうし。隨つて價格の騰落を知るのは事實不可能であるが、兎に角是等目拔きの土地の價格は今日の處では近き將來に於ける都會地復興の成否若しくは其速度の如何に繋がるのであつて、全然不定のものとしなければならない。若しも罹災地が永く今の儘の燒野原であつて、建物も建築されなければ、商業取引の復興される見込みも亦容易に付かない。隨つて震災前に於て商業の中心點たりし誇りは自然京橋日本橋を去つて、他の區に移るようなことが起つたならば、嘗に金一升に値した土地も今や本來の土塊と異ならざるに至るであらう。然しながら斯る變動の土地價格の上に起らうとする場合に、之を放任することは、私有財產の基礎を破壞するものであつて、斷じて經濟社會の安定を求める所以とするを得ない。一方に震災火難に依つて、倒壞し、燒失した家屋の再建を促す爲めに、資金を供給することが必

要であるとすれば、此際國家なり、東京市なりは市街宅地の價格を維持し、併せて家屋建築に要する資金を供給する二樣の目的を達する爲め、市街宅地の公有を斷行し、災厄當時の時價又は之に若干の割引を施した價格を以つて、宅地を買收したならば、如何なるものであらうか。買收、代金は宅地所有者の手に入り、宅地所有者にして從來家屋を所有して居つた者であれば、直に其代金を以つて家屋の建築に從うであらうし、又宅地所有者と家屋所有者と別人であつて前者は宅地の代金を受取りながら之を家屋の新築に供せず、他に利用するやうな傾きのある場合には、宅地買入れの一條件として、必ず其宅地に家屋を建築せしむることゝしても宜しいし、或は市政府が宅地を購入した場合には、市政府自ら其費用を以つて、家屋を建築し、希望者に之を賣却し、又は賃貸することを不可なりとしないであらう。即ち此事たる、一方に現在罹災地所有者に家屋建築に必要なる、又は其目的を以つて土地賃借人に融通し得る資金を供給する道であると共に、國又は公共團體の爲めに、今回の如き災厄を機として、將來價格の增進する望みある財產を保留する所以と爲り、一擧兩得の效果を奏するものと考へられるのである。固より國家にせよ、公共團體にせよ、市街宅地を購入するに當り、現金を以つて代金を支拂うことに就ては、困難を感ずる、隨つて公債を宅地所有者に交付しようとする一方に、罹災者に取つて、先立つものは現金であつて、有價證券でない、此點に就て兩者の所望を一致せしめるには、後に論述する金融上の施設を以つてすれば、自ら事足りると思はれる。

支拂猶豫法の效果如何

金融上の方面に於て、震災以來今日に至るまで、國家の公然施設した所は支拂猶豫令の發布あるのみである。彼の如き大變災があつて、人心の恟々たるに加へて、現金に對する需要著しく增加し、何人も手元に若干の現金を備へ置かなければ安んずるを得ない場合に臨んで、貸借の關係をして平生の如く爲らしめたならば、債權者は債權の即時回收に全力を致し、信用取引の跡を絕つと共に、債務者をして擧つて支拂停止の已むを得ざるに至らしめるであらうし、債務者の支拂停止は軈て債權者の債權回收を不可能ならしめざるを得ない。此點から考へれば、政府が緊急勅令を以つて、支拂猶豫の制を施したことは、當然の處置と思はれるやうである。然しながら支拂猶豫令は單に債權債務の關係に於ける現狀を維持し債務者をして債務の履行を迫られる危險なからしめる效果を生ずる、斯くて債務者をして支拂停止を演ずるとか總ての債務者をして將棋倒しの悲運に立

たせるとか云ふよっな難境から脱出せしめるを得るに相違ないが、支拂猶豫令の效果は單に是れだけであつて、何としても其消極的であることは、之を免かれるを得ない。震災火難の直後に於ては、斯る消極的施設に安んじて、此以外に出ることを得ないのも、事情の諒とす可きものありと見られる。然しながら經濟社會をして平生通りの軌道を歩ましめようとするには、決して此消極的施設を以つて、足れりとするものではない。今日の時局に於て金融上の方面に於て、必要とする所は

第一、梗塞の甚だしきに至つた金融を出來得る限り緩和すること、

第二、震災火難に加ふるに支拂猶豫令の規定に依つて、忽然回收不可能と爲つた債權をして現金化せしめる道を講ずること、

第三、確實なる生産事業に對しては、其繼行に必要なる資金を供給し、物資の增殖を期すること、

の諸點であつて、是等の目的を達するには、到底、一の支拂猶豫法を以つてして足れりとするを得ない。彼の歐洲戰爭の勃發した際、交戰諸國の多くは市場に於ける一時の靜穩を期する爲めに、支拂猶豫法を制定し、隨分廣い範圍に亘つて、猶豫の效果を及ぼすことゝしたが、之と同時に資金の流動化を謀る爲めに、幾多の施設を爲すことを怠らなかつた。之を英國の事例に徵すると、支拂猶豫法の制定に次いで、政府は新に通貨銀行券法なるものを制定し、英蘭銀行の手を經て額面一磅並に十志の政府紙幣を發行し、而して英蘭銀行は之を發行するに就て、専ら市中諸銀行の有する預金勘定の二割を限度とし、銀行の資産を取つて、擔保に充てゝ、諸銀行に之を貸出し、以つて支拂準備金を充實せしめるの方針を取り、英蘭銀行は開戰前に振出された善良なる商業手形の支拂期限の來るに隨ひ、其支拂に必要なる資金を手形支拂人に融通し、更に海外取引に從事する者が外國に債權を有しながら、之を回收するを得ない爲めに、窮乏して居る場合には、其債權額を引當として、手形を振出させ、取引銀行をして此手形を割引させて、以つて資金を融通せしめる等、國家、中央銀行、市中銀行の三者相協力することに依つて、種々の救濟策が行はれ、以つて經濟社會をして開戰當初の混亂を脱せしめ、又外に戰爭の酣なるに當つて、内に國民的産業の繼行することを得せしめた事例の動かす可からざるものがある。

固より戰爭と震災火難とは其形態に於て、異なるものがあり英國の先蹤は直に取つて、之を我國に移すを得ないこと、論を俟たざる次第であるが、不慮の出來事に依つて、貸借の關係が攪亂され、生産の狀况が停廢し、信用取引が頓挫するに至つた諸

點は兩者の間に共通する所であつて隨つて斯る打撃を蒙つた經濟機關の復興を謀るに就ても、曩日英國に行はれた所を參照することに依つて、大なる價値を見出すのである。卽ち我國に於ては震災火難後に於ける第一の金融的施設として、支拂猶豫法を制定し、一般の債權債務に於ける關係を据置くことゝしたのは勿論、銀行預金の引出も一日一回百圓以下の金額に限ることゝとした。若しも斯る制限にして設けられなかつたならば、銀行に對して預金拂戻の請求は潮の如き勢を以つて殺到し、銀行をして支拂停止の已むを得ざるに至らしめるであらう。銀行の貸付金、割引手形が銀行取引先の罹災に依つて、回收不可能の狀態と爲り、銀行の資金をして全然固定せしめるに至つたとすれば、一方に銀行は公衆に對する債務の履行に無能力と爲つた次第であつて、斯る窮地に陷つた銀行に一時の小康を保たせるには、支拂猶豫法の保障の下に居らしめることを以つて、一策とす可きである。然しながら支拂猶豫法の實施された結果として、今日市民の最も必要とする現金の流通が杜塞し。現金の不足を告げつゝあることは爭う可からざる事實である。災害後に於ける社會的不安は信用取引を困難にし、人々をして現金取引に據らしめようとする其際に、銀行の預金拂戻は一回百圓以内を限りとする有樣であつては、取引の決濟に不便を生じ、困難を醸すことは必然の勢である。

尙ほ今回の支拂猶豫法に就て、考ふ可きことは其適用の範圍が震災地だけに限られて、他に及ばない、卽ち其全國的でなくして、一局部的である一事に存する。其適用の範圍の部分的であることの結果として、例へば東京に就て取立てらる可き債權を有することの多き地方の銀行業者の如きは、債權は支拂猶豫法の下に回收不能と爲りながら、一方に自己の負ふ債務は之を決濟しなければならないとすれば、斯る債權を有することの多ければ多いだけ、營業上に困窮を覺へるに至るであらう。然ればと云つて、支拂猶豫法を全國に及ぼすことの道理に反する以上は、右の如き債權であつて、手形に依 て、代表されるものは、宜しく日本銀行に於て寬大なる條件の下に、再割引を爲し以つて資金の疏通に資せしめることを當然とするのである。

支拂猶豫法以外の金融政策

東京に於て先づ業務を開始したのは、罹災を免かれた五銀行本支店であつて、他の銀行も其後開業の運びに至つたようである。而して支拂猶豫法の支配下に在る間は、預金 對する取付を防ぐことの出來る爲めに、銀行の地位は安全であるを得ようが、此以上に金融機關として何事を爲すに堪へようか。金融機

關として、銀行が充分の活動を經濟社會に致さうとするには、第一預金に對して支拂準備金の豐富であり、第二斯く準備金比率の強大なることに依賴して、貸出割引に依つて、資金の融通を自由にする二點を必要とするのであるが、支拂猶豫法の制定だけであつては、如何にしても右の效果の孰れのものをも齎すを得ない。之を齎さしめるには、銀行の準備金を豐富にし、又銀行の有する債權を回收するに容易ならしめる道を講じなければならない。此點から考へると、支拂猶豫法の制定は兎に角として、日本銀行が市中諸銀行に向つて、寛大なる條件の下に貸出を試みることが必要と爲るのであつて、此點に於ける成算の確乎たるものがあれば、支拂猶豫法の如き、或は無用であつたかも知れない。固より日本銀行が市中諸銀行に資金を貸出すに就ても相當の制限を設けなければならない。即ち諸銀行の有する債權にして、今回の災厄に依つて、回收不可能と爲つたものゝ內、最も確實なる分を選び、之に對して、資金を融通することゝしたならば、平生確實なる營業方針を持する銀行は自ら準備金を豐富ならしめて、貸出に力を致すを得る道理である。獨逸が歐洲戰爭の當初、帝國銀行を事實上開放して、極度の通貨膨脹を敢てした結果、支拂猶豫法制定の必要に接しなかつた事實や、英國が支拂猶豫法制定と相俟つて、通貨銀行券法を制定し、通貨の增發に依つて、銀行に對して支拂準備金を豐富ならしめる道を開いたことを考へたならば、我國に於て支拂猶豫法を制定したのみで、金融機關の活動を期するのは、事實に於て無理であると認められる。

茲に於てか日本銀行は九月十日同銀行の將來に行ふ營業方針として、擔保品の種類や、取引先の範圍に就て、從來取つて居つた制限を緩和し、時には無擔保を以つてしても、資金を融通することを聲明するに至つた。此聲明が實現される以上は、市中諸銀行にして苟も相當の價値ある有價證券なり、商業手形なりを所有する場合に於ては勿論、平生の營業振りに於て、或る程度の信用ありと認められる場合には、其資產又は信用を利用し、日本銀行に就て資金の融通を仰ぎ得る次第であつて、斯の如く爲れば、預金に對する支拂準備金を充實することに就ては毫も意を勞するを要しない、如何なる銀行も日本銀行に借入金を仰いで、其充實を謀り、而して自行の取引先に對して、資金の融通を自由ならしめるを得るであらう。然しながら斯る金融上の計畫が進行する一方に、日本銀行が銀行券に對して、正貨兌換を行はず、又政府が金貨の輸出を禁止する從來の方針を續行する以上は、我國の通貨制度は事實不換紙幣流通の狀態と爲ることを免かれない。震災火難の善後策として、日本銀行が

營業上に開放的方針を取ることは、已むを得ざる所であり、又寧ろ時機の宜しきを得たものでありと認められよう、然も一方に不換紙幣同樣の狀態を以つて、銀行券の增發される場合に、政府なり、日本銀行なりは短時日の後に之を回收して、通貨の流通をして平靜なる狀態に復歸せしめる成算があるかどうか、若しも此邊に成算がなく、通貨が今回の非常處置を機會として膨脹したならば、必ず其價値に低落を惹起し、物價の騰貴を誘致することは、免かれ難き所に屬する。如何にして物價の騰貴を抑制するかと云ふことも今日に於て豫め考量しなければならない問題である。而して斯く日本銀行が取引先の擴張、擔保物の制限緩和、信用取引の利用に依つて、大に金融上の要求に應ずる覺悟であるならば、何故に支拂猶豫法の制定を必要としたのであるか、日本銀行に右の如き覺悟があり、又其覺悟の下に通貨が膨脹するものとすれば、債務者は債權者の要求に接して之に應ずるに苦まざる道理である。果して然らば支拂猶豫法は殆どあらずもがなの擧と思はれざるを得ない。

東京市に於ける事業の復興を促進する爲めに、成る可く金利步合を低廉にして、金融の狀況を緩漫ならしめることを必要とする說がある。事業家の立場から見て、此種の要求は必ずしも無理ならざるやに思はるるが、金融の大勢は一片の希望や、情弊に依つて左右されるものに非ずして、自ら之を律する定則がある。第一諸銀行が從來貸付の擔保品として居つた物件の內には、今回の震災火難に依つて、著しく價値の減損したものゝあり、一方に、手形の支拂人にも、亦支拂能力を失つた者があり、是等の二點は自ら將來に於ける銀行の融通能力に對して、大なる妨碍と爲らざれば已まない、第二日本銀行の貸出方針の緩和されることは、銀行の融通能方を增進するに相違ないが、日本銀行と雖も、從來通りの金利步合を以つて、資金の融通を爲す以上は、必ずしも金融の大なる緩和は望まれない、第三茲に於てか一部の論者は日本銀行其ものをして金利を引下げしめ、以つて金融緩和の大勢を誘致せしめようとするのであらうが、無條件に玉石を混淆するが如き融通を敢てしようとするのが決して日本銀行の所謂解放方針の趣意ではあるまい。一方に資金の融通を行ひながら、尚ほ其融通を受ける者をして相當の高い金利を負擔する實力ある銀行に限り、斯くて日本銀行の資金の融通される一面に於て、通貨の濫に膨脹することを制止するのが根本の方針であらねばならぬとすれば、將來に於て金融緩和の事相の來ることを待望するが如き、當れりとするを得ないのである。

生產業の復興策

東京が從來帝國の首都として、文武官僚を集め、商工業の事務に於ける中心地として、多數の俸給衣食者を養つたことは、自ら東京をして一個の消費地たらしめる所以と爲つた。固より東京市內にも、近郊にも幾多の製造工業は經營されて居るが、其產出する物資よりも、遙に多量の物資が市民に依つて消費されるのであつて、隨つて關東全體の地方は悉く東京市民の需要を充す目的を以つて、製造工業の經營に從つたものと云へる。而して東京市內の問屋と地方製造業者との取引は純然たる信用に基くものであり、製造業者は問屋に製品を送り、時期を定めて其代金を受取り、次の季節に於ける生產に當る次第であつたのである。然るに今回の災厄に依つて、東京に所在する是等問屋の多くは多大の損害を蒙り、支拂不能の狀態に陷つたとすれば地方製造業者は如何にして問屋に就て、賣掛代金を回收するを得るであらうか、支拂猶豫法施行期限內は回收の道なきこと勿論であるが、其期限經過後に於て、果して回收されるかどうかも不定である。而して斯る債權にして回收されないとすれば、東京と取引の關係を結んで居つた地方の製造業者は忽にして次の季節に臨んで、生產を續行するに必要なる資金に缺乏せざるを得ない。資金の供給の缺乏する結果は必ず生產の減縮であつて、世人を擧げて、生產の增殖を待望して、已まざる際に、反對の事相を生じ、殊に其事相が日常生活の必要品に現はれるようなことであつたならば、國民生活に甚だしき支障を及ぼさざるを得ない。隨つて斯る弊を避け、東京に起つた大災厄の影響に依つて、地方生產事業に打擊を加へることなからしめるには、地方製造業者が東京の問屋に對して有する債權に向つて、銀行をして資金を融通せしめる道を講じなければならない。卽ち斯る場合に金融の便を付けるには、地方製造業者をして東京の問屋に有する債權に對して手形を振出させ、此手形を銀行に就て割引させ、更に日本銀行に就て、再割引に付することを要するのであるが、此手形が如何なる程度に於て、支拂能力を備へるかは一に問屋の營業狀態を恢復する實力の如何に依り、更に此實力は東京の銀行が如何なる程度まで、問屋の營業恢復を援助するかに依つて、定まるのであつて、頗る不定であるとしなければならない。

今後の公債政策

右に論ずるが如く、東京市をして震災火難の損害を免かれしめるには、市民獨自の力に依賴する所も多いが、同時に國家の援

助を煩はさゞる可からざるもの、少なしとしない。火災保險問題の解決、住宅の建築、金融疏通、商業取引の復活等數へ來れば、盡く國家の負擔に歸するし、更に東京市の改造に至つては、自治體の財源に依賴す可きもの頗る多い。如何にして是等の事業に要する財源を調達す可きやと云へば、何人も指を公債の發行に屈するであらう。然も我國の現狀に於て、民間の金融市場なり、事業界なりに甚だしき支障を及ぼさずして、能く幾何の公債を發行する餘裕ありとするを得るであらうか。公債は平生國家が生產的事業を經營する財源を調達する爲めに、發行する場合もあるが、同時に國家非常の事變に備へる目的の下に發行されることもあり、國家信用の利用と云ふ點から考へれば後者の場合を以つて、最も好く公債利用の本旨に適つたものと云へるのである。隨つて國家は平時に於ては、勉めて公債の利用を制限し、事變に臨んで、其利用される餘裕を大ならしめることを得策とする。然るに我國從來の財政策には此點に於て、大なる間違があり、殊に原高橋兩內閣が政友會の所謂積極政策を實行する爲めに、連年公債を發行したことは、我國の公債現在高を增加せしめ、今や國庫に餘程不利の條件を以つてしなければ、公債を發行するを得ない一方に、從來發行された公債の內、償還期限の到來するものも、亦少なからずある。即ち斯の如き財政策を以つてしては、政府自ら求めて公債利用の餘地を狹隘ならしめるものに外ならない。一國に何等の急變なく、常に正常の狀態を以つて、進んで行くならば、何等問ふ可きものはないが、現に今回の如き震災火難に接して、其善後處置を果す爲めに公債を發行する必要を生じた場合には、吾人は何としても公債政策の多年に亘つて、誤まれることを痛感せざる得ない。殊に東京市の殆ど全部が焦土と爲り、金融機關の運用思はしからざる今日に於ては、大阪の財力に依賴して、公債を募集するの外に道はない。然しながら大阪の財力に依賴しようとするものは、獨り公債發行の必要に迫られる政府のみに止まらず、都市計畫を遂行しようとする市政府も、事業恢復の業を進めようとする民間事業家も盡く然りとすれば、大阪は全國の金融に於て、重要なる地位を占めると共に、金融の繁忙を感ずること、一方ならざるに至るであらう。斯くて政府としては從來の財政計畫に於て豫定された公債財源の事業費に大削減を加へて、公債發行の必要を省約し、之に代うるに震災火難の善後公債發行を以つてし、其利率を相當に高くして、東京以外の諸地方に於ける國民の貯蓄を奬勵し、應募の財源を作り出しつゝ募債の目的を達する方針に出でなければならない。然も募債の金額にして數億圓は愚、十數億圓にも達する場合には、當時の

國民的貯蓄に依つて、盡く應募の財源を收めることは困難であつて、斯くては勞公債の發行高の增加するに隨ひ、銀行を介して通貨の膨脹を惹起さゞるを得ざるに至るであらう。即ち公債應募者は其公債を銀行に擔保として提供し、之に對する應募金を銀行から借入れる、市中銀行亦結局公債を日本銀行に擔して、同銀行の發行する銀行券を借入れ、之を支拂準備金として、信用を膨脹させる基礎を作ることゝ爲るのであるから、公債の發行は必ず略ぼ同額の程度に於て、通貨の膨脹を促すことゝ爲らざるを得ない。歐洲戰時交戰諸國の總てを通じて公債の發行と通貨の膨脹と相並び行はれたのは、要するに如上の道理に基いたのであつて、我國に於ても今や同樣の事相の起ることを免かれない。日本銀行の開放的方針が通貨の膨脹を促すこと、上記の如くである其上に、政府の公債發行は更に此勢を助成せしめようとする、我國に於て通貨の價値の低落することは免かれざる勢に屬するとしなければならないのである。

外債募集說

斯る不良の影響を緩和する目的を以つて、外債募集說の主張されることも、亦怪むに足らない。國內の財力足らずして、災害の善後公債を外國に募集する、而して外國は對手國に同情を寄せて、之に應募すると云ふことは、從來屢々支那と歐米諸國との間に行はれた事例であつて、日本が今之に追隨するのは、如何に震災大難の及ぼした影響の重大なるものありと云ひながら、吾人の感情上、面白からずとする所である。又外債を募集する場合に、其對手國を英國にした所で、合衆國にした所で、七八分の高利を負擔しなければならないことは、過日來行はれた東洋拓殖、東京電燈諸會社の外債發行に徵して、之を知るに難しとしないのである。然らば政府としても強いて外債に依らず、相當の高利を負擔することを覺悟し、罹災地以外の地方に於ける國民の貯蓄を奬勵しつゝ、內國債を發行することが寧ろ財政上に於て有利であり、我國の體面を保持する所ではあるまいかと考へられる。今回の震災火難に對して、諸外國の我國に寄せる同情甚だ熾烈であつて、少なからざる金品を寄贈し來るものゝあることは、我國民の感銘牢記する所であるが、此同情を財政上に利用して、外國に善後公債の應募を求めんとするが如きは、大國民を以つて居る我國の態度を以つて許すを得ない。東京市に於ても、直接の災厄を免かれた市民は多少あり、更に大阪、名古屋、京都、神戶其他の都會の市民が中央首都の再建に殉するの決心を以つて、其財力を傾倒したならば、善後外債の發行と云ふが如き、事々に外國に依賴する態度を示す必要

はないであらう。殊に外國の同情を云々して、外債募集説を唱へるが如きに至つては、震災火難の大なる爲めに、精神に錯覺を來した餘りに出づるものであらうと想像する外ない。私は外債募集を以つて、我國民が內國債の應募に挺身の努力を致し、刀折れ矢盡きて後に、始めて行ふ可きものであると考へるのである。

京阪兩地の盛衰消長

從來東京と大阪とは經濟上の立場に於て常に併稱され、或る點に關しては、大阪は東京を凌駕するやに認められて居つたが、金融上の方面のみに就て見れば、大阪の東京に及ばざること少なしとしない。試に重なる項目を擧げて比較すると、

	東京	大阪
手形交換高（大正十二年中）	三四、〇〇七、八三五 千圓	一三、八一六、三七〇 千圓
銀行預金（大正十一年末）	二、一七六、五八二	一、三一九、二三三
貸出（右同斷）	二、二六五、五三〇	一、三〇四、〇七〇

と云ふ有樣であつて、大阪の東京に及ばざることの著しきものが認められた。唯工業地としての大阪が東京に比較して、聊か勝る所あることは、

	東京	大阪
工場數	八、九五七	八、六一三
事務員	九、四二八	九、四七一
技術員	九、三三二	六、五〇四
職工	一六八、九六一	二〇八、九四四
其他ノ從業者	七、六〇二	一〇、五〇三

の數字に依つて、之を知るを得る。要するに東京の強味は政治上の中心地として、中央政府が存在し、政府の費消する經費の多くが東京に撒布されることに存し、如何なる事業も多くの程度まで政府と交渉を持つことに依つて、繁昌し、存立する趣さあるに反し、大阪の強味は背後に九州、滿鮮の諸地方を控へ、廣く物資の販路を擴張するを得るの點に存した。即ち大阪は資金供給の點に於ては、東京に及ばないとしても、尙ほ其足らざる資金を集約的に利用して、其效用を大ならしめることに努め、斯くて工業の發展に資し、以つて工業地として優勝の地位を占める方針に出でたのであつて、現に大阪諸銀行の東京支店が概して貸出金に超過する預金を吸收して居るが如き、預金の一部分を大阪本店に運用せしめ、斯くて大阪の資力を增進する手段としつゝある證左とするに足りるのである。即ち大阪は資本供給の關係に於て、或る程度まで、東京に依賴する趣きを免かれ

なかつたのであるが、今回の事變後に於ては、此點に就て如何なる變化を生ずるであらうか。富を失ひ、人命を傷け、永く斯る損害から恢復するを得ない東京が總ての點に於て大阪に凌駕されるのは當然の數であつて、或は東京に於ける重なる商店會社の如きは、其本店を東京に置くことは、依然として昔日の通りであるとしても、其れは單に中央政府との交渉を行ふ爲めであつて、營業の大半は關西一帶を對手とする大阪に於て之を行ひ、隨つて資本金の如きも、多く大阪に向つて注入され、又大阪に於て運用され、益々大阪をして經濟上の中心地點たらしめるの勢を加へるに至りはしないか、恰も從來横濱に於ける重なる事業家が横濱本店よりも、東京支店に營業上の主力を集中し爲めに横濱をして空虚の都會たらしめたと同樣の關係が東京と大阪との間に生ずることは、何としても勢の避け難き所であつて、斯の如き場合には、經濟上の關係に於て、東京市の有する勢力は著しく減殺されるものとしなければならない。現に東京市會議員中の有志は此勢を憂へ、東京市復興の一條件として、事業家をして其本據を大阪に移さしめざることを決議したが、事業家の如き本來營利の欲求を以つて、唯一の信條として居るものであり、多年東京に本據を置いて、事業を經營しつゝあると云つても、其前身を尋ねたならば、越後の魚賣りもあれば、横濱の石炭擔ぎもあり、何れも一種の風來人であつて、東京に對して特殊の郷土的愛着心を持つものと思はれない、襲へる東京を見棄てゝ、榮へる大阪に事業を移すが如きは、彼等の爲すを憚らざる所であつて、現に新聞紙の記事に據れば、大倉某の如き此事を公言したるやに傳へられる。隨つて公共團體の決議を以つて、彼等の營利的欲求を抑制し右に行かんとするものを左に止めしむるが如き、至難の業としなければならない。然しながら既に震災火難に依つて、人命と財産とを奪はれた東京市が更に事業と之に從屬する資本や勤勞を大阪に移されたならば東京市の經濟的復興に大なる故障を生ずること論を俟たない、現に横濱市が生絲貿易の假令ひ一時なりとも　神戸に移ることを恐れ、當業者結束して、焦土の横濱に於て、生絲の取引を行ひ、以つて其輸出貿易の命脈を繋がうとして居るが如き、如何に事業の他に移轉することが土地の繁昌を傷けるかの一證左とするに足るであらう。

復興事業の急施を要す

茲に於てか如何にして事業の他に移轉することを防止す可きかと云ふ問題を生じるが、其れには東京市が急速に復興事業を進捗し、市内に留まる事業家をして或る利益を獲得せしめる手

段に出るの外に、良法ありとするを得ない。啻に事業の移轉する勢ばかりではない、人の移轉することを制するのも、焦眉の急務に屬する。既に東京市は震災火難に依つて、多數の人命を奪はれた其上に、地方に避難するものは海に陸に其道を求めて、連日數千の多きに上ると稱される。住むに家なく、喰うに食なき東京に於て、斯く退京者の多いのは當然であつて、斯くて食糧問題にも、失業問題にも多少の小康を與へる譯であるが、是等の退京者が地方に於て然る可き職業を見出して、農村を安住の地とするを得るかと云へば、農村疲弊の今日に於ては、斯る事を望み得ないのみならず、多年都會生活に慣熟した者が地方に於て程度の劣つた生活に安んずることも亦至難であつて、結局彼等は住み慣れた東京に歸還して、失業者と爲り、浮浪者と爲る傾向を持つのである。而して今日東京に殘留する勞働者の如き死體の收容とか、燒跡の取片付けとか其れ〳〵仕事を持ち平生よりも高い勞働報酬を受けて居るようであるが、本來一時の仕事であつて、彼等をして永久に其生を託せしめるに足らない。工場は崩壞し商店仕事場は灰燼と爲つた儘、永く復興を見るを得なかつたならば、都會に失業者の充滿するに至ることは勿論であつて、其狀況の如何に慘憺たるものであるかは、今日に於て之を豫想するを難しとしない。地方歸農論の如きは、此大勢を緩和するに就て大なる效果あるものと思はれない。從つて私は國家に於て、失業者を救濟し以つて社會生活の平安を期する見地から云つても、相當の規模の下に、救濟的工事を起す必要を認める。即ち燒跡を取片付けた焦土を以つて埋立地を作り、東京市將來の膨脹に應ずる用意を講ずるなり、東京灣に築港を計畫し、東京を開港場として、貿易上の取引に伴う利益を東京に占めしめるなり、適當なる手段は自ら見出されるであらう。此他諸官廳の新築と云ひ、東京市の管轄に屬する道路の擴張、公園の新設と云ひ何れも勞働者に對する需要を增進し、彼等の職業を豐富ならしめる方便であつて、之を實施したならば、地方に散逸しようとする市民の或るものを市內に留め得るであらう。大都市の要件は固より少なしとしないが、其最も重要なるものは人口の繁多なることであつて、此一事を缺いたならば、大都市の資格は缺けりとしなければならない、然も大都市の人口を夥多ならしめるには、其人口を給養する職業の存在することを必要とし、職業の存在には資金と經營能力と二者の相結んだものがなければならない。震災火難前の東京と今日の東京とを比較すれば、人口の劇減したことは、爭ふ可からざる所であり、而して昨今避難の目的を以つて、退京者の續出する其上に、東京に殘留する市民の一部が無職の儘の狀態に居ると

云ふことは、軈て東京市を衰微せしめる所以である。随つて東京市の再興を求めるには、宜しく市内に資金を充實し、事業を興起し、職業を豐富にして以つて多數の市民を給養する計畫を立てることを急務とする。東京市の經濟的復興策は此一事を要訣とするのである。

東京市民の戒愼を要す

顧みれば歐州戰爭當時から、大正九年の恐慌勃發に至るまで、東京市民の生活は如何なる有様であつたであらうか。一部市民の内には、物價騰貴に伴ふ生活の困難を苦痛とする者もあつたけれども、他の市民殊に聊かにても商工業に關係を有する者は好景氣の數年間を通じて多く浮華幻影にも等しい暴利を獲得し、之を不生産的方面に空費して、意に介しなかつた。國民の生活は其思想と共に、著しく堅實を缺き奢侈の風は殆ど極まる所を知らなかつた。大正九年の恐慌、之に次ぐ不景氣は聊か國民を警めたようであつたが、尚ほ既往數年間に亘つて、獲得された暴利の社會に殘存するものがある一方に、政府自ら年々の歳計に於て、巨額の經費を費消するものであるから、自ら國民の財嚢を豐にし、社會の一部には容易に勤儉とか、誠實とか云ふような風を生ぜず、世界を擧げて國民的努力の下に、戰後の恢復に忙はしき間に立つて、我國獨り自國の榮華を誇るの趣きであつた。其一端は歐洲諸國に於て、國民的疲弊に加ふるに、國民的節約の爲めに興行するに堪へない音樂師、舞踊家等が日本に來れば、東京市民は一夜に十圓内外の入場料を拂つて、彼等の技藝を鑑賞した事實を以つて、之を推すを得るのである。其他社會に不景氣風の吹き荒んで居るに拘はらず、奢侈品の賣行き頗る盛であるとか、國民に逸樂の風増長したとか云ふことは、常に識者の苦々しく感じて居つた所であるが、今や前代未聞の震災火難は東京に於ける流行の本源、奢侈の淵藪、逸樂の中心とも云ふ可き日本橋京橋を一日一夜の間に燒き拂つた。三越の大厦が燒け落ちた、白木屋の高楼が束の間に灰に爲つた、服部天賞堂御木本其他の店頭を飾つた金銀珠玉も其姿を沒した、新橋柳橋日本橋葭町赤阪の花柳界や、有數の料理店も盡く燒き拂はれて、其影だも認めるを得ない、帝劇、市村新富の大劇場を始め、寄席活動寫眞館の如き娯樂機關も烏有に歸するに至つた。斯くて今日東京市民の或る者が如何に美食を思ひ、奢侈を欲し、逸樂を希つても、其望みを果す能はさるに至らしめたのは、何事を吾人に暗示すると見る可きであらうか。私は平生から天の配劑とか、神意の啓示とか云ふことを信じないのであるが、今回の震災火難を以つて、天が東京市民積年の惡業

に對して、餘殃を下したものであると云ふ說に對して、多少の議論ありとせざるを得ない。奢る平家の久しからず、驕奢極まつて、哀傷の來るが如く、東京市民も正しく天の鐵槌を一下されて、心魂に徹する痛みを受けたものに外ならない。壞廢の東京市を復舊するのは固より困難であらう。然しながら市民が歐洲戰時から、最近に至るまでの成金氣分を脫し質實眞摯なる日本國民本來の氣風に立戾つて、數年間の努力を費したならば、此難事業に當るを得るものと考へられる。歐米諸國は一方に日本に同情を寄せながら、他の一方に於ては日本が如何に此難關を踰越するかに、注目して居ることであらう。然らば東京市の復興は正に列國環視の間に行はれるのであつて、其遲速巧拙は國民的榮辱の岐れる所としなければならない。左るにても近頃大分不景氣の絕頂に達し、此分で順調に進んだならば、景氣の恢復を見ることも遠くあるまいと想像された我國の經濟社會が今回の震災火難に依る富の大破壞に依つて、再び以前に倍する不景氣の境に陷り、物資の不足、生產の不如意、物價の騰貴、金融の梗塞、輸出の不振、輸入の超過、在外正貨の減少等經濟社會の人氣を挫折する事相の續出することは、吾人の堪へ難しとする所である。災害復舊工事の速進に依つて、社會の一部に大なる資金を撒布し、外見的に好景氣を裝ふことありとしても、他の一部には苛重なる負擔を加へて、其生活を脅迫することを考へたならば、利害果して何れに在りやを知るを得ない。我國民の一大試錬を加へられる時は即ち今日であるとしなければならぬ。

新東京の建設と東京ッ子の意氣

高島米峰

時正に、大正十二年九月一日正午、大自然、一たび激怒してこゝに、天柱摧け地軸折れ、劫火洞然、これに力を添へて、ここに、叫喚大叫喚、焦熱大焦熱の地獄を現出し、これがために家を失ひたるもの約百五十萬人、傷つきたるもの約二十萬人、

而して、或は燒かれ、或は溺れ、或は壓せられて、無殘なる最期を遂げたるもの實に十萬人、さしもに榮華を誇りし、東洋第一の都會大東京も、僅に、二夜三日にして燒棄し、その昔、日も月も、草より出て、草に入りしといふ武藏野の、その草の一もとをもとゞめざる、燒野が原と化し去りしのみならず。横濱に、鎌倉に、横須賀に、小田原に、凡そ、人間の手に成りしものは、美しきも、醜きも、善きも、惡しきも、眞なるも、僞りなるも、悉く破摧し盡されて、飽くまで、自然の猛威に征服せられ了りぬ。

自然と人間との爭鬪は、今に始まりしことにあらざるなり。原始時代は敢て問はず、少くとも、有史以來、吾等の祖先が、自然に對する不斷の爭鬪、或時は敗北し、或時は勝利を得、幾度か征服せられ、幾度か征服し、徐々に人間の實力を發揮して遂に今日の文化を建設することを得たりしなり。勿論、その間に於て、人と人との爭鬪も、亦決して少からず。或は榮え或は衰へ、或は興り、或は亡び、しかも人間の世界は、着々として進歩し、遂に、こゝに、燦として光を放てる、廿世紀文明の恩澤に浴するを得るに至りしなり。今、吾が東京及び横濱その他の都會が、大自然との戰に、脆くも地に塗れたりと雖も、一敗永久に征服せられて、再擧すること能はずと言ふが如き、致命傷的敗北にあらざることは、歴史の證明を根據として、何人と雖も、これを否むこと能はざるべし。

世界の興亡、人生の榮枯は、絶對的に、必然的に、豫定の宿命に基きて、支配せらるゝものなりとする世界觀人生觀は、單に、運命論者の獨斷とのみ斥くること能はざる、多量の眞理を含蓄す。されど、曾ては、不可解の世界と信ぜられ、神秘の境地と想像せられたるところに、斧鉞を下し、鋤犂を入れて、これを開拓し、これを耕耘し、以て世界を建設し、以て人生を創造したることを思へば、人間の力の、必ずしも、自然の力と、對抗すること能はざるものにあらざることを、看取し得るに難からざるなり。これを以て、古來、幾多の天災地變に遭遇して一時敗滅に歸せむとしたるものが、必ず捲土重來して復興し再造し、復興し再造する毎に、いよ／＼ます／＼、人間の力は強大となり、不可解の世界、神秘の境地は、次第に縮少せられざる能はざるに至りしにあらずや。吾等今、大自然の猛襲に逢うて、一戰にして慘敗す。されど、これがために、氣死意喪して自滅に甘んずべきにあらざるやもとより論なし。臥薪嘗膽はあまりに手ぬるし、即今直に起ちて、まづ復興し再造せざるべからず。

或は言ふ、大東京の三分の二を失ひ、殘餘の三分の一は、殆

ど魚の居諸にも比すべき底のみ、如何ぞ能く、復興再造の力あらむや。寧ろ、この際、遷都を斷行し、文化の中心を京都に、實業の中心を阪神に移すの可なるに如かずと。何ぞそれ、その言葉の揚らざることの甚だしきや。これを記錄に、徴するに、明暦の大火（明暦三年一月十八日、本郷丸山本妙寺より出火）は實に三日三夜に渉り、大名屋敷五百餘邸、神社佛閣三百餘宇、藏々九千餘棟、橋梁大小六十餘、市街の燒跡を道程に計算して二里八丁に及び、殊に二十日の夕刻より、北風大雪となり、これがために、辛うじて火を遁れたるものも、凍死するの慘境に陷り、寒熱兩難並び到りて、これがために死するもの凡そ十萬八千人といふ。實に、江戸の全滅なりしなり。しかも當時の爲政家、措置その宜しきを得、罹災者の救恤、市區の改正、建築の制限等、殆ど遺憾なきを得たると共に、當時の江戸ッ子、氣魄衝天、大江戸の再造に渾身の力を捧げ、能くその爲さむと欲するところを成し遂げ得たりしなり。當時の江戸ッ子、若し、自暴自棄して、再造に念を斷ちたらむか、謂はゆる江戸の發展は、これを見ること能はざりしなり。江戸の發展にして見ること能はざりせば、恐らくは、東京奠都も行はれざりしなるべく東京奠都にして行はれざりせば、誰かこの四里四方の土地が、依然として日も月も、草より出てゝ草に入る、武藏野の原の一角たらざりしを得たるべしと斷じ得むや。今の時、たゞ東京ッ子の努力は、遂に、江戸ッ子の努力以上のものたることを要すと謂ふべきのみ。夫の、謂はゆる遷都論の如き、實に一笑にだも價せざるなり。

これを聞く、米國桑港の大震大火（明治三十九年四月十八日）は、その被害その慘狀、今次の京濱地方に於けるものに比して遙に激甚なりしといふ。しかも、災後僅に五年にして、舊桑港に倍加するの形式と內容とを具備せる、新桑港を建設して、以て今日に至れるあり。もとより、米國の富力と、日本の富力とは同日に論ずべきにあらずと雖も、又、桑港の回復が、單に、富力のみに依つて、成就せられたりと見んは、餘りに皮相の觀察にして、吾等は、彼等桑港市民の間に貫流せる、一個剛健なる米國魂が、能くその富力を、有意義に活用したるものなることを見逃すこと能はざるなり。日本の富力、もとより頗る貧弱なりと雖も、一片耿々の丹心、愛市愛國の熱情に至つては、斷じて、米國民に劣るものにあらざるなり。內、この心とこの情とを作興し、外、英米先進國の富力を借り來ることを得ば、京濱の回復再造の如き、恐らくは、五年を出でざるべきを信ぜむと欲す。その間、京都は、比較的文化の向上を來すべく、阪神は比較的實業の殷振を來さむ。されど、五年後の東京は、依然と

して、日本文化の中心なるべく、五年後の横濱は、依然として全國貿易の樞軸たらむ。由來、悲觀は衰滅の因を爲し、樂觀は建設の緣となる。吾等は、この際、合理的根據の上に立てる大樂觀に住し、積極的態度を執つて、勇往邁進せざるべからず。冀くば、一時の窮乏に堪へ得ずして、關西に落ち延びむとする人々、それが、老幼病者にあらざる限り、斷々乎として、こゝに踏みとゞまり、自ら進んで、新東京建設の礎石を以て任ずるの覺悟なかるべからず。

百廿萬人の罹災者と言ひ、十萬人の死者と言ひ、京濱の全滅といふ。事は決して小少にあらずと雖も、しかも、日本全帝國の大を以て之を見れば、實にこれたゞ僅に一地方の事件のみ。たゞ東京が、日本の首都として、人に於ける頭腦の如き位置にあるがため、事態甚だ容易ならざるものあるなり。吾等の同胞は、神武以來、國難到る每に、必ず、擧國一致の實を示して、能くその難關を透過したる經驗に富む。これを近代に求めて、明治維新の大變革に於てこれを得、日清戰爭に於てこれを得、日露戰爭に於てこれを得たり。最近、歐洲大戰に參加したる時は、戰域に遠ざかり居たるがため、殆どこれを對岸の火災視して、却つて、中立國としての利益のみを得たるがため、敢て、擧國一致の氣運を作るの必要を感ぜざりしなり。然るに、今次の天災地變は、僅に一地方の出來事なりと雖も、その關係影響するところ極めて廣大にして、擧國一致の力に待つにあらずむば、到底、回復を見ること能はざるべきなり。果せるかな、國民迅に、怨親平等、互助協調の美德を發揮して、更に他意あるなし。看よ、山本內閣の將に成立を告げむとするや、世評紛々として、是非の數、未だ俄に知り易からざりしが、事變の動搖と共に、急遽組織せられたる新內閣に對しては、敵も味方も、鳴りを鎭めて、一意專心、無條件信賴を、不言の間に表明し、飽くまでこれを後援して、最善の努力を爲さしめむことを冀ふに至れるにあらずや。かくて、日露戰爭以來、久しく韜晦したりし日本國民の美點は、こゝに遺憾なく顯現し來りて、吾等をして、意を強うせしむること多大なるものあり。現內閣の諸公、亦能く、その任の重くしてしかもその道の遠きを自覺し、施設毫も遺算なく、措置聊も遺漏なからむと策勵し、その既に發表し實施したるところのもの亦、略ゝ吾等の求むるところのものと相距る甚だ遠からざるは、吾等の大に欣快とするところなりとす。

されど、善後の方策は、もとより一二三にして足らず。殊に、罹災者の救濟は、その最も急速なるを要すること、敢て論なし。しかも、要はまづ、人心の安定せしむること以て、第一となす

べし。而して、火災保險料の全額支拂の斷行と、銀行業者に對する徹底的後援とは、正に、經濟上より人心を安定せしむる、最善の方法なるのみならず、同時に又、罹災者救濟の根本策たらずむばあらず。單に、銀行業者のみを後援するも、火災保險料の支拂が、二割若くは三割に制限せられむか、銀行は、貸附金の回收を爲すこと能はずして、預金の拂戻のみを請求せられ到底、業務を繼續すること能はざるべきなり。一面、火災保險料の支拂を受くること能はず、他面、銀行の破綻者續出すと言はゞ、罹災者、何に依つてか救はれむ、人心、何に依つてか安定せむ。而して、新東京建設の意氣沮喪し、回復の期徒に遷延して、大日本帝國の面目を損すること頗る多大なるものあらむ。

現當局は、國民と共に、現在に即して永遠の大策を樹立し、將來を慮つて當面の問題を處理せざるべからず。例へば、新東京の大都市計畫の如き、これを無遠慮に斷行し、理想的都市を實現せしめむがためには、まづ、市内の土地を悉く買收して、市有となすことを先決の事項となし、それに伴ふ必然の結果として、東京灣築港を行はざるべからず。これを行ふには、まづその埋立て材料としては、燒跡・堆積して、個々に處理すること到底不可能なる、瓦、石、煉瓦等の燒け殘れるものを利用すること、實に一擧兩得にして、これが運搬のためには、特に燒失電車を改造して、これを活用し、且つ、失業の勞働者をして、その作業に從事せしめば、更に、一擧にして三得四得を收め得べきなり。而して、これ等計畫の實行に要する費用は、幾十億圓なるかを詳にせずと雖も、火災保險料の支拂に要するもの約二十二億圓として、會社の支拂能力四億圓を差引き、十八億圓は當然、外債に依るの外なかるべし、土地買收は、愛國公債を發行して、これを交附することゝなすを、最も適宜の方法なりと信ず。もとりよ、善後のために要する資金は、二十億三十億にして足るや否やを知らずと雖も、國力を盡くして足らざるは、これを外國の力に待たざるべからず。英國の如き、米國の如き恐らくは、極度の好意を表して、出來得る限り、吾國の募債に應ずべく、かくて、日本が、英米兩國殊に米國より、好意に基く多額の債務を負ふに至らば、自然の結果として、日米親善は、期せずして實現せられ、米國に於ける排日運動は、或はこの機會を以て、根絶するに至るべきか。事變後旬日を過ぎざるに、支那に於ける排日が、殆ど終熄せむとするの事實より推斷して、米國に於ける排日の運命を、卜し難しとせざるなり。若し果して、此くの如きを得むか、啻に、日本の幸福のみならず、實に、世界の平和のために慶せざるべからざるなり。

飜つて思ふ、大自然、何の甚くところありてか、激怒して、特

に日本國民にこの災危を降せる。或は曰はく、天災地變は偶然の事件にして、何等の寓意なく、何等の意圖あることなしと。果して然るか。輓近、吾等の同胞は、その思想に於て、利己的個人主義にあらずむば、則ち破壊的過激主義、その生活に於て、奢侈贅澤にあらずむば、則ち淫蕩頽敗、國家を呪ふものあり、政府を無みするものあり、人倫を紊るものあり、道德を壊るものあり、宗教家腐敗し、教育家墮落し、忘恩背信の徒横行し、奸佞邪曲の輩濶歩す。識者、ために、亡國の憂なからざるを得ざりしなり。この時に當り、この空前の災厄、突如として天降地湧す、これを天譴となし、これを佛罰と言ふ、國民眞に、しかく痛切に内省し、しかく至心に懺悔し來らむか。蓋し、日本は永久は救はれむ。若し、國民にして、この内省と、この懺悔とを缺かむか、縱令、新東京が、形式に於て、舊東京に倍加するの偉觀を呈し來ることあらむも、たゞこれ、煉瓦と石と鐵と木材との結合にして、畢竟、睛を點ぜざる畫龍に同じく、魂の拔け出でたる佛像に等しく、觀賞するにも足らず、禮讃するにも値せざるべきなり。

嗚呼。明治維新の形骸たる東京市は、その建設者たる元勳諸公と共に終始せり。その精神を繼承して、更に、大正維新の大業を完成せむこと洵に、これ吾等の任務ならざるべからず。而して、まづ、その形骸たる、新東京市の建設に即して、その眞生命の擴充と躍進とを期せざるべからず。舊東京市民諸君、果して能く、その責を全うし得るや否や。日本國民、又果して能く、東京市民を後援して、その目的を達成せしめ得るや否や。今や、吾等は、此の一大試練を經べき時機に際會しつゝあるなり。冀くば、共に相携へて、最も勇敢に邁往直前し、大正東京ッ子の眞面目を發揮せむかな。（大正十二年九月十三日午前三時、東洋大學門内に、夜警の任務に服しつゝ。この夜露滋く、冷氣肌に透る思を、露宿せる罹災者諸君の上に、寄せざること能はず。）

政變每に暴露さるゝ我政界の變態

我政界の實狀

文學博士　三宅雪嶺

日本では家族的關係を國家社會の事に及ぼすの勢が尙ほ頗る盛であつて、權利義務といふよりも、溫情主義を尤もと思ふに傾く。勞資協調といふのもそれからであつて、政治上に著るしい變遷あるに拘はらず、その形跡が明かであり、只次第に制度又は習慣で定まる所を認めようとして居る。家族的の溫か味は人情の美はしい所であつて、父は子の爲めに匿くし、子は父の爲めに匿くすといふをも許して居る。魚で云へば空洞のやうなものであつて、隱れ家が無ければ、その魚が生活に惱まずに居れぬ。

然し人情の美はしい所、情弊の積み易い所であつて、狹い家庭にこそ美はしく行はるれ、幾百萬の人口で困難になり、幾千萬となつて愈々困難になる。强ひて家族的關係を押し及ぼせば美はしい情緖よりも忌はしい情弊を積み重ね、動くべき機關が動かず、動いてゝ不足にならうとする。何處でも全く人情を取除いたのがなく、嚴正なる法治國でも、幾分か之を加へて居り、それほど法制の整はぬ所で人情負けするのが無理もなけれど、善い方面の現はれるに先んじて、早くも惡い方面が表はれやうとする。

明治二十二年憲法發布あり、その關係者は半信半疑の眼で將來を眺め、兎も角も眼前の勢に應じ最善を盡くさうとした。時の內閣は卽ち黑田內閣、超然としてといふ語を使用し、超然內閣と稱せられた。黑田首相一人の考へでなく、內閣關係者一同にさう認めたのである。大隈外相は何れ位に考へたか、條約改正に臨み、緣故ある改進黨が活躍したが、政黨內閣の世に望み

難いのを承知したらしい。行つて出來ぬ事もないとしたらうが、黒田内閣の中で行ひ得べくもないとした。政黨と關係なく超然を當然とした。伊藤、山縣等は併ほ更らであつて、どうして政黨内閣を造るか、造らうとして造れぬでないかと云ふを憚らぬ。伊藤はその儘で何時までも續くものとせず、政黨が善くなりさへせば、政黨内閣も宜く、之を守り立てる必要もあれど、自由黨でも改進黨でも、餘りに御粗末であり、困つたものとした。山縣は勿論かかる手合に政權を渡すべきものでないとし、一度び政黨が權を握れば奈何なる事を爲すか測り知られぬと言ひ、同僚は多くその心得で居る。さういふ時代では内閣組織は或る元老連、即ち伊藤山縣等の勢力爭ひに出でて居る。是等の人は國家の爲めに最善を盡くさうとし、如何にすれば宜いかと心配し、出來るだけの事を爲すけれども、人の力に限りあり、飛び離れた名案も出ず、やはり有り來りのやうなものになり、例により例の如く、子分を配置して、其處に弊害が積もらうとする。伊藤は子分を養ふの意なく、適所に適才を配置しようとするけれど、やはり好き嫌ひがあり、お太鼓が潜ぐり込んだりもして、虎の威を藉り、面白からぬ事をする。山縣は軍隊的に子分を配置し、已れの系統に屬せぬものが加はる隙の無いやうにし、山縣の眼鏡に叶へば、大抵のものが明けて通さねばならぬ。山縣自ら衷心憂慮し、何とかして國家の爲めに盡くさうとして居るけれど、已れの子分の善からぬ事を爲るのを防ぎ止めるまで手が屆かず、少し位已むを得ぬとし、眉を顰める位のものである。

伊藤でも山縣でも、その同僚でも、子分の惡い事をするのは政黨員に比べて遙かに優してあるとし、政黨員と云へば掏摸も同然に見做した。流石に伊藤は餘り人の分け隔てせず、從來の成り來りを見、政黨員とて惡い者ばかりでなく、何うせ憲政に政黨を重んぜねばならず、政黨の首領に責任を有たして、やらすのも宜からうとし、其處で大命が大隈板垣の二人に降り、憲政黨内閣を組織する事になつた。いろいろの事情あるけれど、政黨内閣を促進するの企てであつて、若し時の憲政黨が夫れ政黨らしい振舞ひを見せたなら、何の文句ありやうないが、隈板の二人が各自の系統と共に相爭ひ、何とも始末に終へぬ有様である。若し他より突つかなんだならば、併ほ幾らか續つたらうが、内輪破れを煽るのがあるので、一通りの騷ぎでない。山縣側ではそれ見たかと云ひ、一時政黨内閣が取消しになつた。伊藤は大隈板垣が下手な事をした、も少し、仕様がありさうなものである、吾輩ならば遣り様があると云ひ、いろいろと話しが出で、揃つた揉んだの末、自由黨を解黨し、政友會を造る事

になり、大いに政友會內閣を組織した。然し出來上つた政黨は自由黨に官僚氣分を加へたものであつて、それが模範的政黨かと云へば伊藤ら苦笑ひせずに居れぬ。さう早く出來るものかと云ふに過ぎぬ。山縣が貴族院に手を廻せば、議會の通過が覺束ない。それで山縣が政黨なしで內閣に立ち得るかと云へばさうでなく。多數黨と妥協する外なく、剩さへ買收の甚だしきに及ぶ。政黨內閣でも宜くなく、超然內閣でも宜くなく、入り亂れて混血兒の形になつて居る。伊藤山縣が局面より遠ざかり、西園寺と桂が代つて出で、前よりも政黨に重きを置き、西園寺の如き明かに政友會を基礎にした。桂は初め政友會と妥協したけれど、買收費が嵩み、同じく金を用すならば、新政黨を造るに若くはないとして、同志會を造つた。即ち後に憲政會と變遷したものである。

ところで政黨がそれほどの力を得、その首領が直ちに內閣組織の大命を拜するかと云ふに、首領と同等以上と見做さるゝ元老が居り、之れに諮らねばならぬ。元老自ら國家を以て任じ、至尊の御諮問に應じようとするが、政黨の弱點をも認め、政黨に於いて處置に苦しむを免かれぬ。元老が力有るのか、政黨が力無いのか。政黨が力無いとは何事か。あれだけ衆議院に多數を制しつつ、少數黨同樣に看做さるゝは何の爲めか。多數黨が眞に議員自らの力で多數になつて居るならば、何人もその力を認めずに居れぬ。衆議院を解散しても、依然多數を占めるとあつては、その同意を得ずして政治を行ふ事が出來ぬ。貴族院で何を爲るとも、衆議院で堅く執つて動かねば何うする譯にも行かぬ。政黨の力は其處に現はれるのであるけれど、從來の政黨はさうは行かぬ。多數黨と稱しても反對黨となつて選擧を爭へば、政府筋の手心で、少數黨に變ずるの虞れがあり、動もすれば半數に減じてしまふ。政黨がさういふ狀態である間、元老が必要と見られる。政府は政黨を大きくする事も出來、小さくする事も出來、內閣に立つと否とで勝敗が決するとあつては、一の政黨で儲て得、情弊を醸す後、他の政黨で取代へ、前の情弊を滅ずるのも利益ないとせぬ。元老も其邊に見る所あり、或る政黨で勝手な振舞ひするやうになれば、漸く之を厭ひ、他の政黨で取代へたら善からうとするやうになる。第一次山本內閣が多數黨なる政友會と共にしたが、總辭職の餘儀なきに終り、續いて起つた大隈內閣が衆議院に多數を制しながら、同じく總辭職の餘儀なきに至つたのもさうである。總ての多數黨も政府黨たるを失ふと共に脆くも少數黨に變じて終ふ。少數黨が多數黨に變ずるにも、政府黨としてであつて、政黨の幹部は常に之を考へ、政府黨としては、何時までも政府黨で續かうとし、反對

黨としては、如何なる手段を以つてしても政府黨にならうとする。政黨自ら多數を占める力無くては首相候補者を奏薦する元老に依賴し、或ひは元老を取捲く連中の諒解を得るに努めて止まぬ。元老連が次第に凋落し、今は西園寺松方が元老、平田清浦等が准元老と見られるが、何れも多少國家の上より考へ如何にするのが最も善いかと心配する。時として無理な事もするけれども、割合に好い方へと着眼し、幾許か政權を得るものの弊を矯める事が出來る。政友會を叩きつけて憲政會を大くし、憲政會を叩きつけて政友會を大くするなど、悉く豫定の行動に歸するでなけれど、幾許か政界に動きをつけ來つて居る。

多數黨なる政友會を基礎とする高橋内閣が、改造非改造で分裂しては、何と始末を着くべきか。衆議院に於ける數より見れば、明かに多數黨である。それで内閣を組織し、それで持ち切れぬとあつては政黨の腑甲斐ないのも餘りに甚だしい。甚だしいけれども事實である。其處で高橋内閣の一閣員加藤を首相として貴族院内閣を組織し、政友會で自ら政府黨たるを標榜したが、その加藤が病沒した時、憲政會は憲政常道論を唱へ、吾黨の總裁が大命を拜すべしとも、政友會が之を聞いて同じく憲政常道論を唱へ、吾黨の總裁が大命を拜すべしとし、憲政常道論で何處に決すべきかが分らなくなつた。其處で元老准元老が第二次山本内閣の組織を是認し、政友會に據らず、憲政會に據らず、事によつては革新倶樂部が最も便宜を得さうにしたのは、勢の移り變りに着眼した所を認めねばならぬ。西園寺が政友會に深い緣故あつて、それで山本の自由に委した所は、現在の政友會で到底思はしく行かぬと見て取つたのであらう。若し政友會總裁高橋が大命を拜したならば、内閣組織について黨員内に一大紛擾を生じたらう。幾人かを除名して何とか收りが着くとし一騷ぎを免かれぬだけの事があり、場合によつて醜體を暴露せぬと限らぬ。何にしても明年の總選擧で政黨の分野如何を見るのが可いとした。勢の自然とは云へ、元老准元老として一種味ある行動に出でたのである。

政黨が自らの力で多數黨たるを得ぬ間、元老准元老が差出がましい事をせずに居れぬやうになつて居る。伊藤と山縣とが爭ふた時、政黨が未だ整はず、此の二人が政界の中軸のやうに見え、後に政黨が整ふに順ひ、元老の手加減が減じ、それでも尚ほ政黨が政府の力を藉らずして多數黨と成り難く、政友會も憲政會も藩閥なき米澤の平田の門を叩いて已まぬ。革新倶樂部が何の力あるか、革新の實を擧げ得るか、覺束ない限りであるが、既成政黨自ら改造を思ひ立たねばならぬ勢になつて居る。若し政黨が自らの力で政界に地歩を占め、何んな迫害を受けても、

敢て屈せぬとなつては、元老准元老もその代表者を首相候補者に奏薦する事にならう。それまでは元老准元老が政黨毎に顔出しする事になつて居り、之れまで甚だしく誤まつた事の少いのを何よりとする。人爲的に政黨の消長に力を加ふべきでないとしても、現在の政黨では打たれても叩かれても仕方なくなつて居る。それが改まるまで、元老准元老の役目があるとして宜い。全く政界に利益ないとせぬが、官僚が元老准元老を利用し、利權を貪るのに困る。利があつても害と差引きして、如何になるかが疑はしい。成るべくその害を少くするやうに望まねばならぬ。

憲政常道論と山本内閣の使命

法學博士　吉野作造

一、

政變毎に世人はよく憲政の常道を云々する。憲政の常道が毎に妨げられずに行はれん事は予輩のもとより冀ふところであるが、世間の所謂憲政常道論には隨分誤解もあるやうだ。此度の政變、――特に山本内閣の出現を予輩の憲政常道論からはどう觀るかを少しく考へて見たい。

二、

加藤内閣崩壞前に、來るべき新内閣如何の推測に關し既に二つの説があつた。一は現内閣員中の一員を首相の位に昇任せしめてそのまゝ内閣を繼續すべしといふ説で、他は總辭職説であつた。而して前説が遂に行はれずして總辭職を見るに至つたについては、此所に一つ見逃すべからざる我憲政運用上の一大鐵則の潜勢力を認めずには居られない。それは内閣はもと首相一人に對する　陛下の御信任に基き存立するものにして、首相の推薦にかゝる閣員は首相に對する御信任の反射として僅かにその任に居るものであるから、首相の死は即ち　陛下の御信任の直接の對象物の消滅であつて、内閣は當然辭職せねばならぬ道理だといふのである。憲法の法理論としては兎も角、政治運用の

實際原則としてかくの如き專制時代の舊思想の横行を見るのは驚くべき事實といはなければならない。單純平明な理論からいへば、一旦國政を托せられたる内閣てふ合議體は、その一員——假令如何に主要なる地位にあるものとしても——の死亡に因つて遽にその責任の解除せらるゝものと見るべきではない。無論臨機應變の例外はあり得る。けれども原則としては、一人を昇任せしめてそのまゝ内閣を繼續するといふのが、紛ふかたなき憲政の常道といはなければならない。然るに斯くの如き議論は、加藤内閣の内部と加藤内閣の存續を利とする政友會内の一部とから、恐る／＼說かれたのみで、殆んど眞面目の問題とならなかつたのはどうしたものか。總辭職說の中には一旦辭職した後別に同じ與味のものに大命の下るやう運動して、そして其儘從來の内閣を實質上繼續せしめやうと試みた横着者もあつたさうだ、が主としてはその後釜に据はらんと躍起となつた憲政會側から唱へられたに至つては沙汰の限りである。憲政會はこの點に於て全然憲政の常道を失して居るの譏りを免れない。

併し乍ら概して之をいふに、世間の人氣も總辭職說を迎へて怪ます、昇任繼續說に殆ど一顧も與へなかつたについては、こゝに又我々は我政界の一變態たる所以を顧みねばならぬ。民間の輿論が斯くの如くなる所以は、總辭職を正しいと信じて居るからではなく、寧ろ首相を失つた内閣の勢力に信頼し得ないが爲めであらう。我國の内閣は常に主として首相の個人的勢力をその根柢とする。國民の實質的後援の上に不動の基礎を置かない内閣は何時もこの同じ運命に陷る。こゝに我國政界の變態たる所以がある。この變態を何とか始末せぬ限りは、憲政の常道論も實は常に空文に終るのである。

三

所謂憲政常道論の一番喧しく論ぜられたのは、加藤首相薨去の當時であつた。此時の常道論はいふ迄もなく政黨者流の主張であつて次の内閣は政黨をして組織せしむるが常道だといふのであつた。尤もその間には憲政會が立つのが常道に合するとか政友會が立つのが當然だとか、我田引水の論が互に交換されたやうだが、それは何方でもいゝ。予輩の見地からすれば政黨が立つべきだといふ議論が未だ成立たないと信ずるからである。斯くいへば人或は予輩を目して超然内閣の謳歌者に逆轉したと誤解する者があるかも知れないが、決してさうではない。多年主張し來れるが如く、理想としては今尙政黨内閣論者であるが、現今の政黨にはこの常道に由る權力の附托を受くるの資格がないと信ずるからである。

抑も現代に於て超然内閣を當然の事理と認む可らざるは最早論ずるまでもない。併し乍ら其反對に政黨内閣たらざる可らずとする本來の根據は何所にあるか。其根據を究めずして只漫然政黨内閣々々々々と騒ぐは、例へば田夫野人の流行に附加雷同して淫祠邪神に走ると擇ぶ所がない。改つて講釋するまでもなく、政黨内閣を執る根據は民意の忠實なる代表たる所にある。多數の民衆は結局に於てあざむくべからず、民意に根據するの主義を徹底せしむる限り、政治の運用は始めて道徳的要求に合致する。要は政權の運用の道徳的に行はれるとが根本の大事なのだ。この根本要求が略々滿足に疏通せられ、政黨も兎も角この道徳的要求と伴つて行くといふ條件の上に、始めて政黨内閣論は成立ち得るのである。如何に有効な營養物でも病人には時として害になる。普通の健康といふことを先決の條件として始めて云々の營養物を攝つていゝか惡いかゞ決まる。我國の政界はこの意味に於て果して健康狀態に在りといひ得るかどうか。

一部の人はまだ普通選擧にもなつてゐないから民意は完全に代表されないといふ。選擧權者の數に限りありといふとは、政界腐敗の一重要原因ではある。併し假令普通選擧が行はれてゐないとしても、その限内に於ける選擧が公正に行はるゝなら、政黨内閣で行に妨げない。予輩の最も今日の政界に遺憾とする所は、選擧權者の數に限りあるよりも。寧ろ選擧が常に公正に行はれず、政黨の勢力が斷じて民意の表現にあらず、却つて不正の手段により民意を蹂躙することによつて强てもぎとつた勢力たる點にある。故に曰ふ、我國に於て今日直に政黨内閣論の文字通りの實行は好ましくない。憲政常道論の根本基礎が政治と道徳の諧調にありといふを許すなら、我國に於て今の所政黨内閣を否認するのが常道だ。若し政黨内閣を常道だとする月並の說を暫らく執るなら、この意味の常道は現に我國の變態政界に暫らく適用を許さないと云ふことも出來る。何れにしても憲政の常道だから政黨に内閣を作らせなくてはならぬといふ說は淺薄皮相の妄斷だ。

四、

現下我國の政界に最も必要なものは何か。政黨を内閣に立てて苦が〳〵しき經驗を再び繰返すことではない。政界を廓淸して所謂常道の滯りなく行はれるやうな健康狀態の回復が何よりの急務だ。政界の廓淸を政黨者流に求めるは、木に據つて魚を求めるよりも難い。かういふ變態的症狀を前提とする時、予輩は此所に中間的超然内閣存在の餘地を遺憾ながら認めない譯には行かない。といつて予輩は寧ろ山本新内閣を辯護する積り

はない。只之を非立憲と斥けて盲目的に政黨内閣を主張する常道論者にその根據なきを反省して貰ひたいと冀ふのみである。

五、

斯く論じて來るとその當然の歸結として予輩は此所に山本内閣の使命を一言しない譯には行かない。繰返していふた樣に、超然内閣は本來當節の舞臺に上場すべき代物ではない。而もしばらくその出場を促された所以は、特別の使命を國民から期待されたからだ。それは何かといへば、いふまでもなく常道復舊の完成に外ならぬ。つまり政界が常態に復するまでを限度として大掃除に雇はれたやうなものである。只山本内閣が果してこの任務を完全になし了うするや否やは問題だ。この點に於て國民の期待に裏切らんか、彼は寺内内閣と何の擇ぶ所がない。場合によつたら加藤前内閣より惡いものかも知れない。併しこれ等の判斷は、一に今後の効績に徴すべきであつて、今直ちに之を排斥するの理由はない。

山本内閣に對する細目の注文はいろ〳〵ある、が之等は他の機會に論ずることとして、此所に一つ前段の論議に關聯して希望する所は、

一、來年の總選擧には絶體的公平の態度を執り、極度の嚴正辛辣を以て臨み、一些い不正と雖も假借する所なく、畢竟選擧の結果をして完全に民意の忠實なる表現たらしむること、而してその結果につき、多數を得たるもの若しくはその聯合に内閣を明け渡すこと。

二、若し總選擧を以て自家存立の終期と諦めず、引續き經綸を天下に行はんとするの覬望あらば、自ら新たに政黨を作り他黨と爭ふこと。選擧の結果につき改めて進退去就を定むべきは勿論である。

帝都復興論

國際的、國民的、及び全市民的社會價ある東京を建てよ

杉森孝次郎

久しい將來を見越しての計畫と、眼前の急に應ずる處置との組織的實現が、この際の對東京策の基礎的用意でなくてはならん。幸ひにも、すでに世上に現はれた善後案と、善後運動とは、大體に於いて、この、營久と應急との兩極におのづから剴切に觸れてゐる。ただ、現在のままでは、その觸れかたが、無理ならぬ事情に支配されてゐるといふ同情すべき理由もあつて、斷片的であり、着想的であり、十分に反省的でなく、統一的でないといふ缺陷をしめす。材料としては、及び傾向としては、官民の各方面から衝動的、自發的に發生した善後的實行及び習見は、日本國民が、成長の氣力を包藏する賴もしい國民たることを說示する性質のものだ。

半徑三十マイルの都市は、交通機關の設備をさへ完全にすれば、現代に於いては、決して大きすぎないと考察される。北米合衆國に於いては、ワシントン市からボストン市にわたる蜿蜒五百マイルの一大都市的社會が、近き將來に於いて事實となつて現はれさうだ。それの人口は、一千萬乃至それ以上にさへ達するだらう。無論、都市は、それの背景、內容、條件としての生產的能力及び必要、殊にも經濟的生活に屬する能力及び必要から離れて孤立的に、抽象的に、單獨に大をなす可能をも、理由をも持たないがゆゑに、アメリカに大都市が出來るから日本

にもそれが出來なくてはならんといふ論理は、日本の事情をしらべた上でなくては成り立たないが、都市の大きさは、決して、現に存在するいかなる都市によつても、それの現代及び近き將來に於ける可能的及び合理的極大限をば例示されてゐないといふ事理だけは、この際にも、注意をあたひする。

しかしながら、東京が包帶すべきが如き人力と文化を、百年內外にして廻歸するかも知れない震災に對して無防備にして置くことは、到底許すべからざる短見だ。ここに於いてか、東京を舊地に復興し、再建するといふ意思は、東京を耐震災のかたちに進化させて建てなほすといふ條件を十分に肯定する性質のものでなくてはならん。しかるに東京を、耐震災のかたちに進化させて建てなほすといふ目的は、東京の地積を、十分に擴張することを一とつの必要手段として達成される。さらでだに、すなはち、震災の天然的危險なき都市、例へば米國に於ける太平洋沿岸以外の地域に於ける都市、またはヨーロッパに於ける地中海沿岸以外の地域に於ける都市の場合に於いてだに、およそ、現代の世界の諸都市の代表的一不完全は、ごたごみにある。雜集にある。稠密すぎるにある。そも〳〵、都市と田園とは、交通機關の發明された現代に於いては、各人が、これを兩有すべき相互補成的價値だ。郊外の發達が、幼微ながらこの事理を豫表する。

郊外生活は、ある重要なる意義に於いて、都市兼田園だ。健康と閑靜と自然美とに於いては、それは田園生活だ。文化と便利とに於いては、それは都市だ。家庭や學校は、通則的に郊外に設置されべきだ。市內は生產の場所として發達すべきだ。分配としての商業は、工業的生產の直接延長としての位置を占むる生產的最後階段にほかならない。

大小公園の多設乃至普設も、道路幅の擴張も、大小の運河及び溝渠の雜設も、東京の全地積を十分に廣く取ることを一先要件とする。交通機關の設備は、空間的距離を社會的意義に於いて短かめる。半徑三十マイルの大都市の如きは、これを要するに、地下電鐵の可能を豫想しての話だ。東京の如き、强震の今後なほ到來すべき土地に於いて、地下鐵道が果たして安全なりや否やは、識者に聽いて見ねばわからないが、地下鐵道が不安全だと假定すれば、空中交通を發達させる必要があらう。安全、快速、普設、頻繁、低廉が、交通機關に對する社會の要求でなくてはならん。

土地の買ひ上げによる公有が、東京市または日本國家の名に於いて、すくなくとも一とたび斷行される必要は避けられまい。

例へばロンドンの如き、震災の虞れなき都市に於いてさへ、平時の目的にむかつて、大公園が多數に、小公園は更らに多數に既設されてあることを想ふにつけても、東京が擴設される社會的必要は、すでに久しく熟してをつたのだ。

公私大小の建築を、それの地盤及び消火設備と共に耐震、耐火の要件を確實に滿たす性質のものに改善することは、これまた、公私、官民、自發的協力的に進んで斷行すべき一事だ。

國際的同情も、今回の變災にむかつて翕然として集まつて來た。いはば模範的とも僭稱すべき新都市を換骨奪胎式に、飛躍的進化式に生産しうるにあらざれば、その同情に感謝と尊敬を表明する方法としても不備といはざるをえない。生産が唯一の社會的價値だ。せめては都市計畫に於いてなりとも社會價ある努力を拂ふでなくては、市民として、また國民として、奴隷的に貴ふことにも相當する。市民のために必要な東京を造るだけでなしに、國民のため、國際的社會民のために有用な東京を造らざるべからざる理由は、ここにすらある。ここにすらあると敢ていふ。東京再建の支配目的は、模範的都市の建設といふが如き、十分に切實でない社會價によつては決して代表されべきでないがゆえにだ。

新東京は、かたちに於いて震災危險地域に建設されるとしても、意義に於いては震災無危險地域に建設されべきであるが如くに、同じ新東京は、かたちに於いては日本本島の太平洋岸の一部に、やや擴大されて居据はるとしても、意義に於いては、大陸主義的新政治本能、もしくは、大陸主義的新經濟本能に、またそれを條件とする大陸主義的新文化本能に、あるひは廣く大陸主義的新生活本能に、及びその本能の反省としての理想に、實行的責任ある理解を十分に有するものでなくてはいけない。さうでないならば、新東京は成功しないだらうし、また成功しても、それは他力による容華同様のものだらう。要するに新東京は、アメリカもイギリスもこれを必要とするが如くに、支那もロシヤもドイツもまたこれを必要とする、眞に普遍的社會價ある性質のものでなくてはいけない。

横の關係に於いては、畢竟するに國際的社會價ある東京を建てべきであると同時に、内的關係に於いては、全市民的社會價ある東京を建てる用意が最も必要だ。いはゆるブルのみに有用でなく、プロにも有用な東京を建てることが必要なのだ。土地、家屋、道路、公園、交通機關、娛樂設備、教務設備、衛生設備、なほその他にも種類數限りもなく算へられる都市生活及び都市組織の諸要素に關して、全市民の人格價と社會價を飽くまで誠實に、有効に保護し、尊敬することが、新東京の一大特

色でなくてはいかん。かくして、例へば火災保險問題に至深の興味を有する境遇の人々も、その問題に直接の利害關係を有しない境遇の人々にも、また多少相反する、または異なる利害關係や興味を有する境遇や性質の人々にも、正義すなはち社會善の見地からして、適當に理解、同情を持ちうるやうでなくては、持たずには滿足ができないやうでなくては、古人のいはゆる小人の心術行動たる批難をあたひする。そして、その種の心術行動は、第一に、また結局、成功もしない。

現象に對する判斷と解釋の缺乏としての不聰明は、遺憾ながらいはゆる鮮人問題に於いてしめされた。利己的行動機は、一部の人々の單純なる保險金獲得運動にも看取される。個人的に利己主義であり、社會的に輕擧妄動主義であることは、大國民をなす所以でもないが、大市民をなす所以でもないことを、われらは、この際に、あらためて省慮したい。

保險金の流失は、筋勞に衣食した以外の多くの有能及び無能の人々にとつて、殆んど致命傷だ。すくなくともその有能者の致命傷は社會的にも損失だ。かれらをしてすこやかに再起の手段を持たしめることは、市、國家、社會のすべての見地から考へても重要だ。相當の救濟策を發明する必要はたしかにある。しかし、この救濟策は、文字通りに發明されるべきであつて、いはば姑息的に奪取したり、窃取したり、詐取したりすることをもつてそれに代はらせべきではない。もしも、破產すべき多少の產を有したりし人々が、全國的に破產した場合を、今度の場合の代はりに假定すれば、われらの見解もまた多少別性質のものになるが、今度の場合に於いては、さうではないのだから、破產者に對して、偶然の不破產者、すなはち罹災しなかつた有產者に對してとの比較に於いて、相當の同情を寄せべき理由をみとめるのだ。

けれども、破產者も、例へば保險金あたりが來ないにしても、ある意味に於いてのプロに歸つたのだ。潔く諦らめて、社會に出なほす必要を買つたと思へば、そこに、一種の新式の、新時代式の、ヘロイズムが所有される餘地はたしかにある。そして、それが新時代の正しいヘロイズムである限り、それは先づ內的にのみならず、外的にも竟いに生產する。

生產主義と、それの社會的發展としての供給主義とが、新社會組織の原則であるべきだが、今回の變災は、それ相當の規模に於いて、生產主義と供給主義に機會を與へ、消費主義と所有主義とに機會を拒む作用を呈した。それは、廣い、正しい意義に於いて、働らかない者を、部分的にではあるが、食へなくした。働ける人、働く意思ある人には、社會價ある仕事を早く與

へることは、この點から考へても急務に屬する。

東京再起の方法は、輪郭を描くだけに代表されず、内容的、實質的、生命的に、社會價ある仕事を働らく市民を早く多數に造る努力に代表されべきだ。

社會價とは、その社會に於ける一人またはある人々だけに有用であつて、すべての人々に有用であるといふ意義を有しない意思及び行動を私己價ある意思及び行動と呼ぶに對して、その意義を有する意思及び行動に冠せられべき性質だ。

（九月十九日）

帝都再建論

岡田信一郎

緒言

數十萬の生靈と百億の財貨とが一瞬時に灰燼に歸した。世界の大都市の二つ、東京と横濱とが忽然燒野原に變じた。古來斯んな大災害が人間の世の中にあつたであらうか。世界の地震國と言はれる日本の、慶安、元祿、安政其他の大震災で、地震の大小は兎も角も被害の莫大な事は比較にもならない。明暦の大火と安政の地震が一度に襲ひ、ロンドンの大火に、桑港の地震とが一度にやつて來たと假定しても、此んな慘狀は呈さない。慘禍の極を盡した歐洲の大戰亂の中でも、一瞬時に斯る大慘害を生じた事例はなかつた。人類始まつてからの大慘害で、如何なる戰亂にも、如何なる天災にも未曾有の災害である。

今は亡き東京は決して謳歌すべき都市では無かつた。然し三百年の德川文化と五十年の明治文化の生んだ我民族固有の都市であつた。此都市に生れ、此都市に育つた私は幾多の缺陷に嫌惡を感じ乍らも無限の愛着を感じて居る。其も今はたゞ想出ばかり殘る。新學藝の中心たる帝大の圖書館も燒けた。舊江戸文化の中心をなした聖堂も燒けた。本願寺の御堂も燒けた、ニコ

ライ本寺の大ドームも陥ちた。新富座も、帝劇も、新も古も、皆倒れ、皆焼けた。荒凉たる焼野原に焼殘の餘灰から立ち昇る薄烟が落日に掩映して居るばかりである。江戸もない、東京もない。無慘と言はうか、凄愴と言はうか、九段阪や上野の高臺に昇つて俯瞰するとあまりの事に涙も出ない。悔んで効なき事ながら、代ゑ難き人の命、尊き文献、價ある財貨、生を寄する家屋、總てが一瞬時に烟となつて殘るは灰土ばかりである。此等の綜合から成立つ温かき家庭、光榮ある市民生活は破壞し盡されて今は軍警の力に僅に秩序が保たれて居る。

落付いて考へると此の大慘害を總て天災にのみ歸するのは少しく虫が好すぎはしまいか。我等の都市にかゝる災禍の生ずべき缺陷が無かつたか。市民に於て平素の用意に缺くる所が無かつたか、反省を要する事項である。舊東京の都市は近代の都市としては餘りに多くの缺陷を有つて居た。さればこそ近年俄然として都市改造の聲が高まり、都市計畫が企てられ、市街地建築物法が施行された、然し多くの缺陷が是正されるにはまだ短日月であつた。又其の企劃が姑息であつて徒らに表面的でもあり過ぎた、大東京の華かな空想に醉ふて實蹟を擧げるに疎かつた。滑かに自動車を驅るために大道の舗裝は企てられた、然し橋梁をコンクリートにして火災の避難に備へる事は忘れられて居た、隅田川に架した主橋までが多く燒け落ちた如きは、文明の都市として誇るを憚る程の恥辱ではあるまいか。今からは死児の齢を算へるやうな馬鹿氣た事だが、水道が斷れなかつたら、電話電信が通じたなら、消防の設備が充分であつたならと、後から〱と舊東京の缺陷が悔まれる。實に今の慘害の一半は舊東京市の不完全、市民平素の不用意から起つた事で、此の總てを天災に歸する譯には行くまい。市民は自分達の家や庭を綺麗にする事には骨折つたが、共同生活の本體たる自分達の都市を完にする事が、自分の生活と密接な利害關係に立つ事を理解しなかつた。今や東京市民は世界に對し、後世に對して今の世の文明の都市としてあまりに面目なき羞恥を感ぜずには居られない。私共建築家は、燃え易き家を造り、壞れ易き館を建てた都市に住んで充分の覺醒を計らなかつた事に對して強い自責が感ぜぬわけには行かない。私個人としては幸に震災に對して建築家として大過なかつたが、建築家全體として、社會に對しては、又後昆に對しては恥多く、責大に感ぜねばならない。私共も時として講演の壇上に立つて物知り顏に木橋の危險をのべた事もあつた。震災大火の際に水道の用意の急を叫んだ事もあつた、防火建築の宣傳をしたのもつい先頃であつた。然し此程の大慘禍が起らうとは豫期もしなかつた。社會が永い風習から、

經濟の關係から、此等の缺陷を補正せずに放任した時に、私共は徹底的に忠言と抗爭とを續ける事をしなかつた。此の責務を想ふと寔に慚然たるものがある。

今回の地震特に火災により巨億の家と財とを失つた事は或は、不用意であつた東京市民の咎として甘受されねばならぬとしても、十數萬の生靈を犧牲にした事はあまりに慘しい賠償である。今回の大慘害の一半が舊東京の有した多くの缺陷に原因するとしたら、此の慘禍は東京市の大なる恥辱である。今や東京市は未曾有の無慘な試練の前に立つて居る。此困難に打勝て完全な文明の都市を再建してこゝ始めて有爲の民族として世界にも後世にも誇る事が出來やう。此の慘害の犧牲になつた十數萬の人達も、此の苦き經驗に基いて新らしい都市が現出し、新らしい生活が營まれ、死んだ彼等の子孫や、幸に生きながらえた我等の子孫が繁榮を享有してこそ始めて彼等の死が徒死でなく有意義になる。此の重大な責務は生き殘つた我等の双肩を强く押し付けて居る。

帝都再建の根本義

人の集合して住む所が都市ならば、帝都が遷されない限り、嫌でも應でも東京市は再現する。併し我國家が文明の競爭に優位を占める爲には東京は近代的都市として有意義に再建せられねばならない。國家の頭蓋にも比ぶ可き東京が優秀な近代都市として再建せられないならば、日本も亦國際上優越な地位を保つ事は出來ない。今や東京市　帝都として灰土の中より猛然と立ち上らねばならない時である。市民自身の爲に並に日本國の爲に。其故に市民の及び國家の全努力は此の恢復に集中されねばならない。

帝都再建の根本を爲すものは一に市民の氣魄である。二に互助共存の精神である。之れ無くんば如何なる都市計畫の妙案が出來ても如何に手厚き國家の補助があつても、生きた東京は再建されない。東京に帝都として其恢復に國家が全力を盡すのは當然である。されど一面市民の都市である以上、災害に倒れた市民が死灰を食つても瓦礫の中から起ち上る猛然たる氣魄と堅固な意志とが、東京を活かす肝要な精神である。政府に其指導と保護の下に帝都の外形を恢復する事が出來やう。併し都市の生命の火は市民自身の氣魄、精神によつてのみ點火し得るものである。國家は市民を鼓舞して奮勵せしむる事は出來るが、自分自身直接に此の都市の生命を活かす事は出來ない。さればこそ聖明なる天皇陛下は此の點を叡慮あつて蒼忙の中に大詔を煥發されて帝都復興の意氣を鼓舞された。

前古未曾有な災害に面して健氣な東京市民は意氣を沮喪しなかつた。極度の興奮の下に猛然と起ち上つた。蓋し意氣は日本人の尙ぶ處特に關東男子の誇る處である。然し帝都復興の事はお祭の神輿を造るやうに簡單には行かない。數多の困難を切拓いて一歩〳〵堅實の步を進めねばならない。例すれば富士登山の意氣では連峰を蹈破する事は困難である。先づ充分の考察と精査との下に、周到の用意を整えねばならない。連日に亘る險阻の困難に堪えねばならない。或は懸崖の險もあらう、或は草根に饑ゆる難もあらう。東京の再建は富士登山でなく未開の深山を探るの困難がある。一氣の興奮で呵成するわけには行かない。今日の興奮は明日以後堅固な意志と代つて殘らねばならない。由來日本人は一時的に興奮して持續隱忍の意力がないと言はれて居る。其果して然るか否かは今回の試練で明かになる譯である。都市再建の十年苦行に對して我等は充分の覺悟と堅固の意志を持たねばならない。

東京は日本帝國の首都として政治の都ではあるが、一面市民の都である。其故に市民の力から生れ出ねばならない。今市民の此大災厄に當つて個人々々の復活を策する事は禁物である。市民全體としての復活の途を求めねばならない。互助共存の精神こそ東京再建の唯一の信條である。個人の財寶素より惜むに餘りある。個人の緣類慘むに餘りある。然し今は過たるを悔む時ではない。市民は皆赤裸になつて、互助の精神を以て共存を謀らねばならない。個人の權利、個人の利益勿論尊重す可きものである。併しかゝる非常に際しては總體としての存在を先づ企てねばならない。例へば市區改正にしても地主個人の利益は時として犧牲に供されねばならない。借地權、借家權の爭ひも互助の精神を以て解決されねば市民は爭論の爲に其の精力と時日とを浪費して帝都再建の妨を爲すに過ぎない。震災に威され火に脅かされ路傍に避難した怖ろしき一夜には困憊の絕頂にありながら未知の隣人と一塊の握り飯を別つ麗しき互助の精神が發露した人達は此の心を以て都市全體の爲に努力せねばならない。

帝都の都市計畫

都市計畫の問題は決して耳新らしい事では無かつた。特に此の數年間論じ續けられた事であつたが。其實行は種々なる困難に阻まれて殆と實現を見なかつた。然し東京の重要な全部が總て燒き盡された今日、嫌でも應でも都市計畫は實行されねばならなくなつた。新東京は決して舊東京の復興再現ではない。舊東京は種々の缺陷を有ちながら、永い風習や現在狀態や又經濟の

關係から其改善に非常な困難があつた。今や全く灰燼に歸した東京の地圖は全くの白紙となつた。都市計畫の立案者は之れに任意の線を引いて或は街路とし、或は公園とし、或は運河とし、全く自由に其計畫を表現する事が出來る譯である。たゞ其計畫の良否によつて帝都再建の成否が別れる。帝都再建の實現方法として都市計畫の樹立は第一の急務であるが、之に聯關して其經濟方策が確立せられねばならない。一口に都市計畫と云ふが此の中には築港、道路、運河、鐵道、電車鐵道、上下水、建築、橋梁、公園、其他數多の問題が包含される。而して其何れもが莫大な資金を必要とする。然し費消し得べき資金には限りがある。新東京を以て婚嫁する花嫁に譬えやうか、彼の女の欲する嫁入り道具には、都市計畫も要る。住宅建設も要る。交通運輸の機關も、公園も、何から何と數へ切れない程の要求がある。併し彼女の父日本の國家はあまり富有ではない。其故に彼女の嫁入り道具は其資金に相應して賢明に選擇されねばならない。打掛や振袖はやめるがよい、もつと實用向のものにせよと言ふ事になる。此の選擇は其時一時の華かさを飾るよりも將來の發展と幸福に役立つやうに考慮されねばならない。此の撰定が最も重要で且最も困難である。勅語には「其ノ善後策ハ獨リ舊態ヲ回復スルニ止マラズ進ンデ將來ノ發展ヲ圖リ以テ巷衢ノ面目ヲ新ニセザル可カラズ」とある。あまり現實に卽し特に從來の習慣に捉はるれば將來の發展の邪魔になる。さりとてあまり將來の理想のみを考へてたゞ大風呂敷を拡げたのでは國家の經濟の堪え得る所でない。爲政者も、市民も、技師も爰に最も頭を惱まさなければならない。夢想的な大計畫を企てる事は易いけれど、之れを如實に現はす事は困難である。事の先後輕重を考へ都市將來の生命として爲さねばならぬ事は、如何なる困難に堪えても成就せねばならないが、斯る慘害に面する時急不急を辨別する事が肝要である。或は將來の方策を建てゝ其の實行に時を俟つ事も必要に爲るであらう。今は都市計畫の戯れや試をする時ではない。其成否は帝都の生命の係る所、市民の幸不幸の別れる所である。

東京横濱の併合

東京灣の築港も久しき問題で數多の計畫が屢立案された。東京築港に伴ふ難問題はいつも横濱の始末である。東京の築港は直ちに横濱の死命を制する。其故にいつも横濱の反對があり、又東京側では氣やすめの不徹底な事を言つてごまかさんとして居た。私は常に此問題は東京に取つて築港が必要か否かの根本によつて解決し然る後横濱救濟の始末をつければ宜いと考へて

居たが、今や震災と大災との大厄難はよりひどく横濱を見舞つた、彼女は東京が受けたよりより以上の創痍を受けた。倒れた横濱は果して獨で起き上る事が出來やうか。私は横濱は東京に縋るがよい、東京は深切に横濱の手を取つて引き起してやるがよい、而して相伴つて活動するがよいと考へて居る。東京に築港の必要な事は説明も議論も要しない。東京は日本だけの都市ではない。對世界の都市である故、世界の公道たる海洋に表玄關を持たねばならないのは當然過ぎた事である。港灣なき都市は玄關のない邸宅のやうなものである。世界の都市たる東京は數萬噸の商船が横付けになる玄關を持たねば、將來の發展を期する事は出來ない。東京の築港が出來上れば何と言つても横濱は事實上衰微する、或は其の存立さへ危くなるでもあらう。其故に之は常に横濱の深憂であつた。幸か不幸か今横濱は東京と共に倒れた。一所に起き上り手に手を取つて一所に働くがよい。

私は今東京は完全なる築港を爲し、其の埋立地に新横濱區を設けて横濱市民を遷り住ましめたいと思ふ、言はゞ横濱の港灣權を贖ふ代償として築港によつて生ずる埋立地及其周圍の良好なる地域を横濱市に提供するがよいと思ふ。かくして横濱の壞れた岩壁や、破れた諸設備を修補する事をやめて横濱を放棄し、船渠、造船所等の工場地として殘すか或は東京の外港として防疫其他の役目を勤めるもよい。東京に遷されたる横濱は新横濱として彌々繁榮を見るであらう、東京は築港を完備して、帝都としての發展を爲す事が出來る。かくして東京と横濱とは互助共存の理法の下に共に繁榮する事が出來る。焦土と化した今日横濱を遷して東京の一部に再建する事は決して不可能の事ではない。或は横濱を今の地に於て復活させ、東京の外港として大東京の地域の中に抱擁して、共存せしめやうとの說を爲す人もある。かくては名ばかり大東京の中に入るだけで實際の狀態は今日と變らない。表玄關の無い東京は必ず遲かれ早かれ築港を企てる、かくて横濱は衰微する、之れ共存の理法ではない。私は横濱を東京に遷す事を主張する。

小東京の完成

舊東京の終焉に近き頃、大東京の華かな夢想は屢々虛榮の市民を喜ばせた、世界の都市で何番目の廣さがあるとか。何人の人口があるとか、空漠たる數量の大さで馬鹿氣た誇を感ずるのは兒戲にも類する。寧ろ震災の爲めに全市焦土と化した此の實質のはかなさを耻るがよい。私は新東京は小東京の完成を謀るが急務であると考へる。瞬時に東京の大半を燒き盡した此の大火災は何故に起つたか。新東京では此缺陷を取り除いた文明の都

市を小さいながら完成するのが緊急事であると思ふ。東京市だけでは今回の大地震の直接の被害は夫れ程大なるものでは無かつた、寧之より生じた火災のための間接の被害が非常に慘狀を極めたのである。來る可き東京の中心地は地震及火災から安全に保護される必要がある。近代の建築は耐火耐震を理想とする。今回の大地震は、東京では湘南地方や横濱邊よりも震動も小であつたし、被害も從つて少かつた。米國風の構造に成る高層建築の或るものには鈎壁に多大の龜裂を生じたものも少くはなかつたが、高層建築でも注意深く鐵骨を鐵筋コンクリートで固めたもの、又は堅固な鐵筋コンクリート造などには些しの故障もないものもある。又煉瓦造は概して大なる龜裂を見或は倒潰して成績不良であつたが然し、亡き辰野博士妻木博士又は現存せらるゝ曾禰博士達の濃尾震災に鑑みて注意深き設計と監督の下に出來たものには、丸の內や日比谷の地盤の惡い所に建ちながら破損を見なかつたものも多い。鐵筋コンクリート造は構造設計と施工とに缺陷のなかつたものは概して好成績である。屋根や軒等の突出が著しくて震動に對して多少不利な形態を備へた歌舞伎座の建築も鐵筋コンクリートであつて地震では少しの龜裂も生じなかつた。堅固な鐵筋コンクリート造では多少の被害を受けたとしても多くは局部に限られた表面的な手疵に留つて居る。木造の洋館も地震に對しては骨組としては堅固であつた、たゞ壁が龜裂するとか落ちるとか云ふ範圍で、古い保存年限を過ぎた腐朽したもの、他は多く倒壞を見なかつた。又同じやうな構造でも山の手と下町とは地盤の硬軟で被害には非常な差異がある。種々な建築の受けた大小の被害から、私共の教へられる事は實に多大であるが、要するに私共は、此の位又はもつと強い地震に對してでも充分注意して建設された建築ならば安全であると云ふ自信を持つ事が出來た。其爲めには、山の手のやうに地盤の堅固と云ふ事は最も有利な事項である、又建物の高さが低いと言ふ事も有利である。然し下町に建てらるゝ高層建築でも鐵骨鐵筋コンクリート造又は鐵筋コンクリート造にして合理的に設計され忠實に施工されたものならば安心である。住宅建築は鐵筋コンクリート造又は木造洋館二階建位で充分震災に對する注意を拂つたものならば多少の損傷の虞れはあるとしても充分安全と信じて居る。小東京は地震に對して安全な家から組成されねばならない。

建築の耐火性に關しては鐵筋コンクリート構造の發達しなかつた明治時代の多くの建物は周壁は煉瓦造で不燃性物でも、床や屋根が木で出來て居たり又は鐵の小屋組で安全な耐火性のないものが多い。近代の建築では床も屋根も鐵筋コンクリート

で、窓障子の棧も鐵サッシで燃えないやうに出來て居るし又窓には捲上シヤツヤター等も備え付けられてあつて私共は殆と完全な耐火建築と考へて居つた。然るに今回の大火災は總てを燒き盡して、私共が火に對して安全であると考へて居たものまでもろく燒落ちたものが多い。辰野博士が畢生の力を籠めて充分に耐震耐火に設計された日本銀行まで猛火に圍まれて三階の一部が燒けた。之は屋頂の明盖の銅板がめくれて熱氣の犯す處となつて引火したとも、中庭に架けられた二重の硝子屋根が缺陷であつたとも言はれる。まだ自身精査せぬ私は其の何れとも知らないが、兎に角充分な防火設備をしたと信ぜらるゝ日本銀行すらかゝる災害を受けたのである。其他の耐火建築の燒け落ちたものも少くない。特に鐵骨建築で鐵を耐火的にコンクリーで包まなかつたものは鐵が燒けたため悲慘な狀態を呈して居る。此等或は地震のために防火シヤツターに歪み狂ひを生じて具合よく防火扉が閉まらなかつたものもあらう。或は表通りの大道に氣を許して、大通りに面する方に防火シヤツターを附けなかつたものも多い。平素の火災の情況からかゝる大通の方面や河や廣場に面した方面には防火シヤツターが無くとも安全と考へて居つた。然し今回のやうな全市火焔と化したやうな猛火にあつては、大通りも廣場も殆ど効を爲さなかつたやうてある。或は防火扉も完全に閉りながら、周圍の猛火のために内部が燻蒸されて發火したものもあるやうである。燒跡で煉瓦などが溶融して居る狀態を見ると火熱は二千數百度にも昇つたのではないかと疑はれる。かゝる非常の火勢に對しては、建築家の從來の考へには確かに至らぬ點があつた。併し此の窓の防火扉を完全にしても一個の防火建築を數多の木造易燃の建物の中に建設する事は火爐に小箱を投ずるに等しく、其耐火裝置に非常な工費をかけたとしても成績の擧る事は難い。防火に多少の缺陷があつたとしても、防火建築だけが相寄つて建つ時には、相互に其の防火性を發揮する事が出來やう。舊東京に於けるが如く木造建築ばかりの所に二三の絕對耐火の建築を保護する事は困難で、寧丸の內三菱街の如くに耐火建築が簇立する方が安全である。三菱街は必しも絕對の耐火建築ばかりではない。初期の建造にかゝる煉瓦造などは木床、木小屋のものもあるし、又窓廂に防火扉のないものも多い。併しかく數多の防火建築の集合する事によつて、其耐火性は一の耐火建築を木造建築の中に置くより遙かに安全である。三菱地所部は其自營する建築でも、又は貸地にして他の建設を許す場合でも必ず耐火建築に限り木造建築を許さなかつた。帝都の中心地を多年草原の狀態に置きながら、此方針を持續した地所部の堅實なる方策が、全市

瓦礫に化した今日新築館簇立して別天地を爲し、帝都の面目の爲めに氣を吐くのみならず、東京の商業實業の地區全滅の今日、之れあるにより都市の善後の策を施す事が出來る。私は東京市の中心をなす小東京は此の如くにありたいと思ふ。

財政窮乏の今日東京市の全建築を鐵筋コンクリート造の耐震耐火のものにする事は勿論出來ない相談である。然し新東京の商業の中心地たる樞要の地に之を望み一旦の災時に商業機關の安全を望むのは必しも法外の事ではあるまい。曩に政府は都市の防火のために市街地建築物法によつて、重要なる地區の表側六間の奥行を不燃質の材料を用ひ耐火建築にする事を規定して之を防火帶となした。今度の大火でかゝる姑息の事は何のやくにも立たぬ事が暴露された。私は日本橋、京橋の如き商業の中心地を限り木造建築を禁じ總て耐火建築となし其耐火性に多少の欠陥ありとも互助共存の理法により全體として安全に東京の商業を保護するものでありたいと熱望する。而して此等の街がかゝる建築に附隨して總ての設備施設に於て文明の都市としての完備を見る事を希望する。又此等の地域では法を設けて建物の高、建築線等を一定して整然たる一廓を現出せん事を要望する。政府の各官廳が集合して建てられ同じく耐火性を有す可き事も同樣である。而して斯く中心商業地たる小東京を完成して他の大東京は大體現狀のまゝにして自然の發達に委せるがよい。勿論、其道路、水道、下水道、交通問題其他に關しては都市計畫を確立して除々に其遂行を期す可きは言ふ迄もない。

都市計畫の爾餘の問題

都市計畫の其他の多くの問題に就ては今更論議を繰返す要もないと思ふ。其具體的の配置等は地圖について明示するに非ざれば要を得難い。唯近時新聞紙上に或は都市計畫局の案とか、或は東京市の案とか傳へられて散見する案が若し實際に彼等の遂行せんと欲する案であるならば、此等に關して多少の所說を述べ又二三の私見を述べやうと思ふ。

道路、 道路に關しては主幹線は四十間にするとか六十間にするとか記載されて居る。交通頻繁な近代都市では勿論道路の廣き事を必要とする。又火災等の場合に、其延燒を防ぐのに有効なのは言ふまでもない。併し安からぬ地價の土地を地圖の上でやたらに取り擴げて簡單に決定せんとするのは輕卒に過ぎる。道路の巾は交通の狀況や建築の高さに比して考察す可きである。高き數層の家ならば人の集積が多くなり從つて交通が增し道路の廣きを要する。今の建築法では建築の高さは百尺を限度として居る。丸ノ内ビルヂング、郵船會社、有樂館、興業銀

行其他の高層建築の高さである。此等の高層建築は今次の震災で最も其害を被つたもの丶一つで、内外ビルヂングの如きは其の最も著しき例である。中には興業銀行、三菱假本社、大川田中事務所等のやうに高層建築でも其構造の優秀から殆と被害のないものもあるし、又既に述べたやうに充分な注意の下に構造さるれば、此同以上の震害にも堪え得ると信ずるが、然し一般に階數の少い低い建築の方が地震に對しては有利であるのは明かである、此に鑑みて或は建築法の高さの制限を變更するの必要があるか無いかを考慮して其決定に基いて道路の廣さ等も考察されねばならない。又交通の情況により廣狹が決せらる可きで、例へば槇町線の如きを六十間に爲さんとするの說の如きは如何なる根據に基くものか了解に苦しむ所である。

都市計畫の中心地、道路放射の中心地を何處に撰定するかは重要な事項である。新聞紙上に屢散見する所では或は宮城と言ひ或は霞ケ關の官廳建築地など丶傳へられて居る。新東京の建設に當つて舊東京に膠着する事は百弊の基である、然し三百年の德川文化と五十年の明治文化の永い間に自然に發展した都市の狀態は必しも偶然の結果ばかりではない。古人の施設で今人の斥ぞけたものでも今回の災害等に際すると古人の遠慮深謀が成る程とうなづかる丶ものがある。此點で自然の發達と古人の施設とは新東京の計畫に尊敬して參考されねばならない。地勢や交通の結果から自然に舊東京の中心であつた日本橋、京橋はやはり新東京の中心商業地となるであらう。而すると、放射道路の中心なども此の商業地域又は事務所地域を選んで計畫せらる可きではあるまいか。宮城は市民の平常瞻仰して尊しとする所である。然れども此の尊敬と之を中心にすると言ふ事 は何の關係もない。宮城を中心にすると云ふ現東京地圖の圖上考案に都合のよい計劃は、市の中心たるべき商業區に對し便利を缺く處はないか。今の東京驛停車場の設計がよい鑑である。中央に宮廷停車場を置いたため多大の不便と、反つて商賈に對し混雜を近くするの不利がある。宜しく宮廷の便宜のみから立案した別の停車場が建設せらる可きであつた。宮城を中心とする事は或は此の覆轍を踏む事になりはしまいか。或は議會や官廳地區を中心とするの案もある。帝都は勿論政治の都であるが、而して之は如何にも都市美觀施設の上に都合よささうに聞える案である。然し官廳は日常の市民生活と直接の關係は少ない、都市の生命はやはり其中心商業地域にある。之を中心とする事が最合理的で且最も便利な交通を得る事にならう。

公園　大火災の方途もない延燒に鑑みて大公園が各所に設置されんとして居る。其計畫は寔に機宜を得て居る。平常は市

民と自然とを近付けて何よりの慰安になる、災時には火除地として數多の生靈を保護する事が出來やう。斯くて火災の敎訓も徒では無かつた。數萬の死者も徒死ではなかつた。然し今新聞に傳へらるゝ公園設定の計畫はたゞ比較的廣い面積を有する官公有地を公園にすると言ふだけで、少しも脉絡のある公園組織が考へられて居ぬやうである。點々たる公園の所在、素より公園無きに勝る。然し公園の價値は其が統一連絡あるによつて始めて完全に發揮される。公園が廣場や、公園路、散歩道等により有機的に連絡さるゝによつて始めて近代的公園としての價値がある。火除地として考へても、個立した公園は被服廠跡のやうな大慘害を起さないとも限らない。公園に連關して適當な個所に運動場を設置せねばならない。從來運動體育は學生の專有物であつたが、今や市民全體の享有する所となつた、希臘盛時のやうに市民が運動を好んで、體育に努める事は都市發展の大なる原動力となるであらう。

飛行機着陸場　港灣が都市の玄關として必要であつたと同じ理で、今後の大都市は飛行機の着陸所並に其の格納倉庫等を設置せねばならない、而して之は多少廣汎なる土地を便利とする故豫め計畫せられねばならない。而して平時には交通のために戰時には防禦の爲めに役立つ事が出來る。

水道　震災に際して上水道の被害から起る斷水の危險は、平素から地震學者や、建築家から度々注意を喚起した。今の水路は地震に對して全く脆弱である、又鐵管の損傷なども注意を要する。新東京の計畫では此等は特別の考慮を拂はれねばならない。

交通　此の問題は私の唱ふる小東京の完成を主とするならば一層重要な事になる。市の外廓、山の手、郊外から勤め人は朝夕集散しなければならない。而して此等の住宅町は今の山の手、町のやうに、又は西洋の田園都市のやうに、多少の庭園をもつ事が必要で、從つて大東京の版圖は廣くなるばかりである。市の中心からの距離は遠くなる。之に對し地下高架の高速度電車が布設せらる可きは當然であるが、夫れより先きに今の郊外電車がもつと市の中心近くに引込まれる事が必要であると思ふ。市内電車の政策からと布設工費の多額からとで、市を取り捲く多くの郊外電車は市の外廓で止まつて居る、其故に郊外の人が市にはいるには、此處で又速度の遲い市内電車に乘り替えねばならない。新東京では交通の整理をなして此んな不便が早速除去されねばならない。交通に關しては今の東京驛は此の機會に英斷を以て撤廢されたい、中央停車場の位置として不適當なばかりでなく、都市計畫の大きな邪魔物である。

巷衢整理　東京の市街の區劃は極めて亂雜である、之れは特に山の手や近郊新開の地に著しいが、燒殘の山の手は兎も角も燒失した下町には早速市區の整理をなし之に附隨して町名番地の整理等が企てられねばならない。山の手では丘陵の起伏により地形が復雜で從つて整然たる區劃は困難である。平坦な下町では燒野原に化した地域を整然と區劃するがよい。近代の都市は其實用から見ても、美觀の點から見ても整然たる外形を持つ事が必要で、之は勿論建築の形式や意匠から來る事であるが、其基礎を爲すものは整然たる區劃である。都市計畫の道路がたゞに幹線だけの配置で、ある中心から放射するとか、ある方向に貫通するとか云ふ事は勿論大綱目ではあるが爾餘の小區劃は整然と整理されねばならない。亂雜な現區劃に單に放射路を配置したゞけでは便利な道路交通も、整然たる都市の外觀も得られねばかりか、異形の地積を損する事が多大になる。幾ら燒跡になつても市街地の整理は農村の耕地整理のやうに簡單には行かない、其實行には大英斷を必要とする。或は市街地全部を一旦市が購入し、之を整然と區劃して然る後又拂ひ下げる案なども聞及んだが、其英斷が實行されたなら都市百年の幸福にもならう。

橋梁　此の大火災に當つて江東兩區の慘害は最も悲慘を極めた、此兩區は平素から東京市の中でも多少繼子扱をされて閑却されて居た。年々の水害流行病等で常に脅かされて居たが今又非常な慘害にあつた、而して其原因の一つは木造橋梁にある、運河を縱橫に通じた本所深川で橋が燒け落ちたとしたら避難の手段はなくなる。特に隅田川に架した大橋が新大橋を除いて皆燒けたと云ふが如きは、あまりの不用意であつたと今更悔まれる。其他の橋梁も燒失したものが多い。非常の際無二の通路たる橋梁は必ず不燃の構造である可きで鐵筋コンクリートの發達した今日、總ての橋梁は皆鐵筋コンクリート造に改造せられねばならない、橋梁の燒失は如何にも恥かしい舊東京の欠陷の一つであつた。

都市の美觀

美術とか藝術とかは平素から贅澤な餘計なもの〻樣に考へられ易い、特に斯うした大災害の場合には全く緣のないもの〻樣に考へられ、美術等と云ふ話を口にすると災害に同情せぬ非人情漢のやうにも取扱はれる。美術とは果して其んなものであらうか。今帝都の再建を策するに當つても全く除外されて寧嫌惡されて居る傾がある。したが美術はいくら非常時でも人間生活から切り離して取り捨て得る事がらでは無い。人間生活に織り込まれた重要な一要素である。經濟の悲慘な不幸を聞いて同

情に脆く涙は何にか。無心の孤兒の笑顔になく心は何にか。之れ皆美術に感應する心の現れで、總ては美術を要望する心である。身一つで免れた罹災後の一二日を落付なく廣場に暮す人達の雨露をしのぐ乞食小屋には外觀の顧慮もなかつたが、既に燒跡の灰掻き均して臨時に建てるバラックの亞鉛小屋には粗末ながらも其風姿に心を入て工作したものが多い。此心を持つ市民が美術の要素のない都市、實に果して滿足する事が出來やうか、新東京は決して一時の假の都では無い、其計畫は都市の美を發揮して市民の誇りとする事を得るものでありたい。斯くして市民は其麗はしき都市を強く愛護しやう。愛市の精神は即愛國の精神でもある。新東京は市民を滿足せしめる點から、市の基礎を強固にする點から、市の發展の點から、充分美術的に考慮されねばならない。然るに今都市計畫に參與するものに、帝都復興を策する機關に一人の美術家も無きは甚だ心細き限りである。シカゴ市が其都市の計畫案を審議した組織の如き或は範とするに足りるであらう。

生活改善

舊東京の文化があまりに浮華に流れ、生活形式が繁瑣になるや、其弊に堪えずして生活改善の聲が期せずして起つた。有識者の間に生活改善同盟會等と云ふ會合も出來た、私は生活改善の緊急たる事を承知しながらも、生活改善を唱道しながら自分自身反つて改善を要する形式に陷つて實効の擧らない處のある同盟會に加入する事を欲しなかつた。今や舊都市と共に總てが燒滅した。一介の勞働者も積富の商賈も一塊の玄米飯に饑を忍ばねばならなくなつた。九尺二間も大廈高樓も皆燒けた。繁雜な色々の衣服や種々の調度は幸か不幸か皆燒いてしまつた。此際今迄苦しんだ二重三重の不合理の生活から脫却せねばならない。舊東京の複雜な虚榮に充ちた惡習慣を切りすてゝ、總ての生活を簡易にし、之により新東京再建の元氣を保持するがよい。燒出された罹災者は嫌でも應でも簡易生活をせねばならない。彼等には贅物を持ち得る餘裕がなくなつた。併し燒殘つた山の手の人、多くは知識階級に屬するであらうが、此等の人士は罹災者と歩調を一にして此の氣運を助勢し自ら餘剩を切りすてゝ簡易な生活に入らねばならない。都市が灰土と化して其新計畫が根本から樹立される期を得たと同時に、市民の生活も根本から樹て直されねばならない、其れにはあらゆる舊き物を燒いて無一物の今は絕好の期會である。新らしく購入さるゝものは總て新生活に役立つものでありたい。新調せらるゝ服裝は簡易な洋服にせよ、住む家は簡易な間取りがよい、無駄なものを

入れて置く抑入もいらない。今や商賈は總て現金である。公設市場に行かねば必需品が手に入らぬ、此の狀態は舊東京の生活の弊を改善するに最上の良藥である。市民は今の風習をいつまでも續けて勤儉力行せねばならない。女も外に復興に努める男の勞苦を見て緊張せねばならない。何を食したとて罹災者の救助米よりはよい。何を着たとて燒出された人達のすゝけた着物よりはよい、女中も廢めるがよい、內職もするがよい。かゝる簡易な愉快な生活から溢れ出る精力で新東京の建設に盡さねばならない。役所や會社も此際から今迄のやうな煩雜な形式や手續をやめて、市民の新生活に副はねばならない。

帝都再建の資金

帝都復興の爲に數十億の資金の必要なのは想像に餘りある。都市計畫に關する資金は或は五十億、或は二十億、或は三十億と算せられるが何れもたゞ一時の直感からで信憑すべき數字でもなからう。又市民自身の建築を恢復するにも、二三十億金が必要であらう。此等の金額は多少確實なる基礎の上に算定せられねばならないから、今假に金額を豫想する事は困難であるが、私自身の感じでは兩者を併せて五十億金は必要であらうと思ふ。財政や經濟の事に暗い私は此の資金が如何にして調へらる可きかを論ずる資格はない。たゞ內外の國債によりて集められ、市民の商店、住宅を建つる資金は適當の組織の下に低利で融通され、國債の利率と低利の利息との差額を國家即全國民が負擔せねばならないのだらうと思ふので、其等の方策は專門經濟學者によつて立案せらる可きだ、たゞ全國民に要望するのは努めて公債に應募して帝都再建に寄與せられん事である、之れ何よりの東京市に對する同情である。

いかさま都市の滅亡と新帝都

長谷川如是閑

元來日本の大都會は、量に於いて急劇に進んでゐる、が質に於いては殆ど進歩してゐない。東京のやうな處でさへ、商工業が二十世紀式に進んでゐるにも拘らず、都會の樣式は封建時代のそれとさう變つてはゐない。なるほど丸ノ內邊の新市街は、新たな樣式で統一されてゐるが、それは市の全體からいふとほんの一部で、膨脹しつつある東京は總べて舊樣式で、ただ量だけを增しつつある。一體有機的に發達する全體は、その部分部分を全體の上から決定して行くものである。だから封建都市の一個の建物は、その都市全體の關係によりて決定されてゐるのである。一つの家屋はそれ自身の約束から出來上つたものではなく、その構造なり大きさなりは、都市全體との關係の上から決定されたものである。日本の家屋の一定した二階建の樣式は、凡そかやうな家を單位として組み立てられるべき封建都市の發達によつて決定されたのである。言ひ換へれば、全體は部分を決定すると同時に、部分は全體を決定するのである。封建都市に發達した木造二階建の家屋は、その封建都市の存在と關係してのみ合理的なのであつて、都市の進化に隨つて次第にさういふ家屋は不合理となる。南洋土人の家屋を以つてロンドン、北京、東京のやうな大都會を組み立てることが出來ないのは當然である。然るに東京市は實はそれと五十步百步の程度であつて、封建都市の質を以つて二十世紀の商工業都市の量を有してゐるのである。そこから東京といふ都會の體裁上の缺陷、事務上の缺陷衛生・保安其他生活の安固に對するさまざまの缺陷が生じてゐるのである。このことは大地震とか、大火災とか、傳染病とか、戰爭とかいふ大慘害が無い限り、痛切に感じられないのであるが、併し日常その慘害が潰し崩しに市民の生活を侵してゐるのが、既に此度のやうな突發的な慘害に比して、決して少い損害ではなかつたのである。

生活の組織を社會的に進步せしむる場合に、人間はその『社會的』といふことを單に社交的の意味に取り易い。例へば『立派に生活する』といふことを考へる場合に、自分の生活內容――例へば營養とか生殖とかいふ根本條件――に關するよりは、先づ身裝とか、扮飾とか、擧動とかいふ點に思ひ付いて、何よりも先きにそれを改めようとする。即ち衣服持ち物を飾り、言語擧動を容態振る。かういふことが國家や自治團の生活にもある。都會の生活を改良するといふ場合にも、市民の生活內容に適切なものよりは、寧ろ都會の外觀に全力を注ぐ。銀座の表通りを先づ西洋式にしたといふのが、明治後東京市民の第一に取つた手段である。それは今から五十年も前のことだが、その後、半世紀も經つた今日に至つても、猶ほ京橋日本橋といふやうな中心

地域の裏通りに至つては、依然として封建都市そのままの内容を有つてゐる。一方にニユウヨークのやうな新市街が出來ながら、それは恰かも如何はしい商店がショウンドウだけに立派な品物を並べて、内では粗末な品物を賣つてゐるのと同じて、東京市の一種の詐欺的見本(サンプル)に過ぎない。——無論其組育式の善惡は別問題として——支那政府が北京に一つ非常に文明的な監獄を造つて、外人に對してそれだけを見せて、支那の刑事政策が如何にも進歩してゐるやうに思はしめると同じ手段である。その意味から云ふと、東京は一種のいかさま都市である。

いかさま物は、日常生活に於いてはそのいかさまな點がそれほど暴露されない。安靴もソツと履いてゐる間はボロを出さないが、一朝眞劍に歩き出すと、その役立たないことが暴露する。地震・火事・傳染病・戰爭といふやうなものに襲はれて、初めて東京はそのいかさま物であつたことを暴露させられたのである。

何故に大都會がいかさま物たらざる　得なかつたのであるかと云へば、都會の發達が一定の意識目的に依らなかつた爲めである。それは即ち今日の社會組織が個人の利益を中心とした人間活動に立脚し、總べての進歩といふものがさういふ個人的動機に立脚してゐるからである。昔の封建都市は、樣式は違ふが、一つの全體の管理を有つてゐたのである。所謂城下の構造は軍事上の目的を以つて計劃され、決定されてゐたのである。一朝事ある場合にはこれを燒き拂ふ必要上、石造を許さないといふやうなことまでやつた。目的が軍事であるからその管理も自ら異るが、併し一定の意識目的を以つて集團の生活樣式を規定する點に於いて、近代の個人的自由主義とは違つてゐたのである。無論近代に於ける自治團の發達は、自ら各都市の一定の目的を以つて所謂都市計劃を立てることとなつたが、それは極く最近のことで、そんな風に思ひ付いた時は、既に個人的任意に發展した都市が、もう動きの取れないやうなことになつてしまつてゐるのである。で、今日の都市計劃は何も無いさら地に新らしい村を造るやうな具合に計劃されてゐるといふ有樣である。その點から云ふと、燒けた東京を放つて置いて、何處か廣漠たる土地に大東京を建設した方がいゝくらゐである。ただ都會は燒けても、いろいろの聯絡關係上、現　の地點を棄てることが出來ない事情がその事を妨げてゐるのである。

都市が動きの取れない形に不合理の發達を遂げてしまつたのに向つて改良の手を下さうとすると、必ず何程か私有財産制度に對して侵略的に出なければならない。(例へば土地收用法の如き)今度も燒け跡の處分について土地公有說などが唱へられてゐる。これを以つて觀ても、將來の社會的進化の上に於て私有

財産制が何等かの制限を蒙らねばならぬものであるといふことが思はれる。現に今日でも國家及び自治團體は、凡ゆる方面から私有財産を侵略することに於いて苦心慘憺してゐるが、今度のやうな大慘害の如きに方つて必要とする施設は、——ヨーロッパが大戰爭で經驗したのと同じく——悉く私有財産制に基く諸制度の一時的中止である。無論その制限は分配に就いてのみ行はれてゐるが、一層進んで生産に就いてそれが行はれたならば、もつと好結果があるだらうとは、誰の胸にも浮ぶ事實である。

大都會がその平常の發達に於いて個人的であつたことが、都會の不合理的膨脹の唯一の動機であつたとすれば、それは全く生活組織の合理的進化は、その一般的管理によらなければならないといふ思想學説の裏書きをしてゐるやうなものである。非常時に方つて周章てそれをするといふことは、要するに組織的行動としては缺陷だらけである筈である。日常の生活組織に關する一般的管理に向つて進むといふことが、偶ま非常に際してもつと有効な結果を得る唯一の道である。土地公有といふやうなことも、今日の場合、周章ててそれをするといふことが、平常絶對にそれに反對してゐる態度と全く矛盾してゐるので今日俄かに實現し得る譯はない。たゞこの非常の際の心持ちを以つて、平常の生活組織に對して考慮するといふことが肝要である。が、無論彼等はそこまで徹底して考へたわけでもあるまいから、この災害の經驗が何處まで彼等を反省せしめるか疑はしいものである。

さういふ根本的な點は、要するに日常の組織的進化に待つの外はない。かやうな經驗を得る度びに幾分づつ個人的心意が社會的に進化するのは事實である。分配及び生産の管理が今日の國家のやうに膨脹した生活組織に於いても、尚ほ小さい家族團のそれに於けると同じやうに、必要な生活條件であることを少しづつ悟らせられるであらう。

で、今度の災害が都會の組織的改善に向つて一番便利である點は、誰も言ふ通り、土地を除く地上の私有財産が全滅に歸した點である。私有財産に對して組織的制限を加へる能力をも意志をも有たない支配者は、この際、天災の加勢によつて初めて大事泥的に私有財産に對する制限を斷行し得るのである。組織的有機的進化の方法を取る途を理解し得ない人々は、——さうして昔の暴君のやうに專制的に出る能力も無い人々は——『自然』といふ暴君の暴威に依頼して初めて社會的施設を取り得るのである。當局者は啻に地震によつて便利を得たと考へるばかりでなく、何故にそんな暴君の助けを借らなければならないのであらうかといふことに就いて深く考へて見るがいいのである。

とにかく、自然といふ暴君に授けられて東京をもつと合理的にしようとするに方つては、それぞれ専門家の努力に待たなければならないことは云ふまでもないが、吾々素人が在來の改良施設に就いて考へてゐた、當局の無理解の諸點を、今後繰返さないやうに希望しないわけに行かない。

無論それは經濟上の利害から出たので、豊富な資金さへあれば思ふ通りにやられるとも云ふであらう。が、事實は必ずしもさうではない。一般市民がこの點に就いて無知であるといふことは、第一に専門家の計劃乃至科學的専制ともいふべき大計劃の障碍なのである、自治團はこの點に於いては寧ろ不便である。今の後藤内相が今の東京驛を造り始めた時に、その後を承けた大浦氏は、『後藤が無考にあんな大きなものを造り始めて困る』と語つてゐた。あの計劃が大きいか小さいか知らないが、とにかくやや在來の約束に背いた施設をしようとすると、直ぐと實際に權力を握つてゐる所謂識者の反對を受ける。明治當初の當局者が銀座を造つた決心は、そこから考へると頗る革命的な仕事であつたらうと思はれる。それでさへ半世紀も經たぬうちに憐れな邪魔物となつて、却つて其發展を妨げるといふことになる。で、この際は、素人が殆ど馬鹿らしいと考へるほどの大膽な併しながら細心な、學理的並びに實際的根柢を有する大計劃の實行を期するがいいと思ふ。現に今までの當局者が震災・火災等に就いてどれだけの豫防手段を實施してゐたかといへば、殆ど何もしてゐなかつたといふ外にない。道路を擴張するにしても、最大道路が二十五間やそこらで、それを造つてからまだ十年くらゐしか經たぬうちに、その最大道路が狹隘を感じてゐる始末である。こんなことは専門家としても、亦理事者としても寧ろ責任問題である。今日の知識に於いては、都會の進化の如きは殆ど數字的に算定されてゐるのである。その計算に從へば十年先きのことぐらゐは確定的に知り得るわけである。昔の英雄が無意識的にやつた大規模を、今日の管理者並びに専門家は意識的に立派な數字を示しつつやり得る筈である。英雄主義が専門主義に移つた理由はそこにある。今までの東京市の改良施設の如きは、明治の政治家の銀座建設が英雄的でも専門的でもなかつたと同じく、全く無資格である。これが昔の事實ならば其原因を民族的精神の小規模に歸すべきであるが、今日の事實としては専門的知識の缺乏、専門的創造力の缺乏、これを要するに科學的無能力に歸せざるを得ない。

災害豫防といふ消極的の點に於いても、一旦の實際に際するに、都會計劃者の人工的施設は殆ど何等の効を爲さなかつた。

災害を防いだものは全く自然の形勢か、否らざれば封建時代の殘骸たる施設であつた。何よりも效を奏したものは、下町の火災を山の手に及ぼすことを妨げた宮城であるが、それは德川時代の遺物に外ならない。僅かにこれに附隨する二重橋外の廣場が數萬人の生命を保護したといふが、そしてそれは新計劃者の手柄のやうだが、然し一時宮城を開放さへすれば同じことが出來たので、必ずしもあの廣場の故ではない。防火道路と稱せられる道路の如きは、殆ど何の役にも立たなかつた。それはその筈で、十年も經たないのに狹隘を感ずるやうな道路が、大火災の防禦に役立つわけはない。

　この在來の施設の缺陷から生じた結果だけを注目しても、左の諸點が要求される。

　第一に、都會の中心に安全地帶を構成する公園が、日比谷公園のやうな小規模なものであつては意義をなさない。幸に封建時代の遺物があつたので助かつたが、その意味からいへば、宮城の一部は公園として開放し、九段阪に及ぶ、現に兵營となつてゐる地域をも含めて一大公園とすべきである。バラックの如きをああいふ形勝な地に置いて市民から閉鎖するといふことは、都市の土地經濟上甚だしい間違ひである。日比谷公園の如きはそれに附屬した小公園として兒童公園くらゐが適當である。

　第二に、現に計劃されてゐる防火道路の如きは、少くとも歐米の都市の並木路に劣らない規模を有たねばならぬ。何處の都市も今日では地域の狹隘を感じてゐないものはないに拘らず、主要道路に就いては極めて餘裕を取つてゐる。ブラッセルのやうな狹い都會で、中央に大きい公園を取り難い處は、この大道路で圓を描いてゐる。ブウルヴアル・ド・オオタロオの如きはその一部だが、公園代用に街路を利用してゐるのであつて、中央車道の兩側に各々並木路、馬道、車道、人道を設けて、つまり往來が細長い公園のやうになつてゐる。土地の節約としてはあの方法もいゝと思ふ。ベルリンのウンタア・デン・リンデンもさうである。これは一哩ほどだが更にそれに續いて、追剝ぎの出るくらゐのテーヤ・ガルテンといふ長さ二哩に亘る公園があり、その先きに小公園や遊園地が續き、更にそれがベルリネル街（ストラッセ）に續き、全く全市を中斷してゐる。ロンドンにはさういふ貫通した防禦線はないが、ハイドパアクは丁度宮城のやうに廣大の地域を占めてゐる。パリのシヤンゼリゼイもかなりの規模である。總べて不規則に發達した大都會でも、舊時代の遺物の御蔭げで自然の障壁を造つてゐる。昔の英雄が無意識にやつた常識外づれの仕事の方が、近代の科學者の數學的施設よりも有

効に働いてゐるといふのは、確かに近代人の恥辱である。新東京の建設が、後藤子のやうな多少の常識外れの人間を偶然中心とすることになつたのは、却つて幸であるかも知れない。

第三に、河川溝渠を都會の組織に組入れるに就いても、今までの東京のそれは全く無考察で、今度もそれが爲めに被つた人命財産の損害は非常なものであつた。大阪やヴエニスのやうに、溝渠に沿うて家を建てるのは所謂水郷の生んだ様式で、河川が殆ど道路のやうな働きをするところに發達した様式である。それでも道路を廣める必要を有つと同じ意味で、次第にさういふ様式が廢れて、河岸地が空き地にされる筈である。ところが東京の如きは元來それほど溝渠に富んでゐるわけでもなく、交通よりは寧ろ防禦に利用さるべきである。從つて徳川時代に於いても、河岸地は一體に空き地とする原則になつてゐた。中には明かに避難地として保存されてゐた。然るに東京市は僅かな收益を目的として、悉くこの河岸地を貸下げて、建物で埋めさせてしまつた。それが端なく非常な人命の犠牲を拂ふ結果となつた。これは都市の美觀の上から云つても、また衛生の上から云つても保安の點と同様に、最も悪施設であつて、元來河岸地を公有地とする精神に背いた無考察の處置である。併し河岸地は實際空き地として置くと、最も費用を要するので、目前の利益を考へると河岸地を貸付けるといふことが二重の經濟である。テームス河の如きは河岸工事の爲めに數千萬圓の巨資を投じてゐる。尤もそれは同時にその河岸を公園風の道路に造り上げた爲めでもあつたが、それほどの巨資を投じてまでも、さういふ施設をするところに計劃者の値打ちがある。東京の隅田川の兩岸を見渡すと、所々に貧弱な通路はあるが、大部分は南洋土人の水上家屋を少し改良した程度の家並みで埋められてゐる。これも今度の災害を大にして、隅田川だけでも非常な人命の犠牲を出した原因をなした。河岸地を保護することは、全く不生産的に巨資を投ずるやうで、とても目前の利害からは計算が立たないが、それが出來ないやうな人種は、文明の都會を築き上げる資格はない。

在來の施設に就いて考へても、尚ほ凡ゆる點に計劃者の無資格を暴露してゐるのであるが、專門家も亦理想的都市計劃を只實行不能の空想であるとして、それを考察することをすら恥ぢるやうな、そしてさういふ計劃を書生論と稱して輕蔑するのが專門家的態度であると考へるやうな風潮にあつたといふことは、何たる屈辱であらう。理想家乃至專門家は、飛行機の出來ない前に空中を飛ぶことを考へ、汽船の發明されない前に海上を駛走することを考へ得べき性質のものである。そしてそれが

實現される所に普通一般の空想と異る點である。昔の專制的英雄は、その科學的空想を極めて非科學的の形で實現したが――例へばエジプト王のピラミツド建設の如きは當時の幾何學的智識を反社會的の意識目的で極度に應用したものである。――今の國家又は自治體は、それをもつと社會的の意識目的で、もつと科學的に實現すればいゝのである。

帝都再興案

工學博士　佐野利器

總論

日本が世界第一の震災國である事は實に殘念至極である。殊に今回の災害の如きは正に世界のレコードであつて、吾々が目の當り此のレコードに遭遇した以上、如何にもして吾々の子孫をして此の災に再び遭遇せしめざる工夫を遣さねばならぬといふ事を痛切に感ぜざるを得ぬのである。外國にも今日まで大震災は屢々あつた。即ち近い所で云ふと明治三十九年の米國桑港の地震　或は明治四十三年の伊太利國メツシイナの地震の如きがそれである。米國桑港の地震は、三晝夜中に亘つて全市の約半分を燒き拂ひ、死者約一萬を出した、その當時にあつては世界的レコードの大火災を伴つた震災であつた。併し當時の桑港の震度と云ふものは、今回の大震災から見ると約三分の二位のものであり、その人口も當時五十萬とは稱してゐたが、實際は桑港の市それ自身の人口は三十萬位のものであつた。燒失面積の如きも約二百八十萬坪で、今回の我が燒失面積の約四分の一位のものであつた。死傷から云つても燒失面積から云つても、遙に少なかつたのである。伊太利メツシイナの地震は死者七萬と云はれた。その點で又一つのレコードであつたが、その市は元來人口十五萬の小さな市で、その人口の約半數を死に至らしめたのは、震度の大きな爲めではなく、家屋建築の方法が甚だしく粗惡であつた結果である。七萬の死者を出した事は容

前にして絶後であらうなどとも云はれたが、地震の震度から云つても、その範圍から云つても、今度のに比して遙かに小さかつた。

日本は各地共、昔から非常に澤山な震災の經驗を有ち、又震災に伴ふ火災の經驗を甚だ多く有つてゐたのである。濃尾の大震災は、吾々の子供の時分の事であるが、今でも當時の國中の騷擾は記憶に新である。東京は殊に地震の經驗の少くない處で元祿の地震と云ひ、安政の地震と云ひ、無數の死傷者を出し、無數の家屋を燒失せしめた。而して安政から約七十年にして此の世界的歷史的大震災を見た譯で、實に不安な運命を有つた國柄、土地柄と云はねばならない。

そこで當然起る問題は、帝都としての東京、及び都會としての東京に對する疑問である。現に遷都說なども盛んに起つた。尤も之は大詔煥發に依て消えたかの如くであるが、未だに眞面目に之を研究し、且つ主張してゐる人も無いではない。或は又假令帝都を復興するとしても、その復興の仕方たるや、毎回被害の最も多い下町方面を放棄して、都を山の手に移動する方が可いとの說もある。之は案外勢力ある說で、之を維持し、主張する者が少くないやうに思はれる。私は先づ此の二の問題について檢討して見よう。

第一に遷都說に關しては、或る者は帝都は政治都市だけで宜しい、商工業とは關係なしに濟まし得る、皇居とか行政機關とか文敎機關とかいふものを、大本敎の所謂綾部でもなからうが地震に對して全く安全な場所に遷すべしと說くのである。而して彼等は米國のワシントン市をその好適例として舉げる。然し之れは全くの空論である。米國のワシントンは米國特殊の事情に由つて建てられたのである。即ち米國の各州は各獨立國の形をなしてゐて、何處の州、何處の府にも首都の置きやうがないから、獨立した市を建設して首都と定めたので、自然ではない。交通運輸の便を顧みず、商工業と分離して、政治行政文敎の中心を造る事は甚だ不自然で、一國の經濟の上から云つても政治文敎の上から云つても、極めて不得策である。

遷都に關するも一つの說は、別に政治文敎と商工業とを分離するのではないが、東京のやうな歷史上度々震災のある個所に何故首府を置かねばならないか、他に帝都とすべき都會はいくらでもあるではないか、大阪にまれ、京都にまれ、或ひは名古屋にまれ、擇んで帝都とすべき地は澤山ある、何を苦しんで火山の頂きに首府を設くる必要があるかといふ說である。之れも亦甚だ妄說で、第一震災に脅かされないやうな、そんな安全な都會と云ふものが、日本の何處に在るか。商工業の發達すべき

都會、即ち首府として適當なる都會は、何れも河川港灣、即ち水と縁故のある所でなければならない。磐石のやうな巖の上に建つ都會は一つもない。大阪の如きは大地震の經驗を有する他に、東京には餘りない所の大海嘯の爲めに慘害を來した歷史もある。若し東京を火山の頂きとすれば。大阪も亦同じ不安を有つてゐる。名古屋と雖も濃尾の震災に慘憺たる災禍を被つた事は、記憶に新である、その他日本には如何なる都會と雖も、地震に對して安全な所は有りはしない。元來今度の震災で東京が非常な災禍を被つた事は事實だが、併し決して全滅した譯ではない。成程商業の中心地、工業の中心地はやられた、諸官衙も累を蒙つた、けれども東京はまだ半分殘つてゐる。此の半分の中には宮城を初め、都市の構成に必要なる部分が含まれてゐる、都市の構成に必要な人の住宅が甚だ多數に殘つてゐる。是等の事を顧みず、燒跡のみを見て、性急に遷都を唱ふるが如きは、甚しき妄想であると云はねばならぬ。帝國大學は不幸にしてその圖書館を燒き、その教室の幾分を燒いた。之れに就いて大學の某教授は、學問の中心は京都に移るであらうと嘆息したと聞いたが、甚だいはれなき杞憂である。學問の中心は圖書館でもなければ、教室でもない、學者その者である。多數の學者が此處にあつて學問の講究を續けて居れば、即ち學問の中心は此處にある。教室の如きは問題とするに足らず、圖書と雖も京都にある位のものを集めるのは僅かに時の問題である。遷都說に對しても、之と同じやうな事を以つて答の一つにする事が出來ると思ふ。

更に帝都が茲に復興するにしても、常に恐を抱かねばならぬやうな下町は、商業地域としては不適當なるが故に之を放棄して、新たに山の手にその地域を開かねばならぬといふ說、即ち隅田川以西、日本橋・京橋・下谷・淺草方面を工業地域とし、東京全體として西にずらすべしといふ說を有つ人もある。之れ亦、私の觀る所を以てすれば、自然の地形を考へざるものである。帝都は即ち政治の中心、文教の中心で、同時に經濟の中心として大なる發達をする事が、今日の日本の國力發展の上に是非必要な事である限りは、工業及び商業といふ事の自然の便を考へずしては、帝都は成立たぬ。即ち東京灣及び隅田川を放棄しては、帝都は成立たないのである。即ち海運の道を東京灣隅田川の關係に求め、工業地域を隅田川の沿岸に求め、それと密接な關係を以つて商業地域を置きてこそ、初めて商業地域の商業地域たる所以を發揮する事が出來るのである。之れが自然であつて、論者の云ふが如く、山の手へ商業地域を持ち來つてその安全を期すなどと云つても、工業地域を下町に置く時は、工

業地域に働く職工の安全は如何にして之れを期するのである か。更に又隅田川の西に於いてと云ふが、隅田川の利便を有する所の江東に建築物を造る事を禁ずる譯にも行くまい。放つて置けば、矢張り自然に計劃せられざる工業地域が出來るに相違ない。

成程下町は地質が惡い。本所深川等所謂江東は尚は一層惡い。けれども安政の地震と云ひ、今回の地震と云ひ、東京に於ては殆ど極大の地震と考へられるものに於いて、その震度が何ってであるかと云へば、少し專門的な言ひ表はし方であるけれども、建築學で云ふ所謂約三割位のものであつて、濃尾の地震の際の名古屋に於ける震度より少し大きい位のものである。災害の跡を見て只徒らに恐怖するを要しない。問題はその震度に堪へ得る建築物を造る事が出來るか出來ぬかに出るのである。徒らに恐怖するものは、之れを造る事が出來ないと極めるものであつて、現在相當構造の建築物の殘つてゐるのを見ても、問題とすべきは地質でなく建築方法の如何にあるべき事が分かるであらう。のみならず今回の災害は、震災といふよりも寧ろ火災に基くものが多いのである。固より火災は震災の結果によるものとは言ひ條、燃燒し易い家が多く密集してゐた爲めに、災害も多大であつたので、それは地質の軟硬とは直接でない。兎に角、私の觀る所では、下町の震度は決して恐るるに足らぬ。從つて東京の地質は變ふるを要しない。只戰慄すべきは、脆弱なる構造物と燃え易い家屋の密集する事である。災害によつて建築その他の技術界は、確かに將來執るべき道を知り得たと信ずる。震度地質を杞憂する所なく、縱橫の大計劃を以つて帝都の復興を計つて可いと思ふ。此の際周章たる遷都說、政治經濟分離說、下町放棄說の如き謬說に迷はさるる事なく、吾々市民は愼重に地勢の自然といふものに基礎を置いて考へなければならぬと思ふ。

帝都の構成

然らば復興せらるべき帝都は、如何なる形に構成せらるべきであるか。大體を云へば、地域關係は略ぼ舊來の形を以つて最も自然であると、私は斷定する者である。卽ち江東の地は全然之れを工業地域及び倉庫地區とし、隅田川の西は倉庫地區及び商業地域となす事舊の如くである。只此處に最も考へなければならぬ、又最も重大なる二つの問題がある。卽ち工業地域經營問題と築港問題とである。

元來日本のやうな小さな國で、人口のどんどん增殖する國は商工業殊に工業の發達によつて國勢の隆興を期するより外はない譯であるが、今日までの工業の狀況を考へると、實に其基礎薄

弱と云はねばならぬ。日本は八大工業國の一と稱し、多少外國に輸出する工業も有つてゐるが、それは何に歸するか。原料豊富なるにあらず、技術優秀なるにあらず、只勞働賃銀の低廉なるによるのである。謂はば工業從事者擧げて牛馬のやうな生活をし、働をしてゐたから初めて工業國たり得たので、文明的の基礎を缺いて居る。一朝從業者の生活が向上すれば。立處に輸出が杜絶するといふ程、基礎の無いものである。東京の今度の災害によつて、工業の中心は一時關西に移るだらう。けれども關西と雖も決して根柢ある、確實な基礎の上に築かれた工業でない事、東京と何の異る所がない。結局此の儘で行つたならば、日本の工業は、發達は愚か維持の途も無いことになるの恐れがある。故に今度の災害は、一面に於ては禍であるが、工業の基礎を建設する上には所謂禍を轉じて福となし得る機會であると確信する。

斯くの如き見地を以つて此處に工業に對して堅實なる基礎を與ふるの計劃が最も必要なる問題である。その基礎とは、即ち運輸の便を最もよくする事が第一であつて、次ぎには各種工業が集合的に相關聯して能力を擧げ得る、無駄なしの作業を爲し得るやうな施設を爲す事である。動力、排給水、材料の配給關係等についての經營で、工業地域は只工場を造る敷地を與へるのみでなく、最も工業の發達し得べき基礎を與へるのが肝要である。

築港問題は、横濱との關係に於いて殊に重大である。今日までにこの計劃は度々提案されて、隨分古い歷史を有つてゐる。阪谷市長時代にもあつた。田尻市長も一つの計劃を有つてゐた。後藤市長の時代にも相當に問題とされた。此の計劃は横濱との關係によつて非常に難しい問題となる。此の件に就いては、今は只考へべき事情だけを述べて置きたい。

横濱は、既に相當な規模の外國貿易地たる歷史を有つてゐる事と、東京に大きな船を持つて來る計劃には相當に大きな費用を要する事とが、此の解決を難からしめてゐる。けれども一面には東京に大きな船を着けずして、東京の商工業の能力を完全に發揮せしめる事の困難を考へなければならぬ。横濱は外國貿易の港とし、東京は内國航路の發着地とし、横濱と東京との間に運河を掘れといふのも一説であるが、又横濱を顧慮する事は帝都從つて國家永遠の發達に障碍を貽すから、此の際須らく斷乎として東京の大築港を計劃すべきであるとの說も頗る味ふべき、又講究すべき論であると思ふ。

兎も角も此處に工業地域の經營が出來、隅田川の河口を中心として相當規模の築港が出來、隅田川の兩岸要所に倉庫地區が

出來ることと相待つて、日本橋・京橋・神田・下谷・淺草等が商業地域として復興せらるべきである。之れが卽ち自然の地形に則つた帝都の構成でなければならない。尤も局部的に云へば相當の變化はなければならぬ。例へば丸之內附近のオフィス・ビルディング集團と云ふものは、過去には會計檢査院、印刷局などに阻まれて居つたが、延長して神田橋を超えるであらうといふやうな事だの、或ひは又交通上から云つて中央線の延長が兩國に延び、上野東京驛が連絡せらるべき所から起る萬世橋附近の大開發などといふ事もあらう。

公共の營造物

先づ街路問題であるが、もと東京の都市計劃に於いて最も困難を感じたのは街路の擴張、殊に下町方面のそれであつた。大通りには多少の廣い幅員を有したものもないではなかつたが、その支線に至つては、文明の交通機關たる自働車を入れ難いのが多かつた。加之、それが四方に屈曲して更に街路の體をなさなかつた。從つて保安上の支障が絕えなかつた。道路面積と都市面積との割合が下町に少く、之れを外國の都市に較べて三分一位しかなかつた有樣で、當然その幅員が大きくならなければならぬ。品川から商業地域の中心を通つて上野淺草千住方面に走る大道路の如く、日比谷公園、大手町を通る大通り、その他之れに直角に交はる街路、隅田川の東西を結びつける大街路の如き、各その幅員が大きくなければならぬ。その他の支線と雖も、此の際非常な變化がなければならぬ。併しながら世間に時々耳にするやうな四十間道路、三十間道路などといふ只だだつ廣い道を要する譯ではない。道路の幅員は必要ではあるが、兩面築造費、維持費に巨額の金を要するから、不必要に廣[illegible]事は甚だ不得策である。防火の必要上廣げると云ふが、それは家を改造すれば可い。家が燃えれば隅田川すら越す。防火の必要の爲めに街路を餘り多く廣げる必要はない。大街路としては、特別なものを除いては、通常二十間乃至二十四間あつたら宜しからう。然し支線と雖も苟くも燒失地に於いては六間以下であつてはなるまい。而して如何なる道路にも必ず步道車道の區別を設くべき事勿論である。道路は必ずしも直通するを要しない。彎曲あるを障げない。寧ろ長いものに至つては、急な屈曲こそ避けなければならぬが、徐ろに曲つた方が可い。定木で引いたやうなものは却て避くべきである。

道路に關聯して考ふべきは土地區劃整理の事である。既往の大通りの裏、所謂露路の亂雜は、全然之れを整理しなければならぬ。卽ち此の際燒失區域は全く新たなる區劃によつて成立つ

やうにしなければならぬ。此の事は凡べての土地所有者と交渉を持つ事で、非常に複雜ではあるが、之れを斷行しなければ將來能率のいゝ、そして安全な建築物を作り、完全な町を構成することは出來ない。だから此の際、萬難を排して之れを斷行する必要がある。街路と共に下水その他を完全に整理しなければならぬ。下水の完全しない都會が、都會としての資格のない事は既に論じ盡くされてゐる問題で、此の際は唯之れを解決するばかりである。

次ぎに公園の事であるが、下町に於ける公園問題は、都市計劃上、簡單のやうで頗る難問題の一つである。之れに就いて考ふべきは、罹災に鑑みて、公園には必ず大きな池を作る事、及び之れに附屬する鑿泉を設け置く事である。帝都の復興に關しては、今後再び大火災を豫期する事を要せずとしても、地震は豫期せねばならぬ。即ち水道の故障位は覺悟しなければならぬ。之れに役立たしむる爲めには、公園に相當な量の給水が出來る鑿泉を作つて置く必要がある。而して平常は池に注いで水泳場とする事も出來よう。

年來の懸案たる高速鐵道は、在來は許された下町に地下五十尺などといはれたが、地表直下に之れを設くるのに何等の支障も無くなつた。豫ねて特許の四會社七線路、悉く今日施行するの要は勿論あると思はぬが、四會社七線といふやうなバラバラなものでなく、復興事業として統一して、更に線を研究し直して、その最も必要なる數線を地表直下に施行する必要があらう。但し低地にあつては高架たることも止むを得まい。

建築物

建築構造に關しては、吾々は固より非常に大きな實驗成蹟を與へられた。吾々建築學に從事する者は、相當過去の震災も研究した積りであつたし、又殊に桑港或はメッシイナ等の外國の都市に於ける震災火災等に就いても、研究を怠つた譯ではなかつた。推理的實驗的研究も固より忽諸にした事ではなかつた。而して如何なる土地に於ては、如何に家屋は建築せられるべきであるかといふ事の、技術的知識の普及にも努め、及ぶ限りは努力しない譯ではなかつた。が、今回の震災によつて幾多の新なる事實も知り得た、今日まで研究し得た事に、その大綱に於ては大なる誤がない、殊に木造・煉瓦造に於いて然りであつたけれども、鐵骨及び鐵筋コンクリート造に就いては、豫想外の事實にも澤山出合つた、鐵骨や鐵筋は構造それ自身が餘り古い歴史を有しない事ではあつたが、相當研究も出來て居つたとは云ひ條、またかなり改善の點ある事を發見した。要するに之を

簡單に云へば、建築技術界は此處に僅かに將來に執るべき道を知り得たと信ずる。一二の例を云へば、鐵骨構造即ち丸之内に聳えてゐる所謂高層建築の構造は、既往の研究によつて、本家本元たる米國の構造よりも遙に發達して居つた事は確かである。米國流の構造は唯下方に向ふ所の重量を支へるに足るのみのものであつて、從つて之れに則つた丸之内ビルディングが、大正十年の小さな地震にさへ非常な損害を受けたが、附近にある日本の技術で出來た鐵骨構造には、少しの損害もなかつた。日本の構造は米國の直移しでなく、地震の力、即ち横に働らく力に對して餘程講究されたものであるのは確かである。併しながらその講究されたものが實驗に會ふの機會がなかつた爲めに、今日になつて見れば考への足らない點あつたものと云はなければならない。今回の震災によつて、如何なる點を如何にすべきかといふ事を知るに十分なる研究材料を得た事である。之れによつて將來の鐵骨構造の方針が、此處に確立する事が出來るやうになつたと云つて宜しい。

又火災と建築物との關係であるが、防火的に相當築造せられたと稱すべき建物も、風廻りの惡いものは悉く燒失の厄に會つた。之れは附近に薪を積んだやうに木造家屋が密集して居つた結果で、斯くの如き中に立つては金庫の如きか又は銀行の內部にある安全庫の構造の如きでなければ、よく之れに抵抗する事が出來ないのであつて、所謂耐火的構造といふものの價値の相對的である事を、よく體驗する事を得た。で、復興に關して建築物を如何にすべきかといふ事を考へる前に、先づ各種構造に就ての概評をして見よう。

木造家屋は二階建位のものであれば、それが新らしくさへある限りは、下町に於いても敢て多くの震害を受けて居ない。且つ之れを耐震的ならしむる事も困難な問題ではない。殊にその震害の原動力は屋根の重力である。若し瓦の代りに淺野スレートの如き輕い物でも用ゆるならば、少しの掛念もないものゝやうである。が併し年經つに從つて、構造が漸次弱くなる。即ち接合が緩るみ、或は各所が腐蝕する。古くなればなる程、多く强度を有しない事になる。のみならず、木造が震災には必ず伴ふと見なければならぬ火災の元である事に關しては、知り過ぎた程知り得た事であるから、多く云ふを要しない。復興都市としては斷じて木造家屋をば許さざるべきである。此の事は言ひ易くして行ふに相當困難のある事であると思ふが、困難に打敗ける事は斷じて爲すべからざる事で、將來の災害豫防の最大要件は木造絶對不許可といふ事でなければならない。

煉瓦造建築物にも何等の被害のないものがある。而かも土地

の散い所に立てられてゐたものさへある。併し之れは工費を惜しまずに建てたものとか、或ひは間取りが特別に宜しかつたものとか、その他特殊の事情によるもので、大抵は山の手に於いてさへ非常な損害を被つた。大體からへば煉瓦造全滅の形である。之れは度々の震災で豐かな經驗を有する事であつて、警戒を要する。元來煉瓦造は山の手方面若しくは高さの低いもの、規模の小さいものの場合、之れを耐震的ならしむる事は不可能ではない、又時が經つても接合が緩るむだり、腐蝕する事はないから、絶對禁止と云ふ程のこともいるまいが、併し之れには鐵筋コンクリートを混用する等、特殊の制限を置く必要がある。

之を要するに罹災地に於いては、今後は大體之れを鐵筋コンクリートの約四階建て位の建物にすべきであると思ふ。鐵筋コンクリートは通常の家屋として耐震的、耐火的、耐久的であるとは、今日まで口を酸くして宣傳されたものであるが、その結果が今次の地震によつて明かに證明された。尤も鐵筋コンクリートでも破壞した建物はある。從つて震災によつて幾多の注意を新たに喚起された譯である。が、大體から云つて之れほど好成績を示した構造はない。現に神田・下谷・淺草、それから本所深川方面に於いて、形を維持してゐる建物と云へば悉く鐵筋コンクリートであり、假令火災の厄に會つても、多くは再び之れを使用するに難くないと云ふ成績を示してゐる。耐震耐火の構造として推賞するに憚らない。況んや今回の震災によつて改良すべき點なり道なりを、誰もが明かに知り得た故に、將來吾々の信頼し得べき構造は通常の規模に於いては、實に之れを措いて他にない。即ち之れを以つて前に云つたやうに約四階建の建築物を造り、燒失の復興を圖る事が最も安全な道である、斯くすれば斷じて災害を再びせざる事を期する事が出來る。

而して之れによつて建てられべき建築物は、前に述べた土地區劃整理に伴つて、凡べて之れを集合的建築とする事、即ち大街路に面する商店は集合的商店であり、その支線に存在すべき住宅は、即ち集合的住宅であるべきである。從來裏店の密集狀況を見るに、正に四百坪の地面に、謂はば二十坪の平家が二十建つて居つたと云つても可い位に、寸尺の空地なしにベタベタに、木造の危險極まる家が並んで居つた事である。今此の土地に建坪百坪の四階建てを造れば、二十坪の住宅二十を收容し得る勘定になる。斯くの如くすれば、三百坪も餘分の空地を得る事になる。此の餘分の三百坪は即ち集めて以つて大街路、大公園その他公共的の建築敷地、又は建築周りの空地となす事が出來るのであつて、集合的家屋たる事によつて十分な空地も得ら

れれば、又建築費及び水道瓦斯電燈の設備費を節約し、地價、道路維持費の割當等を輕減し得る譯である。斯くする事によつて從來の家賃よりも多からざる額で、絶對に安全に愉快なる住居を得る事が決して難くない事を信ずる。

最後に高層建築物について論述しよう。嚮きに復興建築物を大體四階建の鐵筋コンクリートにすべしと云つたのは、決して下町には高層建築物が出來ないといふ意味ではなかつた。只通常の家屋は、餘り高層でないのが衛生上にも保安上にも宜しいので、卽ち一般の建築物を云つたのである。商業の中心地たる丸之内又はその延長、或は日本橋・神田等の之れに相當すべき地位にあるものに就いては、高層建築たる事決して障げない。只その高層建築は鐵筋コンクリートよりはやはり鐵骨である方が安全である。鐵骨構造の震害に就いては、嚮きにも一寸云つたが、丸之内に於いて多く之れを見る事が出來るやうに、肉の損傷の大なるものはあつたが、骨を傷けたものは殆んどないと云つても宜しい。のみならず、肉にも少しの損傷をも被らざるものさへある。尤も東京會館のやうに骨に異狀を呈したものも皆無とは云へぬが、是等は稀であつた。今日までの鐵骨構造は假令米國流とは選を異にしてゐたとは言ひ條、柱だけで横の力に耐へしめようとのみして居つたものが多い結果、柱は之れに抵抗はしたけれども、振れ方が大きかつた爲め肉の損傷を免れ得なかつた事であつた。骨に於いても注意すべき點あるは勿論ながら、柱だけで抵抗しようといふ事、及び肉は脆弱でも方策ありといふ考を有つて居つた事が、よくなかつたといふ事は、技術家の皆均しく感じた所であると思ふ。卽ち六階七階といふやうな高層建築は、下町に於いて決して避けなければならぬ事はないが、その肉には苦勞して煉瓦を用ゆるよりは、鐵筋コンクリートを用ゆる事が最も策の得たるものであり、更に柱の間に適當な場所に鐵筋コンクリートの間仕切を設けて、之れをして横力を分擔せしむる方策を取るならば、絶對に安全なものを作り得る事を確信する。米國から輸入してまで多量に用ひられた所謂テラカタ、又は中空煉瓦の如きは、桑港の地震の場合でさへも餘り成績が好くなかつた事であり、之れを用ゆる時の手法を多少改良しても、尙ほ成績を擧げる事が出來なかつた事實に鑑みて、將來は絶對に是等の材料を用ひざる事とすべきである。技術界には一つの癖があつた。壁の厚さを相當厚くしたがる事である。その理由の一つは、建物に威嚴を添へたいといふ事、他の一つは幾分寒暑に對して影響を少からしめたいといふ事で、肉に煉瓦又は中空煉瓦を更らに加へたりしたが、壁の厚さを厚く見せるといふやうな事は、却つて商業的建築の敏活を

表現する道でもなからうし、寒暑の關係は係數として僅かなものである。由つて鐵筋コンクリートを肉とするの遙かに安全なる事に就いて、技術界には異議なからうと思ふ。

結論

帝都の復興は實に帝國の再興事業であると考へる。玆に再興とは何故かと云ふに、明治大帝の遺業として國勢大いに揚つた譯であつたが、併し前にも云つた通り、その基礎は當時の事情によつたので、更らに世界の列强と伍して國勢揚れりと云ひ得る眞の基礎の上に立つてゐなかつた。從つて歐洲大戰によつて一時又國運增進せる如く見えたものが、一朝戰爭の終結と共に國勢は急傾斜を以つて衰頽の傾向を示した。此の儘であつたらドン底に落込んで、再び元との勞働者集團國見たいになる運命を有つてゐたものと思ふ。而して之れを挽回するの道は、餘程長い時期を要する國民教育の科學化に待つの外はなかつた。然るに今回の此の災害によつて帝都に眞の商工業の模範的基礎を置く事が出來、獨り帝都のみならず、復興といふ事業に對して國民的緊張を得る事が出來たならば、沒落の兆に向ひつゝあつた國民を覺醒せしめて、國勢の隆興を眞の基礎に置く事が出來ると思ふが故に、再興事業と考へる次第である。遷都の必要があるでなし、或ひは地域移動の必要があるでなし、更らに、下町の震度も恐るるに足らず、地質の硬軟もまた變ふるに足らぬ。技術の改良、或ひはその普及若しくは取締りといふ事に關しては、その方策易々たるものである。只、自然の地勢に則つて縱橫の大計劃を建て、猛然として興國の眞の基礎を確立する事が緊要であると思ふ。(完)

再興東京の一輪廓

田川大吉郎

一

非常の變災でありました。

然しながら前例の無い事では無い、東京市民は、無論これに打ち克つて進むの勇氣と、計畫と、力がありませう。

一六六六年、倫敦市は非常の大火に襲はれました、その前一年、非常の疫病に惱まされて、住民は離散し、貿易は沈滯し、加ふるに頑宰相キャベールの惡政に虐げられて、全市は殆んど國弊の極、銷沈の淵に陷りました、然しながら彼等倫敦市民は、折重なるこれらの逆運に屈せず、さしもの大火を一期として、往來の木造の家を全廢し、石と煉瓦の、耐久性の家を打ち建て、新に今日の倫敦市――世界に名高い今日の倫敦市の基礎を確立しました、史家は

災難はひどかつた、けれども、衞生上の見地から言へば、それは絶大の効果を持ち來した、火事の外は、何物も、當時の倫敦を淨潔にし、疫病の蔓延を終止せしむることは出來なかつたのである、過去の不德と廢土を以て滿された、卑しい建家つゞきの狹い、きたない町筋は、此の時に一掃せられて、大火は到底、衞生にも、生活にも、親切のものであつたことを證明した

と申して居ります、人生の事は、常に順に來り順に進むものとは限りません、順に來る場合もあるが、逆に來る場合もある、それをも順に受けて順に進めることが、人間の知慧であり、力であり、務めでありませう、私は東京市今回の火災が、東京市のため又日本のため、巧みに順用せられて日本の改造、東京市の改造の端緒となり、基調となるに至らんことを望む者であります。

二

さて、どんなに東京市を改造いたしませうか

大體は、舊に依るの外はありません、舊に依つて、特に交通上不便の方面角々を改正し、近世式に再造するのであります。

都市計畫の方針――道路、公園、其の他の方針が、若し定められてあるなら、それに由つて遂行するまでで、私はたゞそれに由りたいと思ふ、但、それは未だ確實に定まつてゐないやうである、若し定まつてゐたなら、たとへ臨時の避難用にせよ、今日のバラツク式の建家を、今日の位地には許されなかつた筈である、それを許された所から見ると、その計畫は未だ定まつてゐなかつたものと察するの外は無い。

そこで私は再興東京市の輪廓に關する私の意見を述べて見ます。

先づ私は東京市と横濱市を、同一の市と見られたいのであります。これを同一の市として、大東京市の計畫、若くは、大横濱市の計畫を立てられたいのであります、從來の都市計畫は、これを別々のものとして、各々別々の方向に發展の目的を描いてゐ

られました、これは私の承服し得ない點でありました。

東京市と横濱市を、同一の市と見られたいと申すことは、これを法律上單一の市に編成せられよと申すことではありません、單一の市に編成されても宜しい――兩市の市民が若し希望するなら、單一の市に編成されなくとも、相互の併合に由つて、諒解に由つて、協同の計畫を立て、同一の方計に進むことは出來ます、それさへ出來れば宜しい、私はそれを希望し、主張しますので、これを單一の自治體に、法律を以て、編成するや否やは、他人の説、他日の論に讓ります。

東京市は、申すまでも無く、汽車の東海道線と、中央線と、東北線と、將た常磐線との集注する着發點に當つてゐて、横濱市はこれと比隣の關係に在り、これら數線に亘つての物貨の集散、勢力の消長、文明の興敗の大使命を、東京市と横濱市は相合して握つて居ります、東京市は痛切にこの使命を感じてゐますが、横濱市も無論この使命を感じてゐます、故に東京市の横濱市の方面に向つて伸びることは、東京市の稟けて居る自然の約束であつて、横濱市が東京市の方面に向つて伸びることも亦横濱市の稟けて居る自然の約束で、東京市と横濱市は、たとへ別々であつても、各々この自然の約束に對する協同の計畫を立て、協同の利益を圖り、協同の福祉を圖るべき位地境遇に在ります。

過去の都市計畫の方針は如何様になつてゐたにせよ、それが多少でも移動し、修正し得らるゝ餘地の存する限り、私はこの際を好機として、以上の如き方針に立て換へられ、東京市をます〳〵南に向つて伸びしめ、横濱市をいよ〳〵北に向つて、伸びしむる計畫を進められんことを切望いたします、これが再興東京市の輪廓に對する私の希望の一節であります。

三

つゞいて此の方面の事から述べますと、今回の災變に當り、何人も不足に感じ、殘念に思つた事は、東京に港の無つたことでありませう。

若し芝浦方面に、せめて五六千噸級の船舶を入れ得る設備が出來てゐたら、東京市民は、此の際、どれ位ゐの便利を受け、災厄の度を減ずることが出來たでありませうか、殆んど想像に餘るものがあります、再興の東京市は、必らずこの築港を急がねばなりません、これ其の緊要なる計畫の一であります。

東京灣に築港すると申せば、直ぐ横濱港の廢港を想像し、若くば横濱市の衰頽を想像せらるゝ者が多いやうですが、私の觀察と所見は、これに反し、私は前段所論の如く、横濱市と東京

市は、相待つて進歩すべく、又現に相待つて進歩しつゝあるのでありますから、東京灣の築港も、決して横濱港を無視し、若くば横濱市を疲弊せしめんための計畫で無く、横濱港をその前港としての東京灣築港であります。

且又、本所、深川を海に化せしめてもいゝ、其の決心で築港すべしとの説も、私の同意し得ない所で、私は本所深川を、災前通り工業地帶として發達するものと信じ、東京港の一部を、本所深川の前面に引き寄せ、そこで其の邊一帶の物貨を取り扱ひ得させるやうに計畫したい意見であります。

震災の餘波、東京市の大商店は阪神方面に移轉し、東京市は單純なる政治的、教育的施設の地區として存在するのみ、工業は潰れ、築港は不要になるやうに論ぜらるゝのは、例に依つて(一)性急なる日本人の一方に偏より過ぐるの弊と(二)若くば中央集權的思想の弊で、決して冷靜にして沈着なる考慮の結論であるとは思はれません(三)日本のやうに細長い地勢の國には、中心は二つも、三つも要ります、圓形の中心は唯一つであるが、隋圓の中心は二つ以上である、日本にはその二つ以上の中心が地勢上自然に與へられてあります、阪神方面の唯一箇所に、日本の中心を置かんとするの説は、その自然に反した説であります。

東京の築港は必要であります、その計畫は、品川芝浦の前面を中心とするも、其の一端は本所、深川の方面にも伸び、東京市の中央部を經て上野驛に連なるものと、品川を經て、大崎方面の、中央線に連なるものと、本所、深川を經て常磐線に連なるものと、その三方面を連結する雄大なる規模の計畫で無くてはなりません、これが東京灣の本港と爲るのであります、横濱港は略ぼ現狀の規模で、東京港の前港となるべく、その東京本港と、横濱前港との間の沿岸線には、船渠も出來ませう、棧橋も出來ませう、港灣に關係した、直接間接の事業が、種々建設せらるべきであると思ひます。

四

以上の築港の計畫に、直接不可分の關係ある論ではありませんが、これに結びつけて、その續きに述べたいのは、東京の中央停車場であります、その廢止であります。

同停車場は、現在に於ても中央停車場ではありません、名は中央停車場であつても、その實は通過驛で、中央停車驛としての終點驛、貨物驛たるの實は、汐留驛がこれに當つて居ります、この際、更に汐留驛を擴張し、同驛を名實ともに具備した中央停車場とすることが適當で、又必要でありませう。

汐留驛を如何に擴張するかと申せば、新橋驛内を汐留驛構内に取り入れ、その中間の芝口一丁目、二丁目、三丁目の民家を移轉させ、蓬萊橋、新橋、土橋の路線を界として、あの邊一帶の地域を全部汐留驛とすべきであると思ひます、さすれば同驛はいよ／＼東京第一の、寧ろ東海道線第一の大驛となり、東京市の關門に相應じた規模格好の發着驛となりませう。私はこれを再興東京の一事業として、この際に斷行せられんことを望みます。

東京驛は、このまゝに存じます、存して通過驛として、現在よりも縮少した規模に於て活動させ、餘りの地域はこれを他の用途に充てたいと思ひます、曾て大騷ぎをされた京橋の槇町線の擴張は、東京驛が中央停車場であるから必要の計畫でありました、同驛の中央停車場たることを廢止せらるゝ以上は、同路線擴張の必要は自然に消滅すると信じます。

汐留驛を、以上の如く大規模に擴張せらるれば、その結果として、同構内に中央市場を設けしむる餘地が自然に出來ます、元來中央市場は停車場内に設けらるべく、海外の中央市場は、概して終點驛に設けられてあります――ターミナル、マーケツト、システム――東京市に於ても、斷じてこの式の中央市場を設定せらるべく、中央市場は、かく終點驛に設定せられてこそ、最も善くその機能を發揮せらるべきであると思ひます、私は汐留驛の大擴張につれ、この中央市場――主として魚類でせう、野菜類も、亦果實類も、同所で取引せらるゝを便としませう――の必ず同構内に設定せられんことを望みます、

飯田町驛を、九段坂下、俎橋の橋際まで擴張せらるゝの得失如何、私は同驛をかく擴張せられ、同構内にも日用品の卸賣市場を設定せらるゝことを、必要であり、適當であると思ひます。

上野驛も略ぼ同樣であります、私は同驛を神田川岸まで延長せられらるゝことを望みます、若しそれが不可ならば、現場を更に擴張せらるゝことが必要でありませう。

以上の二驛が擴張せられて、所謂終點驛たるの外、市場驛ともなり、汐留驛と相持つて、東京市内食料品の卸賣市物となり、三驛相對して、東京市内食料品の集散配給の中心部となることが出來れば、東京市の此の方面の問題は、稍可なるに近かるべく、且、その前面の河川堀割を浚へ、一層舟揖の便を利用することは、東京市の運輸の系統連絡上、必要の計畫であると信じます。

尚又、横濱の棧橋に通ずる汽車の軌道を擴張し、その運轉を自由にし、頻繁にすることも必要がありませう。私はこの際

この軌道を必ず取り擴げられんことを希望いたします。

五

今回の災變に、目立つて役に立つたものは、日比谷公園、芝公園、二重橋外の廣場、上野公園、その他の公園廣場であります、若しこれらの公園廣場が無つたなら、その公害は更にどれ位ゐ物凄かつたでありませう、殆んど想像の及ばない所であります、再興の東京はいよ／＼公園を大事にしなければなりません。これを充分に擴張しなければなりません。

公園をどの位ゐ擴張するかと申せば、現在の公園面積が凡て六十萬坪――上野公園を含めて――東京市の全面積の約二分五厘に亘つて居ります、これでは餘りに狹い、少い、私はこれを全面積の約一割、即ち四倍大に擴張されんことを望みます。

海外の都市計畫者は、公園はその市の總面積の約一割二分五厘の廣さあるべきだと主張してゐます、米國のワシントン市の公園の廣さは、實に一割四分に上つてゐます、東京市が若し一割の廣さの公園を所有し得ることになれば、たとへそれはワシントン市のそれの廣さに及ばず、理想の標準のそれに及ばないにしても、稍滿足すべきであると思ひます、私はこの際思ひ切つて公園を增設することを、再興東京の重なる事業の一であると信じます。

その土地收用の方法に就ては、別に述べます。

六

公園を增設すべき必要のあるのみならず、道路も擴張すべき必要がありませう。

近世の大都市を計畫する者は、少くとも三割五分の道路面積を必要であると主張いたします、中には四割を標準として居る所もあります、東京市の災前の道路面積は約二百七十萬坪、總面積の約一割一分程度でありました、これでは餘りに少い、私はこれをその二倍に擴張したい、即ち總面積の約二割程度に擴張したいと思ひます。

どこの道路を、どう擴張するかといふことは、其の筋の調査もあられませう、それに讓りますとして、唯一つ、虎の門より起つて芝浦埋立地に至る一線――金杉四丁目に在る鐵道下路を目あてに、それに連接する新大通りの開設を望みます、路幅は二十間位ゐは必要でありませう、これは築港地と舊東京市とを連結する大切の道路であります、現在の埋立地のみならず、將來の築港に關係があります、無論、築港の進むに從ひ、舊市街と連絡する道路を開くことの必要は右の外にも在る、それは幾

線も更に增加せねばなりませんけれど、その研究は後日の問題とし、差當り目の前の問題として、私はこの一線の開通を望みます、これはこの際の必要なる事業の一であります。

その土地收用の方法も、次に論じます。

七

以上の如く、土地を多大に收用する必要があるとして、さてそれを如何にして收用するか、こゝにそれを論じて置きます。

私はそれを無償で得られたいと思ひます、無償で取り上げる、即ちそれは徵發であります、それを各人の諒解に訴へて得られたいと望むのであります。

先づ海外の例から述べませう、海外諸國に於る近年の都市計畫の方針は、概してこのやうに爲つてゐます、日本の都市計畫は、近年に於ても多大の經費をかけらるゝことに爲つてゐますが、それは海外の舊式の模倣であると申しませう、近年の諸都市は、決してこんなやうに多大の經費を舊市街の整理にかけることを致して居りません、彼等は往々一錢も一厘もかけるなとさへ申して居ります、一錢も一厘も、買收の資金を費さず、必要の地面は、所有者の諒解を求め、その寄附を促して、その好意の寄附に由つて實行して居ります。

尤も法律を以て之を强行して居る所もあります、獨逸の各都市がそれで、それにはアデックス法といふ帝國法があります、アデックスと呼ばれる博士が、これを創案したので、ア博士はフランクフォルトの市長としての經驗辛苦の餘り、遂にこれを案出するに至つたのであると謂はれます、その規定する所に由れば、市はその區域に必要の計畫を、土地の所有者に相談なく、土地全部を市のものと看て、自由に計畫することが出來る。但、その六割は原所有者に返還せねばならないが、四割までは市に取り上げることが出來る、それは一厘も拂ふに及ばない、無償で取り上げることが出來るといふのであります、返還せられた六割の配分は、原所有者に、元の價格を案じて元通り、但、四割減で配分せらるゝのであります。

かくの如き思想習慣の開かれてから、歐米の都市計畫事業は着々として進歩しました、それは平時の場合である、これは非常の場合である、たとへその習慣は未だ慣らされてゐないにしても、我が當局者は、進んでこの慣例を開くの勇氣があるべきだと私は思ひます。

東京市の現今の土地所有者は約二萬三千人であります、その重なる者は三菱三井の如き富豪と、華族の方々であられます、政府の當局者は、此の種の方々を喚び集められ、懇切に相談せ

らるるが宜しい、曰く

この度の地震に際して、生命を失ふた者が何萬人、負傷をした者が何萬人、家を無くした者が何十萬人、商品、資產を無くし、着のみ着のまゝ、一圓の貯へも無くなつた者が何十萬人、職業を失つて、その日の糊口の資を失つた者が何十萬人、然しながら諸君の地面は尺寸も無くならなかつた。それは依然として高い値段を保つて居り、尙一層騰貴せんと致して居る、つまり彼等多數は無くしたけれど、諸君は無くされなかつた、彼等は生活の資に、產業の資に困ることになつたけれど、諸君は困つて居られない、どうです諸君、諸君はこの非常の天災に、壞れず、燒けず、一寸も減らず、一尺も損じなかつた、この天產の土地を、少くも二割、多くは三割程度寄附して下さらぬか、個人にでは無い、東京市にである、若くば國家にである、諸君と離るべからざるの生活を營んで居る東京市民のために、その共同用のために、諸君を含めて一體の必要のために、便利のために、福祉のために、勇んで寄附して下さらぬか、これを御相談申す、これをお勸め申す。

と申さるゝのである、私は思ふ、これらの人々は能く分る人々である、この寄附の結果の、東京市の將來に及ぼし、これらの人々の將來に及ぼす利益の打算に素早い人々である、精しい人人である、決してその計算に惑はれない人々である、諸君は必ずこれを甘諾せらるゝであらうと。

私はかくして、これらの諸氏の諒解ある寄附に由り、以上の一割の公園――實際は一割以下――一割の道路の土地が、見事に收用せられ、一錢を費さずして、公共の目的、協同の福祉の增進のために利用され、見事なる効果を擧ぐるに至らんことを希ふ者である。

法律の力に訴ふるもいゝが、それは跡廻しである、且この方が綺麗にして奥床しい、私はかくして此の事業の遂行せられんことを祈ります。

八

私は寄附を希望する土地面積を、前項に於て二割乃至三割と申し述べました、その三割とする理由を少しくこゝに述べませう。

三割の中の二割は、道路に、一割、公園に一割――一割以下――それは前に述べました、その餘の約一割強に就て申します。

私の思ふ所、市には避くべからざる公共の建物があります、それは

一、小學校

二、中學校、實業學校

三、市場(各區の公設市場)

四、區役所、警察署

五、圖書館

六、公會堂(各區に亘つて)

七、病院(區立)

等であります、これらは市中の適當な所を擇んで、公平に、漏れなく建設せらるべきである、從來は、それが有つたり、無つたり、有つても偏よつたり、狹かつたり、若くは、廣過ぎたり、不規律で不充分でありました、今回はこれを整然と、東京市全體の便利の上から、配備に手落ちの無いやうにせらるべきであります。

その小學校の數を、私は概算三百と見ます、兒童の數を三十萬と見て(現在略ぼその通り)一學校に(千名を收容すると見て三百校(現在は百九十校)

公設市場は一區平均十ケ所と見て約五十ケ所、

私は小學校を町の角々に立て、往來の目標としたい考へで、且公設市場を學校に連接して設けたら双方便宜であらうと思ふて居る者であります、學校の體操場を作るに注意し、これを學校内に嚴重に取り圍ます、放課後は公衆にも開放し得らるゝ様に設備したらいゝと思ひます、市場にある餘裕の地域も、これに併合して利用せられ、よき遊び場の一種とされたいと思ひます。

圖書館と、區役所、警察署の事は述ぶる必要がありません。

公會堂、市のために必要とせらるゝ外に、區にも必要である、區は現に自治體の一種である、將來はもとつ進歩した自治體にならねばならない、公會堂は自治體に必要の附き物、公會堂を有しない自治體は、自治體としての相當の要件を具備しないものであります。

病院と申したのは、醫長を置かず、醫師を置かず、區内の醫師が、必要の患者を隨時に入院せしめ得る設備を具へて置くだけのもので、一區に少くも三ケ所、合計五十ケ所位ゐを欲しいと思ひます。

これらの公共用の建物の基地として、概算一割の地面は必要であらうと思ひます、私の前に申した三割論は、これらのための一割を含ましめての意見であります。

私はこれらの寄附を、東京市に生活して、現にその利益に浴し、將來更にその設備を擴張せしめて、因て共同の福祉を增進せしめんと希圖せらるゝ地主諸君の公心に訴へて、これを寄附

して貰ひたいと思ふのであります。

繰返しますが、東京市は、これらの設備を、その最も適當の位地に建設する義務があり、責任があります。

九

土地收用論を終つて、道路の論、これにも申すべきことはありますが、その區劃に關しては、前に虎の門より芝浦への一線を新設せられんことを望みました通り、たゞそれだけに止めて、外の希望は大體畧します。

たゞその設備に關して、

一、木道や、アスファルト道は、私は適當で無いと思ひます、東京は雨の多い所、木道も、アスファルト道も、雨には頗る脆い、――アスファルトの舗設に關しもつと進歩した技術が發見せらるれば別――これは作られない方がいゝと思ひます、

碎石道、それは堅牢にして廉い、それでいゝ筈、海外では、よくターマガダムと申しますが、あの種のものを利用さるゝことにしたいと思ひます。

二、それから町の角、特に十字路の角でありますが、從來はそれを角形に仕切つてありました、それですからそこを曲る者は皆不便を感じました、歩く人も、車の人も、別けて大八車、自動車の人は、挽く人も、乘つて居る人も、避ける人も、いづれも不便を感じました、あれは圓く仕切らるべきである、圓く仕切らるれば、かくの如き不便は皆避けられる、將來の十字路の角々は、悉く、圓形に仕切られたいと思ひます、それだけ角の家の建設に注意し、監督さるる必要があると思ひます、これに油斷の無らんことを望む。

のみならず、その角の家に、思ひ切つて注意し制限せしめらるれば、その十字路の中心には、自然に廣々とした圓形の空地を生じ、そこには木を植へることも出來、噴水を作ることも出來、若 は銅像を建てることも出來、無雜作にして、市の美觀を增し、體裁を整へ、衞生上の一施設を加ふることも出來ると思ひます。

三、隅田川の兩岸の道路は片側町とし、川に臨んでは一軒も家を建てさせないやう、嚴重に規定せられんことを望みます、あの川沿ひの道路は、東京市民の遊散に適當した必要の地區であります、どうぞ、此の遊散地、行賞の區域を無くせられないやうに致したい。

四、公園と公園を連結するため、その間に公園道路を作ることが必要でありませう、小公園の間には致し方もありませんが、大公園と大公園の間には、それが必要でありませう、又、

その心持で公園の位地を擇び、公園と路線の關係を擇ばるゝ必要があらうと思ひます。

十

それから市民住宅でありますが、無論、この時を機として、大いに擴張せられたい。

その標準は、戒嚴司令部で、約六十萬人の收容所を作るとありました、そこらを標準とされたらどうでせう、東京市の人口は、十五區を標準として、將來二百四十萬人を超へないでせう、それを超へさせてはならないでせう、六十萬人はその四分の一に當る、その四分の一だけが市營住宅に住し得らるゝやうになれば、先づ結構と思ひます、これは大凡の見當であるが、そこらを見當とせらるれば、大過なきに近いでせう。

尤も戒嚴司令部其の他の計畫は、公園廣場を目的としてありました、これは永久の地で無い、然らばその永久の地をどうするかといふ問題になります、私は所謂市有地三十萬坪、基本財産河岸地十七萬坪の大部分が、これに當てらるべきだと思ひます。

次に東京市會は、官有地七百萬坪の無償拂ひ下げを希望してゐますが、これは大部分政府の官衙の建てられて居る所、陸軍省、海軍省の所管には、いくらか拂ひ下げらるべき餘裕――例へば小石川の砲兵工廠、築地の水交社士官學校の移轉其他のやうな――の所は有りませうけれど、他の各省に對しては、多くを望めますまい、その拂ひ下げ得らるる或部分は無論これを要求するとして、その殘りの官有地にも、私は租稅を課したら可からうと思ひます、外國にはその例があります。

以上の土地の外、土地が充分に得られないとなれば、私は、前の横濱東京統一論に返つて、その中間の鶴見か、川崎かの邊に勞働者の住宅を、双方の市營主義に由り建設せられんことを望みます。

以上はその大體であります、更に轉じて個人の住宅問題に移つて、私はその建設費に、政府の補助、――市の補助、大部分の補給を望みます。

誰々に向つて補助せらるゝかと申せば、燒け出された者全部に向つてでありますか、それとは限らない、其の外にも及ぶが宜しい、然しそれは今申しません、今申す所は、燒け出された者全部を目的と致します、それにどれだけ補助――低利貸附の意味――するかと申せば、その建築費の八割程度を見當といたします、如何なる建築にも補助するかと申せば、約三千圓以上、八千圓以下の程度の建築を見當と致します、この範圍以内の建築

は、年限を定めて——短くも向ふ三年位ゐ——請求のあり次第に補助をする方針を確定せられんことを望みます。

火災保險金を、政府が補助して拂ひ戻さしむるといふ評判がありましたけれど、東京市内の家屋は悉く保險に附されてゐたもので無い、さすれば、其の補助は自然に不公平になります、私はその補助が、窮し切つて居る今日の銀行救濟に幾何の關係があるかを知りませんけれど、東京市民の救助、東京市の再興の目的から申せば、一般に補助される、この私の意見の方が更に有利であると信じます。

英國の例を引きますが、英國にはかねて小住宅保護法なるものがあつて、一住宅四千圓を程度とし、その八割を市から補助してゐました——低利で貸出す——それを近年更に擴張して、八千圓程度に進め、八割五分にまで進めてゐます、かれは平時の場合である、我は非常の際である、私はその幾分は渡し切にしてもい宜と思ひますけれど、大體論としては、低利で貸附け、長期に渡り——三十年、四十年——年賦で濟し崩さしむる方法を採りたいと思ひます、その建築に、一定の標準を立て、制限を設けらるゝことは、申すまでもありません。

十一

別に電車の問題がありますが、これは畧します。

更に、燒け跡の土地である、私はこれを埋立て並に盛土に利用されんことを望みます。

先づ盛土は、本所、深川の全部と、淺草の一部に必要である、この燒け土を利用して、それらの部分の地基を相當の程度に高め、以て滿潮時、大雨季の浸水を防ぐことにせられたい、或人の築港論には、本所深川を海にしてもいゝとありましたが、それは本所深川の地基の低い所から來つた一時の妄論でありましたらう、本所深川の地基は低い、然しながらそれは高くすることか出來る、高くしたらいゝでせう、誰の家でも、建家の前には、必ず地形をとゝのへる、それには切り下げる部分もあれば盛り上げる部分もある、個人の家すら既に然り、況や大都市の建築に於てをや、その建築には、二重にも、三重にも、いく段の工夫と勞力を必要とする、本所、深川に盛土をして、相當の高さに高める位ゐの事は、これは尋常の事である、何でも無い事である、たゞ本所、深川方面の、東京市の將來に貢獻すべき關係如何でありますが、私はそれは大いに關係があると思ふ、從來通り工業地區として、東京市の繁榮發達の上に多大の貢獻をする、樞要の關係があると思ひます、私はこの時を機として、その地基の相當程度を高められんことを希望します。

それから埋立の計畫である。芝離宮前面の海面約四萬坪は、至急埋立の計畫になつてゐました、焼け跡の土塊は、これにも利用せらるべきであります、そこにだけ持ち運ぶことは不便かも知れません、さすれば其の外の埋め立地に利用せらるべきである、偶然の幸と申しては、不穏當に感じるけれど、この度の土塊は、埋立計畫のため利用せらるゝことを、私は至極便利で又適當であらうと信じます。

十二

最後に東京市の大きな建築、東京市の面目を飾り、威厳をとゝのへる、宏壯な建物の一二に就て語りませう。

駿河臺のにこらい會堂は、過去の東京市を飾つた、威厳のある美術的建物の一でありました、私は櫻田門から入つて、二重橋外へ、そこから、かのにこらい會堂を眺めて、その壯厳をたたへて過ぎたことが幾何回であつたかを知りません、それが今は亡くなりました、怕らく再興することは出來ますまい、それは東京市の大損失と感ぜられますが、何かこれにかはる大建築を得たいものであります。

先づ汐留の停車場を擴張して、そこに宏壯なる建物を作らるるがいゝでせう、西洋では概して停車場は、その都市の代表的建物の一になつて居ります、日本でもさうなすべきであります、凡そ公共の建物で、人民の生活に直接の關係の廣くして深いこと、停車場の如きはありますまい。

汐留停車場に大建築を設けらるゝと、共に、上野驛にも大建物を立てらるべきものであります、汐留驛は東京市の正門に當り、上野驛はその裏門に當り、共に大切であります。

それから郵便電信局が大切でありませう、又最も多數の吏員を必要とする所、自然に宏壯の建物を必要とします。

市公會堂、區役所、警察署の類は申すまでもありません。

帝國大學も別として、私は小學校の町角の建築を雄大にし、別けてその前面に高樓を設けて、大時計を装置せられ、これを以て學校の目標とすると共に、往來者の耳目に馴れしむることにせらるれば有益でもあらうと思ひます、前に申しました通り、小學校の數は約三百、市中に三百の高塔が聳へて、且それに三百の大時計が具へられ、絶えず時間を指示してゐることは、最も善く市を飾るものであらうと信じます。

その他博物館も興りませう、美術館も興りませう、圖書館も興りませう、從來のそれは至つて見窄らしいものでありました、それはだん／＼に見事な、宏壯なものとせられなければなりません、そこに三越の如き、白木の如き、百貨店も興るとし

ます、それにも東京市が監視の目を見張つてゐて、その様式に注意し、その色取りに注意しその配列に注意することになれば、かなり立派な東京市は出來上る筈であります、私はそれらの建築の場合にも、成し得る張りの高塔を建てさせたいと思ひます――地震におびへて居らるゝ此の際特に――九段の如き、駿河臺の如き高處に立つて、從前の東京市を眺めた者は、誰彼の別なく、東京市の屋根の單調にして平板な、その無趣味を驚き嘆いたでありませう、私などは幾たび、これを情けなく、物足りなく思つたか知れません、堂々四里四方に亘る大都會である、その上空には、もつと聳へ立つ、種々の建物が無くてはならないのであります、その建物のあることは、市民の心をさまぐに有利に刺激し、訓練するのであります、私はそれらの注意を今後の新建築、大建築に期し、東京市の上空が、平びつたくて、目を惹き、心を跳らす一物の無い、丸びるの屋根裏のやうにならないことを望みます、丸びるの一軒はあれでも宜しいが、東京市の全體が、あゝなつて了つては溜らないと思ひます、公私關係者の深厚の御注意を希望する次第であります。

（九月十二日）

帝都建造論

澤田謙

一

帝都再建については、問題がわかれて自ら三つになる。この煉瓦とトタン板と屋根瓦との崩壊の山積してゐる、地上に帝都を再建すべきや否やの問題が一。もし再建すべしとしても、經濟上の自然原因の支配する社會的要因が、その再建を許すか否やの問題が二。もし帝都再建すべく、再建しうるものとすれば、いかに再建したらよいかの問題が三。

第一の問題は、いち早く發表された内相の帝都復興に關するステートメントによつて、半ば解決された。そして震災に關す

る勅語が、これを全部解決した。いま帝都復興審議會と復興院の設置も、近く公表さるゝと言ふ。帝都は燒野原に再建さるべしと決定されたのである。

しかし帝都の再建が、無條件に決定されたわけではない。その範圍と勢力と樣式とは、全然未決定である。純粹の政治都市としての東京市が再建さるゝのか、或は、資本主義的社會組織内における首都としての商工都市が再建さるゝのか、それさへ決定されてゐない。政治都市は人爲によつて建設される。商工都市は社會要因がこれを建設するのだ。從つて問題は第二にうつる。

經濟上の自然原因の支配する社會要因は、帝都の再建を許すや否や。

二

こゝに帝都といふのは、政治的帝都ではない。經濟的キヤピタルである。ワシントンではなくニウヨークを、東京市の燒跡に再建しうるか否かといふ問題である。

最小限度から考察する。現在の地理的交通的關係が、東京橫濱の近傍に、なん等か商工業の中心を求むることは、これを否定しえない。大阪方面では、東京市再興不要論があるやうだが、日本の如き地勢の國において、大阪を中心とする、關西を唯一のセンタアとすることは、社會要因上無理である。大災前と雖も關東と關西の間に名古屋なるセンタアができ、九州には福岡を中心とする南九州に商工業のセンタアができつゝあつた。大體からいへば、東京橫濱の關東センタアと、大阪京都神戶の關西センタアの、二重心主義であるが、詳しく見れば四重心である。この二重心乃至四重心主義は、必らずしも人爲的に決定されたものではない。大部分は社會的要因の建設せるものである。この社會的要因を無視しての帝都再建無要論は愚である。

いま古今未曾有の大震害によつて、この秤の一方の綱は切られたのだ。そして社會的要因は、その修復を要求してゐる。少なくともワン・センタアの再建は、社會的要因これを許すのみならず、進んでこれを要求してゐる。帝都再建すべく、また再建しうる。たゞそれがいかなる程度のセンタアであるかが問題である。

しからば再建さるべき帝都は、いかなる範圍、勢力を有すべきか。

三

再建さるべき帝都が、ある意味における混血的色彩を帶ぶべ

きは、爭ふべからざるところなるとともに、また止むを得ざるところである。

第一に皇居の所在地として、政治都市の色彩を帶びることは必然の勢である。政治都市として一種閑寂なる氣分は、燒失したる各官署の、壯嚴なる施設とともに、その勢力を恢復するであらう。災害前の官署は、少なくとも都市美觀上においては殆んど世紀前の貧弱なものであつたが、そして商工業權のために漸次迫害されつゝあつたが、この際この頽勢を挽回するにちがひない。

次に學府としての東京も、舊來の東京市の一色彩をなすものであつた。これも官私立學校大部分の復興とともに、漸次復舊すべくこれまた新東京の一構成分子となるであらう。

さらにこれに附隨しては、出版界思想界の中心としての東京である。政治都市と學府都市は、自然に思想界を支配する。殊にいはゆる知識階級が、一般に山手方面の居住者たりしために、安全地帶におかれたりしたことは、思想界の中心としての東京の地盤に、あまり大龜裂を生ぜざる所以となる。

かくの如く經濟上の消費地としての東京は、おそらく舊程度の下に降ることはあるまい。却つてその勢力は向上するものと見て差支ないものと思ふ。從つてこれを背景とする小商業と小工業とは、必然に復舊さるゝものと見なければならない。

問題は商工業の中心地としての東京であるが、これは横濱市との關係を顧念せずしては、輕々に論斷することはできない。

四

災害前の横濱市は、經濟の事實上、商工都市としての東京に、密接不離の關係にあつて、しかもその行政的、交通的設備が、これに伴はざるものがあつた。横濱市の災害實情は、自ら實見しないけれども、横濱から來た人が、異口同音に、『東京に來ると極樂に來たやうだ』と、言ふところから觀るとその災害は思ひやられる。まづ全滅といふべきであらう。各種の報道もまたこれを裏書してゐる。

横濱市は元來生糸絹物の集散地として成立せる都市である。從つて生糸市場を他に奪はるゝことなきや否やによつて、その運命は決せられるのだ。これを背景生産地との關係から觀れば、東京横濱が生糸集散地としては最適の地であるが、名古屋もまんざら捨てたものではない。私は大阪神戸に横濱の商權を奪はるべしとの説よりも、むしろ名古屋または淸水港移轉説を恐れる。

これを大局より觀察するならば、大阪にしろ神戸にしろ名古

屋にしろ、人口の都市集中の飽和點に達してゐる。これに無制限なる追加をなすことは、都市經營の危險を重加することであるばかりでなく、また甚だ困難なる事業である。東京横濱が生産地關係において他に優れたる特點を有する以上、この危險と困難を冒すよりも、依然として關東に生糸貿易の重點をおくべきものと思ふ。殊に政策上は然りである。

私見としては、生糸業は、横濱市の滅亡とともに、一時多少の衰退を免れないであらう。そして生糸貿易は、部分的に各地にその中心を分散し、横濱と東京の恢復に從つて、漸次再びその中心を關東に復歸するものと思はれる。

その他の貿易業また同斷。東京横濱を中心とする商工業もまた同斷。關東の商工業が衰退するのは一時的現象である。商工都市の建設は多く自然原因に基く社會的要因が、これをプッシユしたものである。從つて社會的要因が滅失せざる限り、永久に消失し去るものではない。

商工都市としての帝都が、何時に至つて復興すべきやは、その都市計畫が、いかに速に進行すべきやによつて、決定さるゝものである。

五

こゝに注意すべきは、完全なる都市經營が、都市勢力に及ぼす影響である。都市の完備せる施設は、その住民の文化生活を向上せしむるのみでなく、その經濟關係を頗る便利化するものである。從つて完成せる都市に生活し活動することは、甚だ愉快であるばかりでなく、また大いに經濟的である。世俗に『火事の燒け太り』といふのは、社會的要因が舊態を恢復せしむる以上に、その都市經營の向上が、都市膨脹を應援するの謂である。

新帝都の範圍と勢力とを論ずるにあたつても、私はこの燒け太り的要因を除外することはできない。再建せらるべき帝都は、從來よりもさらに大規模に、さらに廣大に營まるべきものであると思ふ。

この機に際して、徒らに姑息にして狹溢なる都市計畫を建てるのは、帝都の自殺である。

六

元來日本の都市は、人口の密住において世界の都市を後へに瞠若たらしめてゐることはすでに前號所載『都市の叛逆』に述ぶるところの如し。その無規律なる密住が、人民の文化生活と經濟生活とに、いかに悲慘にして害惡ある影響を及ぼしつゝあ

るかは、殆んど計算する能はざるものがある。

再建さるべき帝都は、まづこの密住狀態を救はねばならない。

私は前掲論策において、『日本に都市なし。たゞ人口の集積あるのみ』と言つた。若し再びこの單なる人口の集積を再建せんとするものあらば、そは白痴以上の狂者である。

この度の災害によつて失はれたる人命十五萬、その富百數十億と稱せられる。そして日露戰爭の死者十一萬と對比して、殊更にわれ等は驚異の眼をみはるのである。しかし冷靜に考ふるとき、不完全なる都市計畫の故をもつて、無用に失はれつゝある人命の數を、若し計算する人があるならば、その十年間の總計が驚ろくべき巨數に上るに驚ろくであらう。そしてその數は、日本の都市の死亡率を、諸外國の都市の死亡率と對比して見れば、一分間で計算できるのだ。

われ等は、その不完全なる都市設備の故をもつて、從來から濟し崩しに殺人しつゝあつたのである。そしてまた濟し崩しに富を飛散せしめつゝあつたのだ。いまこの大災害によつて、その天罰を覿面に眼前に見たわけである。

若し東京市に、十の大公園があり、二十本の大道路があつたならば、あの夥しい死者は、約十分の一で止め得たであらう。そして建築にも少し耐震耐火の設備が注意してあつたら、失はれたる富もまた十分の一で止つたであらう。

天罰は覿面である。日本の都市は、平常十年間において、除々となしつゝありし人道的經濟的罪惡を、二十四時間に短縮して、鏡にかけて、見せつけられたのである。

この度の天災は、日本の都市に對する照魔鏡である。これにも懲りないで、放漫なる都市計畫を夢みるものあらば、天譴また再び降下するであらう。

七

新帝都がその背景として有すべき自然の經濟的勢力を、積極的に決定するのは至難の業である。しかし大體において、從來の東京市と横濱市とが、人爲にあらず社會的所因によつて、あれだけの商工センタアの地位を獲得したものと觀察するならば、新帝都の規模は消極的には容易に決定することができる。

新帝都の規模は、舊來の京濱を大體の目安として、大過ないであらう。

こゝに注意すべきは、前述べたるところの、都市計畫の完成による都市の勢力吸收力である。新帝都は舊來の規模に加ふるに、この新勢力をもつてせねばならぬ。從つて燒跡の地區割

は、從來以上の廣大なる計畫によつて、將來の發達を見越して決定されなければならない。

この新勢力の附加と、人口密住を防止すべき都市設備とは、新帝都の地區をば、さらに擴大するものである。この際同一地區に同一道路に面して、同樣式の商店住宅を營造し、同型態の帝都を建造せんとの觀念は、大地震とともに崩壞せしめなければならぬ。舊帝都は事實上一積の灰燼となつたのだ。同時に舊帝都の觀念も、灰燼化せねばならぬ。

いまこそ都市計畫完成の絶對的好機である。人口の集積ではなく、日本に『都市』を建造する好機である。『なに人の施設も地震と大火の如くに、都市計畫の完成に貢献したものはない。』

八

從來の帝都は、すべての日本の都市と同樣に、なん等の區劃的觀念なしに營造されたものである。都市計劃は一轉にして、商業と工業と住宅との區制を假定しなければならない。

私案によつてその大綱を示すならば、本所深川の江東地區は、工業區域たるべきものと思ふ。まづ從來の狹小なる堀割を利用して、大運河計劃が定めること。この運河の開鑿は、掘り上げたる土をもつて地盛に利用するならば、容易に遂行しうるのみならず、これまで何百年間苦しめられ來つたる氾濫をも、防止するの設備となるのである。

江東に運河を開け。そして隅田河岸と運河の前面とに、工業倉庫を建て並べよ。內部はこれ一帶の工業區域である。江東一帶の地は、將來平久町地先の埋立と相俟つて、帝都の工業區として決して狹隘ではない。

若し夫れ勞働者住宅に至つては、さらに東方にあたつて、現在の空地を利用し、計劃的に建造さるべきものである。工業區と勞働者住宅との雜居は、最も非理なる計劃である。江東一帶を工業區とし、その東方やゝ離れたるところに、綠につゝまれたる勞働者住宅をもつてすれば、經濟的便益は頗る增大するばかりでなく、勞働者の幸福もまた增進する。勞働者住宅地に生活的商業地が營まれるのは言ふまでもない。

新興階級の新文化は、勞働者街を中心として起る。

九

大會社大銀行の中心が、燒け殘れる丸の內を中心として營造されることも、また止むを得ざる勢である。東京驛は商業の中心だ。もとより東京驛は東方に向つてもその門戶を開くであらう。さすれば須田町より新橋に亘る一帶の地は、第二の丸の內

として、その繁榮を誇るであらう。

殘餘の燒失地區は、大體において、問屋業者を中心とする、商業區となる。隅田川に連絡する運河が、縱横に建設さるべきは言ふまでもない。そして隅田河岸と運河の前面とが、商業倉庫の列となるも、また自然の勢である。隅田川の水運と、現在汐留、隅田川、秋葉原、兩國、飯田町の五貨物驛に荷卸されつゝある各地方よりの貨物のことを思へば、その一帶の地が、新帝都の商業地區となるは、自然に想到せらるゝところである。(もとより貨物驛は必要に應じて移轉されやうが。)

大會社、大銀行地區と、問屋地區との間に、銀座通りが營まれることも、また否まれまい。その尖端に近く二大公園をつくることも、必要であらう。劇場や活動寫眞の大觀樂境は、いづこに定めらるべきか。中央市場は如何。それ等はあまりに詳細論に亘るをもつて、こゝに論じつくさない。

一〇

政治の中心は宮城である。從て内閣各官省は、燒け殘れる海軍省、司法省、陸軍省、外務省の近傍に、集中さるゝを可とする。外務省の北方に空地あり、議院も近く移轉することゝなれば、十省を容るゝに充分であらう。これに附屬する各官署も、近傍芝區、麴町區の燒跡にて、充分に事足るであらう。

住宅地が、燒け殘れる山手一帶を中心とするも、おそらく異論はあるまい。たゞこれ丈けの大規模の帝都に對する住宅地としては、現在の山手方面はあまり貧弱である。しかも現在においてすでにあまりに密住である。これは高速度鐵道の經營によつて、放射的に外に郊吐き出すべきものである。

住宅地に生活物資を供給すべき小商店が、附近の主路に軒をならぶべきも、また自然の勢である。或は山手の麓を廻つて、新銀座通りを作るも一案である。現在の芝公園と日比谷公園を連ねて、高樹並木の遊歩通を作るも面白い。これも詳細論に讓る。

たゞ忘るべからざるは、公園建造の必要である。その商工業區たると住宅區たるとを問はず、公園は絶對の必要である。若し江東に一の芝公園あらば、五萬の人命は容易に保護されたであらう。それのみではない。平時においても、大公園は日々に人の命と精力を救ふものである

公園なき都市は、純然たる殺人器である。

一一

このほか築港問題がある。これは横濱市の運命に關すること

多大なるもので、横濱の港灣設備の破壞程度と、東京灣築港計畫の容船程度とを詳密に探査しなくては、輕々に論斷しえない。たゞ現在の材料から判斷すれば横濱市は依然として貿易港兼東京市外港、芝浦の築港は東京市内港となすをもつて、穩當なりと思ふ。

高速度鐵道の敷設、もとより急に解決を要する問題である。日本の都市が、過密狀態に陷れる罪の大半は、市の中心に通ずる高速度鐵道なかりしことが負はねばならぬ。高速度鐵道なき都市計畫は、血脉なき人體の如し。忽ちにして腐爛しつくすは眼前である。

論じ來り論じ及べば、卷を重ぬるも及ばない。それは應用都市經營學全部に及ぶ大問題である。いまはたゞ思ひつきたるものの大業を掲げたに過ぎない。最後に方法論として、財政的行政的處理を論じ、一まづ稿を終へる。

二

帝都再建の費用幾何を要すべきか。これ何人も知らざる秘密であるが、おそらく百億を下るまい。一度び八億圓計畫に驚きたる市民は、百億圓計畫に、狂氣せずしてやまうか。

百億の資金。いかにして調達し、いかにして支辨すべきか。

第一、調達は國家の責任なること。これは獨り再建さるべきものが、帝都なるゆえのみではない。またその災害があまりに甚大なるがためのみでもない。同時に國家が現在においても、市になん等の財政權を賦與しおらざる當然の歸結である。

現在の東京市になん等の財政的獨立なきは前號所論の如し。これ國家の掠奪せるところに基く。掠奪者責任は、天下の公理である。國家まづ復興費を調達せよ。

第二、國家は市に財政的獨立を與へよ。そして市をして復興を經營せしめよ。そして借金と雖も、いやしくも市直接の經營に關するものなる限り、これを市をして支辨せしめよ。これ都市獨立の所以である。

尤もこの度の災害は、從來の都市經營の責任者たる國家の政策が、その宜をえざりしに基くものが多い。この意味において、國家に資金の責任の一半を嫁するも合理的である。いまは市民發奮の時であるのみならず、國民奮勵の時機である。私はこの際私情を捨てゝ、一般國民の責任的援助を勸請する。

三

前號『都市の叛逆』において、私は都市獨立の必要を力説した。都市が獨立權を有せざりし天罰は、忽にして救護事務の周

章狼狽となつてあらはれた。都市の獨立は平時に必要なるばかりでなく、緊急の時に際してさらに必要である。

都市の獨立は財政的行政的獨立である。私はこの際都制案なるものがどさくさまぎれに、闇から闇に葬り去られざらんことを希望する。都市の行政的獨立は帝都の再建に際しては、絶對の必要である。殊に上論の如き大規模の都市計劃は、都市の郊外地統制によらずしては、決して行ふをえない。

都制案は復活しなければならぬ。

さらに進んでは、横濱市を帝都のうちに編入することも、決して非理ではない。横濱港は八里を距つる南方にあるが、いづれ東京市の外港であり、これとの連絡が兩市の榮衰に大關係をもつのだ。距離は八里でも、高速度鐵道をもつてすれば、僅に三十分の地點にある。これを行政的に帝都に包括することも、決して無下に否定し去るべき理由はない。

識者の一考を望む。

序ながら、横濱を帝都に編入するにしてもせぬにしても、行政組織はこの際一案を要する。まづ江東以東一區、新商業區一區、住宅區は郊外を合せて二區、もし横濱市を編入するならばこれを一區、兩市間を一區位にして、大區制度を採り、區に半獨立的位地を與へねばならぬ。然らざればこの大規模の帝都は行政上統治に至難であらう。

一四

限られたる紙面に、あまりに多くを論じ盡さうとしたために論は從つて抽象的に且つ粗大なものとなつた。しかし大綱定まらざれば、再建は一指も動かすを得ない。不備をも顧みず敢て發表する以所である。

第一、帝都再建すべきか。然り。第二、帝都再建しうべきか。然り、しかも從來よりも大規模に。第三、しからば如何なる樣式をもつて。答。最も進歩せる科學的經營法によつて。

顧みれば日本の都市は、科學を無視して建造されてゐたのだ。ある意味において、燒けたのは都市ではなくて、家屋と物資である。その燒け跡にこそ都市が建造さるべきものであり、この機會をはづしては、永久に都市は建造されない。

若し新帝都が、眞の意味の都市とならないならば、日本人は都市生活者たる能力なきものである。同時に文明人たる資格をも剝奪される。

帝都の名譽のために、そして文明人たる名譽のためにわれ等は「都市」を建造しなくてはならない。それは再建ではない。なぜなら都市はこれまでなかつたのだから。

この意味において、從來の東京市の記憶は、一切腦裏から洗ひ去らねばならぬ。たゞ茫漠たる平原に臨むが如くに、自由にまた奔放に、都市計劃を定むべきである。燒け跡には、雨後の筍の如くにバラックが建ちつゝある。これが各々燒跡從來の居住者だ。

記憶せよ。一たび都市計劃決定せば、これ等のバラックは、野蠻人の天幕の如くに、一掃し去らるゝことを。從來の土地所有權も地上權も、私有權をなるべく侵害せざる程度において、いづれかに移轉することあるべきを。

われ等はいま新紀元に立つ。從來の惡因緣の記憶は、一抹の浮雲である。速やかに浮雲は拭ひさられ、青天白日の下に、都市建造の大業に從はんことこれ私の希望である。

營造物より見たる帝都の復興

工學博士　佐藤功一

都市は一の有機的築造物である。まことに都市の地表は寸土と雖も人工の加へられぬ所がない。併し私の玆に斯う述べるのは單にそれだけの意味ではない。都市を構成する所の諸廳舍・住宅・商店・事務所・工場・娛樂場・旅館等の諸建築、道路、河川港灣、廣場及公園、鐵道及軌道、運河、上水及下水道、市場、屠場、墓、及び火葬場、塵埃燒却場等は恰も動物の體軀に於ける諸器官の如く有機的に連結し、是等諸器官は孰れも其都市の性質と大さとに依て各適當の形狀と大さとを有し、しかも其都市全體の發達に應じて何等運用上の支障を生ずるが如きことなく其れ等自身また健全に成長し得るやうに置かれたものでなければならぬからである。

表題に於ける營造物といふは以上擧げたる如き工作せられたる諸器官を指す。大震後に於ける帝都の復興は我邦未曾有の大事であると同時に世の大記錄でなければならぬ。復興は人口を初めとして政治經濟及び其他諸般の文化に實現せらる可き筈、私の玆に論ぜんとする所のものは其中の營造物に就てゞある。

帝都の復興、言ふところは復興であるが、期せずして識者の頭脳を支配したところのものは、此の機を以て帝都の大改造をなさんとするにある。卽ち事實に於て寧ろ維新であり改善である。

九月一日正午の最大激震の折は勿論、午後より翌朝にかけて山の手の自宅より遙に天を冲する黒煙と空を焼く大火焰とを望みながらも、よもや斯くの如き大災害を受けつゝあつたとは思ひ設けなかつた。二日に至て初て本郷臺より御茶の水橋を神田に出で、丸の内より日本橋京橋の燒跡を訪ひ、更に北東方遙かに下谷淺草本所深川一面に焦土と化せる其光景の慘たるを見て、あまりの事に驚極まつて發す可き言葉もなかつた。滿天煙を立ちこめて暗さは驟雨の前のやうに、灰や瓦で堆い焦土の至る處にまだ紅黒い焰がひらめき、ところ／＼大破した煉瓦やコンクリートの壁が殘り、河岸の崩れや橋の燒落ちたのや大小の電線は麻を亂したやうに地上に垂れさがり、燒かれて骨だけ殘つた電車や溝に捨てられて黒焦げになつた荷物。二重橋外から日比谷にかけて集つたとも集つた憔れな避難者のむれや街のかど橋の袂に燒死した無殘の屍體など、たゞ／＼嗟嘆の聲を放たせる許りで冷かな客觀を妨げがちであつた。此の日の觀察では十年二十年の歲月を以てしても復舊は至難と考へた。現在の東京の兒童等は其の靑年時代に大阪見物を愉快の第一のものに算へるであらうと想像した。

併し乍ら、二度行き、三度行き、四度行き、視察の度數の重なるに從て心も平靜となり眞相も明瞭となり、事實また、漸次に秩序が恢復され、罹災者は適當に收用され、燒跡が整理され、水道が復活し、電燈がつき、假小屋が增加し、乘合自働車が通り、山の手方面の電車が動き、燒殘つた建物の修理が行はれる。斯ういふ光景を眺め其間に活動の氣分の旺盛なるを察し、復興には左程に長き年月を要せぬのみならず、寧ろ理想の新都市の目前に現出し來る事に對して賴母しさをすら感ずるに至つた。大震は誠に國家の最大不幸事であり大損失であつて、吾人國民として痛惜おく能はざるところであるは勿論、壓死燒死溺死等の悲慘に遭遇せられたる人々の綿々として盡きざる恨み、最愛の家族を失ひ、家財を奪はれたる悲歎に對してまことに同情に耐えざる次第である。然し乍ら一面都市計畫の根本を考へて、此の機會を以て世界に於て最も進みたる都市東京を比較的容易に建設し得る事に思到つたならば、それは禍を轉じて福となすとも云ひ得るではないか。

私は此度の災害を舊約創世紀のソドモとゴモラ兩市の大火災の如く天譴によるものなりとの言をなすものを笑ふと同時に、

今日迄の狀態に於ては百年河淸を待つが如き帝都の都市計畫を斷行せしむるに誠によき機會を偶然にも得たる事を喜ぶものである。若し震災前の儘にて推し行かんか、交通にも衛生にも保安にも經濟にも都市としての不利益の少くない事は假に論外に置くとしても、一朝外國との戰端（斯ういふことを平和時代に夢想することは不愉快なことであるけれども）を開くことあれば、空中よりの攻擊に對して恐らくは今度の震災以上の災害を與へられることであらう。これを以てこれを見れば此度の此機會は帝國百年の大計を爲すに最もよい時機を得たものといふことが出來ると思ふ。

今を去ること約三十年、芳川東京府知事の時代に帝都將來の發展を策する爲めに市區改正條令及び品海築港の意見を當時の內務大臣に上申した。案は相當深い研究から出來上つたものであり、芳川知事の意氣迄も素晴らしいものであつた。當時の山縣內務大臣は其上申を容れて、十數回の審査を經て內閣は之れを元老院の議に附した。不幸にして元老院は之れを否決したが內務大臣の意氣迄も豪いものであつて、山縣內務大臣は松方大藏大臣と連署して再び之れを閣議に提出し、元老院が之れを否決した理由を一々辯駁して、元老院の反對あるに拘はらず原案の斷行を求めた。閣議は當局に市區改正遂行の意思が牢乎として拔くべからざるものあるを察して、終に兩大臣の請議を容れ元老院の否決を無視して之れを公布する事に決し、明治二十一年八月十六日東京市區改正條令が公布されたのであつた。之の計畫は道路の計畫、河川の堀鑿、埋築、大小公園の設計、鐵道市場、墓地、火葬場の問題に至るまで相當よく完備したものでしかも當時の內閣の斯くの如き意氣込の下に成り立つものであるに拘はらず、事業の進行を圖りつゝあつた間に、市民は其負擔に堪へずといふ理由と、設計は尙早であるから後日に繰り延しても宜いといふ理由の下に等閑に附せられて、或は延期となり、或は中止となり、或は設計の廢止となつて、其後曲りなりにも主なる道路の取擴げられたると、路面電路の布設せられたると、上水道の設計を樹立せられて其の實施せられたると、下水道の設計が確定して現に其工事中に在るものとの外は殆ど此の大計畫は其の三分の一も成就しなかつた。

しかも是等の設計は一般文化の進むに對して只部分的にそれに間に合せを行つた丈けで、總ての設備が都市の將來の發展を見込んで計畫せられたものではなかつた。そのために一般文化の向上と都市の狀態とが全然背馳したものになり、其弊深く如何ともし難いものになつて居つた。大正八年四月に新に都市計畫法が發布せられてから既に四年、種々の事情は當局の計畫を

妨げがちであつた。或は日を經るに從て最初の考案も漸次に芳川案の如き運命に近いものになつたかも知れない狀態に在つたのである。恰度其折柄のこの大火災、帝都の重要部の大かたを焦土と化せしめた此の大火災は、帝都の根本計畫を確立しこれを實施するに、最も好機會を與へたものであると云ふことが出來る。今日稱へられつゝある所は、名は帝都の復興であるが實は帝都の大改造である。

嘗て芳川知事案が元老院の反對を招いたその反對論の一項に、其火災に罹つて燒失せる跡を大道路に改正するといふ事は之れ社會人民の不幸災害を利用するものであるから不都合であると息卷いてゐるところがある。今日に於ては最早そんな愚かなことを云ふものもあるまいし、大災に逢ふて玆に二旬、都民は此大災に辟易せず、溢るゝばかりの復興の氣が旺盛であるが日を經るに從て人心の弛緩を來し、市民各自の小利益問題から或は反對意見の宣傳となり、或は請託の運動となる等此の大計畫に對して中途に於て姑息因循なる思想の滔らん事をおそるゝものである。計畫の中心にある當局者はよろしく遠大の理想を提げて、斷じて力を以て勇進せられんことを希望するものである。

項羽に依て燒かれた阿房宮の火が三十日消えなかつたといふ話や、トロヤ落城の火焰が永く續いたといふ話も、單なる歷史の語り草に過ぎぬ。ネロの燒いたといふ羅馬市の一部も、今から考へれば極めて小面積のものであつた。人は都市の大火の例として四日間に亘つて燃えた一六六六年のロンドン大火を擧げるが、之れとても人口八萬程の都市に於て家屋一萬三千二百と九十箇等とを燒失したに過ぎない。一八七一年のシカゴの大火も燒出された人が十萬人燒かれた建物が三萬に、損害二億弗といふ事であり、又一九〇六年四月十八日水曜日の朝に起つて土曜日の午後に終つた桑港の大地震に依て引起せる火災の大きかつた事もいはれるが、之れとても桑港の人口は僅か三十萬程であつたといふことだ。

是等を此度の東京の大火が燒失面積二、一四七五方里(九月十五日各新聞所載陸軍陸地側量部調査に依る)、燒失建物の棟數十七萬二千六百廿四棟、延坪四百十一萬七千五百餘坪、(九月廿二日の各新聞所載の數字に依る)、死者六萬七千餘人、行方不明者三萬八千九百餘人(九月二十三日新聞所載警視廳調査に依る)に比すれば驚く可き小規模のものである。此度の火災は恐らくは有史以來の世界第一の大火であらう。

此東京の大災害に對する物質上の損害見積は、個人所有の美術品の如きものまでも算入して計算するならば、例へば新聞の

傳ふる所に依り東京帝國圖書館所藏の圖書が一億などゝいはれる事などを考へて、人の意見の一致するやうな適確な數字を以てこれを示す事は到底容易の事ではないが、大體の事はわかり得ると思ふ。先づ建築物だけの損害を見んに、九月二十二日各新聞所載の記事に依り、官公衙、學校圖書館、銀行會社、工場倉庫、劇場、住宅等の建築を總て引きくるめて、坪當り平均時價百五十圓と見做し、燒失坪數四百十一萬八千坪（內住宅の坪數三百〇五萬四千餘であつて、其の大部分は裏通りの粗末なものであるから門塀の如き附屬物を算入しても全部を百五十圓と見做す事は不當でないと思ふ）に對して約六億二千萬圓の數字を得、然かもこれ等建築の復舊には、構造は總て耐火耐震的の鐵筋コンクリートとなし、質素のものとしても煖房、電燈、水道等の設備を合算して住宅にて坪當り三百圓を要す可く坪數三百〇五萬四千餘坪（燒失坪數だけのものが建築せらるゝと見て）に對して九億一千六百餘萬圓を要し、官公衙學校圖書館、銀行會社、劇場娛樂場、工場倉庫等を平均して坪當り四百圓と見做し百〇六萬三千坪に對して四億二千五百萬圓を要す。卽ち兩者を合算して十三億四千餘萬圓となる。これが復舊に要する建築費であるが、他の營造費は何程を要するか不明である。後藤子爵市長時代の八億圓計畫なるものが如何なる程度のものであるかを知らないが、此度は思切つた計畫を實行するとしてこの二倍を計上したら或は充分でなからうかと推測する。するとこれが十六億圓、建築費と合すると建築及び總ての營造物に要する金額、約三十億圓となる。なほ此の他に假設建築の工費がある。若し大計畫のプランの決定が遲くれると見て、假設建築は最小限度に於て消失家屋の三分の一は建築せらるべく、此の坪數百三十七萬三千餘坪、工費平均百圓强と見て一億數千萬圓を計上せねばならぬであらう。

是等の金額を大正十二年度の收入豫算十三億五千萬に比較すると決して少數のものとは云ひ難い。而も東京は日本の政治、經濟、文化の中心である。苟も遠大の眼光を有する人ならば、思ひ切つて此機會に乘じて行詰つた都市計畫に快刀を振ふべきである。都市は常に成長する。都市の諸機關は少年時代から進んで壯年時代に及んでも用ひられるやうにして置かなければならない。思ひ切つた計畫をして置かないと悔を後日に殘すものである。

復舊の經費はいづれ公債政策に依るものであるべく、それが如何に調達され、如何なる形式に於て消費せられるやに就いては、我々は門外漢であるけれども、之れが或種の戰後の慘害の如くに此都市を中心とせる地方の生産力と消費力とが元の如く

に在るのであるから、之等の地方を背景とする都市の恢復は一切の産業を傷けられたる場合に比べて極めて迅速であるべき筈だ。殊に今日此大災害に遭遇して各人の嘗めたる體驗から得た勇氣と、簡易生活の方式とを以てしたら蓋し其恢復は日を期して待つべきものであらう。只最も恐るべきは長い間に於ける人心の弛緩である。

以上數字は三十億以上にのぼつては居れど、政府或は市の直接負擔に屬する所のものは是等の經費の約半額であり、其支出は或る年度割になるものであらうし、初年度に於ては行ふ可きは一般計畫の確定であつて、經費は比較的少額で濟む事であり、又最も力をそゝぎて且つ急速に設計を進めなければならないのは燒失區域の地區割と道路との問題であつて、他の區域に於ける總ての事項や燒失區域内に於ても高速度鐵道や運河の資地の施工等の如きは、これをずつと後廻しにして考へて差支ないのである。

先づ新帝都の地域に付て考ふるに、地域は大體に於て現在のそれ卽ち自然に發達したる形式を出ないであらう。詳しく云へば、日比谷から永田町にかけて帝都中樞區域卽ち官公署の所在地、櫻田本鄕町から日比谷を經て神田橋に至る一帶が事務所區域の中心で、日本橋區神田區京橋區が主として商業地域（勿論裏通りは住宅）、深川區本所區が工業地域、淺草區下谷區が商業住宅の混合、燒けなかつた山の手は主として住宅地域と斯うであらう。同時に中央市場の位置が定まらねばならぬ。

國内の幹線交通路を都市の中心に導いて、四通八達の要衝とし、これに對して中心地を圍繞して幾重にも環狀道路の設けられる必要がある。斯の如き計畫に對しては在來の建築物其他のために、甚だしく困難であつた所が、此際最も容易に計畫を進める事が出來るのである。是等の要路は孰れも二十四間以上に計畫する必要があらう。其路面には電車が布かるゝ事勿論である。そしてこれと關聯して大下水の幹線が定められねばならぬ。

適當な距離に少くとも三四萬坪の公園及び廣場が設けられ、これを結付くる廣い逍遙道路のプランがまた必要である。世界の都市に於て最も廣き公園地を有するのはワシントン市であつて人口一人に付き公園坪數十八坪の割である。これに對して東京の〇・三坪は其の最小のものである。パリ、シカゴ等に於て二坪强に當る。少くとも此の位の面積は有せしめたいものである。殊に此度の火災に依つて、萬一の場合「火よけ地」として適當の距離に適當の大さの公園廣場の必要なる事は誰しも異議なき所であらう。

郊外に於ける主要町村から帝都の中心に向つて高速度鐵道線が定められ、運河の新鑿線が定められねばならぬ。

以上の主要道路、大下水の幹線、公園の大さと位置、高速度鐵道線、運河の新鑿線、是等のプランの設定が最も重要なものであつて且つ最も急速に定められなければならぬものに屬する。ところがこれが中々容易でない、これが都市計畫の根本をなすものであつて、中々面倒である。此の研究には當事者は最も心血をそゝいで最も理想的のものを作り上げねばならぬ。歐米の都市に於て此の根本計畫を誤りたてたために今日甚だしい不便を感ずるに至り如何ともし難く困りぬいて居る都市を數ふる事が出來る。東京の此度の如く焦土の上に線を引く事の出來る場合には、自然の地勢上、主要道路の多くは在來のものに依る可きではあるが餘りにそれに拘泥せられる事なく思切つて理想の線を描く可きである。地下埋設物の如きも此際充分なる整理をなして一定の暗渠内におさむべきものであるから、これ等に拘泥する必要は毫もないのである。

次が土地區劃の整理である。此度の如き焦土の上に新しく街衢を定めんとする場合は、區劃整理といふよりは寧ろ區劃設定といふ方が當るかも知れぬ。即ち四方を道路に依つて取り巻かれた町の區劃を定むる事である。もつと解易く云へば新しく町を作つて行くその町割りである。恐らくは此の點が最も市民の反對を受ける所であらう。これが遂行には局に當る人々の熱誠に待たねばならぬ、芳川知事案當時の故芳川伯、故山縣公等の意氣に待たねばならぬ。

街路は最小限度を六間とす可く、一區劃は地域に依つて自ら異るべしと雖も、表通りに面して百間程横の通りに面して三十間位を標準とすべきであらう。實施の方法としては各自の私有地を總て一時は買上げをなし、整理の上に所有者に優先權を有せしめて拂下ぐる形式によるより外はあるまい。

以上の事項が都市の復興——といはんよりは寧ろ此の機會を以て帝都百年の大計を定むべき大都市計畫の最大重要事項であつて、これさへ定まらば建物の新築はどし〳〵始められるもので、港灣の修築や、河川の實施的改修、上水道の擴張、路面舖裝、公園及び廣場の實際的施設、教育機關の擴張、社會事業に關する各種の施設、電氣及瓦斯事業の改善、住宅地の經營、葬場、納骨堂、墓地、火葬場の新設の如きは緩急宜きに應じて段々とやつて行つてよく、中には十年、時にはそれ以上の計畫にしても宜いものもあらう。

兎に角爲政者は將來を見込して思ひ切つた理想的な計畫を立つべきで、市民は各自の小さい利益を捨てゝ翕然として之れに

集り、從まず撓ゆまず實行に向つて力を竭さんことを望むのである。

東京築港の如きは徒らに大計畫の實行を紛糾せしむるものであるから、將來必要ある場合には如何やうともなり得るやうに路線その他の計畫をなしおくに止めて、此際提出せざるをよしと考へる。譬へ此の大都市の物資の輸出入を在來の如く横濱港によらしむるとしても、帝都の商工業の發達に對しての影響は差して大なるものではない筈と思ふ。

次は建物の建築問題であるが、當局者は間口の小さき各自思ひ／＼の建築の發生する事を極力避くる方針を執り、集合的大建築を起さしむべきであつて、其の方法としては政府の保護の下に大建築會社を起さしめ、此の會社をして建築資金の貸出し工事の請負等を擔任せしむるを最も策の得たるものと考へる。區劃の整理が理想的に成り立つても、是等建築に關する研究が充分に行はれなければ、東京は大計畫の上に置かれたる村落として永く殘るであらう事をおそれる。

扨てこれに關聯して考へられる事は耐震耐火の大建築問題であるが、今回の地震に依つて、合理的の鐵骨鐵筋コンクリート造ならば、高さ百尺、七階―八階の建築を下町 地盤の悪い所にでも安心して建て得らるゝ事が實證せられたのである。火災に對しては事實その構造が耐火的であつたにしても大抵は燒かれてゐる、然し實體が鐵筋コクリートよりなれる建築は延燒を受けても、それは被覆材や窓や木部だけに止まり、其復舊は極めて容易に其損失は全建築費の五割以下に止まるべく、孰れにしても四方より猛火に包まれた耐火建築は譬へ其被覆物なりと熱に依つて變化を受けたに相違ないが、斯くの如き場合に於ては上等の金庫でもない限りは到底抵抗し能はぬものである。若し既に早く都市計劃が實行せられ、地域の設定も防火線の設置も行はれ建築物も充分に實施せられて居たならば、吾々のいふ耐火構造は確かに完全に目的を達した筈である。要するに新都市計劃のもとに耐震耐火の大建築は安全に實現せしめ得る事を保證するものである。

次に考ふる事は日本の新帝都には特有の建築が欲しい事である。在來西洋より輸入せられた建築には、新時代の科學を基とした構造と共に彼等特種の傳統的形が附着して入つて來た。例へば獨乙に學んだものは獨逸特有の形と装飾、英吉利に學んだものは英吉利特有の形と装飾といふやうに、構造と一緒になつて入つて來た。しかも夫等の形や装飾は吾々に取つては何等の意味をなさぬものであつて、吾々の欲しかつたのは是等先進國の新時代の科學を基とした構造であつたのである。今日の建築

家の殆ど總ては寧ろこの點に付て目醒めてゐるといつてよい。目醒めてはゐるが事實上の問題として未だ如是等の吾人に取つて無意味な形と裝飾とより脫却してゐない。これ全く吾人建築家に取つては余りに學ぶ可き事の多くして我等の民族藝術に對して研究と理解とを持つ時間の乏しかつたからであつた。しかも近時日本に於ける新建築構造法は一通り揃つたといひ得る狀態にある。玆に吾人は眞に我民族藝術を味ひ得可き時を得たのである。在來と雖も是等の研究がなされぬ譯でもなかつたが、その研究は餘りに智的で客觀的であつた。批評家や歷史家に依てなされるものは問はず、苟くも製作者に依つてなされるものはそれは情的に主觀的でなければならぬ、自己のことに特有の建築と稱するは決して桃山式の唐破風や藤原氏の蟇股を所謂西洋式構造の不思議な場所におかれたものをさすのではない。議論は別に存するから玆には簡單に述べる事にするが、歷史にあらはれたる我が民族性は、肉厚の彫刻的に表現せしむるには余りに簡素で輕快である。新帝都の新建築はよろしく新時代に適合し、民族精神を發揮したる「さつぱり」として淸らかなものに作らるゝやうに、吾人建築家の相互に努力せられん事を希望するものである。新帝都の建築をして意義あるものたらしむる事は吾々の任務である。

當分商業の繁榮は不燒失地の各部の中心地、例へば四谷通り、三田通り、神樂坂通り、白山上などに見られるが、是等は孰れも地勢上小圈域の中心に止り、域の廣さに定まりある以上、到底以前の日本橋通や銀座のやうにはならない。さりとて元の日本橋や銀座のやうに不燒失地と離れて孤立した所が直ちに繁榮を來す可く建築が復興せらるゝと見る事も出來ない。最も早く繁榮の中心地となるは、神田美土代町小川町神保町附近、芝櫻田本鄕町から琴平町や愛宕町の方へかけてゞあらう。就中、若し神田橋から小川町に突き當る電車路を此際甲賀町紅梅町を貫きてお茶の水に出でゝ高師と順天堂の敷地を橫斷して大學前の線と連絡せしめ、また九段須田町間を小川町を迂廻せしむる事なく甲賀町を貫いて前者と約直角ならしめたならば、此の二線の街路は一時最も早く活氣を呈する商業地となるのみならず將來も重要なる市街の一となるであらう。

最後に、假建築物の存續期間を五ケ年としたのは、少し長すぎはせなかつたらうかといふ事を述べて此の稿を結ばうと思ふ。事實此勅令が出てから、バラックを建てやうとする人達は孰れも十年位は保つ半永久的のものにしやうとして居る。

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ

煙草も一度「カロツト」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

[illegible]震災御見舞
工場無事
別記の處で營業開始致し
候間倍舊御用命願上候

昨年十月十三日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御注文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロツト」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確心を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロツト」を口より放して今度は舊煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですねー、驚いたと叫いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロツト」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんねー」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞贊下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロツト」が多くの人に認められて來た事の本懷を述べて暇をして參りました、降るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御獎勵の言葉を述べて下さいました。

弊堂は日比谷交叉點から銀座に向つて行けば右側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロツト」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徵

外見少も從煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完除すべし。

日、英、米專賣特許出願中

カロツト味（百日分）金貳圓
カロツト具（永久使用 銀模樣入）金五拾錢
同 象牙サツク入 金壹圓五拾錢
一組

送料（內地十八錢 海外四十八錢）
小替送料（內地卅九錢 海外三十五錢）

御注文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて發品可仕候

東京府大森不入斗四五壹

榮川堂

電話丸の內一九一七 振替東京五二九壹壹



大泉萬歲！黑石萬歲！

大泉黑石

一

ナポレオン第一世と俺とは、巳年の八白土星だ。高島呑象先生の占ひによると、俺の顏は普賢菩薩のやうに優しいが、内心は八幡太郎のやうに剛健だから、二十一になると身分不相應の出世をするさうだ。ことによるとナポレオン位にはなるかも知れないと思つて、待つてゐた。俺は京都の南禪寺境内にある門番小屋から、京極の青年會館へ、毎晩出掛けるのだ。そこで一時間三錢の英語を、子ども達に敎へながら、その金で高等學校の工科へ通つてゐたのだ。ところへ、ナポレオンになる年がやつて來たから、獨りで喜んでゐると學校から追ひ出されたので意外だつた。京都は子どもでも油斷が出來ない。英語の敎へ賃を持つて來る日に、申し合せて皆姿をくらましたから、一文なしでまごついてゐると、今度は高等學校の小使ひが南禪寺へ來て、俺の月謝が大ぶん滯つて困るから、あす一杯に納めないと、氣の毒だが除名すると脅かした。俺は子ども達の金をそつちへ廻すことにして安心してゐたのがこの始末と來た。孤城落日。腹背の楚歌だ。眼の色をかへて金の算段に京都の町を、上つたり下つたりしてゐるうちに日がくれて、へと／＼にくたびれて戻るところを待ちうけて俺は除名された。これが身分不相應の出世なら、身分相應ぐらいだと、水も飲めないだらう。驚くべき呑象の嘘つきだ。おとなしくしてゐると散々な目に會

ふ。これから心を入れ替へて、なるべく悪いことばかりしやう。そしたらどうにか食つて行けるだらうと思つて京都の借金を踏み倒した。これは後の話だが、俺を信用してゐた米屋に酒屋が警察に訴へて、俺は京橋の築地署に呼び出されたことがある。とり敢へず出掛けて行つて署長の前で煙草を喫してゐると頭から火の出るやうに怒られた「京都で夜逃げをしたのはお前か！何だつてそんなつまらないことをするんだ」と署長が俺の風態をジロジロ見ながら鹿爪らしく怒鳴つたが、俺も腹が立つから「洒落や冗談に夜逃げが出來るものか」と怒鳴り返してやると、これでは迚もお話にならぬとでも思つたのか、署長がニヤ／＼笑ひながら「とにかく借りたものだから、返す意志はあるだらうな？」と云ひ出した。そこで俺はきつぱり宣言してやつた「その通りです！返す了見は大いにありますが、返す見込みはちつともない！」すると署長が感心して「先方にはさう云ふとくから、金が出來次第に返したまへ。」と云つた。京都に向つて、借りたものだから、返す意志はあると云ふ電報でも打つ考へだらうと思ひながら、俺は署長に電車賃を借りて別れたことがある。俺はあんまり忌々しいから東京へ走つたのだ。百日滅法に口を探して、月島海岸の月島造船所に入つた。そこの鑄物工場で朝から晩まで砂を掘つたり銑鐵を擔いでさへゐれば、四十七錢になるから、骨は折れるけれども、三錢の英語よりは確かだ。俺は困ると何でもする。實は京橋邊を歩いてゐると電信柱に人足募集のビラが貼つてあるのを見て來たのだ。目を廻すほどの造船所ではないが世界戰爭のお蔭で忙しさうだつた。俺は受付から鑄物工場へ廻された。高等學校の帽子をかぶつて袴を佩いてゐる俺を見て、岩蛸みたいな圖體の親方が「おめえに仕事が出來るか？」と頭から脅かしたもんだ。「出來るか、出來ないかやつて見ます」と俺は言つた。疊なら百枚も敷かるやうなトタン張りの工場を一渡り見渡すと、何のことはないダンテの神曲に出て來る地獄だ。床は一面の深い砂で、歯車やシリンダアの型がつくつてある。工場の外の熔鑛爐からクレインで運ばれる赤い銑鐵の湯が、旨い具合ひに型の中へ注ぎ込まれる。砂は黄色い焔をあげて燃ゆる。俺は砂の燃えるのを始めて見た。まるで硫黄獄の噴火だ。その火口の間を印度の仁王みたいな職工どもが素つ裸になつて飛び歩く。俺はその砂を掘つたり埋めたりする役目だつた。それがすむと工場の岸についた船から十六七貫のヅクの棒を擔いで荷上するのだが、成るほど、俺に出來るかしらと少々心細くなつた。しかし、やつて見れば何でも出來るものだ。燒芋屋の釜ん中に入つたつもりで、煙の出る熱い砂をシャベルで掘り上げると矢張り人並に手ぎわよく穴が

あくから一人前の土方になつたやうな氣がして頼もしかつたが、十四貫あるなしの俺が、自分よりも重い鉄の棒をおんぶして船を上るのだ。よく潰れないもんだと思ふと京都が恨めしくなり、涙と汗と一緒に出た。ノラクラしてゐた天罰だと思へば諦めもつくが、何も知らない、肩と腰が可哀相だ。一日で腫れ上つて了つた。さうして貰つた初日の四十七錢を、手の平に列べて眺めてゐると、岩蛸の親方に工場の辨當代を差引かれて七錢殘つたから「この七錢で一晩泊めてくれる宿はありませんか」と聞いた。「七錢？フン。おめえ、家がねえのか？」と親方が云ふのだ。「ぢや、俺ンチに來い。おめえ見たいな書生が一人ゐらア。すぐ工場の裏河岸だよ。」この通り、豪氣に親切な親方なんだ。職工の取締りとか、土方の監督なんてものは、この位の肚がなければ勤まらないのかも知れない。意地きたない話だが旨く行けばコップ酒の一杯にもありつけさうな景氣だと勇み立つて、親方の家へ出かけた。少なくとも五十や百の男に押し寄せて來られたつて恥かしくないやうな構への戸口に、酒樽の二ツ位は積んであるだらうと思つたのは大違ひだつた。月島の名物はコレラ患者に土左衛門だ。何處から眺めても錢の屑で一杯だ。東京のゴミ溜めだ。そのゴミ溜めの中に、サツポロビールの空き箱がゴロ／＼棄てゝあるやうに見えるが、近づくとビール箱よりは心もち大きい家で、人間が住んでゐる。その一番はしに置いてあるのが親方の邸だから驚いた。東京灣の泥臭い潮風が戸口から入つて來ると眞つ直ぐに隣りの臺所へぬけて行く。たつた二タ間の、その部屋の奥の方に、岩蛸の親分が一人の小娘を飼つてゐた。親方の年は五十幾つで、「やらずの傳兵衛」と云ふ名まへだ。小娘の年は十一か十二で、お駒と云つた。岩蛸の子どもだ。母親はゐなかつた。そして、上り口の六疊にころがつてゐるのが、俺みたいな書生で、俺よりは一と足さきに此海岸へ流れついた願人坊主と云つた恰好の、正直さうな田舎者だつた。やつぱり鑄物場の人足らしい。同じ筆法で飛び込んで來たんだらう。戸口に立ち惑つてゐると、岩蛸の親方が後からやつて來て「サア。ずつと入んな。こゝに居るのが先刻云つた書生の萬公だ。あそこにゐるのがお駒だ。」と俺を引き合せた。この寒さに鼠色の浴衣一枚で、よく凌げる書生だと思つて聞いて見ると、生れは仙臺の山奥だから寒さには負けないと言つた。この書生の萬公が、「あゝ。さうですか。近來の珍客だな。僕は平田萬之助てんです。去年の文檢に及第して一高の入學試驗にハネられましたが、今年もやるつもりで、それまで厄介になつてゐますから、どうかよろしく。」と云つた。呉服屋の藏掃ひみたいな初對面の挨拶だ。聞きもしないことまで一人で饒舌つて

ゐると、お駒が臺處から箱辨當を二つ持つて來た。一つは岩蛸の親方が裏口へ抱へて行つて食ひ始める。「おなかゞ空いたでせうから、お上んなさい。」とお駒が云ふと、「サア。サア。まづいだらうが食いたまへ。僕等はこんな箱べんで生活してゐるんだよ。」と言ふから、そんな世帶もあるのかしらと思ひながら、泥足のまゝ上り口に腰かけて、箸をつけて見ると、成るほど正直にまづくて迚も冷めたい。飯粒と飯粒の間には氷が張つてゐる。

「箱の中まで冬とは凝つたもんだね。硝子を噛るやうだ。」

俺が恐れ入つて見せると、近來の貧客京都より來る。また樂しからずやてな顏つきで見てゐる平口萬之助が、ニコ／＼笑ひながら、

「冷めたからうが、辨當は辨當だ。すん棒すたまへ。あつはつは。」と云つた。だから、

「狹くはあらうが、家は家だ。我慢したまへ、はどうです。今晩から一緒に寢かして貰ひますよ。」と俺が云ふと、「いや全く。かう云つちや何だが、僕は此家に來て一と月になるけど、足をのばして寢たことがありません。貸し蒲團が腰まできやないんだ。」

親方は默つて聞いてゐた。聾かも知れない。かう云ふ成り行きだから、何は兎もあれこの晩から此四人が、犬に食れないやうに、一と塊りになつて寢た。寢るまでが大變だ。何分寒いものだから、佃島あたりの燒酎を買ひ込んで安つぽく醉つ拂ふのだ。岩蛸の顏が茹たやうに赤くなると、願人坊主の萬之助が尺八を持ち出して「深川」を吹くのだ。これが始まると隣り近所の職工どもがゾロ／＼つながつてやつて來る。一緒になつて騷ぐと、ビール箱のやうな家が東西南北にゆれ出す。すると岩蛸の親方が、疊の上にひつくり返つて、腹の上に娘のお駒をのせる。よほど以前からやると見えて、腹の上のお駒は馴れたものだ。兩手をひろげて釣合ひをとりながら、岩蛸の胸の方へソロリソロリと渡つて行く。も一と足で顏だと云ふところで「イヨツ！」と云ふ掛け聲と一緒に、岩蛸の親方が足を上げる拍子に、お駒がピンと跳び上つて毛だらけの足にチョイと腰かける。これがこの親子の藝當で一番やりにくいところだと見えて、とき／＼しくじるが、旨く行くと職工どもがヤンヤと喝采する。これがすむまで俺は起きてゐなければ義理が惡かつた。こんな風だから、京都の生活つぷりとは似ても似つかないものだ。朝は四時に起きる。造船所へ行くと鐵にまみれて十二時間も砂を掘つたり擔いだりする。ビール箱の家に戻ると骨ぬきになつて了ふ。それでも食つて行けるから有り難いとは感ずるが、十日

も同じことをくり返してゐるうちに考へた。人間は横着なものだ。一切れのパンさへあればと思つたのが、少し立つと一切れのパンでは滿足が出來なくなつた。これではウダツが上らぬ。何とか工夫をつけて、も一度學校へ行かうと思ひ立つた。一ツ部屋に三十年同居してゐても、相手の了見が知れないことがあるさうだ。こんなところへ流れ込むほど智慧もなければ遠慮もない俺と萬之助のことだから、始めつから胃袋の底まで窓け放しだ。お互にほかの職工どもと違つて、リードルの一ツも讀めるのだから、仲よくなると忽ち萬之助の方から不平を持ち出した。萬之助は仙臺の生れで、中等學校の檢定試驗にパツスしたのが何より自慢の男なのだ。この男と一緒に四十七錢の端足金をもらつて工場の門を出ると直ぐ始めた。

「君はどう云う意見かスらないが、ヅウ十二時間汗水垂らして四ヅウ七錢と云ふ法はないよ！一時間に百十貫の銑鐵を船から擔ぎ上げるのだから、一日に五噸は運ぶのだ。牛や馬に曳かせて見たまへ！十圓はふんだくられるぜ！四ヅウ七錢とは何事だ！」

「四十七錢とは何事だ！」と俺も癪に障つてゐるのだから怒鳴つた。「意見も法もありやしない。あそこを見ろ！」と俺は向河岸の明石町を顎の先でしやくつて見せた。

「あの赤いスレート張りの薄つぺらた西洋館の態を見ろ！岐阜提灯みたいな洋服を引つかぶつたお袋がママ面をしてゴロついてやがる！電車の中で尻をまくる親父が、パパ面をしてゐやがる！アメリカの俗物どもが、暇つぶしに拵へた碌でもないものを背負ひ込んで文化生活とは何のこつた！あそこに住んでゐる金持ち共は、みんなこの會社の株主と重役なんだよ。いゝかね。それを食へなければ食へないやうな眼つきで、バラツク長屋の窓から羨ましさうに眺めてゐる職工が意氣地なしなんだ。赤煉瓦の金持ち共は、大體俺たちを人間の數に入れてゐないのだ。だから半殺しにしといても平氣なんだ。かうやつて親方の世話になつてゐるから命だけはつないでゐるが、俺たちの體は今に摺り切れるんだ。」

「摺り切れちや困るだらう」

「四十七錢で摺り切れてたまるものか！」

俺と萬之助は四十七錢入りの紙袋をあけて見ながら溜息をついた。金がなくては困るけれども、金の顔を見ると、地軸の穴から洩れて來るやうな青臭い溜息が忍び出る。午後の六時ごろ、月島の海岸通りを見ると、いつも一面の深い霧があるだらう。あれは俺たちの溜息だ。晦日に月がないのもそのせいだらう。

「揩り切れないうちにやめやうか？」

と願人坊主の萬之助が云ひ出した。

「やめて勉强しやうか！」

と俺が煽動した。それが出來る位なら、始めつから鑄物工場なんぞに來やしないのだが、さて毎朝暗いうちに目を醒すと、あゝ！あゝ！また今日も十二時間、氷と鐵とに酷められるのかと思ふと、飯なんか食はずにゐたつて技師や監督の膨れッ面は見たくない了見になる。俺はこれでも負けず嫌ひだから、旅の空にゐるときは、故鄕へ戻れば米倉の七ツ位はころがつてゐるやうな顔をしてゐる。故鄕へ戻れば、旅の空に素敵もない別莊を二つばかり置いて來たやうなことを言ふから、貧乏はしても氣は大きいのだ。親方にはすまないけれども、大抵の我慢はするつもりの俺も、肩腰の痛いのを耐らえながら、十時すぎまでも十一時までも、岩蛸やお駒の腹鬱とおつき合ひをしなければ寢られないのは閉口だ。せめてこの願人坊主の萬之助の「深川」に旨いところがあれば、吉原だらうと洲崎だらうと、遊廓のあるところを片端から流し廻り、帽子の中に金を貰つてやる役目は俺が引き受けるのだが　早い話がヘカゴーヂーと、烏の啼くやうな尺八では、流石に氣が引ける。萬之助が聞いたら氣を惡くするかも知れないが、大將は丁度。シヤの坊さんが、アヴエ・マリヤの外に何も知らないやうに、「深川」一ツが財産なんだ。

だから俺は言つた。

「俺は今ちよつと旨いことを考へついたよ。明日は工場を休んで、東京中の柞俺を一軒あまさず覗いて廻つたら、勉强の出來る商賈が一ッや二ッは、きつとあるよ。」

すると萬之助が分別顔で「それも方法だ。スカス君。スン聞の廣告を見ると、俺たちで間に合ふかどうかスらんが、月給二百圓確實にくれると云ふところが、いくらもあるぜ」と言つた。

「そいつは嘘だよ。俺は工場へ來るまでに、專ら其の二百圓の口を尋ねて歩いたが、紳士でないと駄目だと云やがるんだ。保證金があつたらお出なさいと云やがるんだ。だから、俺の云ふ通りにするんだよ。メリヤス屋の番頭だらうが、牛乳屋の瓶洗ひだらうが、差し支へはない身分だから、よけりや、早速ながら手を分けてやらう。君は牛込から淺草の東北まわりだ。俺は赤坂から品川の西南まわりだ」と何だか汽車のやうな相談をした。讀者諸君に申し上げるが、この物語は俺と萬之助のことに限られてゐるのだから、氣をつけていたゞきたい。この時から彼は俺の智慧に敬服して、ひたすら俺の指揮に從ひ、俺の云ふことなら何でも素直に聞くやうになつた。萬之助が馬車馬なら

俺は差し詰め敗者の格だ。根が一本調子のボンツクに持つて來て、仙臺の山奥から出て來たばかりの世間知らずだ。萬之助が或るとき俺に向つて自慢をしたことがある。「君はプラマグブターの定理が解けるかい？」と彼が云ふのだ。「プラマグブターなんざ朝めし前だ。」と俺は答へた。「さう云つたもんぢやなからう。何しろ檢定試驗の問題に出たプラマグブターをだ、俺ほど完全に書いた者はないと云ふので、文部省の役人衆が賞めたもんだ。俺は林博士の講義本を三年かゝつて暗記してゐたんだ。俺の偉いところはその點ぢやないかと思ふんだがね。」と中學生のやうなことを得意さうに言つたものだ。こんな男だから俺よりも一ツ年上だが、頗る與し易い。決議がすむと、俺たちは翌日工場へ行くやうな振りをして、月島の一錢渡しを渡つた明石町で、右と左にフラ／＼と別れたのだ。ところが、結果は丸で問題にならなかつた。始めから解り切つた事でも、解り切れない俺たちのことだから、駄目なのは當り前だと云へば當り前だが、何分條件が六ケ敷い。「つかぬことをお尋ねしますが、朝から夕方まで暇で、夕方から夜にかけて、あんまり忙しくない商賣はありませんでせうか？」と、桂庵の暖簾の蔭から、ひもじさうな聲を出してお辭儀をすると、長火鉢の前にかしこまつてゐる亭主が俺の顏を見つめながら、長いこと呆れてゐるから、きまりが惡くなつて「サヨウナラ！」と出て行く。この寸法で赤坂の見附から芝の高輪まで歩いたら、踵の頭が紫色になり、耳が千切れさうになつた。ところが賴もしいことには、泉岳寺の前の不景氣な桂庵が、俺の來るのを去年の春から待つてゐたと云はぬばかりの哀れな笑顏で云ふのだ。「あんたには持つて來いの仕事がありやんすよ。どうでやんすか、品川宿の金時亭に行きなさらんか！晝はカラキシ暇でやんすぜ。」俺は「何分よろしくお賴みします」と云つた。金時だらうが山姥だらうが、有難い仕合せだ。亭主の話によると、金時亭は灘の正宗を廣告するために出してゐる洋食屋で、京濱電車の終點から二三軒目の小汚ない家ではあるが、お得意が品川宿の女郎屋だから、自轉車の尻に岡持ちを乘せて、往つたり來たりしてゐると、夜があけるほど繁昌するさうだ。花魁の心づけだけでも馬鹿にはなりやんせんと云つた。その心づけは、こつちでやるんだか貰ふんだか、念のため聞いて見やうと思つてゐると、俺の身なりをつく／＼と眺めてゐた蒼白い石塔のやうな亭主が、心配さうに云つた。「ときに、あんたは自轉車に乘れやんすだらうな？」。さあ乘つたことのあるのは、乳母車と汽車ぐらいなもんだから、乘れやんすかどうか知らないと云ふと、亭主は少々落膽した。それやいかんわい！どうでやんせう？乘れるやうな顏して行きなさ

らんか？月給は食べて十二圓だ。わしの方ぢや自轉車乘りを一人賴まれてゐるんだがな」一金はなくとも旦那のやうな顏をしてゐる。學問こそないが博士のやうな了見の俺のことだから、高の知れた自轉車に乘ることが出來ないと云ふのは面目ない話だが、何分危ないから「僕はこの通り脛が長いから、駈け足では駄目でせうか？」」水の中を泳いで間に合ふことなら月給は半分でもいゝと云ふと「そりやいかんわい！」と亭主はまた云ふた。

「いゝ格服だが、それで自轉車に乘れんとはな。惜しいもんでやすな！」。かうして只た一ツの口は取り逃がし、俺は悄然として月島の親方の家へ引き揚げた。佃の渡しに蹲んで頻りに悲觀してゐると、思ひがけない平口萬之助が船松町の方から揚々としてやつて來た。一緒に歸らぬと具合が惡いと思つてゐたので、いゝ鹽梅だ。ニコ〳〵してゐるところを見ると、願人坊主め、旨い口にありついたかしらと思つて聞いて見た。

「どうだい？　成功したか？」

「成功？　うん仕事かね？」と萬之助は、そんな小さい問題なんか取るに足らぬと云ふ態度で云ふのだ「いやどうも君、すつかり路に迷つてね。牛込と云ふから、早稲田の書生町へ行くつもりで電車に乘つて須田町で下ろされたから驚いて乘り替へたんだ。そして行つた先で早稲田大學の在り家を尋ねたんだ。大學の近くだから書生相手の口入屋があるだらうと思つたんだ。ところが、誰に聞いてもそんな家はないと云ふんだ。仕方がないから、あの邊をグル〳〵廻つてゐると十二階の下に出た。一度見物に來たこともあるから、こゝまで來りや、もう締たもんだ。河つぷりへ出て眞つ直ぐに行けば、ほどなく月島造船所の煙出しが見えると思つて活動寫眞小屋の前を通ると、「ルッズエルト鄕の虎狩り」を映してゐたんだ。滅多に來られないから見て來たが、あれよりや活劇の「快漢ロロー」の方が豪快でいゝね。あんな奴が君西洋にもゐるかなあ、」これで見ると願人坊主の萬之助は淺草公園で遊んで來たのだ。あんまり馬鹿げて居るから、親方の家に着くまで返事もしなかつた。此處まで來るとさて君の話は夏だか冬だかよく解らないが、一體どつちだと云ふ人があるかも知れないから、念のために一言辯ずるが、こんな鹽梅にムカツ腹を立てゝゐる俺と、しや〳〵してゐる山猿の萬之助とが、俊寛よろしくの格好でガタ〳〵顫えながら月島の海岸を歩いて歸る光景は、誰に見せたつて立派な冬だと云ふだらう。空き巣狙ひのやうな海の水か、いやな目つきで俺を見てやがる。掏摸みたいな潮風か俺の袖の下ばかり吹きつけやがる。しかし、寒さに敵はないで降參しやうかと思つてゐるのは俺ばかりじやない。辻々の交番に突然として突つ立つてゐる

卒塔婆のやうなお巡りさんまでが、いつもよりは背が低く見える。路ばたのゴミ溜めの中に、どちらを向いてゐるんだか解らないビール箱の長屋までが、平生よりは小さく見えて、頭の上に五錢銅貨みたいな月だ出て來たところを見れば、夜だと云ふことも解るが、一一そんなことを云つてる場合ではないのだ。そんな道草を食つてゐるよりは、一分でも早く家へ戻つて寢た方がいゝ。手も足も剃刀のやうに冷え込んでカチ／＼だ。寢てからゆつくり考へ直すより外に仕方がないとは思ふが、いつも造船所の會計係りに貰つて歸り、岩蛸の親方に渡すことにしてゐる砂だらけの四十七錢がないので、どうしたものかと獨りで氣を揉みながら、親方の家の戸口をコソ／＼入つた。「やらずの傳兵傳」が厭な眼つきで俺たちを睨みつけて矢ケ間敷く云ふだらうと心配しながら、奥の院の四疊を覗いて見ると、不思議なことがあるもので、親方の傳兵衛が燒酎のコツプをもつて胡座(あぐら)をかくと一杯ふさがる部屋の中には、鑄物部屋の小使ひが一人かしこまつてゐる。そして娘のお駒が、シク／＼泣きながら、よそ行きの羽織をひつかけてゐるのだ。その泣き顏が氣になつた。十一かそこいらの小娘のことだから、誰も何とも云はないやうなもの〻、たつた二ツの眼玉ばかりが黒耀石の模造品みたいに美しく光つてゐるところは、どうやら借り物ではないかしらと思はれるほど可愛い〻けれども、彼女の鼻は絶えざる進軍の曲を吹き鳴らしてゐるラファエルのラッパだ。彼女の口と云へば、只今一頭の鰐鮫を呑み込んだばかりだと云ふ形だ。しかも人間と云ふものは、どんなに持てない者でも一生に二度は大いに持てる――生れた時と死ぬ時――に拘らず、死ぬときも多分さうだらうと思ふが、この面相では生れた時だつてきつと持てなかつたに違ひないお駒坊が、すこし冗いかも知れないが、既にこの世では持てる見込のない顏一杯に涙をこすり廻しながら、「快漢ロロー」の夢でも見てゐる願人坊主の萬之助と俺を見るや否や、ワッと泣き出した姿は迚も凄かつた。「お駒ちやん。どうしたんだい？」と萬之助がびつくり顏で云つた。「君。どうしたと云ふのです？」と俺が鑄物部屋の小使ひにきいた。「お父ちやんがお駒ちやんを、おいてきぼりにして何處かへ遊びに行つたんだな？」と萬之助がまた云つた。「冗談ぢやねえ。遊びに行くやうなら結構さ。親方の傳兵衛さんは、ヂヤイヤント・クレインのテッペンから落つこつて大怪我だ。迚も明日(あす)の朝まで持ちきれまいと云ふことだが、あの氣象だから、ウン／＼呻めきながら、お駒を呼んでくれと云ふんだから、俺アこれから會社の病院に、お駒坊をつれて行くんだ。おめえたちは知らねえのか？」。知らないのかと云はれるとすまない氣持になつた。い

づれにしても驚くべき事件だ。息がつまつて暫く物が言へなかつた。俺のせいではないけれども、世話になる爺さんが死にかゝつてゐると聞いて打つちやつて置くのは不人情だから、俺たちも一緒に病院へ行かうと云ふと、邪魔になるばかりだから來るなと小使ひが言つた。そして、留守を頼むと云ひ乍ら、お駒をつれて暗やみの中へ出て行つた。病院は工場の中にある。その病院の寢床の上で唸つてゐる岩蛸の親方が、何だか自分の親のやうな氣がする。部屋の隅に轉つてゐる燒酎の德利を見ると可哀相で涙がこぼれた。そのとき「一體全體、何のためにチヤイヤント・クレインなんぞへ攀ぢ登つたんだらう？ありや君、船渠(ドック)の方だらう？」と俺が云ふと「なあに。人間が死ぬ時はみんなあゝなんだよ。行かなくつてもいゝところへ行くんだ。魔がさすのさな。大分以前のことだが、仙臺の家の隣りに小學校の女の先生がゐたんだ。朝起きて雨戸をくると、先生、井戸端で顔を洗ひ乍ら、お早うございますと云つたが、俺が厠に行つて蹲まうとすると、先生、いつの間にか窓の外へ來て、ずつと俺を見てゐるから、何をすてゐるのですかと云ふけれども默つてゐるんだ。おかすいなと思つたので、よく見ると、先生首を釣つてるんだ。厠の窓のそばに恰好な枝ぶりの松が一本あつたのさ。井戸端で物を言ふてから五分も立ちやすない。俺はびつくりすて怒鳴つた。すると先生の御亭主が飛んで來て抱きおろすたから際どいところで助かつたが、もう五六分で死んぢまうのだつたよ。あの時は魔がさすて、ふつと死ぬ氣になりますた。お騷がせすてすみません、と首釣り先生が後で禮に來て言ふたことなんだ。そんなものだよ。」と萬之助が言つた。人が息を引取るのは引汐の時刻だと云ふから、魔に憑かれた岩蛸の親方が成佛するのも明け方になるだらう。催促するやうに思はれては困るが、俺と萬之助は寒さと睡いのを我慢して待つてゐると、朝の四時頃、鑄物部屋の小使ひが、お駒をつれて戻つて來たから、成るほど爭はれないものだ。佛(ほとけ)はもう立ちましたか？と俺が言ふと、どことなく力を落してゐる樣子の小使ひが、俄かに憤然として「佛は立ちやしねえよ！」と叫んだから意外だつた。「安心しな。親方の容態はズンと見直して、此の分ぢや助かるかも知んねえてえことだよ。ところで此のお駒坊なんだ。病院に置いとくわけに行かねえ。と云つて誰も世話をしてくれる者もねえから連れて來たが、すまねえ、ちよいと見てくんな。頼むよ。俺ア夜があけると忙しいんだ。」さう言ふたかと思ふと、脊なかにおんぶされたまゝ、水洟を垂れてスヤ〳〵と眠つてゐるお駒を、疊の上に放り出すやうに置いて去つた。生れつきの小使ひだ。來たかと思ふと直ぐ飛んで行く。それまで俺

は、寒いのと草臥れたので、泌々と考へることも出來なかつたが、かうして岩蛸の親方が生きのびることになると、まづ〱いゝ梅鹽だ、親方に死なれると俺たちは今行き場に困るのだ。親方が病院から戻つて來るのは何時のことだか解らぬけれども、時が來ると雪の下から木の芽が萌える、俺たちの運勢も共うちには開けるだらう、も一度明日から砂かつぎにヅクの運搬だ。そこで差し當り小娘のお駒に風邪を引かれちや厄介だと思つて、石より冷たい蒲團をのべて寢かしてやつたが、こん、仕事は生れて始めてだ。鑄物部屋の小使の話によると、お駒の父の「やらずの傳兵衛」と佃島から通つて來る若いペンキ屋とが、ヂヤイヤント・クレインの上に、板の足場を拵へて仕事をしてゐたと云ふことだ。察するに岩蛸の親方は、職人の見廻りでも言ひつかつたのだらう。すると板を釣してゐる細綱が、クレインの絲と擦れ合つて、メリ〱と切れ始めたらしい。二人は墜落するより他に道がなかつた。下を見ると船架の波が白い牙をむいてゐる。だから落ちればそれきりだ。どうしたらいゝのだとペンキ屋が悲鳴をあげた。「しつかり捕まつてゐるんだ！動いちやいけねえぞ！そのうちに誰かサイド・ビイムにやつて來るから、聲の限り怒鳴るんだ！」と岩蛸の親方も必死だ。しかし、この命賭けの放れ業には誰も氣がつかない。皆辨當を食ひに行つたのだ。細綱は容赦なく切れる。ペンキ屋は宙にブラ下りたがら叫び出した。「後生だ！助けてくれ！俺の腕はぬけさうだ！だが、俺は死ぬことが出來ない！嬶と四人の餓鬼が干ぼしになるのだ！助けてくれ！」。差し迫る危険を忘れて親方は怒鳴つた。「慌てることたアねえぞ！腕がもぎ取れるまで綱に掴まつとれ！」二人の男がブラ下つてゐるから綱が持ち切れないと云ふことは既に解つてゐた。一人なら大丈夫だつた。ペンキ屋の泣き言によると、彼が死ねば女房と四人の子が干ぼしになる。親方が死ねば小娘のお駒が途方にくれる。しかし、乞食になる氣遣ひはない。仲間や乾兒が屹度世話してくれるだらう。細綱の壽命は一分の後に迫つた。このまゝだと二人は所詮助からぬ。「やらずの傳兵衛」はペンキ屋に向つて最後の警告を與へたのだ。「慌てることたアねえぞ！腕のもげるまで掴まつとれ！どうせ助からねえ命だ。おめえに取り憑いた死神は、俺が背負つてやらア！何が起らうと驚くんぢやねえぞ！」その刹那に親方の兩手が、細綱の端を離れた。ペンキ屋親子のために飛び下りたのだ。すると、その足場から、一間おきに左と右へ、電信柱の横木のやうな梁が突き出てゐる。小道具を巻上げるための滑子だ。親方の片脚が其突起の鉤にひつかゝつた。人間の脚だからいゝ、これが木か鐵なら火花をとばしてヘシ折れたかも知れな

い。親方の片脚が梁に打ちあたると、青い作業服が引き裂けて、體は宙に釣された。ところが、誰もゐないやうに見えるサイド・ビイムの蔭には、五六人の職工が、何も知らずにコツ〳〵と働いてゐたのだ。タラ〳〵と流れる脚の血は、職工の頭の上から滴り落ちた。多い月には全くいくらあるか解らない空中の悲劇は、かうして人の目についた。たちまち二人は擔ぎ下ろされた。ペンキ屋は助かつた。幸か不幸か、失神した親方は、死にきれずに病院へ運ばれたと云ふのだ。俺の話だから、この邊で二た月ばかり飛んでもよからう。死に損ないの親方が、病院からビール箱の家へ戻つて來たのは、二た月ほど後のことだ。病院で片脚を切りとられた爺さんが、松葉杖をかいこみながら、旅順から凱旋する乃木大將みたいに元氣なのを見ると、世の中には頑固な岩蛸もあるもんだと思つて感心したが、その二た月のあいだ、お駒の面倒を見てゐた俺たちは全くウンザリして了つた。そのお駒が、腹の上の綱渡りも出來なくなり、日がくれると物哀れな顔つきでコソ〳〵と寢て了ふので、いゝ鹽梅だと思つてゐると、今度は寢床の中の親方だ。俺と萬之助とが、目も鼻も砂だらけになつて工場から戻つて來ると退屈なもんだから幡隨院長兵衛を一席づゝ讀んでくれと言ふのだ。それも素讀みでは納りがつかない。文句に節をつけてへところは吉原仲之町。平野屋の奥座敷に於きまして、水野から受けた盃を、長兵衛が受けて返さうといたしまするとと十郎左衛門はクワツと怒つて『これ長兵衛！　天下の直參に返盃とは無禮であらうぞ！』と長い奴をヒツコ抜いた——と云ふ風にやるのだ。すると岩蛸の親方が長兵衛のやうな顔つきで膝の上に拳固をかためながら、蒲團から乘り出して來る。親方は幡隨院が大好きで、脚の一本や二本持つて行かれたつて驚くことはねえ。人間は萬事長兵衛の意氣だと一人で汗を掻いて力んだもんだが、浪花節みたいな講談にはすつかり參つた。萬之助は岡辻々しい男だから「深川」でも浪花節でも仙臺節でやつてのける。やらなければ其代りに毆ると云ふことなら、俺は毆られた方が有り難かつた。職人の親方の家に書生奉公するのも考へもんだ。燒酎の香に豆入りの大福餅を食ひながら、幡隨院みたいに構へてゐないと睨みがきかない。ずつと後で萬之助にだまされて一緒にシベリヤのチタ町へ出掛けた時もやはりさうだつた。俺だちの住居は高粱畑の中の新聞社なんだ。見ゆるものは一面の雪、聞ゆるものは鐵砲の音だ、場所がシベリヤだけに馬賊面をしてゐないと、幅がきかないから、大いに恐れ入つてゐると、おい君。そんなことでビク〳〵するやうぢや飯は食へないよ。と萬之助が高粱畑の中から偉さうな面をヌツと出したもん

だ。その顔を見ると成るほど人の五六人も殺して來たやうに見えたから、旨いもんだなア。しかし乍らその藝當迚も俺に向かないよ。高粱畑で定九郎の眞似が出來ないとあつちや新聞記者は勤まらんと云ふなら、たつた今辭職すると云つてやつた。すると萬之助が、泌々と俺の顔を眺めながら「そんな薄志弱行では、何處へ行つたつて成功は覺束ないよ。いやなら一人で日本へ歸るがいゝさ。歸つてメリヤス屋の小僧にでもなりたまへ」と溜息をついて云つた。メリヤス屋の小僧はいゝ思ひつきだ。俺が巳(み)の年だから、メリヤスみたいにノラリクラリしろと云ふ洒落としては顚人坊主の傑作だと思つたことがある。この調子で幡隨院や鼠小僧は肩が凝つて俺には向かないと云ふたら、この社會のことだから、親方はもとより仲間の職工どもが「そんな奴は頼もしくねえから、幇間(たいこもち)になれ」と云ふだらう。しかしどうやら辛棒して一冊の講談本がお了ひになる頃、月末がやつて來た。すると岩蛸の親方が俺にかう云つた。「すまねえが、今日工場へ行つたら、歸りにちよいと會計係に寄つて、俺の金を貰つてくんな」。「何の金ですか！」と俺はきいて見た。「何の金でもいゝから、俺がさう云つたと云や、すぐくれるよ」と親方が言つた。だから俺は仕事がすむとすぐさま鑄物工場の會計係に行つて親方の命令だから、立ちどころに金を寄越せと云つた。出納係の男は、猿みたいな眼つきで金庫の中から俺を見ながら「お前は何だい？」と云ふのだ。そこで俺は何となく唐犬權兵衛のやうな格好で「岩蛸の身内なだ。こゝにゐるのもさうだよ。」と、萬之助の袖を引張つて見せた。出納係りはニヤ〳〵笑ひながら帳簿をくつてソロバンを彈いてゐたが、目の前の卓子に据えてある青目の錢へ、ザクリと突つ込んだ右の手に、五十錢銀貨を七ツほど掴み上げた。それを封筒に入れて俺に渡した。岩蛸親分の口ぶりだと、何だか大倉喜八郎が預金の利息を五十萬圓だけ銀行から引き出して來いと云つた風の調子だつたから、三圓五十錢は間違ひだらうと云ふと、出納係りは猿のやうな目をグル〳〵動かしながら「傳兵衛が怪我をした月の仕事の分だ。日給七十錢で五日だから、五七の三十五ぢやないか。病院の費用は會社持ちだから安心しな。帳面(ちやうめん)では先月限り解傭になつてゐるから、これでお了ひさ。歸つたら傳兵衛にさう言つてくれ」と言つた。そして金網の窓をピシヤリと締めた。逃げ足の早い猿だ。五七の三十五に不思議はないけれども、これは少な過ぎるやうだと思つて親方の家へ戻ると、俺の捉、「やらずの傳兵衛」は三圓五十錢を消捌の上に叩きつけて起きなつた。それから俺と萬之助を向ふに廻して啖呵を切り出したのだ。

「人を馬鹿にするな！何だつてこれつぱつちの目腐れ金をオメオメと貰つて來やがつたんだ！さあ。も一ぺん行つて突つ返して來い！そもそもあの會社が、あれだけ大きくなつたのは一體誰さまのお蔭なんだ！」、俺と萬之助が面喰つてゐると、近所合壁のビール箱の中から岩蛸組の若い衆がドヤドヤと押しかけて來る。「みんな聽け！俺はあの工場に二十五年もつとめて來たのだ！それに怪我をして解傭とは何だ！サア。承知出來ねえ。この金を會計へ持つて行つて奴等の面に叩きつけて來い！」と岩蛸の親方は躍氣となつて怒り出した。流石の俺もムッとした。

そこで詳しい事情は知らないけれども、俺はこの年になるまで人の顔に銀貨を叩きつけたことはないから、いつでもやらうと云つてやつた。「銀貨は勿體ないから石にしやう」と萬之助が言つた。すると岩蛸か「ちよつと待て。叩きつけるのは何時でもいゝや」と妙な手つきで三圓五十錢を搔き集めたかと思ふと、サッサと蔵ひ込んだ。大將、惜しくなつたと見えて、今に銀貨を叩きつけてやるのは可哀相だから勘辨してやると云ふかも知れないと思つてゐると、大將自分の方から騒ぎ出した揚に「マア。靜かにしな！こいつア、會計の野郎共に掛け合つたつて、埒アあかねえや。」と云ひながら、俺たちをズラリと見廻した。

親分がこの調子だから、乾兒もその調子で、年百年十ビール箱の中から頭が出ないのだ。それから岩蛸の親方は頓人坊主の萬之助に向きをかへた。「おめえは物がわかるから、課長の小田卷に會つて來な。解傭は解傭で承知しねえこともねえが、二十五年勤續者の賞與や、一時手當金つてものはねえものかあるゝのかと！」。萬之助がモジモジしてゐると、事情をきいた職工どもが、一人々々磐梯山みたいな義憤を起して「やらずの傳兵衞」に同情した揚句が、皆で一緒に押しかけて行かう！次第によつては打ちのめしてやらアと勇み立つた。しかし、打ちのめすのは金をとつてからでも遲くないから、兎に角一應、萬之助に交渉させやうと親方が言つた。それもさうだ。金は會社のもの、拳骨はこつちのものだと云ふので、皆贊成した。交渉委員に選擧された肝腎の萬之助が、有り難くもあれば迷惑でもある樣子で、頻りに尻ごみしてゐるから、いつも何かあると一番先に尺八をさして乘り出すくせに、迷惑とは贅澤だ、親方なればこそ、君を選擧するのだから、かりそめにも選擧されるなんて、一生のうちに、これが始めでお了ひだと思つて行つて來いと云いふと、萬之助が、空き家みたいな顔に、火消壺みたいな溜息をつきながら「お了ひでもいゝから、君もついて來たまへ、僕はどうも口下手なもんだから、掛け合ひごとは駄目なんだよ。」と云つた。しかし、親方や仲間の職工どもの手前、意氣揚々と押

し出して行つたから、案外氣の小さい男だと思つた。親方の說によると、もと〳〵ペンキ屋を助けるためには、命なんか邪魔になる位ださうだ。この邊は幡隨院長兵衞らしくて偉い了見だと感心した。ところで、助けられたペンキ屋は、知つてゐるのか知らないのか、一度も顏出しをしない。それは兎に角、この有様では今に親娘二人が路頭に迷ふ。だから生きてゐる以上は何とか目鼻をつけて貰はねばならぬのださうだ。この點が岩蛸らしくて正直だ「俺の肚はさうなんだと、呉々にも課長の小田卷に云つてくれ」と彼は言つた。今頃は萬之助が頭を搔きながら、談判してゐるだらう。それから間もなく、二百や三百の金は貰つて來るだらうから、先づそのうちの五拾圓で生命保險をつける。のこりの百五拾圓か二百圓で工場の裏通りに空き屋があるから、小さい洋食專門の辨當屋をやる。馴染の工場へ賣り込むのだから商賣は立派に立つて行くつもりだ。と親方は先のことまで、ちやんと考へて云つた。「そいつア。いゝ商賣だ。」と職工の一人が羨ましがつた。「どうだらう親方、店の屋號を『日本兵』とつけちや。」と職工の一人が乘り出して云つた。この男は自分の誕生日と招魂社のお祭りには、カーキー色の軍服にメタルを一ツ下げて工場へやつて來て何もしない病氣がある。すると、その隣りにゐる職工が頓狂な聲で「日本兵とは旨くやつたな！」と叫んだ。これは盃を見ると直ぐ二〇三高地の激戰を持ち出す二等卒で、醉ひが廻るにつれて乃木大將が現はれ、乃木大將と自分と二人で戰爭をしたやうな調子になるが、お了ひにはオイ〳〵泣き出す癖があるのだ。「なアおい！豪氣ちやねえかよ！日本兵はテキにカツがおきまりだア。俺ツチの冷飯も、せめてはテキはカツと行きたいもんだなア。」と云ひながら、皆と一緒に笑ひ出した。さうなると、俺ら工場の鑄型の砂掘りは打ち切りとして、親方の帳簿でもつけてやることになるだらう。だん〳〵運が向いて來たな、と考へてゐるところへ、願人坊主の萬之助が、尺八を腰にさして體一ツで身ぶるひしながら戾つて來た。「どうした？萬公」と岩蛸の親方が目を輝やかせてきくのだ。「あア――皆の衆。この談判は迚も駄目だア――」と萬之助は投げ出すやうに云つた。

「駄目だア？」と親方は忽ち目の色を變へた。

「迚もいけねえ」と萬之助は泣きつ面だ。

「迚もいけねえとは？」とカーキー色が偏け損つたやうな聲を出した。滑稽と悲慘と一緒にやつて來たやうな連中の樣子を見てゐると可笑しくて氣の毒だつた。痛いのも痒いのも我慢は出來るが、可笑しいのを耐えるのはたまらないもんだ。たまらないのを堪へつけて、願人坊主の話を聞くと、會計課長の小田卷

がこんな挨拶をして萬之助を追つぱらつたんださうだ。
「こんなことを云ふたところで、お前みたいな人足には解るまいと思ふが、かりにお前とお前の女房が洋行をすると、印度のまん中で暗礁に乘り上げて船がひつくりかへるとするんだね。その時、お前たち夫婦が一ッの救命標に掴まつて波まに浮きつ沈みつの有りさまと來るのだ。一人だけならいゝけれども、二人でつかまると、大抵の救命標は沈んぢまわアね。どつちか一人が手を放なさんと諸死だ。いゝか。そのとき。もしもお前か悧巧な男だつたら、女房の頭に向つて必死の一撃を與へて置いて、波の中を突つぱなすのだ。そして自分の命を救ふだらう。それは正當な權利だ。緊急正當防禦として世界中の法律が許してくれるから、お前は人殺しの罪に問はれる心配はない。斷じてないよ。それにどうだあの傳兵衞は？え？「やらずの傳兵衞」ともあらうものが、自分のことは胴忘れしてペンキ屋を助けるなんて慌てふためきながら、足場の綱を手ばなすなんてベラボウなことがあるもんだ。ありやお前、體のいゝ自殺だよ。人間は先づ第一に自分を救ふことだ。他人は二の次さ。洒落た眞似をして人を恨む筋はありやしない。機械に捲き込まれて首がなくなつたとか、クレインの下敷になつて潰れちまつたと云ふなら兎に角。誰も見てゐないところで、好きにやつた行爲に對して、會社は勿論責任なんか持つ道理がないし、また一反不具者になつた者を傭ふ義務もないだらう？傳兵衞は知つてゐる筈だが、何十年勤續だらうと、何百年精勤だらうと、この會社の習慣として、本社員以外、つまり職工や職工頭の傭ひには賞與も手當てもないんだ。解つたかね。しかし、事情を聞くと氣の毒だから、一應重役と相談はして見るが　所詮六ケ敷からうと思ふから、當にしないでゐるやうに、お前からさう云ふてくれ。」

面白い話もあるものだ。かう云ふわけだから願人坊主の萬之助も、取り敢へず小田卷の姫に捲かれて歸つて來たのだが、これは一體どうしたもんだらうと、いよ〱ベソを搔いて云つた。カーキー色と二等卒がまづ先になり、若い職工どもがガヤガヤ騷ぎ出す。奇怪千萬な月末の夕暮が、騷ぎにまぎれてコソ〱とやつて來る。煤だらけの電燈に灯がついて、梅干みたいな明りが、恥かしさうに光り始める。營養不良の脊椎みたいに蒼ざめ膨れてゐる片脚の岩蛸が、ブルブル武者ぶるひして云つた。「よろしい！皆、默つてくんな！會社がその氣なら、俺にも考へがある。七ツ八ツからイロハを覺えてことがあらア。その七ツ八ツから俺は稼ぎに出たのだ。そしてこの年になるまで、工場の仕事を背負つて來たのだ！」。岩蛸の親方は工場主任みたいに肩

を榮やかした。「だから會社の事なら何でも知つてるんだ。俺ア何も働けなくなつた職工を、一生涯飼ひ殺しにしろたア言はねえ。せめて半年や一年は食つて行けるやうにしてくれるなら、俺たちはこんなに安心して働けるだらうと、常々言ふことなんだ。奴等は聞かねえよ。會社の都合ばかり考へてやがるんだ。俺にしろ誰にしろ、手足をもぎとられて、その日の生活に差し支へる段になりや、何を仕出かすか！こいつア、考へなくつたつて解ることだ！」カーキー色の後ろにゐた五分刈頭の職工が「さうだ。今日は親方の身の上だが、明日は俺とらだ」と云ふと、一番年をとつたのが「お互げえさまになア」と念佛を稱へた。するとこの連中の中で飛び切りの喧嘩つ早い男が昂奮して怒鳴り出した「だから俺が先刻から言つてるぢやねえか！この際ゴタつくにや及ばねえんだ。鑄物工場の道具を片つ端から打ち壞して、仕事の出來ねえやうにしてやりや、チツタア目が醒めるだらうツてんだ。ストライキやサボ位ぢや、トント應えねえと仰有いますからね」打ち壞しの一と事がすつかり氣に入つた。頭を叩き潰して尻がどうならうと構ふものか。萬之助は小田卷の云ひ草が胸に閊へてゐる。○は四十七錢が骨身にこたえてゐるのだから「やれ〱！」と燒酎の德利を振り廻して言ふた。反對者は一人もない。「やらずの傳兵衞」はお蔭さまで結構な仇討

ちが出來ると思つて喜んだ。明日が一日で休みだから、暗に紛れて誰もゐない工場へ打ち入らうと云ふことに決つた。そして五六人の連中は日向守のやうに見得を切つて歸つた。ところで此の陰謀組の職工どもは、實際やつてのけたか？「やりたいと思ふ事を、やつてのけるのは甚だ容易なことであるが、やりたいと思ふ事を、やらずに控へてゐるのはナカ〱六ケ敷しい。それが出來れば英雄になれる」なんて西洋人が云ふた。これに間違ひがないとすると、カーキー色を筆頭に五名の日向守は揃つて英雄になる素質があつた。俺と萬之助とが、鑄物工場の裏門にビク〱もので翌晩夜迴し立つてゐたが、誰もやつて來ないのだ。夜があけると機械の音がはじまつて煙突からは煙がのぼる。あんまり不思議だから連中に聞き糺すと、いやどうもあの晩は休みなもんだから、客が來ちやつてすつかり醉つ拂つちやつた。しかし、この十五日の晩には是が非でもやるつもりだから、親方に宜敷く云つてくれと言ふやうな譯だから成るほどと思つた。何だか借金の申しわけをするやうだ。ことによると又十五日も休みで醉つ拂ふつもりだらうと思つてゐると全くその通りで、工場は至つて無事に煙を吐き、會社は頗る安全にボロイ儲けをしてゐる有り樣だから、萬之助も氣がぬけたやうだ。俺もボツとした。おまけに當夜の勇士は丸で顏出しをした

くなり、工場の仕事からビール箱の長屋に戻つて來ると銘々鳴りを靜めて、躰唄さへ唄えないのだ。隣り近所の職工どもが、膽を潰すやうな銅鑼聲で親方は憤然と叫び出した。「やい！手前達は俺の達者なとき、親方のためなら土ん中へでも入りますと土龍みてえなことを云やがつたが、覺えてゐるだらう！口の先ばかり偉さうな手前達を賴りにする傳兵衛たア違うんだ！フン。愛情もコソも盡き果てた意氣地なしの野郎共！俺のすることを見せてやるから、よく見てやがれ」と、岩蛸爺さんのことだから、この位の文句は云ふだらうが、一體何をして見せるのかしらと思ふと、萬之助に金をやつてボーロ紙の太えのを二ツ買つて來いと言ふ。萬之助が馬糞紙を擔いで來ると、一枚づゝ端の方に穴をあけて、丈夫な紐で二枚をつないだ。出來上つたのは、ヘラクレウスが持つてゐたやうな胴のない紙の鎧だから奇拔だと思つてゐると今度は俺に向つて「サア。この上に大きく書いてくれ。わつちは――わつちは、月島造船所の鑄物工場で負傷をして――と。負傷をして解傭された職工頭であります――と」と言つた。俺はその通り書いた「よからう！」と云ひ乍ら、岩蛸の親方はブル／＼顫へる首に紐をかけた。そして、この光景を面白がつて眺めてゐる小娘のお駒に「サア。とつちやんと一緒に來い」と云ひながら、俺の肩につかまつて、よろ／＼立ち上つた。それから戸口に立てかけてある松葉杖をかいこんだ。これが「やらずの傳兵衛」の生涯を通じて、もつともドラマチックな一と幕に違ひない。岩蛸の親方がお駒の手を引きながら、ピヨコン／＼と蛙みたいに跳んで行くのを見てゐると、何だかサンドウヰッチマンが四國巡禮に出發するやうな氣がした。そんなことは止した方がいゝ。體に障るだらうと言ふても聞かずに、岩蛸の爺さんは毎日々々、紙の鎧をまとひながら、お駒の手をとつて、月島の端から端までピヨコン／＼と歩るき廻るのだ。恰好が可笑しいもんだから、通行人が笑ふと、お駒も一緒になつて笑つてゐる。俺たちは家の中に閉ぢ籠りながら、冷汗を搔いてゐた。あれで親方の欝憤が晴れるならいゝが、あべこべに月島中のお笑ひ草になるやうだつたら、天下茶屋の返り討ちよりみじめなことになるだらうと思つた。ところが三日目か四日目になつて、鑄物部屋の小使ひがやつて來る。小使ひがやつて來たのは、朝の霜が巽の風となつて一と吹き吹かうかと云ふ刻限だつた。俺たちは仕事に出ないのだ。燒酎や箱辨當は親方の顏で持つて來るから、何とか片がつくまで出なくてもいゝ。何しろ親方があの體たらくだ。居候の俺たちが工場へ行つたつて馬鹿にされるばかりだ。四十七錢でさう安々と馬鹿になるものかと云ふ了見で、敷つぱなしの貸し蒲團に潜り

込んでゐた。そして、太陽の光が部屋の中へ廻つて來ると、枕もとに列べてある辨當から湯氣が立つ。朝飯はそれからだと思つてゐる處へ、入口の障子の破れ目から、ランプのホヤみたいな目玉が一つ現はれて、部屋の中をギロ〳〵見廻しながら、

「まだ寢てゐるのか。おい。」と云つた。

「誰だ？」と萬之助が怒鳴つた。

「俺だよ」と小使が入つて來た。

「何の用だ？」

「會計課長さんが、ちよいと來てくれと仰有るから、ちよいと來とくれ。」

「親方が居ないから、家をあける譯に行きませんと云つてくれたまへ。」と俺が言つた。

「それは、親方が承知の助だ。傳兵衛さんはお駒坊をつれて、會計課長さんの部屋で、お茶をのんでゐるんだ。だから直ぐ來てくれ」小使は言ふことを云ふて了ふと、サツサと出て行つた。來るかと思ふとゐなくなる。螢みたいな男だ。俺たちはお互にオヤ〳〵と思つた。場合が場合だ。傳兵衛親子が悲憤のあまりに月島の泥海にはまり込むやうなことはあつても、二度と再び會社の門をくゞる筈はないのだから不思議な話だ。

「おかスな爺さんだね。お茶をのんでゐるところを見ると、喧嘩に行つたわけでもないやうだ。」と萬之助が、怪しげな首をひねつた。

「課長が來てくれと云ふんだから、行つて見ないか。」と、俺は樣子を知りたくなつた。すると萬之助が顰めつ面で「すまないけど、君、行つてくれたまへ。僕は小田卷の面を見るとムカ〳〵するんだよ。」と手を振つて斷つた。仕方がないから、寒いのを我慢して、鼻の先で風を突切りながら、トンビのやうにフラフラ押し出して行つた。家から河岸づたひに工場へ三丁ほどある。ひよつとすると、岩蛸のサンドウヰツチマンが効を奏したのかも知れない。そんな眞似をされては、會社の看板にかゝるから緩めてくれと云ふので、親方と課長とが掛け合ひの最中かも知れない。旨く行けば、岩蛸のことだからウンと踏ん張つて見せるだらう。しかるに、俺を呼びつけるのは、多分、傳兵衛には同情するが、共謀者のお前達は不都合だと怒鳴りつけて、よろしく追ひ出さうといふ計略だらう。その手を食ふものか。會計課長だらうが、七面鳥だらうが、かまやしない。いきなり逆ねぢを食はせてやりやいゝのだ。どうせ長いとお世話になつてゐる氣はないのだから、こんな不人情なボロ會社は、俺の性に合はん。お氣の毒だが出て行つてやると職工の番號札を叩きつけてやつたら、流石の課長も舌を卷いて膽を潰すだら

う。俺の職工番號は五六五六だ。生きてゐるときはノラクラだが、往生際になると目醒しくやる。いくら取り柄のない人間にだつて、一つ位は得意な藝があるもんだ。俺は辭職の名人だ。やめやうと思へば、誰が何と云つたつてやめる。俺は先刻、萬之助にだまされて西伯利に行つたと言ふたが、實はこの造船所をやめてから、萬之助と二人で、あちこちの工場に首を突つ込んで歩いてゐると、その時分、陸軍省につとめてゐる萬之助の國の者に慾の深い弟があつて、西伯利のチタ町に、雜貨の貿易をやつてゐたのが、戰爭のために商ひがなくて店をしまひ、その町の露西亞人と共謀になつて小さい新聞を始めたから、よろしければ、萬之助に來ないかと云ふて來た。萬之助は俺が行くなら出掛けるが、どうだい君、スベリヤへ行かうぢやないか、スベリヤは廣々としてよさゝうに思はるるが、と馬賊の下廻りみたいな顏つきで俺を誘つた。何をする新聞だか、行つて見なければ解らないけれども、行くなら行くやうな都合をすると云つた。俺の云ふことなら、何でも苦情なしに聞く男のことだから、友達甲斐に行つてもいゝと答へた。東京で貧乏するよりは、ラッコの襟の白熊の外套にくるまりながら、砂金の袋でも抱えてゐるのも惡くはないと思つたので、俺は西伯利の雪の中へ、貧乏神を棄てに行くことになつた。ところが、隨分長つたらしい道中を飽きもせずにチタ町の高粱畑へつくと直ぐ俺はがつかりした。高粱畑の新聞社がお寺みたいな家だと思つて、雜貨屋の主筆に聞くと、金を出してゐる社長株のソロヴイヨフと云ふ露西亞人が、昔は正教派の坊主だつたと云ふから、爺はれないもんだと思つた。それは兎に角、俺の考へによると、露西亞人の新聞だから。ボリシエヴイズムの宣傳でもするのだらう。俺はかう見えたつて生れつきの社會主義者だか、俺の社會主義はボリシエヴイズムとは大分違ふけれども、法外な金儲をする爲に、岩蛸みたいな親爺を酷い目に會はせるやうな造船所をやつつける仕事なら、何主義だらうと差し支へないと思つて、記者の椅子につくと、ソロヴイヨフ爺さんが歡迎の挨拶をのべたのだ。ボリシエヴイズムは、人間の皮を被つたホブゴブリンである。吾々「西伯利亞新報」の目的は、この恐るべき文明と秩序の泥坊である赤色賊を　地球の上から掃き淸すところにある。あなたがた二人も、どうかその意氣でやつて下さいと云ふのだから驚いた。さう云へば、毎日の新聞を見ると、この赤色賊が敗けて退却する記事ばかりだ。こりや、あべこべだと萬之助に云ふと、萬之助も、こんな筈ではなかつたやうな顏つきで、仕方がないさ。郷に入れば郷に從つて、どうだい君、目をつぶつて稼やうぢやないか。君が厭なら、過激派の攻擊や、日

本政府の提灯もつなら、當分僕が一人で引きうける。折角遠い居を押し渡つて來たんだから、暫く遊んで行きたまへ。僕だつて何時までもゐやしないさと氣の毒がつた。遊んで行きたまへとも言へた義理でない。鐵砲の玉と泥坊の外には持ち合せのない町だ。始末の惡いのは、それだけではない。ソロヴィヨフ爺さんの話によると、爺さんは元、バイカル湖畔の村に寺を持つてゐたのださうだ。そこで白軍と赤軍が衝突した。白軍の陣地がお寺の側にあつたので、赤軍の鐵砲の玉が、お寺の壁や塔に飛んで來る。爺さんはびつくりして白の司令官に泣きついてくれと云つたが駄目だ。そこで今度は赤の指揮官に向つて、お寺へ鐵砲の玉を打ち込んで貰つては困る、あれは村の魂だと云つた。承知出來ないとあれば、この白髪頭の愚僧から先に片づけてくれと云ひながら、胸を叩いて昂然とかまへた。しかし赤の指揮官はセヽラ笑ふばかりなので、張り合ひぬけの爺さんはプン／＼怒つて寺へ戻つた。ところが、聖母マリアのお住居は骨ばかりの姿になつてゐた。燒跡を眺めて呆れ返つた爺さんは、白の兵士が司令官一人をのこして皆やられてゐるのに氣がついた。生き殘りの司令官が、迂路ついてゐる二三十頭の軍馬を一列にならべ、兵士の死骸を一つ宛抱えては馬の脊に乘せてゐる。馬の脊なかで横向きにノメりさうなのもあれば、首を垂れて落ちさうなのもある。それをバンドで鞍にしばりつけて了ふと、司令官は馬の尻に片つ端から鞭をくれた。丁度日沒だ。二三十頭の軍馬は司令官を先發に、疾風のやうな勢ひで赤の陣地へ駈け出した「あゝ！想像してごらんなさるがいゝ！」と爺さんは云つた。「何も知らない赤の奴ばらはな、眞つ暗い闇の中で馬の上の死人と鬪はねばなりませんのでな！寺を壞した神の罰ですわい！」その寺を失つた爺さんは、も一度大陸の出張所をこしらへるつもりで、この町へ下つて來たけれども、生活は不安のドン底にある。神さまの相手になる者は誰もゐない。これは大概露西亜人が皆惡いためではあるが、元はと云へば赤の了見が間違つてゐるからだと考へたらしい。だから、爺さんは二タ目にかう云ふのだ「赤の奴ばらは、神聖な寺を打ち倒して、正教の信仰を亡ぼさうとするのだ！泥靴で蹴倒した祭壇に、マルクスの像をおつ立てやうとするのだ！おゝ！呪はれろ！正教を信ずる者は、よつてたかつて赤の奴ばらをやつつけるがいゝ！」。この調子で新聞を拵へたんだらう。「赤の奴ばらをやつけろ！」と云ふときに、ぬけ上つた額の蔭に挾まり込んでゐる爺さんの大きな眼が、毅然としてギラ／＼輝き、サテモ定かならぬ虹光が、四方八方へパツと飛び散るのだ。新聞社に寢起きするやうになつた其日から、毎日々々この愚痴だ。おまけに仕事

は問題にならぬ。爺さんの境遇は氣の毒だが、オムニウム・レルム・ヴィシシトウド・エストなんて諺もある。ヘラクリトスの云ひ草ではないが、一切は流れるのだ。赤と喧嘩をするのも考へもんだ。第一、こんな處に一日ころがつてゐるのは、苦業林の石の上に、三年あぐらを搔くより退屈だ。しばらくしてから、五月蠅くなつたので、さう云つてやると、時代おくれの爺さんがビックリ顏で、あなたは信仰がないから不眞面目だ、それでは迚も赤の征伐は望めないと云つた。赤が聞いたら嘸俺に禮を云ふだらうと揶揄つた。すると爺さんは怒り出して、俺みたいな人間は仕事に不適當だと云つた。出て行けとは云ふまいが、早い話が、上州の國貞村は忠次の繩張りと言ふこともある。まづこの界隈は馬賊に任せて　俺は日本へ歸つた方がよさゝうだと思つて記者をやめた。そして呆氣にとられてゐる顚人坊主の萬之助を置いてけぼりに、チタ町を退散する段取りになるが、これは第二回で、第一回の辭職はこれからだ。俺の一代記を貫いて異彩を放つてゐる無數の辭職を、會計課長のところへ皮切りに行くのだ。會計課長の部屋は、工場の門を入つて眞つ直ぐに行くと、鑄物工場と船架作業場とに挾まれた事務所の中にある。窓から大川の流れが見え、明石町の岸に列んでゐる赤いスレートの家が臨まれる。そこに課長の小田卷立春齋が、日蓮宗の御題目みたいな句を垂れて納まりかへつてゐる。五十にはなるかも知れない法學士の癖に、生け花や琴をやるのだ。立春齋とは生け花の方の雅號だらう。時々、窓の下を通つて見るとこの立春齋が、白襟に紋付の姿で、卓上の花瓶に投げ入れの花をチョン〱と鋏切つては、反り身になつて工場の仕事を忘れすましてゐることがある。氣に食はない奴の一人だ。俺は武者ぶるひしながら、默つて部屋に入ると「やあ。さつきから待つてゐたんだ。そこへ掛けたまへ」と立春齋が椅子を指した。その椅子の隣りに、岩蛸の親方と娘のお駒が腰かけてゐた。俺を見ると、「來たか」と云ふ風な恰好に頷いた。すると小田卷が例の懸題目の長々しい顏を、勿體さうにつるりと撫で廻しながら、

「傳兵衞に聞いたんだが、このビラを書いたのはお前だつてね？」と云つた。そして卓子の下に外して置いてあるヘラクリウスの紙の鎧を取り出して見せた。おいでなすつたな。此處で先手と行くのだ。

「いかにもさうです。ボーロ紙を買ひに行つたのが平口の萬公で、文句を書いたのが僕です。だから、そんな不穩な眞似をする職工は、會社の家風に合はないと仰有るつもりでせうが、僕等にしたところで、親方の家に何時までも厄介になつてゐるわけに行かないし、と云つて、工場の仕事も厭になつたから、そ

ろ〳〵切り上げやうかと思つてゐるところですから、兎や角仰有ることはありません」

　岩蛸に頼まれてやつたとは言はなかつた。すると小田卷の立春齋は、呆れた顔つきで、

「君は馬鹿に氣の早い男だねえ」と云ひ出した。俺が氣の早い男なら、先刻お前と呼び棄てにしながら、君はなんて、俄かに俺を君扱ひにする小田卷は、馬鹿に氣の變る男だらう。

「僕の話は、そんなことぢやない。」

「どんなことです？」

「まづ、君たちが心配してゐる傳兵衛の方から云ふが、實は今日、重役と相談をすると、これまで、そんな例がないので、會社として、どうするかうすると云ふことは出來ないけれどもだネ。長く勤めて貰つた親方のことでもあるし、事情をきくと甚だ氣の毒だから、重役個人の志としてだネ。應分のお禮をすることにして、改めて氣持よく解傭したいのだから、安心してくれたまへ。今明日のうちに、僕から親方へ届けることになるだらう。」

　長いこと勤めて貰つたことも、事情をきくと甚だ氣の毒であることも、始めから解り切つた問題だ。それでも最初は偉さうなことを云つて胡麻化すつもりだつたが、良心の手前、まことに相濟まなくなつたんだらう。そこへサンドヴイッチマンのデモンストレイションに川弁して大いに狼狽したに違ひあるまい。だから月島を迂路つき廻つてゐる岩蛸の親方を探してつれて來たもんだ。改めて氣もちよく解傭するなんて聞いたこともない言葉だ。これが當り前だと思ふから

「それはお目出度う」と云つてやると、正直な岩蛸が、鐵苦茶な目に一杯涙をためてニコ〳〵しながら「わけはちやんと解つてゐらつしやるんだ！課長さんのことだから、うつちやつとく筈はねえと思つてゐたんだ。どうもいろ〳〵お世話さまです。お蔭で俺ら（こちと）親子は、どんなに助かるかしれやしませんよ。旦那」と云ひながら、丁寧にお辭儀をした。幡隨院長兵衛もかうなるとお了ひだ。取るべきものを取るのだ。かりそめにも親方だ。食へなくつたつて「やらずの傳兵衛」だ。大きな面で澄しておりやいゝのに、施物にあづかつた乞食みたいに、いやにお追従を列べるのだ。俺は情けない冷汗が出た。しかしこれが眞個なんだらう。事がかう決ると、もはや此の傳兵衛とも、安心してお別れが出來る。居候も今日限りで、ビール箱の家へ戻つたら、早速萬之助をつれて何處へか立ち退かうと思ひながら、

「僕の話と仰有ると―どんな御用ですか？」と袖の中で番號札を握つた。叩きつける用意だ。すると小田卷は、いやに俺の方へ招つて來たかと思ふと、ニヤ〳〵笑ひながら、「少し相談があ

るんだよ。出しぬけかも知れないが、つい先日、會計課の書記見習ひが、兵隊にとられて國へ歸つたんだネ。その後釜に君を欲しいと思つて、今、傳兵衛とも相談をしてゐたんだが、どうだらう？書記見習ひにならうと云ふ氣はないかね。三年も辛棒すると、本社員の書記になれるが」と云ひ出した。氣まぐれな小田巻もあるもんだ。

「どうして、そんなことになりましたか？」と俺が聞いて見ると、やらずの傳兵衛」が横合ひから「課長さんはな。このビラを見なすつてよ。おめえの手の筋のいゝのに惚れ込んぢまつたと仰有るんだ。どうだネ。この際、入れて貰はねえかよ。おめえ見てえな男を、工場に置いとくのは可哀相だと仰有るんだ。滅多にねえ口だよ。」と云ふから意外だつた。俺の書いた文字に感心するやつもあるかなアと思つて餘つ程感心した。岩蛸の親方には有難いかも知れないが、俺には一向つまらない。月給は最初の一年だけ日給で六十錢くれると云ふ話だが、朝から晩まで小田巻や猿の面を眺めて六十錢の日給も始まらぬ話だ。

「まあ。考へた上で御返事をしませう」

と三は曖昧なことを云つた。

「考へることなんかないぢやないか？」

と小田巻が催促するのだ。

「僕には相棒の萬公がゐるのです。萬公をうつちやつて僕ばかり來るわけにも行きませんから、一應歸つて相談をして見ませう」

「フン。ぢや何時返事をするんだい。僕は君の氣性が氣に入つてるんだ。面白いよ。ね。そこで、萬之助の方は、どうかしやう。君、僕の課に入りたまへ。」と執こい親爺だ。

「有り難うございます。明日御返事をしませう。兎も角も、傳兵衛の親方をよろしくお頼みします。さやうなら。」

そして課長の部屋を跳び出した俺は、その返事をする明日あたりは萬之助と一緒に新らしい世界に、毛色の違つた仕事の口でも探し廻つてゐるだらう。小田巻の立春猿が、正氣であんなことを言ふたものかどうか、俺は知らない。正氣で言ふたものなら三が勝つたのだ。誰が勤めてやるものか。淨海入道の清盛にしろ、福原みたいな田舎へ引越して、頻りに不自由な思ひをしたのも、京都の公家どもが癪に障つたからだ。入道も俺も癪持ちの痩せ我慢に變りはない。どんなに困つたつて、いやな處には一分間居るのも御免だ。ビール箱の家をさして、凱旋將軍のやうに工場の門を出た俺は、なるほど、職工の番號札こそ叩きつけなかつたが、久しぶりに氣がせいせいした。これだから酒はやめても、冒險はやめられぬ。萬之助に報告したら「大

泉萬歲！」」と手を叩いて喜ぶだらう。大泉は萬歲だ。

二

アルトウル・ショオペンハウエルの動機說によると、俺みたいなつむじ曲りの男が時々鳴動するのも矢張り虫の精ださうだ。岩蛸の忠告には無頓着で小田卷立春齋に鳴動してやつた譯はかうだから、勢ひ、親方の家に居るわけにも行くまい、當はないけれども出て行かうぢやないかと言ふと、慌て者の萬之助が、待つてゐましたと云はぬばかりに一痛快々々。小田卷風情の沒分曉漢にコキ使はれるやうな手の筋は持ちませんと言つてやりやよかつた。出て行くなら一刻も早い方がいゝ。親方が戻ると面倒だからなア」と一人で勇み立ちながら、硯に墨を摺るのだ。何をやり出すかと思ふと、貸本屋から借りた「義士銘々傳」の上表紙に『一筆啓上、長々お世話になつたる我等兩人、時來りて今日立ち退き申す。兩人出世の曉には昔日の恩義に酬ゆべく、別れに臨み固く誓ひ申す者也。御氣嫌宜敷、傳兵衞殿」と書き殴つて、佛壇の正面に押し立てた。そして「君、これでよからうぢやないか」と云ふた。いゝかも知れないが、親方に讀めるかしらと心配すると、それだから君、この通り平假名さ、とすましてゐたが、大袈裟な男だ。萬之助とは西伯利で別れたきり會はないから、平假名の文句通りに、昔日の恩を酬ゐたかどうか知らないけれども、親方の家を出ると間もなく、親方のことなんか噯にも出さないほど當にならぬ萬之助のことだから、ほん氣にして待つてゐやうものなら、とんだ馬鹿を見るのが落ちだらう。岩蛸が見たら噴き出すかも知れないと思ひながら、ビール箱の家を出た。出た足で三河島の屠牛場へころげ込んだ。かう云ふと、俺たちの親兄弟が牛の皮でも剝いてゐるやうに聞えるから、その邊の消息を明らかにする必要があるけれども、三年前に一通り書いた。俺の穢多時代」がそれだ。もう一度くり返してもいゝが、書けば穢多と云ふ言葉が出る。大泉黑石ともあらうものが、法律で禁じてある言葉を平氣で使ふとは何事だ、挨拶の次第によつては覺悟があると、三年前に水平社仲間に脅かされて面喰つたこともある。親代々の水平ではないが、貧乏のお陰で社員に選擧される資格は充分あるつもりだ。それ程馴染の深い俺は何でも御承知だ。挨拶の次第によつて肉切庖丁でも持ち込まれちや大變だから、屠牛場時代の話はやめた。折角だが今度もやめる。そして屠牛場から西伯利へ駈け出さう。西伯利へ行くならつてがあると萬之助が俺を誘つたなんて先刻も云ふたが、さう云ふ事情で、出發の支度や路銀の工面をつけると大正七年十月がやつて來た。これでは

餘りあつけないだらう。この節地方へ行くと俺は間違つて文豪の候補者扱ひにされるのだ。折角の好意なら候補者なんて心細い。何故いきなり文豪にしてくれないのかと思つてゐる位だから、氣の利いた立志傳の作者を見つけたら、此の邊の記述を一ツから云ふ風に書いて貰はうと思つてゐる。即ち「ナポレオンの望みなしと雖も、後年に到つて文豪の疑ひある大泉黒石は、此時悟るところありて牛殺しの鐵の棒をガラリと投げ棄て、手足の血糊を洗ひ落して屠牛場を立ち去り、颯爽たる姿を東京發下ノ關行三等の隅に現はせり」と、この位誇張しないとやり切れぬ。その夜行車のベンチに、相棒の萬之助と二十四時間座つてゐたら、下ノ關驛に着いた。赤い電燈のついてゐる賑やかな地下道をぬけて、棧橋へ出ると、眞つ暗い足場を押したり押されたりしてゐるうちに、關釜聯絡船百濟丸の下甲板へ出た。出たかと思ふと、今度は忽ち荷物箱みたいな處に放り込まれた。田舍芝居の棧敷より窮屈で暗くて南京蟲臭い寢床が、兩側二段に仕切られてゐる。愚圖々々してゐると溢れになりさうだから、爭つて割り込んだ。靴と下駄を枕に、一と先づ横になつて落ついて見た。何のことはない古簞笥の斗插から首だけ持ち出してゐる形だ。明日の朝まで此穴の中に窒息してゐなければならないとはウンザリだねと云ふと、かりそめにも朝鮮へ渡らうと云ふ者が、今から悲觀するやうぢや仕樣がないよ。と萬之助が言つた。その癖、波が少し高くなつて船がゆれ出すと、眞つ先に立つて蒼くなつたのが此の男なんだ。かりそめにも朝鮮へ押し渡らうといふ者が、今からその有り樣ぢや、先が思ひやられるなア。と云ひ返してやると、どうも此の船なんて奴は、僕の性に合ひかねると見えて、この通り頭がグラ〳〵する、吐きさうだと辯解したもんだ。その辯解に附け加へて、何しろ海へ乘り出すのは是が始めてなんだと言つた。そして、船室を出ると翌朝まで降りて來なかつた。甲板の上を夜つぴて歩るきながら、玄海の浪に落ちて碎くる星の光が、一つ一つ減つて行くのを待つてゐたのださうだ。黑み渡る山と山との間に、長つ細いトンネルみたいな釜山の棧橋の影を見ると、足をバタ〳〵やつて喜んだのださうだ。そんなことは知らないから、一人でも減ると助かると思つてウンと手足を伸すと「痛い！」と怒鳴つて跳び上つた奴があつた。見ると、今しがつた荷物の蔭に轉がつてゐた朝鮮人の「チゲクン」が、いつの間にか萬之助の席へ辷り込みに來てゐたのだ。暗くてハツキリしないが、鼻はペシヤンコで頭の裏が窪みたいな男だ。この朝鮮のオピンヅルさんが、脾腹を押へて顏を顰めながら、今にも俺に摑みかゝりさうな權幕だから膽を潰した。

「どうしました？」

「あんたが私の腹を蹴つたんだ！」

「痛いかね？」

「痛い〳〵」とまた脾腹を壓へ直したから俺が蹴つたんだらう。こんなときは大急ぎで詫るに限る。俺が喫ひかけの金蝙蝠を床の上に吐きすてゝ起き直ると、朝鮮のオビンヅル様が、いきなりパツと拾ひ取つた。そして旨さうにスパ〳〵と喫かさうと云ふのだから、拍子がぬけて氣の毒になつた。だから一箱わけてやると、もう脾腹の方なんか、どうでもよろしいと言つた恰好だ。ニコ〳〵と笑顔をつくつて「どうも有難う。あんたは何處までいらつしやるか」なんて覺束ない日本語で、反對に挨拶した。おかしな男だ。俺が西伯利へ行くのだと答へるとオビンヅル様は目を圓くして云ふのだ。「それは、あんまり遠いですなア。私の田舎の郭山にさへ、雪が降つたと云ひますから、西伯利はもうよつぽど積んでゐませうなア。」そこで俺が聞いて見た「朝鮮はよく知らないのですよ。郭山てどの邊です？」すると彼は答へた。「定州の一つ先さです」その定州がわからん。「明後日の朝、そこを通りますから御覽なさい」と彼が笑つた。成るほど明後日の朝になると、郭山に着いた。禿地のまん中に脊負ひ投げを食つたやうな不景氣なステイションがあつて、オビンヅル様の兄弟分みたいな朝鮮人が、プラツトホームに塊まりながら、物欲しさうな目つきで、汽車の窓を眺めてゐた。こゝに十分間停つてゐると、釜山から乘り合せた出征兵どもが、あんまり退屈なもんだから、正宗や辨當の食ひかけを、窓から突き出して揶揄つたもんだ。おい！ヨボ！これをやるから、汽車の尻を押せやい！すると五六人のオビンヅル様が線路へ躍り込んで　列車の尻を必死になつて押した。出征兵どもが拍手喝采する。汽車はビクともしない。辨當の食ひかけは御預りだ。オビンヅル様は悄然として引き揚げた。驛長が笑つてゐる。日本の兵隊は酷い惡戯をするものだと思つたが、この尻押し連の中に、下車したばかりの船友もゐるんだから感心したことがある。この船友のオビンヅル様が、萬之助の席へ割り込んで殆んど一と晩一人で饒舌らうと言ふのだ。睡くはあるが、眠ると南京虫にやられさうだから、無暗と煙草を喫かして話を聞いてゐるうちに、鼻の穴が筒子のトンネルみたいに眞つ黒くなつた。オビンヅル様の云ふことは、よく解りかねるけれども、何だか一人の兄貴があつて、この兄貴と郭山の田舎から釜山港へ出て來たらしい。そこで誘拐屋にだまされて、九州若松近在の石炭山に嵌められた。尤も誘拐屋の手にかゝつて日本へ渡る朝鮮の勞働連は、毎日八百人もあるさうだから、その組だらう

と思つて謹聽してゐるた、ついこ三日まへのことだ、五十人ばかりの坑夫がセッセと炭を掘つてゐる第何號かの坑に火が入つた。空氣を早く絕たなければ、何萬か何十萬の損害になるので、係りの役人が、坑夫ぐるみに坑口を密閉したのださうだ。火が熄える時間を見計つて、坑の口をあけると、五十人ばかりの坑夫か、坑扉口まで這ひ寄つて、黑焦げになつてゐた。その中にオビンヅル樣の兄貴がゐたのださうだ。俺も大低のことはやつたつもりだが、まだ坑夫の經驗はないから、隨分亂暴な眞似をするもんだと、心中大いに驚いたが、オビンヅル樣の兄貴は何萬圓か何十萬圓かの犧牲の一人になつて燒け死んだわけだから、慰籍料の千や二千は寄越したらうと聞いて見たら、坑の大將が默つて十圓札を一枚くれたと云つた。粗末な命だ。それでは旅費にも足るまいと云ふと、「全くです。郭山へ着くお了ひになります。でも日本にゐるよりは安全です」と悲しげに呟いた。あんまり可哀相だから釜山へつくと、電車道の小ッぽけなカフヱーへ連れ込んでやつた。萬之助が陸軍省に勤めてゐる知合ひの役人から貰つた金を二分して、旅費を差引いても、この男を喜ばせるのに差支へはないと思ふから、朝飯を奢つてやるがどうだいと、船か下りぎわに萬之助と相談すると、それもよからうと言つた。そのカフヱーは三角路の釜山郵便局と向き合つてゐる。後ろは街で前は丘だ。丘の上に憲兵分隊の看板が立つてゐた。卓子に腰かけて窓の外を眺めると 白衣の朝鮮人が桶を擔いだり車を押したり、ウヨ〳〵通る。粥の椀を抱えてツル〳〵啜りながら、天狗の團扇みたいな煙草の葉を賣つてゐる爺さんがゐる。見すぼらしい電車がやつて來ると、砂ほこりが立つて、煙草の葉が眞つ白くなる。腰から下がひどく冷えるから、成る程朝鮮は寒いなアと云ひながら、萬之助を見ると、いつの間にか手も顏も洗はずにパンを嚙つてゐるのだ。オビンヅル樣がナイフを持つて俺の合圖を待つてゐた。だから、サア遠慮なく平らげてくれたまへと言ふと、石のやうに固いパンを一分間で食ひつくした上に、バタの皿を舐めて了つた。よつぽどひだるいのだらうと思つて「も一ッ何か註文したまへ。ライスカレーがいゝだらう」と俺が言つた。するとオビンヅル樣は、海老のフライにしませうと云つた。萬之助がパンの中から持さの目を見張つて俺を見た。その海老のフライを片づけて了つて物足りない樣子をしてゐるから「も一ッ註文したまへ。今度はライスカレーがいゝよ。海老のフライなんぞ、いくら食つたつて腹にこたへるもんぢやない」と云ふた。つゝけ樣に高い海老を食はれてはたまらない。萬之助が妙な目附で又俺を見るから、ハヽア。奴さんヒヤ〳〵してゐるのだと思ひながら朝飯を

片づけると、聯絡車に乗らうか一と休みしやうかと萬之助が云ひ出した。こんなに疲れてゐるから次の汽車にして、酒でも飲まうと俺が發起すると、すぐ贊成した。これからが不思議なんだ。オビンヅル樣とは、カフエーの戸口で別れることにきめた。「大層に御馳走樣でした。御氣嫌よろしう」と朝鮮人がステイションの方へスゴ／＼と出て行くのを待ち構へたやうに、萬之助がムッとした表情で「おい君！」と云ふのだ。「君は何だつて、あんなヨボの野郎に、無暗と物を食はせるんだい？」だから俺はかう言つた。「いゝぢやないか。お互さまだ」ところが萬之助はます／＼ムッとして「よかないよ！」と怒鳴つた。「僕等は未だ／＼他人の世話を燒くやうな身分ぢやあるまい！」

「そんならさうと、一と言云やいゝんだ！」

「だから、そのつもりで君の足を頻りに踏んでゐるのに、知らん顔ですましてゐるぢやないか！」

「俺の足を？フーン。知らないね。」

「知らないつて？あれほど强く踏んだのにか」覺えがないから正直に覺えがないと云つた。萬之助は狐につまゝれた顔つきで「さうかね？僕は確かに踏んだが、して見ると踏まれたのは誰だらう？」と呆けた。オビンヅルこそいゝ面の皮で、蹴られたり踏まれたりだ。萬之助のケチな根情は是でも解る。これから先もあることだ。あのオビンヅル見たいな朝鮮人や露西亞人を見たら、丁寧に取り扱つて、出來るだけ驕つてやる料簡だからそのつもりで居れと云つてやつた。すると萬之助か、冷かし半分に、「そんなら俺みたいな日本人を、どんな風に取扱つてくれるんだ」とぬかしたから「遠慮なしに張り倒してやる」と宣言した。月島の造船所や三河島の屠牛場で、神妙に働いてゐるときは、こんなことを言ふと毆られるかも知れないから默つて控へてゐるが、一と度、海を越えて正宗の一升も飲んで見ろ、おのづから宇宙がゝりの大義名分心が勃々として胸懐に燃え上り、世界中の人間は皆俺の乾兒のやうな氣がするんだと、正宗の瓶の尻でポンと卓子を叩いて說明してやると、君のやうなだらすのない男が、年を取ると大低乞食になつて行き倒れるのだよ。いゝ加減にして切り上げやうぢやないか、と心配した。多分、どうしたら途中で困らずに、目的地へ辿りつけるか、と云ふことを、萬之助は始終念頭に置いてゐるらしい。「君。財布の中は二十兩だ。行く先はまだ一千哩もあるからね」と時々注意する、シミッ垂れだけに、用心深い男だ。もつとも加藤清正や小西行長の眞似をして、釜山あたりのカフエーに引つかゝる豫定ではない。早速ながら西伯利へ飛んで行くところをお目にかけたいけれども、財布の中が二十兩で、行く手を眺めると僞の

如く一千哩は確かにある。だから、東京ですました朝めしの話を、大阪で寢物語りにして見せるやうな譯には行かない。おまけに此處まで來ると、この「釜山カフェー」のボーイが、突然にも俺の話の中へ跳び込んで來るのだ。まわり冗いのは正宗のせいばかりでない。俺と萬之助と旅行案内と三人で出發の打ち合せをしてゐる處へ、洋食の皿を片づけに來たエプロンのボーイが、俺の顏をジロ／＼見ながら「失禮ですが、あなたは大泉さんではありませんか？違ひますか？」と云ひ出した。大泉さんに違ひはないが、こんな處に知り合ひはないやうです。自體君は誰ですか？と俺は驚いてボーイを見た。するとエプロンはニコ／＼笑ひながら「もう、お忘れになりましたかなア。さうでせうなア。もう五年になりますからなア。しかし、この頭の疵を御覽になれば、思ひ出しになるでせう」と、ハイカラに分けた油臭い髮をグイと掻き上げて、俺の鼻つ先へ持つて來た。左の耳の上に、三日月形の打ち傷の跡がついてゐる。カフェーの隅に陣取つてゐる客がクス／＼笑つた。萬之助は呆れて見てゐる。エプロンのボーイは平氣なもんだ「いかゞです。こいつに見覺えがありませうがな？私は久留目五十五郎ですよ」と名乘り出た。さう云へばなるほど五十五郎の面相らしく見えるが、俺の知つてゐる久留目は東京にゐる筈だから、不思議に感じた。しかし耳の上の傷を見ると爭はれない五十五郎だ。俺は頗る意外だつた。考へて見ると故郷の中學で別れたきりだから、大概の事は忘れてゐる。でも死ぬまで覺えてゐるかも知れない五十五郎の記憶が二つ三つあつた。俺が八ツになる頃、久留目なんて小僧が、何處からともなく町内にやつて來ては、俺とボール投げをするのだ。あるとき小僧の投げたボールが方角を間違へて、他家の便所の窓硝子を破つたことがある。そこの婆さんが驚いて出て來ると、小僧の久留目が頭を掻きながら、うちの父やんを連れて來て繕はせるから、安心して待つてクラッさい、と云ひながら、何處かへ飛んで行つた。間もなく貧相な硝子屋がやつて來て、窓を直したのはよかつたが、奥さんに向つて硝子代を頂きますと云ふのだ。お前さんの息子が壞したのだから金をやる筋はありませんと奥さんが云ふと、硝子屋はびつくり顏で「うちの坊やんが窓を壞したから直してくれと云ふことだから、あれはお宅の坊つちやんかと思つて來ましたが、私には悴なんぞ一人も居りまッせんバイ」と言つた。呆れた小僧め、兩方をだまして逃げ失せたのだ。それきり姿を見せなかつた。ところが中學に入ると、この小僧が一ツ上の級に澄し込んでゐるのを見つけた俺は、圖迂々々しい奴だと何年ぶりかに感心したことがある。その時分からボールの好きた久留目は、率

業まへにテニスのチャンピオンで納まつてゐた。勉强はしないけれどもテニスなら負けずに俺もやつた。しかし此の男を向ふに廻して勝負をしやうものなら忽ち酷い目を見るのだ。こつちで正直に送つてやるボールを、尋常に送り返すならば理屈はないけれども、默つて見てゐると、飛んで來る球に向つて、花道からせり上る仁木彈正よろしくの姿勢をとる。まづ兩足を揃へて綽々たる餘裕を見せて置き、一と振り振り廻すラケツトでボールを掬ひ切るのだからたまらない。ボールは太鼓餅みたいにペシヤンコになつて彈ね上る。地面へ落下するが最後、どつちへ飛ぶかわからない。この人魂の醉つぱらひみたいなテニスに悩まされ俺たちは、五十五郎なんか紳士でないよと輕蔑して相手にしなかつた。しかし正直な處、五十五郎の面體が田舍廻りの旅役者には持つて來いの格だし、ラケツトを提げて學校のコートに立ち上る仕草が一寸よかつたもんだから、通りすがりの女學生や町の娘が足を止めてズラリと見物した。そのうちに洗ひ粉の娘が到頭仁木彈正に惚れて了つた。これが洗ひ粉屋御自慢の一人娘と來た。港名産「かもめ洗ひ粉」を買つた人は、袋の上に貼りつけてあるレペルの巫女を眺めて恐れ入つたらう。あの銅版寫眞のモデルが此の娘なんだから、女學生には持てる望みのない俺を筆頭に、五十五郎は學生の風上に置けない奴だ、よろしく天誅を食はせてやれ、と大いに燒餅をやいてゐると、誰だつたか、五十五郎の寄宿室へ舞ひ込んだ一枚のエハガキを、こつそり盗んだ。表面の文字に異狀こそなけれども、半分ほど剝げてゐる切手をパツと剝がすと、今晩幾時ごろ、螢の茶屋で逢ひたい。そこ許様のお出でを待つてゐると云ふ意味の文句が、切手を貼る場所に、鉛筆で小さく認めてあつた。螢の茶屋は洗ひ粉屋から一と足だ。てつきり娘が呼び出しを掛けるのだから、これを證據に一と泡吹かせてやれと云ひながら、五十五郎を運動場におびき寄せて、ラツケツトを揮つて散々に毆りのめした。此のボーイの耳の上の疵は、その時の名殘なんだ。

レオンチウムのゴルギアスと云ふ詭辯派の哲學者が、十年置きに友達と巡り合ふのださうだ。いつも未だに生きてゐるところを見ると、お前もよつぽど押しが强いなアとその友達が言つたさうだが、世の中もから狹くては、迂濶に惡いことも出來ない。この疵に見覺えがありませうがなアと五十五郎に頭を持ち込まれた時は、サア大變だ。まかり間違へば、今度は貴様の番だから頭を出せと云ひ出すかも知れない。俺は萬之助をつれて逃げやうかと思ひながら、まごまごしてゐた。こんなところで仇を取られちやお了ひだ。ところが、五十五郎の方では、昔日の恨みなんか、夙に忘れてゐる樣子で「實に奇遇ですなア。え？何てえ

奇遇でせう？あなたは京都の高等學校にゐらつしやるとばかり信じてゐました。實に意外ですなア」と云ふ風に、奇遇と意外を無茶苦茶に取りまぜて、さも〳〵懷かしさうに、ニコついてゐるから、俺は助かつた。「いや、驚いたな！君の樣子が變つてゐるもんだから、すつかり見それちやつたよ！」と云ひながら兎も角も俺はホッとしたが、あとで考へると、そんな心配はいらなかつたのだ。中學を出ると直ぐ、どうかかうか洗ひ粉屋の看板娘と一緒になつた五十五郎は、忽ちにしてまた女に逃げられたさうだが、今だに忘れることが出來ないと云ふことだから、未練があるのだらう。時々は頭の疵を鏡に映して有りし日の思ひ出に耽りますと云ふ位だ。逃げた女のためには只一ッの名譽ある遺品として、五十五郎が生涯に於ける最大の光榮と云ふべき代物だから、成るほど加害者の俺を恨むには及ばないのだと思つて同情した始末だ。その娘に棄てられる前の五十五郎に言はせると、天地間に於ける人物は、何でもマケドニアの大王アレキサンドル征服將軍で、その次が早稻田の大隈侯爵ださうだ。署長だつたか小使だつたか忘れたが、今日比谷警察に勤めてゐる尾椰と云ふ名まへの、ベラ棒に柔道の達者な男がゐる。この尾椰が、俺の中學を出て東京を彷ふてゐるうちに、彈みを食つて大隈侯爵の護衛警部長になつた。すると五十五郎が俺に向つて「おい君。尾椰の野郎は旨くやつたね。僕も一生に一度は大隈閣下の護衛をつとめて見たいとは思ふが、何しろ柔道がペケだから、それは斷念するとしても、このテニスの方ぢや、女學校の先生まで漕ぎつけて見せるよ」と心細いことを云つたものだ。冗談だと思つてゐるうちに、洗ひ粉屋の娘を唆かして、東京へ駈け落ちした。しばらくすると高等師範の體操科に入つたと云ふ報せがあつた。色男も馬鹿にはならぬ。ことによると、今ごろは、東京の女學生を相手に、例の仁木彈正で忙しいことだらう位に思つてゐた。だから、俺のことは後廻しとして、兎に角、どう云ふ風の吹き廻しで、カフヱーのボーイなんぞになつたんだい、と聞かさるを得ないわけだ。テニスの先生は柄にもなく顏を赤めて「それがねえ、大泉さんの前ですが――」と椅子を引寄せて腰かけた、かと思ふと、泣くのか笑ふのかわからないやうな六ケ敷い眼をふせて、ボロ〳〵と涙を零し乍ら、しばらく默つてゐる。これがあの硝子屋と奧さんに一杯くわせた五十五郎かしらと思ふと、人間は變るもんだ。「世の中つて奴は全く面倒いもんですよ。そりや、女學校の教員も、やることはやりました。東京ではない馬關の額つきの私立でさ。御承知の通り、あの港には、漁船が積荷を捌きに來ますね。私は教室の窓から毎日眺めてゐる。すると、船から上げ下ろし

の遊魚槽が非常に不完全で、游がして來る魚が三分通りくたばつてゐるのに氣がつきました。折角ならモチツト立派なものを使へば、無駄が出なくて、よからうと船長に云ふと、そんなのがあれば何時でも使ひます。あなた一つ拵へませんかと云ふ挨拶でした。船のりの頭なんて案外杜撰なもんですよ。物好きな私の事だから、貧しい月給をさいて、思ひ通りのサンプルを一つ冒險的に作つて見せると、自慢にはなりませんけど、これでナカ〳〵器用なたちでしてね、なるほどこいつは妙だと云ふのです。船長が他の船長にも渡りをつけてましたお蔭で思はぬ大當りでさ。素人でも何でも商賣に限る。教員なんてシン氣臭いとたちまち溜めて半年經たぬうちに早、千兩そこいらの小金が出來ました。それまで苦勞の掛け通しだつた私の女房、この處有頂天と來たもんです」と五十五郎は物語るのだ。「その時分は、まだお君さんと一緒ですね？」と俺が聞いた。洗ひ粉屋の娘は君子と云つた。「えゝ。さうなんです。女房にしろ、商賣が此の調子で、もう暫くつゞいたら逃げやしなかつたらうと思ひますよ。癪に障るのは歐洲大戰に青島攻撃でさ。そのために船腹拂底でもつて漁魚船までも運送船に早變りしました。私の商賣はいゝオヂヤンの形で何したもんだか思案にくれた揚句の果に思ひついたのが、アニリン染料の製造です。よござんすか？戰爭の下敷になつて往生するやうでは商人の名折れだ、よろしく上手に利用してやるべしだと考へてゐる時に、ドカンと暴騰したのがアニリンですから、こいつ〆め！〆め！織物會社が四苦八苦で高い輸入品の奪ひつこをしてゐるところへ、憚りながら是を一つと、私の御手製を當がつてごろじろ、手もなく飛びついて來る池の鯉だ。サア萬事放擲觀世音の、アニリン代用品研究菩薩だと、工業學校や圖書館にお百度を踏みますとサテ、苦しめば矢張りその効があるものです。今だから、打ちあけてお話ししますが、あの火鉢の炭が、青い焔をあげて燃えますね？」と五十五郎が云ひかけると、話に釣り込まれてゐる萬之助が、横合ひから妙なことを云ひ出した「あゝ、そいつは君、氣をつけなくちやいかんよ。酸化炭素の毒瓦斯だ。なあ。おい。（CO）つて奴だ。」「全く全くです。あの瓦斯が土臺となつて、少し工夫をすれば代用品どころか、眞物の染料が出來る。理屈は抜きにして、私は先づ第一番に其瓦斯を集めさえすれば、あとは簡單な裝置で間に合ふと云ふことを呑み込んだので、女房と相談の上私一人、出雲の國は木次の山奥に分け入りました。馬關の炭屋に聞き合せると、先づあの邊で一等炭竈の多いのは、何と云つても出雲ださうで、その炭竈から立ちのぼる煙を集めるつもりで、大きな釜を一つ大阪に注文しました。それから木次の山の

炭焼どもに掛け合ふと、これまでロハで空中に消えてゐた煙だ、はじめは一向本氣に取り合はなかつたけど、事情を言ふと、一と釜につき五錢の煙代をパツと前金で拂つてやつたもんですから、目の色を變へて便宜を計つてくれたものです。五錢と云へば安いやうだが、一と山だけでも、何と二十兩タア、ベラ棒な瓦斯ぢやありませんか。それは兎に角、宿屋に陣取りながら、釜の到來を待つてゐると、やつて來ましたね。世界平和恢復の號外とつれ立つて！新聞を見ると、染料は一列にドカ落ちでさあ。ヘツ！これでアニリンの製造も佛滅のナンマイダアとは驚きましたね。酒顛童子にでも食はれたらよからうてんで、山の中へ大釜を放り出して命から〴〵馬關へ夜逃げをして見ると、こゝですつかり引導を渡されました。あるべき筈の金と女房とがなくなつてゐるので、だん〳〵探してゐると、居ない筈でさ私の女房は小倉の十二師團にくつついて、いつの間にかハルビンへ突つ走つてゐるんですもの。ね。」「お君さんて、そんな女かね？」と俺は呆れて聞いた。「まあ、どんな女かお會ひになりや解ります。チタへいらつしやるならハルビンで乘り替へだから、是非訪ねて下さい。杏花樓なんて料理屋にゐるつてことを聞いてゐます。西伯利歸りの兵隊さんが、馬關へ上陸すると、驛の酒場で一と騒ぎやるのです。私は其處へ出掛けて、ハルビンの杏花樓にコンナ面體の女はゐないかと尋ると、兵隊さんは伍長から二等卒まで、ポツケツトの裸體寫眞を取り出して見せて、これだらう、これなら知つとると云ふのです。見れば見る程私の女房だ。何が不足でハルビン三界へ飛んで行つたいか？何の醉興で裸か寫眞なんぞとるのか？いづれとも深い仔細があるだらうが、よかれあしかれ、親同志が承知の助で纏まつた夫婦でこそないが、一應は突止めて事情を知らないと、安心ならぬ。俺も男だ。かう決心して此處まで押出しては來ましたが、何しろ空つ尻なもんだから、途中でこんな眞似をしてゐるんですよ。それにつけても、あなたがたが羨しい。ヘツヘ！」と云つた。悲憤のやりどころもないが、面目次第もない話だ。五十五郎が女ならば、差詰め、安珍追跡の清姫が、川どめを食ふ代りに洋食屋のボーイを相勤め乍ら、汽車賃を溜めやうといふ一幕だから氣の長いこと夥しい。悲しいのを我慢する分には差し支へない俺も、可笑しいのを堪へてゐるのは迚も辛い。「可哀相にそんな事とは知らなかつたよ。しかし、僕だつて何も御自分の出世を見屆けに西伯利へ行くわけではないさ。お互に似たり寄つたりの身分だから云ふがね。僕が君だつたら、このまゝ内地へ引返してテニスの先生でもやり直すね。君の前だけど、そんな了見のお君さんを、よしんば首尾よく取り押へたところで

だ、何處へまた突つ走るか知れたもんぢやない。よした方が悧巧だよ」と口の先で慰めてやつたが、冗談ぢやない。いくら世間が廣いつたつて、これほどまでに氣の知れない人種が、俺の故鄕から出たかと思ふと肚の中で冷汗が流れた。誰か偉い事をおつぱじめると、フンそりや當りまへだ、誰か愚劣な眞似を仕出かすと、フン死んぢまへと笑ひ殺してやるのが俺の病氣だ、俺は年中俺を笑殺してゐる。これではナポレオンの從卒にも容易になれまいと悲觀することがある。五十五郎は不平らしく、

「あなたの仰有ることは御尤もですが、私の身になつて見ると――」と云ひかけて「いや！久しぶりのあなたに、こんな話はよしませう。ところで、失禮ですが、このお方は？」と萬之助を見た。「おい君。紹介しろ」と顚人坊主が催促した。「これは僕の同僚で、西伯利新報記者平口萬之助てんだ」と俺が引合せた。「こつちは、僕の舊友五十五郎君さ。話をきいてたらう？」。顚人坊主が立ち上つて「僕が平口です。この大泉とは月島造船所で知己になつたのです。どうかよろしく」と何だか造船所の大將みたいにグツと反り返つたかと思ふと、「さつきのお話には心から同情すます。さう云ふ類の婦人は掃くほどあります。ウントコ復讐すておやんなさい。どうせ我々兩人は、チタ・ハルピン間を往徠する事でせうが、念のために一ツ行きがけに立ち寄つた上で、然るべく偵察すてあげませう」と餘計なことを云ひ出した。大きにお世話だ。たま〳〵釜山へ來るかと思へば、見たくもない五十五郎に巡り合ひ、たま〳〵五十五郎と巡り合ふかと思へば、緣も由緖もない洗ひ粉のお君さんと鉢ち合せをする、とすれば、こりや容易ならぬ、面倒だ。所定の命題が示知の上のカテゴリアから出發して論理的に推論されたものであれば仕方もあるまいが、心意の展開は、必ずしも、前行の心理と周圍の事情の、必然的な結果として、充分に說明され得るものではない、と云ふのが俺の持論だ。（しかし、實際のことを打ちあけて云ふと、俺は顚人坊主に引つぱられて、杏花樓のお君さんとお目にかゝつた。ところが丸きりの人違ひで、とんだ恥を掻いたのだ）だから、この際、ハルビンに立ち寄つて、杏花樓なんぞで道草を喰つてゐちや、日は暮れる。讀者は欠伸をするだらう。眞つ直ぐにチタ行きだと肚は決つてゐる。五十五郎がステイションまで見送ると云ふのを斷つた。また歸りには寄るからと云ひながら、俺と萬之助は「釜山カフエー」を失禮した。五十五郎に勘定を拂ひ、旅行案内を覗くと、長春聯絡の三等車が十時二十何分に出るさうだ。まだ十分はある。チツポケな町の癖に、ステイションばかり賑やかだと思ふと、金澤邊の工兵電信隊が乘り込むので、有志の見送りが集つてゐ

るんださうだ。やれ〳〵と思つてゐるうちに、汽車は草梁の方角へゴトンと一ツ揺れた。その草梁から三浪津、大邱から秋風嶺、大田から成歡だ。京城へ着くと、時間表通りに暗くなり寒くなつた。これで見ると　朝鮮の汽車も俺の話も、走り出せば早いもんだ。これだけの他に、ステイションは五月蠅いほどあるが皆忘れた。おぼえてゐるのは、朝鮮人の家に火がついて一軒燃えてゐた、夫婦の朝鮮人が自分の着物をぬいで、屋根を引つぱたいてゐる。あれで火が消えたら重寶なもんだと思つた。西伯利から歸るときに、氣をつけて見ると　燒跡には松葉形の新らしい家が、チヤンと出來上つてゐる。夫婦の朝鮮人が、着物をとり替へて新宅の窓から此方を眺めてゐた。例のやつを洗濯したのだらう。燃えるのも早いが、建つのも早いもんだと思つた。これが三浪津だ。しばらく行つたステイションの歩廊に、貴婦人まがひの服裝を背負ひ込んだ日本の奧方連が、一方の手には日の丸の旗を振りかざし、一方の手には鐵瓶をブラ下げて行列をつくつてゐた。金澤の兵隊さんが、汽車の窓からアルミニウムのコツプをぬつと出すと、サアお上んなさいと鐵瓶の口を傾けに來る。汽車が動き出すと、奧方連が日の丸の旗をなびかせながら「萬歲！」と悲鳴をあげた。この悲鳴が俺たちの窓まで聞えて來るから恐縮した。聞いて見ると、西伯利行きの兵隊さんが通ると、どんなに夜更けでも寒さを厭はず、かうして移住民の細君は鐵瓶と日の丸の旗を持つて來るのださうだ。兵隊さんも辛からうが、これも樂ぢやないと思つた。これが大邱だ。ところが此處だけこんなに勉強して見せるのかと思ふと、行くに從つて烈しくなるのだ。こんな禿げツちよろの山の中に、こんなに大勢の顏がよくも揃つたもんだと感心するほど、ズラリと盛裝の藝者が列んで「萬歲！」と叫んだときなんか、ベンチの上にスヤ〳〵と寢てゐる兵隊さんまで起き上つて「ワアツ」と言つたもんだ。これが秋風嶺だ。しかしこれは日本人に限らない。耳も鼻も眞つ赤にしてガタ〳〵顫えながら　例の日の丸の旗を胸にさした朝鮮の小學生が歩廊に行列をつくつてゐる處もあつた。前と後ろには、西南役につかつたかも知れない六尺あまりのサーベルをつるして、警部巡査みたいな先生が兒童を見張つてゐる。この先生は日本人で、右の手に鞭を提げてゐるところを見ると、あのサーベルで脅かして置いて、あの鞭で毆るのだらう。その證據には「萬歲！」と云ふ兒童の聲がベソ搔くやうに聞えるから可哀相なもんだと思つたから嘘でない。勞働者も朝鮮人と來ると馬鹿にされる。小學校の生徒も朝鮮人と來ちや災難だ。これが大田だつた。まもなく俺たちの車輛に乘り込んで來た一人の婆さんがあつた。この婆さんが隣

りにゐる日本の婆さんに片こと混りでお饒舌りをするのを聞いてゐると、婆さんの息子だか、孫だか兎に角、あんまり日本が好きではなさゝうな一人の朝鮮人が、鴨綠江の岸で日本の兵隊に捕まつて何處其處へ引渡されるから、一と目會ひに行くのだが、會はせてくれるだらうかと云ふ話だ。そのヨボが、何かの目的で上海からダイナマイトを買ひ込み、鴨綠江の氷結を利用して國內に入らうとするところを、一町置きに立つてゐる哨兵のために誰何されたもんだから、萬事休すと覺悟して、抱えてゐるダイナマイトを投げつけたところが、それが不發だつたさうだ。冬になると朝鮮はダイナマイトの爆發で忙しいと聞いてゐたが成るほどゝ思つた。爆發もしないダイナマイトを平氣で賣るところは上海の支那人らしい。それを買ひに行くところは、どうしても朝鮮人向きだ。これが成歎だつた。だからこれだけは忘れない。新義州から安東へ渡る長い鐵橋を突切ると、江面にそゝり立つ凍波が白く銳く、北洋海の氷山のやうに見えた。お婆さんのヨボがダイナマイトを擔いで這ひ上がらうとした土手は何の邊かしらと思ふと、忽ち釜山で別れたオビンヅルの顏が宙に現はれて「僕だつて今にやりますよ」と云ふやうな氣がした。金澤の兵隊は、此處で何をするのか、茫漠とした安東（アントン）ステイショシの步廊で二列橫隊になり、此處は御國を何百里——

と聲を揃へて活潑に唱ひながら、改札口へ繰り出して行つた。さつきの河は鴨綠江だつた。この邊まで來ると、乘り降りの客種が段々下落して、奉天から長春へ着く時分になると、豆糟くさい垢だらけの滿洲人と、汽車賃なんか拂ひ相もない樣な蒙古人ばかりとなつた。翌日の晝、長春の步廊に吐き出されて、まごついてゐると、滿鐵の役人がやつて來て、西伯利方面行のお方は左の踏切を渡つてアチラです。東支線には食堂がありませんよと云ふから、取り敢へずステイションの地下室で牛肉の罐詰を二つ買つて踏切を跨ぐと、汽車が待つてゐた。客車の横つ腹に、チタ行と白墨で殴り書いてあるから、これだらうと見當をつけて三等車へ跳び込んだ。そして窓に張りつめてゐる氷をすかして見ると、吉林方面へ向ふレールが、高粱畑の中で遙かに光つてゐた。このレールと三十度ばかりの角度で、東はハバロフスク、西はペトログラードまで續いてゐる鐵の棒に乘つかつてゐるかと思ふと、命に別狀さへなければ、ついでに西の終點まで行きたくなつた。これから先は露西亞人の汽車だから露西亞人が運轉する。石炭の代りに薪を焚いて走るのだ。汽笛も鳴れば鐘（かね）もなる。汽罐車の頭に教會堂から貰つて來たやうな大鐘がブラ下つてゐる。走つてゐる間、ガラン〳〵と鳴る趣向だ。この大鐘が一ツ、ガランと鳴る拍子に、夫婦づれの支那人

が抱き合ひながら飛び込んで來たかと思ふと、俺と萬之助とがゆつくり占領してゐるベンチの上段へ這ひ上つたもんだ。日本の三等ベンチの脊中を、天井まで引伸して、頭の上にモ一ツ腰掛を取附けてあるのだ。支那人夫婦が、窓に足をかけて、「ワッ！」と一聲で彈ね上つたときの手際は見事なもんだつたが、汽車が動くと直ぐ唄を唱ふのだ。夫婦掛け合ひで翌朝までやられたのには閉口した。おまけに向側の釣臺に足をブラ〳〵下げて本を讀んでゐる露西亞人のお袋と十七八の娘の靴の下には、久留米絣に釣鐘マントの男が、坂本龍馬みたいな面がまへでかしこまつてゐる。釣臺の腕に灯してある蠟燭がグラ〳〵ゆれて今にもこの男の鼻の上に落ちさうだから、見てゐるとハラ〳〵する。何分電燈がないから夕景になると眞つ暗だ。試みに一錢銅貨で引搔くと一寸は確かにありさうな窓硝子の氷に、汽罐車の煙から吐き飛ばされる火の粉が、流星のやうに赤く映る瞬間だけ、隣りの客の顔がパツと見える位なもんだから、どんな奴が何をしてゐるか解らないけれども、二三人の露西亞人が路ばたに溢れてゐるところを考へると車輛は滿員らしかつた。何でもかんでも珍らしいと見えて、呆れてゐる萬之助が、つまらねことまで五月蠅く尋ねるから寢たふりをしてゐると寬城子につ

いた。露西亞人の車掌が、大小二本の丸い棍棒を落し差しにして旅券と切符の檢査にやつて來る序に新入りの馬尻を置いて行くと、立ん坊の露西亞人が寄つて集つて焚きつけるのだ。間もなくこの馬尻がストオヴの代理をつとめやうと云ふのだから心細い話だが、心細い話には限りがない。「馬賊の出さうなところを聞いといてくれたまへ」と萬之助が心配さうに云ふた。車掌に聞いてやると、「馬賊なんか處嫌はず出らアね」と云ふ返事だ。出たら大變だ、と足に力を入れてラオシヤオクヲまで來ると、便所へ行きたくなつたから立たうとすると、靴の底が床にくつついて脫れなくなつてゐるのだ。驚いて見ると、何處からともなく流れて來る水が、お客さんの足を殘らず床に凍り附けてゐた。大方、屋根の雪が解け落ちて又凍り直すのだらうと思つたが、暗闇を歩くと辷りさうだから一と晩こらえてゐた。ところが後で氣がつくと、雪の水だと思つたのは、尾籠な話だが、お客さん同志の放尿だから恐れ入つた。便所がないかと思ふと有ることはあるけれども、足の踏み場もないほど溜つた上に閊へてゐる。閊へてゐる上に扉の外までハミ出してゐるのだ。ハミ出した糞尿が石のやうに凍てついて眩しく輝いてゐるからハヽアと思つたが、お互の罪だから皆苦情を言はないのだらう。馬尻に火を焚くと暖まるから流れ込むのだ。流れ込みの始まつたラオシヤオクヲ邊から、洪水につかつて知らん顔をしてゐると

タオライチヤヲで汽車はピタリと停つた。一時間たつても二時間たつても動く様子がない。夜が明けさうになつても汽車は飽くまで泰然とかまへてゐるもんだから、うとついてゐた萬之助が、眼をあけると忽ち「どうした？どうした？」と馬賊に捕まつたやうに眼の色を變へて狼狽した。

「汽罐に故障が出來たんだらう」

と俺が言ふと、釣鐘マントの坂本龍馬が萬事呑み込んだことを云つた。

「いや〳〵。薪が切れたのでせうタイ。鐵道會社で近頃月給をくれんもんぢやケン從業員どんが、汽罐の薪を盜つて賣りますタイ。」「すると如何なりますかね」と、萬之助が例によつて呆れながら質問した。龍馬の返事が迚も呑氣だ。「その時は翌日の燃料供給時間まで此處で待ちますタイ。」と云ひながら翌日まで待つつもりなんだらう。信玄袋の中から性の知れない正宗の四合瓶を取り出して喇叭のみを始めたから、成るほど馴れてゐると見えて用意のいゝ男だと思つた。この坂本龍馬の說によると、大將、ハルビンの醫者ださうだ。醫者なんてものは、お召しの着物にお召しの羽織を引つかけて、いざと云ふと、他人の金で俥に乘り廻る先生なんだが、この人は釣鐘マントに洗ひ晒らしの久留絣だ。しかもツンツルテンの筒砲袖と云ふ扮裝だから勇ましい。質屋歸りの豪傑みたいだ。いざと云へば、尻をまくつて跣足で病家へ駈けつけるのだらう。此の邊まで來ると、醫者の風まで違つてゐるから妙だと思つた。何でも、開業醫の試驗に及第したのが、八回目だから、この位根氣のいゝ醫者は、福岡縣にも類がないさうだ。願人坊主が文驗にパッスしたのは、三度目とか云ふので、一時は敬意を表したこともあるが、此處に圖らずも四五段の上手がゐる。だから、月に一度は長春まで用足しに行くのださうだ。長春には滿鐵の病院があると敎へてくれた。「なあに、アンタ。汽車の立ち往生なんざ、高の知れたもんですバイ。私が初めてハルビンへ行くときなんか汽車の中で信玄袋を一つ盜らはれたもんですよ。信玄袋を二つ枕にして寢てゐると、慾の深い露助の野郎が來て、輕い方を持つて行かずに、重い方を拉つて行きましたが、それには醫者の字引きが入つてゐるんだから、奴さん、あけて見てガッカリしましッらう。ハッハ、そこでハルビンの日本民會に訴へると、アンタ、露助の泥坊に醫者の字引きと來ちや、猫に小判も同樣だ。今にうつちやるだらうケン。それまでお待ちになるより外に仕方がなからうと云ふことでしたが、そいつ今だに出ないところを見ると、日本字が讀めるかも知れまッせんバイ。だから今日まで字引なしで押し通してゐますが、しかし、一番へこたれたのは、

スタンチヤ附近の、露西亞人の家に間借りした時ですよ。戰爭避難の露助や、各國の兵隊どンが立ち込んでゐるんで、町の家は何處も一杯ですなア。やつと貸間札を見つけて行くとアンタ。お神が出て來て、今主人がゐないケン一人で決めるわけに行かんが、そんなに困るなら、よろしいお出なさいと云ふ。私が荷物を運んで引越すと二三日して親爺が他所から戻つて來て、お前のやうな日本人に部屋は貸せないから、直ぐ出て行つてくれと云つて、醫者の看板を引つぱづして持つて來ましたが今追ン出されちやたまらんから、强性に頑張つてやるとアンタ。部屋の天井にポカ／＼穴をあけて、水を垂らしますバイ。家主は二階にゐました。その水が私の頭の上で氷柱となつてブラ下つとるもん、敵ひまッせんタイ。それでも一週間踏ん張ると腰が冷えましたよ。ひどい露助さ」と云つた。大將の根氣强いのは、これでも解るだらう。「西伯利つて、そんなに人氣の惡い處ですかなア。」と、西伯利の玄關で萬之助が眼を丸くしながら悲觀すると、「いや／＼。これで産物の豐富な割に、人間も交通も少ないから、内地とは違つて不思議に生活(くらし)安いのですタイ。戰爭がお了ひになれば、天地萬物は極樂淨土のやうに、のんびりしますバイ。何處へお出にならうと辛棒は肝腎ですな。憚り乍ら、お二人さんは、どちらへ?」と釣鐘マントの龍馬が云つた。萬之助が行先を教へると「あゝ。チタか。チタはよろしいなア。顧みれば往年、かの獰猛なる露國政府の官僚ばらが、スラヴ民族の一大帝國を夢に見て、東方政策の燃ゆるが如き瞳光を睜張しつゝ、西伯利南下を試みたる足だまりがチタですからなア。その恐るべき官僚ばらが――」と云ふから、何が始まるのかと思ふと、この調子で西伯利歴史の講義だ。「チタを中心に、去日(きのふ)までは無人の曠野として虎狼すらも見限つたハルピンに到る鐵路の布敷だ。丁々たる斧鉞の響。烱々たる銃劍の光。さしも大荒蕪の天地を須臾にして壓すれば、たちまち閃ゆる奇笛一嘯。折から西空にあたつて怪影あらはれ。見る間に蜿々長驅し來つて、ついに停るところ、これ卽ち、當今人馬駱驛のハルピン市街だ。サア。獰猛なる露國官僚は、こゝを第二の足場として、遠く遠く大連(ダルニー)へ――」と、いゝ氣になつて頗る太袈裟な博多辯だ。クロポトキン將軍の「滿蒙處分論」を浪花節に崩して語るやうだ。しかし知らない人が聞いたら、四十七士の討入りと、川中島の合戰とが、一緒に落ち合つた始末書を朗讀してゐるかと思ふかも知れない。旅に出ると人を捕まへて土地の故事來歷を押し賣りする奴に出會するもんだが、これは少し念入りだ。もう澤山だと云へば、相手は、これでも正氣だから怒るだらうと思つて辟易してゐると、これには流石の萬之

助も一本參つたと見えて「いや。大きに結構です。よく解りますた。ときに、もう汽車は出さうなもんだが、おい君。僕は言葉が通じないから、御苦勞でも驛長に會つて、樣子をきいてくれないか？この先もチョイ〳〵こんなことがありますかつてな？この調子でやられた日には、手前どもの大藏省は破產いたしますつて云ふてくれ。」と言ひ出した。放尿の海の中に、おとなしく鳴りをしづめてゐる客を見ると、いづれも一反乘り込んで了へば、金と命は向ふ任せだ。どうなと勝手にしやがれ、と云つた風だ。萬之助一人が、五月蠅くヤキモキする。面倒臭いゝ、俺は外套の上から願人坊主のマントを引被つて步廊へ出た。人間の住居らしいものは一つもない午後十二時の、しづかに森閑とした雪の中に、たつた一ツ、丸太づくりのステイションが膝までハマリ込んでゐた。宵のうちに降り出した雪だ。來月あたゞは恩給證書を貰ふかも知れない內務省の役人みたいに、たゆみなくセッセと降つてゐる。この邊のやつは踏むと灰のやうにギユウと軋む。風が吹くと、天瓜粉みたいに足元からパッと舞ひ上つて、目に入つたり、耳に入つたりするから厄介だ。ステイションを覗いたが、誰もゐない伽藍洞だつた。大きな暖爐が盛んに赤い舌を吐いてゐるきりだ。そこに、丸ごと油焙の鷄だか家鴨だか解らない鳥の肉を、お櫃に入れて首にブラ下げてゐる乞食面の支那人が尻をあぶつてゐるから、お前では困るが、露西亞人の驛長はゐないかと云ふと、たちまちお櫃の中の油焙を摘み上げて、ニコニコと指を二つ曲げて何とか言つた。空腹を抱へて彷ひ出たと思つたらしいが、言葉の分らないのも淡白してゐる。默つて脇を見ると、穴熊の隊長みたいな小汚ないシユウバの機關士が、汽罐車の鍋の下に蹲んでゐた。穴熊の尻には栗の丸太がウンと積んである。エンジンは無事に湯氣を吐いてゐる。して見ると、薪や機械に故障はなさゝうだと思ふから「おい〳〵。汽車はいつ出るんだい？」と聲をかけた。驚いてこつちを振り返つた穴熊の面相が北極から飛り越した達磨さんと云ふ恰好だからおかしい。スタノボイの森林から黑龍江が覗いてゐるやうな具合に、髭髯の中に辛うじて眼玉だけ二ツある。その髭髯が凍りついて、一本づゝ鯱鉾立ちをしてゐる。先刻の支那人が持つてゐた鳥の肉を兩手に抱えてムシヤムシヤ食ひながら「只今！」と一と言つた。だから直ぐ出るんだらうと思つたら二十分立つても出ないのだ。「おい〳〵。汽車は眞個にいつ出るんだい？」と俺も少し癇に障つた。すると穴熊は又平然として「只今！」と云つた。そんな只今があるものか！いゝ加減なことをぬかすと、客は皆怒つてゐるんだから、」

打ちのめしに來るぞ！と脅かしてやると、「フン。さうか。」と穴熊はニヤリと笑ひながら、ピョンと歩廊へ跳び下りた。そして俺の腕を力一杯鷲掴みにして「そんなら一ツ、私の代りに、あすこに坐つとつてくれないか？」と汽罐車の鐘の下を指した「仲間は驛長と一緒に此の町へ出て行つたんだよ。もう歸る時分だが、何なら呼んで來らア。なアおい。」と來た。俺をつかまへて「なアおい」呼ばゝりだ。しかしこれで見ると、何の用足しだか知らないけど、みんな汽車を放りつぱなしで、雪の下のクオライチヤオ町か村かへ出拂つてゐる樣子だから亂暴な話だと思つた。のみならず、お客さんの俺に汽車の番をさせる魂膽だ。いくら穴熊に常識がないつたつて、これはあんまり失禮すぎるだらう。と云ふと、お前さんはさう云ふけれども、車内にゐるよりや、火氣が強くて暖かだよと威張つて見せた。汽車に乘つて憤慨した經驗はたんとない。いつだか小田原と熱海の間を傾走する輕便で、門川まで行くと崖さきで脱線したことがある。海へ落ちさうになつて引つかゝつてゐるのだ。脱線した張本人の機關士がかう云ひながら、大きな丸太ン棒を二三本引きずつて來た。「命びろひをしたと思つて肩を貸してくんな。」湯治のお客が一齊に憤慨して汽車を持ち上げると、造作なくレールの上にあがつた。俺もやつた。そのあとさきに武藏線の村で祭りがあつたから見に行つたことがある。汽車が練馬を出かゝるとビールを一ダースほどブラ下げた百姓が、大分遠方から手をふり乍ら、待つた待つたをやると、汽車が止つた。すると乘合の若い衆どもが、この調子で何時も汽車がおくれるのだ。あんまりダラシがなさすぎると憤慨して、ワツショ／＼と左右に汽車をゆすると田甫の中へひつくり返つた。滿員だから一人も怪我はなかつたが、一緒にころげ落ちた俺は、もう二度と再びこんな汽車には乘らないと思つた。日本から西伯利へ行く人は掃くほどあらう。だが、汽車の番を頼まれるのは俺ぐらいなもんだらうと思ふと、腹も立つが、試みに大鐘の下へ坐り込んで見る氣になつた。すると成る程、首から下は、いやにポカ／＼するけど、鼻と耳は足場が高いだけに雪あたりが烈しいもんだから、千切れて飛び去うだ。よく／＼人を食つた穴熊でないと勤まりつこない商賣だと思つた。俺は、鳥の揚肉を後生大事に抱へてステイションを出て行つた穴熊隊長の歸りを待つた。やがてこの寒さに何處を迂路ついてゐたのか、同じやうなシユウバの裾をゾロリと引き摺りながら、五六人の男と、驛長らしいのが、穴熊隊長に引卒され、悠然としてやつて來た。奇妙なのは、この一人々々が、法外な鷄籠を擔いでゐる。その鷄籠を貨車の中へ放り込んでポツ／＼と部所につかうと云ふのだ。穴熊

と入れ代つて聞いて見ると、何でも此の町か村かの百姓に頼まれて、長春から安く仕入れて來た野鷄の雛鳥を賣り渡しに行つたのださうだ。不思議な機關士どもの內職があるもんだ。お蔭で一と晩おくれるだらう。汽車はいつ出るんだいと云ふと、「只今！」と云ふ返事だ。「今度の只今に間違ひあるまいな？」。俺が駄目を押すと穴熊が「間違ひはないとも。それ只今だ！」と機械の栓をひねつて見せた。忽ち恐ろしい湯氣がシュッと迸つて、ゴトンと汽車が動いたから俺は喰つて車內へ駈け込んだ。ところが これは穴熊の愛嬌だつた。それから二十分でやつとこ走り出すのだから、穴熊の嘘ばかりは、奥行が知れない。ブル／＼顫えながらベンチに逆戻りすると、いつの間にか牛肉の大和煮をあけて、坂本龍馬の正宗を呷つてゐる萬之助が、「樣子はどうだい？」ときくから「只今！」と眞似をして見せた。「そいつは有り難い！實はな。私の切符が明日までの期限なもんだから、內心大いに憂慮しとりましたタイ！旨い／＼」と勇み立つて信玄袋の中から正宗をも一本出した。「さあ。大いにやつて下さい！」と云ふたかと思ふと、よつぽど嬉しいと見えて、俺の牛肉を一口にペロリと舐めたから痛み入る。遠慮のない醫者だ。この調子だと、大いにやりませうと云ひながら自分一人で飲んで了ふかも知れない。すると願人坊主まで浮かれ出して「おい。一と口のまないかよ。それから、ハルビンの先生の咽喉を一ツ謹聽すたきへ。珍なもんだ」と瓶の口を持つて來た。珍なもんだ。よつぽと自信があると見えて、「やりますかね。よござんせうかね」と遂にやり出した。鉋屑のラッパから出るやうな聲だ。

'If you go
I will go then
We shall go
Narrow is Dai-Nippon
And life is getting stale—

棚の上の露西亞人親子が驚いて足を引つ込めると、流行の支那人夫婦も、これには降參したと見えて、釣臺から首を出して交る交る臍を潰した。この唄が英文法の時の練習みたいで大出來だ。醉拂ふとそんな聲を出すから、露西亞人に追ひ立てを食ふのだらう。拍手してやると「これは近頃ハルビンで大ばやりですタイ。メリケンの兵隊が藝者を揚げて騷ぐときは、こいつ大きに持てますからな。へお前が行くなら、わしも行く、狹い日本にや住み飽いた——と云ふ文句でさ。」と飜譯をしながら、露西亞にや何とかの人が待つ——トコトットトと——やつてのけて今度は萬之助に一ツ願ひますと云つた。氣の強い男だね

ら、尺八の「深川」でもやるかと思ふと、いきなり力み出したへ饅頭笠に、管合羽、酒の氣嫌でブラリと訪れたるは、兄、鹽山殿の玄關先、えゝ、賴まう！賴みませう！赤垣の源藏でござる——どうだい。アッハッハ、」と十八番の浪花節で來たからヒヤ〳〵する。月島海岸のビール箱の中で岩蛸にせがまれて毎晩讀んだ講談の一節に、出鱈目な節をつけたのだ。すると俺ばかり謙遜したつてつまらないから、負けずに怒鳴つてやつた。「Величайшею скорбью твоего супруга со дня его смерти」とはどだ！」。すると萬之助がびつくりして「君、そりや何だい？」と云ふから「八十八ケ所の御詠歌を露譯したんだ。ラッパ節のメリケン譯よりや旨からう？」と敎へてやつた。默つて引つ込んだところを見ると恐れ入つたんだらう。態を見ろ。平生は優しくしてゐるが、何かやりや、この通りだと脅かすと、「驚き入つたもんですな。しかし、ハルビンのバイカル女史なんか、もつと流達にやりますぜ」と坂本龍馬がけなさうとするから、バイカル女史は露西亞人だらう、露西亞語の旨いのは當りまへだ。と云ひ返してやると、「可哀相に、露西亞人ぢやありまッせん。日本の藝者でさア。杏花樓のバイカル女史と云へばハルビンで有名なもんですバイ。」と坂本龍馬が信玄袋から新らしいハンケチを一枚引き出して丁寧にひろげて見せるのだ。「これですタイ。この寫眞を御覽なさい」と言ふところを見ると、「チウリン商會ハンケチ部特調」のマークの下に、藝者らしい女の顏が、薄ぼんやりと刷り込んである。このチウリン商會と云ふのは、露西亞人と日本人とが、共同で經營するハルビン第一の百貨店だ さうだ。今ごろ田舍臭い繪入りハンケチを態々特調する百貨店だから、時代おくれの點に於てもハルビン第一だらう。その百貨店にまで擔がれ、無風流な野暮な藝者までかうして持ち合せる位だから、恐ろしく有名な杏花樓の女史があるもんだ、成る程、こんな流行ッ子なら、露西亞語の小唄なんさ、俺よりは流達かも知れないと感心してゐると、五十五郎の細君のことが、フッと頭に浮び出た。だから、念のためにハンケチを手にとつて見ると、このバイカル女史の顏が、洗ひ粉屋の娘だから頗る意外だつた。俺の知つてゐる洗ひ粉屋の娘は二十か二十一だ。佛樣につけて貰つたやうな丸い黑子が、眉間のまん中に一ツある。頰つぺたが顚へ行くほど愛想よくゝれてゐたから、バイカルよりは上野公園の瓢簞池に近い女だ。その黑子までハンケチにはチヤンと現はれてゐるから間違ひはない。「こりや、お君さんだ！いよ〳〵お君さんだ！」と俺が云ふたら、乗合の客がびつくりしてワッと總立ちになつたもんだ。總立ちになる位だから、俺は餘つ程大きな聲で驚いたん

だらうなア？と後でゆつくり萬之助に聞いて見た。すると萬之助が落ちつき拂つて「そりや君が、お君さんだ！と云ふ拍子にガターンと汽車が動いたから、嬉すまぎれに立ち上つた謙助どもが『萬歳！』と云つたんだよ。見ろ。汽車は走つてらア。」と偉さうに劍突くはせた。だから、夜明けごろハルビンに着いだのも、「やつぱり汽車が走つてる證據だい」と言ふべきもんだらう。

（また追記）去年の九月に「あの頃の俺・この頃の俺」（原稿紙數約六十五枚）を書いて、一躍貧乏した。それきりだから、僕の親愛なる讀者諸君と、こゝでお目にかゝるのは隨分の久しぶりだ。その節、あの名文に追記を添へて、如何に僕の物語が尻切れに成らざるを得ないかを申し開いたが如何に此の度の物語も亦尻切れにならざるを得ないかの申し開きをするならばだ。聞いて下さい。あんまり長くなると雜誌にのせる譯に行かないからです、と云ふことになるのは知れたことだ。僕は仁木彈正みたいな男に好意は持たぬ。洗ひ粉屋のお君さんになら何時でも同情する。お君さんのやうで、どうやら人違ひのやうなバイカル女史を立役に、僕と萬之助とが二枚目どころの西伯利生活を物するのが、本來の眼目であつた。そんなら其の邊から出發すりや早く片づいてよかつたらうと云ふ人もあるだらう。僕もさう考へる。しかし、何だつて西伯利くんだりまでのしかけて行く氣になつたのかと聞かれて、それもさうだと後から說明をするのは見苦しいと思つたから、月島の海岸に筆を起して朝鮮まで引き合ひに出したのが手違ひの元で、道草ばかり食つてゐるうちに、紙數は遂に豫定を超へて了つた。スタートを切り直すのはトランプに限り、文學はさう行かぬ。まことに恐縮ながら旅の道中で擱筆すること御覽の通りだ。この作者、近來甚だ筆不性になり、おまけに御自身のプロレツトカルトで多忙を極めてゐるから、話の先を何時書くかわかり兼ねる。だから諸君は決して待つに及ばない。此處に於て此半篇を「自叙傳」第八回とし、絕え間なく有望にして、兎も角も尊敬すべき平民文學者の僕は、いみじくも痩せこけたる身に群がる藪蚊の撲滅に立ち向ふであらうと云ふ文句で結びたい

地震史とそのエピソオド

高須芳次郎

(一)地震國日本とイタリイ

日蓮聖人の『立正安國論』は、鎌倉時代に於ける大地震、大暴風、大疫癘などが續いて起つた際に執筆せられたものであるが、其のうちには、明かに災禍に對する宗教的解釋と時代警醒の熱意とが現はれて居る。日蓮の見解によると、正法を信じない謗法の國は必ず諸天善神の見捨てるところとなる。其の隙を覗つて、惡鬼、魔神などが跳梁して、大天變や大地夭などを生ずるのである。今の日本は日蓮の所謂「謗法の國」に當るかどうか、今の爲政者や民衆の一半は「謗法の人」であるかどうか。私はそれについての考察を省く。が、今回、東京横濱及び湘南總房地方一帶を中心として起つた大地震は私らに取つて、無限の悲痛であり、最大の恨事であるばかりでなく、そこに大きい警醒を促がすべき神の鞭が動いて居たのではなからうか。私は肅然として、神の心、佛陀の心を思はないでは居られない。

由來、日本は世界第一の地震國である。ヨオロッパでは、イタリイも亦顯著な地震國だ。が、日本の方が遙かにイタリイに優つて居るやうに思はれる。しかし地震の記録では、イタリイの方が日本よりも發現の時が早かつた。かのベスビオ火山の噴火にもとづく地震は西紀六三年二月に行はれたのである。それは日本史上で垂仁天皇の九二年に當る。

ベスビオ火山はナポリ灣頭に位する複成火山である。其の火口は直徑半哩ほどある。火口原はアトリオ・デル・カバリヨと稱せられ、東部には地獄谷といふところがある。西紀六三年の大地震以來、時々地震が續いたが、最も恐しい結果をもたらしたのは西紀七九年八月二十四日、突然大活動を起した時だ。其の際、旺んに火山灰や岩屑や浮石などを噴出して、山麓にあつたポンペイ、ヘルクラネウムの二市を埋めてしまつて、多數の死傷者を生じた。

ポンペイは當時のイタリイ文化を誇るに足るべき都市であつた。それがベスビオ火山の熱灰を浴びて、人口三萬のうちで、二千餘人の死者を出して、亡びてしまつた後、其の廢墟が發掘せられると、當時の劇場、寺院、住宅、店舗などが昔の姿のまゝに存在して居て、どんなに其の時分の文化が進んで居たかを示した。今日、ナポリ博物館に保存せられて居るポンペイの美術工藝品などを見たものは、必ず西紀七九年八月の大地震に想到することであらう。

イタリアでは、他にエトナ火山がある。ベスビオ火山と相對峙して、時々大きい爆發をした。西紀四七六年、西ロオマが亡びた年に熱灰、熱石を飛ばして、非常に恐しい光景を現はした。それは、南半腹にあるモンタニヨロの大側火山が急に活動を起したからである。概してイタリイのチルレニ海邊には火山が多いので、震害の犧牲を出すことが絕えなかつた。イタリイはどうしても地震の國だ

支那では、後漢の順帝の時代に夏、地震があつた。日本では、天武天皇の白鳳七年十二月に九州地方に大地震を生じた。それが有史以來、最初の地震であつたらうと思はれる。それから聖武天皇の十七年五月から度々地震が近江地方に起つて、翌年まで續いたことが「續日本記」に出て居る。當時大地が龜裂して水を吹出した物凄い有樣に對して、寧樂時代の人々はどんなにそれを畏れ、どんなに心をいためたか。そしてどんなに熱切に佛天に祈つたか。が、わが國史の上に於て、地震の慘害が著しくなり始めたのは平安時代からである。殊に鎌倉時代に入ると、地震が續生して、民衆を大きい不安のどん底に陷れた。吉野時代、室町時代にも地震があつたが割合に目に立つほどのものがなかつた。地震の慘害よりも戰爭からくる受難の方が遙かに多大であつた。そしてそれが深酷を極めた。安土桃山時代も略ぼ同樣である。ところが江戶時代、東京時代になると、地震が頻出して、大慘害を生じたことが少くない。それらの悲痛な記錄は苦い運命の哀史である。それは自然力に征服せられた人間の淋しい、はかなさを無言のうちに示して、生に附纏ふ受難の永劫に絕えないことをゝ敎へる。私はさうした痛ましい記錄をこゝに一々繰返すに忍びない。が、地震が、いかに人間に禍し、文化に禍し、生活に禍したかを明かにして、今後の鑑戒とし自警とすべきことの無用でないのを思ふ。私が此の一文を草する微衷はそこにある。

（二）平安時代の地震

平安時代の地震史は、平城天皇の大同元年に於ける神非祭祀

山の破裂及び清和天皇の貞觀五年に於ける越中、越後の大震などを以て始まつた。それから間もなく、貞觀六年五月に至つて、富士山の大噴火に伴ふ大震災があつた。富士山の噴火は天應元年七月六日に起つたのを其の最初とする。次ぎに延暦十九年三月から正月まで噴火が續いた。當時の記錄によると熱灰が降つて山下の川水が悉く紅ゐの色を帶びたのである。次ぎに延暦二十一年正月から三月にかけて噴火活動の結果、小富士(新山)を出現した。此の時の被害も亦少くなかつた。が、史上に於て最も顯著なのは貞觀六年の震害である。

當時山上には高さ二十丈ばかりの火柱が物凄く天を衝いて立つた。それと共に烈しい地震、雷鳴を伴うて、方一二里の間、山を燒いた。其の火は十數日續いて尚ほ消えなかつた。そして砂石を雨のやうに降らせ、烟雲濛々と四方に漲つて、流れ落つる無數の礫石や焦土は俄かに本栖湖及び剗湖を埋めた。湖中の魚は皆熱死した。此の恐しい影響は山下の農家にも及んだ。其の大半は燒亡し流失した。稀れに家ばかりは殘つても、其のうちに居た人々はすべて生命を失つた。かうした大悲劇は、朝廷の有司をひどく驚かした。彼等は此の現象を神の怒りから出たものだと信じた。で俄かに淺間神社の大祭を行つて、平安を祈つた。

其の後、天慶元年、治安二年に京都方面に大震があつた。當時の京都市民は水火の難、盜、の難饑渴の難、疫癘の難などにひどく苦められ、また無爲無能の貴族政治に長く禍されて居たので、大震に逢つても、祈禱修法のみ行はれて、家居、糧食などについての助けを殆ど得なかつた。畢竟當時の貴族政治家は民衆から遙かに遠ざかつて居て、宮廷生活と自己の周圍だけしか知らなかつたので、民衆の痛苦に對しては全く沒交渉に近かつたのである。

それに當時の貴族は、困難なことに逢ふと唯神佛に祈りを捧げるだけで、他に自力を以て新しい運命を開いてゆかうとしなかつた。一般民衆も自然力の前に屈服するだけで、それに反抗したり、逆行したりする心をすこしも持たなかつた。地震に逢つても、唯其の受難者であるだけで、征服者、勝利者とならうとはしなかつた。それがために地震は其の脅威を大きくするばかりであつた。そこに人間の無力を曝露して居た。

平安時代には、支那にも大地震があつた それは宋の神宗の熙寧元年で、文豪歐陽修が官職を去つた翌年の出來事であつた。が、日本では火事が多く續いて、人々は主として火に苦められた。當時の京都は盜賊の多い點に於て「盜賊の都」と云つて宜いが、また火事の多い點で「火の都」と云はねばならなかつた。

火事は江戸の名物となる前に古くから京都の名物となつて居た。日本は昔から世界第一の火災國たるべき素質をも持つて居たのである。が、それは日本の誇りではない。

(三)地震に咀はれた鎌倉時代

鎌倉時代は、政治上極めて陰惨な色で塗られた歴史を多く持つて居る。其の間に生活した將士には一種不安の色が濃く漂うて居た。肉身の爭ひ、親朋の爭ひが北條氏の末期まで續いた。さうした傾向を最初に導き出した主人公は源頼朝である。頼朝の歿後、それが次第に深酷化し、殘虐化した。さうした人事についての悲劇を回想して、天變や地妖の多かつたことを胸に浮べると、其の間に一つの連絡があるやうに思はれる。それら天の禍、地の禍が陰惨な時代色を黒く象徴して居るやうだ。『明月記』『吾妻鏡』『猪隈關白記』などを見ると、地震の記事が多い。

承元二年正月六日——丙子、陰、雪時々飛、午刻大地震(吾妻鏡)

同年七月二十日——丁巳、午刻京都地震(猪隈關白記)

承元三年四月一日——甲子、申刻地震(吾妻鏡)

承元四年三月二十三日——辛亥、奈良地震(具注暦)

同年十月三日——戊午、曉鎌倉地震(吾妻鏡)

建暦二年十月二日——天晴、雖及深更、向權李部三品亭、示所存、臨曉更皈廬、相遇閑談之間、兩度有震動音、疑若地鳴歟(明月記)

建保元年正月一日——癸卯、天顔快霽、巳尅地震(吾妻鏡)

同年十一月五日——天晴、乘燭以後地震是又不吉歟(明月記)

承久三年正月二十九日——甲寅午刻地震(吾妻鏡)

同三年十月二日、戊刻地震(同上)

元仁元年五月八日——寅尅大地震、卯時又震動(百練抄)

同年二月三日——四月二十五日、六月十七日、九月十七日、十一月九日鎌倉地震(吾妻鏡)

以上『吾妻鏡』のほかは主として京都の地震である。東西兩都共に地震が多かつたことが思はれる。鎌倉では、其の後、寛喜二年六月になつて度々地震が起つた。そして陽氣が至極わるかつた。氣温が俄かに降つて、始終冷たい風が吹いた。人々は大抵綿衣を着た。美濃國生津莊、時田莊及び武藏國金子莊などでは不時の降雪を見た。七月に入ると霜が降つた、八月には暴風霖雨の災異があつて米作はわるかつた。それにつれて饑民が續生して、京都では食糧爭奪戰が民衆の間に起つた。要するに地震がいつも不吉な兆を示したのである。

鎌倉時代の民衆生活を最もいたましく彩つたのは正嘉、永仁の大地震である。正嘉元年五月の震災は關東一帶が其の影響を受けたのであるが、鎌倉が一番ひどかつた。其の咀はしい印象が未だ人々の頭から消え去らぬところへ八月に入つてまた眞夜中に再度の大地震を生じた。『吾妻鏡』によると、大きな社寺がすつかり倒れて、すべての民家は一溜りもなく倒壞した。山岳は崩れる、井水は涸れる。地上の裂け目からは瀧のやうに水が迸出する、大地の底からは毒瓦斯のやうなものを吐出して、それが靑く燃えあがる。丸で天地がひつくりかへつたやうな光景であつた、焦熱地獄、八寒地獄、修羅地獄などの言葉をならべても未だ足らぬほどの悲慘と悽愴とを極めた。それらにおびやかされて逃げ惑ふた人々の叫喚、號泣の聲は闇を破つて四方に起つた。そして此の災厄の犧牲となつたものは鎌倉だけでも二萬餘人に上つた。

鎌倉は俄かに暗愁に滿たされた。生殘つた人たちや負傷者が未だ不安の念を抑へることが出來ないで居ると、微震、强震が幾回となく續いて一向やむ氣色がなかつた。九月から十一月まで、時々大小の地震があつた。そして十一月八日に大分强い震動が起つて、それがやむと、やつと收りが付いた。それらが人心に及ぼした影響は、可なりに深酷であつた。宗教的皈依の心が一般に增した。日蓮聖人の『立正安國論』は此の際に出たのである。日蓮は其の執筆の所由、動機などを『安國論御勘由來』のうちに述べて居る。

正嘉元年太歲丁巳八月廿三日戌亥の時、前代に超えたる大地振。同二年戊午八月一日大風、同三年己未大飢饉。正元元年己未大疫病同二年庚申四季に亘りて大疫已まず。萬民既に大半に超えて死を招き了んぬ。而る間、國主之に驚き內外典に仰せ付けて種種の御祈禱あり、爾りと雖ども一分の驗なく還て飢疫等を增長す。日蓮、世間の體を見て粗一切經を勘ふるに、御祈禱驗なく還て凶惡を增長するの由、道理文證之を得了んぬ。終に止むことなく勘文一通を造作す。其の名を立正安國論と號す。文應元年庚申七月十六日辰時屋戶野入道に付して古最明寺入道殿へ奏進し了ぬ。此偏に國土の恩を報ぜんが爲めなり。

日蓮の熱誠は明白に看取することが出來る。當時の慘狀は『安國論』の冒頭に「近年より近日に至るまで、天變地夭飢饉疫癘、遍く天下に滿ち廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半を超え、之を悲まざる族敢て一人も無し。」と云ひ「唯肝膽を摧くのみにして彌飢疫に逼る。乞客目に溢れ死人眼に滿てり。屍を臥せて觀と爲し尸を並べて橋と作す。」と云つてあるのを見ると當時の慘況が生きて眼の前に

浮んでくる。それらの悲哀極まつた現象に對して、どんなに無神經なものでも、心を動かさずには居られなかつたらう。畢竟天怒り地怒つたのだ。

(四)日蓮の天災地異觀と永仁の大地震

當時の知識階級や憂國者らは『安國論』にある通り、いづれも一生懸命に「利劍卽是の文を專らとして西土敎主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を恃んで東方如來の經を誦し、或は病卽消滅不老不死の詞を仰いで法華眞實の妙文を崇め、或は七難卽滅七福卽生の句を信じて百座百講の儀を調へ。有るは秘密眞言の敎に因つて五瓶の水を灑ぎ、有るは座禪入定の儀を全うして空觀の月を澄まし、若くは七鬼神の號を書して千門に押し、若くは五大力の形を圖して萬戶に懸け、若くは天神地祇を拜して四角四堺の祭祀を企て、若くは萬民百性を哀んで國主國宰の德政を行ふ。」など、あらゆる祈り、あらゆる讀經を重ねた。が、それらの祈りも讀經も何の功がなかつた。日蓮はそれを心から嘆じて「三寶世に在し百王未だ窮らざるに、此の世早く衰へ其の法何ぞ廢れたる。是何なる禍に依り、是何なる誤に由るや矣。」と云つて「倩微管を傾け聊か經文を披きたるに、世皆正に背き人悉く惡に歸す。故に善神は國を捨てゝ相去り、聖人は所を辭して還らず。是を以つて魔來り鬼來つて災起り難起る。言はずんばある可からず、恐れずんばある可からず。」と述べて、人々の省察を促がした。そして日蓮が人々に敎ふる言葉は剴切を極めて居た。今私はそれを引く。

國を失ひ家を滅さば、何の處にか世を遁れん。汝須く一身の安堵を思はば、先づ四表の靜謐を禱るべき者歟。就中人の世に在る各後生を恐る。是を以つて或は邪敎を信じ、或は謗法を貴む。各是非に迷ふを惡むと雖、猶佛法に歸することを哀む。何ぞ同く信心の力を以つてして妄に邪儀の詞を宗ばん哉。若し執心飜らず、亦曲意猶存せば、早く有爲の鄕を辭して必ず無間の獄に墮せん。所以者何。大集經に云はく、若し國王有つて无量世に於いて施戒慧を修すとも、我が法の滅せんを見て、捨てゝ擁護せずんば、是の如く種うる所の无量の善根、悉皆滅失せん。乃至、其の王久しからずして當に重病に遇ふべし。壽終るの後大地獄に生ぜん。王の夫人太子大臣城主村主將師郡主宰官の如きも亦復是の如くならん。仁王經に云はく、人佛敎を壞せば復孝子无く、六親不和にして天神も祐けず。疾疫惡鬼來つて侵害し、災怪首尾し連禍縱橫し、死して地獄餓鬼畜生に入り、若し出でて人と爲らば、兵奴の果報ならん。響の如く影の如し。人の夜書くに火は滅すれども

字は存するが如く、三界の果報も亦復是の如し。法華經第二に云はく、若し人信せずして、此の經を毀謗せば、乃至、其の人命終して阿鼻獄に入らん。又同く第七の卷不輕品に云はく、千劫阿鼻地獄に於いて大苦惱を受く。涅槃經に云はく、善友を遠離し正法を聞かず、惡法に住せば、是の因緣の故に沈沒して阿鼻地獄に在りて受くる所の身形縱橫八萬四千由延ならんと。廣く衆經を披きたるに、專ら謗法を重しとす。悲い哉皆正法の門を出でゝ、深く邪法の獄に入ること。愚なる矣各惡敎の綱に懸つて鎭に謗敎の網に纏はること。此の朦霧の迷ひ、彼の盛焰の底に沈む、豈愁へざらん哉豈苦しからざらんや。汝早く信仰の寸心を改めて速に實乘の一善に歸せよ然らば則ち三界は皆佛國也、佛國其衰へん哉、十方は悉く寶土也、寶土何ぞ壞れん哉。

實乘の一善！　日蓮は徹底的に此の一事を主張して、佛陀の本懷であるところの『法華經』を色讀せんことを人々に敎へた。目ざめよ上下の人々、此の偉大な災禍に目ざめて、正しく心靈の行衛、魂の皈著所を考へよ、國と人とが久遠に生きる道について思へ、日蓮はかう心に叫んで『安國論』を書いた。それは大地震其の他の災厄が生んだ最大な文章の一つである。それは覺醒した哲人の力强い豫言である。

鎌倉に於ける永仁の大地震は其の烈しさの上で正嘉のに譲らなかつた。それは正嘉の地震があつてから、三十餘年後に起つたのである。そしてそれは鎌倉政府が元寇の後を受けて財政的に疲弊してゆく最中であつた。地震があつたのは永仁元年四月で、前後數回の强震が人々を惱ました。山は崩れる、地は龜裂する、海嘯が起り、地中の水が迸り出ると云ふ有樣で、どうにも仕樣がなかつた。政廳を始め鶴岡若宮、大慈寺、建長寺なども倒壞した。殊に民家の被害はひどかつた。此の大きな騷ぎのうちに、建長寺から出火があつて、其の開山大覺禪師の影堂のほかはすつかり灰となつてしまつた。當時の死者二萬三千二十餘人に上つた。今度の大地震にも鎌倉の禍災が可なりに深酷であつたことを思ふと、鎌倉は東京と共に由來地震地帶として免れ難い惱ましい運命を荷うて居るやうだ。私は史的因緣の深い鎌倉が大震のために、其の尊い史蹟を多く失ひゆかうとするのを痛惜する。

さて鎌倉では、其の後も大小の地震が續いた。それは恐らく當時の人心に暗い影を投げかけたであらう。そして彼等の神經を病的に鋭く尖らせたであらう。そして心弱きものを悉く宗敎の門に赴かせたのであらう。鎌倉政府の歷史は、かうして地震に始つて地震に終つた。それらのために人生の最大不幸を體

験させられた鎌倉の民衆は、大風のうちに起つ小さい一本杉のやうな運命の犠牲者でなかつたか。

(五　吉野、室町、安土桃山時代の地震

吉野時代に入ると、地震よりも戰爭の方が多くなつた。が、地震が全く絶えたわけではなかつた。南朝の興國三年(北朝の康永元年)には六月十五日、京都に地震があつた。其の翌年四月には、鎌倉に大地震があつた。また南朝の正平四年(北朝の觀應元年)四月京都に地震があつた。『康富記』に「晩雨下、今日猶連々地震。」と四月十三日の條に書いてある。六月二十日曉にも地震が起つたことが『祇園執行日記』に出て居る。

室町時代には、足利義政の執政時代に京に地震が起つた。それは寛政元年二月のことであつた。當時數年來、水旱が續き、戰爭がやまなかつたので、疲勞した民衆は其の上、地震に逢つた爲めにどの位苦んだか知れなかつた。が、義政はそれらに頓着しないで、自分一個の趣味で頻りに土木を起した。これがまた民衆に取つて重い負擔となつた。それで彼等のうちには、義政を咀ふものが多かつた。それから義澄の執政時代には、東海道方面に大地震を生じた。それは後土御門天皇の明應七年八月の頃である。

當時、地震のために遠州の濱名湖が荏瀞(濱名川)を埋塞してしまはれて、東方に新口を開き、湖水が逆流した。それ以來潮汐が湖中に及ぶやうになつた。湖口の閉塞は其の後も絶えなかつた。江戸時代には、元祿、寶永の頃、湖口が破壞せられた。明應七年の大震については、『後法興院記』九月二十五日の條に「傳聞によると、去月大地震の日、伊勢、參河、駿河、伊豆などに大浪が打寄せ、海邊二三十町の民家は悉く水に溺れて、死者數千人に及んだ。其の他牛馬などの死は數へ切れない。」との意味を記してある。

其の後、暫く著しい地震がなかつた。安土桃山時代に入ると慶長元年の大地震が見える。此の地震のために秀吉の隱居所とせられて居た伏見城の天主や邸宅などを倒壞して、五百餘人の死者を見た。京では、御所の御車寄や廊下が破壞された、方廣寺なども相應の被害があつた。當時、後陽成天皇は侍臣の勸めまゐらせるまゝに南庭に設けた敷御座へ出御せられた、そして十五日から假屋に移つて、そこでしばらく起居せられた。

伏見に居た秀吉は、地震の當日、直ぐ屋外に避難した。そして庭上の假座に多勢の侍女らと一緒に居た。そこへ眞先に驅け付けたのは加藤清正であつた。彼れは米藏主を呼んで二百人の足輕をつれて伺候したことを告げた。當時清正は讒言のために

斥けられて、近いうちに自殺を命ぜられるかも知れない境涯に居たのである。清正はそれをどの位残念に思つたかも知れなかつた。どうかして自分の眞實心を秀吉に見せたいと思つた。折柄不意の大地震が起ると、清正は秀吉の安否を氣遣つて、危險を冒して伏見城に駈け付けたのである。

其の時、清正は孝藏主にすがつて、一身上のことを卒直に辨解した。秀吉も流石に清正との深い關係や其の誠實に思ひ及んで、清正を斥けたことを悔ゐた。秀吉の心は次第に以前のやうに清正を愛する方へ傾き始めて來た。清正の警衛振は鮮かであつた。彼れは部下に中門を守らせて「誰であらうと、此の清正に挨拶しないうちは、此處を通してはならぬ。」と嚴かに命令した。

そこへ駈付けたのは、平生清正と暗鬪して居た石田三成であつた。三成は無造作に中門を潜らうとすると、清正の部下は固くそれを遮つた。「俺は治部だ、早く通せ。」と云つても「治部などと云ふ奴は知らぬ。」と罵つてどうしても通さなかつた。三成はいら立つて「天下に治部を知らぬものは一人もない。それに今俺を知らぬとは何事だ。一體門番には誰れが當つて居るのだ、名を云へ！」と激昂した。すると「加藤主計頭だ。」と答へた。三成は覺えず切齒した。が、其のうちに三成の伺候したことが秀吉にも知れたので「治部を通せ。」と清正に傳へたので、やつと三成を入れた。かうして清正の警衛振は、秀吉にもよくわかつので、彼れが秀吉から許されるであらう日が近いことを思はせた。此の事は北政所から侍女を清正の許へ遣はして、そつと告げたのである。清正は始めて彼れの愁眉を開いた。

此の地震についての一挿話は、河竹默阿彌が脚色して『地震加藤』と題する一篇の史劇が出來た。其の主人公に市川團十郎が扮して彼れの名調子で好劇家の喝采を得たことは人のよく知るところである。そして今は、市川中車、中村吉右衛門らが時々『地震加藤』を演じて當年の大地震を思ひ起させる。

（六）元祿の大地震に伴ふ大慘狀

江戸時代は三百年間の平和を保つことが出來たので、民衆生活は非常に進展した。其の傾向は、家光の時代から既に見えて居た。殊に元祿に入ると、文藝復興の機運が熟して民衆のための文藝や娛樂などが勃興した。江戸、京都、大阪の市民らは、思ふ儘に生の享樂に浸ることが出來た。が、さうした春のやうな時が來ても、江戸では、火事と地震との恐怖が時々市民を脅かした。火事は三百年間を通じて頻發した。負け嫌ひな江戸市民

は「火事は江戸の花だ」と云ふやうになつた。見やうによつては左樣考へられる。けれども明曆三年の大火のやうに死者十萬八千餘人を出した一事を思うて見ても、火事は江戸の幸福ではなかつた。大きな禍にちがひなかつた。

地震も亦江戸の大禍であつた。安政の大地震は今日、殘存する故老が尚ほ恐怖の色を浮べて當時のことを語るのを見てもわかる。江戸開府以來、どの位地震の度數があつたか、小さい地震については今こゝに記すことを見合はせる。大地震は明正天皇の寬永十年正月に突發した。それは二代將軍秀忠が歿した翌年のことで、家光が新政を始めた頃のことだ。次ぎに慶安三年にも大地震があつた。それは由井正雪が謀叛した前年である。

元祿十六年の地震は殊に大きかつた。此の年は非常に不吉な年であつた。夏の始め頃から、夜半近くなると、白氣が頻りに西から東の空へ流れた。民間では「何か不祥のことが起る前兆であらう。」と噂し合つた。禍の序幕は十一月十四日夜の大火によつて開れた。それは四谷鹽町から火が出て、青山、赤坂、麻布一圓を燒き拂ひ、餘焰が品川から芝浦まで及んだのである。

それから鎭火後、また不吉の徵候が毎夜續いた。それは深夜に入つて、空に一道の赤氣が漂うて、下町からそれを仰ぎ見ると山の手に火事が起つたやうに思はれた。また山の手のものが其の赤氣を仰ぐと、下町に火事があるやうに思れてならなかつた。が、其の赤氣が消えると、大風、大浪などが一時に起るやうな音がして、恰度數百人の男女が哀泣する聲のやうにも聞えた。が、其の怪しい響きも亦やむと、空がすつかり晴れて、群星が青くまたゝいた。

かうした現象が夜毎に續くと、人々は次第に不安の思ひに沈んだ。ところが、十一月二十二日の深更、遙か沖の方から大浪がどつと押寄せてくるやうな響きと共に、數百人の男女老幼が一時に哀泣するやうな聲が起つたかと思ふ間もなく、突如として大地が烈しく震動し始めた。全市の家屋は怒濤に弄ばれる舟のやうに東西に搖動した。あらゆる物の顚倒し破壞する音が四方に起つて、避難する人々の影が路上に右往し左往した。此の時の死者は三萬二千餘人に上つた。當時御徒目付をして居た千葉某が實地を見た記錄には詳細に凄慘の有樣をつくして居る。それによると「十一月二十二日、夜丑の中刻少し前、地鳴ることおびたゞしく雷の轟く如し、忽ち大地震にて戸障子たふれ、家は小船の大浪にゆらるゝ樣にて、人々あわてゝ表へ駈出ださんとするに足立たず、地は二三寸乃至五六尺も裂け、砂或は水を吹き出だし、石垣崩れ家藏はつぶれ、穴藏はゆりあげ、死人

怪我人およびたゞしく、泣き叫ぶ聲は大風の如くに鳴り渡り、所々に出火ありて、其の光にて空は一面に赤く、八時過る頃に品川海手の方より津浪うちあげ、濱の方へ逃出たるものは悉く浪に捲きとられ、この慘状なか／＼筆紙につくし難し。それより晝夜引き續きて何度となく地震これあり。上様（綱吉）御始め市中下々まで、日夜、野宿にて送りたり。二十四日の夕方より大雨降り出だし、諸人いよ／＼難儀す、此の後は地震次に薄らぎぬ。」と叙して居る。

また當時の被害程度及び地方のことについて「此の度破損の箇所我等見まはりたる分にては、御城内にて下御勘定部屋より喰違御門まで殘らず潰れ、三の丸御土藏二つとも潰れ、右二箇所にて死者五人、怪我人は數知れず。大御留守居與力番所、二の丸銅御門、かぶき番所、紅葉山下冠木番所、内櫻田御門番所、大手腰掛、一つ橋御つき屋、御廣敷の方御物置部屋など殘らず潰れ、右の所々にて死者十八人、半死半生のもの六人、怪我人は數知れず。和田倉、馬場先、鍛冶橋、數寄屋橋、山下、雉子橋、小石川、牛込、市ヶ谷、半藏、赤阪、四谷、田安、平川口、筋違橋、淺草橋、常盤橋、呉服橋、外櫻田、西の丸下、御厩、虎之門、日比谷などの御門御門はいづれも大破損なり。その外曲輪(くるわ)まはり石垣ゆりくづれ、所々の御門も多く破損し、塀も大方倒れたり。此の外御府内一圓、武家、寺社、町家等の潰れ破損はなか／＼筆紙に述べがたし。矢口氏に承まれば、唯今まで町奉行へ屆け出での分のみにて死人三萬二千餘と申すことなり。又飛脚を以て御屆けの分は大略下の如し。即ち右と同日同時刻に相州小田原にても大地震あり、城竝びに侍屋敷、町屋等過半はゆりつぶし、城内十二箇所より、出火あり。小田原中殘らず、燒失、その上大波うち寄せて死人數知らず、箱根山くづれ、荷物の通路止まり、鎌倉も同様のことにて、山の内離山より建長寺まで在家殘らずつぶれ、片瀬は在家殘らず津浪に取り去られたり。小田原より品川まで宿驛つぶれ家多く、とても旅人の宿泊なりがたし。死人怪我人の數は慥なること相分らず。房總九十九里まで津浪大波都合四度あり、同日同刻より二十三日にかけて打ち寄せ、人馬の死傷夥しといへども、慥なる數は知れず。」と云つて居る。

（七）富士山の大噴火と駿州の大震動

此の大地震後、間もなく、十二月二十九日、小石川の水戸藩邸から出火して非常な大火となつた。其の火焔の舌は本郷、湯島、柳原、淺草などを一氣に甜めつくして、それから餘勢は本所を燒き、兩國橋を燒いた。當時の死者千三百人に上つた、此

の年はかうして、夏から冬にかけて大災厄が續いたので、江戸政府は朝廷に請うて寶永元年と改元して、其の將來を新たに祝福した。が、それも功がなかつた。寶永四年十月になると、また地震があつた。

其の時、江戸の地震は割合に小さかつたが、大阪では、大分烈しかつた。六百軒ばかりの家がくづれて、死者三千二十人に上つた。のみならず、十一月二十三日には、富士山に大噴火があつて、旺んに白い灰を降らせ、天地は暗い色に包まれた。此の降灰は武相駿三州の田圃を數千萬町にわたつてうづめた。そして人々の咽喉に灰が這入つて、呼吸器を害したものが少くなかつた。江戸政府は、それらの善後策を講ずるため、數十萬兩を費した。それが財政上ひどく影響した。

富士噴火については、十一月二十二日、既に其の豫兆があつたのだ。其の日、大地震があつて、富士山麓の人家及び駿州・油井、神原、吉原の民屋はすつかり破損したのである。そして二十三日午前十時頃、山上が俄かに鳴動を始めて、半空に煙雲が立ちのぼつた。それと同時に太陽は光りを失つて、四邊が暗澹となつた。そして沙石が頻りに飛下した。それが灰風につれて遠い地方へも舞ひ下つた。最初は東風と共に駿府、岡部宿などに沙石が飛び散つたが、風向が變つて、西風となると遙かに足柄、箱根を越えて、關東地方一圓に沙石が飛下して、數晝夜續いた。

それから餘震が容易にやまないで、十二月八日まで震動を續けた。此の時、最大の被害を見たのは、山下の須走村で、村内の民家は爛砂や熱灰の落下につれて、イタリイのポンペイ市のやうに深さ一丈四五尺の程度の下に埋沒した。此の大震、噴炎と共に寶永山が生れたのである。

『翁草』を見ると「寶永四年十一月、富士山燒け、土砂石礫を吹飛ばし、其吹出し所穴となり、穴の口に大なる山を生ず、世俗呼んで寶永山と號す。海道より眺れば右の半腹に彼塊山出來て瘤の如し。さばかり三國無双の名山に此時ちいさき瑕のできしこそ恨なれ。」と述べて居る。

此の寶永の富士噴火以前にも、長保元年三月、永保三年二月、元弘元年七月及び永正八年などにも富士燒燃の記事が史上に見える。殊に元弘の時は大地震で山峰が崩れた。蓋し富士の噴火は、有史以前からのことで、今日に至つても未だ絡熄して居ないのである。『古今集』序に「今は富士の煙もたたずなり」とあるのを見ると、平安時代に一時消火したことがある。けれども其の本質は活火山で、今は殆ど老齢に入つた形である。それと共に噴火の方は、間歇的活動をするに過ぎぬ。が、またいつ噴

火するともわからないらしい。祇園南海の『富士行』には、噴火のことが歌つて居る。またクラッセの『西教史』にも富士噴火の記事が出て居る。

(八)ヨオロッパの大震と日本諸國の震災

其の後、四十餘年間は、目立つほどの震災も起らずに平和と享樂の日が續いた。が、ヨオロッパでは、西記一七五四年にエトナ山の噴火があつた。殊に一七八三年、一八八五年の大噴火の時は非常な慘狀を示した。そしてそれと前後して氣象觀測所がそこに設けられた。また西記一七五五年には、イスパニヤの都府リスボンに大地震を生じた。

江戸では、安政の大地震の時まで別に記すほどの地震がなかつた。が、大水大火は時々あつた。文化三年の大火の時は二十八萬餘戸の家を燒いて、死者千二百人に上つた。地方では、安永七年に伊豆大島の三原山が噴火したことがあつた。同八年には大隅薩摩に大震があつて櫻島が噴火したことがあつた。次ぎに天明三年には、淺間山が大爆發をして、それが饑民の小暴動を煽り付ける一因ともなつた。文化十一年の越後大震、天保元年の京都強震及び安政元年の駿河に於ける震災などもあつた。そして翌二年江戸の大地震が起つたのである。

櫻島噴火には、死者一萬六千人、牛馬二千餘頭の死を見た。當時の慘景は『地理纂考』中にある。それには「九月二十九日、亥の上刻より方數十里地震甚し。翌朔日巳午の刻に至り、島中の井水悉く沸騰し、所々水迸り出づ。又海水紫色に變す。未刻に至りて山上兩中より黑煙立登り、地震ひ火愈炎えて、沙石を飛し泥土を流し黑煙空を覆ひ、白日變じて暗夜の如し。火炎いよ〳〵壯なるに隨ひ、其光天に映じ海上を照す。五日を經て炎火稍微なりといへども、其火遂に止ます。或は三四時を隔て炎え、或は一夜を隔て炎ゆ。かくて又東北五六里の海底より俄に洲嶼若干を沸出す。凡一月を經て漸く無事なり。於是櫻島の形狀變じて舊日の形に非ず。」と述べて居る。此の時、新島が湧出したのである。

新島の湧出は極めて興味の深い現象であつた『地理纂考』には「新島は向面村の前にあり。其島の發生の次第は、彼の十月朔の炎上ありてより五日を經て後、煙消え天晴れ、十四日一島湧出す、(向面村の地を距ること三町、南北五十七間東西五十間高さ一間三尺)其翌年七月朔日水中に沒す。是を一番島といふ。同十五年又一島湧出す、(一番島を距ること卯の方一町十六間許、向面の地を距ること四町半許にあり、その狀富島なり)是を二番島と云ふ、俗に猪子島と稱す。巳亥十月化生の故な

り。同十一月六日夜又一島湧出す（二番島を距ること巳方十五町、向面の地を距ること十町許にあり、其狀又嵓島なりし）是を三番島と云ふ。同十二月九日夜又一島湧出す（三番島を距ること午の方六町許、向面の地を距ること廿三町許にあり。其狀亦嵓島なりし）是を四番島と云ふ。三四の兩島は硫黃の氣あり、因て俗に硫黃島と稱す。同九年庚子四月八日、二島相並び又湧出す、五月朔日に至て自ら合して一島となる、（四番島を距ること未申の方十四町餘、向島の地を距ること十二町許にあり）是を五番島と云ふ、今俗に安永島と稱す。同六月十一日又一島湧出す、（五番島を距ること丑寅の方十四町餘、向面の地を距ること十町許にあり）是を六番島と云ふ、同九月二日又一島湧出す、（六番島の辰巳にあり）是を七番島と云ふ。同十月十三日又一島湧出す（七番島の辰巳の方にあり）是を八番島と云ふ。後七八の兩島合して一島となれり、因て併稱して六番島と云ひ、俗に惠美須島と名づく。初め火を發せしより一年の際、海底鑄冶の如き音ありて、海潮沸騰し、砂を飛し泥を雨らし、或は石を發し、出沒常なし。巨嵓崩れて細石と變じ、泥砂聚りて洲嶼に化し、其狀定ることなし。其一島湧出する時は必ず泥砂うづまき上りて山の如く、其高さ三四丈に至り、泥山忽ち倒れて海水人家に逼りき。二番三番五番六番の五島、すべて新島と名づく、其中五番島最大きにして、其周廻二十町高さ六丈とす。」と述べて居る。要するに櫻島は秀麗の趣を以て知られて居るが、地震と云ふ上から見れば、鹿兒島其の他に對して一つの脅威であつた。

次ぎに『地災集覽』によると、淺間大噴火の慘狀が詳しく記されて居る。それには「天明三年七月七日、夕方よりおほ燒降り來りければ、人民驚き出し、戸板を擔ぎ、桶摺鉢などを頭にいたゞき、又は夜着蒲團を被り、男女のへだてなく、親を見失ひ子を忘れ、我先にと命から〳〵逃延びたり。降る石は一尺ほどにて、皆赤く燒通り、落つるとき碎けて火となる。輕井澤西の端、茅屋根に燃え付き、南側家數五十六間燒失せり。去共誰一人も防ぐ者なく、春の燒野にことならず。其後漸く十三日の頃家々に立歸る。村々の農人は野に耕すを止め、煙のみ詠めける。煙の中より西の方へ大石落つること飛鳥の如し。無間が谷埋りて山となり、前掛山より高し、煙はみな卯辰の方へ傾きし故、信濃は石砂降りしこと、吾掛の東離山の半を限る。中の刻平尾邊より平賀、大日向の方すべて少々降る、輕井澤へ石砂積る事四尺餘、碓氷峠杓子町は五尺餘り、軒端に屆く。」と述べて居る。此の災厄が左に述べる一揆に關係があつた。

恐らく地震が民衆一揆を起させた間接の一因となつたことは

史上類の少いことであらう。それは地震が起る前から、一揆の主因となるべき天明の大飢僅が起つて居たのである。が、上野信濃の農民らは、飢饉の苦みをぢつとおとなしく忍んで來て居た。ところが前にあるやうに、天明三年七月八日前後に淺間噴火が續いて、二十里四方に灰を雨下し、赤い熔岩が附近の田畑をうづめた。其の時、最も悲慘を極めたのは上野吾妻郡蒲原村のもので、千人の人口中、生殘つたのは僅か十餘人に過ぎなかつた。其他の村々でも多くの死者を出した。被害は利根川筋にも及んで、壞はれた家が四千戸、死傷者三萬五千人に上つた。

此の最大悲慘事を眼の前にしながら、中央でも、地方でも民政の當局者が救濟のことに冷淡であつた態度が、上野、信濃の飢えた農民らを怒らせた。彼等は其の領主に向つて再三、言葉をつくして救助を請ふたが採用せられなかつた。殊に上野安中の領主板倉勝曉は極めて農民を虐遇したので到頭一揆を起すに至つたのである。が、間もなく此の一揆は鎭壓されてしまつた。

江戸に於ける安政の大地震は、既に其の前年に豫兆を示して居た。安政元年四月には、京に大火があつた、そして六月十三日には、東海道筋に大震が起つて被害が少くなかつた。それから十一月四日には、諸國に强震を生じた。其の慘害の中心となつたのは大阪であつた。多くの民家が倒壞したばかりでなく、海岸に大波が起つて、木津川、安治川、尻無の水尾から逆浪が川上に押上げて來た。そして大船の帆柱が諸所の橋を突崩した。其の時の死亡者は可なり多數だつたが、一方に於ては大小の船舶千五百餘艘が破壞せられた。

此の地震の勢は次第に東國へ伸びた。富士の中腹に三個の小山が吹出したのも、伊豆下田に大波が起つて、ロシヤ軍艦が沈んだのも、三保松原が流失したのも、すべて安政元年中の出來事であつた。當時は開港、攘夷の議論が烈しく起つて、國內動搖し始めた時であつたから、人々に一段の不安を與へた。誰れも此の世の終りが眼の前に近付いたのではないかと思ひつめて居た。そこへ江戸では、安政二年の大地震が起つた。

(九)安政の大地震、大火災

安政二年は最初から呪はしい出來事が續いて居た。八月には近畿地方に大風、洪水があつた。續いて關東殊に奥羽方面に大震が起り、尾張に大海嘯が起つて田地一萬八千石以上を流失せしめた。それらを前驅として、十月二日夜、江戸の大震動を見たのである。其の烈しさは、元祿、慶安などの地震の比では

なかつた。江戸開府以來の最大なものであつた。

『尊攘紀事』によると「十月初二夜、大地か鳴動して、百雷の一時に落つるやうな音がした。それがため、城郭樓櫓や列侯の第宅など一も完屋がない有様になつた。間もなく火が二十四箇所から起つて、火道四達の勢で煙焰が全市に滿ちた。最初人々を覆壓して其の上烈焰で惱ましたのだから、童幼婦女らが轉輾して泣き叫び、其の修羅地獄のやうな光景が三日間も續いて始めてやんだ。」と云ふ意味のことを叙して居る。

當時震災か最もひどかつたものは、小川街、小石川、本所などで、死者二萬五千人に上つた。水戸齊昭の股肱として知られて居た藤田東湖も、其の犧牲となつた。彼れは地震突發の折小石川の水戸邸内に居たが、激震中に老母を救ひ出さうとした途端、落下した棟木のために打れて最後の呼吸を引取つたのである。

『大地震記』を見ると「小石川の羽翼藤田誠之助、戸田忠太夫、此兩士は文武の達人にて、世に普く聞えたる人達也。なゐふりの夜、兩氏ともおのが宿所に有て、共に此難にあひ身まかりしと聞ゆ。百間御長屋の前を過ぎつゝ、江戸川の北へらを行くに、龍慶橋の上なる中之橋と石切橋のあわひ、あるは一條、あるは二條に、いたく地の裂けしあと、長々と見ゆ。さて市中組々の坊正より、なゐふりの次第書記して町奉行所へさゝぐ、其有やう、變死人通計三千八百九十五人、男は千六百十六人、女は二千二百七十九人也。潰家一萬四千三百四十六軒、并千七百廿四棟、潰土倉千四百四ケ所、町屋燒失總町數、凡長二里十九町、幅平均二町、市中出火通計三十口也、こはすべて市中のみの分限にて、其中變死人などは、武家方、社家寺院を籠めなば、必一萬人にあまるべし。」と記して居る。當時江戸政府は罹災民救助のため、諸所に假屋を作つて人々を收容すると共に、醫藥食料などを恤んだ。尙ほヒルドレスの『日本歷史』にも地震記事が出て居る。

當時水戸派の學者らは安政の大地震を武臣跳梁の結果だと見た。『尊攘紀事』のうちにはさうした感想が明白に流れて居る。其の意見は皇室が衰えて武臣が權力を亂用するやうになると、天地の和を失うて必ず地震が起るとする。それで「皇室の衰替は貞觀の頃に始まる。是時地震連年、土佐半國は海に沒し陸奧の士民はそれがため一千餘人の死者を出したでないか。また武門の專權は文治の頃に始まる。是時京都で大震があつて宮殿廊廡すつかり崩壞した。承久の頃に至ると陪臣(北條氏)が國政を左右したので、是時鎌倉は地震連年の有樣だつた。そして今は、幕府が朝命に背いて、アメリカ人の請ひを容れたから、か

やうな大地震を生じた。」との意を述べて居る。鋒擬的立場から時勢を見ると、どうしても、さうした感じを必然に起さねばならなかつたのであらう。當時國步艱難を極めて居たから、知識階級は、各自沈痛な感慨を惹起したことであらうと思はれる。が、日蓮の『立正安國論』のやうな大文章は一つも見られなかつた。

自然のうちに其の幽深な象徵を見たり、自然の啓示を目ざとく看ると云ふことは、江戶詩人乃至漢學者の特色とするところではなかつた。單に眼前當面のことに引き合せて、誰れも思ひ付く現實的意義を自然のうらに皮相的に讀むに過ぎなかつた。大地震の學的意義のほかに自然が含む大きい啓示の謎を根本的に解かうとするものがなかつた。鋭く自然界の奥に徹して、其の偉大な靈魂に冥合して、そこから深い意義を摑んでくることがどうしても彼等に出來ぬのであつた。

當時誰れか日蓮の『立正安國論』を思ひ起したものがあるか、誰れか自界叛逆難、他國侵逼難を豫言したものがあるか、誰れか實乘の一善に皈せんことを人々に勸めたものがあるか。自然の啓示に目ざめないものは禍である。自然ひとり目さめて、人間ひとり眠る。それは餘りに無意義である。要するに、當時の形勢は正に第二の『立正安國論』を要すべき秋であつたのだ、第二の日蓮を要する重大時機であつたのだ。大自然はそれを人々に暗示したのだ。

(一〇)明治時代に於ける東西の地震

江戶時代の地震史を通觀すると、罹災者を救ふ上にいくらか時代の進步を見せた丈で依然として、平安、鎌倉期のやうに自然の偉力に屈して、地震の前に一溜りもなく人類が敗れる歷史を展開したに過ぎない。地震の所由、性質を究めて、其の災害を一排する方法についてはすこしも考へられなかつた。それは日本人が自然の前に甚しく無力であることを示すものでなくて何であらう。

が、現代の有樣では、漫に江戶時代を笑ふことが出來ない。明治の後半期には、二三有力な地震學者があり、震災豫防調査會が設けられたが、それが今度の大震を豫防する上にどれだけ役立つたか。地震硏究の第一要義は地震の起るのを未前に察知して、それを豫め公衆に告げ、其の禍を免れしむる上にある。けれども現代の地震學者は、まるで此の第一要義に觸れないで、而も恬として恥るところがない。また當然引責することさへも知らぬ。

勿論、地震學の硏究は、明治に入つてから江戶時代にくらべ

てずつと進歩した。其の論文中にも相當世界の學界に示して宜いものが稀れにあるらしい。が、地震豫防の方面では、學者のみならず、公衆も亦冷淡な傾きがあつた。少くとも、今度の大地震がくるまでは、地震都市に居ながら、地震について餘りに無關心に過ぎた。地震についての科學的知識を活用して、地震を征服しようとはしなかつた。それで明治の地震史も結局、現代の文化人が自然の偉力に屈した敗北を展開した感がある。

明治に入つて、江戸が東京となつてから、五十餘年間、目立つほどの强震がなかつた。今年の大地震に至つては、安政二年の地震に似てそれに數倍する大震害を示した。明治年間の地震は明治二十一年七月の磐梯山噴火、二十四年十月の濃尾大地震二十六年五月及び六月の福島縣吾妻山の噴火、二十九年七月の三陸大海嘯などが其の顯著なものであらう。イタリイのメツシナ海峽附近の大地震は、矢張わが明治の末年近く起つて、死者二十萬人に上つたのである。それよりもつと早く、イスパニヤでは西記一八八五年に大强震を生じ、西記一八九七年には、印度カルカツタに大きい地震があつた。またずつと遲れて西記一九〇六年にアメリカのサンフランシスコにも大地震が起つた。此の地震は今度の東京大震と趣を同じくして居た。地震のために死んだものよりは、火災のために死んだものが遙かに多かつた。そして其の物質上の損害は一億圓に上つた。

さて日本では濃尾大地震が二十四年十月二十八日に起つた。美濃、尾張地方が其の激衝に當つたので特に被害が著しかつた。岐阜市では總戸數五千のうち一千戸全壞、三千戸半崩の有樣であつた。そして火災が地震につれて六箇所から起つて、二千餘戸を燒拂つた。道路や橋梁の破壞されたものが多く、死傷者一千名に上つた。更に岐阜全縣の被害を數字的に擧げると、死者四千五百人、傷者七千人、壞屋四萬戸、半壞屋一萬八千戸、燒失家屋五千戸に達した。

此の地震の起つた頃、私は未だ高等小學に通つて居た。そして緣日の夜、覗き眼鏡などで、濃尾大震の樣子を見た記憶が今も殘つて居る。またイタリイのエトナ噴火をある小さな寄席で、幻燈にうつし出したのを見たことがあつた。其の時分、地震が何故起るのかと云ふことは、まるで私にわからなかつたが、エトナ噴火で家や人が葬られてゆく恐しさだけは私の小さい頭に深く印象せられた。で私は地震だと云ふと濃尾の震災が第一に思ひ出された。

それから福島縣吾妻山の大噴火は二十六年五月十九日頃に起つた。其の時、硫黄採堀地に五箇所の破裂口を生じたのである。そして旺んに渦卷く黑煙を吐き、硫氣を昇騰させ、灰泥や

石礫を四方に飛ばした。それが六月に入つても尙ほやまなかつた。當時、官命によつて噴火狀態を視察するために登山した三浦宗次郎氏一行三名は、灰泥に惱まされ、石礫に苦められて到頭山中で斃れたのである。

二十九年七月の三陸大海嘯は美濃大震災に劣らない悲慘を極めた。死者二萬二千、傷者四萬四千、家屋の流失、倒壞約一萬三千戸に上つたと云ふだけで、どんなに自然の偉力が殘虐を極めたかを想ひやることが出來る。當時宮古測候所の觀測したところによると、海嘯の初感を接受したのは午後六時五十分頃で、最初の地震後約十八分を經たらしい。其の後十分間過ぎて、午後八時頃增水し、暫くして退減した。ところが、八時七分頃、最も烈しい大海嘯が百雷のやうな轟音と共に一氣に押寄せたのである。此の時、一瞬時に多くの生命と財產とを一呑みにした。

當時、土地の人々は大海嘯の豫感を受けないのではなかつた。六月十五日は朝から何となく、空模樣が重苦しく暗かつた。そして夕暮から夜にかけて、二三回の微震があつた。それと同時に海上に物凄い大音響を聞いた。人々は此の時始めて恐怖を感じて急に戸外に飛び出さうとした一刹那、大海嘯がどつと襲つて來たのである。そして灰色の運命の下に多くの人々が世を去らねばならぬ破目となつた。

以上は陸中に於ける有樣であるが、陸前に於てはどうかといふと、矢張大海嘯の前兆をいろいろに示したのである。此の地でに海水が當日午後三時頃から二十間乃至三十間干退した、井水が一尺二尺ぐらゐ減じて小地震が沿岸一帶に起つた、そして大海嘯が來た時最大の禍を蒙つたのは金華山から尻矢崎に至る間で、それは約百里に亘つて居た。牡鹿半島西岸では、大浪が南方から襲つて來て、其の高さが二尺から七尺に達した。小泉灣に於ける南方では、波浪の高さが二十一呎に及んだ。其の北方では十七呎に達した。また唐桑の外洋に面したところも二十呎の高さある波浪が荒れた。

當時氣仙沼灣のみは、唐桑の岬角が突き出で居て、其の東面を扼し、中央に大島があつて灣內を塞いだから、殆ど潮水の增減を見なかつた。何れにもせよ、私らが海嘯についての恐しい印象は、三陸大嘯海があつた當時に深く頭に刻みこまれた。咀ふべき海洋の悲劇！いたましい狂濤の犧牲者！

（一一）無限の感慨

地震の歷史は以上で粗雜ながら私は其の大要を述べ終つた。今度の地震の慘害は、過古の地震史のうちに明かに映し出され

て居る。そして其の地震から來る打擊は物的にも心的にも可なりに深酷だ。親に別れた子、子に別れた親、妻を喪つた夫、夫を喪つた妻、兄弟姉妹の間に見た生別死別、それらは心的に各個人に强い悲みを永劫に與へる。それらの人たちが此の世で最後の呼吸を引取るまで地震から受けた哀愁のあとが容易に消え去らない。が、一面から見ると、さうした悲みは人々の内省と沈思とを促がして、心的淨化を與ふべき刺戟力となることも亦多い。

若し廣い意味で云ふなら、世界大戰はヨオロッパに於ける空前の大地震であつたのだ。それから來た苦み、悲み惱みは今もヨオロッパから消え去らない。ヨオロッパ人は何れも長い間、最大の試練を受けつゝあるのだ。それらを思ふと、私らは今度の大震災のために自棄したり失望したり悲痛のために自ら傷けたりすることが出來ない。地震に征服せられる人となるよりも、地震を征服する人とならねばならぬ。今後は永久に地震に打克たねばならぬ。

が、それにしても今の私の心はさびしい。座右にある田山花袋氏の『東京の三十年』中に明治初期の東京が描かれ、市區改正の東京、大震災の東京が描かれてあるのを讀んで、大震のため大方ほろびてしまつた東京の姿、其の廢墟のやうになつた有樣、さうしたことを考へると、私はさびしい。何となく、深い地の底へ沈んでゆくやうな心持ちがする。

が、時は自然に流れる。大震と大火とにほろぼされた人と物との上にまた新しい事、新しい人が現はれて、新都市を立派に築いてゆく。今から十年後、二十年後乃至三十年後を思ふと、蘇活した大東京が新代の光彩を帶びて輝くであらう樣子が、はつきり思ひ浮べられる。

附記、本稿は大震後、編輯の四壁が破れて壁土や屋瓦が落ちてしまつて雨が屋上を洩れてくるやうなわびしさのうちで、適當な參考書をも得られずに匆々執筆したのであるから、遺漏も少くあるまい。文章も亦拙いところがあらう。切に讀者諸賢の寬容を仰ぐ。(九月十三日)

秋を賞め讃ふる辭

秋の氣魄

豊島與志雄

秋と云へば、人は直ちに紅葉を連想する、然しながら、紅葉そのものは秋の本質とは可なりに縁遠いことを、私は思はずにはゐられない。

楓の赤色から銀杏の黄色に至るまでのさまざまな紅葉の色彩は、その色彩からぢかに來る感じは、しみじみとした專念の秋の感じとは、よほど距つてゐる。都會にゐてはさうでもないけれど、一歩田舍に踏み出してみると、山裾の木立の紅葉や、田畑の熟しきつた黄色い農作物や、赤々とさす日脚などは、それをそのまゝ抽出して觀ずる時には、寧ろ殘暑に屬すべきもので、眞の秋の領域ではない。試みに、吾々の住宅や居室を、それらの色彩の何れかで塗りつぶすとしたならば、吾々の生活氣分は、可なりに落付のないものとなることであらう。そしてこの落付のなさは、秋の頼りない氣分とは、全く別種のものである。

紅葉に秋の氣分を與ふるものは、紅葉のうちの活力の缺除である。私は茲に、綠葉が何故に紅葉するかといふ、科學的の說明を持ち出したくはない。たゞ紅葉に活力のないことだけを云ひたい。かりに、野山の紅葉が、あのまゝの色彩で生々と生育する世界を想像してみれば、それが秋の世界だとは誰も云ひ得ないであらう。活力のない紅葉なればこそ、秋にふさはしいものとなる。秋の山野を飾する赤や黄の色彩は、房々とした少年の金髮ではなくて、生活をしつくした初老の人の赤毛である。

生活力のない紅葉は、一夜の冷風に散つてゆく。そしてこの

落葉こそ、本當の秋のもいである。庭に散り落ちる桐の一葉から、林の中に舞ひ落ちる無數の木の葉、または半ば霜枯れた野の草葉に至るまで、悉く秋の氣分に濃く塗られてゐる。かさかさと鳴る落葉を踏んで林の中の小徑を辿る時、人は最も深く秋を感ずる。

何處からともなく流れ來る微風に、常綠樹の病葉や落葉樹の紅葉は、何等の努力もなく如何にも自然に、梢から地上へと舞ひ落ちる。地のものは地へと大自然の聲が叫く、而も地面へ落ちついた枯葉は、なほ其處に安住し得ないで、何處ともなく風のまにまに吹き散らされる。その方向を辿つて林から出れば、收穫後の廣々とした田畑が、露はな肌を眼の屆く限り展べてゐて、霜枯れの叢からは、實をつけた雜草の莖が、淋しげにすいすいと伸びてゐる。そして人の心も、己自身の肌寒い淋しさに驅られて、遠い地平線のあたりへとさ迷ひ行く。その地平線の彼方に、淡い夢のやうな憧れの世界がある。

秋は淋しい、といふのは眞實である。秋はあらゆるものゝ外皮を、不用なものも有用なものも、凡て複雜多樣な外皮を、自ら振ひ落さしめて、萬物を裸のまゝでつゝ立たせる。秋を淋しくないと云ふ者は、衣服を脱いで眞裸でつゝ立つ折の、妙に侘しい頼り無い淋しさを、鈍感のために或は厚顏無恥のためにか、身に感じないていの者であるに相違ない。

かゝる落葉の――剝脱の――世界に、更に特殊の氣味を添へるものは、淡いながらに鋭い日の光である。やゝ南方に傾いた日脚と北から來る冷かな微風との爲に、その光は弱く淡くなりながらも、極度に澄みきつた空と大氣とのために、非常に鋭く朗かに射してくる。宛も眞空の中に於けるがやうに、何物にも遮らるゝことのないその光が、如何にくつきりとした日向と影とを、地面の上に投げてるかを見る時、人は殊に深く秋を感ぜさせられる。落葉の上の木立の影、田の畝の草葉の影、野の上の鳥の影、そして狹苦しい都會の中にあつても、苔生した庭の上の軒影、障子にさす植込の枝影、それらのものが、明るい日向ときつぱり區劃せられてるのを見る時、人の心には云ひ知れぬをのゝきが傳はつてくる。

このをのゝきこそ、秋が持つてる本來の感じである。靜まり返り澄み返つてる剝脱の世界に、まざまざと現出せらるゝ明暗の區劃は、ぢかに人の心に迫つてきて、眞裸な心のうちにも、くつきりとした光と影とが投げられる。そして人は知らず識らずに、自分の心を凝視する專念のうちにはいつてゆく。純なるもの、不純なるもの、澄んでるもの、濁つてるもの、それらがきつぱりと形を現はしてくる。

斯かる赤裸な凝視の眼は、それ自身の性質上、未來に向けられないで、たゞあるがまゝの自分自身――過去を荷つてる現在の姿にのみ向けられる。そして自然も人も、秋の世界全體が、自分の赤裸な姿を見守る專念のうちに沈默する。

この專念の沈默、それを堪へることが出來、それを眞に味感することが出來る者にとつてのみ、秋は淋しくも佗しくもない、其處にはたゞ、清淨な瞑想のみがある。遠い地平線の彼方へまでさ迷ひ出る魂が、そのまゝの憧れを懷いて胸の中に戻つてくる。そして健かな清い感激が、あらゆる雜念を吹き拂つて、自己の存在感――ぢかに胎にこたへる存在感――を强調する。

かういふ意味に於てのみ、秋は讃美すべきである。そして、修道院の祈願を思はせるやうな爽快な夜明と、靈的な戀愛を思はせるやうな月明の夜とは、何等の卑俗な氣分にも濁らさるゝことなく、そのまゝ人の心に受け容れられる。

秋は、凝視の季節、專念の季節、そして、自己の存在を味ふべき季節である。秋の本當の氣魄に觸るゝ時、誤つた存在樣式――生活――は、一たまりもなくへし折られてしまうであらう。その代りに正しい存在樣式――生活――は益々力强く健かに根を張るであらう。春から夏へかけていろんな雜草に生ひ茂られた吾々の生は、秋の氣魄に逢つて、たゞ根幹のみがまざまざと露出されて、清淨な鏡に輝らし出されるのである。秋に自己を凝視して、しみじみとした歡喜を味ひ得る者こそ、幸なる哉である。

秋には、狹苦しい書齋から、もしくは、蒸し暑い工場から、戶外の大氣中に出でゝ、野や山に遊ぶがよい。遊んでそして、地面の上に寢そべるがよい。大空の下大地の上に、ぽつりと投げ出された孤獨な自己を、あくまでも見守りそして味ふがよい。――然しながら、その時眞に秋を讃美し得る者が、果して幾人あるであらうか。

百舌の啼く聲

近松秋江

東京では、震災の爲に燒死した屍體がまだすつかり形付かぬといふのに、今朝起きて井戸端で顔を洗ひ、冷水で體を拭いてゐると、もう、隣地の、高い櫟の樹の梢の先で、キツキツキツと、青空を劈くやうな聲で百舌が高鳴きしてゐる。

「おや、もう百舌が鳴いてゐるか。」と思つて、私はそちらの高い樹の枝を物色すると、果してそれは百舌の姿であつた。

九月の一日の正午十二時に近く、人間世界を絶滅し、この美しい天地萬有を悉く粉微塵に破壞してしまうとした、呪ひの劇震があつて以來不安の狀態でどさくさとして過してゐる間に、やがて半月餘りは經つてしまつた。地震の恐怖の何時までも續いてゐるところへ、例年この頃有り勝ちの颱風が襲ふてさうなくてさへまだきびしい殘暑が、まるで釜の中で蒸されてゐるやうで、一寸でも家の外に出て步かうなら、チカ／＼と照りてける日光が腦天を射て、眼も眩むかと思はれた。幸にして地震の被害の少なかつた私どもでさへ、もう生きてゐるのが、いつそ苦痛に考へられたくらゐであるから、震災、火災に續いて氣狂ひのやうな豪雨に襲はれた所處もない罹災者達の苦患のほどが、しみ／＼と察せられた。

しかし、もう今日は九月の十七である。震災の當日から十七日經過した。颱風も一過して青空高く、朗かな初秋の日が天地に輝いてゐる。

私は震災後三日の日に牛込まで出て行き、東京十五區の內では最も安全であつたといはれるその牛込區內の、まるで戰場の如き凄じい光景の一斑を覗いて見たゞけで引返へして來た。下町の方の荒寥たる燒跡はまだ一度も巡視してゐない。たゞ不完全な新聞と人傳てに聞いて、その慘狀を想像してゐるばかりある。私は、あまりに慘劇なる東京市の荒廢の有樣を見るに忍びない氣持ちがしてゐた。無意識で盲目的な自然は、たつた三分か五分の間戰慄すべき大破壞力を發揮したばかりで、もう、後の始末も知らぬ顔に通り過ぎてしまつた。何となく、「ざまを見

ろ、馬鹿め！」といつて、哀れなる人間は自然に冷笑せられてゐるやうな氣がしてならない。

そして天地の運行は晝夜も休まないで、恐ろしい人類の大破壞を敢行した後で、すぐ又掌を返へすやうに慈愛の溢れた顔をして美しい日は深い痛手に傷いた者を慰めようとするやうに輝いてゐる。

私は、あの地震のあつた前夜の寢苦しかつたことを忘られない。眞夜半ふつと、あまりの寢苦しさに眼を覺ましてみると、蚊帳の中はまるで百度の汽罐室にでも居るやうな蒸熱さであつた。ぴん〳〵頭が病めて吐け氣さへ催してゐる。あゝ又、暫く起らなかつた例の持病が始まつたなと思つて、じつと仰けに靜臥して堪えてゐた。やがて、うと〳〵と夜が明けたが、頭が重く、胃が苦しくつて容易には起きられなかつた。やつと九時時分になつて寢床を離れ、ごろ〳〵としてゐた。そしてあの激震であつた。それから毎日々々、人間を呪つてゐるやうな黒雲に掩はれた日、刺すやうな酷しい暑さの日、狂氣のやうな豪雨の日がつゞいてゐたが、今日ははじめて、其等の惡魔の業をしてゐるやうな世界から脱出して美しい天の國に入つたやうな氣持ちがする。

隣地にある數株の欅の老樹は七八丈の高さに天を摩してそゝり立つて枝を蔽してゐる。私はこの欅の老樹を愛する。地震のある三四日前此處に新築の家を見付けて轉宅の決心をし、借家の約束をしておいたのであつた。先に居つた家にも自　の工夫した樹や竹を植えて置いたところ、それが一年ばかり立つ間にだんだん落着いて見よくなつてゐた。折角そんなにした家を立退くにも愛惜の情があつたが、周圍の騷々しいのと間數が三間しかないので、不便なので爲方なく此方に移る氣になつた。今度の處も同じ東中野の高臺である。先の處よりも土地柄は一層高燥である。相變らずの借家生活であるが、幸にして震火にも遭はず、人は自分の家を所持してゐてさへ、皆な全燒けにあつてゐる場合に自分は、地震の前から借りて置いた家に移ることが出來た。東中野は郊外の住宅地としては大森の高臺とゝもに私には最も好ましい處である。古い立木が多い。先の家の周圍にも欅の樹などが多かつたが、今度の家の隣地にもそのとほり欅の樹が多い。東京の人間の住宅地になるまではこの邊一帶畠であつて、ところ〳〵に數百年の樹森が立つてゐて、その蔭に草葺きの百姓家が這ひ伏さつてゐた。今度の家の地主は、此の邊に古くから住む百姓家であるといふことだ。そこの庭の中に其等の欅や杉や天を掩ふて立つてゐる。今朝鳴いてゐた百舌

はその樹の頂にとまつて天にも響くやうな聲を出してゐた。

私は、はじめ此處に新築の貸家を發見した時、家の美しく出來てゐるよりも先づその隣地の欅の老樹の高く天に聳してゐるのに眼がついた。あゝ此の欅の樹が何よりもいゝ景物であると思つた。四五月の頃これが新芽を吹く時分も好からう。更に又十月の末から十一月にかけて、それが黄葉して小鳥の飛ぶ如く風に翻つて散落する時分の風情が何ともいへないであらうと思つた。私は早速そこを借りて移る決心をしたのであつた。二階の北窓から見上げると、すぐ眉の上に蓊欝とした枝が掩ひかぶさつてゐる。私はこれからだん／＼秋季に入り、日々讀書に疲れた眼をそれ等の高い枝に放つて慰めるであらう。家主が菜園にして置いた畑の跡に建てた家で、まだ何となく周圍の垣根などに落着かぬところがあるが、私はこれから、追々先の家の庭に植えておいた竹や木を植木屋に賴んで移植し、借家といふ條件の許す範圍內にあつて、そこに自分の庭園の創作を加へようと思ふ。今の場合、とても世間が忙しくつて、容易に植木屋に入つてもらふことも出來ないが、彼岸を過ぎ樹木の移植の好季になつたら其等の木々を移さうと思ふ。今度の家も庭は思ふやうな空地が少いが、狹ければ狹いで、狹いなりに工夫するのも面白い。そこに一つの工案の妙味がある。今から、あの芭蕉を何處に植へて竹を何處にしよう。白雲木を何處に置いたらいゝかなどゝ空想してゐる。

人間の築いた都會は、恐ろしい大自然の破壞力に觸れて無慘にも滅亡されてしまつた。私は東の方――東京に當る――を向いて見るに忍びない。私の眼は秋が深くなるにつれて、必ず西の方に向く。西に當つて古い武藏野が遠くつゞいてゐる。古い武藏野は自然が造つたまゝの土地で、人工が加はつてゐない。人工の加はらない土地は自然の怒りに觸れることも少いのである。私は自然の意に叶ふやうに古い武藏野の秋の中に深く分け入つて行かうと思ふ。

（九月十七日）

秋の懷しみ

德田秋聲

おそろしい震災と火災に燒拂はれた大都市の跡に秋が訪れて來てゐます。都會生活の享樂の跡をたづねて見ると、夢のやうで何ものもありません。總てのものゝ亡失損害を限りなく惜しくも痛ましくも思ひますが、長いあひだの都會生活を考へると、私などにはそれは大抵あつても無くても可かつたものゝやうな氣がします。人間の限りない欲望と興味が築き上げた生活の實質と遠ざかつた幾多の積重ねが崩壞し燒失したので、反つてせい／＼した樣な氣さへするのですが、現代生活は總て經濟に支配されてゐますから、さうも言つてゐられない點もあるでせう。たゞ適切必要な根本的設備を忘れた煩瑣な都會生活の呪はしさはこの機會にいくらか反省されることと思ふし、一國が擧つて東京と云ふ大都市を築くに努力するかはりに、總ての權力富、娯樂を各地に分布しておく必要は痛感せられただらうと思ひます。私自身は去月の三十日に東京を立つて、故郷の秋を未知の溫泉場など廻はつてこようと思つたのですが、地方人は擧つてこの大災について、想像も及ばない努力をしてゐる際で、東京在住者の一人として深甚な感謝と慚愧の念を禁じ得ませんでした。それも相互の生活が密接な交渉をもつて來た近代文明の賜かも知れませんが、都會人は妙な階級意識を撤廢して地方民に對して、今後總ての點で今少し謙遜でありたいと考へます。

秋といつても私の郷里にはこれといふ特徵はありませんが、雪國だけに何處かしみ／＼胸にしみるやうな寂しい懷かしい氣分があり、東京にゐても比較的自然の推移に敏感な私などの感覺にすぐ觸れて來るのは、少年の頃に感じた田舍の秋の氣分なのです。鬱陶しい建物や人で、ぎつちり詰つた都會の隙間から、空を眺めたり、狹い地上の瘦せた草木を眺めたり、風のそよぎを感じたりすると、不思議な懷かしさを唆られるのですが、今ではもう故郷の秋にはたへられないと思ふほど、私などにも都會の垢がかさのやうになつてゐます。匂ひの高い新穀の飯に皮の笑みわれた茄子の靑々した漬物や、新鮮な間引菜の味噌汁など

で、朝飯を食べてゐると、底凄いやうな秋の朝風が軒の風鈴をゆすつて、一日一日と北國氣分になつて來るのですが、日の照るときは日中はまだなか〳〵暑いので、外へ出ると肩へじりじりした暑さが透して來ますが、飛彈境の山脈などは、何となく陰鬱な凄い色をおびて來て、川の流れなどを見ても、いかにも寂しい感じがするのです。雨が降りだすとそれが又いかにもじめ〳〵した降り方で、空が少し明るくなるかと思ふと、濃墨を流したやうな雨雲がまた鬱陶しく瀰漫して來ます。さう云ふ町でも、今は少しづゝ文化的設備もでき、建築法も改まつて、いくらか自然を緩和してゐますが、産業の發達しないかはりに生活は至つて平和です。自然の感じも關西方面のやうにデリケートです。東京の郊外の秋なども嫌ひではありませんが、武藏野の感じは餘りに粗大すぎて、しかも單調なので、親しみにくい感じがします。憂鬱なことはむしろ北國以上で、細かいしんみりした感じがありません。

古都の廢墟のやうな丸のうちや銀座あたりの今年の秋の月は、フヰルムなどの好い背景だらうが、づゐぶん變なものだらうと思ひます。

凋落の裏に復興の氣

上司小劍

一

秋は物の凋落を意味するやうに昔しから人々の頭を支配して來たけれど、凋落の裏に、復興の氣が溢ふれてゐるのを見のがすことは出來ない。

澄み切つた大氣。……それは獨り秋の有する質ではないか。

山も野も皆一つ〳〵磨きあげられたやうに鮮やかな光りを放つ。遠くにあつた山は近くに引き寄せられた如く、近くの野はいよ〳〵近く、呼べば應へんばかりである。

高い山に登ることは、眞夏の行事のやうになつたけれど、これは秋に於てするのがほんたうであらう。たゞ山荒れなぞは秋に多いから、氣象上の注意さへすれば、夏の休暇に關係のない

入たちには、秋の登山を勸めたい。澄み切つた大氣の中を、高山の頂きに立つて、深呼吸でもすれば、胸の中まで清らかになるであらう。

二

秋晴れの日に、赤蜻蛉の飛び交うのを見るのは風情のあるものだ。秋の太陽は春の太陽よりも人に優しい。日月に親しみ、星辰に親しみ、天體と人間とが融和するのも秋の特色である。團扇片手に顏を掩ふて『お星さま　ばア。ゐないゐない、ばア。』を宵の明星に向つてしてゐる幼兒の姿も愛らしい。

天體の鮮かに仰がるゝ秋の夜の美しさ。星の名も二つや三つは、おぼえてゐて、恒星と惑星との區別ぐらゐは誰れにでも出來る。北斗七星を先づ數へて、次ぎには天の川を見る『荒海や佐渡に横たふ天の川』の芭蕉の名句も、もとより初秋の情緒である。

古來の詩人といふ詩人は、皆天體に親しみをもつてゐる。遠い遠い月や星をば、地上の動物や植物のやうに、自分の友だちとして見る。牽牛織女が一年一度の戀の逢瀬なんぞ、いかにも人と天體とのゆかしい融合を語るものではないか。これも秋の情趣の一つであらう。寂しみを主とする日本の詩人は、殊に秋の天地に於て活躍してゐる。『鴫立つ澤の秋の夕暮れ』の西行法師や、『芭蕉破れて盥に雨を聽く』芭蕉なんぞ、皆秋の詩人と稱

し得る。枯木寒鴉の寂しみに活くる芭蕉は、秋といふよりも寧ろ初冬の情趣に生きた詩人と言はなければならないが、彼れの讃美した時雨、枯野なんぞ、俳諧の季に於ては冬に屬するけれど、情緒の上からは、どうしても秋である。澄み切つた、さうして寂しみのある秋といふ時季あるが故に、よく生きて來たとでも言はなければならない詩人が日本には多い。

三

天體の一つとして、最も我々の世界に近い月は、昔しから多くの詩人によつて讃美された。わけても東洋の詩人は、月に向つて感傷的の言葉を投げてゐる。さうしてそれが總べて秋に於てゞある。月と言へばもう秋のものといふ氣がするではないか。『明月を抱いて……』の名句を赤壁の賦に殘した蘇東坡の武を讃美した心と、我が芭蕉翁が深川の庵室に、明月を仰ぎつゝ、唯一人『池をめぐりて夜もすがら』の寂しみを歌つた心とは、同じやうな詩趣ながら、東坡は貴族的で、芭蕉は平民的である。東坡の生活、地方長官として、可なり贅澤なものであつたに違ひない。客とゝもに赤壁の下に浮べた其の舟には、美酒佳肴がドツサリあつたであらう。客と言つても、おそらくは彼れの部下か、或は幇間詩人の類ではなかつたか。兎に角あの舟遊は貴族的のものであつたらう。それに比べると、芭蕉の生活は一段と自然な、美しいものであつたやうな氣がする。些かだも秋の清らかさを穢すことなしに、彼れは唯一人明月に對した。

彼れの門弟其角は、其の中秋の夜を師と丶もに樂しまうと思つて、一隻の屋根舟を仕立て、腕の傑れた船頭に大川を漕がせて、芭蕉を其の舟に誘ふた。芭蕉は大天才であつたけれど、また極めて常識的な、平凡味の勝つた人であつたらしい。されば其の行爲には、門下の惟然や後世の一茶の如く常規を逸した跡がない。また思ひやりの深い人で、世間的にもつとめるところは十分につとめるといふ風であつたらしい。彼れはまことに秋を象徴すべき大詩人で、「秋の神」ともいふべき姿を具へてゐる。晩秋初冬の寂しみと、其の清澄な氣とが凝つて、この大詩人を生んだとも言ひたい。彼れの一生は殆んど秋の讃美にあつたと言つてもよい。彼れの詩は春を歌つても夏を吟じても、或は冬を詠じても、秋の情趣を取り入れた如くにさへ見える。

詩人として、ドツシリとした才分を具へた芭蕉は、人間としてもまた圓滿な、常識的な、おだやかな人物であつたらしい。思ひやりが深く、人づきあひがよくて、平凡人としての偉大さをも持つてゐたらしい。奇骨稜々とか何んとかいふ、變人くさいところは、彼れに於いて少しも見られなかつたであらう。されば門下の其角が、わざ／＼舟を裝ふて、觀月に誘ふたのに對し、心の中では厭やだと思つても、頭からそれを斷るといふやうなことをする芭蕉ではなかつた。殊に美酒佳肴を積んで、其の上にまだ美妓をも侍らせたとしても、其の月見舟をば俗だと罵るやうな芭蕉ではなかつた。そんな贅澤な月見舟に乘るのは厭やだ、と拗ねるやうな人ではなくて、それも結構と、初めは子供の如くに喜んだであらうと思ふ。

隅田の中流に溯り、東坡の所謂、美人を天の一方に望みつゝ、絃歌の聲を耳にし、美酒に顏を染め、佳肴に腹を膨らました芭蕉、食ふよりほかには肉體的の樂みのなかつたと思はるゝ芭蕉、蕈を貪り過ぎて腸病に生命を取られた食ひしんぼうの芭蕉でもあるけれど、物に耽るといふことは好まなかつたらしい。贅澤な月見に飽きた彼れは、彼れの性格の寂しみを胸の奥に湧かせて、たゞ一人の庵の名月に親しみたくなつた。そこでそれを其角に告げて、いゝ加減のところで、自分だけ、深川の或る河岸に送られて、舟から這ひ上つたのであらう。中秋の月が高く清く天にかゝつてゐる寂しい町、大川にはまだ月見舟に絃歌の聲を載せてゐるのを後にして、彼れは其の庵に孤獨の生活を取り還した。さうして終夜其の庭園の古池の畔りを逍遙して、名月を仰ぎ名月と語つた。「名月や池をめぐりて夜もすがら」の作は、深く／＼秋を讃美した彼れの魂魄の囁きではないか。

四

詩的に秋を讃美するほか、科學的に秋を讃美することを、今一度繰りかへさせていたゞきたい。

星辰の鮮かに仰がるゝ秋の夜には、俄の天文學者がなか／＼多くなる。我々が天體に對して、絶えず考へてゐることは、あの自由な組織である。恰も個々の自由を束縛されずに、殆んど絶對自由の中に、一定の軌道をめぐつてゐる星の姿が美まし

い。あれに比べると、地球上の人間の生活の不自由さ、だらしなさ。……そんなことを考へるのもまた秋の夜の感傷の一つで、澄み切つた空なればこそ、天體に對して讃美の聲が起るのである。天體の讃美即ち秋の讃美であらう。

五、

また話が秋の詩人芭蕉の上に戻る。彼れは時雨月に死んだ。時雨は冬の季であるけれど、晩秋の情緒である。秋の詩人は秋に死んだと言つてよい。後世の宗匠たちには時雨月に死にたいと考へてゐたものが、なか／＼多かつたさうである。俳諧をば詩とは緣のないものに墮落させて、富家の幇間に成り下がつた俗宗匠も、翁と呼んで芭蕉を崇拜することだけは忘れなかつた。『死なば秋……』といふやうなことは、いろ／＼人間の心頭に閃めく感慨で、どうせ死ぬなら秋に死にたい、とは誰れも思ふことであらうけれど、芭蕉をば神の如くに崇拜する後世の宗匠たちは、病氣にでもかゝると、直ぐに時雨月を待ちかねたものであるさうな。明治の初め浪花の或る宗匠が病氣になつて、なかなか癒えなかつた。大阪にゐて毎日京の水を取り寄せて飮んだといふ半時庵とやらにも似た生活をして、可なりの豪奢をつくしてゐた人だから、醫者なぞも多くの名家を立ち會はして診療に費用を惜しまなかつたけれど、どうも回復に向はないばかりか、だん／＼わるくなつて行つて、不治を宣告されたのは、八月の半ばで、もう一と月は保つまいと言はれた。

『先生、どうかして時雨月まで生かして下はい。』と、痩せ衰れて薄くなつた脣を動かしつゝ、醫者に哀願した宗匠の言葉は哀はれであつた。しかしいかなる名醫も人間の生命を飴の如く引き伸ばすことは出來ない。そこで宗匠は芭蕉の畫像を枕頭に掛け、自分の一念で時雨月まで生きて見せると力んだ。さうして八月も過ぎ、九月の末まで兎も角も死なかつた。一日／＼と生きて行くのが、病宗匠には持ち切れぬ重い荷物を無理に抱へて、齒を食ひしばつてゐるやうなものであつた。かくして九月の晦日となつた。もう少しだ。……十月の朔日の朝まだきに、駈けつけた門弟の一人、『宗匠の枕頭に進んで、嬉し涙とゝもに、『宗匠時雨月になりました。』と叫んだ。それを聽いて莞爾と笑つて宗匠は、其のまゝ息が絕えた。……これも、秋の讃美者の一人であらう。

日光に在つて、長篇小說『東京』の第三部の稿をつゞけ、東京の大破壞を空想で書いて、第四部建設篇の素地を作つてゐると、ほんたうの東京大破壞が來た。亂雜に込み合ふ汽車の屋根の上に乘つて、東京に歸ると、上野の松坂屋はまだ燃えてゐた。それから毎日燒跡を巡つて、いろ／＼の物を視てゐる。この秋こゝを照らす月影は凄いであらう。

（九月十七日）

前古未曾有の大震・大火慘害記錄

九月一日、二日の記

——天は燒け、地搖らぐ——

小川未明

一

九月一日は、美術院と二科會の各作品展覽會の第一日であつて、期待するところがあつた。朝から非常な風雨なので、雨漏りと日本畫の連想が頭から取れないために、私は、たとへ行つてもといふやうな危ぶみを抱いてゐた。

「なに、今日でなくてもいゝぢやないか」

私は、いつしよに見に行く約束のあつたゝめに、來てゐたN君に、かう言つた。

外の烈しい、雨風の音に、耳を傾けながら二人は、將棋をさしてゐた。

この時、やはり同行を約したT君が來たが、今日の天氣具合では、途中雨に遇ふかも知れぬから、延ばされるものならと言つたので、私も、いよ〱延ばすことにきめた。Tはすぐに歸つた。そして、私は、Nと二階で將棋をつゞけたのであつた。

「天氣になりさうですよ」

將棋に飽きた時分に、Nが言つた。

日の光りが、散亂した雲の厚い、破目からかすかに、雨で洗はれた、下界を射してゐる黄色な彩りを見た。

「さうだね、展覽會に行く、行かないは、出てからの氣分にして、とにかく家を出て見ようか」

私は、さう言つた。そして、二人は、早稻田の電車終點の方

へ足を向けて歩るいてゐた。豐坂を降りてから、低地に雜然として、軒を並べたいろ〳〵な店頭を通り過ぎた時は、魚屋の店には、魚があり、下駄屋の店には下駄があつた。若い女は、荒物屋の前に立ち、靴店では靴下や、ブラシの類などを並べてゐる。

「もう、降りさうもないね」

二人は、電車の停留場まで來ると、そこには御徒町行きの電車や、洲崎行きの電車が來て止まつてゐた。

私は、不思議に、どういふものか、すぐに電車に乘るには、何となく氣がすゝまなかつた。

「君、まあビールでも、飲まふぢやありませんか」

私達は傍にあつた三階建の小料理屋の二階に上つた。その家は　粗末な建築で、しかも大分古くなつてゐた。二人は、ビールを飲んで、私は、Nから山陰道の風景や、その土地の俗謠などについて話をきいてゐた。

窓際には、盆栽の鉢が三つ四つ置いてあつた。目隠しの上から、廣やかな空が望まれた。その空には、雨雲が頻りに往來してゐる。そして、たま〳〵顏を出した、太陽を呑まふとしてゐた。

私は、その空模樣に心が惹かれて、ぢつと見てゐたが、眼を轉じて、Nに何か話しかける刹那であつた。家が、搖らいだのだつた。

「地震だ！」

二人は、期せずして叫んだ。家は、波濤に跨つた如く、私達の體が轉げさうになつた。

帽子を被つて、N君は、早くも梯子段を驅け降りようとした。私は、曾て、地震の時は、二階にゐたらぢつとしてゐた方が、却つて安全だと聞いてゐたのを思ひ出したので、Nを制して、

「君、二階にぢつとしてゐたまへ。その方が、大丈夫なんだ」

と、言つた。

友は、躊躇しながら、腰を二たび疊の上に落付けようとして

「こゝは、三階なんですよ」と、注意した。

「あゝ、三階なのか？」

私は、驚いて起ち上らうとした。この時、いまゝで、裏の下に聳えてゐた、前側の洋風造りのカフエーが、ドロ〳〵と音を立て崩れた。つゞいて、その隣も、そのまた隣の家も、見る間に、のめつて、家根瓦の落ちる煙の中に倒れたのであつた。

この時、つゞいて、二度目の大きな、震動がやつて來た。こんどばかりは、私のゐる家も、横さまに倒れるものとばかり思つた。室の四隅の壁は、無慘に離れて、疊の上に落ちると碎けた。私達は、「どうせ、みんなが死ぬのだ。君と僕といつしよ

に死なう」と、言つたものゝ、二人は、やはり、死から脫れようと三階に驅け上つた。

三階には、うす暗い、がらんとした室が二つばかりあつた。この時、外の方では、悲鳴のあがるのが聞えた。

地震は、少しく、小さくなつた。この間に外へ出ようとすると、梯子段が、はづれかゝつてゐた。階下には、壁や、皿の破れが、床の上にいつぱいであつた。

何たる變り樣だらう。先刻、通つた時の町の姿は、もうなかつた。そこには、倒潰した建物が、たゞ重なり合つてゐるばかりで、人々が、その間を逃げ惑つてゐた。

血！血！路の上に、血が流れてゐた。一人の負傷した男を、二人の男が何處かへはこんでゐるのに出遇つた。地は、まだ搖れてゐた。

輕裝して、靴を穿いてゐるNは、足駄を脫いで、それを手にぶら下げて、よろめく私を扶けながら、二人は、坂を登らうとしたのであつた。

警鐘が亂打された。振向くと、はやあちらにも、こちらにも黑い煙が濛々として空に上つてゐた。

二

家の前に、少しばかりの空地があつて、そこへ家主が芋を作つてゐた。春頃蒔いた芋の葉は、今は大きくなつて青々としてゐた。そこへ近所四五軒の人々は、避難をして、いつしよになつゐた。

程近くに建つてゐる、女子大學校の赤煉瓦の壁には、大きい龜裂を生じて、門前の塀が地震と同時に崩れて小使が下敷になつたといふ噂が立つた。つゞいて、水久保で、幾人死んだとか、巢鴨の監獄署の塀が倒れて、幾人下敷になつたとか、いろ／＼な噂が、芋畑にぢつとしてゐても、通り縋る人々や、たづねて來た人々の口から、傳はつて耳にはいつたのである。

「だん／＼火事が大きくなるやうですね」

女も、男も、空を仰いで、先刻より、次第次第に幅の擴がつて行つた、赤黑い煙の上る方を見ながら言つた。

ぐら／＼と地が搖れる。

「ホラ、來た！」

いまゝで立つて話をしてゐた者が、慌てゝ芋畑の中に飛び込んで、敷いてある板や、蓆の上に坐つた。

「今日の空は、何といふ空でせう。あの、白い、石灰のやうな雲をご覽なさい」と、女の一人が言つた。

みんなは、はじめて、氣付いたやうに、空を仰いで、南、北に

渦巻いてゐる白い雲の峯に注意をした。日は、すでに、暮れるに間近かゝつたからであらう。凄惨にも、赤い光りを落付きのない空に投じて、その白い雲の一端を火のやうに彩つてゐた。

護国寺前は、高地になつてゐた。そこへ行けば、街の一端は眺はれる筈であつた。私は、そこまで行かうとしたが、その途中で、またも大地震に際會しないかと思つて、まご／＼躊躇してゐると、下町に、勤めてゐた男達が、家族を案じて戻つて来たのであつた。

「どうでした？」と、みんなは、その人を取り巻いた。

「やあ。大變な騒ぎですよ。銀座でも、日本橋でも、大きな建物がいくつも潰れました。随分死んだでせう」と、其の男は言つた。

「よく、まあ、逃げ出して来てくれたね」と、家族の者は、慰はるのであつた。

「今夜は、とても、家の内にはいつて眠られない。この芋畑でみんなが眠ることにしよう」と、一人が、言つた。

みんなは、早くから、その用意に取りかゝつたので、私は、子供等に分けてやるお菓子や、蠟燭や、その他の食料を求めるために、出かけて行つた。

護国寺前まで行くと、そこには、黒く人が群がつてゐた。近傍の避難者等であつた。東南の空には、一面に、黒く煙が上つてゐて少しそこから距離を隔て、西にも、また、北の方にも、幾ところとなく、街が燃えつゝあつた。

たま／＼擔架に載せられて、負傷者が、病院の方へ運ばれて行つた。

「手、足が、硬ばつてゐるぢやないか。もう死んでゐるのだらう」

擔架を見送つた、群集の中の一人が言つた。

「丸山町でも、早稲田でも、死人があつた。その上、この火事ぢや、どれ程、やられてゐるか知れない」

音羽の町は、低く、ちやうど谷の間に、走つてゐるやうに見られた。その町の中を、往来する人の波は、黒い流れを造つてゐた。自動車の笛が起り、自轉車が、幾つとなく走つたのであつた。

「浅草も焼けてゐるといふぢやないか」

「本所も、深川も、焼けてゐるといふ話だ」

「怖しく、一時に、方々で燃え出したもんだな」

「俺、家は、浅草だが、とても歸れまいと思つて、こゝにかうしてゐるんだ」

「電車は、あるまいな」

「電車どころか、水道も、瓦斯も、電氣も、みんな滅茶、滅茶になつたんだ」

「下町は、どの邊が、いま燒けてゐるだらうな」

「そこに、巡査さんがゐても、電話が不通だから、分らないと言つてゐる」

淺草の者だといふ、年の若い、草鞋穿きの男は、寺の門前の石に腰をかけて、ぼんやりとした樣子で、あちらに燃え上る、黑い煙を眺めてゐた。

その時、若い、男女の二人連が、少しばかりの荷を互にぶら下げて、疲れた樣子で寺の境内深く入つて行つた。女は、裾を捲つてゐた。どこか、カフエーの女給でゞもあるらしい樣子であつた。

「今日は、朝から、たち雲が出てゐた。こんな日は、惡日だ。きつと、高い山へ上つて見たら、東京の街は、四方から、たち雲に包まれてゐるにちがひない」と、淺草の若い男は、言つた。

「あの眞白い雲かい？」と、他の勞働者風の男がたづねた。

「あの、ぐる〳〵と渦を卷いてゐるんだ」

「下町には、藥屋が澤山あるから、あの下の方のどす黑い、重さうな煙は、藥品の燃える煙だらう。さつきから、たび〳〵爆發する音が聞えたぜ」と、勞働者風の男は、言つた。

かうして、立つてゐると、無限に雜音が、どこからともなく湧き起つて、はては、海嘯のやうに、氣味惡いうめきとなつて、襲來する如く感じられたのであつた。

「あの音は、何でせうね」と、つひに、私は、言つた。

その時は、もう日が暮れかけてゐた。しかし、町の中は、電燈も瓦斯の光りもなく暗黑であつた。僅かに、自動車や、自轉車の火が、縱橫に飛ぶばかりで、町は、夜色の裡に、恐怖に慄へてゐた。

「何の音でせうかね」と、勞働者風の男は、言つた。

日が暮れると、空は、一面に眞赤だつた。黑い、眼を遮ぎる障碍物の間から、蛇の這ひ上るやうに、焰の舌が縫れて見られた。

「旦那、電報は、まゐりませんでせうか」と、その勞働者風の男は、私にたづねた。

「勿論、不通でせうね」

「私は、加賀の者ですが、こちらに來て、車夫をしてゐやす。故鄉で案じてゐるだらうと思ひまして、電信を打ちたいんですが……」

「まだ、郵便なら、どうかも知れませんよ」と、私は、答へた。

私は、そこを去つた。

芋畑に向つて、歸へる途筋で、ある人が話をしてゐるのを聞いた。

「お向ひのおかみさん、あの人は、餘程、運がいゝんですよ。二百四十人も下敷になつて死んで、たつた六人助かつた、その中の一人なんださうですよ」

私は、いつたい、その二百四十人からの生命を失つたところは、何處だらうかと思つた。

唐突ではあつたが、私は、立止つて、

「二百四十人死んだといふのは、どこですか？」と、問うた。

四十前後の女は、家の外に、雨戸を敷いて、その上で、夕飯の仕度をしてゐたが、聲をかけられると、ちつと私の顏を見て、

「ほんたうか、うそか、よく知らないんですよ。なんでも博文館の印刷所が潰れて、二百四十人下敷になつて、たつた、助かつたものは、六人だけしかないとかいふ話です」

「博文館の印刷所？」

私の心は、遽かに暗くなつた。そこに働いてゐる筈であつた、幾人かの顏を思ひ出した。

芋畑に、粗末な小舍が建てられた。その下に、蚊帳を吊つて、蠟燭を點して、女や、子供等は夜を過した。

獨り、私は、どうしても眠ることができなかつた。幾たび、護國寺の前まで行つて、また歸つて來たか知れない。

「吉原が燃えてゐる」と、いふ噂も、聞いた。

三越、丸善、帝劇、其他の建物が、燒け落ちたといふことも聞いた。その中でも、丸の内にいくつかあつた、ビルヂングが悉く潰れたり、燒けたりしたが、ある一つには、死者三百人もあつたといふことを耳にした時は、私は、酸鼻の極であると考へた。

眞夜中頃、家の前を通つた、二人連の男が、南の空を見ながら、

「こゝらでは、こんなだが、目白坂へ行つて見ると、一面に東京は、火の海だ！」と、言つた。私は、その言葉に、甚く感激された。

護國寺の前で見たのは、僅かに、其の一部分にしか過ぎなからう。目白坂へ行つて見たいものだ。かう思つたけれど、私といつしよに行かうといふ人はなかつた。

「どれ、行つて見ませうか」と、下駄屋の主人が同意してくれた。

二人は、老松町の通りに出て、目白坂の方へと歩るいて行つた。いつも、煩はしさを感ずるのは自動車である。殊に、さうした異常な日に、ブルジョアの自動車を見ることは、堪えられな

い程、腹立たしかつた。——彼等の手から、すべてそれを奪つて、一般の交通と運輸のために使用すべきだ——と、いふやうなことが頭に考へられる。

半潰の家や、石垣の崩れたところや、全く屋根瓦の落ちた家などが、物凄い月の下に照らし出された。そして、目白坂の上に立つて遙かに、眼下に開けた都會を見た時は、さつき、途上の人の言つた如く、火の海であつた。すでに、火勢のうすれたところ、いま新しく燃え移らんとしてゐる熾な處、すべてが、火焔、濃淡、强弱によつてそれを判ずることができた。

「あの高い櫓のやうなものが見えるのは、どこでせう」と、私は、最も、火焔の高く空に沖したところに、黑いものが、いまにも呑み込まれさうにして立つてゐるのを指して、言つた。

「こちらの塔は、牛込の教會堂ですね。その先は、ちやうど番町邊にはなつてゐませんか」と、下駄屋の主人は答へた。

「あちらの火は、本郷ですか。こゝから、淺草、本所邊の火は、見えますまいね」と、私はたづねた。

すると、思ひがけなく、二人が立つて、あちらを眺めてゐる背後から、知らぬ男が、

「この神社の境内に上つて見ますと、吉原の火が見えましたが、もう、燒けてしまつて、うすれたかも知れません」と、言つた。

私達は、倒れた、石の鳥居の傍を通り、危げな石段を手探るやうにして登つて、大きな木立の繁つた境内にはいつた。其處には、この町の燒け出された人々が、野宿をしてゐるらしかつた。

吉原の火は、黃昏後の西空を染めた夕燒のやうに、いまは、うすれてゐた。

「あれが、さうですかね」

「さつきは、あのあたりが眞紅でした」と、知らぬ男が言つた。

其の男は、白い布で、頭部を繃帶してゐることに、はじめて氣付いた。

石段を降りて、町へ出ようとすると、獨り若い女が、往來の上で、枕に頭を就けて眠てゐるのであつた。

三

東京は、たしかに、火の都である。火は、一日、一夜、空を焦がしてゐた。僅かばかりの荷を負つて、この都會から、逃げて行く、避難民の群が、私の家の前をつゞいた。

老婆を荷車に乘せ、それといつしよに蒲團や、家財道具の類を載せて曳いて行く者もあつた。また、自轉車に荷をくゝつて其れを引いて行く者もあつた。彼等は、より安全な地域に脫れ

ようとするのだ。

不安と、危惧の裡に夜が明けた。二日も、はや晝頃となつた。そして、地の揺ぐのは、尚ほ止まなかつた。みんなは、家を怖れて入らうとするものがない。芋畑の中で、パンを噛つたり、飯を食べたりしてゐた。

「今日、午後二時頃大地震がありますから、氣をつけなさい!」

どこからか、こんな傳令が達した。

その時、ある人は、言つた。

「地震といふものは、最初のが、一番大きくて、あとは、だん〲小さくなるものです。もう大きいのは、來ますまい」

また、ある人は、言つた。

「學者の言ふことが當になりますか。ある地震博士は、東京へは、大地震が來ないといつたぢやありませんか。こんな大きな地震が來るのを其の以前に知らないやうな學者は、言ふことに權威がありませんよ」

「ほんたうに、さうです。天氣豫報と同じことで、却つて、あるから當にするので、無い方が餘程いゝのです」

「房州あたりの漁師は、大島の煙が、今年は、いつになく多いから、變りがなければいゝがと言つてゐたさうです。昔の人の言ふことや、さうした經驗から言つたことは馬鹿にできません」

「さういへば、大島は、陥沒してしまつたといひますが、ほんたうでせうか?」

「月島に、大きな海嘯が來て、九分通り洗ひ去られたといふことです」

「まだ、そんなことは、この騒ぎの中でよく分りますまい」

私は、人々が、こんな話をしてゐるのを聞いたのであつた。

たとへ、それが風說にしようが、午後二時の刻限が怖しかつた。そして、こんど大地震が來たら、自分の家も、隣の家も、また半分壞れかけてゐるすべての建物が、すつかり潰れてしまふのだと思はれた。かうして、東京は、事實に於て無くなつてしまふであらう。

私は、この恐怖の裡に、自然の力について考へさせられたのであつた。古來から、かうした、變災によつて、幾たび、人間の地上に築き上げた文化が滅ぼされてしまつたであらうか。すべて、曾つては在つた文明が、今は、全く無いのである!今は、たゞ歴史の上にばかりある。羅馬も亡びたし、カーセイジも滅びた!

東京のあの賑かであつた街、江戸時代の面影をなほ何處かにとゞめてゐたなつかしい東京の都は、つい一日前までは、在つたのだ。そして、今日は、もう永久に無い、過去の事實となつ

てしまつたのだ！

日暮方のことであつた。○○が、この附近に火を掛けるといふ流言が報ぜられた。

ちやうど其時、往來の上が騒がしかつた。○○が、○○を携へて、湯屋を覗つてゐるのを取り逃がしたとか、三人の中の一人が、郵便局の前で捕へられたとか言ふのであつた。

私は、往來に立つて、黒く人々の集つてゐる下手の巷の方を見た。

「○○○○○○○○○」と、叫んで、上手からは、○○や、○○○○のやうなものを振り廻はして、後から、後から、青年達が其方を目がけて、走つて行つた。

「○○つたんですか？」

私は、あちらから來た人に、たづねた。

「なんだか、見つけたとかいふのですが、ほんたうのことだかよく分らないのですよ」

たづられた、その人は、云つた。

また、あちらから、一人の男が、來て、

「今夜、このあたりを○○○○○なんださうだ」と、聞いて來た、噂を傳へた。

こんなことで、往來に立つてゐる人は、口から口へ、いろいろなことを話してゐた。

この時、芋畑の中には、下町から燒出されて、この町の酒屋を頼つて來た、幾組かの避難した家族があつた。この人達の火に追はれて逃げた實話は、聞く人の心を寒からしめた。

私は、三人の小供の身の上を思つて、夜中何事が起つても、避難は容易でないと感じたので、まだ明るいうちに、どこか郊外へ脱れようと思つた。

H君が見舞に來てくれたので、手傳つてもらつた。乳母車に、小量の食糧品と、昨夜買つて來た蠟燭と子供の着換へと自分達の着換へとそれに、二三枚の毛布を、野宿をする覺悟でいれて、家の戸をば釘付にして出た。

「蚊帳を持つて來ましたか？蚊帳があれば木の下でも眠れるのだが」と、H君に言はれて、私は、それを忘れて來たことを知つて、もう一度家まで戻つた。

目白街道に出ると、避難する人の群がつゞいてゐた。後から、また、前から、頻りなしに自働車が、けたゝましく驀進して來るので一番小さい小供は、女中に負はれてゐたが、他の二人の小供を氣遣ひ、石に躓く乳母車の自由にならぬのをもどかしがつた。

H君と妻と私とが、乳母車を押して行つたのであるが、途中

で、つひに乳母車は壞はれてしまつた。はじめは、戸山の原を越して、もつと先まで行く考へであつたが、力が碎けてしまつた。私は、もと居た上り屋敷に、T君がゐることを思つた。そして、迷惑でもT君の家に、二三日避難さしてもらはう。其處も危い時は、さらに、先には、茫漠たる原野が開かれてゐるのだと考へた。ほんたうに、私は、この火が、どこまで私達を脅威するか、殆んど想像さへ付かなかつた。

目白驛を眼の下に見ると、線路に添うて避難民が、右に行くものがあれば、また左に行くものがあつて、其の列は、さながら織るがやうに黑くつゞいてゐた。

彼等には、果して、行く先に當があるのであらうか？さういへば、自分と同じく、この道を橋を渡つて、眞直に行く人々もあつた。思ふに、その人達も、やはり私等と同じやうに、どこといふ當があるのでなく、たゞ、恐怖の都を少しでも早く、其處から逃れようとしてゐるのでないかと思はれた。

T君の家に、たどりついて、荷物を下した時は、日が暮れてゐた。廣い庭の繁みは、暗かつた。

H君に、別れを告げた。私は、何となく、もう二たび昔のやうに、寛いで友達とも相語る日がない如くに感ぜられて、寂しかつた。いつあのやうに、また諸君に遇ふだらう。生活のために、その他の事情のために、互に遠く別れなければならぬかも知れない。たゞ、心の中に、其の健康を祈るのであつた。

いましがた、急いでやつて來た方角を見返へると、はやくも、眞紅の焔が、空を焦がしてゐた。私は、これを理もなく、自分の家の近くだと思つた。

「僕の住んでゐたあたりではないでせうか？」と、私は、言つた。

「そんなに、近くではないでせう。本郷か、さもなくば、牛込のあたりでありませんか」と、T君は答へた。

たとへ、それがどこであつても、私は、街が火に祟られてゐると思つて、恐怖を新にした。

「あちらの原の中に丘があります。そこに上ると、よく火が見えますよ」と、Tが、言つた。

二人は、すでに濕つてゐる、草を分けて、野道をあるいて行つた。すると、道端に、四五人提灯をつけて屯してゐた。

「どなたですか」

彼等は、不意に立ち上つて、道の前後を遮ぎつて誰何した。

「あすこに住んでゐるTです」と、Tは、落付いて言つた。

私は、豫期してゐた、反動的傾向を、はやくも見たやうな氣がした。

二人は、丘に登つて、火を見たが、それは私の思つたより、遠い處であつたのだ。

丘を降りて、草深い、小道を行くと、蟋蟀が、吹く風に聲をふるはせながら、高く、低く、鳴いてゐた。

「地震のあつた時は、蟬も鳴かなかつたやうですよ。晩方になつてから鳴くのをきゝました」と　私は、妻が話したのを思ひ出した。

「T君、あの屯してゐる人達のところを通らずに歸りませう」と、私は、言つた。

二人は、他の道を歩るいた。すると、彼等は、またこちらに棒を持つて走つて來た。

「この近所のTです」

二人は、家に戻つた。妻や、小供等は、みんな庭さきの大露の下に眠ることになつた。暗い、たよりない蠟燭の火を見つめながら。

「流言蜚語が、盛なやうですね」と、話合つてゐると、このとき、

「夜警に出て下さい。今夜、○○がやつて來るさうですから」

と、門の外で、聲高に言つた者があつた。

――一九二三、九――

見聞三日

室生犀星

地震のさいちうに蟬が啼いてゐたのが、まだ耳の底に殘つてゐる。――これは一生忘れないかも知れない。たまごの黄味のやうな太陽が火の手のそらに懸つて暴風に揉まれた樹から蟬が啼いてゐるのを私は全く再度と聞きたくない。――。

私の鯉が地震のさわぎに餌の餅を忘れたと言つて遣つた姿、鯉はすぐには食になかつた。かれらは醉ふたやうになつてゐた。――毎日蛙がよく啼いた。そのたびに雨が來た。地震中はたいがい蛙は水の中にゐたらしい、その點から蛙は地震をよく知つてゐるらしく思はれた。

田端ポプラ倶樂部に一日の午后三時ごろに避難してゐたが、見ると白いちやぼ鷄が交り合つてゐた。――白い羽根が鋭どく矢のやうにつッ立つて人間界の慘憺たる光景も知らぬげだつた。憎らしかつたが或ひは地震などの現象が知らず知らず昂奮させたものでなかつたかと思つた。そして何だか勇ましいやうな氣がした。

へいぜい仲のよくない人でも、こんどは外で合ふと、おたがひ無事だつたことが喜び合はれた。どんな人間でも地震のさいちうは純情に充ちてゐたやうに見える。怖がつてゐて子供のやうに吃驚りした氣もちは、百年に一遍くらゐ人間同士が持ち合ふ氣もちだらう。たいがいの老媼は落ちついてゐたやうだつた。からだの利かない人は座り込んで、そして命を完うした人が多かつた。私など家族四人前の心配と自分のと加へて、それの持ち逃げるところさへ無いのに困つた。人間は三十五ぐらゐではまだまだ子供だと思つた。四十になつてゐたら私はあんなにあはてなかつたらう、――だが、四十になつたら最つとあはてたかも知れない。

子供はあまり怖がつてゐなかつた。むしろ茫乎してゐたくらゐだ。大人のあはてたり恐がつてゐたりしてゐるのを眺め、そして自分もあんなに恐からなければならないかといふ氣もちでゐたらしい、――或る子供など却つて何時もより燥いでゐたやうだ。だが、二三日してからどの子供も一やうに青い血色のよくない顏をしてゐたのは實際である。そしてどの子供も大人の一擧一動にびくびくし出してゐた。わけが分らぬまま何か恐いものがまだ來さうな氣さへ抱いてゐたらしく思はれた。

神明町で潰れた家から四五才の子供を丸潰れのなかから掘り出してゐるのを見たとき、その子供の額に紅梅のやうな赤い裂傷のあるのを見た。そして同じい家敷の下からその子供の外に二人掘り出したのを見た。どの子供もみな達者さうで大傷をつけてゐなかつた。あれが大人だつたら助かりはしなかつたらうと思つた。

濃尾の地震のとき私はまだ六つか八つくらゐだつたらう、――何でも庭へ飛び出してそしてどんな譯か今でも分らないが、杏の樹のなかほどへ攀ぢ登つて地震と一しよに杏 樹をゆすつてゐたやうに覺えてゐる。恐い氣がしてゐるより何か途方もない天變とともに己が心を托するやうな子供らしい氣になつてゐ

たらしい、――子供といふものは天變事變にもなほ遊ぶ餘裕をもつてゐるものらしく思はれた。だが恐がり出したら際限なく怖がり出すのも子供らしい。――地震の恐さは何時來るかわからない恐さだらう、不意だから恐い。

徳川時代から以降大正十二年から貞享元年に至る百年間に十七回地震があつた。このときの大地震は慶長元年伏見城破壞し大佛殿が顚倒した。貞享元年から天明四年までの百年間には十五回あつた。その內元祿十六年の地震がある。天明四年から明治十七年に至る百年間には二十四回あつた。文化元年の出羽庄內、弘化四年の信州善光寺地方 嘉永六年の小田原地方、翌年安政の大地震がある。それから明治廿四年の濃尾の地震がある。

が人畜の慘怛たるはこんどの地震に及ぶものがなからう、建築が 洋風だつたせいもあらうが 火事が酷かつたからである。百年目ごとに大地震がやつて來るのも何か不思議な氣がする。が、こんどのやうな大地震はもはや私どもの生涯に於て二度と出遇すことがないだらう。

上野の焦土、坐して西瓜を賣つてゐる人があつた。その人の妻らしい女が由緒ありげな美婦だつたが、こんな騷ぎの最中に不意に思ひついて店をひらいたのではないかと、平常何んでもないことが不思議に頭に殘つた。

不忍の池の蓮の葉は半分青く半分茶褐色に燒けちぢんでゐるのが多かつた。青い分の葉には白い燒灰がたまつてゐて、燒けちぢんでゐる分は何か酷たらしい容子があつた。どこを見ても焦土と燒瓦との巷だつたが、まるで夢のやうな氣がした。全く地方にゐた人が歸京して見てまるで樣子の違つた東京を眼前に見ながらも信じがたい氣もちになるといふことも、私には同感できるやうな氣がした。――わけて池のなかにゐた白い鴨の姿を蓮の葉の間に求めたが、そんな鴨らしい姿もなかつた。徒らに零餘を吹く微風に埃ぽい燒けたものの匂ひを嗅ぐだけである。

私のところへ來る一高の生徒でH君といふのがゐるが、こんどの災害で母を失つた。H君はまだ年少であるが平常詩が五つ六つ書けると淨書して帳面のやうに綴ぢて置くと、そのお母さんがいつも五圓に買つてくれるさうだ。私はこの話を美しい詩のやうな話だと思つてゐた。

火の手が本所一面を舐めつくしたときに、H君は父母と別れ別れに逃げ惑ふた。水泳に長けてゐたH君は隅田川へ飛び込んで折からの蒸氣船眼がけて泳いだが、川のまんなかに火風にあぶられた渦巻きのやうな渦卷ができてゐて、大がいの人は

に捲き込まれて了つた。H君も捲き込まれた一人だつたが、どうやら抜け出したときは手が披れて泳げなかつた。それ故仰向きに土左エ門泳ぎをやつてやつと蒸氣船に近づいて助かつた。――翌日とその又翌日と荷車を引いて、母親の死體をさがしてあるいたが、提灯でいちいち死人の顔や着物を見てやつと母親の死骸を見つけたさうである。H君は美青年であるが大方母親も水死だつたのでそんなに酷らしい顔はしてゐなかつたゞらう――そして父親は隅田の石垣にかぢりついて助かつた。あとで聞くとお母さんはH君の名前と町名を叫んで探して歩きながら火に追はれて、入水したものらしいとH君が言つてゐた。これからH君の唯一の讀者であつたお母さんがなくなつては、いくらH君が書きためた詩を綴ぢて置いても買つて吳れる人がなくなるであらう、――。

妻子女中甥一族をつれて赤羽へ逃げた私は、赤羽で夜中に銃聲をいたるところで聞いた。人聲がない、だが警鐘が鳴りひびくたびに銃聲がした。ひるまの熱風は生あたたかく、物音一つなかつた。――夜中に私は通りに出て見たが、川口の渡しの方からも長野から來たのであらう、屈強な巡査が百人許り列を作つて町へ這入つてくるのを見た。みんな立派な男許りで白い服で、何か知ら平常と違つた考へをこの役人達ちに持つた。みんな黙りこくつて歩いてゆくのである。誰一人として話してゐるものがない。長野縣と書いた弓張提灯が町の方に消えてゆく――。

私はずつと睡れなかつたがその晩ほど泌々虫のこゑを聞いたことがなかつた。あんなに美しい幽艶な虫の聲々、それも冴り切つた心に何んだかひだるく悲しく聞かれるのである。――心が荒れてゐるせいか、私にはその虫のこゑまでひだるく聞えてならなかつた。だが何といふ平安がその間にこもつてゐたことだらう、――。人間界とかはりのない世界がとくに烈しく私を刺戟した。

佐藤春夫君がこれも人を尋ね、疲れて朝早く私の家を訪した。千載一遇のやうな氣がして無事を喜び合ふたが、そのときこの友達は煙草に飢えてゐたので私は一つしかない朝日を頒けた。そしてへいぜい絹シヤツを着てゐるこの人に二間くらゐの夏シヤツを寒いからと言つて遣つたが、ちやんと肌に着けてしまつた――佐藤君が發つときに三本しか殘らない朝日の袋を置いて行つたのもお可笑しかつた。そして麹町の弟の近所にはまだ煙草くらゐ搜せばあるだらうから、誰かに持たせてよこすと言つて飄然と去つたが、私はそれきり煙草のことは忘れてしまつた。

——そして中一日を置いて或る雜誌社の人が佐藤君から托まれたと言つて長さ一尺ぐらゐの横五寸ぐらゐの新聞包みを恭々しくとゞけて呉れた。すぐ煙草だなと思つたが、それにしても包みが大きいので變に考へた。——開けて見るとやよひといふ煙草が十個、すみれ色の繪をかいた小柄な紙包の肩をならべてゐた。いま東京市中に煙草を咥へてゐる人なんて滅多にゐないのに能くも忘れずに届けてくれたものだと、ふしぎに情愛にぞんざいな風をするこの友達の底にかくまはれた心づかひを嬉しく感じた。佐藤君だつて澤山煙草があつたわけではなからう、そしてこんな友情といふものがこんな世の騷ぎのなかにあつたことも錄して置きたいと思ふのである。

地震と一しよに私の人生觀も歪んでしまつたと言つてよい。すくなくともこれまでよりも最つと厭世的に最つと日本人らしい特質に立還つたやうな氣がした。それでなくとも隱者風な心持ちの多分にあつた私は誰人と同じいやうにこんどの災害では行手を塞がれたやうな氣がした。人生の生活なり仕事なりを積み上げて來た自分は、蟻のやうに昨日壞された塔を再び築き上げるなどといふ根氣はない。まるで別なものなら又一段づつ建てなほす氣はある。それゆゑ私は今ゐる家や住居をすつかり變えてしまふとよいと思ふ。そして又都會へ遣つて來たつていいのである。さういふ點からなれば夕に壞して朝に建てる砂上の兒戲の例をならふ私である。だがこのままの心をそのまま少しも亂さずにゐるやうな賢人でないために、私はよろこんで愚人愚にならふ心安さを感じたいのである。——田舍へかへつて百姓をするなどといふ氣にはならないが、かげらふに似た文人生活の果敢なさぐらゐならば、人一倍身にしみてその日を暮らして行くだらう、——東京に家を持つて地盤のできてゐる人ならともかく、もともと田舍に身を起した砂上のやうな都會の暮しをしてゐる私には、やはり生れ故郷へかへつて行くより仕方がない、——故郷は榮達一身に超えてゐる時か、敗殘傷心の時かでなければ歸つて行くところではない、私のいま抱く一瞬の安機を托して歸る心も疾くに用意してゐたわけではないが、いづれはこんな傷心を抱いてかへる日がやはり運命の方で用意されてゐたのであらう、——。そしてこの歸郷がつねづね文人生活の悲哀の身に沁みた閑暇々々に何時となく考へられてゐたことで、咄嗟の間に考へをした譯ではない、元來が愚直であるために狹過猛心の氣を缺いてゐる私にとつて、こんどの天變事は私を災しなくてよい心がけを教へてくれたやうなものである。

こんどの天災には親と子、夫と妻、友人同士などといふ平常極

めて美しいものであるべき筈のものが、一瞬にして失はれてゐた事實もないでもない、そんな心を決して咎めるわけには行かない、ああいふときは全くどうにもならない、――が、何といふ烈しい心で親子の間や夫と妻との間にへいぜい失はれてゐた情愛が又湧然と起つたことであらう、かれら相扶け合はれなかつたかぎり、どんなに最後まで愛し合つてゐたことだらう、私はそんな心を永く私自身の中につきつめて永く忘れないのである。

生地獄圖抄

藤澤清造

上野公園の遠望

君は、罹災地を見廻つてみたか。君は、上野公園へいつてみたか。

私は、地震に遭つたうへに、火でもつて焼かれたところへは、殘らずいつてきたといつても好いくらゐに歩きまはつてきた。そして、上野の公園は、前後三回いつてみてきた。つまり、一日に一度、二日に一度、それから、三日にまた一度と、立てつづけに、都合三度いつてみたのだ。そして、私はそこに、この世における、不安さや悽惨さのために、震へおののいてゐる多くの人達をみた。それは、いふところの、目もあてられないくらゐに、悲惨の極みをつくしたものだつた。

これは私が、三日の日の正午ちかくにそこへいつた時だつた。前の日までは、昔ながらの姿態をして建てつらなつてゐた池の端や、公園向うの建物は、跡形もなくもう焼けてしまつてゐた。焼けあとからは、悲しさうな煙のみがむせかへるやうに立ちのぼつてゐて、盛んだつた火の名残りは、まだ四邊の空氣にのこつてゐて、顔をむけては歩けないほどだつた。私は、下へおちしいてゐる電線を踏みぬけて、公園のいりくちの方へでてくると、そこには一旦持ちだした簞笥や行李を、阿修羅のやうになつて追つかけてくる火の手に奪はれたのだらう。まだ小紋や錦紗縮緬、それに羽二重の類が、無惨な火の舌でもつて、ぶつぷつと嘗められてゐた。そして、これは、そこばかりではなくて、入り口をつきあたつた石段のうへにも、私はやはり同じ光景をみなければならなかつた。

それに驚いたのは、そこの崖のうへに建つてゐた常盤花壇までが、一握の灰のみをのこして、もう跡形もなくなつてゐたことだつた。私は、息つくことも出來ないやうになり、疲れきつた目をもつて、恨めしさうにそこいら中を這ひまはらせてゐる男をんなの間をかいくぐりながら、西郷の銅像前になる崖のはしへでて、私も曇りがちな目をおしぬぐひながらそこに立つてみたのだ。が刹那にして、私の目はまた、雨にうたれた窓硝子のやうになつてしまつた。

それにしても、なんといふ無慘な姿だらう。二三日あとまでは、「世界」や、「三橋亭」などの建物にさへぎられて、ついぞ目のとどかなかつたその後のはうは、仔細に目をとめて見さへすれば、房總の山山までも見通すことが出來るやうに開ききつてゐるのだ。また、目を右のはうへ轉んじてみると、そこにも、甲駿の山山が、剩すなく見ることが出來ようと思はれるまでに、哀れにも燒けひろがつてゐるのだ。

それらにこころを移してゐると、ふと私に、そのかみ露西亞は莫斯科の街が丘に、悄然として立ちつくしてゐたといふ、ナポレオンのことが偲ばれてきた。といふと君はきつと、私のこの愚かしき連想をわらふかも知れない。その時の彼と、この時の私とは、まるで正反對な地位にたつてゐることなどを思つて。ところでそれは、私にも分つてゐる。だがしかし、この時の私は、彼のやうに、勝利の悲哀さをおもふて泣いてゐたのではない。それどころか、私のは、餘りにかなかしい自然の前における敗北さの痛ましさゆゑに、せきあげてくる涙をのんで立つてゐたのだ。

君はさうは思はないか。天災ゆゑだとはいへ、千年の榮華を、一朝にして失ひつくした悲しみの前にたつたら、きつと君だつて、ひとりでに眼のくもつてくるのを覺えるに相違ない。その内の內なる意味は違つても、これはひとり、私や、ナポレオンばかりではなしに。

東西の偉人ともに倒る

これは私が、千駄木にゐる豐島與志雄の留守宅へみまひにいつた時、その途中でみたことなのだ。

ところは、權現裏の角なのだ。そこに繪端書を賣つてゐる一軒の店がある。そして、これはそこのショーウヰンドに行はれてゐたことなのだ。

そこには、石膏でできてゐる大隈侯の胸像が、その前にゐるナポレオンの肩先へ、彼の額をおつつけてゐた。また、トルストイの胸像が乃木將軍のそれと、重なりあつて倒れてゐた。その傍に、これは美の女神なのだらう。裸體になつた全身像が一

個、あほのけになつて倒れてゐた。それが、倒れしなに欠けたのだらう。これもその傍に倒れてゐる子供の首をまくらにして、かの女は如何にもやすらげに　仰向けになつて倒れてゐた。

死の池地獄をみる

これは、四日の日のことだつた。私が吉原へいつて、そこの病院の前にある、あの小判形をした池をみてきたのは。そして私はそこに　生きながら死の池地獄なるものを目のあたりにみたのだ。

まつたく私は、その池の縁にたつた時には、もう私の魂はとんでしまつた。まづその池のなかをみた時には、私の目はくらんでしまつた。そして、神經といふ神經は、火にかけられた毛髪のやうになつてしまつた。さらに驚いたのは、手拭でかたく押しつけてゐた私の鼻は、たちどころに潰れてしまつたことだつた。

それは、いま考へてみても溜らない。池のなかは、死人でもつて埋まつてゐるのだ。それの多くは女だつた。若い女だつた。私は、場所がらだけにそれらの女を、殘らず花魁だと思つた。だがしかし、それにしては、餘りに拵へが野暮つたかつたので、幾分の疑ひがのこつてきた。私のこのみからいへば、それらの女が身につけてゐた浴衣の模様や、腰卷のそれが、何か知ら私には、「遊女」といふ者を裏切つてゐるらしく思はれてならなかつた。だから、これらをも花魁だといへば、恐らくはそれは、ちよんちよん格子にゐた手合ひなのだらう。

で、それらの人達の多くは、大抵はうつぶせになつてゐたが、その中の仰向けになつてゐた人達についていふと、〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇　〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

それがまた、極度に内へいれた水と、外にたたへられてゐるそれとの關係からきてゐるのだらう。全身は、これ以上に膨脹したが最後、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。それに、〇〇といひ〇〇といひ、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇をかためたやうた〇ながしだしてゐる者もゐるのだ。また。その中には、〇〇してゐる者もゐるのだ。そして、それらが經つ時間と、茹つた水のせゐからなのだらう。次第に腐爛しきつてゐるその　死體から發散してゐる異臭は、あたりの空氣までも、堪へられないまでに、染めなしてゐようといふのだ。

だから、この世の〇〇〇〇〇にあつめたやうな、その死體

を目にしながら、一方鼻でもつて、その惡臭を嗅いでゐると、ちら内なる魂までも飛んでいかうとするのだ。

私は、この死の池をみたその翌翌日、つまり六日の日に、本所の被服廠へいつてみた。そして、またこころの驚きを新にした。

被服廠前の溝のなかには、幾十かの人達が、窒息した結果かもしくは、燃えさかる火勢にむされた所爲か知らないが、みな身につけた物もそのままにして死んでゐた。——容貌姿態ともに、それは、吉原病院前の池で死んでゐる者同樣だつた。ただ違つてゐるのは、ここのは男ばかりで、それが散在してゐることだつた。が驚いたのは、その廠内にある死體の多いことだつた。

なんでもここは、一萬五千坪とか、二萬坪とかあるといはれてゐる。そして、その内には、無慮三萬三千人ちかい死體があるのだ。それがまた、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇。つまり、この廠内は、それらの死體でもつて覆はれつくされてゐるのだ。

それは、目のおよぶ限り、まるで石炭のおき場をみる感じだつた。——ものの形容に、「死人の山」といふのがあるが、しかしそれはこの場合すこし妥當を欠くきらひがある。だから、いつて見ればそれはまさしく、石炭のおき場をみる感じだつた。そして、その石炭からは、これも鼻を衝きやぶりさうな惡臭を發散してゐるのだ。が違ふのはその衝き方なのだ。同じ惡臭でも、ここのは乾いてゐる。それは、時間さへ經てば、あとはもうなんらの名殘りさへも留めない種のものなのだ。

ところで、一方吉原のはうはといへば、それは、内に多量の水分とともに、また多量の膠漆をふくんでゐる物のやうになつてゐて、一度それを嗅いだが最後、嗅覺をのぞきさらない限り、生涯どうすることも出來ない底のものなのだ。つまりそれは、いふところの、「惡女のふかなさけ」といふやつでもつて、一旦おもひつかれたが最後、しよせんは、その女に殉じてのけなければならないのも同樣なのだ。

それから、他の相違をいへば、一方は數においては比較を絶してゐるが、同時にそれは、前にもいつたやうに、性別さへもはつきりしないやうになつて、ただ黑黑としてゐる關係からだらう。見た目の感じは、見る者の魂をおほふてはくるが、しかし、それを奪ひさるほどの力を持つてゐなかつた。といふのも幾分辯護していへば、一つはこれは、吉原のそれのやうに、思只して見ることの出來ない點からきてゐるのかも知れない。

とにかく、一方はおなじ陵辱さをきはめ、凄慘さをつくし

ゐても、死體そのものの形容さといひ、漲ぎりあふれてゐる惡臭さについていつても、吉原のそれにはおよぶべくもない。そのくせ吉原の池といふのは、廣くともその周圍は、十五間は出ないであらう。そして、それを埋めつくしてゐる人數も、百人は出てゐないであらう。

私はまたかうも思ふ。それは、昔からこの地が一大歡樂境であつたといふことが、その凄慘さをして、しかく私を打つてくるのではあるまいか。例へば、乞食の子が乞食になるのとは違つて、一代の富貴榮華をきはめてゐた家の子が、菰をまとふて歩くのを見るのと同じやうに、一朝のうちに行はれるその變化のはげしさが、見る者をして泣かしめてくるのではあるまいか。

何にしても私には、この世において、生きながらみたこれらのことは、永くながく私の頭についてゐることだらう。わけても、吉原でみた死の池地獄のおそろしさは、私が果敢なくなつてからも、なほ私の胸をさらないだらう。私はいまもこれを書きながら、その池の廣狹さをおもひださうとして目をつぶると慘めさ、恐ろしさの底から湧きあがつてくるやうな惡臭が、またも鼻をつぶしてきたかと思ふと同時に、その惡臭のかげからあの醜惡そのもののやうな累累たる死體が、まざまざと私のこころへ職しかかつてきた。

瓢簞池の情景

私は左の目で、うへの五階をゆりおとされてしまつた十二階をみてゐた。そして、右の目では、はなしに聞いたことのある、壞れた鐵條網でも敷いたやうになつて燒けおちてゐる、足元の電線をみながら歩ひてきたのだ。すると、そこは六區にならうとする、入口のところにある瓢簞池のそばで、多數の人達が、黒山をきづひてゐるのだ。私はそれらの群集をみると、てつきりそこには、火にあてられた土左衛門がゐることだらうと思つた。さう思ふと、私の手は、私の首にまいてゐる手拭のはじを摑んで、それを鼻のうへへ持つて來た。

その中に私は、池のそばへ出てきた。そして私は、爪先ひあがるところを押へながら、群集の肩ごしに池のなかを見てみたのだ。すると、そこには、私の想像してゐた火にあてられた土左衛門らしい者の影も形もみえなくて、どうした風の吹きまはしか、あるのはみんな、金氣にそめられたやうになつてゐる腹をうへにして、白目を見開いたままに浮きあがつてゐる、鯉や鰻だつた。それが、幾百ゐたことだらう。なんでも、四尺に九尺ぐらゐの間は、置きならべたやうに、それらの死骸でもつて埋つてゐた。

私はそれを見ながら、何氣なく、それまで鼻のうへへ押しつ

けてゐた手拭を、すこしばかりだつたが透す途端に、もと〳〵熱さゆゑにあがつて、腐爛しかゝつてゐるその死骸から洩れてくる匂ひが、ちやうど、魚河岸の兄哥が身につけてゐる絆纏の匂ひに、胡椒をふりかけたやうなのが、つんと鼻をついてきた。で、私はあはてゝ、まだそれを固く押しつけながら、なほもそれらを見てゐると、これはどうしたといふのだらう。鰻と鯉との間を、一疋の鼈がおよいでゐるのだ。それが暫くすると、その鯉のしたをくゞつて、今度はそれと次の鯉とのあひだへ首を出すのだ。

私はそれを見てゐると、ふいと私のこゝろの中に、一個の氷塔殿所がたつてきた。かと思ふと、それが瞬間にして、内からでた火のために解けて殘らず水になつてしまつた。と思ふと今度はまた、そこへ一個の若者がたちあらはれてきて、それが池の周圍に群つてゐる者達のうち、一、二、三と數へて、ちやうど十人までを叩き殺すと、もろくも十一人めの手にかゝつて、そこへ打ちたふれてしまつた。かと思ふと、すぐとそれが蘇つてきて、また十人といふ者を叩き殺すと、その次の者の手にかゝつて、果敢なくなつてしまつた。それが、一分間のうちに、七十二回くりかへされるのを私が凝と膝に手をおいて見てゐるやうな氣持ちになつてきた。がやがてわれに返つて、池のなかを見てみると、依然として鼈は、鯉と鰻との死骸のあひだを縫つて、いう〳〵と泳ぎまはつてゐた。

それから、私はそこを離れて、左のはうへ、池について少しばかり歩いていつたのだ。すると、それまでに氣がつかなかつたが、死魚の群から一間ほど隔つたそこの自然石のうへゝおりたつた一人の娘が、いま洗つたのを拭いてゐるのであらう。淺黄地の手拭を顏へあてゝゐた。よく見ると、年のころは十五六であらう。素肌へ扇散らしの浴衣をつけて、裾をからげた下には、桃色友禪の腰卷が風に吹かれてゐた。それが、顏を拭きをはると、また手拭を池の水へいれて、輕くしぼつたかと思ふと、今度はそれを、珊瑚色した小さな耳へ持つていつた。

とそこへ、

「おい、見ろよ、柴茜のおかみや、竹葉の御亭が、齒をくひしばつてゐるのが、はつきりと水に映つてらなあ。」といふ聲が、そこの群集の中からしてくるのが、はつきりと私の耳についてきた。

大學圖書館を惜む

「圖書館が燒けましたか。」

私が同宿の者から、大學の圖書館が燒けおちてしまつたといふことを聞くと、すぐと大學へ驅けつけてみたのだ。そして、正門に突つたつてゐる守衛をつかまへて、かういつて聞いてみ

たのだ。――聲が、咽喉をかすれてでたのは、自分にも分つてゐた。

「ええ、とつくに燒けました。」

これは、守衞のあいさつなのだ。

「本はどうしました。」

「幾分はだしました。だが、大部分は燒けたやうです。」

私はそれを聞いた時には、本當に、わが國の片腕をもぎとられたのを知つたやうな氣持ちになつてきた。同時に、私の胸は、もうろうろのやうになつてきた。すると、私にはもう、そこの構内に立ちまよつてゐる人達も、また、氣違ひのやうになつて、電車通りを右往左往してゐる人達も、私の目から離れていつてしまつた。纔に私の目にはいつてきたのは、三丁目のさきに、燃えさかる火の手でもつて、炎炎と天をこがしてゐる火影ばかりだつた。そして、暫く見てゐるうちに、その火がまた、私のこころへ移つてきた。

私は思はず、拳をかためて振りあげてみたが相手が火だけに手のつけようがなかつた。それから、私はその拳を持つて、それを大學圖書館を管理してゐた者の額へ加へてやらうと思つた。だが私には、それには何人が當つてゐるのか、それさへも分つてゐなかつたから、これも暖簾に力押しをしてゐるもおなじ結果になつてきた。だから私は、その時はその振りあげた拳でもつて、さんさんと兩眼を浚してくる涙を押しぬぐふより外はなかつた。

なるほど、今度のことはみな天變地異のいたすところだから、圖書館といふ建物の燒けうせたことなども、それは仕方のないことかも知れない。だが同じ天災のためだとはいへ、その中に藏してゐた書籍までも、大部分吹けばとぶ灰にして退けたといふことは、どう考へても、この私には堪へられなかつた。

ここに藏してゐた書籍の中でも、ことに、わが國文學に關したもの、その中のうちでも、わが國の演劇に關したものは、みながみな、今後幾くら巨萬の富みをもつてしても、再び手にすることの出來ない種のばかりだつたといふことを考へると、私の身内をながれてゐる血が、立ちどころに逆になつてくるのだ。これも今になつてみると、飽くまで私一個の愚痴かも知れないけれども、私は、それがなるがままにして打捨つておけば、蠹魚の餌食になつてしまふ懼れがあり、一旦火をうけたが最後、それは風の前にもなほ堪へられない灰となつてしまふ憂ひのある書籍を、まるで流れる水ででもあるかのやうにして、それに對する適當な豫防法らしい豫防法さへも講じてゐなかつたらしいのが恨みなのだ。

私をしていはしめれば、已にかういふ恐れのあるものだけに、それを保護してゐる者は、すべからくこと未然のうちに、せめてはその内容だけなりと剞劂に附したうへで、廣くこれを頒布しておくべきものだつた。この方法にさへ依つておけば、よし今度のやうな災厄に座するやうなことがあつても、その書籍の持つてゐる精神だけは、石のやうになつて、永く私達の間に殘されたに相違ない。ところで事實はといへば、不斷から一切それらを門外不出にしてゐたばかりか、必要あつてこれを閲覽しようとする者の前にも、なほいたづらに煩瑣な手續のみを課して、はてはそれを手にすることさへも許さなかつたのだから、ただただ驚くのほかはない。

なんのことはないそれは彼等が、自己の所持してゐる巨萬の紙幣を、地中ふかく埋沒して、そのうへに座食してゐるも同樣だつたのだ。そして、氣になるところから、それを堀りだしてみると、そこにはそれらの紙幣のかはりとして、蠹魚の群居してゐるのを見たところから、悶絶してしまつたといふも同樣なのだ。

それを思ふと、今度のことは、寧ろかういつた無智蒙昧な徒を覺醒する一つの方法として、最も時宜に適したものだつたも知れない。とは思ふものの、それにしては、餘りにたつとい犧牲だつた。私は、かういふことは、幾くら繰りかへしたところで、もう返へらぬことだといふことは知つてゐるが、しかし、いつてみると、私達にとつては、それは命にも變へがたかつた多くの珍書奇籍をも、さうだ。それは猛火のためにではなく、無智蒙昧の徒の手にかかつて、收拾することも出來ない、一塊の灰にして退けたのかと思ふとたまらなくなつてくるのだ。

で、私は、かうした遣り場のない恨みをいだいて、ものの半時ばかりも、そこの宮前のいりくちのところに、ぼんやり立ちつくしてゐた。そして、目をあげてみると、三丁目さきを燒いてゐる火焔は、この時また、油をかけられたもののやうになつて、ひとしほ盛んにその火の手をあげてきた。ちやうどそれは私達の無智さ加減を、微力さ加減を嘲けるもののやうにして、ひとしほ盛んにその手をあげてきた。

池田大佐の名とともに

はな地震のきた時には、ちやうど私は、電話でもつて池田大佐とはなしをしてゐたのだ。やがて話もをはりちかくなつてからだつた。出しぬけに電話がきれてしまつた。同時に、私の體は、突風をうけた小船のやうになつてきた。あるひはこれを、逆にしたはうが、もつと事實にちかかつたかも知れない。つまり、私の體が、多勢の若者達の肩にかつがれてねり歩く神輿の

うへにとまつてゐる、あの鳳凰のしつぽでも見るやうになつてきたかと思ふと、それをきつかけにして、電話がきれてしまつたといつたふうに。

とにかく、凡べてが出しぬけに、さうなつてきた刹那には、私はこれといふ程のはつきりした感じは持てなかつた。唯そこにあつたのは、脳天からして胴中まで、みごとに打ちぬかれてゐる太くおうきな鐵棒を、いきなり前後左右にゆりうごかされてゐるのを、夢のなかで見詰めてゐるやうな氣持があつたのみだつた。ところへ、臺所のはうから一人の女中が、足取りなら顔色まで、まるで醉つぱらつた上戸のやうになつてそこへ出てきた。それを目にすると、私はいつしゆの衝動をおぼえた。その途端に私は、手にしてゐた受話器をなげだすと、もうわれを忘れて表へとびだしたのだ。

がしかし、私は外へでたものの、大地にたつともう私の足は、これもやはり、深酒に醉つたもどうやうになつてゐた。第一、腰が宙におよいでゐるやうになつてゐた。

私はその時、すぐ眼前の權現の境内と、私のたつてゐた道路とのさかひに、木柵のゆはえられてゐるのが目についたから、どうにかしてそこまで足をはこばうと思つたのだが、それがなんとしても思ひどほりにいかないのだ。だから私は、「素襖落」の幕ぎれにみる、自分の落した素襖をひろつて逃げてゆく大名をおつかける太郎冠者もどきの氣持ちになつてきた。やがて、なにか知ら私の指さきにふれる物があるから、はつと思つて見てみると、それでも私は、やうやうのことで、そこの木柵のところまで辿りついてゐるのだつた。

同時に私は、目をてんじて、電車通りのはうを見てみたのだ。すると、そこへ行く間の兩側に建つつらなつてゐる家家の屋根から、それこそ降るやうにして、無數の瓦がおちてゐるのだ。それは、熟練しきつた製本屋の職工が、平生の蘊蓄を傾倒して、書籍の頁をくつてゐるも同様だつた。それを見てゐると、私の目はひとりでにつぶされてきた。

それから私は、目を自分の手元へかへすと、今度はむきを變へて、それまでは背中にしてゐた自分の宿のはうを見てみたのだ。すると、そこの入りくちや茶の間になつてゐる建物をはじめ、隣りの家や、またその隣りの、これは二階だてになつてゐるそれらが、遊動圓木の動いてゐるのでも見るやうに、烈しくかたみに左右へと動搖してゐるのだ。それが私の目についてくると、私はまた夢中になつてしまつた。

で、いまとなつて考へてみると、私はそれからまた、目を電車通りのはうへ持つていたものらしい。何故かといふに、いま

の私の頭のなかは、そこいら一面、咫尺もべんぜぬまでに、赭土色でもつて封じこめられてゐるの狀が、膠でもつて貼りつけたやうになつてゐるからだ。思ふにその時はもう、瓦といふ瓦はおちつくしてしまつて、あとはその下積みになつてゐた土のみが、折から吹きおこつてきた風をうけて、空のはうへ叩きつけるやうに舞ひあがつてゐたところからして、私にもさうした印象があるのであらう。

から凝と目をつぶつて、ただ「一心」といふ鍬を手にして、「記憶」といふものを堀りかへしてみると、そこには、數へきれないほどの人達が、みな權現の境内をさして、馳せあつまつてくるの狀がうかびあがつてくる。それらの人達がみな、甘きにつく蟻のやうになつて、馳せあつまつてくるの狀が堀りだされてくる。さうだ。それがまた、みな舌をぬかれた者のやうになつて飛びだしてくるところなども、鳥や獸のやうではなくて、飽くまで、水のそばから逃げだす蟻のやうだつた。それが、「火事だ火事だ。大學が燒けてゐる。」と呼ぶ聲や、またそこへこれも蟻になつて出てきた、私のゐる宿の主人夫婦や、女中達と私が顏をあはした時には、人のことは知らないが、私にはそれらの人達の顏形は、遠くはなれてゐて、幾年振りかに見でもするやうに思はれた感じなどと一緒になつて堀りだされてくる。恐らくはこれらの印象は、私が土のなかへはいるまでは、池田大伍の名とともに、私のこころに燒きつけられてゐることだらう。

震水火の只中に

久米正雄

九月一日は朝から驟雨模樣だつたので、今日が恐らく鎌倉の、海水浴納めの土曜日だとは思ふものゝ、天氣は天氣だし、大半の友達は歸つた後だし、何だか海へも出る氣がしなかつたので、家で手紙を書いてゐると、突如として此の前代未聞の大地

震の、最初の搖れはやつて來た 上下動の傾向で、尻を持ち上げられるやうに感じたので、常もの地震とは少し違ふなとは思つたが、其儘鎭まるものと思つて、七八秒樣子を見てゐると、震動は益々激しくなつて、最初に襖が私の方へばた〳〵倒れ初めた。それで驚いて其襖の倒れた方向と筋交ひに、ぱつと庭へ飛び出した。椽側を出る時、足腰がふら〳〵して、後戻りをするやうな焦慮を覺へたが、吾乍ら素早く生垣と家との間を飛び拔けて、中庭の廣場へ出た。振動が初まつてから、凡そ一分とは經たなかつたらう。私が戸外へ出たのが、近所でも一番早かつた。だから、家は幸ひに潰れなかつたが、よし潰れたにしたところで、生命だけは助かつてゐたと思ふ。

私が飛出ると直ぐ、第二の激しい震動が來て、目前に立つてゐる鶴見の店の文化住宅が、二階の海鼠壁を剝落させつゝ傾いたと見る間に、赤い瓦を載せた屋根が、街路へ瓦落々々と崩れ落ちた。其下に女中と、買物に來てゐた老人とが入つて、女中は店臺の間に助かつて引出されたが 客は一擧に潰された。猶、後で火事跡を掘起して見ると、通行中の老婆が死んでゐたと云ふ。次いで、其店につながる母屋の住居が、餘波を食つて柱や戸をばら〳〵に紲らせながら、屋根を其中に落ち込ませた。見ると裏の平家も、裏の土藏の崩れたのを背負つて、すつかり倒されて了つてゐた。私はそれらの崩れるのを目前に見ながら、見てゐる中は何故か、まだそれほど大した地震とも思つてゐなかつたが、少し振動が止んで、やゝ冷靜に周圍を見廻した時初めて吃驚を覺へた。

それから私は直ぐ海嘯を恐れた。これはかうしてはゐられないと思つた。で、五分と經たない中に、凡てを放擲して、程遠からぬ長谷觀音の高い境内に駈けつけた。觀音は太柱が傾いてはゐるが、さすがどつしりと藥屋根を聳えさしてゐた。私は直ぐ海を見はらす境内の左手のテレースへ出た。

見ると、鎌倉灣内の潮は、いつもより二三町も沖まで、ずーつと一面に干上つてゐた。そして岩か海藻かを點々と黑く殘して、其てら〳〵と空を映した水渚のある干潟は、氣味惡く靜まり返つてゐた。それを見た時ほど、凄いやうな氣のした事はなかつた。どうしたつて、もう大海嘯が來て、鎌倉全土を洗ひ去るに違ひないと思つた。で、鐘をついて皆に知らせようと思つたが、鐘撞堂が倒壞してゐた。仕方なく、私たちは息を飲んで暫らく見てゐた。と、やがて、豫期したよりはずつと小さいが、土用波の二三層倍もあらうと見える波が、いつものやうに白く波頭を嚙んで、其干潟を滿たし初めた。それでも其波は、坂の下長谷由井ケ濱材木座一帶を襲ふて、海岸に添ふた家だけは完全

に浚つた。海月、大勝館などゝ言ふ、海添ひの海水浴旅館では、各々數人の客と共に潰されて出さない間に、其波にすつかり持つて行かれて、又滅茶々々に打ち上げられた。後に私たちが見に行つた時は、いろ〳〵な材木の堆積の上に、屋根だけが載つてゐた。稻瀬川口のあたりでは、海水が電車線路を越えて浸入した。近衛君の別莊なども、潰れた上に波に攫はれた。後で、三四時間後に線路を通つて見ると、何處の家のピアノか、どの家の材木とも見分けのつかぬ中に、黒塗りの腹を見せて横はつてゐた。そして線路の直ぐ北側に、矢張り家の跡とも見えぬ材木や座布の間から、若い女の人の腕が、身體の他の部分は見えずに、掌を半開きにしてあらはれてゐた。指には細い金の指輪に、小さいダイヤを嵌めてゐるのが、哀れを通り越して見られた。それを、難を遁れた老人夫婦が、爲す事もなく眺めてゐた。其人たちの娘か嫁からしい。私もどうする事も出來ないので、長谷の警察と消防を呼びに走つた。が、兩方ともまだ地震後三四時間後で、出拂つてゐなかつた。私は通りがゝりの若い男を呼び止めてたゞ知らすだけ知らしてやつた。それから二時間ばかり後に、矢張り其處を通つて見たら、もう取片付けてあつたので安心した。

海嘯では、一旦家と共に持つて行かれて、又打上げられた際に、運のいゝ人は却つて挾まれた材木の間から、助かつたものもあると云ふ話だつた。が、私の見た材木座の方のさう云ふ遭難者は、水中で材木や板の間に揉まれて、全身傷だらけだつた。

海嘯が來初めた時、私は長谷觀音の高みから、材木座の方の低地にある、或る知人の家が心配だつたので、急いで山を下りて其方へ赴いた。

長谷通りは、左側の家々が、通りへ向して倒れてゐて、所々屋根を越えたり、狹い軒端の倒れ屏を潜りぬけたりしなければならなかつた。通りがゝりに覗いてみると海濱ホテルはやゝ傾いた門柱の中に、傾いてはゐるが崩れ落ちないで、玄關前の松の間に、西洋人たちがうろ〳〵してゐた。中には日本ユカタのまゝ、山の方へ逃げて行く夫婦なぞもあつた。

山階宮妃殿下の御遭難を、一の鳥居側の宮邸に隣り住む小野君に會つて聞いたのも、其時、震後一時間と經たぬ中だつた。其時の話では、まだ大妃殿下は梁の下に居られるとの事だつた。が、私はまさかにお助けに入る事も出來ないので、其他材木座の知人の家へ行つて、其人々だけは無事なのを祝し合ひ、それから近所の倒潰家屋の中にまだ人が入つてゐるのを聞いて、救出を助力した後、一つぱし人を救けた氣分に昂奮して、水道路

を歸つて來ると、白い海軍將校服をキチンと身につけられ、黄黑色の圓い日除けの色目鏡をかけられた、由緒ありげな顔のお方が、矢張り是も黑眼鏡の海軍將校と、もう一兩人の伴を連れて、横須賀への海軍水道路を、緣つて歩いて來られるのに出會つた。私は屋根を掘つたり、子供を引出したりした後なので何だ、どんな海軍の偉い將校か知らぬが、悠長に視察振つてゐると、少し反感めいた眼で見送つたが、後で、直ぐそれが宮様と聞いた時は、尠なからず恐懼を感じた。視察的に、幾らか悠々と感じられる程に、歩いて居られたには相違ないが、それが妃殿下を今の先刻、梁の下に失はれた宮御自身として、其悲しみを黑眼鏡の下にお隱しになりながら、直ちに出で丶震災の情況を視察し、罹災民を慰問に歩かせらる丶御心を察すると、私が唐鍬を肩にしながら、其二三名の行列の眞ん中を、わざと突切つて通つた無禮を、何とお詫びしても足りないやうな氣がする。

人を救けたなぞと云つても、私はたゞ、屋根を少し剝いだのと、其穴から覗き込んで、注意めいた助言を、「あ、其梃桿の重みが足に懸つてゐる！」と云つた風に、中で救出に從事してゐる人々に、與へてゐたに過ぎなかつたが、それでも赤ん坊の上へ俯伏しになつて、胸の下に小供を庇つたまゝ背中を梁に壓されて、出られないでゐた若い母親が無事に助け出され、それから更に、もう一方の棟の下から、かすかに洩れる泣聲をたよりに、矢つ張り同じく屋根へ穴を掘つて、やうやく其穴の中から、三四才位になる女の兒を、穴の中から外に居る私の手へ、無事に受取つた時は、世にも嬉しい氣持だつた。其兒は、もう救ひ出された極度の緊張で、泣いてなぞはゐなかつたが、もう忘れたやうに輝いてゐる日光の中へ出されて、目をぱち〳〵させながら喘ぐやうに口を動かして、他人の私に抱きとられつゝ獅嚙みつきかゝつた。私は其の兒の白い洋服の胸が、眞つ赤に染まつてゐるので、何か傷でもしたのではないかと、急いで庭の隅の、母親が寢てゐる所まで連れて來ると、引剝ぐやうに胸をはだけて見たら、中には何の傷もなくて、赤いのは轉げた梅干壺の上へ倒れてゐたものと解つたが、笑ひも出來なかつた。彼らは、私が酌んで來た、地震の爲に土が落ちこんで、すつかり濁つて了つたらしい井戸水を、さも甘さうにごく〳〵と飲んで、あまたたび私に感謝した。

それから、小町の田中の所へ行つて見たら、田中の家も、平屋建てだつた爲か、地盤の爲か、それとも私と同じやうに、平素善根を積んでゐた酬ゐか、――そんな筈はないから、悪運盡きなかつた爲か、兎に角、硝子戸一枚毀したゞけで、家の傾き

さへ割合に少く、一同無事過ぎる程無事だつた。

　けれども、近所の廣津柳浪氏は、二階家だつたゝめに、直ぐ倒潰を食つて、出る間もなかつたが、幸ひ机か何かの爲に上から落ちた梁が支へられて、身を容れるだけの空隙があつたために、直ちに這ひ出たと云つて、同じく下敷にはなつたが、微傷もなく助かつた一家の人々と共に、田中の家の庭へ避難して來てゐた。其外田中の庭へは、近所の海軍將校の家族たちが、澤山避難してゐた。田中は長谷の僕の方へ出かけたとかで居なかつた。

　と、さうかうしてゐるところへ、田中が齒科醫の寺木君を連れて歸つて來た。寺木夫人――もとの衣川孔雀夫人が、赤ん坊を抱いて、怒つたやうな顏をして、眞つ先に庭木戸を入つて來たが、「久米さん。私、上の子を二人亡くしちやつたのよ。」と云つて、身體を悲痛撕するやうにしながら、涙をはら／＼と滾した。後から寺木君が、悲痛に打挫かれたやうに、のつそりと入つて來た。

「とう／＼二人見殺しにしちまつた。親として、實に濟まない事をした。――久米君。君たちはかういふ際に、係累がなくて幸福だよ。」

　私は言葉なかつた。それ迄は、自分たちに近く、そんなに悲慘事などはないやうに思つてゐたのに、初めて慘害が身に沁みた氣がした。

　聞くと、丁度お晝時だつたので、寺木君の子供たちは、臺所で石油焜爐にかけた甘い煮物の出來るのを待つてゐたところへ、ぐら／＼びしやつと來たらしい。いち早く飛び出た寺木君が、椽側まで出て赤ん坊を抱いたまゝ、俯伏せに身を以て庇つて突伏して了つた夫人を、――どの母親もが、同じやうな形で、赤ん坊の上へ身を伏せる。――やつと救ひ出した後、小供たちの入つてゐる臺所の屋根をめくつて、救け出さうとした時は、もう其處に居るのが解つてゐるのに、焜爐から出た火が渦を卷き初めてゐた。どうする事も出來なかつた。寺木君はたゞ、其火の中へ飛び込まうとする、狂氣のやうな夫人の帶をしつかと抑へたまゝ、傍觀してゐるきりなかつた。………

　大町の火は、三四ヶ所から上つた。そして私が田中の家から、小はん亭を見舞つて、八幡通りへ出た時は、もう、停車場側の家々を悉く甞め盡して、一面の焦土と火焔の中に、源氏山が茶色に霞んで見えた。天日は焦げて赤黄ろく、たゞ、北の空高く、腸のやうにもく／＼と盛り上つて、ちつとも動かない層雲が、氣味惡く半空を蔽ふてゐた。

　小町園を見舞つてゐると、長谷の二橋から火が出て、今長谷

通りは悉く灰燼に歸しつゝあると云ふ知らせを聞いた。三つ橋と云へば私の家の直ぐ前である。もう、私の家などは迚も駄目だと思つた。それに燃えて惜しいやうなものは、人から貰つた手紙の外には、かけ換へのないやうなものもないと思つたので、たゞもう殘骸を見る氣で、電車線路を歸つてみると、火は母屋の臺所まで來、裏の家をも燃え盡してゐるのに、私の家の間際まで來ながら、魔法の輪でも描いたやうに、其處でぴつたり止まつてゐた。文字通りに、全く火に隣りして、しかも焦げてもゐなかつた。けれども、火はまだ盛んだつたので、早速私は庭井戸を汲んで、水撒きポムプへ水を送るのを手傳ひ、更に又筒口を持つて臺所の火を鎭めた。私の家の荷物は、近所にゐた海水浴友達の黑田君が、吉田女史と共に運び出して呉れて、後には安蓄音器と、机しか殘つてゐなかつた。誰もが、そんな蓄音器などは顧みなかつた。私は其机の中なる手紙を懷中して了つたので、家が燒けたら、蓄音器をかけつ放しにしたまゝ、――其上には昨日懸けたまゝのダンスレコードがまだ載つたまゝだつた。――過去の享樂生活を灰にする意味で、燒いてやらうと思つてゐたが、幸ひ、そんな芝居氣を滿足させずに濟んだ。

　思へば、私の小さな借家は、全く、地震と海嘯と火事の眞ん中に在つて、その凡てから忘れられたやうに、取り殘されたのである。凡ての災害に隣りしてしかも全し！私一個に取つて云へば、全く今度の天災も、藝術家の體驗として、一つの幸福を齎らしたものとさへ云へない事はない。そんな事を云つては、關東に滿つる悲慘なる罹災者諸君に全く濟まないが、私は自分ながら今度の震害を受けた人々の中で、最も好運だつたものゝ一人、最も幸福だつたものゝ一人だと感ぜずに居られない。「免れて恥なきもの」の圖々しさを、人々よ、咎むる事勿れ。

（十八日、東京本郷の家にて。）

死體の匂ひ

田中貢太郎

大正十二年九月一日、天柱折け地維缺くとも云ふべき一大凶變が突如として起り、首都東京を中心に、横濱橫須賀の諸都市をはじめ、武相豆房總、數箇國の町村に跨つて、十萬不冥の死者を出した災變を面のあたり見せられて、何人か忘然自失しない者があるだらうか。

世俗の怖れる二百十日の前一日、二三日來の驟雨模樣の空がその朝になつて、南風氣(みなみけ)の險惡な空に變り、烈風强雨こもごも至つて、一頻荒れ狂ふてゐたが、今思ふとそれが何かの前兆でもあるかのやうに急にぱつたり歇んで、氣味悪い程に澄んだ紺碧の空が見え、庭の朝顏の花に眼の痛むやうな陽の光が燃えた。ちやうど簞笥の上に置いた古い枕時計は五分遲れの十一時五十分を指してゐた。

私は二階で客と話してゐた。私も客も煙草を點けたばかりのところであつた。黑みだつて吹き起つて來る旋風の音のやうな、それで地の底に喰ひ入つて行くやうな音がしたので、煙草を口元から除つてその物の音を究めやうとする間もなく、家がぐらぐらと搖れだし、疊は性のある物が飛出さうとでもするかのやうに、むくむくと持ちあがりだした。私は驚いてその疊の上をよろよろと歩いたが、その瞬間、妻と小供を二階へあげやうと思ひだした。で、そのまま下へ駈けおりた。

妻は玄關口へぺつたり坐つて、左の手で柱に捉まり、右の手で末の女の兒を抱き寄せるやうにしておろおろしてゐる傍に、八つになる女の兒は疊の上に兩手を遣ふやうに突いて泣いてゐた。上の二人の小供は暑中休暇に土佐へ行つてて未だ歸つてゐないので手足纏ひがすくなかつた。末の女の兒は赤いメリンスの單衣を著てゐた。私はいきなり末の兒に手をかけて、妻と二人で搔きあげるやうにして抱き、姉の兒を押しやり押しやり先に立てて二階へあがつた。

家はまだゆらゆらと搖れてゐた。妻ははづれかけた次の室との境の襖の引手に手をかけてそれに取り付かうとしたが、襖が

はづれて取り付けなかつた。が、その内に地の震ひは小さくなつて來た。私はその時客のゐないことに氣が注いたが、地震の小さくなつた間に、妻や小供を外へ出さなくてはならないと云ふ考への方へ氣を取られて、それ以上客のことを考へることができなかつた。その客は私のゐない間に屋根から飛んで右の足首をくじいてゐた。私は妻をうながして自分で末の兒を抱き、妻に姉の兒の手を曳かして、おりて玄關口へと行つたが、妻や小供を先に出して自分が後から出ないと危險があるやうな氣がしたので、妻に末の兒を負ぶはし、姉の兒の手を曳かして先へ出し、自分は後から出て行つた。

　私の家の門の出口の左角になつた古い木造の支那人の下宿は、隣の米屋や靴屋の住んでゐる一棟が潰れて抑されたために門の内へ倒れかかつてゐた。地の震へは後から後からとやつて來た。私は妻と小供をすぐ近くの寄宿舍の庭へと伴れて行つた。其所は奈良縣の寄宿舍であつた。私はそれから足に怪我をしてゐる客を負ぶつて伴れて來たが、後の激震が氣がかりであるから、地震の靜まるまで其所にゐることに定めて、家へ入つて行つて莚を持つて來た。附近の者も續續と避難して來た。私はまた煙草を買ひ蠟燭を買つて來た。酒屋へサイダーを取りに行つた時、潰れた家の屋根を破つてゐる者があるので、それに手を貸して瓦を剝いだ。その屋根の下からは若い女とその夫らしい頰髭の延びた黃ろな顏をした男とが出て來た。

　私はその一方で藤坂をあがつて、その近くに住んでゐる友人の家へと行つた。大塚行の電車の線路に沿うた兩側の家では、皆線路の上に避難してゐた。潰れ家は見えなかつたがどの家も屋根瓦がひどく落ちてゐた。友人の細君も避難者の中に交つて莚の上に坐り、洋傘を日覆にして、生れたばかりの嬰兒を抱いてゐた。

　大砲を擊つやうな音が時折聞えだした。火事だ火事だと云ふ聲が人人の口から漏れるようになつた。牛込の下宿から私の家の安否を氣使ふて來てくれた若い友達は、砲兵工廠が燒けてゐると云つた。私はその友達と一緒に電車通を傳通院前へと行つた。渦を捲いてゐる人波の中には、蒲團などを蓋の上にまで亂雜に積みあげた箱車を數人の男女で抑してゐる者、臺八車に簞笥や風呂敷包の類を積んでゐる者、湯卷と襦袢の肌に嬰兒を負ぶつて小さな小供の手を曳いてゐる者、衣類の入つた簞笥の抽出を肩にした者、シャツ一枚で金庫を提げた者、疊を擔いだ者、猫のやうな老婆を負ぶつた者、頭を血みどろにした若い男を橫抱きにした者、さうした人達が眼先が暗んでゐるやうに紛紛として步いてゐた。その人達は頭髮を見なければ兩性の區

別がつかなかつた。

砲兵工廠は火になつてゐた。春日町の方へと曲つて行く電車線路の曲り角から、その一部の建物の屋根の青い焔を立てて燃えてゐるのが見られた。私達は安藤坂をおりて行つた。砲兵工廠の火は江戸川縁にかけて立ち並んだ人家を包んで燃えてゐた。私達はその江戸川縁を左に折れて行つた。街路に沿うた方の家だけは地震に屋根瓦を震ひ落され、または椽を破られて傾きかけたままの姿を見せてゐた。小さな橋の袂に一臺のポンプがゐて、川の泥水にゴム管を浸してそれを注いでゐたが、すこしの効力があるとも思はれなかつた。

砲兵工廠の市兵衛河岸に寄つた方の三層の建物に新しく火がかかつてゐた。その火の中から爆彈の音のやうな音が續けさまに起つた。私達は甲武線の汽車の線路に這ひあがつた。神田方面から飯田町にかけて一めんの火の海となり、強い風がその焔を煽つて吹きつけてゐた。未だ火のかからない飯田町三丁目の電車停留場のあたりで、焔を浴びてごつちこつちする人人の容が人形のやうに小さく見えた。空も遠くの方も濛濛たる煙に翳はれて四邊は氣味惡く黄濁して見えた。いくらか遠退いて來たが地の震へは歇まなかつた。私は未だ何かしら大きな禍が來るやうな氣がして不安であつた。

東京全市三分の二を焦土と化した猛火の煙は、二つの大きな入道雲となつて天の一方にもくもくと立ち昇つてゐた。それは白い牛乳色をした氣味の惡い雲で、その下の方に鼠色の煙が渦を卷いてゐた。私はその雲を切支丹坂の樹木の上に見てゐた。その雲は延びたり縮んだりした。江戸川の方から入つて來る避難者の中には、をりをり振り返つてその雲を悲しさうな眼で見る者があつた。陽が落ちると雲は眞赤な火となつた。

地の震へは二時間おき位にやつて來た。私達は家内が持ち出して來た飯櫃の飯を暗い中で手探りに喫つて、その後で蒲團を取つて來て一家四人が枕を並べて寝た。火は警視廳を燒き、帝劇を燒き、日本橋、京橋、淺草を燒き、本所深川を一甜めにして、厭死者の上へ無數の燒死者を出したと云ふ恐ろしい噂がきれぎれに耳へ入つた。その火には××××がゐて××××じてゐると云ふ者もあつた。

翌日私は本郷の西片町へ行つて、其所の友人と一緒に本郷三丁目の方へと行つた。その三丁目の本郷座に寄つた方の角に一二軒の家を殘して、湯島天神のあたりから神田明神にかけて燒けてゐるのが煙雲を透して見えた。そこゝに立つてゐる燒け殘りの土藏の屋根などには、未だ火のあるのがあつてそれから

は煙を吹いてゐた。私達はそれから壹岐坂へおりる路と平行した右側の燒け殘つた路を行つて、順天堂のあたりから水道橋の手前まで一撫でにした火の跡を見て引返した。

私はその友人と眞砂町の電車停留場で別れて、そのまま電車通を歩いて春日町の停留場を通り、それから砲兵工廠に沿うて坂路をのぼつた。火に包まれてゐた砲兵工廠も此方の方は燒けなかつたと見えて無傷の建物が聳えてゐたが、煉瓦塀は爆破したやうに碎けて崩れてゐた。坂をあがり詰めて右に折れ曲つたところが砲工學校の塀であつた。瓦と土とで築いた水戸邸の遺物としての古い古い塀もばらばらに崩れてゐた。私はそれを見て水戸屋敷の紀念物もとうとう無くなつたなと思つて、ちよと惜しいやうな氣がした。數日して藤坂上の友人に聞くと、水戸邸の遺物として殘つてゐるのは、その塀と涵德殿と後樂園の入口にある二棟の土藏とであつたが、その涵德殿も土藏も潰れたとのことであつた。私は土塀の崩潰を惜しむとともに、藤田東湖のことをすぐ思ひ浮べた。色の黑い麤野な顔をした田舍武士は、安政乙卯の年十月二日の午後十時、彼の有名な安政の大地震に逢つて、母を救ひ出さうとして家の中へ入つたところで、家が潰れて壓死した。私は東湖のことから新井白石を聯想した。折たく柴の記によると、白石は元祿癸未の年十一月二十二日の夜大地震に逢つたので藩邸へ伺候した。白石はその頃湯島に住んでゐたが家のうしろは高い崖になつてゐた。その時の地震は二十九日になつても歇まなかつた。白石の家はその二十九日の夜になつて火に逢つた。白石は庭に坑を鑿つて書籍を入れ、疊を六七帖置いて、その上に土を厚くかけてあつた。

安政見聞誌三冊を書いた假名垣魯文のことも浮んで來た。魯文は湯島の妻戀下に住んでゐた。魯文の住んでゐた家は、二人の書肆が醵金して買つてくれたもので、間口九尺二間奧行二間半、表の室の三疊敷は疊があつたけれども、裏の方は根太板のままでそれに薄縁が處まばらに敷いてあつた。ただその陋屋に立派な物は表の格子戸と二階の物置へあがる大階子とであつた。その格子戸は葭町の藝妓の拂ふたものを二分で買つたもので、階子はある料理屋の古であつた。その魯文は、前年旗下の酒井某と云ふ者の妾の妹を妻にしてゐた。魯文のその時分の收入は引札の作料一枚一朱、切付本五十丁の潤筆料二分と云ふことになつてゐた。そして、切付本の作者は魯文と云ふことになつてゐて收入もかなりあつたが、あればあるに從つて、散じてゐたので、家は何時も苦しかつた。安政二年十月二日の夜は、通り二丁目の糸屋と云ふ書肆に頼まれた切付本の草稿がやつとできあがつたので、彼はそれ[illegible]

の潤筆料をもらつて來て、一分を地代の滯りに拂ひ、一分で米を買つて來て井戸端で磨いでゐた。啓文は汚れ蒲團にくるまつて本を讀んでゐたが、突然大地震が起つて、彼の家不相應な大階子が壁土と共にその上に落ちて來た。妻はよたよたと走つて來て階子を取り除けたが、蒲團と壁土のために體にすこしも怪我をしてゐなかつた。ここで夫婦は戸外へ出て一夜を明かしたところで、際物師の書肆が來て、地震の趣向で何か一枚摺をこしらへてくれと云つた。啓文は露店へ立つたままで筆を執つて、『鯰の老松』と云ふ戯文と下畫を書き、ちやうど來合はした狂齋と云ふ畫工に下畫のままの畫を描かして渡したところが、これが非常に賣れて、他の書肆からも續續注文が來たので、五六日の間に四五十枚の錦繪の草稿を書いたのであつた。

私は一の日から街路の警備に立たされた。地震に乘じて××××××××××××××××××竹早町の小學校を中心にして××を企ててゐるから警戒せよと云ふような貼紙をする者があつたので、各戸から××××、×××××××など思ひ思ひの得物を持ちだして附近を警戒することになつた。三日には戒嚴令。

私は××の柄を切つて短くしたのを持つてゐた。それは×のところへ新聞を卷いてあつた。本にその××を持つて藤坂の口に立つたり、切支丹坂の下に立つたりした。さうして夜も警備に立つて、六日の朝になつたところで、東海道の汽車が海中に墜落して三百の死傷者があつたと云ふことがその朝の新聞に出てゐた。場所を見ると根府川としてあつた。私はすこし氣になることがあるので、東京驛へ行つてそれを確め、心配してゐることが杞憂に終るやうなら、本所の方へ行つて被服廠跡を見やうと思つて、深川から避難して來てゐる友人に警備の代理を頼んでおいて出かけた。

本郷の方にちよと用事があつたので、それへ廻はり道をして大學の正門前へ出、それから電車通を行つて、二日の日に一度見てゐる本郷の燒跡の灰を見ながら、若竹は前を通つて順天堂の手前へ出た。曾ては皇城を下瞰すると云つて一部の愛國者を憤激さしたニコライの高い塔も燒けて、頂上が無くなつてゐた。それからお茶の水橋を渡らうとしたが、橋桁から未だ煙が出てゐて危險な上に、兵士が橋の袂に針金を張つて行通を遮斷してゐるので、昌平橋の方へと行つた。

路の左側の女子高等師範の建物も、聖堂も、教育博物館の建物も燒けてゐた。教育博物館の前になつた河縁の鳥居の燒跡には、未だ石油のカンらしい物が燃えてゐた。

昌平橋を渡つて須田町へと行つた。其所には萬世橋驛と高架線の線路と、街頭に建つた銅像とが殘つてゐるのみであつた他は燒け殘りの土藏、四壁ばかり殘つた石造の建物、火の入つた金庫、鐵骨、流れ藻のやうに手足に絡まる電線、石、瓦、煉瓦、灰、消え殘りの火、煙。私は荒漠たる燒跡を通つて本石町の方へ行き、其所から新常磐橋を渡つて東京驛へと行つた。火災を免がれた東京驛附近の大建築物が、地震の損害を受けてゐても毅然として立つてゐるのが非常に賴もしさうに見られた。

東京驛の構内にも避難者が入つてゐた。私は驛長室へ行つて汽車のことをしらべた。汽車の墜落は事實であつたが、私の心配は杞憂に終つた。私ははじめの豫定通り本所に行くことにして、呉服橋を渡り、それから日本橋の街路を橫切つて、白木屋の燒跡に沿うて行きかけたが、本石町と馬喰町とに燒跡を弔ふてやりたい書肆のあることを思ひだしたので、引き返し、欄干の粧飾の燒けて鎔けかけた日本橋を渡つて、外形ばかり殘つた、三越の建物を見ながら、また本石町の四辻へと行つて、其所から右に折れた。

風が火のほとぼりと灰とを吹いた。それに空には暑い陽が燃えてゐた。私は東京驛前で詰めかへて來たサイダーのビンの水を飲みながら步いた。

左側の本石町の書肆の燒跡はすぐ見付かつた。其所にも避難してゐる場所を書いた札が建てゝあつた。今度は右側になつた馬喰町三丁目の書肆の跡を見出さうと思ひ思ひ步いた。燒跡で鍬を持つて掘つてゐたり、トタンの半燒けになつたのを持つて來て、假小屋をこしらへてゐたりする者が、多くなつた。

小さな川があつて橋がかゝり、銃劍の兵士が數人立つてゐた私は見るともなしに橋の左側から水の上を見た。蒲團や藁莚などの一めんに浮んだ中に人の死體が見えた。それはシヤツ一枚の俯向きになつた男で、兩肱を左右へ張つて拳をこしらへ、それで兩足の膝のあたりに力を入れてゐるやうに足先をあげてゐたが、獺か猫かの死んでゐるやうであつた。死體は五六間下手の方にも未だ一つ見えた。それは土人形のやうな感じのする死體で仰向けになつて浮いてゐた。私は二人とも人間のやうな氣がしなかつた。

橋の左右の欄干に添ふてたくさんの鐵棒や、一方を槍のやうに削つた竹などが置いてあつた。一人の若い男が何か云つてその中から竹杖を拾つて手にした。取 てかまはなければ自分も一本もらはうと思つて、鐵棒を取りあげたところで、銃劍の兵士が來て、鐵棒を取つてはいけないと云つて叱つた。私はすぐその鐵棒が通行人の手から沒收せられた物だと云ふことを知つた。

私は獨りで苦笑しながら黒竹の切れつぱしに換へて橋を越した。

それは淺草橋であつたが周圍の目標が無くなつてゐるので判らなかつた。私は未だ馬喰町三丁目は來ないか來ないかと思つて行つてゐた。大きな眞黒い煙突のある建物が眼に注いた。私ははじめてそれが藏前の專賣局だと云ふことを知つた。そこで私は馬喰町の方は日を變へることに定めたが、それでも厩橋が渡れないことを聞いてゐるので、仕方なしにまた淺草橋の方へ歸つて行つて、其所から兩國橋へと行つた。

二三人の兵士が其所にもゐて通行人を監視してゐた。私は中央の車道を通りながら神田川の口の手前になつた岸の方に眼をやつた。退潮の赤濁のやや減つた水際に二三の死體らしい物が漂ふてゐた。私は足を止めて注意した。そのあたりの頭を出した捨石のごろ〳〵した所には、戸板や衣類のやうな物がごたごたとかゝつてそれが干あがつてゐた。その流れ物の中にも仰向きになつて兩足を水の中にした死骸があつて、それは力士のやうにぶくぶくと膨れあがつてゐた。二日三日の頃にはその兩國橋をはじめ厩橋吾妻橋の橋杭に、死體が一ぱいになつてゐたと云ふことを聞いてゐたので、私はさほどに驚かなかつた。

國技館の外形は巍然として兩國の空を壓してゐて、火災に逢つたとは思はれないほどであつた。私は橋を渡つて電車の線路を行かうとしたが、橋の袂から河岸の方へ行く人もあるので、その方から自轉車を押して來た店員のやうな若い男に、被服廠跡への路を聞いてみた。若い男は何方から行つても好いと云つた。私は河岸の方へ曲つて行つた。河岸には假小屋を並べてたくさんの者が避難してゐた。

右の方には兩國の汽車の線路が燒跡の灰の中に浮いて連つてゐた。それは鐵骨かなんぞのやうに焦げて黒くなつてゐた。河縁に電氣の機具でも製造してゐると思はれるやうな一廓をつくつた建物が不思議に燒け殘つてゐた。それと向きあつて路の右側に石の門と土塀の一部が殘り、街路に面して二三本の半燒けになつた鈴懸の樹のある所があつて、その門の敷石の上に石の手と頭に繃帶をしたシャツに腹掛けの運漕屋の親方らしい男が腰をおろしてゐた。私も暑くて苦しいので其所ですこし休むつもりで、その門口の石橋の縁になつた石の上に腰をおろした。私はビンの水を飲んだ後で、煙草を點けて喫みながら被服廠のことを聞いた。親方らしい男は、其所からすぐですが、見ないが好いんですよと云つた。

もう十二時に近かつた。私は親方に別れて歩いた。燒け殘りの建物の端になつた所に小さな掘割の水があつて、橋がかかり、

その袂に交番があつた。見るとその交番の手前になつた建物の前に人がたくさん立つてゐた。其所には火事の怪我人であらう、破れた衣類を著た小供や女が手と云はず足と云はず體中を繃帶して莚の上にごろごろしてゐた。兩足と頭に繃帶した五つ位の女の兒が足を投げだして坐り、片手に小さな茶碗を差し出してゐるのに、半纏を著た男が水筒の水を注いでやつてゐた。私は呼吸づまるやうな感じがした。

路の右側には天幕を張つて警官が出入してゐた。私は橋を渡つて行つた。戰前の專賣局の煙突がすぐ前岸に見えた。右側には大きな邸宅跡の石垣の崩れがあつた。石垣の內は大きな泉水になつて、まはりの樹木は燒けたり折れたりしてゐた。その邸宅跡をすぎると兵士の一人が路ぶちに立つてゐた。私は被服廠はその奧らしいと思つたので、兵士の方へは行かずに手前から燒跡を切れて行つて、兵士のゐる方から來てゐる小路へと出た。五六人の男が奧の方から出て來た。もう脂肪臭いいやな匂がして來た。左側の柱の燃え殘りの傍に黑く焦げた一つの死體があつた。それは肱から先と膝から先の無い猿とも人とも判らなくなつたもので、××××××××××××のあたりであつた。黑焦げ死體はその二三間先にもあつた。私は氣味は惡かつたが、それに對して別にいたはしいと云ふやうな感情は起らなかつた。

燒け殘りの建物がその先にあつて三人ばかり詰襟の服を著た者がゐた。その傍にひと所疊一枚敷位の所に火を燃やしてゐた。それは上にトタンを著せ下に薪木になる柱の折れのやうな物を置いて何か燒いてゐるらしかつた。建物は路の角に入口を向けてゐた。その入口の庇の所に相生警察署巡査合宿所とした文字があつた。その先は廣つ場になつて向ふの方にたくさんの人が動いてゐた。こつちの合宿所の隣の廣つ場の縁になつた所には一筋の繩を張つて一人の兵士が張番してゐた。私は氣が注いて繩の行つてるあたりの地面に眼をやつた。黑焦げになつた死體があつちこつちに散かつてゐた。私はいよいよこれが被服廠跡だと思つて廣つ場の中の方へと眼をやつた。さうして私は眼先がくらくらするやうに思つた。廣つ場の中は一めんの死體でちやうど沖から歸つて來た漁師が思ひ思ひに海岸へ魚の盛りをこしらへて、仲買人の來るのを待つてゐる時のやうに、人の盛りをこしらへてあつた。それは二三十人位に見える所もあれば、百人位に見えるやうな所もあつた。それは××××××××××死んでゐたのを遺族に判り安くするためにこしらへたものであつた。遠くの方で死者を弔ふ讀經の聲がしてゐた。

五六人の者が兵士の傍へ行つて何か交渉してゐた。私はすぐ

死者を探してゐる者でなければ中へ入れないと思つたので、田舍の關係のある新聞社の名を名刺に肩書して兵士の所へ行つた。兵士はすぐ私の入ることを承知した。私は右の手で手拭を持つてそれで口と鼻とを掩ふて、左斜に廣つ場を突き切るつもりで歩いた。私は一つ一つ死人を見てゐては氣持が惡くなつて行かれないと思つたので、一箇所に眼を留めずにして進んだ。溺死人のやうに脹れあがつた者、××××××××××××××××××、××××××××××××××、××××××××××××××、×××××××××××××××、さうした死體が二町四方もあると思はれる所を掩ふて見えた。小供の死體もたくさん交つてゐた。女の死體の半焦げになつた傍に小さな一團の消炭のやうな物を置いてある所があつた。私はそれは女の負ぶつてゐた小供の死體であると思つた。

風は正面から吹いてゐた。すこしでも手拭の覆ひに隙ができると恐ろしい臭氣が鼻を刺した。私はもう斜に突き切るのが厭になつたので、右の方の死骸の少ない方に反れ反れして走つた。

鐵骨の建物があつてその前にも二三人の人がゐて火を燒いてゐた。私はその火が身寄の者の死骸を燒いてゐる火だと云ふことを知つた。その中には女も一人交つてゐた。その人達もそれぞれ鼻にハンケチをやつてゐた。私はその傍を通つて、左に建物の間を潜つて行つた。その建物を川はづれると燒け殘りの塀があつて、外は電車通になつてゐた。

私はその電車通を歩きかけてから再び驚かされた。その被服廠跡と電車通とを隔てた溝の中は、幾百幾千とも判らない目刺鰯の束を燒いたやうになつた黑焦の死體で埋まつてゐた。私はなるほどこの被服廠跡の燒死者が三萬餘と云ふのも誇大ではないと思つた。その溝の上になつた被服廠跡にはまだ動かさない死體の丘ができてゐて、それを人夫達がおろして外へ運んでゐる傍に身寄の者を尋ねてゐるらしい人達が散ばつて死體をあつちこつちと覗いてゐた。

私はかへりに吾妻橋の袂から偕足船で兵士に渡してもらつて淺草公園へと廻はつた。公園では淺草寺と觀音堂とが殘つてゐた。其觀音堂は銀杏の綠葉に取りまかれて涼しい風を宿してゐた。花屋敷の燒跡には一疋の猿が金網の中にきよとんとしてをり、十二階は地震のために上の三階が墮ちて九階になつてゐた。

私は公園の山のベンチに腰をかけて、上野の山を眼界にして左右にひろびろと廣がつた白い燒跡を見ながら、花屋敷の前で買つて來た梨の實を嚙つた。鼻の何所かに未だ死體の厭な匂が殘つてゐるやうな氣がした。

災後雜感

菊池寛

震災は、結果に於て、一の社會革命だつた。財産や位置や傳統が、滅茶苦茶になり實力本位の世の中になつた。眞に働き得るもの丶世の中になつた。それは、一時的であり部分的であるけれども、震災の恐ろしい結果の中では只一の好ましい効果である。

爲政者も民衆も、この教訓を忘れなかつたら、來る筈であつた社會革命の慘害を避け得ることが、或は出來るかも知れないと思ふ。

×

我々文藝家に取つて、第一の打撃は、文藝と云ふことが、生死存亡の境に於ては、骨董書畫などと同じやうに、無用の贅澤品であることを、マザ／＼と知つたことである。かねて、さうであることは、知つてゐたものゝ、それを、マザ／＼と見せられたのは、悲しいことだつた。

×

今度の震災では、人生に於て何が一番必要であるかと云ふことが、今更ながら分つた。生死の境に於ては、たゞ寢食の外必要のものはない。食ふことゝ寢ることだ。佐々木茂索、戯れて曰く、「クーネル」派の文學を興さんと。震後四五日、我々は喰ふことゝ寢ることの外は、何も考へなかつた。「パンのみにて生くるものに非ず」などは、無事の日の贅澤だ。

凡ての商賈の中でも、人生に第一義に必要な物丈が殘つた。食物の店丈である。呉服屋や下駄屋でさへ、容易に店を開かなかつた。美術小間物屋や、寫眞屋や骨董屋やなどは、當分破滅の外はないだらう。自分の家の近所の樂器店では、味噌を賣つてゐた。藝術の悲哀である。

×

むろん、かうした寢食丈の人生が、人生の凡てではないだらう。が、しかしそれはたしかに人生の究極の相である。究極の人生に藝術が、無用の長物であると云ふことは、我々に取つて

は、可なり不愉快な眞實である。我々の仕事に對して信念を失つたことは、第一の被害である。

×

私は、曾て自分が勞働することを考へて見た。私のやうな身體では、とても筋肉勞働は出來ない。理髮のやうな仕事なら出來ると思つた。そして、理髮と云ふ職業は、如何なる世の中が來ても、要求される仕事だと思つてゐた。震災後、床屋が第一に店を開いたのを見て、私は私の先見が當つたのを知つて微笑した。

×

が、とにかくにも、自分の食ふ丈のものは、自分で作ると云ふことが、一番大切な仕事であると云ふことが、よく分つた。自分の食ふ物を自分で作るものは、一番强い人間だと思つた。そんな意味で、人生に於て一番よい、一番强い仕事は百姓だ。私は今更ながら、武者小路氏の生活を思はずには居られない。

×

今度の震災に依つて、文藝が衰へることは、間違ないだらう。我々が、文藝に對する自信を失くしたのも、一の原因となるだらう。その上、文藝に對する需要が激減するだらう。震災後、書店は長く店を閉してゐた。印刷能力の減少も、その大なる原因だ。雜誌の減少も、その一つだ。景に於ける文藝の黄金時代は去つたと云つてもいゝだらう。

×

小說は、まだいゝ、筆と原稿紙とさへあれば、どんないゝものでも書かれないと云ふ譯はない。もつと、悲慘なのは、戲曲である。劇場なくして戲曲をかくと云ふことは、どんなに創作本能の强い人に取つても、張り合のない仕事に違ない。折角勃興し來つた日本の劇界も、茲四五年の頓挫は免れまい。

×

震災に依つて、作家の主觀が深められ、その爲に文藝が深刻になると云ふ人がある。或は然らん。然し、それは作家本位の觀察である。我々は、いゝ加減なことを書いては居られないと云ふ氣がする。然し、それは作家側の考である。需要者側の要求する文藝はさうではないだらう。きつと、娛樂本位の通俗的な文藝が流行するだらう。讀者は深刻な現實を逃れんとして娛樂本位的な文藝に走しるだらうと思ふ。そんな意味でも、文藝の衰頹は來る。

×

文藝界の衰退が來ても、我々の如きは、年貢の收め時だと思つて、甘んじて田園に去るが、氣の毒なのは新進作家である。

プロレタリヤ作家もブルジョア作家もあつたものでない。隱忍雌伏して實力を養ひ、新しき機運到來を待つ外はないと思ふ。

×

私なんかも、地震の被害は極めて輕かつた。搖れ始めると忽ち庭に飛び降りてゐた。たゞ、最初の地震の稍落着くのを待つて、日本橋の身寄の家を見舞つた。その歸途、萬世橋に出ようと思つて進むと、黑煙が、濛々として、掩ひかゝつてゐる。これは、駄目だと思つて引返すと、三越の裏手が燒けてゐる。北方は、神田が燒けてゐる。たゞ神田と、丸の内との煙の間に、わづかに青空が見える。私は、其處を目指して進んだ。もう、道路は避難者と荷車とで、雜沓してゐる。靑年會館と神田橋との間に出て見ると、神田橋の向ふ側が燒けてゐる、私は辛うじて神田橋と一つ橋の間の河岸に出た。避難者が、涂端に荷物を積んでゐる上に、無數の荷馬車や荷車が通つてゐる爲に、私は二三度動けなくなつた。火の子が、頭の上に振りかゝつてゐる。簞笥や、蒲團の間に居る子供達は、泣き叫んでゐる。辛うじて車の間をすりぬけて、一つ橋を渡つたときに、初て蘇生の思をした。翌日、神田橋と一つ橋の間に、死屍が充滿してゐると云ふ話を聞いて、私は慄然とした。もう、二三十分遲ければ、私も煙に捲かれてゐたと思ふ。從つて、私には燒死した人の場合がよく分る。

まだ大丈夫、まだ大丈夫と思つてゐる裡に、煙に捲かれて死んだ人が澤山あるだらうと思ふ。そんな意味で、私も生死の境に一歩丈踏み入れて居たと思ふ。

×

たゞ意外だつたことは一日の避難者が、みんな元氣であつたことだ。意氣が沮喪して居なかつた。思ふに、火事を避けてゐる人々にも、地震から來る死を免かれたと云ふ欣びがあつたからだと思ふ。それと同時に、地震を免れて、安心した油斷から燒き殺された人が、大部分だと思ふ。

×

安政の地震や、明暦の大火を物の本で、讀んで、その酸鼻の有樣に、百年の後尙面を背けずに居られなかつたが、現代にそれ以上の悲慘事を見ようとは、思ひも及ばなかつた。

明暦の大火の時、淺草御門が、閉されたゝめ幾千人の人々が折重つて燒失したと云ふ記事を讀んだが、被服廠の慘狀の如きはそれ以上である。が、人間は强い、如何なる現實にも堪へ得るのである。

×

××を持つて、合言葉を使ふなどと云ふことは、大正の世にあるまじき事と思つてゐたが、震災後四五日の間は、私も××を手にして、合言葉を使つて、警戒に當つた。その合言葉が、「駒」と云へば「三」と答へるのである。私の家の近所にある「駒込三業組合」の「駒」と「三」とである。藝者屋と待合と料理屋の「三業組合」が合言葉を作るなど、恐らくは空前絶後の事であらう。

×

かうした災害に當つて一番氣樂なのは、獨り者である。私の知つた人で、下宿を燒き出されながら、毎日〳〵燒跡見物に飛び廻つてゐる人が、二三人もゐた。係累の多い人々ほど、かうした場合に苦しい。出家の第一歩が、恩愛の絆を、絕つことに在るのも、尤もな事である。

×

この一項は、廣告である。私の經營してゐた「文藝春秋」も。九月號製本中に悉く燒けてしまつた。十一月に再刊することになつたから、それまで待つてほしい。右「文藝春秋」の讀者諸君に本誌を通じて告げて置く。

×

私も、二日の夜池の端まで燒けて來たとき、飛んで來る灰と湖のやうに駒込橋方面へ逃げてゆく避難民に脅びやかされ、到頭家を捨てゝ岩崎の解放地まで逃げて一夜を明した。For life のために逃げると云ふことは、イヤなことである。殊に子供とか老人などが連れだと堪らない。生涯の中に、どうかしてこんな目に二度と逢ひたくないと思つてゐる。

大災記

水野廣德

大正十二年九月一日は我が東京市と云ふよりも寧ろ我が帝國に取りて恐らく開闢以來未曾有の最大國難日であつた。當日午前

十一時五十八分、帝都二百五十萬の住民は半日の勤勞を終へて將に晝飯の卓に就かんとする時、忽然として起りし激烈なる大地震と尋で發せし全市數十個處の大火災とは、平安殷盛の都をば倏忽として一瞬の間に阿鼻叫喚焦熱の地獄と化せしめた。巨商廛を連ねて飾窓の美を競ひたる銀座通りも、高樓空を摩して繁榮を誇りたる日本橋通りも、悉く燒け失せて一屋隻家の完存するものさへなく、唯燒け崩れたる殘壁破橋が蕭條として赤き燒け瓦の原に峙てるのみである。流行の魁として滿都の子女を磁鐵の如く吸ひ寄せたる三越ビルディングも燒け盡して、外壁のみ伽藍堂の如く哀れに淋しく立つて居る。白木屋は家諸共燒け落ちて鐵骨のみ飴の如く撚れ倒れて居る。晝夜歡樂の巷として殷賑帝都に冠たりし淺草六區は全滅して殘跡を尋ねる由さへもなく、十二階は半ばより潰れて鐵骨醜く垂れて居る。金融取引の中心たりし兜町蠣殼町も全燒して剝げ壞れたる金庫の墓のみぞ、有りし昔の活氣を物淋しく語つて居る。名に似合はぬ鎧橋脆くも燒け落ちて、坂本公園の樹木立ながら悉く燒け落ちたるも哀れである。愛宕の山は丸燒となり頂上の塔さへも根本より燒け碎けて、入り殘る月の風景もなくなつた。新橋日本橋赤坂等に巣食ひたる幾千の嬌艶今何處にかある、翠帳紅閨の甘夢覺めて浴衣一枚、玄米の施與に生くるも笑止の至りである。

高輪御殿も燒けた。帝國大學も燒けた。商科大學も燒けた。海軍大學校も燒けた。高等工業、商船學校、中央、明治、日本、專修、國學院等の私立大學も皆燒けた。砲兵工廠も燒けた。被服廠も燒けた。海軍造兵廠も燒けた。警視廳も燒けた。帝國劇場も燒けた。歌舞伎、有樂、明治、新富、市村、本郷の諸劇場も燒けた。新橋、上野、兩國の三大停車場も燒けた。吉原、洲崎の二大遊廓も燒けた。朝日、時事、讀賣、國民、やまと、中央、萬朝、二六、每夕、中外商業等の新聞社も燒けた。日本銀行を始め三井、村井、東海、安田、川崎、第一、第三、第百等の大銀行も悉く燒けた。內務、文部、大藏、遞信、農商務の諸省も燒けた。米、佛、蘭の大公使館も燒けた。自分の知人の家も尠からず燒けた。其他銀行約四十、中等學校以上四十餘、小學校百三十、警察署二十、日比谷大神宮、東西兩本願寺を始め神社佛閣約八十、病院約六十と、官公署、大會社、大工場、大商店、貴族富豪の大邸宅等の煙と消え灰と化したるもの數限りもない。帝都の誇りとして丸の內に宏壯を誇りたる新築の丸ビルは龜裂を生じ、郵船ビルは大破し、東京會館は腰を曲げて傾き、落成間際の八層樓內外ビルデングは上から下までペチヤンコに押し潰された。此處で自分の友人K氏は壓死した。

○

北は小石川の砲兵工廠を起點とし、九段坂下を經て宮城の外濠に沿ひ、日比谷を過ぎて赤坂見付に迂回し、更に愛宕山芝公園を掠めて芝浦埋立地に到る劃線以東、本所深川淺草の東端に到る迄の間、僅に丸の内の一角を殘す外二千六百餘町歩の大地域、見渡す限り目も遙かなる唯一面の燒野の原、時に眼を遮きるものは屋根落ち壁壞れたる石造摩天樓の殘骸のみである。滿目荒涼として殆んど生色を見ず、秋草ならぬ燒瓦の武藏野の原に還へりたる觀がある。石は燒けて碎け、鐵は熔けて捻れ、木は燃へて白き灰となり、廣漠たる燒跡一本の燒つ木を殘さない。以て火勢の如何に強烈なりしかを窺ふことが出來る。

道路と空地と宅地との差別なく、赤く燒けた瓦、黑く焦げた石は累々として小山を築き、餘燼數日尚ほ未だ消へず、辛ふじて燒け殘りたる土藏より不意に猛煙を吐き出すものもある。人肉の焦げる異臭は灰交ぢりの風に送られて何處よりともなく鼻を打つ。到る處に乘り捨てられたる電車自働車は、木部は燒けて曲がりくねりたる車臺のみが物哀れに殘つて居る。林の如く立ちたる電柱は悉く燒け失せて、空を掩ひし數百條の電線は麻の亂れたるが如く縺れからんで地上に這ひまつはつて居る。

初秋の烈日は赫々として寸蔭なき燒野を照射し、黃煙風に舞ふて息さへ苦しい。斯かる間を家を失ひ骨肉と離れたる幾十萬の罹災者が、汚衣垢面、風呂敷包、つを背負ふて疲れた足を引摺りながら、親を尋ね子を捜しつゝ當もなく燒野を彷ふて居る。或は餘熱尚ほ去らぬ我が家の燒跡をほぢくつて燒け殘りたる家財を捜がし、僅に一個の茶碗を拾ひ得て歸へるもある。或は一飯の施米に與からんが爲め三丁の列を作つて炎天に順番を待つものもある。手拭被つた妙齡花の如き婦人もあれば制服姿の學生もある。生きんが爲めには恥や外聞は贅澤物である。革命前後の露西亞の狀況も斯くやと思ひ偲ばれた。

中にも悲慘なるは慘死者の遺骸である。災後十日を過ぐるも、半ば燒け半は糜爛したる幾千の死屍は薪の如く各所に積み重ねられてある。着衣は燒け顏面は潰れて、何人の親か、何人の妻か、分ち知る由もない。生前の老若貴賤醜美も今は無差別平等、膨れ爛れて臭き醜き一個の肉塊に過ぎない。河川溝渠には幾百と數知れぬ水死者の屍が死魚の如く潮の干滿に連れて濁水の中に上下浮動して居る。××××××××××、××××××××、××××××××××××××、×、×××××××、××××、××××××××××××××××××××××××××××××。殊に仰浮せる婦人の屍體の如きは慘と醜と正視するに忍びない。如何なる激戰の跡も之に勝したる慘狀はあるまい。當

物の靈長と誇る人間の死も此に至れば泥底に踏み殺されたる蟻ほどにも顧みられない。陸には人間を燒く臭、水には人間の腐る臭、之が帝都の眞ん中である。

悲哀、悽愴、慘憺、荒寥、など有ゆる形容詞を連ねるも到底此の實景を表現寫描することは出來ない。今更ながら文字の意味の貧弱を感ずる。如何なる誇張も、如何なるホラも、恐らく事實の半をだに言ひ表はすことは出來ぬであらう。眞に筆舌の能く盡くす處にあらずである。唯實狀を現認したる者のみが已が心に感得するのみである。未曾有の慘禍と稱へられたる北佛の戰跡の如きも、今次帝都の慘狀に比すれば物の數にもあらず、強ひて史上に類例を求むれば一六六六年に於ける倫敦の大火である。同大火は倫敦市街の殆んど全部を燒燼したりと云ふも、其の面積は約百八十町歩にして燒失家屋一萬六千戸損害一億餘圓に過ぎなかつた。是亦今次の災害に比すべくもない。

昨は電燈煌々滿天に映じ、徹宵走車の響を絕たざり東洋一の我が東京市も、今は荒漠無燈の瓦礫の原と化し、潰殘の巨屋魔の如く暗空に峙つ中に、殘焔青く鬼氣を呼んで居る。桑田碧海の變とは之をしも謂ふのであらう。

○

東京全市十五區中、神田日本橋京橋淺草本所深川の六區は文字其儘に全滅した。麴町芝下谷の大部、赤坂四谷本郷の一部は燒失した。火災を免れたるは僅に牛込麻布の二區のみである。燒失家屋三十一萬六千餘戸罹災者約百六十萬人。災前の四十二萬戸、二百四十萬人に對し實に三分の二以上に達して居る。而かも殘存地區たる山手方面は主として俸給衣食者の住する消費區域にして、燒失地たる下町方面は專ら金融經濟の中心たると共に商工業の生産地域たる點に於て、損害は一層甚大である。慘死者の數は本所被服廠に於ける四萬二千の燒死者を最とし、全市を通じて壓死燒死溺死約十萬と稱せられ、行衞不明十二萬、負傷者の數は幾十萬に達するや計り知ることが出來ない。物質の直接損害のみにても百億圓を下らずと評價されて居る。若し夫れ之に全滅を傳へられたる横濱横須賀鎌倉小田原を始め、湘南地方及房總沿岸の損害を加ふれば、其の額實に幾何に達するや測られない。

日露戰爭は我國曠古の國難と稱せられた。而かも一年六個月の戰爭を通じて戰死者の數約五萬、傷病死者を加ふるも十萬を多く越へない。軍費も亦十九億圓内外であつた。然るに今回の災害に於ては慘死者のみにても約二十萬にして日露戰爭に二倍し、經濟の損害に至りては同戰爭の約十倍にも達するであらう。之をしも國難と云はずして何をか國難と云ふことが出來よ

う。明治維新以來爰に約六十年吾人の先輩と吾人の父兄とが智力と勞力との總てを擧げて拮据經營漸く築き上げたる帝都東京の文明が、僅に數分間の地震と二日間の火災とに依つて根本より打ち壞されたるを想ふ時、轉た人間の力の微小を歎くと共に自然の力の偉大を恐れざるを得ない。

歐洲戰爭は人類史上に於ける空前の大破壞であつた。ベルダンの攻擊や、ソンムの會議は、人間智力の最善と人間勇氣の最高とを以て戰はれた。而かも二日間に二十萬の死者と數十萬の負傷者とを出し、百億圓の物資を灰にすることは出來なかつた。左れば我國民は歐洲戰爭の何れの戰鬪よりも一層激烈にして悲慘なる戰を大自然と交へたのである。世界の何れの國民もが未だ嘗て味はざる大試練を體驗したのである。

今次の大災を以て或人は國民に對する天譴であると云ひ、他の人は神怒であると云つて居る。何故の天譴か、何故の神怒か、或は政治の腐敗に對する責罰と云ふものもある。或は民心の墮落に對する懲戒と云ふものもある。或は又此の大天災大地害に依つて日本は辛やく亡國の悲運より脫することを得たとさへ說くものもある。觀察と見解とは人に依つて異なるであらう。唯大體に於て今次の大災害に失望落膽意氣阻喪する者よりも、自責自省以てより良き國家の再建を念とする者多きは誠に賴もしき至りである。天譴か神怒か知らねど、我が國家社會の現狀に慊らざる吾人は少くも今次の大災を以て國家國民に對する大自然の大教訓と心得、大に自ら啓發する處が無くてはならぬと信ずる。倫敦の大火は一世紀に亙る惡疫を根絕するの大功があつた。東京の大火は如何なる福音を市民と國民とに齎らすであらう。

○

九月一日は小供の學校の始業日である。數旬の夏休暇に潮を浴びて炭團の如く黑くなりたる小供を、遠方の學校に出す爲め、平常よりも早く床を離れた。朝の新聞は孰れも山本內閣組織の記事を以て紙面の大部を埋めて居る。空はドンヨリと曇つて生溫き風がソヨ〳〵と木の葉を騷がして居る。何となく陰鬱の天候である。やがて降雨となり尋で覆盆の豪雨となつた。十時過には雨止み雲散じ、秋の陽は鋭く硝子窓を射始めた。數種の新聞も讀み終り、机に向つて何か書いて居た。臺所には晝飯の仕度か茶碗の音も聞へて居る。

不意に家屋が搖り始めた。いつもの地震と心得、例の如く電燈の搖らぎを眺めて居た。震動は容易に收まらず次第に烈しさを加へて來た。「コイツは大分烈しいわい」と思ふうち、動搖は急速度を以て猛激となり、柱が搖れる。襖が外づれる。卓上の

一輪挿がヒツクリかへる。掛けた椅子までがフラつき始めた。殆んど夢中で屋外に飛び出すと、小さき金魚池から溢れ出た水に滑つて仰向け様に打ち倒れた。起き上がると又滑べる。狹き庭には何處に避難すると云ふ安全なる場所もない。半は匍ひながら隣家との境なるカナリ大きな紅葉の木の下に身を托した。此の刹那隣との境なるコンクリートの石壁が恐ろしき猛音と共に砂煙を立てゝ隣家の方に倒れ、一棟の建物を押し潰した。幸に人は居なかつたらしい。若し石塀が此方に倒れたら、自分も今頃は冥土公論へでも此文を書いて居るであらう。

動揺は刻一刻烈しくなる。柱はギイ〳〵と鳴つて屋根は波打つて居る。隣家の瓦がガラ〳〵と滑り落ちるのが見へる。何處からともなく異様の響がドスン〳〵と聞へる。不圖空を見ると數羽の鳥が氣流に揉まれて飛ぶでもなく、飛ばぬでもなく、一所にさまようて居る。大地震には鳥が落ちると聞いて居たが、まだ飛んで居るのを見ると聊か安心な樣な氣がした。併し目前に波打つて動揺せる我が家を見ると、今度は倒れるか、今度は潰れるか、と恐怖を過ぎて寧ろ倒潰を期待するかの如く思はれた。

何分間續きたるか知らぬが、家は幸に倒れもせず初回の震動は鎭つた。數分の後揺り戻しの第二の激震が來た。時間は稍や短かつたが强度は初回に譲らなかつた。此の兩度の震動に依つて倒るべきものは倒れ、潰るべきものは潰れて仕舞つたのである。幸に倒潰を免れ、家族一同異變なく先づ安心と家に入ると、壁は落ち、襖はヒン曲り、器物は轉落して落花狼藉の光景を呈して居る。時計は正午二分前で止まつて居た。外の模樣如何にと町に出て見ると、城壁まがいの大家の石塀は殆んと悉く崩れ倒れて居る。屋根と云ふ屋根は殆んと悉く瓦が損じて居る。唯幸に倒れ家は一軒も見當らない。電車通りに出て見ると、電車は所々に立往生し、線路上には兩側の住民が群を爲して避難して居る。大砲の音か、火藥の爆發か、大音響がドーンドーンと頻りに聞へる。目黒火藥庫の爆發じやと云ふ者がある。市中所々に火災が起つたとの報あるも、煙はまだ見へない。自分の住せるA方面は震動の激しかりしに比し、被害は案外に輕微であつた。

學校に行つた小供が何時まで待つても歸つて來ない。問ひ合はすべき電話も通ぜねば、尋ねに行くべき電車も汽車も通はない。下町方面被害甚大、火災猖獗との風評が頻りに傳へられるも眞僞を確むる途がない。餘震は頻々として起り、人心を愈やが上に不安ならしめる。三時頃に小供は我家の安否を氣遣ひつつ二里の道を徒歩して漸く無事に歸つて來た。其の語る處に依

ると、市中は黒煙濛々、新宿は今盛んに燃へつゝある。YさんやHさんの家はもう燒けて仕舞つたかも知れんと云ふ。氣の毒と思ひながらも何うすることも出來ない。

　東北の空には綿綿の如き灰白の大入道雲が團々層々として紺碧の半空に蟠つて居る。其の色の毒々しさ、其の形の物凄さ、尋常一樣の雲でない。怪魔の如く、妖鬼の如く、今にも崩れ落ち襲ひ懸らんばかりである。多年の海上生活に樣々の雲を見たる自分も、斯くの如き恐ろしき、斯くの如き無氣味なる雲を未だ嘗て見たことがない。或は火山の大爆發に依つて噴出したる蒸氣の凝まりではないかと思はれた。他方面の火災は漸次猛烈となり、家を燒く黒褐の濃煙が西風に靡ひて、白き怪雲の面を掠め飛ぶ光景は一段の凄氣を加へる。火災は餘り遠くはない樣である。「火事は何處でせう?」と交番で聞けど「電話が一つも通じないから、チットも判りません」と云ふ。斯かる間にも大小の餘燼は間斷なく襲ひ來る。道路と云はず、空地と云はず、稍や小廣き所は避難者を以て滿されて居る。大通りには手荷物抱へて色青褪めた罹災者が、早や陸續として流の如くやつて來る。自轉車に乘つた若者が有ること無いこと種々の情報を傳へて行く。人心は益不安に襲はれる。實相を搜らんにも、通信機關も交通機關も全く杜絶し、加ふるに我家の不安に氣を引かれて遠く離れることが出來ない。何が何だか薩張り判らず、人心恟々とは斯くの如きを云ふのであらう。今朝までも話題の中心たりし内閣組織の如きは、月世界の事として人々の頭から忘れられて仕舞つた。

　瓦斯も出ず、水道も出ず、夕食の仕度を整ふることも出來ない。炊き殘りの握り飯に纔かに飢を凌ぎつゝ不安の中に日は暮れた。電燈は無論點かない。二十日の月はまだ上らない。暗き宵闇の町には提灯の光と黒き人影とが織るが如く行き交ふて居る。奉祝と書いた祭禮の提灯が簷下にブラ下れるも、時に取つては誠意の皮肉である。火災の煙は次第に紅を帶び、怪雲火に映じて火龍の躍るが如く、凄愴の氣、人の心に迫つて來る。西天の暗むに從ひ、北より東南にかけて空は唯一面の紅焔に掩はれた。空氣を震はす大爆音が時々落雷の如くに聞へる。美と云はんか、壯と云はんか、凄と云はんか、モスコー大火の繪を事實に見るの感がする。

　火は既に某町と某所とに及んだとの飛報があつた。近所では早や荷物を整へて立退の準備をして居る。某町と聞きては最早や油斷は出來ない。何時潰れるか、何時燒けるか判らぬ我が家に、女と小供とを殘して火災の現場を見屆けに出掛けた。避難者を以て門々相摩す混亂の暗き道路をば、自働車が今日ぞとば

かり全速で驅け飛ばす。危險言はん方ない。高地より前方を眺めると燄々たる火は大紅蓮の舌を吐ひて、次から次へと家を舐めて行く。火の子は空に舞ふて雨の如く風下の屋上に降り注いで居る。地震に瓦を剝がれたる屋根は忽にして燃へ上がる。水道も出ねば消防も出來す、人は唯手を拱ひて猛火の燃へ狂ふに任かして居る。家の二軒三軒は見る間に甜め盡して仕舞ふ。石造も木造も區別は無い。何處まで燒けて止まることやら、恐らく海まで燒け拔くであらう。荷物を積んだ荷車が列を爲して行く。家を燒かれた人々が默々として跟いて行く。嗚呼恐ろしき劫火の猛勢！、救の神は唯雨である。憎くや空には星が冷やかに輝いて居る。

幸に火災は尙ほ遠かつた。加ふるに風向も有利である。風さへ變はらねば朝までは先づ安心である。「今後强震は無いから安心せよ」との氣象臺の掲示を見た。之が發震以來初めて接したる責任ある報道であつた。平素の天氣豫報に多くの信を置かざる自分も、此の報道に對しては强いて信じたかつた。之も人間性の弱點である。沿道の住民は悉く路上に露營して居る。近所の人も戸外に避難して居る。病人を抱へた自分は露宿も出來す、屋内に在つて警戒の中に夜を明した。晝間の氣疲れにウト〳〵と眠むると、忽ち强震に搖り覺まされる。最初の激震に木組の緩みたる家は氣味惡くギー〳〵と鳴る。戰々兢々薄氷を踏むの思がする。日露戰爭の時、機雷飄浮の海を遊弋したる時よりも一層の不安を感じた。火災は徹宵止ます、火の手は益高く南へ〳〵と擴つて行く。知人の家も多く灰になつたであらう。

○

物凄き夜は不安の裡に明けた。火はまだ鎭まらない。紅き焰は黑き煙と變じ、濛々として天の一方に漲つて居る。流言頻りに放たれて、火は再び某町に移つたと傳ふるものがある。事實を調べると全く虛報であつた。A方面は最早や全く延燒の危險より免れ得たることが判つた。人心は稍や安定した。震害比較的大ならず、火災の難さへ免れたる我がA方面に在ては、翌朝に至るも尙ほ災害の實狀が判らない。心待に朝の新聞をさへ待つたのである。然るに新聞は一枚も來ずして恐るべき種々の情報は人々の口から傳へられた。曰く銀座が燒けた、神田が燒けた。淺草が燒けた。本所深川は全燒した。九段から洲崎に至る迄家一軒殘らない。橫濱が全滅した。橫須賀鎌倉も全滅したと、噂は噂を生んで東京市中燒殘れるものはA方面ばかりの樣である。誰言ふとなく、籠城の必要！」人々は期せずして食料の買込に急つた。動力停止の爲め白米は早朝既に其姿を總ての米屋から隱した。玄米半搗米を奪ふ樣にして買つて行く。罐詰類も羽

が生へて飛んだ。「ローソク賣切」の札は到る處の荒物屋に張られて居る。肉屋と魚屋は店を閉ぢた。八百屋には青い色を見ない。七三髮の令孃が大根を提げて行く。髯の洋服男が米袋を擔ひて歩るく。唯感心に此のドサクサ紛れに甚だしき暴利を食つた商人は無い樣であつた。社會奉仕の觀念よりも寧ろ震害と大災とを免れた神に對する感謝の發露であらうと思はれた。

表通りに出て見ると之は驚いた。何萬と數知れぬ人が混然雜然無列の隊を爲し、絡繹として又陸續として郡部の方に流れて行く。荷物を背負ひたる男、赤ん坊を負んぶしたる女、小供に手を引かれたる老人、荷車に横はる病人、貨物自働車に芋の如く積まれたる美人群、洋服もあり、浴衣もあり、學生もあり、職人もあり、七三に分けた蝦茶袴もあり、丸髷に足袋跣足もある。何れも疲勞と恐怖と失望とに色は青ざめ、眼は釣り、戰慄として屠所の羊の如く、悄然として喪家の犬の如く、運ぶ足には力がない。地震に潰され、火災に燒かれ、着のみ着のまゝ、命からがら緣故を尋ねて逃げ行く人々の群である。親は子と離れ、妻は夫を見失ひ、全家打ち揃へるは稀れである。昨朝以來既に一晝夜、一粒の飯さへ口にせざるものも尠くない。其の昔故國を追はれた猶太の民の放浪も斯くやと思はれた。混沌忽忙の際、町には未だ是等の人々の爲めに一杯の水さへ用意が出來て居ない。

何と夥しき避難者!。何と痛ましき罹災者!。之を見て他方面に於ける災害が如何に激甚なりしかを初めて察知することが出來た。道を尋ねる彼等の口より洩るゝ昨日來の光景は凄絶慘絶、耳にするだに眞に悲哀の極みである。彼等の齎らす哀話や悲譚や、奇聞や、美行やは十卷の書に收むるも尙ほ餘りあるであらう

電信柱にヤスリ版の小さき某新聞の號外が張られてゐる。東京災害の大要をば二十行ばかり書き綴りたるものである。八頁の朝刊に滿足せず、夕刊まで出したる幾多の大新聞中、之が此朝東京に於て發行せられたる唯一の新聞とも稱すべきものであつた。此の一事我が東京の文明が一夜の中に如何に破壞され燒燬されて、混亂の底に陷ゐりたるかを知るに足るであらう。

○

餘震は次第に輕くなつたとは云へ、尙ほ時々强震に膽を冷やされる。火災は漸次鎭まりたるも北方の空には尙ほ黑煙が漲つて居る。住民の多くは戶外に露宿を繼續して居る。電車線路には戶板、天幕、筵、簾、トタン板など、有ゆる應急材料を以て豚小屋の如き急造バラックがヅラリと並んで居る。瓦斯もなく、水道もなく、電燈もなく、二十世紀の文化生活より一夜にして

原始的生活に還元したのである。外聞とか、體裁とか云ふ形式的虛僞的なる餘剰文化は悉く掃き捨てられて、眞實なる生存慾が露骨に正直に暴露せられて居る。

此の時に至る迄、市民は地震と火事と飢餓とに對する恐怖と警戒とこそありたれ、毫も社會的不安を感ずることは無かつた。然るに二日の午後に至り誰言ふとなく、〇〇〇〇〇〇〇〇〇とか、〇〇〇とか、〇〇〇〇とか、容易ならざる種々の流言が傳へられた。東京の火災は多く〇〇〇〇〇に因るとさへ言はれた。或ば〇〇〇〇〇〇の〇〇じやとか、或は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇じやとか、誠しやかに說くものもある。

事實の有無を確むる暇もなし、激震と猛火とに襲はれて不安と昂奮の極に達せる市民は、無條件に、無省慮に、此の〇〇〇〇〇〇〇〇〇。殊に〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇を以て〇〇の代名詞の如く信ぜる者や、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、盛んに〇〇に對する〇〇を放つた形跡がある。熱血に富む町の青年達は〇〇に對する〇〇〇〇〇〇〇〇〇。幸ふして震害と火災とを免れたる老幼婦女は更に〇〇〇〇の噂に震ひ上つた。夕刻になると隣接郡部の婦女子は〇〇〇の風評に色を失ひ、幾百となく群を爲して我等の町に逃れ來つた。〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇。青年團在鄕軍人町内の男兒は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇に就いた。〇〇〇〇〇〇〇〇も糸瓜もあつたものでない。〇〇、〇〇、〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇などを手に〳〵携へ、中には〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇て居る者もある。〇〇〇〇〇〇〇〇〇せられて町内〇〇〇は企く此等〇〇〇〇〇〇〇〇。中には御祭氣分で面白半分の彌次も交さられるであらうが、大多數は〇〇〇である。白髪の某老博士までが〇〇〇〇〇〇〇〇夜警に從事するの騷となつた。地震！、火災！、而して〇〇〇！。

北方の火災は尙ほまた止まず、紅焰盛んに天を焦して居る。何處が燒けようが遠方の火災などは最早や問題ではない。自分の町の警戒に狂氣の如くである。電燈なき暗き町には多數の提灯が忙がしげに右往左往して居る。ピストルの響が屢暗の中に聞へる。自警團の人々は辻々に見張して通行人男女別なく誰何詰問する。〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇に關する〇〇は後から〳〵と新らしき種が傳へられる。冷靜なる常識を以て判斷せば殆んど信じ得ざる程の馬鹿〳〵しき〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。若し其の妄と謬とを解かんとする者あれば、〇〇〇〇〇〇〇〇として其場で〇〇〇〇れるかも知れぬ。青年中には「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

○○○○、○○○○○○○」などゝ恐ろしき妄言を放つ者もある
通行の避難者に取つては○○よりも日本人の方が恐ろしい。
○○○の中に三日の夜は明けた。此方の火災も漸く收まつた
町内總出の警戒に怪しき鼠一匹網に掛らなかつた。前夜○○○
○○○は官憲に依つて明確に「事實無根」と打ち消された。
人心は稍や平靜に復し、○○に關する新しき流言は靜まつた。
而かも一度市民の心肝に烙印せられたる○○○○は容易に消
滅すべくもあらず、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○となつた。災害談
よりも○○○の方が、寧ろヨリ多く人々の口に上る程である。
○○○○○○○高かりしと同時に、○○○○○○○も亦頻りに
傳へられた。千葉縣の某町に於ては○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○、○○○○○○○○○○○するであらうと云ふ噂である。殊に
騒ぐべきは災害の第一夜、本所の某所に於て○○○○○○○
○○○○○○か、○○○○たるの○○○い、○○○○○
○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○された
と云ふ目撃者の談である。○○○○○○○○○○まられて
○○されたる○○も尠くはあるまいと專ら噂されて居る。

Ａ區の某町で、橫濱實見記として筆者の住所姓名を明記した
る長文の掲示を見た。最初橫濱に於ける災害の狀況を記述した
る後、末文に次の如き意味の事が書いてあつた。
『根岸監獄を出されたる人々は何れも○○○○○○○○○○
○○○○○○○○にした。之は日本の國民としては然かあ
るべきことで、之に依つて根岸は救はれたのである』
監獄を解放せられたる囚人が劍や短銃を携へたるも不思議であ
るが、監獄に居ながら○○○○○を區別し得たるは尚ほ不思
議である。併しながら特に住所姓名を明らかにして責任を負へ
る以上、決して出鱈目の虛言でなく、必ずや事實の報道であら
うと思はれる。而して斯くの如き不思議なる掲示に對し附近に
在る警官も軍隊も默過して居たのも亦不思議である。之で見る
と、○○○○は獨り東京のみでは無かつたらしい。
○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○、山本總理大臣が就任早
々特に訓示を發して○○○○○○○○○を去るに力めたる
と共に、極めて間曲ながら○○○○○○○○たることに依つて
略ぼ推知することが出來る。

○

〇〇〇〇に關しては吾人は多くの事例を耳にした。併しながら幸か不幸か、現行犯を實見したと云ふ人には唯一人も接しなかつた。「君は見たのか」と問へば、「イヤ聞いたのじや」と云ふのが總ての人の答であつた。從ふて眞相尙不明の今日、吾人は〇〇〇〇〇を肯定することも否認することも敢てしない。素より日本人中にすら不幸なる同胞の屍體を捜つて金品を掠奪したり、死者の指を切つて指輪を竊取する如き不德漢もあることゝて、〇〇〇〇〇にも個人的に火事泥的の惡事を働きたる者の絶無を期し難い。左れど〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇したり、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇が如〇〇〇〇〇てしたとは俄に信じたくない。警察側の報道に依れば、邦人中には十餘名の放火嫌疑者あるも、〇〇〇には今日迄斯かる犯跡を發見しないと云つて居る。〇〇〇〇〇の如きも事を好む愚惡なる邦人が世人を騷がす爲め、化粧用香水を投じたのであると云ふことである。尙ほ警視總監の談として新聞の傳ふる處に依れば、〇〇の所持せる梨子を爆彈と誤認して騷いだり、こぼれたる酢を脫脂綿にて拭ひたる婦人を〇〇〇〇〇と誤信したと云ふ珍談もあると云ふことである。疑心暗鬼を生ずで、疑へば枯尾花も幽靈と見え、信ずれば寶竹も生佛と見へるが常である。色眼鏡を掛けて見れば總てのものが赤くも見へ、青くも見へる、初めより〇〇の眼鏡を以て〇〇に對すれば、總ての〇〇が〇〇に見へるに不思議はない。

〇

本件は尙ほ調査中に屬し、最後の斷案を下す能はざるも、大體に於て〇〇〇〇〇〇に關する〇〇は打ち消され、彼等に對する冤罪は雪がれ、〇〇に對する市民の感情も〇〇〇〇〇大に緩和された。〇〇の爲めにも、〇〇〇〇の爲めにも、誠に幸慶の至りである。最初より〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇を信ずるを欲せざりし吾人は特に〇〇の爲めに祝賀する。〇〇〇〇〇〇に對しては、吾人は思想的に之を誅とする。併しながら我が國民の大天災時に乘じて非人道的暴擧を企つる如きは、獨り我が國民の〇〇〇〇を惡化するのみならず、世界の同情を保つ道ではない。思慮ある〇〇〇は斯かる愚擧を敢てせぬであらうと信ずる。

大地震撼して石屋を摧き、猛火威を恣まにして全市を燒き、死屍街頭に累々として、子は親の生死を知らず、妻は夫の所在を知らず、社會は動搖し、人心は不安に陷つた。此の大混亂の時に乘じ或方面に於ては〇〇〇〇〇〇、其他苟くも新思想家を以て目せらる者をば徹底的に〇〇せんとするの企てあることを、風の便りにチラと耳にした。素より事實不明の風聞に過ぎ

ない。尋て〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇を耳にしたる時、吾人は直覺的に是れ或は爲めにせんとする或方面の宣傳ではないかと感じた。人心動揺の際に於ける斯種の宣傳は最も有効である。其の傳播の迅速なること風の如く、其の感動の深刻なること針の如きものがある。凡そ社會の混亂、人心の動揺時に於て流言蜚語浮說風聞の放たるるとは、恰かも地震に於ける火災の如く必ず付き物である。所謂策士なる者が暗中飛躍を企つる書入時である。今度の災害に依つて東京と地方との通信連絡全く斷絕せらるゝや、如何に多くの途方途轍もなき虛報僞報が地方へ傳へられたるかは、誠に驚くべき恐るべきものがある。妙珍奇怪なる一例を擧ぐれば、何人が何處より發したるやは知らぬが僕の郷里へは、「內閣組織中の山本伯は地震の眞最中刺客に襲はれたるも、危ふく脫して品川まで逃れたる時、再び海嘯に襲はれて將に溺死せんとする處を辛ふじて救はれた」と云ふ意味の電報があつたと云ふことである。捏造も作爲も此處まで行けば寧ろ愛嬌がある。

〇〇に關する流言が萬一宣傳に出でたりとせば、縱令其精神は愛國の至情に出づるとするも、其の結果は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇を害し、〇〇〇〇〇〇と信用とを損じ、〇〇〇〇〇賊に甚大なるものがある。宣傳に出づると否とに拘はらず、流言の出所は此際充分に探明することが國家の威信を維持する上に於て肝要である。

〇

今度の大變に際し、災害に對する東京市民の態度は大體に於て冷靜であつた。罹災者の行動は沈着であつた。避難者に對する同情は深厚であつた。外國人が驚歎したと云ふのも滿更ら御世辭ばかりではあるまい。青年團在鄉軍人なども勇敢に、敏活に、熱誠を以て奉仕的に能く働いた。縱令其間に統一と訓練とを缺き稍や雜然たる嫌ありたりとは云へ、又縱令其間に一部の粗暴不良の徒ありたりとは云へ、戒嚴令布かれて軍隊の配置を見るに至るまで、燒殘り地區の保安は主として彼等自警團に依つて維持せられた。然るに唯一遺憾とする處は市民の〇〇〇である。素より當時の實情に照らし大に諒とすべき點ありたりとは云へ、根據確實ならざる流言蜚語に惑はされ、僅に〇〇〇〇の影法師の爲めに二百萬の市民が狂氣の如く騷ぎ立てたるは、遺憾ながら大國民の態度であつたとは云ふことが出來ない。恰かも富士川の水禽に驚きたる平公子の觀があつた。日本人與みし易しと私かに舌を出した外國人もあるであらうと思ふ。

併しながら之を以て直に市民のみを責むることは出來ない。市民をして容易に斯かる流言浮說を輕信するに至らしめたる所

以は何であらう。平素官憲並に新聞等が餘りに執拗に、餘りに濃厚に、○○○○○○を行ひたるが爲めである。卽ち日本國民は○○と云へば悉く日本に敵意を抱き、日本人に害意を有せるものと數へ込まれて居たのである。○○に對する此の○○○○○、○○○尙ほ一つには○○○と云ふ輕侮の念とが加つて今次の災害に依つて火付けられたる流言のマッチの爲めに爆發したるに過ぎないのである。畢竟するに平素に於ける人心の指導が誤つて居たのである。聞く處に依れば○○○○○は今や○○○○に對して○○○○して居ると云ふことである。何の爲めの○○、何の爲めの○○であらう？。○○○○○○とか、○○○○○○○○とか、○○○○に何事かの新現象を發生したることを暗示して居る。

今回の震災に對し世界の同情は翕然として我國に集まつた。併しながら○○○○は必ずや○○○○○○○○を宿せることは明らかである。若し○○○○○にして眞なりとせば、是れ重大なる人道問題である。○○○對する○○○○は或は却て反感と變ずるかも知れない。○○○○○○に關する流言は官憲に依つて否認せられた。併し○○○に關する流說は尙ほ未だ取り消されない。吾人は斯の如き不祥なる流言が事實無根なるの報を一日も速に聞かんことを欲するものである。

○二日戒嚴令が發布せられ、帝都の治安は軍隊の手に委ねられた。非常大變の際已むを得ざる處置であらう。兵力の增加と配兵の整備するとに從ひ、市民の○○○○と、自警團の通行人檢問とは禁止せられ、漸次市內の秩序は整頓し、人心は安定した。燒殘地區に在つては水道瓦斯電話等を除く外、生活狀態は最早や平常と多く異なる處が無くなつた。戒嚴令下に於ける軍隊の行動は極めて嚴正に極めて敏活であつた。而かも從來屢見たるが如き倨傲の態度と威嚇的言動とを見ることなく、國民と軍隊との間は極めて圓滑親善であつた。中にも戒嚴司令部より發する訓示告示の如きも、難解にして威嚇的なる軍隊式文句を用ゆることを避け、力めて平易にして民衆的なるところが頗る吾人の意を得た。是れ戒嚴司令官以下幹部の細心徹底なる注意に依るものと思ふ。今や市民は軍隊に對して多大の好感と信賴と敬意とを有して居る。國軍の爲めに慶賀し、軍部に對して讃辭を呈せざるを得ない。

併しながら今次軍隊の行動と國防問題とは自ら別である。今日軍隊に對する國民の信賴大なるを奇貨とし、火事泥的に早くも軍備充實の必要を說く者がある。軍隊の眞目的は外敵に對する國防である。戒嚴保安の如きは副業餘技に過ぎない。警察

力さへ充實すれば帝都の治安維持に軍隊の手を借るを要せずとの福田戒嚴司令官の言は道理である。吾人は此際帝都の警察力を充實することに對しては毫も異議を有しない。とは云へ國内的災害の爲めに、特に對外的國防力を充實するの必要は絶對に認めることが出來ない。災害前に過大たりし陸軍は災害後に於ても亦依然として過大でなければならぬ。況んや今回の災厄に際し世界の執りたる行動は、國際間の親睦に一歩を進めたるものあるに於てをやである。今や國家國民の損害は百億圓を越へ國家財政の最も緊縮整理を要する秋である。之が爲めには先づ手を陸軍の大緊縮に染めねばならぬと信ずる。吾人は山本新首相が此の國家非常時に際し、之に向つて斷乎たる大鐵腕を振はんことを切望する者である。（一二・九・一八）

大震雜記

芥川龍之介

一

大正十二年八月、僕は一游亭と鎌倉へ行き、平野屋別莊の客となつた。僕等の座敷の軒先はずつと藤棚になつてゐる。その藤棚の葉の間にちらほら紫の花が見えた。八月の藤の花は年代記ものである。そればかりではない。後架の窓から裏庭を見ると、八重の山吹も花をつけてゐる。

山吹を指すや日向の撞木杖　一游亭

（註に曰、一游亭は撞木杖をついてゐる。）

その上又珍らしいことには小町園の庭の池に菖蒲も蓮と咲き競つてゐる。

葉を枯れて蓮と咲ける花あやめ　一游亭

藤、山吹、菖蒲と數へて來ると、どうもこれは唯ごとではない。「自然」に發狂の氣味のあるのは疑ひ難い事實である。僕は爾來人の顏さへ見れば、「天變地異が起りさうだ」と云つた。しかし誰も眞に受けない。久米正雄の如きはにやにやしながら、

「菊池寛が弱氣になるつてね」などと大いに僕を嘲弄したものである。

僕等の東京に歸つたのは八月二十五日である。大地震はそれから八日目に起つた。

「あの時は義理にも反對したかつたけれど、實際君の豫言は中つたね。」

久米も今は僕の豫言に大いに敬意を表してゐる。さう云ふことならば白状しても好い。——實は僕も僕の豫言を餘り信用しなかつたのだよ。

二

「濱町河岸の舟の中に居ります。櫻川三孝。」

これは吉原の燒け跡にあつた無數の貼り札の一つである「舟の中に居ります」と云ふのは眞面目に書いた文句かも知れない。しかし哀れにも風流である。僕はこの一行の中に秋風の舟を家と頼んだ幇間の姿を髣髴した。江戸作者の寫した吉原は永久に返つては來ないであらう。が、兎に角今日と雖も、かう云ふ貼り札に洒脱の氣を示した幇間のゐたことは確かである。

三

大地震のやつと靜まつた後、屋外に避難した人人は急に人懷しさを感じ出したらしい。向う三軒兩隣を問はず、親しさうに話し合つたり、煙草や梨をすすめ合つたり、互に子供の守りをしたりする景色は渡邊町、田端、神明町、——殆ど至る處に見受けられたものである。殊に田端のポプラア倶樂部の芝生に難を避けてゐた人人などは背景にポプラアの戰いでゐるせゐかピクニツクに集まつたのかと思ふ位、如何にも樂しさうに打ち融けてゐた。

これは夙にクライストが「地震」の中に書いた現象である。いや、クライストはその上に地震後の興奮が靜まるが早いか、もう一度平生の恩怨が徐ろに目さめて來る恐しささへ書いた。するとポプラア倶樂部の芝生に難を避けてゐた人人もいつ何時隣の肺病患者を驅逐しようと試みたり、或は又向うの奥さんの私行を吹聽して歩かうとするかも知れない。それは僕でも心得てゐる。しかし大勢の人人の中にいつにない親しさの湧いてゐるのは兎に角美しい景色だつた。僕は永久にあの記憶だけは大事にして置きたいと思つてゐる。

四

僕も今度は御多分に洩れず、燒死した死骸を澤山見た。その

澤山の死骸のうち、最も記憶に殘つてゐるのは淺草仲店の收容所にあつた病人らしい死骸である。この死骸も炎に燒かれた顏は目鼻もわからぬほどまつ黑だつた。が、湯帷子を着た體や痩せ細つた手足などには少しも燒け爛れた痕はなかつた。しかし僕の忘れられぬのは何もさう云ふ爲ばかりではない。燒死した死骸は誰も云ふやうに大抵手足を縮めてゐる。けれどもこの死骸はどう云ふ譯か、燒け殘つたメリンスの蒲團の上にちやんと足を伸ばしてゐた。手も亦覺悟を極めたやうに湯帷子の胸の上に組み合はせてあつた。これは苦しみ悶へた死骸ではない。靜かに宿命を迎へた死骸である。もし顏さへ焦げずにゐたら、きつと蒼ざめた唇には微笑に似たものが浮んでゐたであらう。」

僕はこの死骸をもの哀れに感じた。しかし妻にその話をしたら、「それはきつと地震の前に死んでゐた人の燒けたのでせう」と云つた。成程さう云はれて見れば、案外そんなものだつたかも知れない。唯僕は妻の爲に小說じみた僕の氣もちの破壞されたことを憎むばかりである。

五

僕は善良なる市民である。しかし僕の所見によれば、菊池寛はこの資格に乏しい。

戒嚴令の布かれた後、僕は卷煙草を啣へたまま、菊池と雜談を交換してゐた。尤も雜談とは云ふものの、地震以外の話の出た譯ではない。その內に僕は大火の原因は○○○○○○○○さうだと云つた。すると菊池は眉を擧げながら、「嘘だよ、君」と一喝した。僕は勿論さう云はれて見れば、「ぢや嘘だらう」と云ふ外はなかつた。しかし次手にもう一度、何でも○○○○はボルシエヴイツキの手先ださうだと云つた。菊池は今度は眉も擧げると、「嘘さ、君、そんなことは」と叱りつけた。僕は又「へええ、それも嘘か」と忽ち自說(?)を撤回した。

再び僕の所見によれば、善良なる市民と云ふものはボルシエヴイツキと○○○○との陰謀の存在を信ずるものである。もし萬一信じられぬ場合は少くとも信じてゐるらしい顏つきを裝はねばならぬものである。けれども野蠻なる菊池寬は信じもしなければ信じる眞似もしない。これは完全に善良なる市民の資格を放棄したと見るべきである。善良なる市民たると同時に勇敢なる自警團の一員たる僕は菊池の爲に惜まざるを得ない。

尤も善良なる市民になることは、――兎に角苦心を要するものである。

六

僕は丸の内の焼け跡を通つた。此處を通るのは二度目である。この前來た時には馬場先の濠に何人も泳いでゐる人があつた。けふは僕は見覺えのある濠の向うを眺めた。濠の向うには藥研なりに石垣の崩れた處がある。崩れた土は丹のやうに赤い。崩れぬ土手は青芝の上に相不變松をうねらせてゐる。其處にけふも三四人、裸の人人が動いてゐた。何もさう云ふ人人は醉興に泳いでゐる訣ではあるまい。しかし行人たる僕の目にはこの前も丁度西洋人の描いた水浴の油畫か何かのやうに見えた。今日もそれは同じである。いや、この前はこちらの岸に小便をしてゐる土工があつた。けふはそんなものを見かけぬだけ、一層平和に見えた位である。

僕はかう云ふ景色を見ながら、やはり歩みをつづけてゐた。すると突然濠の上から、思ひもよらぬ歌の聲が起つた。歌は「懷しのケンタツキイ」である。歌つてゐるのは水の上に頭ばかり出した少年である。僕は妙な興奮を感じた。僕の中にもその少年に聲を合せたい心もちを感じた。少年は無心に歌つてゐるのであらう。けれども歌は一瞬の間にいつか僕を捉へてゐた否定の精神を打ち破つたのである。

藝術は生活の過剩ださうである。成程さうも思はれぬことはない。しかし人間を人間たらしめるものは常に生活の過剩である。僕等は人間たる尊嚴の爲に生活の過剩を作らなければならぬ。更に又巧みにその過剩を大いなる花束に仕上げねばならぬ。生活に過剩をあらしめるとは生活を豐富にすることである。

僕は丸の内の焼け跡を通つた。けれども僕の目に觸れたのは猛火も亦焼き難い何ものかだつた。

自然の魔力と人間の夢

白鳥省吾

一

初秋といふことをしみじみと感ずる期節となつた、今日は薄霧がこめてゐるが晴天を約束するやうな爽やかな朝だ。書齋の

窓から見える庭内の一本の若い楢の枝から軒端にかけてかけられた蜘蛛の網が主なくしてたゞ露の玉をたくさん連らねてゐる、その隣りの梅の木の枝に高く蜂の巣が小さな釣鐘のやうに下がつてゐる。すでに大きい黄色な足長の二疋の蜂がその端にすがつてゐる。そしてそれらの根元には隣家と境する粗末な牧場の柵のやうな垣がありこぼれ種がおのづから芽を吹いた朝顔が淡紅の一輪を鮮やかにのぞかせてゐる。

東京の一部であるこの郊外の初秋の庭では、二週間前にあつた東京市民の未曾有な慘害が凡て夢のやうに忘れられてゐるやうに見える。またそれと共にこの邊の住民にも與へた驚くべき強震の記憶がもはや草の葉の一枚にも宿つてゐないやうに見える。あれは夢であつたか？と人々に思はせる凡ての靜かさだ。

しかし事實、日本の帝都として大都市の殷盛を示す此の東京の大半は僅か三日足らずで灰燼に歸してしまつたのだ。昔の武藏野を思はせる凄まじい燒野原となつてしまつたのだ。二百四十萬の人口のうち三分の二は罹災者となり、倒潰燒失家屋四十餘萬、そして十萬の死者、數十萬の負傷者を出した。妻子眷族も散り〲に身を以て都落ちせる者、現在まで百三萬人に及んでゐるといふ。これほどの激變は戰亂もしくは革命でもなければあり得ぬことではないか。何といふ大きい天災であらう。

私はいま靜かにこの初秋の庭に對し乍ら、殊に空間に懸る蜂の巣や蜘蛛の網を眺めながら、かの大地震に伴ふ災害の跡を辿つてゐる。私はささやかな蟲類の生活と人間の生活を比較するわけではない、丸の内ビルデングと蜂の巣との耐震力を比較するのではない。たゞ、地震といふ聯想は、おのづからかの蜂の巣はどれだけ振つたらあの梅の枝から落ちるだらうといふ子供らしいことを考へる。なんでも子供の時分に悪戲して蜂の巣を竿で落したことがあつたが、その木との着け根は膠のやうに固くねばり強いものであつた。そしてその下向きの整然たる室々、おそらくはその室の一つ一つに今は蜂の子が生れやうとしてゐるだらう。私はこの蜂の巣が霖雨季ごろから着手されて、黄なる大きい幾つかの蜂が三ケ月もかゝつてかほどまでに完成させたものであることを知つてゐる。

蜂の巣の單純と輕快さとは、恐るべきかの強震も何でもなかつたらしい。寧ろ強い風よりはいゝらしい。その土臺と見るべき梅の木の倒れない限りは安泰であるらしい。

その蜂の巣が過ぎし日の人間の災害とまるで沒交渉のやうに空間にかゝつてゐるのは當然過ぎることであるが、それはいま私が書うとする題目を考へるにふさはしい眺望ではあるまいか。

○

私は奥羽山脈のうちの海拔二千尺ほどの大森林地帶の中にあつて、あまり名の知れてないそれでも溪谷の美と透明な湯を兼ねてゐる溫湯溫泉といふのに八月の後半を滯在して、廿九日に歸京したのであつた。そして四日目の九月一日であつた。それはごく平凡に過ぎれば過ぎ得る一日である筈だつた。私はテーブルの前の籐椅子に倚つて漫然と外國の童話を讀んでゐた、三歲になる一人息子は私の傍の机の抽斗をぬいて何かのいたづらをもくろんでゐた。子供にまで覺えられてしまつた「いけないよ」といふ小言がもう少しで口から辷り出るところであつた。妻は晝飯の仕度に臺所の方に居た。何か大地の遠い果から斷然と押しよせて來たやうに家鳴り震動がはじまつた。「そら地震だ！」と心だけが叫んだ。子供は疊の上によろよろして倒れさうになつて泣き出さうとした。私はいきなり子供を抱へて跣足で庭にとび出した。そして小さい廣場の櫻の木の下に立つた。地面はぐら／＼と搖れていまにも突き倒れさうであつた。私は搖られながら呆然と屋根と空とを眺めてゐた。家がばら／＼に解體しさうに思はれた。空は黃色くぎらぎらと光つて、空氣は埃つぽく濁つた。これは生命を失ふかも知れないといふ最大の恐怖の感じだ。「父ちやん」「父ちやん」といふおろ／＼した妻の聲がどこからかしてゐるのがきこえた。それでも、柵を越えると隣家の庭が廣く私の家もたゞ一軒の右の隣家も平家なせいもあるが、頭の上に家が倒れかゝるといふ心配なしに眺めてゐた。（あとでよく見ると家が倒れたら危險な距離であつた）。しかし人間は自分に都合のいゝやうに考へるものである。いまに地震が鎭まるだらうと眺めて待つてゐた。それから何となくこれは約束が違ふといふやうな抗議を內々、自然に向つて不平がましく呟いてゐた。全くこれは有り得べからざることである。しかし人間の虫のよさを、いつも自然はきいてくれるものでないことを此度は深く感ずべきであつた。私の家も附近も家屋の破損があまりなく死傷もなかつたからよかつたやうなものの、やはりこんな場合には最大限の安全地帶に逃げ込むべきものかも知れない。しかも、私のごときは柵一つ越えると廣い野原のやうな隣家の荒地に出られるのであつた。まだ搖れの止まらぬうちに聲のする方によろ／＼歩るいて行くと、妻は門の傍の椎の樹にやはりよろけるやうにすがつてゐた。

すつかり度膽をぬかれた附近の人々は、もつと强い「搖り返し」が來るかも知れないといふ恐怖で、もう家の內に居る人は殆んど無かつた。私達も椎の樹の下に莫蓙を二枚敷いて籐椅子や座布團を運び、それからぽつぽつ思ひ出しては毛布、茶道具の類まで外に出した。てうど椎の樹と青桐の葉蔭なので、殘暑

の晴天も苦にならない。涼しくて晴々しい、どことなく呑氣だ。もちろん本をよむ氣もしないので、ぼんやりとしてゐると、「屋外もいいものだ、人間は生活の大半を屋外で暮らすべきだ」など戯談ともつかぬ輕口を叩きたくなる。子供にあまり恐怖心を感じさせるのもいけないと思つて、「省ちやん、いま風が吹いたね」と吾が子に言つてきかせる。つねに「風が何て吹く？」ときくと、「風はゴウゴウ」と手振りする三歳の童子だ。すると今度は「風ぢやないよ、もつとよ」と言つて、やはり恐怖のまだぬけぬ眼付をしてゐる。もつと强いのか、別なものと言ふのか、怖いのかともかく變な怖いものと思つたらしい。ちしんだね」と言ふと「ちしんちしん」と納得したやうに繰り返してゐる。

中村氣象臺長の發表に依ると、地震はこの第一回の激震以來餘震は間斷なくつゞき五日午前六時までは七百回に達したさうだが、激震は其後一度もなかつたのであるから、この郊外地だけの場面では、激震もごく平和な寧ろユーモラスな結着を告げたと言つてもいゝ位であつた。

○

激震後間もなく、午後一時ころから高臺である此の郊外から遠く東南にかけて不思議な雲の湧き立つてゐるのを見た。それは眞夏の雷雲などに見る雲の峯とも異る立體的なてうど人體の腦髓の皺を思はせるやうな襞の多い、そして襞の端々が銀色に光る不思議な南畫の山のやうな雲であつた、私はそれを地震に伴ふ空界の變化といふやうに漠然と考へてゐた。人々も不思議な雲だと言つてゐた。

「あの雲を見てゐると氣味のわるいたくさんの顔に見えるわ。死んだお婆さんなどが目に浮ぶわ」と妻が言ふ。

「そんなことは雲からの聯想として平凡なありふれたことではないか」と私はやはり籐椅子の上でいふ。

「でもあの雲は特別なんですもの」。

私は一寸用事に街に出かけると、崖の崩れや塀の倒れたものが目についたがさほどの被害も見えなかつた。莫座を路傍に出して雜誌を讀んでゐる美しい少女もあつた。縁臺に腰かけてる若者は「いかにも地震のあとらしい雲だね」といふ風なことを言つて雲を眺めてゐた。豊川町で果物店が一軒、倒潰してゐた。それは古い土藏造りで、巡査の細君が内職にこの間、開業したばかりのもので、細君と子供と婆さんが下敷になつてゐたのをさつき堀りかへしたばかりだといふ。巡査は勤務先から未だ歸つて來ないといふことだつた。屋根も壁も、粉微塵に一つの平たい塚のやうにへたばつてゐた。見る人をして戦慄させるに充分であつた。

三十分ほどで歸つて來ると、妻は、
「あの雲は火事の煙ですつて」と言つた。
私はその雲を凝視して見たが、雲は少しも原形を變へないやうな靜止狀態を保つてゐて、どうしても煙らしくは思へなかつたが、それらの雲の下に微かに灰色の煙らしいものがもやもやとしてゐた。
「そんなことはないよ、あの下にほんの少しは煙があるかも知れないが、……」
と私はてんで相手にしなかつた。
しかし夕景になるにしたがつて、東南の空いちめんが赤みがかつた黃金を熔ぶしたやうになつた。そして煙がそれを美しくぼかしてゐた。何といふ旺んな光景であらう。これだけの反映は果して何が燃えるであらうか、事實として殘る災害としは餘りに大き過ぎる。まるで夢のやうだ。手のつけやうのない大火だ。物語にのみきいたまゝがいま目のあたり見てゐる感じた。この火はネロが羅馬を燒いた火、ナポレオン襲來の時のモスコーを燒いた火と共通の火だ。最も眞紅な兇猛な火だ。水道も止まり瓦斯も電燈も止まつてゐる。私はもう玄關の三疊を居間としてゐたが何度となく隣りの草原に出て火事を眺めた。宇都宮在のある村落ではこの時、空燒けを見て隣村が火事だと思つて喞筒を曳き出したが、何處まで行つても果しがないので引きかへしたといふ笑話がある。丈に餘る雜草のなかに十數人の人々が圓座をつくつてテントもなしに星空の下に、地震を避けて話し合ひながら、やはり火事を眺めてゐる。露つぽい草原のなかの一つの提灯が穩やかに眺められる。そちこちでぼそぼそと話し聲がする。十二時ころになるといつしか半缺けの月が空に照つてゐる。たくさんの蟋蟀が啼きしきつてゐる。均しく空いつたいに反映しながらも、所々にある最も赤い部分はいくらかづつ移動してゐる。しかし草原の連中も十二時を過ぎると夜露が冷たいことも手傳つて、「大丈夫ですね」「大丈夫でせう」とお互に勵まし合つて、各々の家に引き取つて行つた。私は時々、其處に行つて觀望した。すると近所の青年は私に聲をかけて、砲兵工廠の毒瓦斯が破裂したから往來の人は手拭を口に卷けといふ通告が出たと言つてきかせた。地震火事、毒瓦斯、いよいよ末世らしい寂しさと周章との中に人を突き入れるやうに思はれた。午前二時頃であつた。火力は少しも衰へない。そして夜がしらじらと明けはじめたのでその反映は次第に日光に薄らぎ消えて行つたが、火そのものは依然として同一の盛んさで燃えつづけてゐるらしく思はれた。後に精査する處に依ると、一日午前十一時五十八分の激震から僅か十分間内に發火したものは實

に七十六ケ所で、その最初は風速十七メートルの南風であつたが、大火に伴つて所々に氣流の變化を起こし同夕刻までに三回に亘つて風向きをかへ漸次烈風になりまた局所々々に旋風を起こし、水道は十分後には使用出來ず、わづかに池水、河水を利用して消火につとめたのであつた。

やはり後に思當つたことであるが、眞黄に黄がかつた火の旋風に追はれ黒煙に咽ぶ幾十萬の人間の叫喚、悲鳴が、あの不思議な雲にこもつてゐるのであつた。蟋蟀の曲につれて靜かに火の海が呼吸するやうに廣く炎を空に映してゐた時、大川の水も湯のやうに炎の舌になめられて無數の避難の男女が燒死したのであつた。

東京は燒ける。私達はいま幸福過ぎるほどの傍觀者の哀愁、最も極端な炎の壯觀に溺れてゐた。そして最も微小な私も歷史の片隅に生きてゐることを痛感した。

○

二日の朝、一友人が訪ねて來て東京の死者三千人位あるだらうといふこと、帝劇、警視廳、三越等の燒失を知らしてくれた。私は死者の多いことに驚いた、そして建築物の被害の存外大きいなといふことを感じた。然し後日に死者が三萬と傳へられ更に七萬となり十萬に近からんとし、湘南、内房州地方を加ふれば廿萬たらんとして、東京の大半を焦土とし、横濱、小田原が全滅したる今日、私達は驚くといふ心に却つて麻痺したやうに思はれる。

何事もなかつたユーモラスな平和な椎の樹蔭の場面から、何といふ災害の變りやうであらう。

二日の午前十時頃、小石川の林町まで出掛けた、護國寺からの電車線路には地震の避難者で一杯だ。戸障子をたてかけ、疊を敷いてゐる。白髯の立派な老紳士が見事な幾つかの長椅子を運び出して、青春の子女と共に悠然と腰かけてゐる。目まぐるしい自動車、自轉車、通行人の埃が濛々とそれらを包む。停まつた儘の電車の内には子供どもが電車ごつこをしてゐる。

午後には○○○が各所に○○○、○○○○○○○するといふ噂があり、怪しき○人は○○○○たるべく各戸から男一人宛出て自衛の任に當れといふことが、誰いふとなく流布された。墓地向ひの水久保方面の家を空けて、私の近くの畑中に地震を避けて來た老婆達も急いで歸つて行つた。まるで亂世のやうな險惡な空氣となつた。○○○○○○○○○○個所には何等かの記號があるといふので青年團員などが探して歩るいた。門に記された家がたくさんあつた。私の家の門にも○○の記號が上下に記されてゐた。これでは災害が目睫に逼つて來た不安だ。し

かしこれは數日後に清潔會社の記號であるといふことが新聞紙上で發表された。しかし人々は今でもいづれが眞僞であるかを信じかねてゐる。日本人にとつては〇〇〇〇〇よりも、〇〇〇〇〇はもつと激しい當惑であつた。そしてまた恐らく〇〇〇にとつても……。そして東京の大半を焦土とした火のやうに物凄くもその〇〇が燃えた。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇であり得る。殊に時も時、多くの不遇な無産階級の人々が流離四散する悲運につけこんで行はれる〇〇〇〇〇は、日本人を極度に〇〇させたのであつた。私はこの郊外に於ても〇〇〇を提げた壯漢を見て異樣な感に打たれたいのであつた。

三日の夜はやつはり東南の空が氣味惡いほどの火の海だ、八時頃から向ひの細野老人と二人で門の傍に夜警に出た、細野老人は弓張提灯を竹垣に懸け、古びた安樂椅子を持ち出して『まあ、お掛けなさい』といふ。そこで私も籐椅子を持ち出して、呑氣に話し込む。洋服にレーンコートを着込み、心張棒を手にしてゐるが無類に呑氣な兵隊のやうである。細野老人は「五十年も生きてゐますとこれでなか〳〵いろ〳〵のことがございますよ」と世間の酸いも甘いも嚙みわけた味ある話ぶりで、深川の海嘯の時の話などをする。蠟燭が拂底なので、みな細野老人の厄介になる。一時頃に燃える「都會を焚く火」は空氣が清淨なためか燦爛として輝くとでも言ひたい美しさだ。そしてこの道路の隅で老人と話し込むのも趣あるものであつた。夜警は十間に一團位づつ出てゐたので、いかに人々が不安に襲はれてゐるかゞわからう。そして次から次と種々の情報が傳はる。たとへば

一、音羽一丁目に〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

二、小石川豊川町に〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

三、戸山ケ原に〇〇が〇〇〇〇してたので、あまり多いので〇〇〇〇〇〇〇〇。

四、〇〇〇が青年團に〇〇して來るが、青年團は帽子を被つてゐないから、その積りで注意せよ。

の類で、あまりに荒唐無稽の斷片的のものもあつたが、それが三十分毎に來て、なか〳〵平凡な夜警でもなかつた。一時ころになつて月が出た。青桐と椎の樹の向ふから。そしてやつぱり空は赤い。細野老人は、

『月しろがたちましたね。』

と言つた。その表現がひどく古風で、この夜の殺氣だつた情景と對照して、私に微笑を感じさせた。空に反映する火勢は衰へるけはひもなかつた。

二

ほとんど同一の歩調で同じ程度の着のみ着の儘の姿で、悲痛な疲れきつた表情で、同一の方向に、實に無數の避難民が大塚の終點に行くのを私は辻町に立つて見た。四日の午後である。

猛烈な火に荷物を出す間もなく、また荷物を出してもそれを燒いてしまひ、この世の焦熱地獄から漸く命一つだけを拾ひ物して、ほとんど生れた時と均しい貧しさに歸つた人々だ。中には焦げた蒲團や幾らかの家財道具を荷車に積んだものがあるもそれは百人に一人もない。足袋はだしで小さい風呂敷さへ持たぬ人々だ。六七人の列をつくつてゐるやうな密度で割り合に整然と歩るいてゐるのであるが、多く用事で反對の方向に赴く人々と交錯して非常な賑やかさを呈してゐる。

故郷のある者は故郷へ、また東京に居る者は何等かの方法で雨露を凌ぐために、この夥しい行列は、郊外に連なる東京からの數限りない道路の一つである此の辻町に於てさへ斯うした混亂を呈してゐるのであつた。大きな不思議な心臟のやうにたくさんの人を包含した都會は、いま急激に亂雜にこれ等の人々の生活を根こぎにして、もとの田園へと歸らしむるのである。しかし、彼等はもともと田園を見棄てたのである。都會で今また拒否された彼等に田園はどれだけの坐席を持つてゐるだらうかは疑はしい。

私は通りに面した提灯屋で不用心に備ふるために弓張提灯を求めた。提灯屋はあまり賣れ過ぎて字を書くのに眼が痛いと言つてゐた。急のことなので白張のに名を書いてもらつて、油はあとでひいてくれるといふことであつた。築地の堀に二日二晩つかつてやうやく命拾ひをしたといふ二人の青年が、見知り越しと見えて、提灯屋から玄米一升ほどをもらつてやはり同じく終點の方に歩るいて行つた。この避難民の行列は夜の二時頃までいつも續くと提灯屋は言つてゐた。

六日の午前に始めて其後の東京市を見た。音羽通りでその夥しい通行人の凡てが、洋服のものはシャツとズボンといふ服裝であり、和服の者は尻からげで、いつものやうな服裝は殆んど一人も見られなかつた。ネクタイや羽織は全く見られなかつた。自動車、自轉車はもとより、凡ての人々は最大の忙がしさを示して歩るいてゐた。

音羽九丁目でN君の宅に見舞に立寄らうとして横町をはいると、二三十戸ほど燒けたらしく一帶が燒野となつてその家は影も形もなく、やうやく、N君の立退先が小さい板に書いてあるのを見つけた。近隣の人に聞くと、一物も出さなかつたらしいがが家族に怪我はないやうで、二日の夕がた雨の降る頃までは後ろの久世山に居つたといふ話であつた。燒跡で金物など探して

る者があつた、私は呆然として暫くその邊を眺めてゐた。

大曲の花屋の前で偶然にも深川ずまひのF君が向うから來るのに逢つた。こんどの慘害は本所深川が最もひどかつたといふので、先づ案じられたのがこの友人であつたので、始めはそれがF君であるかどうか自分の眼を疑つた位であつた。花屋のまへの土管に腰かけて話す。六つに二つになる女の子を伴うて奥さんと共に無事に避難したといふことであるが手足に幾つかの擦り傷を負うてゐた。いつものやうに微笑を湛へて『所有物は何もかにもみな燒いてしまつたが、せいせいした氣がする』とも言つてゐた。そして『君のところへもお見舞に出かけやうと思つてゐたが……』とF君の方で言つたので、私は吹き出してしまつた。

○

飯田橋下から燒跡が始まる、文字通り焦土だ、燒けて機械のみ殘つた電車、ポスト、金庫、土藏、機械、何物もぼろぼろだ、燒けるものは何もかにも燒け、碎けるものは碎けた。風もないのに果てなくつゞく崩壞した煉瓦や壁からぼうぼうとあがる土煙、暑い日光、この殺風景極まる現實と追憶との中を例の服裝した人々がぞろぞろと通る。

「九段上から見るとすぐ海が見えるやうになつた。」と誰かが話したが、遠くは塵埃と煙とで薄曇つて見えない。たくさんの人が瞰望してゐる。梨、西瓜の商人、群衆、兵士、公園内にトタン屋根の下にうづくまつてる避難民、濠ばたの樹蔭の空地にも避難民が居る。最も鮮明に見える神田あたりの赤茶けた色！焦土の中にしよんぼりと丸の内ビルデングなどが見え少しはなれて三越の殘骸などが燻されたやうに立つてゐる。坂下の橋が燒け落ちてゐるので、その次の橋に迂回して駿河臺下に出て、丸善の角から神田橋の方へゆく。目標とすべきものもなく、電柱も多く黒焦げになつてゐるので、いつも來馴れた土地だけに痛ましい。

神田河岸に駐屯してゐた兵士のうち五人ほどが靴音高く神田橋の交番の方へかけ出した、何事かと見ると、間もなく、其の兵士と巡査にかこまれた○○が○○ひき立てられて來た。一人は白い洋服で脚絆、一人は白絣の日本服であつた。○○は不評判になつた二日から今日までよく隠れてゐたとも、その當心のほども思はれた。○○○○○○○○日に燒けた淺黒い顔に溢れる悲哀と郷愁とを私はまざまざと見た。

やはりその近くの河岸に人だかりがしてゐるので、行つて見ると、中位の行李が開けひろげられて中から粗末な單衣やシャツ、と共に五六冊の判取帳が飛び出してゐた。火に焦げもせずそつくりしてゐる。判取帳には『東亞堂取引帳』などといふ風に

一々取引先の名が記されてあつた。砂の上に頭蓋骨が一つある。まるで醫科室の標本のやうにきれいで肉一つ附いてゐない。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇遊んでゐるので、幸うじてそれと區別される。新しい骸骨といふものは、いやに青く光澤のあるものだと私は感じた。少し離れたところにその胴體らしいのが繃纏にくるまつて小さく焦げてゐる。行李の中には中版の寫眞がはいつてゐる、恐らくはその家族のであらう。少しも汚れてゐないので、手にとつて見たいといふ好奇心を起させるが誰も手にとる者もない。『逃げられなかつたのかなあ』と人々は見てゐる。河中には燒けた材木や布團や衣類が散亂して、いかに火の激しかつたかを示してゐる。

〇

神田橋は燒け落ちてゐた。日比谷の方から來る人のみを、橋の燒け殘りの二尺幅位の細長いものの上を匍つて渡らせてゐた。日比谷の方に行く人はそれより數間、川下の青い大きい水道の導管の上を渡るのであつた。渡るのに手間がかゝるので、長い行列がつくられてゐた。もとの職業紹介所の傍である。私もその列に加はつた。足もとには簞笥や手提箱の金具らしいのが無數に落ちてゐた、この邊は廣場であつたから運び出して燒けたものがある。やうやく私の順番が來たので水道の導管の上を渡る、洋傘と上衣と二つの握飯とを片手に持つて居るので不自由だ。女も渡るからと思つて輕く見てゐたが、堀も相當に深さうであるし靴では危險である。しかし長い行列の一人として今更戻るわけには行かぬ。危ぶなつかしくどうやら渡つてほつとする。

官省と會社の並んでゐた大手町の通りも凡てが崩潰して跡方もない。大理石とも見まがふ太い白い柱が土のやうに幾つにも折れてゐる。ごまかしの建築だといふことがわかる。木煉瓦の鋪道さへぼろ〳〵に燒けてゐる。淺黃服を着た勞働者の屍が荷車の上に乘せられて顏は布で包まれてゐた。

馬場先門から二重橋にかけての廣場には避難民の小屋がけで一杯である。お濠の石には尋ね人、迷ひ子、立退先を書いた紙が隙間なく貼られてある。

遠雷が鳴り空模樣が怪しくなる、風がさはめく。しかし人々は別に急がうともあはてた樣子もなく悠然としてゐる、しかし私は燒跡の臭ひと混雜との刺戟に可なり重い憂鬱と疲勞とを感じてゐた。そして燒跡の中で雷に逢つてはたまらぬと思ひかへして豫定より早く歸つた。雷の音が近づきいまにも驟雨が來さうである。驟雨はまだいいが雷でも强くなつたらことだと思つた。所々に燒け殘されてゐる十數丈もあらうと思はれる煙突は

緑も感じ易く思はれる。私は出來るだけ遠いた地震でためになつたのであらう。やはり燒け殘つた大きい時計臺の時計が十二時を指して止まつてゐる。雨はどうやら强くもなりさうもなかつたが、風まじりの大粒の雨が落ちて來た。

○

その翌七日のことである。東京全滅といふのに驚いて、東北の郷里から見舞に來た義兄と共に街の方に出かけた。東京には米を賣る店もないといふ話なので白米三升を持つて來たが、北千住からは汽車不通なので、それを背負つて來たといふことであつた。私は夜警に出て睡眠不足なのと、昨日いそいで足にマメを三つほど拵へたのだが、一緒に出かける。

その日も暑かつた。昨日も見たのだが九段の上から二人で眺望し、兩國に向つた。空が眞黑くなるほど怪しくなつたが神保町の邊で ひどい驟雨が向うから網のやうに見えて襲つて來た。茫々たる焦土の廣場なので、この風まぢりの豪雨には閉口したが、人夫小屋のやうなのが一つ立つてるので、その前に立つた。通行人も慌てて來る。傘を持つてゐない五六人は燒け散つたトタン板を被つて雨をふせぐ。雨は大粒で瀧のやうで廿分ほど續けて降つた。私は幸ひ洋傘を持つてゐたが、それでも下半身を降きつけられ、靴下をぐしよぐしよに濡らしてしまつた。日が照つて來ると雨の匂ひはいゝ。焦土の匂ひと暑さにこれ迄で悩つてゐたので、驟雨の來たのはてうどいゝ撒水になつたわけだと、トタン板にかくれてゐて騒々しい雨の音をきいてた人々は可笑しさに笑ひながら、それを棄て、私は洋傘をたゝみ、みんなまた歩るいた。しかしどれほど土が乾燥してゐたものか、あれほどの豪雨も、すつかり地面に吸ひとられて、間もなくもとのやうに埃があがるやうになつた。

どこまでもどこまでも焦土の道だ、蛇のやうにまつはる電線、たまに骸骨のやうに焼けて立つてる校舍、病院の殘骸、青銅のドームの崩落して臺坐のみとなつたニコライ。滿目たゞ親しみのない凄慘な氣分である。曾て罵つた東京市もいまは懷しい美しい幻影となつて現はれてくる。今は咽喉が乾いたからとて腰を下ろして氣持よく一杯のコーヒーを呑むことは、王侯も企て及ばない荒れ方である。

燒けた萬世橋停車場の前に廣瀬中佐の銅像は相變らず立つてゐるがその臺座の石は焦けて少しく缺けてゐる。美介橋のほとりに人だかりがしてゐるので近寄つて見ると、燒けた材木や瓦の上に死屍が三個ところどころに横はつてゐた。殊に驚くべきことは折からの上げ汐にこれほどの溝渠にさへ幾つかの死屍がのぼつてくるのであつた。十四五の少年、七八歳の小兒などみ

な顏を水面に伏せてのぼつてくるのであつた。

兩國橋の袂では十幾つかの荒莚にまるで鮭のやうに人間を包んで積み重ねてゐた。橋の左袂の欄干から下を覗いてる人々があつた。そこにも幾つかの死屍が浮んでゐた。交番の前にゐた人夫は「何が面白いのだ」と見物人を物凄く睨みつけた。

橋の右袂から永代につゞいて岸寄りに無數の死屍があつた。汽船發着所が燒けてゐた。私はそのほとりに火傷と水とにふくれあがつた幾つかの死屍を見た。姙婦と見えて〇〇〇〇〇〇してたのや、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、子を負うてともに燒死してる女、〇〇〇〇のやうに黑焦けになつてゐるもの、俯せるもの仰向けるもの、性の差別が乳房や白足袋によつて辛うじて判斷出來る程度に、燒けまたは腐爛してゐた。大きな鰻まで死んで浮んでゐた、たぶん生贄にあつたのだらう、顧みると線路向ひに稱非樓立退先を書いた板札があつた。ある屍の手の肉はまるで白い水草のやうにそよいでゐた。この岸づたひに百の屍を數へることは數分とかゝるまいと思はれた。隅田川の豐かな川水は、人間の血と脂とのためであるか赤黑く濁つて、上げ汐での溯りゆく屍は點々として數へられ、その間をモーターボートや汽船が水をうねらしてゆく、屍がゆら〳〵搖れる。災害後これだけの日を經て、水中のものはあまりまだ形づけられて居ないらしかつた。何とも言へぬ異臭が衣服にさへ染みこむやうにたゞよつてゐた。これは地獄繪以上の光景である。そして嘗て兩國の花火を見に來た夜の記憶が浮んで來た。これはまるでこの世に在り得べからざる光景である。しかも動かすべからざる事實だ。

〇

淺草の仲見世も兩側は燒け切つた煉瓦が壘々と亂雜に重つてゐるだけで　田舍の緣日の跡より寂しい。殘つてゐる石の鋪道を見ても、數日前まで華やかな輕い多くの足音のしたところとはどうしても思へない。淺草の瓢箪池のほとりの興行物も一掃されてしまつた。何にも殘らないのだ。過去に於ても現在に於ても――。淺草から上野へ直線に通ずる路は寺の多い所だが、石塔が倒れ焦げてゐる亂雜さは、どこか不思議な荒れ果てた村をゆくやうな感じである。たゞ芒などの秋草が茂つてゐないであらゆるものゝ燒けた焦土、石塊だけなのだ、これほど生々しい荒れた感じはあるだらうか。つねなら家屋にかくれてゐる上野の森が眞向ひに手にとるやうに見え、日暮里の停車場にゆく避難民の群衆が崖を下るのがはつきりと見える。

私はさきに書いたやうに一週前まで大森林の中に居て歩き廻つたが、原始的な森林ではネクタイやカラーがいかに贅物であ

るかゞよくわかつた、そして輕快な徒歩を望んだのであつたが
この焦土の都でも、人々は一切の贅物を身から脫して緊張して歩るいてゐる。プロレタリアの喜びに生きてゐる。動いてゐる。私は森林と焦土の都とにゆくりなく共通點を見出した。たゞ森林には諧調とオゾンがあるが焦土の都には騷音と塵埃があるだけだ。しかし、これが間もなく騷音の收まる時、こゝに灰燼の中から燦然たる新しき都市の自由な幻影が浮ぶのだ。否。現に浮んでゐる。

自然はつねに破壞する。人は大地の上に一枚の葉のやうに朽ちてゆくことを運命づけられてゐる、一切の建築物は歲月と共に腐蝕し崩潰する。たゞそれが徐々とである。大多數の上に一時に激動をもつて急激に襲ふ時、それは人間にとつて悲慘であり、慘事であり悲劇であることは言ふを待たない。

然し大地の上にはごまかしがきかない、獨り形ある建造物ばかりでない。精神の問題に於てもごまかしの上に立てるものはやがて急激に崩潰することを學べ。人間の成し得る最上の智識と良心と藝術とによつて地上に飾られねばならない。かくて有限な人間の力は自然の魔力と匹敵する。よしや人間が果敢なく死ぬことを運命づけられてゐるにしても、人間の美しい建設は永久に生きる。自然は波のやうに來ては人間の力を崩す。人間はまた新しい建設の歡びに輝く。人間の夢は　間に續く。

一種の寂寞とした感じ

葛西善藏

建長寺もどうやら殘つたのは山門位ゐのもので、佛殿、大方丈、龍王殿、新築の中學の校舍、伴僧坊、其他寺內の建物類一切つぶれてしまつた。僕のゐた寶珠院などは山の上でもあり、眞先きにやられた方らしいが、間一髮と云ふところで僕は外へ飛び出したが、玄關わきの茶の間にゐた老僧も婆さんも何かの用事で來てゐた門前通りの男の人も、三人とも下敷きになつた

のだが、幸ひに怪我はなかつた。建長寺では總理さんほか四五人負傷者が出來たやうだ。妙高院にゐた友人の川崎君夫妻も下敷きになつて、かなりやられたやうだ。何しろアッと云ふ間もないほどの早さだつたからたまらなかつた。僕なぞも部屋の後ろがすぐ高い岩の崖になつてゐるので、崖崩れを恐れて、グラ〱と來るとほとんど同時に机の前で顔を剃つてゐた剃刀を投り出して、玄關から五六間の短距離を夢中で裸足で駈け出し、芍藥畑になつてゐる僅かばかしの空地にしやがんでヒョイと後ろをふりかへつて見ると、もうつぶれてゐた。續いて別棟になつてゐた臺所もつぶれ、しやがんでゐたすぐ前の井戸の屋根は柱や釣瓶繩を引ばつたまゝ崖下の方へ吹き飛ばされたやうに倒れて行つた。別棟の小さな本堂だけは、後ろの大きな檜が途中から折れて屋根の上へ倒れかけて來たが、不思議のやうにつぶれなかつた。後ろの崖崩れは大したことはなかつたが、横手の方は搖れ止んでからもひどい勢ひで崩れてゐた。どれだけの時間だつたのか、十分か十五分位ゐの時間だつたのか、その間すぐ下の建長寺の方の騒ぎは凄まじいものだつた。崖崩れの音、建物の倒れる音、人々の叫び聲、兎に角この世の騒ぎとは思はれなかつた。自分はどうやら逃げ足早くかゝつて外へ飛び出したが、今にもしやがんでゐる地盤全部が崩れて來て、恐らく助からないのだらうと云ふ氣がされた。下敷きになつた老僧たちは無論死んだものと思つた。ウンともスンとも聲がしなかつた。さうした幾瞬間の後の一種の寂寞とした感じは、一寸忘れることの出來ないものだつた。

それからの騒ぎは、此際一寸書く勇氣も出ない。中學の化學室から火が出かけた位ゐで建長寺内では火事騒ぎは起らなかつたので、まだいゝ方だつたのだらうが、やはり同じやうな○○○○に脅かされ、その日から粥をすゝり、僕なぞも二晩野天で寢したりした。管長さん始め、僕なぞも○○など持つて○○○警戒に出たものだつた。

居場所と食糧の缺乏に追立てられて、手廻りの小さなトランク一つ脊負つて、六日の朝建長寺内を發足し、途中程ケ谷驛の庇の下の莚の上に假睡をして、翌朝東神奈川の町通りで玄米飯とおつけ一杯の施しを受け、そこからやつ〱汽車に乘つて品川へ來た。それからそちこちと轉々し歩るいて、昨今は本郷の下宿の一室に落付きのない氣分で發熱の身體を持運んでゐるが罹災氣分と云つては大袈裟だが何とも云へない時勢た氣持だ。まだ下町方面の中心地も見てゐないし、罹災者と云ふ方では僕なぞ物の數にもはいらない譯だが、精神的には誰しも皆かなりの打擊を受けてゐると思ふ。兎に角立派な革命だつた。僕なぞ

もこれから本氣になつて、本當の生活らしいものを築きあげて行けるかどうか、かなり心許ない氣がするが、それやこれやのことも、まだ一切茫然とした氣持だ。田舍へでも引込んで、やはり自分ひとりの小さな道をこつ〳〵と開いて行く――そのほかに仕様がないと云ふ氣がするが、しかし斯うした國家的な大事變を眼前に見てゐて、そのほかに取るべき態度がないと云ふ自、等の立場を考へると、かなりさびしい氣がして來る。五年間も居なじんだ建長寺の復興の姿も僕等の活きてゐるうちに再び見られることかどうか、そんなことを思ふにつけても、もうちきに四十の聲を聞くこれからの生涯を、出來るだけ眞地目に活かしたいものだと思ふ。世間一般の風潮もさうだつたが、文壇の氣分もかなりふやけ切つてゐた際だから、さう云ふ意味ではかなり好い刺激になつてゐることゝ思ふ。兎に角これからは、タカを括つて納つてゐられないやうな時代になつてしまつた。

災害中にあらはれた日本人の美點

文學博士　三宅雪嶺

東京府及び埼玉・千葉・神奈川・靜岡四縣に於ける震災は、驚くべき破壞を逞しくしたが、中にも東京市が市區改正を施し、耐震家屋を造り、再び安政二年の震害の如きを見まいと考へられたのに、之に勝さる大震害を蒙つた事、只管人の智惠の足らぬのを嘆ぜねばならぬ。震災調査會で地震の豫知と耐震の建築とを研究し、地震學で世界第一に誇りながら、一度び搖れ出し、約百億圓の富を失ふなど、人智を絞り絞つて兒戲に均しきを認めねばならぬ。全く震災を豫知したものないでなく、只地震計に據らず、六七十年乃至百年大震災を免かれずと云ふたのであつて、それが何時來るか分らず、來ないのに周章てるも可笑しく、來たら來た時として安んじて居つた時、豫期以上の禍を蒙るに至つた。鎌倉は頗る劇しく、殆と一震動で家屋の倒壞する勢であつたが、東京はそれ程でなく、山ノ手は瓦が落ちて、壁が破れる位のものであつた。下町は更に強く感じたが、戸數四

十一萬を失ふなど、思ひも着かぬところであつた。

强震と共に水道が破れ、消防の困難を告げやうとは豫ねて知られたけれど、眞逆かと思ふて過ぎ、實は豫想以上に甚だしかつた。歴史上幾回も大地震があり、小地震は數限りも無く、地震に慣れて居る筈であつて、幾年か過ぐれば殆ど全く忘れ、若しあれば仕方がないとするやうな所がある。その諦める所に、有るとも思はず、無いとも思はず、天災は人間で防ぎ難いものとして居る。

火事は江戸の華といふ習慣が減じ、少くとも火事だけは舊江戸と違ふと考へられたが、舊江戸にも滅多にない程の大火に出逢つた。幾年か大火が無かつた事とて平素の用意が無く、火除け地と思つた所へ火が追駈け來り、被服廠のみで三萬二千も燒死にした。江戸でも逃げ惑ふ者が多かつたけれど、今回と比べて何うであつたか。明暦の大火は今回よりも人死に多かつとし風が一層強くなかつたか。今回は火事を華とせぬだけ火事に慣れず、それだけ逃げ惑ふの餘儀ない所もあらう。それと云ふのも、火事に對する設備が整ひ居る筈であつて、一般に安心した所もある。從來の市區改正は他の點に於いて兎も角、防震の爲めに何程の効果なかつたのを證明する。効果あるべきものが効果なかつたので[illegible]一しは罹災民を惱ますだけね。[illegible]

併し日本は地震國であると云ひ、東京附近はその恐れの多い所であつても、强い地震が少く、餘り經驗を積んで居らず、いざ地震となつて駈け出し、火の元の用心を忘れるやうになる。震災を免れるが爲めに早く逃げ出さねばならぬが、餘程ならば格別、東京位では優に火の元の用心する遑があつた。奇妙なのは地震が終つて急いで自宅へ歸り、店も會社も銀行も燒けたのがある。自宅も心配になるけれど、既に幾箇所か火の手が揚つて居るのを見れば、責任者たる者、直ぐ準備を整へ、火事に大丈夫と見るまで待つて居るべきでないか。その點では場所も好からうが、住友銀行の如きは褒むべきである。三越は何といふ事か。日本銀行、三井銀行等があつて火事に大丈夫と思つたらうが、今少しく人手を備へて置けば、燒けたにしても幾許か防ぎ止め得たらう。地震で人が居なくなつたが爲め、只さへ燒のるのが、愈々多く燒けるやうになつたのかないとせぬ。水の出ないのは仕方ないとし、防火の窓をも締めぬのを何と云ふべきか。窓を締めても、可燃性物質の獨り手に燃え上るので仕方がないのもあつたにせよ、多少盡力して抑へ得たらうと思はれるが、何といふものか。

水道の力が無くて消防が役立たなかつたと云ふが、近隣で家屋を破壊するのが何れ程の効果あつたか。何の[illegible]から何の[illegible]

で毀して可いか、早く簡要な所を見付けて着手したならば、或る方面は防ぎ止め得たらうに、普通に練習のない事とて、其の邊を旨くする譯に行かなんだと見える。耐震用耐火用の家屋さへ災を免かれぬ程であつて、マッチ箱同樣の家屋が一堪りもないのは、巳むを得ぬと云ふものの、いくらか地震に驚き、落着きを失つたのに據らぬとせぬ。地震は何程か船と同じく、人によつて可恐がる程度を異にし、悪る落着いて、鴨居の下敷きになるのもあるけれど、實際に恐るべきよりも恐れるものが多いやうである。恐れて逃げ出す者があれば、それ程でない者まで逃げ出し、全く火の用心を忘れたりする。地震に慣れるといふのも難しからうが、此の邊は何とか心得あつて然るべき所とする。

併し市區改正の宜しきを失ひ、適當な火除け地なく、無殘な死を遂げた者の多い割合に、人が道を讓り、老人や女小供を助けた所は、世間で豫想した以上に出でて居る。平生電車で足を踏んだとか踏まぬとかで喧嘩する者の珍しくないのに、生命財産に危險の降り罹つて居る際、自身の不利を忍び、人の利益を計らうとする所、良心の發露と云はうか、何と云はうか、美しい行と云はねばならぬ。いろいろ悪事を爲し、町内の爪彈きとなつた者が、軍服を着て出征するとなつては、其日から見違へつたやうになつた事、前年の戰役に明かにせられた所であるが、少くも日本人はさういふ特徴あるとして宜からう。戰爭と云ふ聲の下、少さな利害關係を忘れ、奮闘して死なうとする。只、幾度も突貫し、死生の巷に徘徊し、義勇奉公の權化となつて凱旋した後、元の杢阿彌に還り、悪事を働くのが無いとせぬ。若し戰時の氣分を以て平時に處したならば、罪悪の大部分が消滅するであらう。かの大震災大火災で人の波を打つて逃げ歩く內弱きを劬る所、涙の出る程美はしさを覺えるが、平生それ程の氣分が表はれれば、共同一致に何れ程便利を覺えるか知れぬ。纔ばかり利益ある所、その爭奪に夢中になつたりするのは、淺猿いとも何とも云ひやうがない。大きい所も小さい所も、その跡を見る。何處にも我利我利亡者の居るのに愛相が盡きるが、その亡者が死ぬか生きるかの塲で人を劬けるとは、何といふ有難い事か。學校で敎へたのでなく、區役所で勸めたのでなく、何の儲けもなく何の褒美もないのに、人を助るのは、天性とでも云ふべきであらう。之を平時に助長したならば立派なものにならう。それとも平時に助長し難いとするか。ウラル・アルタイ民族は曾て成吉思汗の下、戰へば必ず勝ち、攻むれば必ず取り誠に世界を震動した。ナポレオンの兵法もそれから系統を惹いと居ると云はれる。兵法よりもさういふ大團結大運動が力となるのであつて、元はと云へば、かの民族が危急に臨んで助け合

ふ所あるに操るのでないか。それを東京市民に押し及ぼすのは餘りに懸け離れて居るやうに聞えても、一道の脈絡が傳はつて居らぬとせぬ。歐米各國から歸り來つて日本人の公德心の乏しいのを罵つた者が、火事場、逃け惑ひながら人を助けるのを見、之れはとばかり感心せずに居れなんだ。外人もその困難の際に我れ先きにと爭はず、人に讓るのを見て感心した。皆が皆さうと云ふでなく、中に惡いのもあるが、一般に胸中に潛んだ美德を表はしたと云はねばならぬ。

大震災は不可抗の勢とし、大火災は何程か人力にて程度を狹ばめ得たらうと惜しまれる。將來の注意を求めると同時に、吾等同胞民族の中心に美德を備ふるを力強く思はずに居られぬ。之を助長すれば何處まで到達するか、有事の日にのみ限らぬやうにありたい。

續地震考

國富信一

春秋文公九年秋九月癸酉地震、杜曰地道安靜以動爲異故書。

私が本誌大正十一年六月號に地震考を載せてから一年餘にしかならない今日、又も地震に就て書く機會に到達した事は實に遺憾に耐えない次第である。其の時にも斷つた通り私は地震學者では無いから私の玆に書く事は地震に關する事實の記載であつて將來起るべき地震などに關しては一切責任のある筆を採る事は出來ない事を先以て御承知願ひたい。又地震の性質とか起因とか又は震源の推定法などに就ても前述した「地震考」中へ可なり詳細に說明したつもりであるから其の方面の事も今回は觸れないで置くつもりである。

所で先づ今回の大地震の事を記載する順序として地震に關する古い文獻を漁つた後、德川幕府以來江戸に起つた激震に就て筆を起して見やうと思ふ。

地震に關する古への記述

地震は地動く也和語「ナイフル」震は振に通ず。即ち地震の事を「ナイ」又は「ナイフル」と和語で云つて居るが今でも北

陸地方などで「オイ山」の語を地震に用ゐて居る所もある樣である。

地震に關する古い說述では公羊傳に「地震者何動地也何以書記異也、註天動地靜常也地動者象陰爲陽行是時魯文公制于公子遂齊晉失道四方叛、とあり。穀梁傳註曰穀梁說曰大臣盛將動有所變。又史記周本紀曰幽王二年西周三川皆震伯陽甫曰周將亡矣天地之氣不失其序若過其序民亂之也陽伏而不能出陰迫而不能、蒸於是有地震、今三川實震是陽失其所而塡陰也陽失而在陰原必塞原塞國必亡。

此の外支那の古書には斯かる記述が少なくない。が然し其等を一々玆に記述するのは愚であるから其等を總括したとも云へる西川求林齊如見の「怪異辨斷」中の地震の辨斷を記載して見やう。

「地震の吉凶古書に記するもの甚多しと云ふも唯其要說のみを右に記す、又大地震正史に載る處のもの不可勝計和漢ともに多き事也、皆略之其尤き者二三を出すのみ、諸史に載る所は皆大地震にして尋常の地震には非ず、尋常の地震は每年有之と云其世俗珍しとせば春秋經に載る處の地震二百四十年間に五度也。凡五十年に一度也日本にても大地震は稀たる事なり。

按に大地震山崩地陷るの類は後の吉凶を占ふに暇なく卽時の災異なれば占ふに不及處の凶變なり。古の占候に地陽其所を失ひ陰に塡げらるゝに因て地震す此故に大臣盛んにして動き變ぜんとするの占兆也と云り。然れ共素門の說に從ふときは地震は風氣の所爲也、風は陽氣也陽氣地中に靜伏して暢んとし陰氣と奮擊して大地動く也人身風熱あるときは一身動搖し經脈震動するが如し。風熱も元寒冷の陰氣を身に受て陽を侮る故に陽氣奮擊し大過して風熱となる素問に風勝と云は此理ならん。畢竟、陰中の陽氣也と可知陽其所を失ひ陰氣に塡らるゝの說と素門の說と凡同して少異なり。素問の說尤道の義なる歟又異說左に記す、

阿含經曰地在水上水止於風、風止於空、空中風大有時自起則大水擾大水擾則普地動。

此說と風氣の所爲に因て地震すと言に似たり地は水上に在の義、素問に大氣擧之の說と大に異なり。委くは一旦の辨ずる處に非ず。又地震の魚の說世俗にあり佛說なるにや風大に時有て自ら起とあれば風を以て魚としたる者歟。如何さま故あらん。魚は陰中の陽物なれば風にたとへて言るならん。何れにしても正理には遠き說なり。日本の東南の方に学識(せい)と云國あり、地震甚多く地陷り或は地裂等不絕有之よし聞傳ふ此外地震多き國世界の中に多しと云。」

此の說に依れば大體は陰陽說を是認して地震を說いてあるが此の說も正理には遠いものと考へてある。然し未だ學問の基礎が確でない時代であるから所謂共の正理も摑むに術がないのは勿論である。又日本の東南方に学厲と云ふ地震の多い國のあると云ふのは如何なる國か私には見當もつかない。

然し前述した樣な說は單に荒唐無稽の說として捨てる事は如何にも惜しい事で學問の變遷の上から考へても興味深い事でなくてはならない。故に玆に貴重な紙面を汚して敢て轉載したのである。

江戶から東京迄の地震

次に今回の地震を記する前に德川氏が江戶に移つた天正十八年以後、江戶の地に起つた地震を江戶年代記、震災豫防調査會報告其他の文書に依り年代順に記述して見るのも興味ある事と思ふ。

然し江戶の地震と云つても勿論歷史に殘る樣な地震のみである事は勿論であるが其の最初は慶長九年閏十二月十六日上總、安房、武藏、相模の大震に始まる。

一、慶長九年十二月十六日の地震　此の時は房總では陸地の隆起、津浪などの災害があり。其の津浪は東海道、南海道はては九州方面迄も餘波を及ぼした程であつた。

二、元和元年六月一日　此の地震も可なり激しく、家屋の倒壞人畜の死傷も少なく無かつた。慶長九年より此の年迄十年を經て居る。

三、寬永五年七月十一日　此の時には江戶城の石垣の崩壞した處があつたと云ふ。元和元年より十三年を經て居る。

四、寬永七年六月二十三日　前回と同程度のものらしくやはり城の石垣など所々に崩れて居る。

五、寬永十二年一月二十三日　やはり江戶の地震で增上寺の石燈籠が凡て倒されて居る。

六、正保四年五月十四日　武相兩國の强震で江戶でも被害多く馬入川の渡し場も壞れ、上野の大佛の頭が落ちたのは此の時である。寬永十二年から此の年迄十二年である。

七、慶安二年六月二十日　江戶年代記には六月八日とあるが此の時も前回と同じ位の程度で東叡山の大佛の頭は再び落ちたとある。正保四年から二年を經て居る。

八、慶安二年七月二十五日　此の時の地震も大したものでは無いが川崎で倒潰家屋があつた。

九、寬文十年六月五日、相模の國の地震である。慶安二年から二十一年。

十、元祿十年、武相兩國の地震で鎌倉の八幡宮が被害を蒙つて

居た寛文十年から六年を經。

十一、元祿十六年十一月二十三日　武相及房總の大震で之れが今回卽大正十二年九月一日の激震と非常に善く似て居るものである。此の時には江戶、小田原が大分被害があつた模樣で海岸地方は海嘯の災害を被るし、房州方面は土地の隆起のため一里餘も干潟になつて仕舞たとある。江戶でも見附の崩壞、大名屋敷の倒潰等被害多く且又火災さへも起して居る。小田原でも地震に伴ふ火災のため五百軒足らずの家が燒け死者も震災地全部を通じて五千二百三十三人と稱せられて居る。

十二、文化九年十一月四日武州の地震で神奈川から品川迄家屋の倒壞等があつた。元祿十六年から百〇九年の年月を閱して始めて玆に地震らしい地震があつたのは大に注目すべき事ではあるまいか。

十三、安政元年十一月四日　之れは東海道大地震であつて朝の九時頃に起り、西は相模甲斐、信濃から近江、伊勢の方面迄も倒潰家屋があつた。中にも最も災害の激しかつたのが伊豆の西北端から天龍川に至る一帶の地で江戶には大した被害も無かつた樣である。文化九年から九年經つて居る。

十四、安政二年十月二日　所謂江戶の大地震であつたが震災地域は至つて狹く直徑五六里位が破壞的であつたに過ぎない程の局部的の地震である。此の時の地震は有名である丈け古老からの聞き傳へなどに依つて讀者諸氏も旣に御承知の事ではあるが、夜の十時頃に起つて諸所に火災を起し死者は市內合計三千八百九十五人であつたと云ふ。然し此の時の災害も市內は本所　深川、下谷、淺草、神田等の地盤の弱い所に多く、山手方面は至つて輕微であつた。又火事も風がない夜であつた爲め、始め三十餘個所から出た火も皆大事に至らずして消し止めて翌曉迄には大低鎭火したと云ふ。

安政見聞誌には委しく此の地震の狀況を記述してあるが其の中に地震火災やくはらひの文句があるのが仲々面白い。

「ア、ラでつかいな〳〵今ばん今宵の大災を神の力ではらひませう。十月二日三ケ日町並お門を眺むれば、三國一夜のその內に土藏や壁の不じの山、かゝるうき目に相生の松丸太から杉丸太、飾り立たる諸道具を、お庭の外へ持運び、野宿する身の苦は病ひ五七が雨とふりかゝる瓦や石の目にしみて涙にしめる燒原の晝夜寢ず番自身番火の用心や身の用心、春ならねども皆人の萬歲樂とうたひそめ、かぞへた柱もおれ口からおめでたくなる人の山、之れも世直し出雲から立かへりたる神々のふみ固めたる芦原皐國、千代に八千代に要石の巖となりて苦のむす、ゆるがぬ御代をはゞからず又もやひたをかぎ

つけて、ぬらくらもの丶鯰めが、惡く尾鰭を動かさば、鹿島の神の名代に、此事ふりがおさへつけ高天が原をうちこしてみもすそ川へさらり〳〵。」

安政二年の大震は龜有から本所深川へかけてが震源らしく極めて局部的のものであつたから大さは今回のものよりは勿論少であつたらうと思はれる。

十五、明治二十七年六月二十日　此の地震は午後二時四十分に始つて居て、實動二寸四分、震源は若柳方面から東京を經て東京灣に至る地帶と稱せられて居る。被害も家屋の倒壞垣の崩落など多く、全潰家屋は市部に十九、郡部に二十二であるから昨年四月又は一昨年十二月のものと大差ない。安政二年からは三十九年を經過して居る。

十六、大正十年十二月八日　午後九時三十一分三十九秒に起つた明治二十七年以來の强震で震源は東京を北東に距る七里半江戸川流域一帶の地で讀者の記憶に新しいものである。明治二十七年より二十七年を經て居る。

十七、大正十一年四月二十六日　此の地震は二十六日の午前十時十一分三十六秒に始つて震源は中央氣象臺の中村博士の研究に依ると木更津地方にあると云ふ。之れも我々の記憶に新らしい所である。

斯くの如く江戸が始つてから既に十七回の大地震があり其の中にも激しかつたのは元祿十六年の地震と安政二年の江戸地震とであるが後者は前にも述べた如く江戸の局部に限られたものであるために今回の大地震とは大に趣を異にして居る。

大正十二年九月一日の激震

九月一日は丁度土曜日であつた。私は中央氣象臺の自分の室で折柄晴れた暴風雨後の暑い晝を、上衣を脱いだまゝ机に向つて居たが十二時二分程前と覺える、かなり强い上下動を交へた初期微動が感ぜられた。私は何とは無く直感的に之れは大きな地震だと感じたので同室の人にも注意して室外に逃れ出たが間もなく主要動に入つて物凄い響を立てゝ木造の本館が搖れ出したのである。そうして二階から波を打つ樣な階段を下りて廣庭に立つた時は七階の風力塔も九十尺近い信號塔も芋莖の樣に振られ、大地は我々の直立を許さない樣に搖れ返つて居た。暫かに眼を開くと神田一帶の地は家の崩壞に依つて起る土煙に蔽はれて天地晦冥と云つても善い位の慘狀を呈しつゝあつた。

私は此の大震に就て其の原因とか其の震源とかを詳記すべき材料を今玆に少しも持合せない。其れは地震と共に地震計の大部分が破壞された事と、當時八十餘ケ所から一時に起つた火災のため遂に中央氣象臺も烏有に歸した事と、交通、通信機關

の杜絕に依つて地方の各測候所からの情報を窺ふ事の出來ぬ爲とである。

然し地震以來地震掛主任たる中村博士は日夜に各震災地を視察して此の地震の研究に沒頭して居るので其の情報と、私が又同博士と共に厚木、大磯鎌倉方面を視察した見聞とに依て大略を記述して中央公論社の依賴の一端に應じ様と思ふのである。

新聞紙の傳ふる所に依ると今回の地震は伊豆七島の噴火に依るものであるとあつた樣に覺えて居るが事實は全く之れと異つて中村博士が驅逐艦江風に乘じて伊豆大島及房總方面を視察した報告に伊豆の大島の被害の輕微であつて、僅かに岡田村で山崩れのために住家三棟倒壞したものと野增村で家屋半潰三あつたのみで、三原山も平靜なる事を報じて居る。然も房總は被害却つて大きく館山、北條などは全町殆ど全滅したと云ふ。

又厚木方面は被害頗る大であつて、平塚、藤澤、鎌倉、小田原方面と共に震害の最たるものであつた。然し茲に面白い材料は湘南地方、三浦半島、房總半島一面の土地の隆起と大島、伊豆稻取沿岸の海底の低下とである。

土地の隆起は大磯地方で土地の人の話に依ると約三尋で、三崎、房州方面も之れに準じ、大島、稻取沿岸では却て二三尋の低下を見て居る。又各地に於ける初動の方向を取つて見ると何れも外方に向つて此の地震が陷落又は斷層に基因するものである事を示して居ると云ふ。即ち之れ等の事實に依つて見れば今回の地震は相模洋の南西部に起つた陷落と其の反動として湘南地方、三浦、房總兩半島地方の土地の隆起に基因するものであると云ふ報告が同博士に依つて發表されて居る。

之れで今回の地震の原因が確かになつたのであるからもう我々は今後當分は再び東京地方に今回の樣な大地震が再發すべき恐れの無い事を想像するに難くないのである。元來土地の陷落及隆起は永い年月の間に次第に蓄積せられた其の地方の地殼の不安定が一時に回復された爲めに生じた最後の安定なる狀態でなければならないから、隆起した土地が二週間後に再び陷落して九月一日の樣な地震が十五六日頃に再發する等の如き流言は全く取るに足らぬ妄言と稱すべきではあるまいか。

現に明治二十四年十月二十八日濃尾地方に起つた地震災に依つて生じた斷層は今も尙歷然として跡を止めて居るのに徵しても地震に依つて生じた土地隆起は其地方の最後の安定な狀態である事を認容すると同時に其れが近く再び低下する恐れの無い事を知る事が出來やう。

大地震に伴ふ流言は單に今回に止まらないのである。或は今日の何時何分に激震が來るなどゝ云ふは日本に限らず外國の大震の際にも宣傳されたる事であつて斯ゝる人心不安な時には有勝ちな事と思はれる。然し我々は將來來る可き地震を適確に豫知し得ざる今日の狀態の下にては斯る流言の全く無意味なる事を知つて只單に地震後に引續き同じ地方に同程度或は其れ以上の激震が起り得るもので無いと云ふ地震學者の說を肯定するに吝ならざる事を欲するものである。

時論

法學博士　吉野作造

保險金支拂問題

一、

火災保險金支拂の有無は、帝都復興の將來に重大の關係を有する問題であるが、併し保險金支拂の義務を、法律上會社に強制することが出來るものか何うか。出來ぬとすれば特別の緊急勅令を以て臨時に支拂義務を強制すべしといふ議論もあるが、この種の議論に我々は道德的の根據を認むることが出來るかどうか。之等の點は余程愼重に考ふる必要がある。

二、

予輩の信ずる所によれば、單純な法律問題としては、各保險會社に保險金支拂の義務はない。今法律の條文が手元にないから正確な文字は分らないが、商法法典の火災保險の部には、戰爭その他の變亂によつて生ぜる損害は特約ある場合の外會社に補償の責任がないといふ様な規定があつたと思ふ。かゝる規定を設けた立法上の理由は、之等の場合に於ける損害は非常に多大にして、會社は到底その負擔に堪へない。強て補償の責任を盡させやうとすれば會社は破産するより外に途はない。凡て保險契約は普通の場合に於ける損害を補償する意味で結ばれたものだと觀なければならないと云ふに在らう。斯ういふ立法上の精神から推せば、今度の様な結果を來たした地震の如きは正に商法の所謂その他の變亂の一種と觀るべきは疑を容れない。變亂といふ文字は戰爭といふ字と相並んで一揆暴動の類を意味するものと普通は説かれたけれども、地震も亦その中の重なる事項だといふ事は、少くとも先年の桑港事變以來段々主張せらるゝ様になつた。從つて商法の條文から推しても、今度の場合に會社に支拂の義務のないは疑ひないといふべきである。

加之最近の保險證券には、特に地震其他に因する火災の損害は

會社で辨償しないといふ一項を設くるを常として居る。而してこの箇條は前記商法特別條項の立法的精神からいつても、重要にして且つ當然の約款であるから、他の場合に往々見るが如く之を輕視するといふ譯には行くまい。

之を要するに、會社に向つて全額の支拂を要求すべしといふ說は、少くとも法律上何等の根據はない。

三、

それにも拘らず、世間には昨今頻りに會社の支拂義務を云々する聲は高い。民間の輿論としても、會社からは一文も取れないから、思切つて諦めやうといふ樣な說は更に聞くことを得ない。予輩の考ふる所によれば、これ世間が會社の支拂義務を誤り信ぜるが爲めではなくて、法律上は知らぬが、少くとも道德上會社はこの儘默つて濟まされない筈だと認めて居る爲めであらう。換言すれば法律上の義務はないか知らぬが、道德上會社は相當に補償の途を講ずるに違ひないと期待して居る爲めであらう。

道德上の義務として相當の補償をなさしめやうといふ說には予輩も贊成だ。會社は保險契約者から既に澤山の金を取つて居る。普通の場合なら如何に損害が大きくとも契約金額を拂はなければならない。只今度のは地震に原因するからとて拂はなくてもいゝといふのでは餘りに蟲がよ過ぎる。人の災によつて自ら不正の富を積むといはれても仕方がない。斯く道德的義務を認むる點については異義はないが、之を實現するに如何なる方法を執るかについてはいろ／＼說の分るゝものがあらう。最も理想的なのは會社が自發的にこの男らしき態度に出づることであるが、場合によつては法律を以て之を會社に强制するの特令をこの際規定しても一向不都合はないと思ふ。この點について予輩は特に會社と當局官憲とに向つて愼重なる考究を煩はしたい。

會社の自發的行動に出づる場合と、政府の强制による場合とを問はず、具體的な問題として一番面倒なのは、この道德的義務の限界を如何に定むべきやである。法律上の義務でないのだから、現に有する資產以上の負擔を負はしむべからざるは論を俟たない。さうすると世間の一部には資產全額を提供せしめよといふ說があるが、之は飛んでもない謬說である。何となればその資產に向つては罹災地外の保險契約者も亦一種の利權を有して居るからである。所謂帝都の復興に熱中するの餘り、他市の保險契約者の利益を蹂躙してはいけない。そこで道德的支拂義務の限界は現に有する資產以內でなければならぬといふこ

とになる。

現に有する資産の範圍內で大約何の邊に限界線を畫していゝかは、技術上の問題として專門家の算定にまかしておかう。必ずや何からうまい標準があるに違ひないと考へる。僕の即座の思付きとしては次の樣な二種類の案も有り得ると思ふ。一は各會社の資産全額を、罹災地に於ける總保險金額と、罹災地以外に於けるとそれとの割合に按分し、後者を罹災地以外の契約者の利益の爲めに留保し、前者だけをそれ〲各保險契約者に按分分配することである。二は若し地震といふ出來事がなかつたら、同じ狀境の下に起れる火災はどれ位の範圍であつたらうかを推測し、その程度の補償義務を認むる事、實際問題としては最近に起つた最も大きな火災の場合を想像し、之を標準として會社の義務の限界を定むるといふことも一方法かと考へる。例へば最近某市の大火では全戸數の一割を燒いたと假定する。さすれば東京の全戸數を假りに五十萬とすればその一割は即ち五萬だから、五萬といふ標準計を算の基礎とする。さうすると實際に燒けた戸數は三十萬だから、五萬は即ちその六分の一だ。從て各保險會社に保險金額の六分の一宛を補償せしむるといふ仕組である。

以上は何れも突差に思付いた一例に過ぎずして之が一番正しいといふのではない。こんな風にも決められるといふ一例を示した迄で、尚更に深く考へてもつと正しい標準の發見されんことは予輩の切に願ふ所である。

四、

保險金支拂問題に關聯して此所に二つの暴說を警戒して置きたい。

第一は保險會社をして出來る丈け多く補償の責任を盡さしめんが爲めに、政府に迫つて會社に財政的援助を與へしめんとする提案である。會社の現有資産の許す程度の支拂資金に同額の補助を國庫より補給し、その總計を契約者に支拂しめんとする說の如きは、穩健の外觀を具へるだけ俗耳に入り易いが、他方には圖に乘つて政府の補助を充分にして全額の支拂を會社に果たさしむべしとする勝手な議論もある。後說の許すべからざるは元よりいふ迄もないが、前說と雖もこの際かゝる方出に出づるのはそれだけ救恤資金を侵蝕する結果となり、却つて當面の急務を誤るものといはなければならない。況んや之によつて利するは保險契約者即ち少數の有產階級に過ぎざるに於てをや。要するに保險會社のことは保險會社だけでやらせる。遣方については充分干渉するの必要はあらうが、金については毫末も心

張する必要はないと信ずる。

斯くいふと一部の人は直ちに保險金でも貰へねば家が建たぬと反駁するだらう。家が建たねば帝都の復興も急速にはかどらないが、併し住家建設の資金に苦しんで居るものは保險契約者ばかりではない。否寧ろこの種の契約を結ばなかつた罹災者の方が餘計に困難して居るに違ひない。數もその方が余程多からう。政府としては又會社としては常にこの兩者に一視同仁の態度をとることが必要だ。故にどうしても金がなくて家が建たぬといふなら――而して政府に之を授くる財政的余裕があるのなら――相當の標準に基き、一般罹災者にそれ〲資金を供給したらいゝ。この點に於て火災保險契約者と然らざるものとを區別する必要はない。遣方の如何によつては、若し政府で保險會社を援助する樣なことがあると、その實際上の結果は保險契約者は契約者として及び又一般罹災者として二重の補給を受けないと限らない。何れにしてもこの種の提說は、折角の救恤資金を上に厚く下に薄く分配するの結果を齎すに過ぎないと考へる。もう一つの暴說は「放火その他震災以外の原因にて起つた火災については」保險全額の支拂を要求する權利があるといふ說である。代理要求の引受を新聞に廣告したものもあるから、この種の運動も既に開始されて居ることと思ふから、特に一言して置く。第一今度の火災に放火その他震災外の原因にて起つた火災といふものがあるか何うか、又之を證明する手立てが備つて居るか何うかが甚だ問題だと思ふ。一時×××の放火といふ流說もあつたが、調査の結果全然無根だといふことが明かになつた。何れにしても今度の火災は一應は地震に原因するものと認定すべきが當然だから、その外の原因に出づるといふことを主張する爲めには、明白な證據をこの方から提出する必要もあらう。加之假令此點が立派に證明されたとしても、普通契約約款には「原因の直接たると間接たるとを問はず地震に伴つて起れる火災については責任を負はず」といふ樣にあるから、保險契約者に支拂請求權の成立たざるは同一である。

只に法律上無根據だといふばかりでなく、道德上からいつても今日の如く罹災者の夥しく多數なる場合にあつては、自己一身の利益の爲めに他の多數者の利害を顧ざるは甚だ穩かでない。自分と同じやうな境遇にあるものが、他に數限りなくあるといふことを考へたなら、自分一人の安逸を犧牲にして他の多數者の利益の繫る基金は一文でも多くしてやるのが德義だ。商賣として代理要求の引受を新聞に廣告する者はあつても、同胞の良心は恐らくこの種の要求を敢へてしないだらう」。

五、

我國ではいろんなことがよく運動で効く。無理なことも政黨の運動などによつて通ることが決して珍らしくない。而して之等の運動を制する唯一の途は健全なる輿論の作興の外にない。保險金問題については飛んでもない支拂義務説が各方面に唱へられて居るので予輩も遂にこの大勢に反抗する急務を認むるに至つた。問題そのものは小さいが、關係する節は極めて大きい。切に讀者諸君の愼重なる考察を煩はしたい。

小題小言

○

僕は帝大の食堂で色々の專門家と會ひ、色々違つた話を聞く機會を有する。二三年前地震の專門家からこんな話を聞いた。東京の水道の耐震設備は極めて不完全なもので、少し强い地震でもあつたら目茶苦茶に壞れるだらう。萬一の場合を想像すると戰慄に堪えないので、大した困難な事でもないから今の中に相當の處置をして置いたらよからうと、屢々その掛りに建言したけれども殆ど顧られないと。余り强く主張するとお役人から煙がられたとか、世間に發表することは遠慮して貰ひたいと頼まれたとかいふ樣な話もあつたと思ふが、今となつてこの點の記憶がはつきりしない。又建築專門家からこんな話を聞いた。今の東京市は火といふ方面から見れば、まるで大都會の面目を持つてゐない、耐火建築といふものはちよい〳〵あるが、之も完全なものでないは勿論、その間に澤山の木造家屋が散在して居るから、寧ろ火を呼ぶやうに出來てゐる。我々專門家は迚も怖くて下町などには住めない。一般市民が平然として枕を高く眠つて居るのは眞に驚歎の外はないと。之等の話を今にして思ひ起して見ると、まるで今日を豫言して居るものの樣でもある。之等の學者の警告にも少し眞面目な顧慮を拂つて居つたらこんな大災はなかつたらう。畢竟するに今度の災害は不測の天災とはいひながら又一面には確に怠慢の罪でもある。學者の空言は非常の時に至つて始めて思ひ當ることがある。が此時始めて思ひ當る樣では困るのだ。

○

今度の天災ではピンからキリまで何れ多少の損害を負はぬはないが、中にも我々の或る意味に於て聊か痛快に感ずるのは、特に浮華輕薄なるものゝ多大なる毀滅である。一寸目には平凡

な物の樣でも手を拔かない堅い工事はビクともしない。昔の左官は火事と聞くと直ぐ自分の造つた土藏の傍に行つて、若し燒落ちでもすると直ぐ腹を切つて天下に謝したとやら。蓋し彼にとつてはその作物は卽ち彼の人格の表現に外ならぬのである。近頃の仕事はそんな目に見えぬ所に骨を折るのは馬鹿氣てるとされて居る。見榮えがよく、金が安ければいゝ。豫算よりも工費を非常に安く仕上げたとて、賞金を貰ひ、博士に推薦された技師もあるが、帝國ホテルを造つたライト氏は金がかゝり過ぎるとて放逐された。帝國ホテルがいゝか惡いかは別問題として兎に角最近の好尙は著しく質實を離れてゐたのに、今度の災害は正にこの風潮に對する一大鐵槌といつていゝ。今まで歡迎された[illegible]の總ての代表的建物は見る影もなく倒れた。輕佻浮薄は結局凋落せねばならぬ運命にある。この事について我々は今度の災害から大いに敎へられる所なければならない。

○

今回の災害を一つの精神的敎訓として受取るべく目下尙未だ人心の緊張に充分ならざる嫌がある。災害の甚しきに面喰ひ、又その復舊に忙殺されて居る所から、未だ靜に內面的反省に入る能はざる所があるのだらう。今日の場合それも致方がないがそれでも我々はその間色々の緊張を認めないではない。例へば最近の奢侈虛榮の弊風はひどいものであつた。今度の災は正に天罰だなどといふ樣なとは道行く彼これの群れに最も普通に交換されるを見る。どれだけ深く考へてるのかは分らないが、兎に角人々の心の底に一種の道德的悔恨の情の兆して居ることだけは疑を入れない。只これが一時の思付きとして終るか、又は更に發展して將來の生活を改革規律する原動力となるかは、今後の發展に俟つ外はない。

○

人心の緊張の傾向と共に喜ぶべきモ一つの現象は、奉仕的氣分の著しき勃興である。一杯五錢のすいとんの廣告にも、社會奉仕の文字を往々にして見る。一時の流行といはゞいへ、これを書いて得々たるはそれ丈け社會が奉仕を美事とするの風潮を趁ふものといつていゝ。若しそれ今度の災害に對する靑年の義俠的努力に至つては、奉仕獻身の精神の事實に於ける發展として最も特筆大書するに値する。尤も多少度を越えたといふ非難をさるゝものもある。多少の例外は決して全體としての成績を著しく減却することは出來ない。この點に我々は一つの貴ぶべき傾向を靑年の間に見るを喜ぶものである。而して今後益々之を誘掖助長するの要あるはもとよりいふまでもない。

○

今度の災害を期として新に起つたもので、更に之を將來に持續したいと思ふものは澤山ある。もとより色々改良修正を加ふる必要はあらう。之等の點については諸方の諸官廳有志家殊に教育家並に靑年有爲の士の協讃に俟たざるを得ない。自警團の如き、暴利取締に關する社會的制裁の如き、交通整理の如き、その最も主なるものであらう。電車に乘る時、列を作つて先後の順序を誤らず、ゆつくり乘るといふ樣な習慣は是非とも今を期して確立したい。

○

地方から來た人の話を聞くと、東京には米が一粒もないとか東京には不逞の徒が跋扈して、危險甚しいから生命の惜しいものは行かない方がいゝなどと、まことしやかに傳へられて居るさうだ。一寸交通の便の阻止されると、斯くまで眞相が掩はれるものかと思ふと色々思ひ當ることがある。我々か勞農露西亞の眞相についてもこの種の誤解を持つてゐなかつたらうか。對露修交の可否が若しやこの種の基礎の上に論議せられたことはなかつたらうかと、今更冷汗の淋漓たるを覺ゆる。

○

今度の災害に於て我々同胞は概して多くのかくれたる美德を表はした。例外として多少の弊害は免かれなかつたが、大體に於て官民期せずしてその力を合せて、善後處置を殆ど誤る所なく取運ばしめた。短日月の間にあれ程の成績を擧げたことは何といつても嘆賞に値する。いざといふ場合の國民總動員は將來に於ても可成りの成功を期待して可なるは、今度の經驗によつて明かとなつた。が此所に一つ遺憾ながら最も悲しむべき一弱點を暴露したのは、いふまでもなく×××××である。之は普通の道德問題として許すべからざるのみならず、一個××××の×××襟度として最も悲しむべきことに屬する。之について我々は同胞に向つて極度の反省を促し、之が爲めにはあらゆる手段を執るの必要を感ずるものである。一時の興奮の餘勢已を得なかつたといふ事情には大いに諒とすべきものはあるが、併し少くとも大國民としての訓練の上からもこの事は斷じて許し　はならない。僕はこの問題については當局に對し、最も辛嚴なる態度を以て望み、×××の×××について一毫の假借することなからんことを希望する。日本國民の敎育の爲めに、この事は決して忽せにしてはならない。

○

寄贈を受けた書籍の主なるものに對し、僕はこの欄に於て批評又は紹介の辭を述ぶるを例として居つたが、久しくこれを怠つて居つたのに、今度の災害によつてその少なからざる部分を失つた。著者に對して誠に申譯ないが、記憶に殘つてゐるものを今後時々紹介するものの外、或はその儘に終るかも知れない。特に此所に寄贈者諸君に一言お詫びし置く。



二人の獨身者を繞る縁談

宮地嘉六

一

宵にひとまづ降りやんだ梅雨空は、また明日の雨を準備する爲めか、夜半になつてから、なま暖い風がひどい勢ひで戸外を吹きあれてゐた。で雨戸の外から呼ぶ女の聲がいやに薄氣味悪く聞えたのである。孝吉は少し荒い聲でそれに答へた。

『誰です……。』

『わたし……。』

『赤塚か……。』眠りからさめたばかりの孝吉の目は此の時急に險しくなつた。彼は白い蚊帳の裡でひと寢入してゐたのである。

『え……わたし……。』女は少し間を置いてから答へた。

『今時分何の用だ。僕に用はない筈だが……』

『ちよつと……。』

『僕は君に用はない。御免蒙る……。』

『でも……。』

『いけないと云つたら、いけない。用があるなら佐藤君を介して聞かう。』孝吉はもう此の時寢床の上に起きあがつてゐた。

女はしばらく何も答へなかつた――孝吉は考へた「こんな夜中になにしに來たらう、俺を刺しにでも……或は情夫と二人……で……俺を恨む理由があるものか……それとも俺に未練があると思つて夜中に泣きついて見ようと云ふのか知ら仕方のない女だ……」

『ちよつと……』女はしばらく默つてゐたがまたさう云つた。

『いけない。用があるなら晝間に來て貰はう。』

『晝間は來れません。』

女はなほじつと雨戸の外に立つてゐるらしかつたが、軈て勝手口の方へ廻つて戸をがた／＼云はせ始めた。そこの雨戸は少し無理すればはづれることを女は知つてゐたのである。孝吉は跳ね起きて行つて、じつとその方を睨みやつた。

『開けるなら開けて見るが好い。』

女はさすがに躊躇して全部をこぢ開け得なかつた。然しいつまでも戸の外に立つてゐるらしくコト／＼足駄を敷石にあてる音がした。孝吉はその間に二枚の戸を棒しばりにしてしまつた。彼はさうしてゐるうちに自分で自分がおかしくなつたが、それをがまんした。

孝吉に三時頃まで眠らなかつた。そのうちに女はとう／＼行つてしまつたらしい。夜明け頃になつてから彼はぐつすり

寢入つたが、いやな夢を澤山見た。起きて雨戸を開けると、風はすつかり落ちてゐたが空は案の如く陰鬱な色をしてぽつ／＼雨を落してゐた。庭先から勝手口の方へと女の足駄の痕がさん／＼についてゐて、折角滑らかな苔のつき始めた庭の面はめちや／＼に傷つけられてゐた。

孝吉は二月ほど前、女に百圓と云ふ金を友人佐藤の手から渡したのである。既往の關係はすべて終結したと認めます。今後の二人の自由な生活については互に何も云はないことにいたしませう。と云ふ覺え書を佐藤は双方の爲めに草案してくれ、二人はその通りの覺え書を取り交はして、一切はそれで解決してゐるのであつた。此のことについては孝吉は佐藤の勞を感謝しなければならなかつたのは無論である。

『彼女はお湯錢にさへもこまつてゐたらしいので非常に嬉しさうだつたよ。此の金は三好君が苦心して書きあげた原稿料なんで、粒々辛苦をして得た金を貴女にやるんですから、そのつもりで貴女もこれを受けなくてはいけませんよ。と僕が云ふと、はあ、さうでございます。と彼女も云つたが。然しなか／＼喰へない女だ。覺え書の草案を僕が書いて、此の通り書いて下さい。三好君にも此の通りに書かせますから、と云ふと、彼女は三十分間ぐらゐ草案の文句を讀み返して、やつと書いたところは普通の女ぢやない。君の手こずつたのは無理もない。』佐藤は金をば赤塚澤子に渡した翌日孝吉を訪ねて來てさう云つた。

女は孝吉と別れる少し前時分から、子宮外姙娠かも知れぬと飯田町の婦人科病院の副院長から云はれたらしいことをほのめかし、孝吉をあくまでこまらせようとたくらんでゐたほどであつたが、世なれた第三者の佐藤は、それはその種の女の常套手段だと云つて孝吉を安心させたが、全く佐藤の云つた通りで、金を渡す間際に佐藤が立派にその眞僞をたゞして彼女に自白させてくれたのである

『子宮外姙娠ならば醫者の診斷書を貴女が見せた上で主張されるのがほんとうです。若し何なら此の金をお渡しする前にそのことを明瞭にしてほしいと三好君は云ひますがどうでせう。と僕は云つたんだ。すると、そんなことはないとはつきり云つた。だからそのことは安心したまへ。此の覺え書があれば後々めんどうなことは起る氣づかひはないよ。』と佐藤は云つた、

『いろ〳〵どうもありがたう、おかげで助つたよ。』孝吉もお禮を云つた。そして早速その文案通りの覺え書を認めて佐藤に渡した。それから三四日して孝吉は偶然佐藤の家で彼女と顏をほんの一瞬間見合つたが言葉は交はさなかつた。孝吉は二階から、彼女は下から、思ひがけなく見上げ見下したと云ふに過ぎなかつた。女は新しい買ひたての、それも孝吉から送つた手ぎれの金で早速買つたらしい蛇の目をさして横町から出て來て佐藤の家の門を入つて來た。何か佐藤に用事があつたのであらう。その時恰度孝吉は佐藤の家へ遊びに行つて二階の緣側の籐椅子にかけて佐藤と向ひ合つて話してゐるところであつた。横町から好い女がやつて來るなと思ふと、それが彼女だつたので孝吉は直ぐ顏をそむけた。女も蛇の目を横にして二階を見上げた拍子に孝吉が來てゐることを知つたので目をそらした。雨は小さいのが少し落ちてゐたのである。

『佐藤君、あれがやつて來たよ、澤子が……何か君に用があるらしい。』孝吉は佐藤に知らせた。

『さうかね。』佐藤が二階から見下した時は女はもう玄關のところに立つてゐた。佐藤は直ぐに梯子段を降りて行つた。

女が佐藤にどんな用事があつて來たものかその時孝吉はあまり考へても見なかつた。女は化粧してゐたのできれいによく見えた。佐藤とは玄關さきで用事をすませて女は間もなく行つてしまつた。孝吉は別に女の後姿を見送る氣もなかつたが、それでも上半身を蛇の目でかくしてさつさと急いで行く姿を見た。二階から見られてゐることを、そして今日

はふだんよりは自分が美しく男の目には見えたゞらうと云ふことを、そして男に不自由はしないですよと云つたやうな彼女らしい虚勢や反射意識をその後姿が見せてゐた。輕快な女學生のやうな足どりで。間もなく佐藤は二階へ戻つて來たが、彼女が何の用事で來たかを孝吉は殊更に訊ねたくもなかつた。唯此の時孝吉は佐藤がいつか云つたことばをちよつと思ひ出したのである。

『君があの女と一番安全に手をきる方法としては僕が彼女と關係をつけることなんだが、それは君としてもいやだらうし、また君、友人として僕もそんなことは出來ないのは無論だがね……』と佐藤が笑ひながら云つたそのことを孝吉は思ひ出したのである。

『君がその氣ならば、僕は構はない。別れてしまへば用はないからね。』と孝吉はその時云つたが、さう云ふことはあまり愉快なことでないとは思つた。佐藤と云ふ男がそれほど女をひきつける魅力のある好男子でないことに多少の安心を孝吉は置いてゐたのだが、さうした關係が全然成り立たないことではないと思つた。獨身で女にうゑてゐる佐藤としては滿更心にないことでもないらしく、『好い女だ、兎に角好い女だ、あの女なら君と別れても直ぐ男はひつかゝるよ』と常から佐藤は云つてゐたほどで、此の場合佐藤の方で誘ひかければ女は義理にも拒めない立場にあつたのである。女の方でも孝吉に面あてをするには彼の最も親しい友人に一度でも身をまかせることは其の實行の一つであるに違ひなかつたが、然し佐藤と云ふ男は口で云ふほど、そんなことを無雜作にやる人間ではないと孝吉は半ば信じてゐたのであつた。

『何の用事で來たんだい君。』その時孝吉はそれとなく訊ねた。

『うん、君からの覺え書をまだ彼女にやつてなかつたもんだからね、取りに來て貰ひたいとはがきをやつて置いたので

今日はそれを取りに來たのだよ。』佐藤は云つた。

『あゝさうか。』孝吉もうなづいた。

『今明のうちに彼女は田端の方に宿を變るんださうだ。まあ上がつて遊んで行つてはどうです。と云つたが、また來ますと行つて行つてしまつた』佐藤は云つた。

兎も角、孝吉はそれ以來澤子と出逢ふやうなことはなかつた。別に逢ふ必要も彼には無論なかつた。唯或る日、田端の友人の家へ散歩のついでに立ち寄つた時、僅かにその後の彼女の消息を聞くには聞いたが男の血の出るやうな金で承知して別れて行つた女をそれほど案じねばならぬことゝもないと思つた。然し女の現在の境遇はあまりよくないらしいことを聞くと何だか孝吉はへんな氣持になつたのである。

『近頃はちよい／＼僕んとこへやつて來て家內と長話しをして歸ることがあるよ。何でも此の田端のそのへんに間借りして住んでゐるらしい。君のところへゐた時分と異つて、ひどく近頃はやつれてゐる。頭髮などもぬけて薄くなつて顏色もよくない。矢張惡い病氣の爲めなんだらうが、然し相變らず氣の强い女だね。此の間もやつて來て、戀愛とりもち所と云ふやうなことを始めようか知ら。なんてそんなことを云つてゐたよ。時々僕のとこへ來る刑事が、あの女のことを頻りに訊ねるが、どうしたわけか知らぬが、よほど注意してゐるらしい。』田端の友人は云つた。

『さうかね、そんなに身體が弱つてる風かね。顏色が惡いかね。頭の毛はもとから薄かつた。よくあの女は神經的に苛々し出すと髮の毛を短くちよん切るくせがあつたが……。』孝吉は云つた。

『死ぬかも知れぬ。あの女はあんな風ではます／＼慘めに淪落するだらうと思ふよ。』

『そんなでもありませんわ、そんなに誇張してお話しするもんぢやありませんよあなた――いえ、ねえ、あなたと御一

緒にゐらした頃よりは少しやつれて見えるくらゐですの。今でもお化粧なんかしてゐらつしやると、それはきれいですわ。』妻君は横から云つた。

此の田端の友人夫婦は、それから幾日かして澤子がそこへやつて行つた時、屹度孝吉のことを話したに違ひないのである。

『あなたが、大へん身體が弱つてゐらつしやるつて、たくが話したんですよ。すると三好さんは心配さうにいろ〱訊ねてゐらつしやいましたよ。』妻君は屹度そんな風に彼女に傳へたことゝ思はれる。女はそれを聞いて孝吉の心弱さを見込んでわざ〱夜中にやつて來たものと想像しても大して誤りはないやうである――。

二

赤塚澤子と別れた後の孝吉は無論獨居生活を續けてゐたが、よそ目で見るほど彼は自分をみぢめとも思はないで、こつ〱暮してゐた。不幸な人間は自分の不幸に馴れてしまつて、それをあまり苦にもしないやうである。それだからまた、よそ目には一層いたましいものである。時々女が出入りすることを隣の大屋の老夫婦は氣づいてゐた。彼は家を開けたまゝ外出して半日も歸らないことがあると大屋はいつも心配した。

或る日、肉屋の若者が御用聞きにやつて來た時、孝吉は小暗い三疊の茶の間に雨傘をいつぱいにひろげて、その雨傘のそばで黄瓜をまるのまゝで嚙りながら朝飯とも晝飯ともつかぬ食事をやつてゐたと云ふ。お盆を膝にして、その前にあぐらをかいて片手に飯碗を抱へ、片手に棒のやうな黄瓜を持つて。そしてその横の方に粘土でこしらへた女の人形を三個ほど置いて、それを眺め〱。

かうした四十男の圖は御用聞きの目にはおかしくも見え、いたましくも見えたに違いない。然し人の見方と云ふものはそれほどあてにならぬものである。此の日は疊屋が來て六疊の座敷の疊を片っ端から剝ぎとつて表替へをしてゐたので餘儀なくそんな圖を見せてゐた。實は去年の暮れに大屋の方で取り替へてくれる筈のが、隣りの人達が家賃の拂ひを遲らせがちだつたのでのび／＼になつてゐたので、それが此の日いよ／＼仕替へることになつて朝から疊屋がやつて來た。その爲めに本箱の上に置いてあつた粘土の人形を三疊の茶の間にとりあへず持つて來た。本箱を動かす時にこはす恐れがあつたからである。雨傘も同樣であつた。疊を出し入れするのに、玄關さきでは邪魔になるので三疊の茶間の狹いところへわざ／＼持つて來てひろげたのである。そんな次第でいつもならばもう少し行儀よく見ぐるしくない圖で食事をするのだが、此の日は特別であつたのだ。

『今日は御用はいかゞですか。』

『今日は好いよ、あした、いつものほど鷄肉を持つて來てくれたまへ。』

『かしこまりました。』肉屋はさう云つて口元に微笑を含みながら行つてしまつた。

それから十分ほど經つと今度は八百屋の若者がやつて來た。孝吉は、その時はもう食事をすまして、お膳を押しやつて、そのひろげてある奴蛇の目の蔭に頭を置いて、腕枕でねそべつてゐた。

『今日は、よろしうございますか。』

『さうだな、黃瓜でも五六本持つて來てくれたまへ。』彼は傘の蔭から云つた。孝吉は黃瓜を好んで三度の食事の時に喰べる男だつた。

『かしこまりました。』八百屋の若者はさう云つて、矢張十分前に來た肉屋と同じやうな微笑を含みながら行つてしま

つた。此の若者等は、これまでも毎日御用聞きにやつて來て、つい此のあひだまで若いちよつとした女がゐたことを知つてゐたのである。その妻君ともつかぬ女が全く顔を見せなくなつてから、かれこれ一月以上になるので、彼等は孝吉の上に一つの想像を持つてゐたのは無論のことである。

『旦那は逃げられたのだ……』

此の想像は現在の孝吉に最もよくあてはまる想像であつた。彼自身には女に逃げられたのではなく別れたのであつたとしても。

孝吉は三疊の部屋に食後、少しの間ねそべつて、頭を雨傘の蔭の方に置いて何を考へてゐたかをついでに書きそへねばならぬ。彼は例によつて剽輕なことを考へてゐたのだ。それから、今にも洋食屋のお玉が昨夕の皿を取りに來たらどんな笑談を云つてやらうかとそれを腹案しかけてゐたのである。

『お玉さん、僕昨夜あんたの夢を見たよ。』

『あら、どんな夢をごらんなすつたの。』

『云つても好いかしら。』

『構ひませんわ。』

『僕がね、あなたを口説いたんだねえ、すると、お玉さんはひどい肱鐵砲を僕に喰はしたんだよ。僕は恥をかゝされてすつかり面目をつぶしたと云ふいやな夢さ。』

孝吉はそこまで考へをまとめた。相手がそれに對してどう答へるだらうと云ふことが彼には興味あることだつたのだ。

彼はお玉の答へを次のやうにこしらへた。

『まあ、そんな夢をごらんなすつたの、でも夢はさかさまだと云ふぢやありませんか、おつほほほ。……』

孝吉はお玉がそらさずさう答へてくれる時のことを想像して奴蛇の目の蔭でひとり嬉しがつてゐたのである。

お玉は背は低くかつたが肉つきのゆたかな、宗十郎の舞臺顔に似た女で、聲も宗十郎に似てゐた。長いきれのよい、目尻の心持ち上つたその目を、どうかした時にちよつと伏し目にして默り込んで、それからくすぐられた時のやうに笑ふ風情を孝吉はいつも思ひ出して目に浮べるのである。前橋の機屋の娘とかで、二年ほど前に東京へ出奔して來て、初めは音樂をやる目的だつたが、思ふやうにゆかず、遂にカフエー女になつたが、今は親元へも歸れない身の上だと自分では云つてゐる女であつた。

『君はあのお玉なら女房にしても好いと思ふか。』

『さあ、それは考へなくちやならん。君はどうだ。』

『さうだねえ、僕もあの女は好きぢやあるが、女房にはしたくない。』

孝吉と佐藤は或る時から語り合つたことがある。此の二人はその洋食屋に於てはあまり金つかひの荒くない常連であつた。

『彼女は僕によりも君の方に好感を持つてるやうだ、いつ二人が行つても彼女は君の方に多く話しかけるからね。』孝吉は云つた。

『いや、さうぢやない。惚れると云ふことゝ好感を持つと云ふことは全く異ふ。あれでゐてより多く君に惚れてゐるよ。それはたしかだ』佐藤は云つた。

『或はさうかな……』と孝吉は思つたが『いや、そんなことはないよ。』と口ではさう云つて打ち消した。

人はいかなる場合にも、それは室内に、一輪さしの花が必要である如くに常に戀の對象となる誰かがなくてはゐられないものだ。孝吉のやうな獨身者にはなほさらである。お玉に對する孝吉の氣持を紹介したついでに作者は更に彼が上州屋のおかつちやんに對して懷いてゐる心持をも紹介しなければならぬのである。上州屋と云ふのは西ケ原の大通りにある間口の廣い酒屋で、おかつちやんはそこの末娘であつた。或る日のこと齒醬屋がその上州屋の前の櫻の木の下に手車を寄せて、近所の足駄を直してゐた。孝吉はポストへ行つた時それを見たので彼も足駄を二足ほど持つて行つて齒醬を賴んだ。無量寺の際の三好と云ふ家に出來たら屆けてくれるやうにと云ひ置いたが、夕方になつて、日が暮れてしまつても齒醬屋は持つて來ない。で孝吉は上州屋の前に行つて見たが齒醬屋はどこへ行つてしまつたのかもうそこにはゐなかつた。で上州屋に尋ねて見た。孝吉がおかつちやんと言葉を交したのはその時始めてゞある。尤もその以前から彼女の可憐な娘姿は目にとまつてはゐたが。

『あら、お宅がどうしても分らないつて齒醬屋さんは搜してゐましたよ。まあどうしたんでせうねえ、わたしんとこで冷酒をのんだりして少し醉つぱらつて鼻唄なんか歌つてゐたんですの、あの齒醬へ屋さん……』娘は舌だるい言葉つかひで笑ひながら云つた。全くその聲までが顏のやうにまるかつた。

『さうですか。』孝吉もさう云つて笑つた。

『まあ何だかへんな齒醬屋さんですわね。お母さん、『私は海軍に十五年勤めたから恩給があつて、喰べるだけはその方で結構ゆけるから、唯かうして齒醬屋をして飮みしろさへ儲ければ好いんだ』なんて、そんなことを云つてたのよ。面白い人……』とおかつちやんは店に出て來た母親に向いて云つてから『あの、お宅は宮田さんておつしやるんでせう。』

『いえ、三好です。』孝吉は云つた。

『あら。だから分らない筈ですわ。宮田さんと云つて捜してたんですもの、直ぐその坂下に一軒宮田さんてお家があつたんですつて、でそこへ持つて行つたけれど、此所ぢやないつて、さき様でおつしやつたんですつて、さう云つてをりましたの。』

『ぢやまた、そのうちにまゐりませうよ。その時は手前の方でさう云つてお上げしませう。』母親が云つた。

『ありがたう。どうぞ、ぢや……。』孝吉は頼んだ。

それから三四日してポストへ行きしなに孝吉が上州屋の前を通ると娘は呼びとめた。

『昨日齒替屋さんがまゐりましたから手前でお預りして置きましたの。』

『さうですか、それはどうもありがたう。』

上州屋では齒替賃まで取り替へてくれてゐたのである――それ以來孝吉はその家の前を通るたびに挨拶したが、向ふからさきに挨拶されることが多かつた。二三度酒を買つたりしたが、店は彼女の一番大きい兄がやつてゐて、ひとりでとくい廻りもしてゐる風で、非常にあいそのよい腰の低い男であつた。母親と云ふのは六十あまりの老女で、老主人はもうなくなつたらしく、孝吉は一度も見たことはなかつた。お彼岸時になると、上州屋は無量寺へ下る小路の角になるので廂から一間半ほど葭簀を張つてその蔭に椽臺を並べて假茶屋を始めるのが例になつてゐた。孝吉はおかつちやんが桃割に髮を結つて赤い襟を見せながら茶汲みをしてゐる姿を春と秋に二度ほど見たが、その時分から『好い娘だ……』と彼はひそかに氣を止めてゐたのである。

『そんなに好きなら僕話して見るよ。』と氣輕な險岳は云つて『あの兄きとは僕非常に親しいんだ、繪を書いてくれつて逢ふたびに云ふから近いうちに何か書いて持つて行つてやらう。その時話して見るから待ちたまへ。』

『然し年が若すぎるからね。いくつだらうあの娘。』孝吉は年齢の不釣合をひどく氣にした。

『さうだねえ、はたちぐらゐにはなるだらう。然し近くによつて見るとまだ幼ない顔をしてゐる。二十なら君にさう不釣合でもないぞ。』嶮岳は云つた『ぢや僕、佐藤君にあの煙草屋の娘を世話することにして君には上州屋の方を盡力しよう。なあに案外容易にゆくかも知れんさ。先方に話して見ないことは分らんよ。ぢや今日これからあのへんまで散歩に行つて見ようか。あの酒屋は僕のとりつけの酒屋だから一緒にちよつとぐらゐ寄つて見ても好いんだが。』

『まあ、ぢや、あのへんまでぶら〳〵行つて見よう』孝吉は嬉しさうに云つた。二人は或る日大通りを上州屋の方へぶら〳〵歩いて行つたのである。恰度上州屋の一軒置いた手前の煙草屋まで來ると思ひがけなく彼女がこちらへ歩いて來る姿を孝吉は見た。

『來るぢやないか。向ふから』孝吉はてれかくしに直ぐ煙草屋へ寄つて敷島を一つ買つたが、嶮岳はお辭儀をして行き過ぎようとする彼女を呼び止めて、何かこそ〳〵と一言二言云つてゐたが娘は顔を眞紅にして小走に行つてしまつた。どこかへお使ひに行くのらしかつた。

『君、早速そのことを云つたのかい。』

『あ、ちよつと云つて置いた。今、そこに煙草を買つてゐる人をあんた知つてるだらう。あの人があんたをお嫁に貰ひたいと云つてるがあんたどうや、これからあんたの家に行つてお母さんに話さうと思ふんだが……。て云つたんだ。まだ年が若いから恥かしがるね。』嶮岳は云つた。

『まつ晝中に大道ぢや、あんまりだよ。』

『なあに、ちよつとあれだけ云つて置けば好いんだ。まんざら嘘ぢやないことはあれでも當人は思つたに違ひない。今

日はかうして置いて一日二日のうちに僕はあの家に行つて母親に話しをするんだ——なるほど君が惚れるのも無理はない。僕は今ようく見たが好いねえ。』

此の問題がどうなつたかと云ふことは、それから更に派生した事柄に筆を進めると共に自然に明らかにし得ることである。

三

兎も角南畫家岡田崘岳は二人の縁談の仲人として多忙であつた。彼は佐藤と孝吉の二人を一日も早く獨身生活の寂寥から救はねばならぬと一人で躍氣になつてゐた。彼はどんな知らない家にでもどんどんやつて行く男で、佐藤の爲めには火藥廠前の煙草屋の娘を、或は大塚の山田流の琴の師匠の家へ（これは佐藤の死んだ妻君が稽古に通つてゐた師匠の家の娘でまだ二十一と云ふのであつた）——また一方孝吉の爲めには上州屋に、或はもう一つ崘岳自身が見出したと云ふ新しい候補者の家に、毎日奔走に日も足らないと云ふ風である。——王子の方の最初の候補者は彼は忘れたかのやうに顧みなかつた。佐藤も孝吉も此の崘岳と云ふ男と知り合つてからまだ一月とは經たなかつたので、どこまでが此の男の云ふことが誠意であるか半ば疑ひを感じながらもその奔走のさまには興味半分の期待を持つた。

『彼はどう云ふ考へからあんなに我々の爲めに躍氣になつて奔走してくれるんだらう。』

『兎に角面白い男だよ。まあ默つてまかせて置いて見ようぢやないか。今に奴さんくたびれるだらう。然し珍らしい男さ。』

『あれで自信を持つて奔走してゐるところが面白いが、あの調子で先方が信用するかどうかと僕は思ふんだ。』

佐藤と孝吉とは陰で險岳についてはさう評してゐた。險岳は昨年の秋、京都から東京へ移住して來たばかりで、まだたよりになる親友もなかつたやうだ。一つは佐藤や孝吉と親密な友人關係を作りたい爲めにいろ〳〵さうした奔走をもしてゐるらしかつた。彼は一面おつちよこちよいのやうでもあり、また小利巧な、侮りがたい男であつた。無邪氣のやうであり、また、かなり世間師らしいところがあつた。かうした人間がまゝ世の中にはあるものだ。兎に角、人に接近することが無雜作で、そして誰にでも親しむことの出來る男である。京都から夫婦で東京へやつて來て間もなく家主に見込まれて差配の役目を委されたほどで、如才なく、人に取り入ることにはかなり長けてもゐた。彼の商賣はまだ賣れるほどのものではなかつたが、二十軒餘の貸家を受け持つてゐるので、その方から月々七十圓ぐらゐの生活費は得られるらしく、彼の野心は中央の畫壇に知られることで、同時に好い援助者を得ることであつた。彼はよく袴をはいては名士訪問に出かけるらしかつたが袴だけで彼には羽織がなかつた。三好孝吉と近づきになり更に孝吉を介して佐藤を知り、そして交際し出してから日もまだ淺いのに此の二人の獨身者に妻を周旋しなければならぬ義務でもあるやうに躍氣になつて奔走してゐる彼の心持は單に面白い親切な男だと評するよりも、一つでも人の爲めに骨を折つて置くことが彼に於ては自己擴張でもあつたのであらう。孝吉も佐藤もそれを感じてゐないではなかつた。險岳は無邪氣に見えてもなか〳〵心得てゐると云ふことを。彼は一口に評すれば小才子らしいところを多分に持つてゐた。彼は自分のさうした盡力が後になつて何か自分の存立の上に有効な形で戻つて來ると思つてゐたのかも知れぬ　然しそれだからと云つて彼を卑しんではならなかつた。何故ならば彼の盡力には、純な親切さと愛すべき衝動とが交つてゐたからである。彼はちよつとした藝人であつた。尺八、歌、浪花節、殊に浪花節は玄人に近い巧みさがあつた。或る人は彼は故郷を飛び出してから、しばらくは浪花節語りの群に交つて藝人生活をしたことがあるらしくも云ふ。

『全く君はうまい。その方で飯をくつた人のやうだ……』

或る時孝吉が云ふと彼はちよつと變な顏をしたやうでもあつた。

嶮岳は佐藤のと孝吉のと兩方の緣談の進捗の爲めを思ふと家で靜かに繪筆を持つてゐられないと云つてゐたくらゐである。

『僕は兩君が同時に結婚式を擧げるやうに盡力したいと思ふんだ。そのつもりで、これでも一生懸命だよ。』嶮岳はさう云ふのであつた。彼は一日置きぐらゐに三四ヶ所の先方へ足を運んだ。甲乙丙丁、甲が駄目なら乙、乙が駄目なら丙と云ふやうに、恰好な娘がゐると見ると全然知らない家へでもどん〳〵やつて行く。そしては先方の回答を一々佐藤にも孝吉にも報告するのであつた

『もう大丈夫だ。先方は貰つて慾しくてたまらないらしいが、矢張、おいそれとは返答がしにくいんだよ。佐藤君の方も三好君の方も略ぼまとまつたやうなものだ。もう一度行けば先方は確答しさうだ。僕はさう信じてゐる。』と彼は誓ふやうに云ふのが癖である。まんざら出たらめでもないらしいが、二人は彼の報告を全部信ずるわけにも行かなかつた。何と云つても此の男と知り合つてから二人の獨身者の心は賑やかになされたことは事實だ。ところで或る日嶮岳はこまつた顏をして孝吉の家へやつて來た。

『ねえ君、意外なことが出來てこまつたよ。上州屋の二番目の息子が昨日蟹を喰べて急に死んださうだ。そこでちよつとあの問題は進行がおくれるか、と思ふよ。先方の忌中の間は遠慮しなければなるまいと思ふんだ。つまり四十九日が過ぎるまでは先方でも緣談どころぢやなからうからねえ。全く惡い時に死んでくれたものさ——ところでだね。今ね、王子の知り合ひの醫者の家にちよつと赤ん坊の藥を貰ひに行つたら、そこの患者控所に素的な美人がゐるのだ。年頃二

十六七と云ひさうな、色白のやさ型で、それがだねえ、雜誌の小說を讀んでゐるのだよ。一心に、で僕は、貴女は小說がお好きですか。と訊ねて見たのだ。すると、はあ、大好きでございますの。と彼女は云ふから、僕の友人にこれ〳〵の小說家がゐますが、あなたは御存じですか。と云つたところが、ええ、よくお名前は存じてゐますわ。あなたのお友達でゐらつしやいますか、まあ……と彼女は聲をはづませて、いかにも君を崇拜してゐるらしいので、何なら僕のすぐ近所ですから御紹介しませうか。ええどうぞ、と云つた調子だ――君これから僕はその醫者の家までひと走り行つて彼女をつれて來るが構はないかね。話しによると今姉の家に手傳ひに來てゐるらしいんだ。姉がお産をしたんで、當分來てゐるらしいんだ。どうだね、つれて來ても構はんなら、これから急いで行つてくらあ。別嬪だよ。』

『いや、まあ待つてくれ。』孝吉はあまりのことに氣が進まなかつた。

『だつて、ちよつとぐらゐ逢つてやつても好いだらう。彼女はくれ〴〵も賴んだよ。實は一緒につれて來る筈だつたが一應君に尋ねてからにしようと思つたんだ。折角さう云ふんだから。』喩岳は云ふ。

『でその婦人はまたその醫者の家に君を待つてるのかい。』

『うん、ちよつと家へ歸つて藥をとゞけて、それから、もう一度その醫者の家へ來ると云ふんだ。時間まで約束してある。』

『ぢやまあ、つれて來たまへ。』

『さうか、ぢや行つてくらあ。』喩岳はさう云つてそゝくさと行つてしまつた。

三十分ほど經つて喩岳はやつて來たがいきなりかう云ふのである。

『や、君に申しわけがない。大におわびしなくちやならん。勘辨してくれたまへ。その婦人についてだよ。僕は今醫者

の家に行つたんだ。ところが、まだ彼女は家へ一應歸つて行つて、そこに來てゐなかつたもんだからね、僕は藥局の方へ行つて、あの婦人のことをちよつとばかり醫者の妻君に訊ねて見たところ、意外だ。精神に異樣があるんださうだ。日常は別にちつとも分らないが、どうかすると發作的に暴れ出すんださうだ――いやそれぢや大變だと思つて彼女が來ないのを幸に僕は飛んで來てしまつたよ。折角あゝ君に云つたが、もう少しで大へんなことになるかも知れなかつた。まあゆるしてくれたまへ。』わびるやうに云つて嶮岳は笑つた。

『なあんだ、おい〱、嶮岳君こまるぞ、そんなことでは……』孝吉は苦笑した。かうした失態はそゝつかし屋の嶮岳のやりさうなことで、孝吉はむきになつて咎めることも出來なかつたが、然し此の男のあまりあてにならないことをこれを以ても確實に知り得たと彼は思つた。嶮岳と云ふ男は無邪氣な人間に違ひなかつた。然し無邪氣な人間は時に奸惡な人間と同一の損害を他人に與へることがあるものだ。唯一つは無意識であり一つは意識的であるだけの異ひである。孝吉は嶮岳に對しては少しく用心しなければならないと思ふやうになつた。それは最初から彼には分りきつてゐたのではあるが。

その翌日嶮岳はやつて來てから云ふのだ。

『彼女は昨夜八時頃まで醫者の家で僕を待つてゐたさうだ。そしてとう〱なんぼ待つても僕が來ないもんだから仕方なしに歸つたちふが、可愛さうだから今度いつか一度僕がつれて來るから、ちよつと逢つてくれたまへ。いや精神に異狀があると云つても、あれは醫者の妻君が少し誇張して云つたんで、そんなことはないらしいんだ。僕が話しをしてゐる間にもちよつとも變なところはなかつたんだからねえ。』

『いや、たゞ、折角だが御免蒙るよ。』孝吉はもう取り合はなかつた。彼は此の男が妻を周旋してくれると云ふ親切さ

へもあてにしたくなかつたのである。するとその日の午後五時頃、嶮岳は一人の見知らぬ婦人をつれてやつて來た。彼は婦人を玄關の外に立たせて置いて自分だけ入つて來た。

『實はね、その婦人が僕のところを醫者の家で尋ねてわざ〳〵今やつて來たんだ。で仕方ないからつれて來た。まあちよつと會つてやつてくれや。折角だからね。君の小說の愛讀者だからねえ。なあに、長くぢやなくて好いさ。』

『さうか、ぢや折角だからちよつと會はう。』

『ありがたい、戶外に待たしてあるからねえ。呼んで來らあ。』嶮岳はそゝくさと出て行つた。

玄關の外でくす〳〵女の笑ふ聲がした。孝吉はその笑ひ聲を聞くと自分の嚴肅な氣持を打ち毀されるやうな思ひがした。彼は出來るだけ嚴肅な態度で會見するつもりだつたのである。然し彼は心底から此の女客に對して嚴肅であり得たかどうかは疑問である。女客だから殊更にさう云ふ氣持にならうと努めたのであらう。作家などゝ云ふものは自分の小說を愛讀してくれる女の來訪に對しては嚴肅と云ふよりも彼女の幻影を尊重しなければならないことを知つてゐる。

嶮岳の後方から入つて來た女は、もぢ〳〵しながら上つて來た。廂髮の、なるほど二十五六の大柄の女であつた。こつてりとお化粧はゆきとゞいてゐたが、決して嶮岳が前ぶれしたほどの美人ではなかつた。口元が少し出てゐて、笑ふと直ぐに齒莖の出る、鼻の上向き加減の、頰骨のはつきりした顏であつた。彼女自身もそれを氣にしてゐるかのやうにはにかんでゐた。彼女は初めから口元をハンカチでかくした。

『さあ、どうぞ、ずつとおさきへ。』孝吉は云つた。

『おさきにいらつしやい。』取りもち役の嶮岳は云つた。

『突然お邪魔にあがりまして、御迷惑とは存じましたけれど、ずつと以前からよくお名を存じてをりましたもんですか

ら……』

『よくおいで下さいました。』孝吉は云ひやうがないのでさう云つた。『おい睑岳君、すまないが紅茶をいれてくれたまへ。』

『よし來た。』睑岳は氣輕に立ち廻つた。

『わたくし、ずつと以前電車の中でお見受けしたことがございますの。』客は云ふ。

『あゝさうでしたか』

『その時は奥さまと御一緒のやうでございました。その時分よりはずつと只今の方が晴々してゐらつしやいますわ。わたくしお宅へはいる時一目見てさう思ひましたの。ずつとお若くなつてゐらつしやるやうです。おほほほ、まあ、あがると直ぐ失禮なことを申しまして……おほほほ。』

『さうですかね。離婚してから若々しくなつたと皆さう云ひます。自分ではぐつと老けたつもりなんですが、まあ然し老けたくありませんなあ。』

『矢張奥さまとゐらした時分は氣苦勞がおあんなさいましたからでせう。』

『さうかもしれません。尤も今でも氣苦勞は絕えませんが、何と云つても一人でゐるとのんきです。』

『おひとりで御不自由でゐらつしやいませう。』

『えゝまあ仕方がありません。』

『どうです。あなた時々やつて來て三好兄のめんどうを見てやつて下さると好いですなあ。ほんとに、どうですか。』

睑岳は紅茶を無器用にいれながら云つた。

『おい〳〵、そんなことを云ふのはまあ待て。』孝吉は笑顏で嶮岳を睨みながら云つた。

『ええ、時々あがつて何かとお世話しておあげいたしませう。おほほほ。』

『それは好い。三好兄。此の方にさうして貰つてはどうかね。』嶮岳は乘り氣になつて云ふ。

『それはありがたいがね。』孝吉は云つてそして婦人に向いて『今、あなたはお姉さんのところへお手傳ひに來てゐられるんださうですね。ぢやその方を十分にして上げなくていけますまい。』

『いゝえ、もう姉はお產をすまして四十日になりますから、自分でどんなにでもいたしますの。却つてわたしがゐない方が好いくらゐでございますわ。』

此の時、嶮岳は急に立ち上つた。

『僕ね、これで失敬するよ。四時までに來る客があるからね――また來らあ。』そして婦人に向つて『あなたゆつくり話してゐらつしやい。』と彼はいやに氣をきかすつもりのやうに、半ば家の方が氣にかゝるやうに云ふのであつた。孝吉は殊更に氣をきかして貰ひたくはなかつたが。

『まあ、好い。』と思つた。

『さうか、ぢやまた來たまへ。』

嶮岳が去つてから孝吉はいろ〳〵此の婦人と話しを交へて見たが、別に精神に異狀のある樣子も認めなかつた。

『先生、私のことを小說にでもなされればそれこそ長編が出來ますわ。今度いつかゆつくり身の上話をさせて頂きますわ。隨分さま〴〵なことがこれまでございましたの。わたくし、自分で筆がたつなら書いて見たいと思ひますけれど駄目ですわ。それよりも先生のやうな方にお話しして書いて頂いた方が好いと思ひますの。』客は云つた。

『さうですか、ゆつくりいつか聞かせて下さい。』孝吉はあまり聞きたいとも思はなかつたが如才なく云つた。

『人は自分の顏や姿を鏡に映して見るだけでは滿足出來なくて、寫眞屋の手にかけて更に自分の姿や容貌をうつとりと眺めたいものだ。殊に女性はさうだ。そして持つて生れた地顏よりも寫眞の方がひつ立つて見えることを喜ぶ。恰度そのやうに彼女は自分の經て來たいろ〳〵の事柄を一篇の小說にして見たいのだ。よい小說になり得ると信じてゐるのである。そして彼女にとつては自分は一人の人生を撮影するところの寫眞師と思へるのであらう。寫眞に補筆が必要であるやうに彼女の經驗を一篇の小說に仕上げるには潤色が必要であるに違ひない。』孝吉は思つた。

『あなた前の奥さまと御結婚なさる時にお見合ひをなさらなかつたとか、わたくしの姉が何かでさう書いてあつたのを見たと云つてをりましたが、全くさうなんでございますか。』

『え、見合なんかしない方が好いと思つたんですが、矢張それがいけなかつたやうです。』

『よく分りますわ、その氣持は、わたくしも同じやうなことで不幸な結婚をいたしましたの。』

『ではあなたは一度かたづかれたのですか。』

『は。』と女は云つて、ちよつと俯向いて『わたくしなんかを貰つて下さる人なら誰でも好いと云ふ氣で、ろくに見合もせずに一緒になりましたの。男は恰度演習召集で兵營に行つてゐたもんですから、わたくし媒妁人の方につれられて赤羽根の營所に行つて、そこの面會所でお見合のやうなことをしたんですのよ。それをお話しすると滑稽ですけど、結果は滑稽どころぢやございませんわ、まあからですの、話しは少し前からございましたもんですから、その男の方でも見合なんかどうでも好いと云つた風でしたが、それでも一度ぐらゐは會つて置いたが好いと姉も云ふもんですから、召集中に兵營へ面會に行つたんですの。するとその日は射擊演習とかで歸營が夕方になりましたのよ。わたくしは媒妁人

の方と二人でしばらく面會所で待つてゐますと、少し薄暗くなつてからその男が演習服のまゝ來てくれましたの。電燈もない薄暗い面會所だもんですから双方とも顔がよく分りませんの。わたくし、きまりが惡いから却つて此の方が好いと思つたんですが、男は卷煙草に火をつけるのに、ぱつとマッチをすつたんですの。その一本のマッチの燃えてしまふ間が見合でしたわ。おつほほほ、こんなことは好い小說の材料になりますでせう。おつほほほ……』

『面白いですな。一本のマッチの燃える間の見合……』孝吉は笑つた。女も自分で話しながらくす〳〵笑つた。

「それから、どうなつたんです。一本のマッチの火で有無相通して目出度いことになつたんですね。』

『まあ、お聞き下さいまし――わたくし實際のところ失望いたしましたのその時、でも仕方がないと思ひましたの。そして男が召集解除になると直ぐ結婚したんですの。ですけれど駄目でございましたわ。矢張わたくしの我がまゝも手傳つたのかも知れませんが半年目に別れてしまひましたの。』と女は語つて『それから後のわたくしのいろ〳〵の經驗がまだ隨分ございますわ。』

彼女は日の暮れまで話し込んだ。

四

孝吉の身邊の事柄はます〳〵派生するばかりであつた。前にも述べたやうに上州屋の方は忌中であるから急いで先方の確答を迫るわけにもゆかないと云つて、鹼岳は更に新らしい候補者をまたしても孝吉の爲めに見出してくれたのである。

『上州屋の方は忌中があけてから話しを進行させることが出來るから、あれはあれとして置いて、此の方の話しを進め

て見たいがどうだ。容貌も十人並以上で針仕事も達者で、年は二十二ださうだ。佐藤君のお母さんも、あれなら三好さんに恰度好いから、まああたつて御覧なさるがようござんす。つて云つたから、僕は明日でも先方へ行つて見るつもりだが君はどう思ふかね。』嶮岳は云つた。

『さう、あれこれと幾日もぢや君だつて大變だらう。』孝吉は云つた。

『いや、僕は構はない。そんな氣の重いことで仲人なんか出來るものか。ぢやまあ明日先方へ行つて見よう。そしてその娘を僕が見て、これなら君の氣に入ると思つたら僕はどん〳〵話しを進めるよ。君の好きな女は僕にも大抵分つてるよ。兎に角十人並以上だと云ふからね、それに、あそこらでは大地主ださうだ。』

『僕は上州屋の娘で澤山だよ。あれ以上の娘が見つかつても僕は慾は云はない。何しろ足駄一件から僕は上州屋一家の人が好きなんだ。一體上州屋の方はどの程度まで話が進んでゐるのかね。全然駄目なら僕も斷念するよ。』

『駄目ぢやないよ。彼女も母親も、それから一番の兄きも、ようく君を知つてゐるよ。此の間話したら、ああ、あの三好さんて方ですか、と兄きも君を知つてゐた。娘も君のことはよく知つてる風だつた。いつか足駄のことで家にいらしたことがありましたつ、なんて、おかつちやんは云つてゐたくらゐだ。兄きに話したら、本人が行きたいと云ふなら私共はいや應ないと云ふのだ。で本人の娘に僕がちよつと途中で逢つた時に云つて見たが、兄さんやお母さんが好いと云ふなら、わたし行きます。と云ふんだよ。そこまで話しの調子がついてゐたところへ、二番目の息子があんなことになつたもんだからね。』と嶮岳は云つて『だからさ、あれはあれとして置いて、その巣鴨の方をあたつて見ようぢやないか。』

『ぢや、まあ、君の云ふ通りになつてゐよう。』孝吉はさう云つたが、あまり氣のりがしなかつた。

嶮岳の云ふ新らしい候補者と云ふのは巣鴨の大根原では中位の地主と云はれる田中某なる家の孫娘であつた。作者は

此所でちよつとその田中一家のことを紹介して置かねばならぬ。——此の田中某の家は巣鴨の町が開ける以前までは百姓であつたが、町が開けて年々地價が上るにつれて大金持に出世し、は今で花崗石の門柱と石塀で堅めた大地主で土地の舊家であつた。二十年ほど前、佐藤はその頃巣鴨にあつた眞宗大學を卒業するまで、此の田中の家の貸長家の一軒で同級生四人と共に自炊生活をしてゐた關係から田中一家とは懇親の間柄である。佐藤の老母と田中の家の老母とは數年來往き來してゐる。田中の家は七十近い考母とその老母の二番目の息子夫婦と七八つになる孫息子との四人暮しである。二十二になる孫娘と云ふのはその老母の一番姉娘の長女である。一番の姉娘は高輪に嫁入つて三人の子が出來てから亭主に死なれ、今は貸家なる田中の貸家の一軒に住まつて母子四人はものがたく暮してゐるのであつた。娘は何處かの工藝女學校を卒業してから間もなく世話する者があつて醫專出の男に嫁入つたが、男は病院勤めをやめて結婚後直ぐに商船會社の船醫になつて遠洋航海をした。それきり何のたよりもしないので母親は娘を引取つてしまつた。

娘が初婚でないことは孝吉も前以て承知してゐたのである。

『佐藤君、その娘と云ふのはどんな性質の女かね。』孝吉は佐藤に訊ねて見た。

『僕もよく知らないんだ。小さい三つ四つの時分によく膝の上にのせたりしたことはあつたがね、それから僕が前の家内を持つた當時半年あまり琴を習ひに通つて來てゐたが、その頃は十二三で、ちよと可愛い娘だつた。それ以來僕は見たことがないから、どんな女になつてるか知らないんだ。家の母の話しでは、そんなに惡いきりやうぢやないらしい。』

佐藤は云つた。

『どうして、その船醫にうつちやられたのだらう。』

『さうだねえ。船醫なんて、港々ぢや遊びをするだらうし、女の乘客とは面白いことが出來るし、遠洋航海なんかして

ゐると、面白いことが出來るからねえ、矢張そんなことで、女房なんてものが馬鹿臭くなつたんだらうよ。』

『さうしたもんかね。』

『そりや君、佛蘭西あたりの女を見たら日本の女なんて思ひ出す氣にやなれんよ。』

佐藤は二年ほど前にヂツケルマンと云ふ獨逸人で、日本で雜貨商をしてゐる老未亡人に隨行して、僅か二ケ月間ではあるが獨逸や佛蘭西の女を見て來たので、何かと云へばあちらの女を引き合に出するのである。あちらから歸つて來た當分は、友人と一緒にちよつと散歩に出るにも洋服に着替へたり、黑いそれはハート形の赤銅のメタルのやうな顏に一日に二度も剃刀をあてたり、コスメチツクで頭髮をてかてかさせて分け目を正したりするのであつた。

『どうもあつちの習慣がすつかり染んでしまつてねえ……』などゝ十年も歐洲生活をして來た人のやうなことを云ふのであつた。ポートサイドで買つて來た焦茶色のトルコ帽を冠つて場末の町を歩きながら人の注目を惹くのが得意らしかつた。友達と一緒にバーに入ると相手が分らなくてもブロークンの佛蘭西語をまぜて冗談を云つたり、女給をとらへてダンスの眞似をしたりして大に歐風をきかすのでそばではあてられた。低級なバーの女給にまで佛蘭西から歸つて來たことを分らせようとするのも佐藤らしいところであつた。此の男をよく知つてゐる者の目にはそれが大して氣障でもなく愛すべき滑稽に感ぜられたものだ。彼自身でもそれが分つてゐるらしかつた。彼は獨逸の夜のカフエーの話をよくした。僅かに日本の錢にすれば十錢で茶を一杯飲めば夜の二時過ぎまで遊んでゐられたものだとか、どこのカフエーにも素的な美しい私娼がやつて來てゐて誰れとでも話しかけることや、目と目ですつかり相談がきまつて、カフエーを出ると直ぐに女は腕に組みついて、自分の宿へ男を曳つぱつて行つて、すばらしいベツトに寢かして、夜明けまで男を眠らせはしないとか、彼はさもたまらないやうな調子で語るのであつた。

『なあに、奴さんは佛蘭西の一番低級なところばかりを見て來て話してるんだらうよ。どうせ十錢のコーヒーをのんで夜の二時まで遊ばせるんぢや大したカフエーぢやあるまい。』友人仲間では陰でさう云つて笑つてゐた。

さて、巣鴨大根原の大地主田中某の孫娘と孝吉との緣談は嶮岳の足勞で意外に早く話しが進行しさうであつた。

『今日僕は本人を見て來た。素敵に好い娘だ。僕が本家の老母と話してゐると、呼びにやつたと見えて直ぐ裏の家から娘が來た、お茶などを運んだりしたが、すべての様子がなか／＼好い。あれを君がかれこれ云ふんぢや迚てもだめだと思ふよ。丸顏で背丈も十分ある。先方では貰つてほしいのが心いつぱいらしい。一度かたづいて戾つたのだから、とそれを婆さんは頻りに氣にしてゐた。もう一度僕が足を運べば見合と云ふことになりさうだ。』嶮岳は云つた。

『上州屋のとどつちが好いかね。』

『決して優るとも劣りはしない。背丈が十分あるから却つて上州屋の娘よりは女振りはよいくらゐだ。』

孝吉は此の前、嶮岳が王子の醫者の家で知り合つたと云つて、紹介した女のことを思ふと、此の男の云ふ『素敵な美人』はあてにならぬと思つたが、まんざら氣乘りがしないではなかつた。

恰度此の緣談の進行中に、例のカフエーのお玉が佐藤と孝吉との間に轉々してちよつとした挿話の種を殘したことを作者は云ひ忘れてはならぬのである。

さて、或る日の夕方、孝吉はぶらりと佐藤の家へ行つた。雨あがりで路は惡かつたが、わざ／＼ぬかるみを冒して行つたと云ふことが後で考へると不思議な廻り合せと思はねばならぬ。孝吉が行くと佐藤はにこ／＼して迎へたが、玄關には女の下駄が一足ある。二階へ上るとそこにお玉が來てゐる。様子を聞くとお玉は昨日から此所へ來て　雨に降りこめられて泊つたと云ふのであつた。これまで住み込んでゐたカフエーから二三日前暇をとつて、今は巣鴨の町に間借り

をしてゐるお友達のところにゐると云ふのであつた。

『此所へ泊るほどだから矢張此の女は佐藤を好いてゐたのだ。』孝吉はさう思つた。佐藤に先鞭をつけられてしまつたと云ふ淡い失意の裏には『なあに、たまには此の男を得意にしても好い』と云ふゆるやかな氣持もあつた。彼はこれまで佐藤にはいろ／＼の智慧を借りもし、赤塚澤子と別れるについても間に立つて解決の勞をとつて貰ひもしたので、お玉については義理にも敗北者たることを甘んじてよいと云ふ風に考へる。心からさう思ふのではなく、さうでも考へなければ此の場合の心理を紛らすことが出來なかつたのである。人は往々自己の敗北の理由をさへも道徳化するものだ。

孝吉はお玉を冷かしたり、佐藤と冗談を云ひ合つたりして時を過ごしてゐたが、そこへ同じ仲間の山田がやつて來た。佐藤は何と思つたか酒を出した。お玉は皆にお酌をした。

『實は今日僕の家には松魚の新らしいのを片身魚屋が置いて行つたのがあるが、明日まで置くと惡くなるから、これから皆で僕の家へ行つて、その松魚で飲もうぢやないか。』孝吉は好い加減飲んでから、ふと家にある魚のことを思ひ出しから云つた。

『行かう。皆で行かうぢやないか。お玉ちやんも一緒に行かう。』佐藤が云つた。

『よからう。』山田も直ぐ同意した。

四人はそこをきり上げて戸外へ出た。お玉は低い日和をはいて、ぬかるみを歩きにくさうについて來たが、もう日が暮れかけて、新開町の田圃は足もとが暗い。孝吉は後からついて來るお玉を顧みてちよつと氣の毒な心持になつた。彼女は低い日和をぬかるみへ歩み込んだと見え丸い足の甲まで泥をべつたりくつつけてゐるのである。裾をはしよつて、白い肉つきのよい脛を薄暗に浮き出させながら『わたし、こまつちやふわ。』と泣くやうに笑ひながら三人の男について

來るのが孝吉には何となく可哀想であつた。カフエーから暇を貰つて行き場にこまつてゐるらしいその心細さも思ひやられるのであつた。

『足駄ぐらゐ佐藤に買はせれば好いのに、佐藤も佐藤だ……』孝吉はひとり思つた。佐藤の家から孝吉の家までは二十分とはかゝらなかつた。孝吉は家へ着くと直ぐに小さなバケツに水を汲んでやつて、お玉に足を洗はせた。

『玉ちやん、すまないが、あんたお料理してくれる。』

『ええ、いたしますわ。』

『ぢや、此の片身の松魚を刺身にして下さい。それから、そこにあるウドをそぎに切つて酢をかけて出して下さい。』孝吉は自炊の獨り者だけに、おつな献立を知つてゐた。

お玉が肴をこしらへてゐるうちに孝吉はお燗をつけたり、ちやぶ臺を座敷の中央に据ゑたりした。

お玉は刺身をこしらへることをよくは心得てゐないらしく、腹骨そのまゝ、皮つきのぶつ切りを大皿に盛つて持つて來た。

『結構々々。』孝吉は彼女が女房なら一小言云ふべきところを我慢したのである。

お玉はお酌をした。そして彼女もよく盃を受けて飲んだ。なか／＼よく飲んだ。山田が喉細い聲で歌ひ出した。佐藤はそれに合唱した。まるで軍歌のやうな味のない節廻しで。孝吉は立ちあがつて安來節を歌ひながら踊り出した。

四人は馬鹿にはしやいだものだ。するうちにお玉は飲み過ぎたのか頭を押へて次の間に横になつてしまつた。後の三人は夜が更けるまで飲んだ。

『さあ、そろ／＼歸らう。』

佐藤と山田は立ちあがつた。

『まあ待ちたまへ。』孝吉はさう云つて苦しさうに息を吐きながら寢てゐるお玉のそばへ行つた。彼女は起きれないのか起きたくないのか寢たきり動かたい。

『どうした玉ちやん苦しいか。』

『え……』お玉は笑ひながら顏を苦しいさうにした。

『どうしよう。』

『まあ、君に賴んだよ。』佐藤は笑ひながら云つて『玉ちやん、今夜は三好君のところへ泊つたが好いよ。』

『え、さうしますわ。』お玉は小聲で寢ながら顏もあげずに云つた。此の時の孝吉の心持は孝吉自身ですら說明出來ないほどで、强いて說明すれば、此の偶然に彼が感謝したであらう。と云ふ佐藤の想像が最もよくあたつてゐた――佐藤と山田はどん〳〵行つてしまつた。孝吉はから考へた。

『佐藤は老母の手前、彼女を幾晩も泊めるわけに行かないので、今夜は此所へうまくかたつけたわけかな、そして彼女も老母のゐる佐藤の家へ泊るよりも獨身者の家に泊るのが氣樂なのだらう、それにしてもまあ好い……』

五

翌日、お玉は午過ぎまでゐた。孝吉は彼女に飯を炊いて貰つて二人でさし向ひに遲い朝飯をたべた。それから彼女は厠を掃除してくれたり、手洗鉢のところの手拭を洗濯してくれたり、孝吉の下駄と自分の日和下駄を洗つたり、臺所をきれいに整頓してくれたりした。するうちに例の肉屋の御用聞きが來た。八百屋の御用聞きも來た。

『旦那はまたどこかで女を仕入れて來たんだ……』御用聞きの若者の目はさう輝いてゐた。

お玉はそれから近所の髪結所へ行つて、きれいに、髮の廣い桃割に結つて、そしてちよつとお化粧して歸つて行つた。またいつ來るとも云はずに。

『僕は全く君にお膳立てをしてやつたんだ。彼女はどうした。』

孝吉が佐藤の家を訪ねると、さう云つて佐藤はげら〳〵笑ひをして『彼女は僕のことを云つてやしなかつたかね。あの女は僕には意外につれない女だ。此所へ一晩泊つたけれど、何事も僕には爲さしめなかつた。あれほど僕には親しみを表面に見せながら、へんな頑固な女だ。女に親しまれ易いことは君より僕の方が早いやうだが、いざとなると僕の方が劣敗者にされてしまふ、矢張彼女は最初から心では君に惚れてゐたんだよ。』

『白ばくれてゐる。自分で先鞭をつけて置いて何を云ふのだ。』孝吉は佐藤の云ふことを直ぐには信じなかつた。

『然し、お玉は僕にはさうは云はなかつたよ。君とのおのろけを僕は聞かされたほどだ。』

『それは僕に花を持たせるつもりで云つたのさ。實に僕はみじめな思ひをさせられた。まあ仕方がないからあきらめる……』佐藤は念入りに辯解して『要するに何と云つても君が勝利者だよ。』となほもげら〳〵笑ふのである

一方に結婚問題をひかへながら彼等の生活はそのやうに虛無的であつた。それでゐて彼等は結婚に對しては理想的な結婚を求めてゐるのである。少くも理想に近い結婚をしたいのである。柔順で、きれいで、貞淑で、それで貧乏に對して忍耐力のある、まるでマリアのやうな女性と。

『煙草屋の娘の方はどうやら駄目らしい。僕の方でも最初から求めて進んだことでもなしもと〳〵嫂岳が持ち込んだ話しだからねえ。どうでも好いと云ふ氣でゐたんだよ。』佐藤は云つた。口ではさう云つても內心氣まづさうであつた。

『先方の返事はどうなのだね。』

『うむ。何だか喩岳が今朝やつて來て云ふのではうまく行きさうもないらしい。煙草屋の方でいろ〳〵僕のことを聞き廻つたらしんだ。それがだね、大根原の田中の家と僕の家が心易くしてゐることを知つて、あの家へ行つて訊ねたらしいのだよ。するとあの田中の家の婆か誰かゞ『佐藤さんのことはよく知つてゐます。學生時分には私の家で世話してあげたとか、昨年の暮に前の御家内が死なれて、今は死なれた御家内のお母さんと女中と三人暮しですが近頃は時々桃割に結つた若い女（これはお玉のこと）が出入りしてゐるやうですとか、お母さんと云ふ人はもう六十近いが三味線をひいたりお酒をのんだりする人ですとか、そのお母さんは此の節は家にあまりゐることがなく遊びあるいてゐるとか、そんな餘計なことまで云つたらしい。で先方ぢやそんな家に娘はやりたくないと云ふことになつたわけだ。で僕の方でも話しを打ちきることにした。喩岳はこれから大塚の方に全力を注ぐと云つてゐる。がその方もどうなるのだか。もう緣談なんてめんどう臭いよ。ついその方へ氣をとられて書きものも出來やしない。どうでも好い。獨身でゐる方が好い――時に君の方の話しは大變運びがよささうだよ。喩岳はさう云つてゐた。』

『田中の孫娘の方の話しかね……』と孝吉は問ひ返したが、『然し田中の家の人達も餘計なことを云つたもんだねえ……』

『いや、云ひさうなことだよ。』佐藤は煙草に火をつけて何でもないと云ふ風に云つた。

さうなると孝吉は佐藤の緣談に邪魔を入れた家の娘と緣談が進行してゐると云ふ意味で少し跋が悪い。まだどうなるかは不明であつたが、それによつて先方の人柄がいろ〳〵想像されもした。然しもと〳〵佐藤母子の口立てゞさう云ふことになつたのだから孝吉はなりゆきにまかせて置かうと云ふ心であつた。

『僕と田中の娘の緣談もどうなるか、すべては見合をした上でのことだがどう云ふわけか、皆はそれほど氣乘りもして

ゐないよ。僕は上州屋の方はあのまゝにして置くのが惜しいやうだ。』孝吉はさう云つた『煙草屋の方は君にしても最初からそれほど氣が進んでゐたわけでもないから、まあ好いさ。それよりも大塚の琴の師匠の方の娘がうまくゆけば、それが好いかも知れん。以前から君は好きでゐたんだから、それに先方も君を知つてゐるし。』

『別段に琴の師匠の娘が好きなわけでもないが先方の家庭の空氣が好いんでね。死んだ家内もほめてゐたくらゐだ。然し娘があまり年が若いから、くれるかどうかは疑問だ。』佐藤は云つた。

『まあ、出來る出來ないは兎も角として目標を定めて打つかるだけでも面白いぢやないか。その間だけでも生活が賑やかで。』

『それはさうだが……。』

孝吉は此の時ちよつとこんなことを思つた『今のところでは佐藤よりも自分の方が優勢かな。五對零と云ふところかな……』

ピンポンでもやつてゐるやうな輕い競爭意識がいつの間にか二人の間に生じてゐたのは事實で、二人で一つの物を奪ひ合ふと云ふ爭奪戰ではなく、結婚と云ふ同じ問題をめい／＼持つてゐて、そして二人は相手を羨望させるに足るところの成功を願つてゐたのだ。旁々それを急いでゐたのである。嶮岳と云ふ一人の仲人役の男を共有してゐる形で。

孝吉は佐藤の良縁を望んでゐたと同時に彼はそれ以上の良縁を自分に望んでゐた。嶮岳は或る時孝吉にかう云つた。

『君に妻君を世話することは易いが、佐藤君にはちよつと骨が折れさうだ……。』

孝吉は此の時自分の信じてゐた通りのことを云はれたやうでちよつと嬉しかつたのである。然し彼は、その時かう答へた。

『いや、女としては自分のやうな男を良人に持つよりも佐藤君のやうな人がなんぼましか知れないよ。第一苦勞が少い。それはから云ふ意味だ。僕はこれで人一倍氣むづかし屋で癇癪持ちで、仕事でも思ふやうに出來ないとあたり散らす方だからね。然し佐藤君にはそれがない。あの男はいつも恬淡で、決して癇癪なんか起すことはない。心では少々何か思つてゐても表面に出さない人だ。僕は苛々したり、くよ〳〵したりする。それを思ふと僕の女房になつて來る女は考へても可哀想だ……。』

『さうだね。君は何でもぽん〳〵妻君に云ふ人だ。然し佐藤君はその點はない人だ。それだからまた不得要領なところがある人だ。心では考へてゐても平氣ですましてゐる。だが女はそれではもの足りないものだよ。女房と云ふ奴は良人の心持をはつきり掴へたいのだ。叱り飛ばされても、打たれても、心持のよく分る良人が彼女には一番必要なんだ。その點では君の方が妻君に喜ばれるよ。』險所は云つた

『それはそんなものかも知れんな。』孝吉はまたちよつと好い氣になつて見る。

孝吉は險所の云ふことが多少あたつてゐると思つた。佐藤自身でもさう云つてゐるほどだ。死んだ妻君は佐藤のその點に最も不滿を感じてゐたと云ふことを孝吉は佐藤から聞いたことがある。

『いつも僕の死んだ家内はさう云つたものだよ。何故あなたは怒らないんです。げら〳〵笑つてばかりゐらつしやる。わたしは幾年つれ添ふてゐてもあなたの心は分りません。とよくさう云つてこぼしてゐた。』佐藤は或る時孝吉にさう話したことがある。

實際、此の男はさうであつた。孝吉は佐藤と十年來の知り合であつたが、善良だか陰險だかをちよつと疑ひたくなることがある。佐藤は人の忍び得ないことを平氣で忍び得る人間であつた。猫のやうに、どんな高いところから突き落さ

れても、すまして地上に立つてゐる男だ。他人に一つぐらゐ毆られても笑つて忍び得る男だ。彼はかう云ふ。

『正面から喧嘩したつてつまらない。相手をやつつける方法は他にいくらもあるからねえ……。』

孝吉は此の男から巧みな方法でいぢめられるほどのこともこれまでしなかつた。孝吉にとつては兎も角も日頃淺く交際して行くには面白い人間であつたし自分の持たない世智に長けてゐると云ふ點で何かと相談相手にもなつてくれる男だ。

例へば赤塚澤子との問題の如きも佐藤から見れば何でもないことであつたのを孝吉はぢたばたしたのである。それな以て判斷しても佐藤が孝吉より數等或る點では上手であると思はねばならぬ。

『女から文句をつけられないやうに手際よく別れ得るやうでなくちや一人前の男だあ云へないと云ふからね、そこへ行くと君はまだ卒業が足りない。』「佐藤は孝吉が澤子に手こずつてゐる時さう云つた。

『全く俺よりは數段人間は上手だ。』孝吉は佐藤についてはいよ／＼さう思つたのである、然しどうかすると非常に愚かしい男に見えることがある。頭腦が明晰のやうでさうでないやうなところも時にある。狡猾のやうで善良で正直のやうでもある。策士のやうで常に不遇である。冷淡のやうで親切のやうにも思へる。大樣のやうでこせ／＼する。女に親しまれるやうで、ひどく惚れられたためしを聞かない、無造作のやうでへんなところに氣どりやである。佐藤と云ふ人間は孝吉にも今日までよく分らないのである。然し面白い好い人間と彼は一づに思つてゐるやうである。佐藤と座談をしてゐると誰しもさう思ふのである。また彼を知る者で彼が頗る猥褻家であることを知らない者はないのであつた。殊に二ケ月ほど歐羅巴にゐて歸つてからは一層その方の話題に豐富と深刻味を加へた。獨逸や佛蘭西美人の裸體寫眞やその他性的享樂に必要ないろ／＼の珍品をあちらから買ひ込んで來たのである。例へば或の國で最新樂と云はれる黒のセルロ

イド製の避姙用具のやうなものである。その實は、彼は好色家には違ひなかつたが、それほどの實行家でもなかつた。尤も友人間ではその方にかけては一番奇拔な經驗家には違ひなかつたが。

彼は現實主義的惡魔主義者であつた。彼の人生觀は佛教的虛無主義の上に根柢を置いてゐた。惡魔主義的現實主義者であつたがその生活は消極的で隱遁的であつた。虛無主義的行動主義者であつたが、極めて萬事に於て常識的であつた。社交には一通り長けてゐたが小さく怜悧であつた。彼自身はせい一ぱい自分を大きく見せようとしてゐるやうであつたがその小さく怜悧な性質がいつもそれを裏切つた。

彼は北越の或る田舍寺の次男で、眞宗大學出身で、佛教の學問には一通り通じてゐた。學生時代は秀才であつたと云ひ、著書も幾冊か世に出してゐる。新聞記者生活もした。然し彼は街頭の人でなかつた。大學卒業後十年間籍を置いて辛抱したその新聞社をやめて後に書齋の人になつた。そして七八年は書齋で過ごした。尤もその間に半年ほどかゝつて獨逸まで行つては來たが。

世の中にはたいして花々しく幸福にもなれない代りに、ひどくみじめにも陷らないで中の下程度の運命の下に落ちついて安價に世を肯定して生きて行く知識人がある。佐藤もさうした部類であつたらう。いやそれは佐藤だけではなく、佐藤をめぐる幾人かの友達も略ぼ似たやうな運命の人々であつた。佐藤にしても決して現在の境遇に安んじ、滿足してゐるわけではなかつた。が、彼の小さく怜悧であることが常につきまとふてゐたからである。

彼は友達の中でも一番小男であつた。歩く時は正面を向いて、何か忘れ物をして引き返す人のやうにせか〳〵と中股で急ぐ。冬になるとその小柄に不似合な長い〳〵葛色の釣鐘マントを着て、中折帽子を前のめりに被つて場末の巣鴨町を歩いてゐるのに出逢ふことがある。友人と町で出逢ふと彼は大抵自分の行きつけの癲狂院前の安い酒場へ同行する。

彼は感心にいつも少しぐらゐの金は持つてゐる男だ。然し決して荒い金使ひをしない男だ。孝吉は此の男に對してはいつも割前を出すと云ふことにしてゐた。ハート形の骨ばつた黒いメタルのやうな顔についてゐる二つの目は、鋭いと云ふ目ではなく寧ろ愛嬌と臆病を含んだ目であるが、いつも小ざかしく理知的な、せい一ぱいの働きをその瞳光は相手に對して休むことがない。談笑の間にもその迫つ苦しい額の下で瞳は絶えず用心深く動いてゐるのである。談論の場合などに、若し傍らに第三者がある時は、その第三者が自分に對して『なか〳〵學者だ。頭の好い達見ある紳士だ……』と思ふやうに氣をくばる。それがどうかすると非常に此の男を低級に見せるのである。殊にバーなどの女給の前でそれをやるので、孝吉は大抵そんな時は此の男にまゐつた風をするのである。

孝吉は佐藤が新聞記者時代に百枚餘の小説をその新聞に發表してくれた時分から親しんだのである。喰ふや喰はずで書き上げたその百枚餘の小説は無論無代を承知で掲載して貰つたのである。その代りに評判が少しよかつたので、佐藤の世話でその新聞社の校正員に孝吉は雇つて貰へた。それは今から十年ほど前のことである。その頃、佐藤はその新聞の一面の主任であつた。孝吉には佐藤と云ふ男が非常にやり手で、學問のある機敏な才人に見えた。今でも孝吉は佐藤を自分より年長者のやうな氣持で見てゐる風がある。その實孝吉の方が一つ年上であつたのだ。

佐藤はいろ〳〵の婦人の友達を一時は澤山持つてゐた。彼はそれが得意でもあつたやうである。然しその中の或る若い女は孝吉にかう云つたことがある。

『わたし、あの方が獨逸にいらつしやる時に何を餞別に上げたら好いか知らといろ〳〵考へたんですの。そして、ふと思ひついて三越で懐中鏡と櫛とを買つてお贈りしたんですのよ。あの方に鏡を餞別に贈るなんて、わたし隨分いたづらつ子ですわねえ……』

六

『僕はまあ老母や女中がゐるから急いで結婚しなきやならんと云ふほど不自由ぢやないが、そこへ行くと君は全くの孤獨だから一日も早く定めなくては、第一身のまはりからして不自由だ。僕はかうしてゐても妻がゐる時分と少しもその點は變らない。食事や衣服のことはちやんと世話してくれるものがあるからね。僕よりも君の方の話しが早く定まれば好いといふ思つてゐる。』佐藤は孝吉に向いてさう云つたほどである。

それから三日目に孝吉は田中の孫娘と見合をした。思つたよりも美人で、丸顔の背丈のすらりと高い、上州屋の娘にも劣らぬ魅力ある娘であつた。

『どうだね、君は彼女を貰ふ氣になつたかね。』佐藤は夜中にやつて來て、いきなり孝吉にかう聞いた。彼は急に思ふことあつてども孝吉の家へやつて來たらしく、額には汗ばんでゐて、その瞳はいつもの落ちつきを失つて見えた。

『うむ、僕は見合をして見てすつかりまゐつてしまつた。好い女だ。君も骨折つてくれるだらう。』

『無論出來るだけの盡力はするさ。然し仲人役は嶮岳君だから、彼をさし置いてはどうするわけにも行かぬ。兎に角僕も出來るだけのことは盡すよ。』佐藤は云つた。

二人はそれからいろ／＼の話をした。もう夜は十時だつた。

『佐藤は何の爲めにせか／＼と珍らしく今時分來たのだらう。あれだけのことを唯俺に聞く爲めに來たのだらうか。あれだけのことなら、今時分わざ／＼やつて來るだけのこともないではないか……』孝吉は佐藤が去つた後でさう思つた。然し直ぐから考へた『自分の爲めにあれで氣をもんでくれてゐるんだ、屹度さうだらう……』

佐藤がその夜孝吉を訪ねる前に彼が町の活動寫眞館の前で田中の老母と娘とに偶然らしく出逢つてそれから氷屋に寄つてたことは孝吉は知らなかつたのである。それは二月ほどしてから孝吉は或る人から聞いて知つたのだが、佐藤はその氷屋を出て老母と娘とに別れて、その足で何を考へたのか暗い路を孝吉の家へ急いでやつて來たのである。それは何を意味するものであつたか――孝吉はそれから二月ほど經つてその縁談に躓きを感じようとは思ひもよらなかつたのだ。彼はあまりその可能を信じ過ぎてゐたのである。その説明の代りに孝吉と大屋夫婦との會話をあげる。

『見合ひまでなすつたらお貰ひになつたら好いでせうに。』大屋のかみさんは云つた、

『え、さうは思ふんですがどうもちよつと面白くないことがありましてねえ。』

『まあ、大抵なら早くお定めなさい。お一人ぢや第一不自由です。私共も始終そのことを話してゐるんですよ。』大屋の主人も云つた。

垣根一重隔つた大屋の家へ夕食後孝吉はふらりと出かけて、藤棚の下の廣椽に腰をかけて、しばらく話し込んでしまつたのである

『どうも少し面白くないんですよ。僕に初めの間はすゝめてゐたくせに、その友達は今になつて少しおかしいことを云ふんです。その友達は僕が見合ひをした女の家とは以前からの知り合ひでしてね、學生時代にその家に世話になつてゐた男でしてね、自分では私の爲めに骨を折るやうなことを云つてゐるくせに、何を云ふかと思ふと、實はあの娘は最初僕に貰つてくれと頻りに云つたんだが、僕はあまり氣がすゝまなかつたもんだからよしたわけだ。その爲めに先方は快く思つてゐないらしい、そのことをちよつと君にも云つて置くわけだが……と云ふんです。そればかりなら好いが、僕が折角乘り氣になつてゐるところへ先方の家のいろ／＼のあらを話して聞かせるんです。で僕は、そんなだつたら何故

見合ひをしないさきに云つてくれなかつたんだ。早く君がさう云つてくれたら僕は見合ひする必要はなかつたんだ。と云つてやりました。』

『なるほどさうですか。』大屋の主人は云つた。

『それでは、まるで人を二階へ上げてから梯子段を拭くやうな仕方ですわねえ。』

『だから僕不愉快です。』

『それは誰だつてさうですわ。そしてその娘さんと云ふのはどんな女です。あんまりよくもないんですか。』

『いや、それがなんです、實は僕、見合ひをしてその娘がひどく好きになつたんですよ小母さん。好い娘でしてね。』

『おや。おつほほほ。ぢやそのお友達の人も惚れてゐたんぢやないんですか。』

『さあ。それは分りません。惚れてゐたのなら貰つてくれと云はれたほどだから僕に貰へなんて云はないで自分が貰へばよかつた筈です。』

『兎も角それぢや面白くありませんなあ。そのお友達と云ふのは今になつて何か考へたんでせう。邪魔をしたいのかも知れませんよ。』

『どう云ふ氣かさつぱり分りません。その友達には別に縁談があるにはあるんです。』

『さあ、それがですよ。またその方が確かでないから迷ふてゐるんでせう。』

『兎に角、縁ごとは氣持よく運ばないと、後で矢張うまく行かないもんです、そんなだつたら、お考へなさい。いくらもありますさあ。』

『それに僕、御幣を擔ぐやうだが、見合の時に、恰度その座敷のまん中に天照大神宮のお札がどこからか落ちて來たり

じたんでへんな氣がしました。』

『あらまあ、いやだ……』大屋のかみさんは掘りながら後方へ手をついて云つてちよつとからかふやうに『前の奥さんが呪つてゐらつしやるのかも知れませんよ。おつほほほ……』

『さうかも知れません。』と峯吉も笑つて『それに、見合ひに行く日の朝、着物の裾をその友達の家の入口で搔き裂いたりしました。見るとそこに小さな釘が出てゐたんです。何だかその時からいやな氣がしましたよ。』

『おや〳〵それはケチでしたなあ、まあそんならお考へなさい。そのうちにまた好いのが見つかりまさあ。』

『ですけど、先方の娘さんも見合までして、そのまゝになつては、好い氣はしないでせうね。見合まですするくらゐだから向ふでも來る氣はあつたんでせうから……』

『僕だつて今やめるのは好い氣持ぢやありません。實際ちよつと見つからないくらゐの女です。』

『さう惚れつぽくてもこまりますわねえ。おつほほ、まあ、そんないやなことを云つて友達の緣事を躓かせるなんて人が悪いですわねえその方も。で仲人は矢張そのお友達の方なんですか。』

『いや、仲人は別の男です。よく此の間頃から僕んとこへ來る畫家です。』

『あのちよこ〳〵した小男の瘠せた……』

『さうです。あれがまた少々お調子もので、あいつまでが何か考へたと見えて、僕のとこへ來なくなりました。』

『まあおかしい……。』

峯吉は大屋夫婦とそんな話しをした。彼は明日からの不在中のことをいろ〳〵賴んだりして、軈て裏木戸から自分の家へ歸つて寢た。彼は明日の夜汽車で佐藤と山田と三人づれで越後へ行くことに定つてゐたのである。これは半月ほど

前から、佐藤の歸郷を機として同行する約束があり、非常に愉快な旅行であるべき豫想のもとに待たれたことであつたが、大居夫婦と話した通り、孝吉は縁談の成立間際になつて、佐藤からへんな暗示をかけられた爲め、あまりその同行には氣が進まなかつた。彼は佐藤と交際してから今度のやうな不愉快な感じを與へられたことはないのである。其後へ同行することは斷りたくもあつたが、前からの約束ではあり、自分の感情を見せたくない一種の見えから強いて同行することにしたのだ。

翌日は午後八時半の上野發の夜行列車で三人は東京を立つた。夜汽車のことゆゑ窓外の眺めも闇に封じられ、息苦しい車内で煙草をつけ合つたり酒を酌み交はしたりして、心にもなく孝吉ははしやいで佐藤と調子を合せたのである。然しどうかすると佐藤の目と孝吉の目は列車の中でも異様に圓滑を失つた。

『僕はかうして一緒に同行してはゐるが、實は君に對して不愉快なんだ。その爲めに僕だけは同行をやめたかつたんだ。然しさうもしたくないので、仕方なしにおつきあひをしたんだ……』孝吉の目はともすると佐藤に對してさう云つてゐるやうであつた。

『君はあのことでこぢれてゐるらしい。それは僕も分つてゐる。然し君がどうあつても彼女を得たいと思へば先方へ飽くまで突進さへすれば好いぢやないか……』佐藤の目はさう答へてゐるやうであつた。

『兎に角よくないよ君と云ふ人は……』

『それはどうにでも勝手に思ふが好い。これでも僕はカフエーのお玉坊だつてお膳立をして君に箸をとらせたぢやないか。赤塚澤子との問題だつて僕が仲裁の勞をとらなかつたら、君はあの女にさんざん泡を吹かされただらうよ。へん、いざといふ場合になればこれでも君の爲めになつて來てゐる。』佐藤の目は云ふ。

『それはそれだ。お玉坊のことはお膳立てをしてやつたつもりで君はゐるやうだが、それを正直に信じてたまるものか……。』

『まあ〱、さう逆にばかりとるもんぢやないよ。赤塚澤子との解決は誰の力だ……』

『君と云ふ人は別れ話の仲裁は出來ても、縁談の援助は出來にくい人だ。これまでだつて思ひ當ることがあるよ……』

孝吉の目は云ふ。

二人はさう目で云ひ合つてゐながら表面では快濶を裝ふてゐたのである。列車はその間もだん〱走る。もう一人の山田は一切を知つて知らぬ顔をしてゐた。彼等の間では相手に對して忍ぶべからざることを平氣で忍び、そして相手を怒らせ得ることが强者で、むきになつて怒る者が弱者と云ふことになつてもゐた。その意味で佐藤は一面に於て相手が怒るのを面白がると云ふ悪傾向の男である。孝吉はそれをよく知つてゐたので、思ひきり自分の感情を殺して見せた。然しそれは悲劇役者が喜劇を演じてゐるやうにいたましいものであつた。佐藤は孝吉の一本氣で感情家で、怒りつぽいことを知つてゐたと同時に孝吉もまた自分の性質をよく知られてゐることを知つてゐた。

『何てみじめだ。俺は此の男からさんざ損なはれてまでも此の男の歸郷のおともしてゐるのだぞ。自分の感情を犧牲にしてまで此の男と調子を合せてお伴をする義務があつたらうか。馬鹿々々しい話だ。若しも此の上、夜汽車が正面衝突でもやつて見ろ。そして俺だけが死んで佐藤も山田も生き殘つたと云ふことになつて見ろ。何と云ふ可哀想なことだ……』孝吉はさう思つたりした。然し彼は此の二人と同行の約束だけは違へずかうして行くのだから自分は正しい人間だと思つてゐるのである。その代り行き着いてしまつたら單獨で自由行動をとるつもりであつた。初め此の旅行の主意は佐藤の歸郷に同行して彼の地で三人が講演をやると云ふことにあつたので佐藤は前以て郷里の兄にその如何を問ひ合

せたところ、知事の方では三好孝吉一人を主義者であると認めたらしく、その意味の返事が來た、此のことからして先づ孝吉は他の二人と區別されてゐたので、行くところまで行つた上は速に單獨行動に出づることが彼自身の爲めにもよいのであつた。

さて長岡へ列車がついたのは翌朝の七時であつた。乘つて來た急行列車は佐藤の鄕里なる加茂驛には滯驛しないので長岡で三人は下車して普通列車を待たねばならぬのであつた。

『僕は此のまゝ兩君に失敬して新潟まで行から。』孝吉は云つた。

『まあ、豫定通りに一應僕の鄕里にも寄つてからにしたまへ。』佐藤は云つた。

長岡の町には佐藤が眞宗大學を卒業するまで、巣鴨の大根原の例の田中の貸家で共に自炊生活を續けた昔の級友石坂東風と云ふ男が、新潟の××新聞社支局長として居住してゐた。孝吉も十年前東風が東京で雜誌記者をしてゐた頃からの知り合ひであつた。山田にとつても知人であつた。三人は普通列車を待つ間の二時間を東風訪問で充たすことにした――小雨の降る中を三人がどう云ふ樣子でステーションから町へと歩いて行つたか、それは此所に詳しく描くほどのことでもない。唯夜汽車で充分眠りをとることが出來なかつた爲めに三人共ひどく、しなびた、疲れきつた顏つきをしてものを云ふのも大儀さうであつたことゝ、折角訪ねて行つた東風は新潟の本社へ二三日前から出向いて不在であつたことを記せば足るのである。

七

越後路は恰度田植間際であつた。孝吉は佐藤の生家の、加茂の延樂寺に一泊して翌日は一人で新潟へ向つた。彼は生

れつきの放浪者で少しも旅を恐れない。知らぬ旅路へ入るほど彼は生氣を帶び、勇敢で自由である。未知の自然、未知の小都會が待ち設けてゐた戀人のやうに彼の前に展開して、彼のあらゆる憂鬱を吸ひとつてしまふ。目に入るすべてが彼にとつては初對面である。初對面は幻影と幻影の抱合である。旅の空では乘合自動車の女車掌までが戀しなつかしいものに彼には思へるのであつた。何國の土地つ子でも謙讓な淋びしい一人の旅人を決して欺いたり、傷つけたりはしないものである。

　彼は新潟の街で一泊した。夜の遊廓を一巡して幾人かの可憐な遊女を目の中に止めた。

『なあんだ、俺は、東京の場末の小地主の孫娘との緣談で氣を腐らせたりして……此の美人國の可憐な遊女を見ろ。まるでゴム人形のやうな愛くるしい顏で俺を呼び止めるではないか……仲人だの見合だのと何のこつた……』彼は思つた。

『ちよいとてばあ、船の人……』遊女は長煙管の吸ひ口を孝吉にさし出した。此所は昔ながらの張り店であつた。廓内は明るく華やかであつた。

『ありがたう。』

『遊んでいきなさいてば……。』

『そのうちに屹度來る。明朝船が出帆するから、さうしてはゐられない。』

『嘘を云ひなさいてば……。ちよいとてば……』

その夜は遊廓を見てから宿へ歸つてひとり寢た。

翌日は新潟から十里ほど隔つた小さな溫泉場に孝吉は落ちついた。

『昨夜新潟市に一泊、今朝村松溫泉場に向ふ。當分其所に逗留の豫定。三好。』孝吉は新潟驛の告知板にさう書き置いて

來た。これは其の日に新潟市で落ち合ふ約束をして前日別れた佐藤山田の兩人に對してゞあつた。彼は生れて始めて告知板と云ふものを利用した。いやな道づれに反く者には調法であつた。

五月なかばの北越の溫泉場は極めて淋びしかつた。夏場になつても東京の客は全く稀だと云ふ此の小さな溫泉場は孝吉には恰好の回避所であつた――彼が此所へ來る一週間ほど前に若い男女の情死があつたことは彼自身は少しも知らなかつたのである。彼はその情死を遂げた若い男女が泊つてゐた旅館に泊り込んだ。しかもその心中者が一週間あまり起臥した離れの二階の八疊の間に泊り込んだ。それとは知らず彼は此の旅館と、その部屋とがひどく氣に入つて、直ぐに滯留の決心をした。木材の豐富な國だけに木口のしつかりした建物と云ひ、鬱蒼とした杉山を裏手にひかへた庭の風致と云ひ、此の溫泉場では一流の旅館であつた。三棟の別館が三段に建ち續いてゐて庭には大池があり、小瀧があり、庭樹の間に幾つかの燈籠が配置されてゐた。紅白の躑躅は咲き盛つてゐた。孝吉の部屋はその三棟の中の新座敷と云はれてゐる二階の八疊で、庭園の見下しの好い、朝日のよくあたる、廻り椽の明るい一室であつた。

『全く神樣の捕虜になつたやうだ。』彼は此の部屋に納まつた時、ひとりでさう呟いたほどだ。

床の間の直ぐ前に爐がきつてある。その側に碁盤ほどの四角い拭きならされた板が置いてある。その上に茶道具がのせられてある。彼はそれらの趣向を見ても東京を遠く隔つて來てしまつたことを感じた。床の間には此の宿の主人の顏に似た青銅の布袋が置かれてあり、雨中の溪谷に茅屋をあしらつた南畫風の山水の軸が懸つてゐた。三度の食事は宿の可憐な色白の小娘が運んだ。彼女はかすりの筒袖を着て、短い裾から太い脚をあらはに出して、女學校の運動場できたへたばかりの足どりで活潑げにお膳を持つて來る。處女の活潑さはまた一種の淸らかな美である。彼は如何なる場合にも一人の戀人を心に假定し得るの男だ。彼はいつしかその少女に夢を描いてゐた。

『彼女は十七か知ら、それとも十六か知ら、俺だつて今なら此のくらゐの小娘と全く釣合がとれないことはない。然しもう五年もして見ろ、彼女は一番美しい爛熟期の女ざかりだが、俺はもうそろ／＼白毛が殖えて頭は禿げかゝるだらう駄目だ……』

彼は四十と云ふ數から十六を引いたり十七を引いて見たりした。また五十と云ふ數から二十六を引いて見たりした。そして彼はそのやうな自分の心理を冷笑し哀れむこともまた出來るのである。

『此のへんはどこに女學校があるんです。』

『新潟と新發田とにあります。』小娘は云つた。それだけの言葉を交はすにも孝吉はひと骨だつたのだ。

此所へ來てから三日目の新潟新聞に佐藤と山田の講演の記事が載つてゐるのを孝吉は讀んだ。その記事の見出しには『新歸朝者佐藤牧村氏並に親鸞の作者として有名なる中央文壇の花形山田雲平氏の講演』とあつた。

『新歸朝者は好いぞ……』と孝吉は思つた。「二年も前に獨逸へ婆さんのお伴をして行つて一ヶ月ほど見物して來ても田舍ぢや新歸朝者だ。」孝吉は笑つた。

『佐藤氏の講演の大要』として下のやうにあつた『自分は久々ぶりに故郷へ歸つた――故郷は何人にもなつかしところである――故郷を持つ人間は幸福である――それを思ふと故郷を持たぬユダヤ人は不幸である――彼等は世界の何國にもなつかしい故郷を持たぬ――私は彼等ユダヤ人を憐れむものである――そしてなつかしい故郷を持つ自分の幸福をしみ／＼と感ずる……』孝吉は讀みながら噴笑つた。「今や君の所謂その憐れむべきユダヤ人が世界の思潮を支配してゐることを知らんか……小さな故郷を持つて幸福だと威張つても駄目だ　お婆さんのお伴をした新歸朝者ぢや駄目だ……」

旅先で落ちつくと誰もするやうに孝吉も此の温泉場の繪はがきに十枚ばかり現狀を書いて友人に送つた。

『拜啓、過日はまことに御厄介になりました。私は新潟に一泊して今此の繪はがきのところへ來てゐます。新潟の宿屋の主人の云ふまゝに此所へやつて來たのですが、思ひの外宿賃も安くて氣持がよいので當分滯在して仕事をするつもりです。新潟驛の告知板へ書いて置きましたが、或はお氣附きならなかつたかも知れません。御講演の記事本日拜讀。先は。』佐藤と山田にあてゝさう書いて出した。

此所の温泉はラヂウム性の沸し湯で、季節がまだ眞夏に入らぬせいか客は少かつた。一里ほど隔てゝ今板温泉、出湯などと呼ぶ温泉があつて、此所ら三ケ所の温泉場を、今日は今板、明日は出湯、村杉と往來して夜になると流して通る一人の若い瞽女があつた。年頃二十五六の、油氣のない頭髮を銀杏返しに結つた、みすぼらしいなりの田舍瞽女である。兩眼共落ち込んで目蓋は閉ぢてゐたが少しは見えるので杖なしで歩いた。新いそや、鴨綠江節や、大津繪節などを艶のある聲で歌ふて通る時、山里のさびしい此の温泉場の夜は一入の情緒をそへるのである。寢るには早過ぎる湯治客は彼女の三味線の音を聞くと耳をすましたり、表二階の手すりまで出て行つたりする。湯治客の多くは田舍の婆さん達で質素に宿屋の格安な部屋で自炊をしてゐた。婆さん連は共同浴場で誰とでも直ぐに親しくなり、時々一つの部屋に集合して茶話に花を咲かせ、安い赤玉ポートワインを飲み合つて、好い氣持に醉つぱらつて自慢の追分節に美聲を競ふのであつた。雪國の女はわけて歌ふのが好きらしく皆喉自慢で、歌となると若々しく浮かれ出してしまふのだ。此の婆さん連は或る夜その瞽女を呼んで、五錢出しの十人で、三時間も三味線をひかせて、めい〱が歌ひ放題歌つて、へと〱に瞽女をつからせた。

然し瞽女の三味線は座敷でひかせるよりも戸外を流して通るのを聞く方が情緒が深いものだ。

『此所で情死がござんしてね、お客さん。』

或る日孝吉は年増の目くら按摩を呼んで背中をひねらせながら土地の話しなどをいろ／＼聞いてゐると按摩がさう云つたのである。

『城趾？　あさう／＼、何とかの酋長の城趾がその大日山のへんにあるさうだが、まだ僕は行つて見ない。』

『いえ、情死でござんすよ。心中でござんす。』

『あゝ、情死が……心中があつたのかね按摩さん。』

『へえ。』

『土地の者で……』

『いえ、矢張お客さんでね、男は長野の人でね、女は直江津とか云ふ話しでござんした。』

『若い者同志だつたかね。』

『へえ／＼、男はまだ二十五で、女は二十そこ／＼でござんしたさうな』

『どの旅館へ泊つてゐたのかね、その二人は。』

『此の家に泊つてゐやしたがなあ。死ぬ時は此の上のお宮の裏で死にました。いかい苦しみやしたさうでな。』

『按摩さんはその時見に行かなかつたかね』と孝吉は危く云はふとしたが『さうかね。可哀想なことをしたなあ。』と云つた。此の家へ泊つてゐた者と聞くと孝吉はなほさら一種の思ひやりが起つた。

『矢張、魔がさしたんでござんせう。』

『まあ、さうかも知れない。そしてその二人は此の家のどの部屋に泊つてゐたのだらうなあ。此の部屋ぢやなかつたらうなあ。まさか。』

『お客さん。なぜさう云ひなさるかね。』と按摩は妙に笑つて『死ぬ時には此所で死んだのぢやねえから構ひませんがなあ。』

『それはまあさうだが……ぢや此部屋にその二人は泊つてゐたのかね、按摩さん。』

『そんでも構ひませんがねお客さん。』と按摩はとう〳〵その情死者の二人が峯吉の部屋に一週間泊つてゐたことを話した。

『なあにお客さん二人は覺悟の上で死んだのでごさんすから迷ふて出るやうなことはごさんせんがな。おつほほほ。部屋がけがれんやうにお宮の裏手で死んだのでごさんすよ。それやもう、ちやんと書き置きをして、宿の拂ひの分だけのお金もちやんと座布團の下に置いてあつたさうでごさんす。男も女も下身にはちやんと白いもの着てゐやしたちひます。女は髮まで切つて、それをピンで止めてゐたちひますでな。』

『ふむ……それが今から何日前のことかね。』

『まだやつと一週間くらゐたつかたゝぬかでごさんす。』

峯吉は聞かなければ何でもなかつたのだが、此の部屋に二人が起臥してゐたと聞くとあまり好い氣持がしなかつたのである。折角好い部屋に落ちついたと思つてゐたところへさう云ふ話しを聞かされたので、二階も下もがらあきの、此の離れの二階の一室が、夜になると、ひとの總の寂寥につけ入つていろ〳〵の妄想を暗示した。その夜はいつものやうに直ぐには寢つかれなかつた。とろ〳〵と眠りかけると厭やな夢に襲はれて、しんと更けきつた眞夜中に目をさましてしまつたりした。彼は眠るのを止めて、目をぱち〳〵させてゐた。床の間の隅には客間にそなへつけの卷紙の硯箱がある。彼は寢ながらじつとその方へ目を注いだ。その一方の隅には鏡臺が置かれてある。彼はそれにも目を移した。そし

て考へた。

『あの硯箱の蓋をとつて遺書を書いたんだ。これから、あの鏡臺に幾度か女も男も自分の顏を映して最後の別れを自分の顏にしたゞらう。見入つたゞらう……』

彼は夜中寢床から這ひ出て床の間の硯箱の蓋を開けて見た。筆が一本と墨が入つてゐた。無論硯は乾ききつてゐる、『此の筆で遺書を書いたのだ。二人の最後の言葉を此の筆にこめて書いたのだ……』孝吉は若い二人の男女が此の筆の穗を唇にふくんで、思ひ入れ深く、淚を抑へ〳〵遺書を認める時のありさまを目に浮べて見た。彼はその筆を手に取つて見た。時計が遠くで二時を打つた。山里の夜はしんと更けてゐる

彼は更に鏡臺の方へゐざり寄つた。鏡に二人の顏が映り出しさうで見るのがいやだつた。唯三段になつてゐる、ひき出しを一つ〳〵そつと開けて見た。別に何も入つてゐなかつたが、三段目のひき出しに小さなヘーアピンが一本入つてゐた。摘み取つて鼻の先へくつつけて見た。ほのかに甘い香油の匂ひがするのみである。彼はそのヘーアピンはもとのやうにそこに納めた。そして橫の方の深い引き出しを最後に開けて見た。小さな髮束がある。さすがにぞつとして手にとつて見る氣にはなれなかつた。此の時彼はちよつと後方をふり向いて見ずにゐられない氣持になつた。死んだ二人が後方へ來て見てゐるやうな氣がしたのである。死んで行つた二人のあら探しをしてゐるやうで氣が咎めたのである。

彼はまたもとの寢床の中にもぐり込んだ。隣の客部屋で鼠らしい物音がした。その音が止むと一層しーんとした眞夜中の氣分が迫る。『電燈の明るい光があるからには幽靈は寄りつき得ないだらう。』と彼は馬鹿らしいほど幽靈と云ふことを氣に出した。そのうちにとろ〳〵と眠りかけたが障子の外の廊下で誰か呼ぶ聲がしたやうで直ぐにまた目がさめた。無論夢だ。

『これはいけない。明日は部屋を換へてくれと云つてやらう。』

かうなると離れの新座敷が化け物屋敷のやうな氣がする。婆さん連のゐる表二階の方が賑やかでよく眠れさうだ——然し夜は明けて、朝日が椽先に射すやうになると夜中に考へたことが馬鹿らしくてならない。

『こんな好い部屋を何だつて自分は氣にするのだ。……』と云ひたくなる。全く此の旅館では上等の申し分のない八疊の間なのだ。

『隣室の十疊に客が早くやつて來てくれゝば好いな。』さう祈つたけれどなか／＼來さうもなかつた。

彼は二晩ほど夜中に惡夢を續けさまに見て眠れなかつた。二晩目には、矢張とろ／＼と眠りかけたと思ふと、蒲團の裾から片方の足をぐいと引つぱられたやうで、目をさますと同時に跳ね起きた。

『これはいけない。』彼はぐつと障子を睨みつけた。そしてから呟やいた。『君等は戀の勝利者である。にもかゝはらず私を毎夜惡夢に惱ませるのはどう云ふわけか。なるほど死ぬ時は苦しかつたであらう。然し何と云つても君等は戀の勝利者である。それを信じた上の覺悟の情死と私は見なすのである。兩人よ。此の私を何と思ふ。戀愛の敗北者であり、結婚の失敗者である、そして憐れむべき孤獨の人間である。私は偶然此の部屋に來合はせて、兩人のことを聞き知りその冥福を祈つてさへもゐる。乞ふ私をして安らかに眠らしめよ……。』孝吉は本氣で云つたのであつた。さう云つてしまふと彼の氣持は急に明るくなつた。同時に一分間前の陰影が部屋の隅々から取り去られたやうな感じがした。そして不思議に安らかに眠られたのである——これは彼のよく用ゐる自己暗示であつた。

八

佐藤から手紙が來た。

『端はがきありがたう。そちらは大層よいところの由、さぞ御製作が運ぶことでせう。兄とお別れした翌日、山田兄と小生と愚兄と三人で新潟に出かけました。貴兄がそちらへ行かれたことはステーションの告知板で承知しました。その日は新潟に一泊し、翌日加茂へ歸つて講演をしました。かなりの盛會でした。山田兄は直に翌朝歸京、小生は三日おくれて歸京――ところで例のお清ちやんの方は如何になさるおつもりにや、先方では甚に迷ふてゐるらしく思はれる。貴兄さへ飽くまでもと云ふお考へならば事は無論成立するに違ひありません。よつて此の際、貴兄の意志を充分明かにせられたがよいと思ひます。いづれ御歸京の上萬事お話しいたしたく存じます。次に小生の方の縁談は進捗したことは事實だが、なか／＼此方の思ふやうには運ばない。兎も角、貴兄もあの問題が殘つてゐるのだから早く歸京されたし。先は。』から書いてあつた。

孝吉も直ぐに返事を書いて出した。

『お手紙拜見しました。加茂での御講演のことは新潟新聞で大層盛會であつたと云ふ記事によつて知つたのでした。さて御歸京後貴兄の御縁談いよ／＼進捗の由結構と存じます。小生の縁談も何卒貴兄の御助力によつて進捗するやう念じてをります。もう一週間もすれば製作もかたつきますから歸京したいと思つてゐます。若し田中家の人とお會ひの節は小生に懇望の意志あることを充分お傳へ下さい。山田君並に險吾君にも貴兄より何卒よろしく。先は。』

孝吉は佐藤と云ふ男の心理についていろ／＼考へて見た。出來るだけ善意に淺く考へ直しても見た。更に深刻に考へても見た。

『どうあつてもと云ふ意志が三好君にあるなら取り持つても好いけれどもねえ、一度見合をして唯好きだと云ふくらゐ

ちや、あの先生のことだから、後になつてどう變はるか知れんと僕は思ふんだ。田中の方では僕の友人と云ふので乘り氣になつてゐるやうだが、結婚後に調子よく行かないとなると矢張、仲人の君よりは僕の方が田中一家に對して迷惑しなさやならんからねえ。もと〳〵僕の老母から出た話しなんだが、よく考へる必要があると思ふんだ……』佐藤が險岳にさう云つてゐるありさまが孝吉の頭には想像された。

『田中の老婆は俺にお淸を貰つてほしいと云ふ謎を度々かけた。然しお淸の母親の云ひぐさが氣に喰はなかつたのだ。家の淸は自分よりもせいの低い人のところへは行きたくないて云ふんですけれど。などゝ俺のせいの低いのを暗にけなして、娘はそれほど望んぢやゐないんだが、と云はんばかりに云つた。そこで俺の方でも好い加減にはねつけてやつたんだ。すると煙草屋の娘との緣談に邪魔を入れやがつた。そして圖々しく三好とお淸を俺の家で見合をさせたのだ。初め貰つてほしかつた俺の家でよくもそんなことが出來たものだ。然し此の緣談を成立させるもさせないも俺の手のうちにある。三好はあの調子の男だ。俺がちよつと暗示をかければどうにでも動く男だ。險岳だつてさうだ……』佐藤の腹の底を更に孝吉はさう想像しても見た。

『三好のやつ、あれで俺の心理を大分感づいてゐるやうだから少し手加減して、あいつが自分の想像を邪推であつたと思ひ直すやうにしなければならぬ。琴の師匠の娘がどうかと思つて實は田中の娘を貰つた方が好いかと迷つても見たがもう大丈夫だ。兎に角俺はいろ〳〵の點であいつに追ひ越されて來たから一度くらゐいぢめて、泳がせてやるのも好いだらう……』佐藤の考へを更に孝吉はさうも想像して見た。然し此の場合佐藤の內部を惡く想像することは一面の感情を滿足させるには役立つたが、その爲めに一人の親しい友人を信ずることが出來なくなると云ふ淋びしさをも感じた。

『あの男だつて自分をそれほどまでに厭やな暗示にかけて惑はせたり愚弄したりすることがよくないぐらゐは知つてゐ

る筈だが自分はそんなことをされてもよいほどあの男に對して惡いことはこれまでした覺えもない。あの男だつて一人の友人から信頼を失ふことは好いことでもあるまい……』孝吉はさう思つた。

『然し油斷のならぬ男ではある。山田の親鸞の小說が馬鹿に賣れ出した時分は、その小說の骨組は殆んど自分が山田に與へてやつたやうに巧みに世間に宣傳して二人は一時往來しなかつたほどだが山田があの男の釋迦を描いた小說を本屋に紹介して出版に盡力すると、けろりと變つて、すつかり山田と仲よしになつてしまふやうな男だ。然しそれもまあ生きて行く上には誰れしもやることではあらうが……』と孝吉はその樣に佐藤についてさまざまのことを一應考へるのであつた。然し自分の考への全部を確信することは許されなかつた。結局佐藤と云ふ男の心理が彼には分らなくなつた。

『まあどうでも好い。なるやうにならせて置かう……。』

孝吉は滯在三週間ほどでその溫泉場をきり上げて歸京の途についた。彼は今一度新潟へ立ちよることにした。それは此の前に、煙草を吸ひつけてくれたその遊女の顏が、また來るあてもない彼には妙に殘り惜しく思はれたからである。くくれ顎の葡萄のやうなつぶらな涼しい目をした、そしてその顏のやうにまんまるな清らかな聲で口をきく、むつちりとした二十二三の彼の好きさうな型の女である。昔風の張店のことで彼は軒毎に見て歩いたが珍らしく美人ぞろひの家が多かつた中にも、彼女の姿容が特に彼をとらへたのである。彼はその時懷中が不充分だつたので、それかくしに格子から敷島を一箱投り込んで、その一本に火をつけて貰つて彼女と別れてしまつたのであるが、白いふつくらした指先に火をつけた卷煙草を摘んで、一けむり吸つて格子の內側から差し出してくれた女のあばずれらしくない、そのとりなしには、ひとりぼつちで旅へさまよふて來た男のさびしい胸を感じてでもゐるかのやうなやさしさがあつた。彼にはそれが嬉しかつたのである。忘られないのである。

六月中ばの暑い眞晝を厭はず遂に彼は決心して新津驛から新潟までの切符を更に求めて、やるせないはかない旅の總に身をまかせたのであつた。

彼は新潟のステーションから眞晝の遊廓へと俥を飛ばした。三十分ほどで遊廓の大門口へ俥は行きついた。さすがに午前十時と云ふ時刻を顧みると彼はあたりに氣はづかしくもあつたが、勇敢と云ふ文字を自分の行動の上に無理に當いたのである。彼女のゐる店は北の大門から五六軒目の左側であつた。と云ふ不確な見當で彼は歩いて行つた。勇敢に……。

『たしかに此の家だつた。』

眞晝の遊廓は陰慘でむさんるしく、三味太皷で騒ぎぬいた空虚な前夜の疲勞と睡眠不足と憂欝の氣がたゞよふてゐる。

彼はその五軒目の、晝見れば安つぽい西洋館の家につか〳〵入つて行つた。内には人影がなく、呼んでも出て來る者も一人ない。たゞ廣いがらんとした店の間に空な寢床が一つ見えてゐるばかりである。やがて目をこすり〳〵小をんなが一人奥から出て來た。白痴のやうにぼうとした顔で孝吉に對して愛想のない返事をする。

『外に誰れかゐないのかね。』

『まだみんな寢とる。何か用……』

『あ、遊びに來たんだ。』

『あんた、誰のお客さんかね……』

『女の名は分らんのだ。目のくるつとした此所で一番好い女だよ。』

『おれにゃ分らんがね……』

『こまつたなあ。』孝吉はその遊女の名さへ知らなかつたのだ。

此の時、表の方から一人の女が入つて來た。市松の浴衣に伊達卷をしめて、島田くづしに結つたぶたぶたした女である。矢張此の家の抱へ娼らしいのであつた。

『あんた此の家の人かい。僕遊びに來たんだが遊ばしてくれるか。』

『え、おあがんなさいね。あんた誰のお客さんかね。』女は云つた。

『まだ誰のお客さんでもないんだ。此の間格子から覗いたばかりだがね。』

『あ、分つた。……煙草を投げ込んだ人でせうあんた。さうさう。……』

『さうなんだ。あの時、煙草に火をつけてくれた女に今日は逢ひに來たんだ。ゐるかい。逢はしてくれないか。』

『よんであげるから、おあがんなさいね。』

孝吉は嬉しさうに二階へ螺旋形の梯子段を上つた。すべてが思ひ通りに行きさうである。先刻の小をんなが茶と菓子を持つて來た。その後から、その仲居代りの女がちよつと顏を見せて『今直ぐ常盤さん來るから待つてゐなさいね。』

彼の慕ふて來た彼女は常盤といふ名であつた。孝吉は彼女がどんな樣子で入つて來るだらうと考へながら待つてゐるのだ。彼はかう考へてゐるのだ。

『案外そつけないものかも知れん。それだと自分も心殘りはないわけだ。自分の彼女に對する最後の滿足はどちらにしても自分の幻想を滅ぼされれば好いのだから……』

廊下の方から丸い華やかな笑ひ聲が近づいて來たと思ふと、大形のはでな有松絞に博多の伊達卷をしめた女が袖の端で口元をかくしながら、部屋の入口に現はれたが、直ぐにあちら向きになつて肩をゆすつて笑ふだけ笑つてしまつてか

ら、やつと入つて來た。

『見覺えがないだらうな。』

『まあ、忘れてなりますもんかねあんた……』その笑顔は先夜の女に間違ひなかつた。

九

孝吉が遊女常盤にどんなもてなしをされたかは、その翌日、彼が長岡驛で下車して新潟××新聞社支局長石坂東風を訪問し、そこで頻りに新潟の遊女を讃美して止まなかつたことでも略ぼ分るのである。

孝吉はその日六年振りに東風に逢つたのである。東風の妻君は恰度前日東京へ急用あつて立つたと云ふ後で、家には主人の他に書生と女中がゐるきりだつた。

『よく寄つてくれましたねえ。此の間三人で寄つて下すつたさうですが、その時は不在で失敬しました。大分長い滯在でしたなあ。これから東京へお歸りですか。新潟女はどうでした。少しは發展しましたか。』東風は云つてから〱と豪傑笑ひをした。

『いや、たいして發展も出來ませんでしたが兎に角、美人の多いところですな。遊女でも素的なのがゐますなあ。新潟の女は美人と云つても東京の藝者などに見るすました美人と違つて、愛くるしいところがありますなあ、黑目のぱつちりした澄みきつた目で、顎がくくれてゐて、鼻などはさう高くもない團子鼻ですがよく顏全體に釣りあひがとれてゐて、頰がふつくらしてゐて、音聲が淸らかですなあ。そして訛がないですなあ、遊女でも惡ずれたところがありませんなあ。それから實に肌がなめらかですなあ……』孝吉は云つた。

『大分微細な點までしらべましたね、ワハハハハ……』

『いや、さうでもありませんがね、ちよつと一人好きなのがゐましてねえ、東京へ仕替へをとりたいなんて云ひましてねえ、だから東京なんかで勤めをするもんぢやないつて云つて聞かしてやりましたよ。』こんなことを語る孝吉の顏は愚かしく弛緩して見えた。

『大にもてたわけですかな、ワハハハ……』東風はあてられたと云ふ調子で高く笑つた。

『佐藤や山田君とはお逢ひでしたらう。』

『え、新潟で私の宿へ來てくれました。恰度僕は腸をいためてゐたもんですから、酒も飮めず、唯一二杯おつき合ひして、半日ほど快談して別れました。兩君はとつくに歸京したらしいですな。』

前にも述べた通り、東風は佐藤と同じ眞宗大學出身で、同級の時分には巣鴨大根原の田中の貸家で佐藤その他と自炊をやつてゐた四人組の一人であつた。そこで孝吉は此の男に逢つたついでに、田中家のことなどを訊ねて見た。

『石坂君、あなたは佐藤君から僕のことを聞きませんでした。僕と大根原の田中の家の孫娘との緣談のことをですよ。』

『いや、そんなことは少しも聞きません。へえ、そんなおめでたがあるんですか。あの家にそんな娘がゐましたかしら、名は何て云ふんです。』

『お淸ちやんと云ふんですがね、さうだ、あなた達があの家の貸家にゐられた時分はまだ彼女は小さかつたでせう。』

『さあ、さう云へば背丈の細長い七八つの、いつも鼻汁を垂らしてゐた小娘がゐましたつけ。あれから十何年になるから、もう嫁入りする年頃でせうなあ、ちよつと僕には想像出來ないが、きれいですか。』

『ちよつと好い女ですがね、まだ何とも話しは定まつてゐないんです……』

『あゝ分つた。お濟ちやん……』と東風は思ひ出したやうに云つて『何でも田中の長女で高輪の方へ嫁に行つてゐたのがあつたが、それの娘でせう。亭主に死なれて實家へ戻つてゐたが、それだらうと思ひます。誰が仲人に立つてるんです。』

『仲人は岡田と云ふ男ですが、其の實は佐藤君の老母から出た話しなんです。あなたは田中の家のことはよく御存じでせう。』

『え、あの家のことは知つてゐますとも、今でもあのへんぢや中位の地主で金もあるでせう。好い娘なら貰つたが好いですよ。』

『それがですなあ……。』と孝吉はビールを一口飮んで『見合ひまでしたんですが、先方では最初佐藤君に貰つてほしかつたのだと云ふことを聞いたんで、それで僕はちよつと躊躇してるわけです。』

『誰がまたそんなことを云ふんです。』

『佐藤君自身が云ふんです。』

『きやつが何を云ふか分るもんですか、そんなことに無頓着で、好きだと思つたら君が貰つたが好いでせう。あれはあの男の病氣です。他の男女問題と來るとあの男はいつも裏へ廻つていろ/\の畫策をめぐらさずにはゐられない人間で、その點では僕も大にあの男に不滿があるんですが默つて許してゐますがね。東京で今の家内と一緒に貧乏してゐた當時、さかんに僕の家内に忠告らしいことを云つて『あなたは石坂君のやうなまとまりのつかない男とつれそふてゐたつてつまらんぢやありませんか、今が考へ時ですよ。』とそんなことまで云つたさうですからね、さう云ふ變なところがないとあの男も偉くなれるんですがね——それはまあ別として、構ふことはないから田中の孫娘を貰つてしまふんですな

あ、で佐藤が内心その娘をほしがつてるわけですか……』

『さうでもないらしいです。佐藤君には他に縁談が始まつてるのです。』

『ぢや、樺はんぢやありませんか。然し自分に先方が娘をやりたがつてゐたなんて云ふ佐藤の心理がおかしいですなあ。そんなら君にてんからすゝめなきや好い――だが僕は君に云つて置きますが、田中の家と云ふのはよほど濁つた家庭ぢやありますよ、あの田中の老母と云ふのが、若い時分は仕方のない女で、四十いくつで後家になつて、それからと云ふものは身持が悪くて、僕達書生があの家の貸家で共同生活をしてゐた時分も、うるさく寄りついて来てこまつたくらゐです。後に或る大工を情夫に持つて大分金を絞られたさうですが、それでも運のよいことに地代がどん／＼上る一方で財産は殖やしたらしいが、兎に角、そんな風で、あまり清い家庭ぢやなかつたです。今はもう七十近い婆さんで、そんなこともあるまいが――それに……』東風は云つて、なほいろ／＼と細かいことまで語つた。

米吉もさうした東風の率直な話しを聞いてゐるうちに田中の娘に對する氣持が根柢から動揺し出した。

『さうですかね……』米吉はまんざら嘘や誇張ではあるまいと半ば以上東風の云ふことを信じた。

『どうです。それよりも越後の女を女房を持つては、一人好いのを探しませうかな。長岡にも相當なのがゐますよ。』と東風は云つて再び話題を越後の女の上に移した。

『それは實に越後女と云ふものは感心なもんですよ。何しろ傳統的で舊式な女ばかりですが、その代りに妻女としては安心してつれてゐられるです。先づその美點としてあげると、都會の女のやうに淫奔でないことです。體質も好いし肥つて肉感的に見えるが其の實淫奔でない。極めてその點はつゝましいです。僕が五年間に於て越後の女を研究し得たところでは……』と東風は少し壯重を加へて「僕の見るところぢや、その素質はたしかに性慾的ですが、然し非常に術習

にかためられてゐるのと、物慾の方に全意志が働いてゐる爲めに異性に欺かれてはと云ふ恐を常に持つてゐる。その爲めに自分の性的弱點を見せまいとする風がありますなあ。しかも無意識の間に彼女の性的に強いことがちよい〳〵見えるんですが、同時に自分を警戒する。尤も何處の地方の女でも大體に於てさうですがね、何しろどんな女でも百や二百のかくし金を溜め込んでゐない女はないと云ふくらゐで、亭主のある女でも死ぬ時の用意金だけは枕の中にちやんと入れて置くと云ふ風習が昔からあるんです。ぞりや『金』と云ふものに對する觀念はなか〳〵此の地方の人間は男でも女でも強いですなあ ―かう云ふ話があるです。辛抱しぬいて、やつと萬と云ふ金を溜め込んだ男が或る日銀行から幾束かの紙幣を受けとつて來て、それを二階の六疊の間に一枚々々と並べて見る氣になつたわけです。六疊の間いつぱいに紙幣を並べて最後の幾枚かを、梯子段の降口の方まであとずさりをして並べてしまつた時、その男は、降り口からまつさかさまに轉げ落ちて、それきり往生したと云ふ話しがあるです。これは話しかも知れませんが、そのくらゐ金に對して夢中になる人間が多いんです。だから越後の女で男にいりあげたなんてことは殆どないと云つて好いですなあハツハツハツ……』東風の話しは面白かつた。更に新潟美人の話しに戻つて東風は云つた。

『越後へ行けば美人が多いと云ふわけで地方遊說の政黨屋の奴等まで一度で味をしめて、越後へばかり來たがつてこたゑるですなあ……』

人はもの丶五年とその土地にゐると土地自慢をしたがるものと見え、東風は新潟藝者の衣裳のことまでも柄になく話題にとり入れて、東京藝者の衣裳と比較論を始めたりした。

『東京藝者が新柄のつもりで珍らしがつて着てゐる衣裳は大抵は新潟藝者が魁したものが多いんです。衣裳の柄などについての新らしい試みは地方とは思へないほど進んだ工夫をするところです。色とか模樣とかさうした官能的な方面に

かけては先天的にすぐれてゐるですなあ。新潟でさんざ流行してしまつたものがやつと此の頃東京で流行してゐると云ふのがいくらもあるさうです。』

『さうですかな。』孝吉もなるほどゝ云ふ顔で聞いた。

十

孝吉は東風が一泊して行けと云ふのを辭退してその日の午後三時の上野行きの列車で長岡を立つた。上野を立つた時の列車よりも乘客が少く、車中は氣樂に手足を伸ばすことが出來た。直江津あたりから降り出した雨に列車の窓硝子はしぶきに曇り、長野を通過する時分は一層雨は強く降りそゝいだ。三週間の温泉場の生活――三度の食事を運んでくれた旅館の娘のこと――遊女常盤のことも、列車が越後地を遠のくにつれて昨日の夢と薄らぎ東京をなつかしむ心のみが強さを増して汽車の遲きがもどかしかつた。然し列車は根かぎり彼を乘せて馳つてゐるのである。

『矢張あの縁談は成立しない方が好いんだ。東風の云つたことはまんざら嘘ではあるまい。かうなれば佐藤に對してもかれこれ思ふにあたらない。矢張獨身でもう少し堪へて行かう。そのうちにまた何とかなる……』孝吉は馳る夜汽車の中でひとりさう考へた。

『ああ、人生はかうして一年一年過ぎて行く。しつかりと此の生の意義を胸にたゝみ込んで、心の浪費をしないやうに自分をどこまでも鞭ちうつて行く……此の孤獨のさびしさを徒らに嘆いてよいものか……。好い製作を私は捲まずやれ……』彼はさうしたいろ〳〵の感慨に耽つた。そしてうつら〳〵と睡りに陥ちたり、またふと眼をさましたりした。往きに一度通つた鐵道を引き返すことゝほど單調なものはない。それはあまりに行く手が分りきつてゐるからである。彼に

とつては常に行く手は未知の世界であらねばならなかつた——彼は睡るより外に仕方がなかつた。そして夜汽車と云ふものは一人旅の人間の寝顔にあり〳〵とその人のさびしい未來の運命までも寫し出すものであつた。夜汽車はいろ〳〵の人の運命を乘せて馳る——。

東京に着いたのは翌朝の七時だつた。幸に雨は歇んでゐた。彼は自分の巣に辿りついた渡り鳥のそのやうに急ぎ足でステーションから西ケ原の家へ急いだ。一ケ月餘を主人なしに閉ざされてゐた小さな家は黴臭い闇を孕んで默つて彼を迎へた。

『只今歸りました。』

「あ、お歸りになりましたか。』

孝吉は垣根越しに大屋夫婦に挨拶して、それから雨戸を開けたが玄關には澤山の手紙が投げ込まれてゐた。

彼は少しばかりの手土産を持つて裏木戸から大屋の家へ行つた。

『隨分長逗留でしたな。』

『お留守中に二度ばかり雨戸を開けてお掃除しましたよ、もうお歸りになる頃だと昨晩も話してゐたんですよ。』と大屋のかみさんは云つて茶など出して『恰度あなたがお立ちになつてから一週間目頃でした。大根原の田中からお婆さんが見えましてね、いろ〳〵あなたのことを尋ねたりしますからね、家でもなるだけ餘計なことは云ふまいと思つたんですが、話のついでについおとつつあんが口を辷らせて、いろんな話しをしたんですよ——まあおあがんなさいな。』

『さうですか。』孝吉はその話しをちよつと聞きたい氣もしたので、上り込んでしまつた。

『大變好いお娘さんだから貰ひたいけれど佐藤さんとか云ふお友達が、あの娘は僕に最初貰つてくれと云つたんだが、

僕はどうとかで止めにしたんだが、君、好きなら貰つたが好いさ。なんて云つたから、どうしようかと考へてゐる。つて三好さんは旅へ行く前の晩、私のところへ來てそんなに話してゐなさつたが、一體どう云ふことになつてをるんです。つて家のおとつつあんのことですから遠慮なく云つたんですよ。すると川中のお婆さんの云ふには、いえ〳〵、それは違ひますよ。手前共の方では佐藤さんは長い間のお知合でよく氣心も存じてゐるもんですから佐藤さんのお母さんから一度お話しがあつた時にも、お上げしても好いと云つたんですが、娘があんまり氣が進まんやうでしたから、そのまゝになつたんです。すると三好さんとのお話しが出ましてね、見合までしたやうなわけでした。とお婆さんはさう云つてをりました。』大屋のかみさんは云つた。

『あ、さうですか、それで大抵分りました。まああれは打ちきりにしませう。』

『まあそのことはたいして氣にするほどのことでもないやうだから、向ふでくれると云ふたらそのまゝにするのも惜しいからお貰ひになつたが好いぢやありませんか。』主人も云つた。

『それもさうですが……』

孝吉は歸宅したばかりなので、それについて悠々と話し込んでゐる氣もしなかつたので聽て自分の家へ戻つて、部屋を掃除したり、不在中に來た書信を開いて一通り讀んだりして、さて長い夜汽車の上の疲れと寢不足とを癒す爲めにころりと横になつたが、そのまゝ午過ぎまで寢入つてしまつた。

ひと寢入りしてから入浴へ行つた孝吉は、その足で歸宅を知らせ旁々佐藤の家をぶらりと訪ねた。佐藤は恰度ゐた。

『や、いつ歸つた。』

『今朝歸つた。』

『上りたまへ。隨分長かつたね、あつちで好い人でもまた出來て、それでゆつくりしてゐるかも知れんと思つてゐたが、どうだつたね。』佐藤はいきなり云ふ。

『さう云ふわけでもなかつたがね、君の方はどうだね、緣談は。』

『一向進捗しない。然し僕が鄕里へ歸つてゐるうちに結納は母がやつてしまつたさうだ。』

『先方が結納を受取つたなら、それで話はまとまつたものぢやないか。』

『まあ、さうだがね。』佐藤はわざとらしくとぼけて見せて『時に君はあの方をどうするつもりかね、先方の母親がちよつと此のあひだ此所へやつて來たがね、婆さんや母親達はあの娘を早くどこかへかたづけたいのは事實だが然し本人はあまり氣が進まぬやうだから、などゝ此所へ婆さんが來て云つてゐたがね、でも君の方があくまで突進さへすればまとまるに定つてゐるよ。君の考へ一つさ。』佐藤は云つた。

『本人があまり氣がすゝまないのぢや、此方だつて突進する勇氣も出ないぢやないか。』

『それはさうだがね、まあ、心ではやりたくても口ではさう云ふんだよ。だから君が進めばものになると思ふんだ。』

『本人があまり氣がすゝまんのなら僕もやめよう。ついでの時に君からさう先方へ云つて置いてくれたまへ。』

『まあ、それはそれとして、今日は君が歸つて來たから、これからプロパーにでも行つて一杯やらうぢやないか。』佐藤は云ふ。

『行かう。』孝吉は卽座に云つたが心から進んでもゐなかつた。

瘦てちよこ〳〵した小男と、恰度相手の首だけ高い男とは場末の癲狂院前のお馴染の酒場へ急いだ。そしてそこで強いて親和をつくろひながらどちらもそれほど酒がうまいと云ふ樣子でもなさゝうに飮み合つた。佐藤は孝吉の瞳の中に何

ものかを感じてゞもゐるやうに、絶えずおど〳〵しながら　かう云ふのだ。

『ねえ君、何しろ、君と僕とは十年來の友人だからね、お互に力になりあつて行かうぢやないか。』

『さうだ。お互に知り合つてから十年になるなあ。早いもんだ。然し友人同志と云ふものは必らずしも常に蔭で援助したり盡したりばかりはしてはゐないもんだねえ。隨分、時には裏に廻つてつゝいたり、掣肘したりするものだ。それでも友人であり得る。何故と云つて、それ以上の友人を持つ資格がないからなんだ……。』孝吉は云つた

『さうだ。人は孤獨では生きられんからなあ……』

二人はそれから一時間ほどそこで飮んで酒場を出ると直ぐ別れた。

『何を云ふのか、さつぱり俺にはあの男が信じられなくなつた……』孝吉は思つた。

彼は長い旅行中、數十通の手紙が來てゐたので、それに返事を書く爲めに夜の十時頃までかゝつた。その中にはいろいろの人からの書信があつた。中にも或る雜誌社から往復はがきで次のやうな問題の回答を求めて來てゐるのもあつた。

『百年後の人間はどう進化するでせう。御多忙中恐れ入りますが來る××日まで御回答を得ば甚だ幸ひに存じます。』

孝吉は何と答へてよいか分らなかつたが、ふと思ひついたまゝかう書いた。

『これから百年もしたらお互に直ぐ見えすくやうな愚劣な手段で人を欺いたり傷つけたりする小泥棒式の人間が少くなるでせう。小才を弄して小さな勝利を得ようとする馬鹿者の手に乘るやうな人間も少くなるでせう。以上。』

佐藤はそれから一週間ほどして琴の師匠の娘と目出度結婚式をあげた――孝吉は矢張ひとりぼつちで暮してゐた。

（完）

What Sanatogen will do for your Health



サナトーゲン

世界的滋養強壯劑

一 世界最大の腦神經營養劑として聲名高きサナトーゲンは今後絶へず輸入せらるべし需要家各位の御用を待つ

一 サナトーゲンは凡百の滋養強壯劑中效力最も卓越せる優等品にして單に醫師より接手せる證明書のみにても其數一萬八千に達せるの事實はサナトーゲンの卓越せる效力を確實に證せるものと謂ふべし

一 サナトーゲンは常に最高の品質が維持せらる、やう最も嚴格なる科學的管理の下に製出せらる

一 諸氏若し疲勞若くは神經過敏の如く感ぜらる、ならば直ちにサナトーゲンを試みよ、諸君の身神狀態は一新すべし

一 サナトーゲンは各種病症後の健康恢復期に服用して其大なる效驗あり

一 今將さに病氣回復の途中にある諸君は躊躇なくサナトーゲンをみよ、諸君の病氣は更に迅速に回復すべし

一 興味津々たる詳細說明書下記輸入元へ御要求次第無代進呈

一 サナトーゲンは日本到る所の藥舖にあり但御買求めの際は必ず伯林ベウエル社製造に係る眞正なるサナトーゲン（容器の貼紙にウルフキングの署名あり）を求められ度し

一 卸賣御取引は左記特約店若くは各地藥品問屋に御申込ありたし

特約店

大阪市東區道修町三丁目
田邊五兵衛商店
東京市日本橋本町四丁目
田邊元三郎商店

日本總代理店
ゼー・エル・タムソン商會
神戸市海岸通一丁目英三番

價格
大瓶壹個
[illegible]圓五拾錢



土地繁榮

小川未明

あまり高くもない、何の奇もない山が右、左に、裾を廣げて坐つてゐた。

この下に、寶が眠つてゐるのだと、知つてこそ、人々は、注意をして、それ等の山を眺めたが、さうでもなかつたら、この頭の圓い雜木しか見られない小山は、日の光りを浴びて居眠りでもしてゐるので、人間の注意には入らなかつたにちがひない。

金持だといふことを聞くと、世間では、どんな脊の低い目腐れ爺にでも、氣を付けるやうに、そして、その平凡な、無智な姿にすら、何か尊敬するものがあるらしく思ふやうに、ちやうどそんな樣に、このあたりの山々を眺めたのだ

昔から、水田にきらが浮いて、稻はよくできなかつた。地の下に石油があるのでなからうかといふ疑ひは、もう長い前から、このあたりに住んでゐる人々の頭の中にあつた。幾人、地を深く掘り下げて見た者があつたゞらう。しかし、それ等は、みんな不成功に終つた。たゞ自分の持つてゐる富を空費してしまつたに過ぎなかつた。それ等の人々の恨みが土の中に殘つたばかりで、一帶の田は、いつまで經つても、青々と

して伸びることがなく瘦せてゐた。

H石油會社が、機械を据え付けて堀りはじめると石油は、地の表面を、幾十尺かとか噴出したといふことだ。すると、土地の金持は、田といはず、圃といはず、ところ嫌はず、財産を賭して堀つたのである。

もし、一つでも石油の脈に堀りあてたら、巨萬の富を摑むことができると考へたからだ。小鳥の鳴く聲と、蟬の鳴く聲どの他は、何もなかつた山々は、急に、人々の話聲や、叫びで日毎にやかましくなつた。終日、つくねんとして居眠りをしてゐた山は、ところ〳〵に深い傷を受けたのであつた。さうしたことから、目醒めさせられたばかりでなしに、思きらはずに、頂きの尖つた櫓が立つた。

山は、一時に武裝された。そして、このあたり一帶は、戒嚴令が下されたやうに、猥りに、侵入することを許されなかつた。

狡猾を、より狡猾なる者が征服した。資本家を、より大なる資本家が壓倒した。そしてこのあたりが、大會社によつて獨占された頃には、夢のやうに湧き上つた成金と、これにまた相當した慘めな犧牲者とが生じたのであつた。

名も知られない、平凡の山が、日の光りを浴びながら居眠りをして、折々東から西へ、南から北へと流れて行つた雲が、水田の上へ灰色の影を落すことの他には、終日人影すら見なかつた、このあたりは一變してしまつた。

三里も、四里も離れた、汽車の着く所から、この山の中へ、車馬の通る程の幅廣い道路が開けた。そして、車は、その道を往つたり、來たりするやうになつた。

材木や、煉瓦や、また、時に鐵管や、そして魚などを積んだ車が、しつきりなしに、その山の中へ入つて行つた。車を引いて行く、男の口からは、流行唄がうたはれた。その車の後押をして行く子供等は、大きな聲で叫いたり、刎ね上

つたり、また石などを投げたりした。かうして、いつしか、山と山の間の平地には、立派な町ができてしまつた。

洋服屋もできれば、金物屋もできた。旅籠屋もあれば、料理屋もあつた。

山から出る石油の量は、掘るに従つて、ます／＼多くなつた。この原油を輸送するために、幾里の間を、太いパイプが敷かれた。鐵管が、さびしい山中や、谷間や、原野を走つて、彼方の町まで行つてゐることは、文化の乏しい、土地の人々を、驚かせたのであつた。そして、それに費された莫大な金を頭の中に描くことによつて、それ程のことをびくともしない、また何とも思つてゐない、大資本を有する會社の偉力に、寧ろ怖れを感じさせたのであつた。

Kの油田といへば、もはや、誰れ知らぬ者がなかつた時分には、この山間の町には、藝妓家までができてゐた。

やつと十三になつたばかりの靜枝は、抱子に賣られて、その山の町へ、周旋人に連れられて行きかゝつてゐる時であつた。

美しい姐さんが、五十ばかりの肥つた、頭の半分白くなつた男と、二人が、俥を連ねて停車場のある方へ走つて來るのに出遇つた。この二人を見た人々は、みんな立止つて振り向いた。そして俥の影が、遠く霞んでしまふまで見送つてゐた。

靜枝も、いま見た美しい姐さんの姿が、眼から消えないので、いつまでも、ぼんやりとして見送つてゐた。

「お前、いまの奇麗な姐さんを見たかい？」と、まだ、年の若い周旋の男は、言つた。

少女は、默つてうなづいた。

男は、少女の顔の上から、眼を離さなかつた。――何といふこの子は、いゝ眼をしてゐるだらう。大きくなつたら、この子もきつとこの眼で男を惱ますにちがひない。自分も、これまで多く女の子を世話したが、まだこの子の眼許のや

うな、言ふにいはれない人を惹き付けるのは見なかつた――男は、この子供を見てゐるうちに、こんなことを思つたすると、おのづから、氣の遠くなるやうな感じがした。

「あれは、君香といつて、この町中での一番美しい藝妓さんだ。そして、あの男の人は、またこの界隈での一番の金持なんだ。もとは百姓なんで、田の草を取つてゐたんだが、石油で成金になると、いまでは、山にも立派な別莊があれば、この町にも大きな家敷があつて、何百萬といふ財産で、H會社の重役だ。だから人間といふものは、いつどんなものにならんとも限らない、殊に、女の子などは、運だ。いつどんな出世をするかも知れないのだ」

男は、さう言つた。ほんたうに、心の中から、さう信じてもゐるらしかつた。この子供をかうして、自分は、いま藝妓家へ周旋するのだが、末には、この子供が、自分などの到底、話も容易にできないやうなものに出世するか？ さう心に思つたらしく、かう言つた彼の顏には、何となくさびしさが表はれてゐた。

少女は　また、いつまでも、ぼんやりとした中にどこか品のあつた、口許に愛嬌のある、この町で一番美しいのだといふ姐さんの姿を忘れることができなかつた。

空の色は、澄んでゐた。二人は、かうして道の上に佇んで話しながら、乘合馬車の來るのを待つてゐると、あちらの山の頂きの方へ、渡鳥の群が黑く、霞んで飛んで行くのが見えた。

二年ばかりの後であつた。おなじ道を、荷を負つた商人風の男が、二人連で話をしながら、ある朝、山の町の方へと歩るいてゐた。

「まだ、十四の子供ぢやないか？ 聞いたゞけでも怖ろしくなつてしまふ」

「ほんたうに、噓のやうな話だな。金持なんかといふものは、遊びに困つて、勝手な眞似をするもんだが、誰が聞いた

つて、呆れて物が言へないだらう。六十に手がとゞく爺に、十四の子供ぢやな、孫のやうなもんだ。どんな顔をして遊ぶか、見てやりていもんだ」

「十四だといふけど、柄は大きいやな、もう見たところぢや、一人前だ」

「それは、さうだらう。ませてゐなけれや、そんな、ひとの檀那を寝取るやうなことはできねえ」

「それも、君香つては、この町では、一流の藝妓ぢやねいか。そんな、まだ子供に檀那を取られて、恥しくつて、もう、こゝにもゐられまい」

「どうせ、女將の差金にきまつてゐる。そんな小娘に、情も、何もあるもんぢやない。それにしても、よく、大の男を手に取れたもんだな。行末が怖しい、金だ。たゞ金だ。少し物心がついたら、いくら金があつても、そんな爺になんぞ振向くもんぢやない」

二人は、並んで、話しながら歩るいてゐたが、脊の低い方の男は、他の男が、かう言つたのを、強く打消して、

「ところがさうぢやない。まんざらお爺さんが、きらひではないといふのだから、まつたくお半、長右衛門のやうな話なのさ。なんでも、もつと子供の時分に、君香と檀那とが、いつしよに俥に乘つて行くのを見た時から、どうしても、あの男を取りたいと思つたのだといふから、怖しいや。十四の小娘でも、油斷も何もあつたもんぢやない」

「奇麗かね、その雛妓は？」

「靜枝といつて、眼の大きな、ませた子だ。俺も一度見たことがある」

「呆れたもんだ」

「何、男が、馬鹿さ」

「そんな子供が、妾になつて、まさか一軒持つて行くこともできまい。もし、それで子供でも生れたら、どうするだらう？」

「そこは、金があればどうにでもなるよ。まして、年をとると、馬鹿な眞似がして見たいもんだ。それで、金を失してしまへばいゝのだが、あの位、財産があると、女の一人や、二人あつても、何んでもないのだから、いま〱しいこつた」

「十四位でなあ……」

「それより、馬鹿爺だ……」

二人が、噂をした、君香は、この町から、他の市へ鞍替した。すでに、十五になつた、靜枝は身請されて、妾宅を持された。

土地の新聞は、利害關係のある會社の重役や、金持に對しては、臆病であり、意氣地がなかつた。曾て、このことを社會種として、笑ふことすら敢てしなかつた。そのうちに、風の强い夜のこと誰か、この妾宅に放火したものがあつた。

この家の他に、尙ほ數軒も燒失して、鎭火したが、町を恐怖せしめた事件として、犯人の探索は嚴重を極めた。平常、重役に對して、恨みを持つてゐると思はれた者から、吟味されたが、君香は、戀敵として、最も嫌疑を受けなければならぬ有力の位置にあつたが、こゝから、三十里も隔つた市にゐるので、疑ひのかゝらう筈がない。

重役の精[illegible]の妻は、ヒステリイに罹つてゐた。そして、平常夫との間は、面白い譯がなかつた。疑ひの眼は、この方にも向いたのである。しかし、其の當座は、病氣で山の方の本宅で臥てゐた。

新聞は、いまゝでは默つてゐたが、かうして、彼の妾宅が燒かれ、世間にとり〴〵の噂が高まつた上は、流石に、この事件の前後について書かなければ、義務が濟まなかつた。

一記者は、本宅を、わざ〳〵訪問して、町役夫人の感想を聞かうとした。しかし、病氣で臥てゐて、二男の中學四年生になつた息子が、母親に代つて、記者に話したことを、翌日の新聞には掲載してゐた。

「母は、父が、たとへどんなことをしようが構はないと言つてゐます。しかし、人間といふものは、たとへできるから、何をしたつていゝといふものではない。其利が盡きる時がある。なんで、馬鹿な眞似をしつくして、罰の當らないことがあるものか？　自分獨りで偉くなつたのぢやない。みんな家の者と、先祖代々からのお蔭だ。それが、金が儲かつたといふと、自分獨りの力で偉くなつたのだといつて、家も、女房も、子供も忘れて顧みない、食はしてやつて置くからいゝといふのだらうが、人間といふものはさういふものでない。それですめば神も、佛も、この世の中にはないのだ、きつと罰が當るだらうと言つてゐました。

「妾宅が燒けたことは、私達には、何んでもないことです。私達は、そんな女を見たこともありません。十四や、十五の女に、父が迷ふといふことは、何う考へてもあまり馬鹿げたことで、ほんたうとは思へません。しかし、世間でみんなそんな噂を立てゝゐるのでは、ほんたうでせう。其の妾の家が燒けたといふのは、母が、言つてゐるやうに罰が當つたのでせう。

「私達は、そんなことを何とも思つてゐませんが、たゞ、私は、父が、そんな眞似をしてゐるのに、母が、病氣に罹りながら、もつたいないと言つて、碌々滋養物も取らんのをあまり矛盾した生活だと思つてゐるのです。

「こんなことを言つていゝか知りませんが……父の生活が、正しくないことは、私にも分つてゐます。しかし、母の生

活については、果して、正しくないのか？　正しいのか、私にも考へが付きません……

「母は、たとへば、匙に三杯砂糖を食物の中に入れゝば、うまく食べられるものを、決して、三杯は、いれません。二杯、もしくは、二杯半しかいれません。母は、三杯いれゝばこの上なく、うまく食べられることをよく知つてゐるのです。それを、誰でも、度を極めると冥利が盡きるといふのです。それで、決して三杯はいれません。これは、母の信仰になつてゐます。この禁を破つて、三杯いれることは、母にとつては、死を見たも同じことなのです。

「しかし、このことは譬へです。砂糖の二杯とか三杯とかいふのは例にしかすぎません。萬事このやうです。たとへあり餘る程あつても、自分から不足勝に、送らなければ、却つて、生活に不安を感ずるといふのでありませう。それで、いつも、母はくよ／＼してゐます。父と母とは、全く正反對の性質です。面白いこと、したいことは、できるうちにするといふのと、いつも、世の中を暗く、わびしく眺めながら暮らすこと、さうしなければ、却つて生活に、不安を感ずるといふのであります。私は、どちらも健康の思想とは、思つてゐませんが、どういふものか、母に、對しては、强いことが言へないのです。

「私は、たゞ勉强します。はやく、學校を卒業して、東京へ出て、好きな、專門の學問をしやうと思つてゐます。

「さあ、まだ、はつきりときまりませんが、法律か、醫學か、どちらかをやるつもりでゐます。

重役の二男は、から新聞記者に語つた。しかし、もとより、その全部を新聞は、掲載したのではなかつた。極く一部分だけだ。

時日を、經過したけれど、放火犯人は捕はれなかつた。もつとも、その後も、あちらこちらに、放火のあつた噂は立つた。稀に、その犯人はつかまつても、前者には關係がなかつた。

人間は、金をできるだけ多く得るためには、詭詐し、欺瞞し、排斥し、搾取する。そして、金が得られた時に、その金は、いろ〳〵のものに變形するであらう。しかし、すべての罪惡が、その金から産れるのだ。

資本主義の力は、さびしい山間の地をも、一朝にして、賑かな町に化することができた。そして、生産し得る力のつづく限りは、翼を擴げて極まるところを知らなかつた。このお蔭で、ある者は時めいて傲奢をつくした。また、ある者は零落して飢に泣くのであつた。けれど其處に落しつゝある金が、どんな罪惡を産みつゝあらうとも、關知するところでない。資本の力のつゞく限り、また生産し能ふかぎり、其の魔力に充ちた翼を展ばしたのだ。

H會社は、最初、此地の石油脈は、少なくても、今後百年の命數があると、世間に宣傳した。幾十年か經過してから、第一期の噴油が絶れば更に深く、深く掘下げることによつて、新たなる石油脈に到達するだらう。この第二期の計畫を合すれば、殆んど永久的の事業であるといつてもいゝと宣傳した。それがために、山間の町は、ます〳〵賑はつた。そして、立派な建築が殖えて行つた。

まだ十年餘りにしかならぬのに、早くも、石油の噴出量が減つたといふことが、世間に知れたのであつた。技師は、その原因を地下層の變動に依ると言つた。そして、或は、この分でつゞくと廢井の止むなきに至るかも知れないと語つた。その談話が、新聞に現はれた時に、この山間の町では、もとより、近傍の人達は、急に、利害の關係上から大に慌て出した。恰かも「そんなことがあり得るだらうか?」と、いはぬばかりに、自然の力に對して疑ひはじめたのであつた。

彼等は、石油の出ることが、いつしかあたりまへのことのやうに思つてゐた。昔は、出ないのが、あたりまへであると思つたことから、稀に、冒險的に、石油井を堀つた者があると、山師といつて、嗤つたこともあつたのに、いつしか、

境遇に、彼等は慣れてしまつて、これが異例の天惠であつたといふことも忘れてしまつた

「何、そのうち、第二期の工事に着手してゐますから、きつと出るでせう。いつか、外國人が來ました時に、この地の下は、すつかり石油だと言つてゐましたさうです」

「もし、これぎりで石油が、出なくなるものなら、大變なことですね」

町の人々は、左右の山々に、幾つも立つた石油の櫓を見上げながら、しきりに、前途について憂へ顏に語つた。

H會社は、豫測の石油量だけは、すでに汲み取つてゐるといふ風説もあつた。そして、いよ／＼駄目となれば、いつでも會社は、この地を引き上げて、無益な事業をつゞけるいはれがなかつた。後に殘される町の興廢などには、關係するところでなかつたからだ。

北海道に、奥羽に、會社は、新しい事業に着手してゐた。資金を將來、有望な土地にかけても、衰滅の地に、かける必要は、プランにはなかつたのである。

勞働者の馘首が行はれた。二度目の馘首がその後間もなく行はれた。その頃から、町の中には、浮き／＼した氣分がだん／＼失くなつて、何となく住む人達の顏の上にも、不安の色が濃くなつたのであつた。

秋になつて、山々の林が色づく時分になると、町の景氣は、一層さびれて見えた。

折しも、大戰後の不況が、世界の到る處を襲つたのである。失業者は、日にまし多くなるばかりで、職が見付からなかつた。この山に働いてゐる幾百人かの勞働者が、石油が出なくなつたといふ理由の下に、やがて全部の解雇されることは、既定の事實として知られてゐた。そのことは、彼等にとつて容易の事件ではなかつた。

町には、金物店や、呉服店や、また旅籠屋や、料理屋や、藝妓屋などまでもあつたが、それ等も、やがて、源の涸れ

た流のやうに、いつかは廢滅に歸さなければならぬ運命にあつた。

人は、地上に、これまでも幾たび、かうして華かな町を築いたか知れない。けれど、それは、ある期間だけであつたらう。そして、二たび、それ等の文化は、いつしか廢滅に歸したであらう。のみならず、其處には、何の痕をも止めずに、自然はあるがまゝに荒れて、草が伸びたにちがひない。

この山の町が、石油の山と運命を共にして、亡びてしまつて、山が、昔のやうに、また、月の光りを浴びながら、居眠りをつゞける日が、さう遠い將來ではないやうに想像されたのであつた。

主任技師のKは、町につゞく、麓の細道を歩るいてゐた。手に竹の杖を持つて、半ば無意識に、通りすがりの道ばたの草の葉をたゝきながら、時々、何か思ふ顏を上げて、いまさらその色の冴えて鮮かなのに、驚いたといふ風に、澄み渡つた空の色を仰いたのであつた。

少し行くと、小さな川があつて、そこには橋がかゝつてゐた。覗くと底の淺い川水がちら〳〵と流れてゐた。そして、岸についた、よどんだところには、ちやうど空の色をそのまゝ其處に繪具で描いたやうに、石油のキラが、浮いてゐた。Kは、この時、そのキラを見ると、うんざりした。自分は何を見ても、この色と臭ひに祟られてゐるやうな氣がした。もしこのキラさへ、この水の面になかつたなら、彼は、どんなに、このすが〳〵しい趣きがなつかしかつたか知れないのであつた。

それでも、彼は、すぐには、その橋の袂から去らしうとはしなかつた。小暗い、草蔭を覗くやうに、うす日の光りの洩れる川の上を眺めてゐた。そこにも、また氣付かれない世界があつた。小さな魚が、折々微かな音を立て、躍る影が見えた。しかし、彼は、眼の中に、その影をはつきりと捕へることができない程、すぐに魚は沒してしまつた。その後

には、たゞ小さな、あるかなしかの波紋が擴がつて、哀しく消えてゆくばかりであつた。

彼は、これと同じ景色を、曾て、どこかで見たやうな氣がしたのであつた。それは、遠い、過去の日の記憶の中にあつた。橋の袂を離れて、崖の下のやうな、しめつた處にさしかゝると、小さな、錢形の厚みのある青い葉が、その中に眞紅に色づいたのを混へてゐた。

季節は、こんなに晩くなく、もつと輝きのある夏のなかばであつたが、木の葉の隙間から洩れる日の光りは、やはり足許のしめり氣のある土を照らしてゐた。彼は、まだ小供であつた。母親につれられて、ある東海道筋の小さな温泉に行つた時である。

よく、きく温泉場だといふので、母は、小さな、あまり名も知れない、その温泉を選んで行つたのであつた。彼は、途中、水の青々とした、淵が崖になつてゐる深い川を傍に見ながら、その川に添うて歩るき、そして、橋を渡つたことを思ひ出した。

行つた、温泉宿は、僅かに一軒しかなかつた。狹く、暗く、汚たならしかつた。そこには、あまり、町から、氣のきいた人は、行つてゐなかつた。一夜泊りの行商人か、土地の人達が多かつた。そして、夜は、ランプのあかりが、煤けて暗かつた。自分と母は、三日ばかり我慢して滯留したが、不便とさびしさに居れなくて、三日目には、來た時の同じ道を、二人は歩るいて歸つたことを、彼は、忘れなかつた。

しかるに、それから二十年後であつた。Kは、ある日のこと、その温泉場が、非常に開けたことを聞いたのであつた。そして、機會があつたら、もう一度、昔を偲ぶために、そこへ行つて見ようと思つた。

ちやうど、冬であつた。彼は、思ひ切つて、その温泉場に旅行をしたのであつた。林の木は、葉が落ちて、裸になつ

て、車は霜に傷んでゐたから、子供の時に、通つた思ひ出がうすかつた。そして、今日此處の山道をあるいた方が却つて、幾十年か前に、母といつしよに、温泉場へ行つた時分の道のことが思ひ出さるゝのであつた。

彼は、二度目に、その温泉場へ行つた時に、あたりが大分變つてゐるのに驚いた。昔行つた宿屋は、古びて、そのまゝの形であつたけれど問題にはされなかつた。

大きな旅館が、幾軒も、その附近にできてゐた。そして、新たに、三階建の立派な建物が、まさにでき上るところであつた。

「檀那が惜しいことには、湯の出が少なうごして、あゝして、立派な家は、澤山立つてゐますが、湯の澤山出る家は、一軒か、二軒なんでごす。それも、やつと電氣仕掛の器械で汲み上げてゐるのです」と、俥屋は、語つた。

「このあたりは、とつくに開けなければならぬ筈なんだが、いまゝで開けなかつたのも、そんな譯なんだらうかな」と、その時車上の彼は、言つたのであつた。

「だが、檀那あゝして、湯が少しでも出てゐるとこを見ると、地の底には、きつと脈がありますので、うまくそれに打つかりさへすれや、ドン、ドン湧いてくる譯なんですから、出ないことはありやすまい」

俥屋は、さう、さもその言葉に眞理があるらしく語つた。車上のKは、寧ろ專門家であつて、俥屋が、それを知らぬのを、おかしくも思つた。そして、地下のことは、人間の常識だけで解釋されない複雑なものがある、それは、石油でも、恐らく温泉でも同じことだと考へた。

Kは、車の上から、驚くばかり開けた、あたりの様子を見まはしながら、默つてゐた。

「いま、大仕掛で、堀つてゐるとこがありやす、もし、それが出ませば、この温泉場はたいしたものになります」

「このあたりの地所は、値が出たらうね」

「檀那、このあたりの田は、水が貧えて稻ができねえんで、役に立たなかつたもんです。それが、この頃では、坪十二圓いたします。これで、いよ〱湯が澤山出るときまりますと、もつと、うんと高く上るでせう」

Kは、石油地の狀態と少しも、その具合が變らないと思つた。

大きな產業が計畫される。それに附屬していろ〱な小さな金儲けが企てられる。いつしか、小さなのが、本家のあることを忘れて、獨立して、さらに子出しをする。そして、さながら、獨りでに、其處へ浮き上つたといふやうに奇麗な町などができ上る。けれど、それ等の夢は、長くはつゞかないだらう。先づ、大きな資本力に依つて企てられた、最初の產業が衰亡する。すると、誇り顔に、店を張つてゐた、その周圍のいろ〱の商賈がいつとはなしに、衰亡をしてしまふ。根本が枯れた木のやうに、その町が、すつかり駄目になつてしまつて、また、何も興らなかつた前のやうに、なるのである。

Kは、顏を上げて、あちらに見える町を見守つたのであつた。

「この町などが、やはり、その運命にあるのだな……」と、思つた。

彼は、もう一度、いまゝで頭の中に描いた溫泉場について思ひ返へした。

「あの後、湯が澤山出るやうになつたらうか？ あの町は、どうなつただらう？」

彼は、かう考へるうちに、あゝして、澤山建物ができたことが、あの當時、單純に、開けたとばかり言へたであらうか？

すべての資本主義の裏には、狡猾と詭詐とが隱されてゐた。やはり、目的は、地價の釣上になかつたゞらうか？

彼は、これまでいろ〳〵の事實を見て來たのであつた。そして、日のあたり、この石油坑の廢滅に伴つて、このあたり一帶の榮えたものゝ崩落をも見なければならぬのであつた。

彼は、町に出やうとする、道の端にあつた松の木の下で、勞働服を着た、一人の青年に出遇つた。

「K先生、お願があるのです」と、青年は、突然、彼に向つて言つた。

彼は、眼の前に、痩せた、あまり高くない、眼の光つた青年を見た。

「君は、誰ですか？」と、Kは、問ひ返した。そして、其の間に、青年の願といふのは、何であらうかと顏を見ながら、思慮をめぐらした。

「私は、坑に働いてゐるものです。いま雜役の方をしてゐます。他でもありませんが、この冬から、來年の春にかけて、山に働いてゐる者全部が、解雇されるといひますが、ほんたうでせうか」

「さういふことは、僕には、分らない」と、Kは、答へた

「しかし、石油井の運命は、あなたが、最もよく知つてゐられる筈ぢやないんですか？」

「專門に關したことはね……」

「それをお聞きしたいんです」

「しかし、さういふことは、言はないことになつてゐるのだ」

青年は、青白い顏を、いつしか赤くしてゐた　からKが、言つた時に、青年は、それに對して、烈しい反抗を感じたらしく、思はず體を左右に動かした。

「會社が利益をはかるために、事實さうでないことも、まことしやかに、言ひ振らすぢやありませんか？　こゝの石油

井だつて、無盡藏だなんて言つたぢやありませんか。さうして、みんなを安心させて置いたのです。そんなことが、最初から、分つてゐない筈がないと思ふのです」

青年が、かう言つた時に、Kは、それを打ち消すやうに、竹の杖で、空氣を二三度斷つた。そして、青年の言葉が止むのを待つてゐた。

「さういふやうなことは、會社で宣傳したかも知れない。或は、會社自身は知らなくとも、株に關係するものが言ひ振らしたかも知れない。しかし、それは、僕の知つたことぢやない。僕は、自分の意見だけは、明かに言つて置いた筈だ」

「あなたは、さうかも知れません。しかし株主と會社と、どこにちがひがあるのですか？　資本家は、勝手な眞似をするのです」と、青年は無念さうに言つてゐた。

「それで、僕に對して、願といふのはどんなことか？　それを聞かうぢやありませんか」と、Kは青年の横顔に、視線を向けながら、輕い調子でたづねた。

青年は、急に、慌てた風に、しかし、しつかりとした言葉付で、Kを見上げながら、

「先生、お願といひますのは、あなたの力で失業しやうとする、幾百人かの勞働者を救つて下さるようにお願するのです」

Kは、果して、この言葉が、自分に向つて言ひかけられたのであるかを疑つたやうに、青年を眺めた。

「僕に、どうして、そんな力があると君は、考へるのです？」

「先生、あなたのご意見として、新しく、この近傍に石油坑を鑿掘して下さい」と、青年は、言つた。

「この近傍に？」

Kは、ますます〵この青年の言ふことが、意外であつたのに、驚いた様子であつた。

「しかし、僕は、もうこの國には、石油は、望みがないと思つてゐるんだ」と、Kは、自分の考への一端を率直に洩らした。

「さうですか？先生、まだ出さうなところがあるんです」と、青年は、熱心に、話を其の方に向けようとした。

「ふーん」と、Kは、たゞ氣のない返事を洩らしただけで、片手で髭を捻りながら、青年のかうまでに言つてゐる、其の眞相を探らうとするやうに、默つて、しばらく見詰てゐた。

「先生、この不景氣に、幾百人の勞働者から仕事を奪はずに、新しい事業を起して下さい、それは、先生の力で、できることです。先生、有望の地が、十里と離れてゐない近くにあるのです」と、青年は、強い調子で言つた。

「たとへ、いくら有望な地でも、僕一人の考へでどうにもなるものでない。僕は、たゞ會社に使用されてゐる人間なんだ」と、Kは、快活に笑つた。

「しかし、先生の意志で、どうにでも動くと信じます」

「有望か、どうかは、專門家でない君にもよく解らないと思ふが……いつたい、それは、何處なんかね？」

Kは、青年の顔を見ながら、何となく自己の專門に屬する仕事に關して、別に、何等かの興味を感じたらしかつた。

そして、Kは、前後を見まはして、

「君、あの石に腰をかけて話さうぢやないか？」と、彼は、松の木の下にあつた、大きな石を杖でさしながら、自身先になつて、其の方へ歩るいて行つた。後から、勞働服に、草履を穿いた青年が從つて行つた。

二人は、石に、並んで腰を下ろした。

Kは、あちらの山から、町の屋根にかけて澄み渡つた空が、氣持よく擴がつてゐたのを見渡した。そして、直ちに、首垂れて、青年の言ふことに、耳を傾けた。

「私の鄕里に近い、小さな開けない村ですが、昔から、そこへは天然瓦斯が出て、村の人は、これで湯を沸かしたり、物を煮たりしてゐます。田の中へもキラが一面に湧いて、全く稻のできないところがある位ですから、きつと石油が地の下にあるのだといつて、何時であつたか、近傍の金持が試掘願を出したとか、その權利を或會社に賣らうとしたとかいふ噂が立ちましたが、それぎりになつてしまつたやうです。なか〳〵會社が請合はなかつたのだらうと思ひます。あなたが、もし、この下に石油があるとおつしやつて下されば、會社は、きつと乘氣になつて、新たに事業を開始するでせう。また、資本家は、默つてはゐません。かならず、宣傳につとめて、株の暴騰をはかるにきまつてゐます。たとへ事實はそんなやうなものであつても、戰後の不景氣から勞働者が、そのために救はれるなら仕合せです。どうか幾百人かの勞働者の運命を救つて下さい」と、青年は、言つた。

これを聞いてゐるうちに、Kは、幾たびとなく、心の中に起つた疑ひを、直に口へ出すのを押へることに、つとめたか知れなかつた。そして、青年が言ひ終るのを待つてゐた。

「君は、僕に、行動を强いるのだ！」

Kは、たまらなくなつて、叫ぶが如く、言つた。

「さうです。私は、强いるのです」と、青年は、落付いて答へた。

「君に、そんな權利があるのかね？　まあ、いゝ。けれど僕が、見て、望みがあるとも思へないものを、どうして、賣

任をもつて、此處を發掘すれば有望だなんと、僕に言ふことができるのだ？　そんなことを君は、考へないのか」

青年の顔は、ます〳〵青白く、眞劍に一つことを考へつめてゐるやうにしか、見られなかつた。

「私は、たゞあなたが、味方になつて下さることを望んでゐるだけです。私は、命を賭けて、あなたにお願してゐるのです」

この青年の言葉を聞くと、Kは、急に、そこにたゞ談話だけではない、もつと、深刻に魂に肉迫してゐる、何ものかを感じさせられたのであつた。彼の、口許からは、笑ひの影がいつしか消えて、同じく青年の顔に表はれてゐるやうな蒼白に顔の色が變つた。それと同時に、彼は、冷たい衝撃を全身に感じた。

「それで、さういふことを僕に命令する、君は、いつたい誰なのだ？」

Kは、反抗的に、鋭く、青年を見詰た。

「私は、坑夫組合員です。しかし、あなたにお願するのは、組合員の意志を代表して言つてゐるのでありません。私が、あなたにお願したのは、私自身です。私は、また命令する權利を持つてゐません。たゞ、あなたに訴へるだけです。命がけであなたに訴へたのです。あなたの意志が、數百人の生命を何うでも左右すると信じたからです……」と、青年は、言つた。

「僕一人の意志で、數百人の生命を？……」

「さうです。あなた一人の意志で、どうでも左右することができるのです。幾百人の勞働者を救ふこともできれば、もつとこの上に、多くの勞働者を募集することまで、できるのです」

「そんな力は、僕にない。さう思ふ君は、あまりに單純にものを考へ過ぎてゐるのだ」

「いえ、あなたの力と熱誠とで、できるのです」

「僕が、何の目的のために、いつたい、其れをしなければならないのか？」

「目的？　其れは、あなたが、たゞ幾百人かの無産者を救ふためです」

靑年は、顔を上げて、主任技師の顔を眺めた。

「君達は、みんなで解雇手當を要求すれば、いゝぢやないか？」と、技師は、言つた。

「馘首――同盟罷業――暴動――解雇手當金――あゝ、勞働運動は、それぎりなんでせうか。あまり、月並になつたぢやありませんか」

靑年は、蒼白の顔に、微笑を浮べた。

「僕は、まだ、そんなことを考へては、ゐなかつた？」

技師は、何と答へていゝか分らぬやうに曖昧に言つた。

「智識階級が、立場を明かにしなければならない時です。私は、たゞあなたの良心に、訴へるのであります」

「まあ、其の議論は別として、僕は、專門に屬したことゝして、其の地に行つて見よう。若し、眞に有望のものなら、僕は、個人として、意見を會社に對して述べるが、……何うなるか、いまは僕自身にも分らないことで、結果は斷言できない。S驛で降りてから三里――其の間は、俥が行けるのかね？

「俥は、行きます」

「ぢや、行つて見るといふことだけ、君に約束をしよう」

「先生！　私は、神を信じません。しかし、人間の精神が、神以上の奇蹟を表はすものだといふことを信じてゐます」

と、青年は、この言葉に力をいれて言つた。

Kは、しばらく、考へてゐた。

「僕には、どうも、君の言つたことが、よく分らないが……」

二人は、石の上から立ちあがつた。そして、青年は、丁寧に頭を下げて、別れて、山の方へ歩るいて行つた。Kは、町に出ようとしたのであつたが、町の入口まで來ると、急に思ひ返したやうに道を戻つて、二たび山の事務所の方へ歸つて行つた。

日の短かさを感ずる午後であつた。慌しい叫び聲がきこえたので、Kは、窓を開いて、事務室から、外を眺めたのであつた。

幾人も、勞働者が、あちらへ駈けて行くのである。その方には、大きな、黑いタンクが、魔物のやうに突立つてゐた。

「あんなところに、人が乘つてゐる？」

彼は、タンクの上を眺めて、思はず口走つた。そして、どや〳〵と其處に居合せた人達と、扉を押し開けて、その方へ急いで行つた。

タンクの下には、すでに、澤山の勞働者が集つて、上を向いて、口々に喚いてゐた。

「あいつは、氣が狂つたのだ」

「誰だ？」

「早く、おりろ——」

「馬鹿！」

黒いタンクは、大きく、高かつた。それはこの石油坑の唯一の財源であるやうにも思はれた。白い字で、タンクに會社名と油量とが書いてあつた。そして、タンクは、あちらの山と對ひ合つて、不動の姿を競ひでもするやうに、嚴然として見られた。

其のタンクには、石油がいつぱい滿ちてゐる筈であつた。この石油は、パイプによつて數里隔つた町へ輸送されるのであつた。タンクは、見上げる程、高かつた。そして、直徑は、可なりあつた。幅の狹い鐵板が、ちやうど眞中を橫斷するやうに差渡してあつた。其の上に危ふく乘つてゐる人間の顏は、下からは、はつきりとよく見分けがつかないのであつた。

「あいつは、氣が狂つたんだ」

かうした、聲が二度も、Kの耳にはいつたのであつた。Kは、みんなの群がつてゐるところまで行つて、仰いで其の男を凝視すると、それはどうやら、先刻、町へ行く途中で出遇つて、自分に、訴へた靑年らしかつた。彼には、その時の何となく、强迫されるやうな、そして、道德的に自から省みて、どうすることもできなかつたやうな、息苦しかつた感じが其の男の姿を見ると同時に胸の中に蘇生つたのであつた。

「あゝ、あの男だ。あの男は、氣が狂つてゐたのか？」

彼は、ちよつと謎されたやうな氣がした。そして、もし、ほんたうに、あの男が、精神に異狀があつたのなら、どんなに、自分は、却つて、そのために、氣輕さを感ずるだらうとさへ考へられた。しかし、何んで、あの男の言つたことを、考へ直して見ても、あの男は、氣が狂つてゐるものか？　彼は、上を仰いで、不思議に堪へられなかつた。

青い勞働服を着た、男は、何かしやべつてゐるやうだ。しかし、あまり高い處に立つてゐるのと、周圍が、やかましいのとで、その言葉は、みんなの耳にはいらなかつた。

「誰か、あの梯子を昇つて行つて、あの男を捕へないか？」

「いま上つて行つたら、あの男は、タンクの中へ飛び込んでしまふだらう。自分から降りて來るのを待つてゐるより仕方がない」

「オイ、みんな默つてゐろ！何か、言つてゐるぢやないか」

みんなは、一時、默つて靜かになつた。そして、上を仰いで、タンクの上に立つた、男の言ふことを聞かうとした。

「何を言つてゐるのだか分らないや」

「やかましい、默つてゐろ！」

この時、西の山の頂きを、その山に茂つてゐる林の間を紅く染めて、日は、沈みかけてゐた。――靜かに――冷たく――。

しやべつてゐる、男の顔は、だん／＼ぼんやりしてよく分らなくなつてきた。

「諸君、一人の人間の意志の力といふものは實際怖しいもんだ。私達の運動に、集團の力が必要だといふことも、この一人、一人の意志が協同すればこそ、強いと言ふんだ……」

「馬鹿ツ、そんなところで、しやべらんでこゝへ降りろ――」

「默つてゐろ！」

「やれ、やれ！」

「一人の意志の力が、どんなに怖しいか？　諸君、いま、私は、こゝにマッチを持つてゐる――」

男は、隱しから、マッチを取出したやうだ。これを見た、タンクの下に集つた、多勢の人間は騷ぎ出した。

「オイ、あいつは、マッチを出したぞ！」

「あぶない、あぶない、いま、マッチを擦るぞ！」

「馬鹿野郎――」

「早く、誰か、あいつを何うかせんか！」

「タンクが、爆發するぞ！」

「オイ、みんな、逃げろ！　逃げろ！」

下では、瞬間後の光景を想像することから、恐怖と憤怒と焦燥とで、たゞ黒い波の揉み合ふやうに、罵り、騷ぎ、叫ぶばかりだつた。

これは、實に、此處に起つた、空前な無謀な出來事であつた。みんなは、いつどんな亂暴者が、どこから出て來ないものでもないことを、はじめて悟つたやうだ。

タンクに懸つてゐる、長い、細い、鐵の梯子に手をかけて、五六段も昇りかけた者もあつたが、いまにも、大音響と同時に爆發することを考へた刹那、その者の足は、竦んでしまつた。

「マッチを、擦しにしまつたぞ！」

「あの男は、氣狂ひぢやないやうだ」

「手を振つてゐるぞ！　何か言つてゐる。みんな默つて、靜かにして、聞かんか」

みんなは、やつと静まつた。そして、また其の男の言ふことを聞くべくタンクの上を仰いだ。

「諸君、一人の力で、どうにでもなるんだ。一人が死を賭した時に、どうにでもなるんだ。みんなは、自分が、その怖しい力の所有者であることを信じないか？……」

「さうだ。さうだ！」

「俺達は、いつまでも奴隷ぢやないぞ！」

「人間は、機械ぢやないんだ」

タンクの下で、其の男の言に、共鳴して、二三の勞働者が叫んだ。

「諸君――私は、こゝにマッチを持つてゐる――」

タンクの上の男は、また、隱しからマッチを取り出したやうだ。

下では、以前にも、倍して混亂をはじめた。

「こんどこそ、ほんたうに火をつけるぞ！」

「あゝ、マッチを摺るやうだ」

「氣狂――」

「みんな、早く逃げろ――早く逃げろ――」

谷の方は、うす暗かつた。混亂の最中であつた。突然、タンクの上の男の姿が見えなくなつた。

男は、タンクの中へ、眞倒まに落込んだのであつた。自殺であつたか、……眞にはづみであつたか、……それとも

――。

タンクの下から、上を仰ぐと、青みがゝつた夕空に、幾分か、飴色の餘炎が含んでゐた。そして、タンクの上に、いままで突立つてゐた小さな男の影は、全く空しかつた。

新たな、恐怖と、驚きのために、群集は、すでに空氣の冷たくなつた、夕闇の裡で、罵り、叫び、揉み合つてゐた。

この時、タンクの上へ、梯子段を昇つて行く、黒い人影が見えた。

この事件の後のことであつた。主任技師のKは、いつか、青年と約束した、天然瓦斯の湧出する部落に行つて、仔細に石油が出るか、否かを探検したのである。そして、可なり有望の地であるといふことを、土地の人に、ちよつと洩らして東京へ歸つた。

技師の一言が、其の小さな土地と、近傍にどんな波紋を描いたか、察するに難くなかつた。

其年から、翌年にかけて、都下の各種の工場や、會社は、生産の不振から、經濟界の不況から、馘首や、陶汰が強行されたのであつた。

いつたい、其等の無産者は、どこへ行つたらいゝといふのだらうか?

失業者や、失業防止のために結束する、團體は、さまぐ\の策職の下に示威運動をはじめることゝなつた。「吾等の生命を脅威する者を倒せ!」彼等は、正當な權利によつて、この言葉を口々に叫んだのである。

ある日、Kは、偶然にも、ある街の四角に立つて、是等の一團が會社へ押寄せて行かうとする途中にあつたのに出遇つた。通行する人達は、この異様に裝はれた、一行を不思議なものでも見るやうに眺めてゐた。そして、其人達が彼等の生活に於ても、住む社會に於ても、全く自分等とは異つた人間でゝもあるやうに、思ふやうな顏付をして眺めてゐた。この群集の中に、Kが混つて立つてゐた。

彼は、いま、あの青年のことを思ひ出してゐた。あのタンクの上に立つた青年！ そして、自分に、自からの信念によつて、幾百人の勞働者を失業から救へと言つた青年！ その年若い男の姿を彼は眼に描いてゐた。

青年は、その時、「人間の力丈けに奇蹟を信ずる」と、言つた。が、ほんたうに彼の言つたやうに、奇蹟から、不思議から、いつの間にか青年は、生れ變つて、こゝに來て、この一群の列に、あの時の姿のまゝで加はつては、ゐやしないかといふやうな氣持がした。そして、彼が、この列に加はつて、勞働歌をうたつてゐたとしても、それは、幽靈でも、また、奇蹟でもなく、最も自然のことであつて、何等怪しむにも足らないことだといふやうに感じられたのであつた。

彼が、再三の試驗に依つて、有望な油田であると、殆んど職を賭しての熱心さで主張した彼の地は、會社をして、一旦切り上げる筈の工事を、そのまゝ其處に移動させることになつた。

Ｋの人格を信じた者は、Ｋの意見に耳を傾けた。株主の中でも、今度の計畫は、失敗に終らなければいゝがと危んだ者もあつたが、また、石油で成金になつたもの、たとへば十五の雛妓を身請けした、其の地方第一の大株主である老人の如きは、極力、鑿掘に贊成した。そして、恐らく、株は、これによつて、益々好景氣を呼ぶとも、萬に一つ下落することがないと確信するなどと主張した。

老人は、いつの間にか、手を廻はして、その地方の開けさうな場處を買取つてゐたのであつた。

翌年の夏には、Ｈ石油會社の工事は、いよ／＼其の方に移つて、この地方の事業は、繼續さるゝことになつた。そのために、いまゝで賑はつた、山間の町は、よし廢滅しても、また新しい町が、彼方に造られるといふ望みがあるために、附近の人氣はよくなつても、落ちるやうなことがなかつた。

それよりも、幾百人の勞働者が、この不景氣のみぎりに、馘首されずに濟むといふことは、もつと意義のある社會的

事實であつた。

海岸を離れて、三里程、新たに石油井の鑿掘される地は、山の方へはいるのであつた。そして、山の形は、この附近では、どこへ行つても大同小異といつてよかつた。もつとも少し遠く離るゝと、あちらに國境の山々が、裾を擴げて迫つてゐるやうにさへ見えたが、尙ほ、其の間には、幾つかの峠があり、また部落が存在するのであつた。

Kは、俥に乘つて、鑿掘地に向つたが、途中すでに、新しい家が、道の兩側に幾軒もできたのに驚いたのである。去年、こゝに來た時までは、そんな家はなかつた。石油井が堀られ、多くの勞働者や、役人達が來ることを聞いてから、其等を當に店を出すべく建築したものだらう。

彼は、そこから、もう少し先に行つたところに、料理屋と旅籠屋を兼ねて、營業する目的で、まさに出來上らうとしてゐる、この田舍では珍らしい程の一軒の新築家を、道から少しはいつた、片側に見出した。

「いつ、こんなのができたんだね」

彼は、思はず、車上から、車夫にたづねたのであつた。

「この春になつて、建てたのです」と、車夫は答へた。

Kは、今更ながら、貨幣の流通するところ、水の低きに付くやうに、そして、飽迄執拗な資本主義の力と、其の力の及ぶところ、大した影響のあることを考へさせられたのであつた。

「立派な家が、できたものだね」と、Kは、其の方を眺めながら、かう言つた。

車夫は、足を幾分かゆるめて、やはり、Kの向いた方に、自分の顏を向けながら語つた。

「檀那、こんど、この邊が開けるといふので、借金をして家を建てたり、店を出したりする者があります。このあたり

の地所は、大へんに値が出ました。去年の暮あたりから、買占めた金持がある位です」

「さうかね」

「それで、一般には不景氣なんです」

「檀那……」

「君達は、どうだね?」

車夫は、言ひかけたのを、却つて、客から問はれて、

「こちらが開けますと、よくなります。さうすると他から、仲間が入込んで來ますから、同じやうなもんですが、それでもちがひます」

「みんな、石油の出るのを當にしてゐるのだね?」

「檀那……」

車夫は、料理屋の方を指して、

「この家を建てたのは、やはりこの村の者ですが、金など持つてゐませんので、娘を女郎に賣つて、その金で、この家を建てたのです。今年十九になりますが、その娘は、信州へ女工に三年も行つてゐたんです。これまでいろんなことに、その男は、手を出しましたが、みんな失敗しましたので、こんど、こんなことをはじめたんです」

「三年も、女工にやらされて、その上女郎に賣られたのか」

「まあ、親のためといひながら、考へれば、可哀さうなもんです」

車夫は、なほ語りつゞけたが、その言葉はKの耳にはいらなかつた。彼は、車の上で、默つて、獨り考へに耽つたの

である。

「有望な鑿掘區域だ！　と言つた、自分は、果して、この悲慘な事件に、間接的に、責任を持たぬだらうか？」

彼は、停車場に着くまで、同じことを頭に描いてゐた。

「ご苦勞でした」と、言つて、Kは、車から降りると、五十錢銀貨を一つ餘計に、車屋に渡した。車夫は、びつくりしたやうな顔付で、眼を圓くして、彼の顔をしばらく見詰てゐた。が、それから禮を言つて、頭を下げた。

彼は、この瞬間、眼に都會の車夫の圖々しい顔付を思ひ浮べて、なほ其處に、生活の相違のあることを感じたが、それも、ほんの暫らくの間であると考へた。

—一九二三、八作—



魔鳥

佐藤春夫

緒言

私が今述べようとする話は或る野蠻人の迷信に關するものである。

一たい野蠻人にだつて迷信はある。この點は文明人と些も相違はない。但、文明人のものは複雜で理窟ばつてゐるのにくらべて野蠻人のものはもつと直感的で素晴らしいだけだ。

野蠻人にだけ迷信があつて、文明人にはそんなものはないと若し考へる人があるとすると、それは飛んでもない事だ。文明人が見て野蠻人の風俗習慣のなかにたくさんの迷信があると思ふやうに、野蠻人が見たら文明人の社會的生存の約束のなかにそれこそ多數の迷信を發見するだらう――我々が道德だと思つたり正義だと考へたりしてゐることでさへも、彼等野蠻人はひよつとすると迷信だと考へないとは限らない。ちやうど我々が野蠻人の道德や人道を迷信だと思ふのと同じことだ。

話の正當な順序として私が君に説明しなければならないのはこの野蠻人のなかに――その生活のなかに、一種不可思議な鳥がゐるといふことである。彼等はその魔鳥の名をハフネと呼んでゐる。

ハフネはどんな鳥であるか。ちよつと鳩のやうな形で、白くつて足も赤い――といふことではある。が、その形態をこれ以上によく知つてゐる人はこの世界には無いのである。といふのはハフネを見たことのある人は生きてゐる人間のなかにはひとりも無いからである。といふのは、一度この鳥を見ると人はきつと死なければならない運命を持つてゐるからだ。尤も死なない人間でこの鳥を見ることの出來る人間もごく稀にはある。しかしそれはハフネ使ひだけである。この魔鳥ハフネを自由に驅使する人間のことを彼等はマハフネと呼んでゐる。普通この蠻族は、名詞の頭へM音をくつつけることで、その名詞を動詞化する。さうして動詞化された詞はそのままでその行爲をする人といふ意味にもなる。――しかしかういふ言葉の詮義などは私もあまり詳しくはないし、第一、話に關係もないから、魔鳥と魔鳥使ひといふ風に覺えてゐて貰はふ。さうだ。その他にも地名や人名なども一切略することにする。

二

野蠻人だつて生命は大事なものにする――この點は文明人と決して變りはない。そこでこの蠻族の仲間では、それが目の前へ見えて來たら死なければならないといふこの魔鳥は無上戰慄になつてゐる。さうしてかういふ魔鳥を自由に操つて人を惱ませる魔鳥使ひを人類の呪ひとし、人類の最大の敵としてゐる。これは極めて當然のことである――一旦かういふ魔鳥が實際にあるものと信ずる以上は。

従つて魔鳥使ひが發見されるやうな場合には、仲間の人々はその魔鳥使ひを一刻も早く殺してしまふことは無論、ただ魔鳥使ひ其の人だけではなくその一家族をも一人殘さず戮殺することになつてゐる。それは魔鳥使ひの能力といふものは遺傳的なもので、一人の魔鳥使ひを出す家族である以上、その一家族のすべての人間が何時どんな機會に再びその怖ろしい能力を發揮するかも知れないからである。またこの場合、たとひどんな恩徳を受けたことのある人間でも、魔鳥使ひの一家族に何等かの助力なり助言なりをする者があつたならば、その者も亦魔鳥使ひとして一族が殺さなければならない。——これが彼等の正義だからである。

三

それ故、彼等の社會では魔鳥使ひであるといふことは最大の罪惡であり、魔鳥使ひと言はれることは、普通の人間が魔鳥を見たよりもさらにより以上な戰慄である。普通の人間が魔鳥を見た場合には死ぬものはたゞその當人だけである。しかも魔鳥使ひであることはたゞ當人ひとりではなく、一家族の無殘な死を意味してゐるのである——然も、この蠻族は異常に家族を愛する種族である。かういふ危險を冒してまで、人はどうして魔鳥使ひなどになるのであらうか？この事は私にもどうしても了解できなかつた。それ故、私はその蠻族の間を旅行してゐるあひだ屢々その事を、彼等に質問した事があつた。彼等の答は略々一樣に次のやうな簡單なものであつた——

「それは判らない。我々は魔鳥使ひではないから。けれども、多分ヤツカイ・オットフが來て唆すのであらう」

ヤツカイ・オットフといふのは、祖先の靈のうちの惡いもの——惡靈といふ意味である。ヤツカイ・オットフが來て唆すといふ言葉は極く單純ではあるが、すべての惡を傳統的で神秘なところから來るものと考へるこの彼等の心持は案外

に暗示的でない事もない。また超自然でそれがしかも自分にだけ特別に持つことの出來る或る力が若しあつたと假定して見ると、我々は實際、その前には善惡の判斷や至高の犧牲などをも忘れてその奇異な能力を得られることの誘惑に身を投ずるかも知れない。これは考へ得ることだ。人間のなかには確にそのやうな性質がひそんでゐる。それを多量に具へた人間もある。かくれ蓑かくれ笠の傳説があり、しかも少年たちはその話をどんな蠱惑的な氣持で聞くか。かう考へて來ると、魔鳥使ひになる人間があつたとしても、これは必ずしも不思議なことではなささうである。

四

ただ、さういふ魔鳥があり、また魔鳥使ひのやうなそんな途方もない能力を自然が人間に與へるものかどうかといふことだけは、いふまでもなく考へ得られないことである。それだのにこの蠻族は皆一樣にその魔鳥のあることを疑はず、さうして生きてゐる者は決して魔鳥は見ないといふ理由で、見たことのないものの存在を正當なものにしてゐる。さうして瀕死の蠻人たちはその絶望的な幻影のなかに、皆、この祖先からの謂ひ來りの白い羽の趾の赤い小鳥をきつと見るのかも知れない。

それにしても魔鳥使ひといふものはどういふふうにしてあるのか。その魔鳥使ひを誰がどんな具合に發見するのか。これがまた面白い問題である。

五

要するに、仲間の者が魔鳥使ひに仕上げてしまふのだ。皆でさう認めてしまふのだ。その外に何の證據もあるわけで

はない。あり得るわけもない。それではどんな人間が魔鳥使ひにされてしまふのか。ほんの偶然のことだ。仲間たちにどうしても腑に落ちないことのある人間、その腑に落ちないことが度重なる人間、さうしてその同じ人間が他人に害を與へたやうな場合には、これはどうしても魔鳥使ひだといふ疑ひを免れることは出來ないはめになる。

例へばひとりの人間があるとする。どうも急に平生とはそぶりが違つてくる――どうしてそんなに人嫌いになつたり鬱ぎ込んだりするのだか、その理由を誰も知らない。人々は彼を注意するやうになる。――「どうもあの目つきがをかしい」といふやうなことを言ふものが出て來る。人々は一さう注意して彼の目つきを見る。彼はふと、自分が魔鳥使ひだと思はれてゐるのぢやないかと氣がつくと、無論、慄然とする。人を避けるやうになる。彼は仲間の者に疑を持つて見られ、仲間の者の持つてゐる疑を彼は測らうとする。もうかうなつてはいけない。彼等は親愛といふ合鍵を互に失つてしまふ。さうして互に閉された靈は疑を織り上げ合ふ仲間の或る人間が魔鳥使ひだと思はれてゐる者と行き違ふとする。彼は異常な嫌惡で相手を見る。相手は怖れ憚るやうにそつと彼を見る。折から偶然のことにも彼は家へ歸つてから發熱すると假定する。病床で彼はその發熱の原因を捜してみて、魔鳥使ひに出會つた時に惡寒がしたのを思ひ出す。そこで言ふ――

「然うだ。あの男に出逢つた。寒けがするのはそれからあとだ。あの男はやつぱりどうやら魔鳥使ひらしいぞ」

もう一ぺん偶然のことに、この彼の熱病は何か流行性のものであつたとする。そこで見舞に來た人間が皆その熱を感ずる。その人間たちは皆で言ふ――

「何と魔鳥使ひといふものは怖ろしい者ではないか」

彼等の病氣が重くなつて中には死ぬ者が出て來る。三人も死に、五人も死ぬ。何れは魔鳥を見て死ぬのであらう。も

うかうなつては魔鳥使ひだと言はれてゐた人間は、本當の魔鳥使ひになりきつてしまつて、だから仲間の者は唯では濟さなくなる。

かういふ風に魔鳥使ひは、何かの拍子に、仲間からさう認められて仕舞ふだけなのである。病人たちが目の前へ今に魔鳥が見えて來はしないだらうかと考へることは、その刻々、氣味の惡いことであらう。それにも増して、何かの拍子に魔鳥使ひだと認められはしないだらうかと空想することは、それこそ世にある限りの戰慄ではないか。

六

しかし、彼等とてもさう無暗と、誰でも彼でも見る人を出鱈目に魔鳥使ひにしてしまふわけではもとより無い。彼等が人を魔鳥使ひではないかと疑ひ出す最初の動機は、その疑はれる人間が殆んど全ての場合、前にも述べたように、いかにも怏々として不安げな表情を長い事持ちつづけてゐて、それの理由が他の人々に決してわからないことに起因するらしい。私はこの點に就てこの迷信の意味に富んだ暗示を見るのである。

一體、この上もなく簡單な野蠻人の原始的な生活のなかには、當然のこととして、それほどに深い憂鬱といふものはあり得ないものであらう。もしあるとすれば、それは病氣などのごとき肉體的の苦痛が重なるもので、これは一見して誰にでも會得出來るものである。外にまた例へば他種族との間の不和といふやうな社會人としての彼等の憂愁もあるに違ひない。けれどもこれは一般共通のものである。それ故に前述のものとその類を全く異にした個人的の憂悶で、しかもそれは他人に打解けて說くことも出來ないやうなものを靈に抱いてゐるとしたら、これは成程考へ方に依つては、その理由の何なるかを問はずその事自體がすでに一つの重大な罪惡であると言へるかも知れない。憂鬱なる魂を惡とする

ところの準據は、實際成り立たない事はないのである。さうして種族の精神のなかにそのやうな不透明なものの投を絶對的に滅却しようとすることはいいことであるかも知れない。事の是非は論決出來ないまでも要するに、彼等は自分達の大多數と表情の違つたところの人間を滅亡させようとするのである。何といふ無法な事だ！——とさう考へる人もあるかも知れない。さうだ。それは無法でないこともない。けれども注意すべき點は、この無法は決して彼等所謂野蠻人だけに特有なものではなく、全くその通りのことが所謂文明人のなかにもそつくり行はれてゐるといふ一事である。

私はこの同じ旅行中にも或る文明國の殖民地を見たが、そこではその文明國人が殖民地土着の民で——けれども相當の文明を持つてゐる人間を、その風俗習慣を異にしてゐるといふことの爲めに、殺しはしなかつたけれども牛馬のやうに遇してゐるのを見た。これなども文明人が他の表情を異にしてゐる文明人を壓倒しようとする有りふれた一例である。また私は或る文明國の政府が、當時の一班國民の常識とややその趣を異にした思想——それによつて一班人類がもつと幸福に成り得るといふ或る思想を抱いてゐた人々を引捉へて、それを危險なる思想と認めて、屢々その種の思想家を牢屋に入れ、時にはどんどん死刑にしたのを見聞したこともある。文明人たちも亦、野蠻人たちと同じく、自分たちの理解しないものを悉く惡と決定し去つて、その不可解な表情——靈の表情を持つてゐる人を根絶することに努力する。——文明人のなかにも亦、「魔鳥使ひ」と認められた人々は多數にある。だが、私は今は文明人たちの話をしようとしてゐるのではなかつた。だから、話を再び野蠻人たちの方へ引き返すが、前述のやうに魔鳥使ひだといふことを認定されて剿滅させられた家族は、蠻人たちのなかにも昔からなかなか少くはないらしい。今にそれぞれ彼等の口に傳はる歴史に殘つて來てゐる。その不幸な一家族がどういふ道程で魔鳥使ひといふことを認められたかを一つ一つ調べて見ることも或は面白いかも知れない。しかし私はそれには、格別、それほどの興味を抱いてもゐなかつたが、たつた一つ、この旅行

中で私が偶然に知つた話だけは參考のために記してみようと思ふ。恐らくそれはそれらの例のうちでも最近のものであるらしい。

七

このよほ大きな島の大部分は所謂蕃地であつて、從つて未だ人々の究めなかつた地方が隨分にある。いや、寧ろ蕃人領の山地は殆んど人に知られてゐないところの方が大部分だと言へるであらう。冒險家は無論のこと蕃人自身でも知らないやうな場所さへ間々ある。

近年全くの偶然のことで或る冒險家が發見した有名な場所のごときも、恐らくはそのやうな地方の一部分であつたらしい。そこは一萬尺を少しばかり越えただけの山地に過ぎないのだからこの場所がそれまでの間、人に知られなかつたといふのはその奇妙に險惡に出來てゐる地勢のためであらうと思ふ——危險な蕃地であるからといふことは言ふまでもない事として。またその奇妙な險惡さが同時にこの土地を近來それほど有名にしてゐるのである。といふのは、この土地に行くには今までのところ殆んどたつた一つしか道はないので、それは西部の地方からだけ進んで行けるので、東の方からは、殆んど絕壁と言つていいやうな急度の傾斜で、しかもそれがこの山地から殆んど海岸まで——從つて、この高地に立つて見下すと雲の下はすぐ海であるやうな有樣である。それだから東の方から行くといふことは絕體に不可能であり、また南と北とから通ずるためにはやはりそれ相應の險路と、それに數へ盡し難いほどの蕃社とを通過しなければならないのである。西の方からならばその點が割合に樂な上に、通りすぎる蕃社の數もさう多くはないし、從つて蕃情も殆んど統一されてゐるから、その地方の蕃人の事情が特別に不穩でない限りは大した不安なしに、この珍らしい

景色を見ることが出來るのである。それにその地方の蕃人は古來から蕃人うちでは温和な習慣を持つてゐるさうであるし、殊に私が旅行した時のごときは特別に我々の民族に好意を示してゐると言はれてゐる時でもあつたし、私は敢てその景色を見て置かうといふ氣になつたのであつた。たとひその景色がなかつたにしても、どこでもいゝ蕃地を歩いて見たいといふ旅行者には、當時、その地方が一番よかつたのである。しかし蕃情といふものは同じに全く豫想しがたいもので、聞けば、その地方も最近――私がこれを書く今日では、爲政者のちよつとした見込違ひから我々同族に對しては大へんな反感を抱いてゐるとかで、もしさうだとすれば私はちようどいい機會のあの景色を見て來たことになる。

私はその前夜は、一晩、蕃人の部落にある警察署で宿泊した。警察署と言つても、それは小さな一つの砦である。そのぐるりにはこの附近の水成岩を拾ひ集めて積み上げた胸壁が二重に取圍んでゐたし、別にまた武器小屋のそばには寢ずの番が犬と一緒に終夜見張をするさうである。そこで一夜を明してから、今朝は未明に出發して、正午前後には目的の場所でそのロマンテックな光景に接する筈である。私たちはこの朝も昨日と同じく川に沿うて遡つて行くのであつた。しかし川に沿うてといふ概念が與へるやうに川岸を行くと思つてはいけない。寧ろ、川をいつも脚下に見下しながら――これも面白い眺めであつたが――極く高い道から四方を見下しながら行くのである。蕃地の道はいつでもこのやうに高いところを傳うてその展望を利用しながら、不意に現はれるかも知れない蕃人を警戒しつつ進むのである。私は武裝した二人の警察官に左右から守られた。どんな平穩な蕃地を行く時にでもきつとこれだけのことはしてくれるのである。その私たちの後からは全く歸化してゐる蕃人が二人、道案内を兼ねて荷物を背負うてついて來る。この話は――なかなか本題に入らなかつたこの話は、それらの荷物運搬人が、この道中で交々話したのを警察官のひとりが私に通譯してくれたのである。

これは恐らく魔鳥使ひの一族が亡された事實の最近の一例であらうと思ふが、しかし無數の口の通つてから私の耳に來たらしくもういくらか傳說のやうに感ぜられるところがある。大ざつぱな話方で、けれども大たい筋が通つてゐる。しかも、それは想像によらないでは知る方法のない事をも述べてゐるところを見ると、蕃人のなかにも亦そのやうな才幹があつて、いくらかの暗示のもとには理路をつなぎ合せたり、或る場合にはまた全く創造したりすることもするものと見える——何れは單純なものであるが。

八

ピラはサツサンの娘である。コーレはピラの弟である。サツサンには外にも娘や息子があつたさうである。けれども皆一緒に殺されてしまつた。その時、生き殘つたのは一番年上のピラと一番幼いコーレとだけである。

一たい事の起りはピラにあるのだ。ピラは十八にもなつたのに刺墨しなかつた。ピラは美しい娘であつたから嫁に貰ひ手はいくらもあつたのだ。どんなに美しくつてもこの蕃人の仲間では額と頰とに刺墨のない女を誰も美しいとは言はない。またそんな女を娶ることはもとより女として思ひを懸けることを彼等は恥としてゐる。若しそんな女と夫婦らしくする男があつたら、人々はその男のことを未熟な果物を食つたと言つて賤しむのである。ピラは美しかつたし、それに織ることも縫ふことも何でも出來たし、もう充分に年をとつてゐたのに刺墨をせずに、自分で自分を未熟の果物としてゐるのである。これが第一に解らないことである。それにピラのうちでは父のサツサンを初め皆地面を見つめて歩く癖があるし、また人と行き違ふ時には慌てて目を上げるが直ぐに目を外してしまふ。彼等の一族では子供たちでさへも決して笑つた事がない。誰しもサツサンの家の者を魔鳥使ひではないかと思ふのは無理ではない。そればかりではない。

その頃、この蕃社には大變な不幸がふりかかつてゐた。といふのは、蕃人たちの知らないうちに何時の間にか彼等自身の領土のなかへ入り込んでゐた或る文明國の軍隊の長い隊伍が蕃人たちの土地を貫いて强行軍した。それは蕃人たちが考へることも出來ないほど澤山の人數であつた──平地にはそんなに澤山の人間が住んでゐるかと疑ひ驚くほどの人數であつた。その上この平地から來た無數の人間たちは蕃人に對して、いかに平地の人間でもこんな非道なことがよくも出來るものかと考へられるやうな行爲を敢てしたのである。彼等は手向ひも何もしない蕃人に向つて、理屈もなく降服せよと言つて命令した。その屈服のしるしには或る建物のなかへ蕃社の男は皆集れと言ひつけた。彼等は言つたのだ──「蕃人の男どもは集れ。そこに集つたならば、その者たちは正直な歸順した者どもと思ふ。さうしてそれぞれに土産物を頒けてやる。定めた場所に來ないものは反逆者として討伐する。」蕃人たちはそんなに多數のしかも武器を執つた人間を見て驚いてゐる最中であつた。この意味の解らない言ひ傳へを受けてどうしていいか判斷に迷つたが、ともかくもこの際、言はれた通りにするより方法がないと考へた。彼等は言ひつけられた建物のなかへ集つた。その人數は八十何人かあつた。しつかり戸をしめたその建物の外からは突然火が燃え上つた。そのなかにあつた蕃人たちは皆燒け死んだ。「この蠻社の蠻人どもは平生最も兇暴な奴等だつた」と軍隊では言ひ觸した。それからその蕃社を出發してまた行軍をつづけた。

サッサンの住んでゐた蕃社はその燒かれた蕃社ではなかつたが、その次の蕃社であつた。サッサンの蕃社でも、八十何人かといふやうな人數ではなかつたが三人や五人位は殺された──この行軍の通り道になつた蕃社ではどんなに少なくとも三人や五人は犧牲になつたのだから、蕃人たちは、自分たちの種屬のなかへ降りかかつたこの災難を見て、これにはきつと魔鳥使ひの呪術があるに相違ないと信じてゐた。

それだのに、その軍隊のあとへついて歩いてゐるピラを見かけた人があつたといふ噂であつた。そのころピラは十六ぐらゐだつた。初めのうちはそんな途方もない噂を誰も信じなかつたのである。けれどもそれから後のピラや、その一族の様子を見ては、皆、その頃のピラの噂をもう一度新らしく思ひ出した。さうしてその少女がその狂暴な軍隊のあとを慕うていつた理由は誰にも判らなかつたのである。なかには、しかし、ピラがその軍隊の兵卒に犯されたのだと言ふものがあつた。彼等は言つたそれだからピラは額にも頰にも刺墨をしないのだ。刺墨をしてももう他種屬の民と交つたその女を誰も娶るものがないであらう。さうして刺墨をしようと思へば、その女は今まで自分の身に起つたすべての出來事に就ては何もかも、刺墨の時に打明けて話さなければならない——これがこの種屬の掟だからである。ピラのことをさういふふうに言ふものも少しはあつたけれども、しかし大部分の人はその娘たちを魔鳥使ひときめてしまつた。

九

サツサンの小屋へ火をつけた。逃げ出して出た家族を、小屋を取圍んでゐた人たちが引捉へた。それから斬つて殺した。人々の捉へたなかにはピラとコーレとが見つからなかつた。きつとピラが最も小さい弟のコーレを抱いて逃げたのであつたらう。けれども彼等がどこをどう逃げたかといふことは今だに判らない。しかし逃げてしまつて居たことは間違ひない。

ピラはコーレを背負つてどんどん人氣のないところへ逃げ込んだらしい。しかし三日ほどしてピラはコーレを背負う

たまもう一度自分の部落へ出て來たのだ。それから何もかも告白した——それは初め、部落の人たちの或る者が言つた時と同じことだつた。ピラはそこで命だけは助けられた。その代りにそんな不淨を永いこと匿してゐてその上に社内を騷がしたといふので、部落から追放されることになつた。さういふ女を部落のなかに置くことは蕃人の社會では恕され難いことである。命だけ與へられたピラはもう一度コーレを背負うて山のなかへ這入つて行つた。ピラは山のなかで、何年かの間コーレを養うてコーレと二人で住んでゐた。部落の者たちは時折に遠い狩に出て彼等の小屋——といふよりは洞穴を見ることがあつたが、皆、見て見ぬふりをして通り過ぎた。

二

ピラはコーレに言つた——

「私たちは魔鳥使ひではなかつたのだ。私たちのお父さんもお母さんも殺されたけれども、誰も魔鳥使ひではなかつたのだから、皆のオツトフはハンゴウ・オツトフを渡つてポケンに行つてゐるのだ。ヤージヤオに居るのぢやない。私たちにはただ不幸がふりかかつたのだ。その不幸を與へたのは誰だか知らない。でも、私たちは不幸を與へた人に復讐をしなければならない。コーレ、お前は新月の出る時にいつもその方へ矢を射なければいけない。で、なければ私たちは意久地のない人間になつて、私たちはハンゴウ・オツトフの怒を受けなければならないから」

ピラはそこでコーレに弓のやうなものをこしらへてやつた。コーレは木の枝の矢を新月の方へ放つた。新月はいつも西の方へ——彼等の追はれた故郷の上の方へ現れた。

二

（オットフといふのは靈のことだ。また自分の影のことも、脈搏のことをも彼等は同じやうにオットフと呼んでゐる。この一語のなかにもこの蕃族の生に對する哲學を見ることが出來る。それから、ハンゴウ・オットフといふのは靈の橋といふ意味で、オットフはそこを渡つてボケン即ち極樂へ行くのである。ボケンと言ふ言葉は亦根元といふ意味でもあり、故郷といふ意味でもある。ボケンへ行くことの出來るものは、しかしもとより善き靈——パラック・オットフだけで、惡い靈——ヤツカイ・オットフはヤージヤオに行かなければならない。靈の橋は虹のやうなもので、惡い靈がその上を渡らうとすると、橋は消えてしまつて惡い靈はヤージヤオのなかへ墜ち込んでしまふ。——ヤージヤオといふのは地獄の意で、そこにはそこに墜ち入つた者を處置するために、空想出來る限りでの巨大な靈が住んでゐると言はれてゐる。——また復讐は彼等の社會に於ては一個の道德的義務であるから、どうしても遂げられさうにもない復讐を、しかしその意志だけは決して失つてゐないことを祖先の靈に認めてもらふ爲めには、彼等は普通いつも新月の期節に、神聖な新月に向つて誓ひのしるしに矢を放つのである。）

三

十三才になつたコーレは山のなかにいい遊び場所を見つけた。或る日、この地方に特有の激しい驟雨に驚いて、コーレはその遊び場所から歸つて見るとピラは死んでゐた。蛇に嚙まれた指尖から毒素が腕を傳うて頸の方まで昇つて行つたのだ。コーレはその死骸のそばで長いこと泣いた。氣がついた時にふと見上げると、驟雨はすつかり晴れて虹が現はれ

てゐた。しかもその虹は彼等の小屋の上から出てゐるのであつた。ピラがその虹の上を歩いてポケンに行つたことを、コーレは疑はなかつた。――虹はきつかりと大きく空にかかつていつまでも消えなかつたからである。

一四

コーレは虹の橋の懸つてゐる末には、自分を母のやうに育てたあの姉やそれからまだうろ覺えにその面影を忘れずにゐる父や母や兄弟たちがそこにゐるに違ひないと思つてゐる。それにしても何故、あの日――姉を失つた日にいつまでも消え殘つてゐた虹の行方を追つかけて行かなかつたらう――コーレはたつたひとり生き殘つた自分の不仕合を慰める術はなかつた。ただ獸のやうにあちらこちらをうろつき歩いた。再びもとの小屋へ歸らうともしなかつた。もう歸つて見ても人は居ないし、食べるものも殘つてはゐなかつた。

コーレはひよつくりとどこか見たこともない草原へ出て來た。そこには白百合の花が一面に咲いてゐて、それが折からの風に皆同じやうに搖れ動いてゐた。百合の花がそのやうに動くことは、彼等の信ずるところでは何か嬉しい事のある前兆であつた。コーレはしかし何の望もなく歩きつづけた。樹の茂みの下の道でシイレク鳥が一羽啼いてゐた。それはコーレが行かうと思つてゐた道の中央にゐたのである。何といふいやな前兆だらう。この占ひはメラアフだ――大凶だ。けれどもコーレは別に何の絶望もなく行きつづけてゐた。コーレに今更、これ以上の絶望や不幸があるであらうか。きつと白百合の花の占ひの方が當つてゐるのである。遽に大粒の雨が落ちて來た。けれどもこれは別に異象ではない。いつもある驟雨にすぎない。コーレは一番大きな樹の下にしやがんでゐた。驟雨はすぐに晴れ渡つて、まるい虹が現れた。

コーレは歡喜の叫び聲を上げると、空を見入りながら一さんに驅け出した。どれだけ走つたか知らない。コーレは不思議なところへ出て來てゐた。——もうこれ以上に驅ける路がなかつた。目の下は急に低くなつた雲であつた。——虹はその雲のなかへ深く落ち入つてその靑い中できつぱりと消えてゐた。——コーレはぼんやりと佇立つてゐた。

一五

一隊の蠻人たちが赤い飾のあるラツタンを着て、狩の仕度で林のなかにひそんでゐた。追ひ込んでしまつた熊がもう一度出て來ることを待つてゐたのだ。ふと彼等のひとりは、遠くに、うしろ向になつて立つてゐるひとりの少年を見かけた。彼はそれを指ざした。彼等は足音も立てずにその方へ近づいた。それが自分たちの蕃社の者でないことを認めると、彼等の一人は鐵砲の覘ひを定めた。

少年は頭を地面にたたきつけると眞直にぶつ倒れた。

狩の蠻人たちは運ひながら出て來た。ひとりが聲を上げて後れたものを差し招いた。

「來い。早く來い。來て、この首を取るのだ——お前の嫁とりの資格は出來た！」

若者が出て來て、その見知らない少年を覗き込んでから、刃幅の廣い刀で首を落した。

一六

……きつと裸で、さうして首のない小さな屍がひつそりとしたところへ殘されてゐたであらう。さうしてその上であの大きな虹がおもむろに薄れて行つたたらう。さうしてその斷崖には海の方の下界から夜が來たたらう……私は蠻人たち

の話を聞きながら、その屍がそんなふうに横はつてゐたといふ場所のことを、私たちが今行かうと目差してゐるその並はずれた風景のある場所を空想してゐたが、やがて歩いて行くうちに、私は蠻人の社會にもあるところのさまぐの迷信に就てまた文明人の迷信に就て、何かと考へて見たのであつた——それはこの文章の前半に書いたとほりのことである。


日は落ちて
なほ
日の光
マツダ瓦斯入電球
同じ料金にて光力倍
明るい御家庭は
いつも幸福です

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區通神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本郷區春木町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大誠社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

◎定價　金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）但支那を除く

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號増刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座番號は**東京三十四番**なり
一郵劵代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定をこふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十二年九月三十日印刷納本
大正十二年十月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話長丸ノ內三〇二
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 1248; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

中央公論十月號

（第三十八年第十一號）